
振り向けば、君がいた。

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

振り向けば、君がいた。

【Zコード】

Z0310

【作者名】

菩提樹

【あらすじ】

200×年12月。アラサー前の私は今、引っ越しの準備をしている。

新たな人生を歩む前夜に思い出すのは、あの頃の自分と、甘くて苦くて笑えて、そして切なくて……不器用な青春の日々。そして、忘れられぬ君の姿。

時はJRが発足し、平成の世が明ける少し前のお話。荒井美千子は今までの自分を脱ぎ棄てて中学デビューを狙っていたが、ことじ」と

く邪魔をする男子生徒がいた。その名は尾島啓介。^{おじまけいすけ}美千子の世界が彼を軸に廻り出していく。

子供でも大人でもない中学時代を迷走する、普通女子・荒井美千子の成長と、笑いと涙（？）溢れる恋と友情の甘ショッパイ青春ストーリー。

「中学生の頃、あなたはどんな日々を過ごしていましたか？」

全体的に過激な表現や発言、また小中学生並みの低レベルで下品な下ネタ、未成年の飲酒や喫煙シーン、イジメの描写などがでてきます。PG12指定とさせていただきます。（注）他の投稿サイトにも掲載しています。

ラジオから流れる曲は（前書き）

はじめまして！

当拙作に訪問していただきまして、本当にありがとうございます！
小説というにはあまりにお粗末なお話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

ラジオから流れる曲は

『……ところ、今まわこドライブ中のK崎市K崎区のムーちゃんからのリクエストお！「ジュンスカの白いクリスマス！」すぐえ懐かしい、俺もよく聞いてたよお！』

CDラジカセから曲のインストロであるギターの切ない音色をバツクに、ロコの軽快な曲紹介が重なった。

「……お、懐かしい」

12月の冷たく乾燥した空氣にも関わらず窓を開け放ち、ラジオを聞き流しながらせつせと荷物をダンボールに詰め込んでいた手が止まってしまった。しつとりとしたメロディーに聴き入ってしまう。

数時間前から聞いているラジオの番組は、リスナーからのリクエストによってクリスマスに向けての定番な曲が次々と紹介された。

つる覚えの適当な歌詞を歌うことで懐かしい思い出達から現実に引き戻し、再度田の前の詰め込み作業に集中した。しかしあっても作業が終わらない。

「あ～結構一杯あるなあ」

本棚にあつた書籍をダンボールに詰めていたのだが、想像していたよりもかなりの冊数に溜息が出た。

この分だとLサイズのダンボールがまだ必要かもしないと、壁に立て掛けた引越社のマークが入ったダンボールの束の数をチラリと確認した。

(こや、まてよ……)

「いつそこには読まないものを思い切って処分するかと考えたが、既にダンボールに詰め込み終わった本を一から仕分けするのも面倒だなと顔を顰めてしまった。

今更遅い。ただでさえこれから細々した雑貨類をやつつけないといけないというのに。

毎年毎年、年末のこの時期に大掃除をするたびに要らないものを処分してきた筈なのに、何故か一年後には置くスペースがなくなるくらい物が増えているのだ。

「奥さん、進んでる~？」

ノックもなしにいきなり部屋を開けたのは、一歳下の妹・真美子だった。開けたドアの近くまでダンボールがあるせいか、扉が全開できず半開きのまま上半身だけ覗かせた。

「うわっ、すっ！」

真美子はこちらを見ながら一瞬驚いた顔をした。

「…………え？ その本箱にあつた本、全部持っていくの？」

マジですか？ と眉間に皺を寄せている。

「うーん、だつてさ？ なんかどれも必要な気がして、暇なときこ読むかもしれないしや」

手に取った小説をペラペラめくりながら、思わず文章を田で追つてしまつた。

真美子は苦笑いを浮かべながら「よこしょ」とドアで無理矢理ダ

ンボールを押して、部屋の中に入つて来た。手にはペットボトルの紅茶を一本持つていた。

「差し入れ、飲むでしょ？」
「わあ、サンキュー！」

真美子から紅茶を受け取り、ひとまず休憩を取りつと部屋の真ん中に陣取つてゐるベッドの上に一人で腰かけた。
ラジオから流れていた曲はいつの間にか終わり、ロジはリストナーからのハガキかメールを読始めてゐる。

「本さあ、持つていくの少しにしたら？ こんなにたくさん新居の何処に置くのよ。遠くないんだから、読みたくなつたら取りにくればいいじゃん」

真美子はダンボールに詰め込んだ本を取るために、ベッドから腰を浮かせた。

「それに、暇なんて言つなら働きなよ。アルバイトでもパートでもなんでも
お金、貯めといたほうがいいよ。

真美子は開いた本をパタンと閉じた後、ダンボールに戻した。そんなんのはわかつてゐる、お金は少しでもあつたほうがよい。

「……ん~そのつもりだけじ、暫くは生活慣れるのに大変だし……」

思わず氣の乗らない正直な感想が漏れてしまつた。それよりもこれから的新生活をじつくり味わいたいという野望……いや、願望があつたから。

「なら、なおさら本なんて読んでる暇ないじゃん」

「もつとも。

とは言わず、や、そうだけども、と言葉を濁していたら、真美子はベッドから腰を上げ窓に近づいて外を眺めた。

窓からはベッドのところまで温かな口差しが届き、そして冷たい空気と共に吹奏楽の音が聞こえてくる。市立の中学校が数十メートル先にあるのだ、土曜日でも熱心に部活動らしい。

「あ～ヒツヒツ明日引越ですか。なあんか、あつといつ聞だねえ？」

真美子は伸びをした後、しんみりした声で言つた。

「本当ね、呆氣ないもんだよね……」

少し笑いながら妹の隣に並んで、外を眺めた。二階にある我が城から見下ろすと、小さな庭と父と兼用しているシルバーのセダンが見える。

田線を先に向ければ有名コンビニの裏手が見え、一車線の道路を挟み、我が母校である中学校の裏門があつた。

顔を上げると校舎の一階と三階の廊下がバツチリ見える。それこそ田を凝らせば誰が通っているのかなんとか分かるのだ。校内放送も聞こえる。どの先生が呼び出されているかとか、下校時に流れる音楽と放送とか、もちろん今聞こえてくる吹奏楽の音も。

けど中学を卒業したらまつたく聞かなくなってしまった。社会人になつてからも相変わらず無縁だ。大体平日のその時間帯は勤務中で家にはいない。

「ねえねえ、この間さあ。私が中二ときのさあ、クラス会があつたらしくてさあ。おかしいの」

急に真美子は口元を緩めて話し始めた。

「え？」

中二のクラス会？

真美子は「そう」と頷いた。

「ヘルプでY浜のデパートに入つてたらさあ、売り場で同級生にあつてビックリした。『荒井つて、ここで働いてたの？！』って声かけられたんだ」

妹は某有名アパレルメーカーの店員をしていた。自社ブランドを社割で購入し、いつも小奇麗に新作を着こなしていた。勤務地は東京の山谷だが、たまにあちこちの売り場に手伝いに出向するらしい。「今月の頭にクラス会があつたんだって。うちにも葉書出したらしきけど、だいぶ前に区画整理で住所変わつたでしょ？だから住所不在で戻つてきたりしないんだ」

妹の言うとおり、十年ほど前に道路や区画整理の関係で我が家の周辺が取り壊しになり、市の方で用意してくれた土地と助成金で家を建て直した。

移転先は数メートル先だつたが。

「あ～行きたかつたなあ、中学の友達に全然会つてなかつたしい

真美子はニヤニヤしてゐるせいか、さほど残念そうには見えない。

「けどさ、何故か中学の同級生って会わないんだよね。みんな近くに住んでるの」と、同じ駅を使うこと

「ううん、不思議よねえ？ なんとかねえ？」

「ううん、不思議よねえ？ なんとかねえ？」
そうなのだ、何故か会わない。連絡を取り合わないと会えない。

偶然会う確率は高校や大学の連中よりも高い筈なのに。

肯定するように頷くと真美子はまだ一やけた顔でこちらを見た。
そのイヤらしい顔つきにソワソワしつつも氣づかぬ振りをして、ペットボトルを振つてみた。中で液体の紅茶が揺れ、ポチャポチャといづ音が出る。

「ま、それにしても、ハガキが戻つてくるなら電話くれりゃいいのにさー。幹事はそれぐらいのガツツを持つてほしいわ。ねえ？」
「ああ、まあ、そうだよね」

気のない返事をしながら田の前の中学校から視線を逸らし、再びペットボトルのキャップをひねつて紅茶を飲んだ。真美子はまだ話を続けるらしい。

「な~んか同窓会、先生も来たらしくて。社会のチントオ先生！
全然変わつてなかつたらしくてさ、もう孫がいるんだって！ 写真見せながら『アレ』でレだつたつてさ」

社会のチントオ先生。

懐かしい名前が出てきて思わず妹の顔を見て復唱した。

「チントオ先生？」

「そ、チンタオ先生」

妹はニンマリした顔でうなずいている。そう、彼は確かに社会科の先生だった。地理の資料に載っていた世界地図、中国にある半島の名前「チントオ青島」、丁寧にルビがふられていたのを思いだした。

そこから名付けられたあだ名、「チンタオ」と青島先生。

「……そつか。チンタオ先生って、真美子の担任だったんだ」「そうだよお。オネエちゃんも担任になつたことあるでしょ？」だつて『チュウさんの妹かあ』って言われたもん、フハツ！』

真美子は噴き出し、アハハと可笑しそうに笑つてる。

チュウさん 。

それを聞くと、くすぐつたいような、切ないような、おかしな気持ちになつた。

あだ名をつけた人物の顔を思い浮かべた。

昔の、中学の時につけられたあだ名、「荒井」だから「チュウ」という短絡的なあだ名だ。当時は冗談じやなくそのあだ名にムカついたものだ。大体思春期の女の子に對して命名するあだ名ではない。でもそのおかげでクラスに馴染めた。今となつては懐かしい思い出、カワイイもんだ。

「ちょっと、もうやめてよね。……大体ね、荒井だからチュウなんて単純すぎるでしょ？ 菅原だつたらブンタなの？ 高倉だつたらケン？ バカじゃないの、本当」

含み笑いを隠さずわざと怒った振りで言つと、真美子はさらに噴きだしながら窓から離れてベッドに座つた。

「フフ、まあね。でも、もう荒井じゃないもんね、もうチコウじやないもんねえ」

真美子も笑顔で自分のペットボトルのキャップをひねり紅茶を飲みだした。

そう。

真美子の言つとおり、もう「荒井」じゃなくなる。もう「チコウ」なんてあだ名とは今日でおわりばだ。

吹奏楽の練習音が止んだ。

ラジオから再びリクエスト曲が流れだす、毎年この時期になると必ず流れる曲だった。

『……待つてろよ～とこつメッシュージと共にY浜市のチュー好きさんからリクエストです！（ユーミンで恋人がサンタクロース！）オレも、チュー好き…』

ラジオから聞こえてきたペンネームの「チュー好き」を聞いた途端、真美子と田舎わせ笑つてしまつた。

「ぶつ！ やだあ、ウケるんだけど…」

そう、まさしくタイムリーなネタ。

部屋の中に松任谷由実の独特な歌声が響き渡り、真美子は笑顔で、この歌いつ聞いてもいいよねえと言つた。

今夜。あと数時間もすれば、私にもサンタクロースが来る。

そして。一夜明ければ、松任谷由実が「旧姓・荒井」だったよう

に、愛しいサンタは私を「荒井」から新しい名字にした後、今詰めている荷物と共に彼の住む街へ連れていくのだ。

私は結婚する。

アルバム

『ワハハハハ』

『あらあ、いやだわ、オホホホホ』

両親の豪快な笑い声が玄関へ続く廊下まで聞こえた。

温かい居間から遮断された廊下や階段は真っ暗で薄ら寒い。玄関の横と階段の踊り場にある窓から漏れる外灯の僅かな明かりが余計に寒さを醸し出している。夕食のスキヤキとアルコールのおかげで身体と頬が火照っている為、寒さは余り感じられなかつたが。

「今夜も冷えるなあ……」

小脇に抱えている四冊の分厚いアルバムをさつさと一階の自分の部屋へ避難させるべく居間から退散したのだが、ついでに尿意もあつたのでお手洗いを済ませ階段を上つた。

階段を登る途中でひと際高い父の笑い声が耳に入った。

「……まーた、変なこと言つたんじゃないでしょうね……」

居間のダイニングテーブルでスキヤキを囲みながら、両親を前にして談笑しているサンタ……いや、男を心の中で悪態ついてみた。ヤツは遠慮なく肉にガツツいていた。

母が用意した普段食卓にお目見えしない肉屋の最高級の霜降つてる牛肉。「沢山食べてね」という言葉通りに鍋の中の牛肉はヤツの口の中にどんどん消えた。

もうスキヤキの肉は完食してしまった。

席を立つた時、鍋に残っているのは春菊と色の変わつた白滝だけだつた。アルコールも勧められた分だけ飲んでいた。今も飲んでい

る。得意じゃないせに。こういう席だけ、友人や会社の人と飲むときだけ「飲んべえ」に変わる。

一人暮らしをしていたあの冷蔵庫に酒の気配はなかつた。あるのは常にジュース、しかも炭酸飲料。野菜ジュースを飲めと言つても聞きやしない。

一人で部屋にいるときもヤツはあまり飲まなかつた、「まあまあ、飲んでくださいよ」と私にだけ飲ませた。ある日何故私だけがと不服を唱えると、「君、飲んだらす」いよ? 身体擦りつけて積極的なんだもの、オジサン嬉しいんだもの」と目尻と鼻の下を下げながらグラス一杯にお酒をついた。

「……明日朝早いんだけど、大丈夫かな」

苦笑しながら残りの階段を登り、自分の部屋のドアを開けた。

* * *

見なれた部屋は、カーテンが引いておらず、「コンビニの看板の明りや道路の街頭の光がわずかに差し込んでいた。壁のスイッチに手を伸ばし電気をつけると、夕方にやつと詰め込み作業が終了した荷物の山が目にに入った。

ダンボールの山を始め、ベッド、ドレッサー、タンス。

薄ら寒い部屋の中に所狭し荷物が積んでるのに、なんだか部屋の中がガランと感じられた。部屋の中に色というか、生活感が無くなつたせいだろうか。

ベッドの上にあつた蓋があいているダンボールに持つてきたアルバムを再び納めた。

「……つたく、急にこんなものを出せだなんて」

ブツブツと文句を言いながらガムテープを伸ばしたが、なんとかその手でアルバムを取つてみた。アルバムと言つても家族の写真ではない、卒業アルバムだ。小学校、中学校、高校、短大と4つ手に持ちベッドに座つた。かなりの重量だ。短大になるほどアルバムの造りが豪華になっている。一番上の小学校のアルバムは開ける気もしないので、早々と横に置く。

最初にケースから取り出したのは数メートル先にある中学の卒業アルバムだ。

「198年 Y市立山野中学校卒業アルバム 絆」

私はあまり卒業アルバムを見たくないし、見せたくない人間だ。ハッキリ言つてこの世から抹殺したい。答えは簡単、自分の写真が大変不細工だからである。自分の分はいくらでも処分できるが、他の同級生の分は無理だ。卒業生全員一生このアルバムを持ち続けると想像するだけで悪寒が走る。

そんなにつくきアルバム達だが、この中学校だけは特別だった。厚い表紙を開き、真っ先に自分の顔が映つているクラスを開く。

3年6組。

自分の写真を見て溜息と苦笑が出た。何度見ても変わらない、変る筈もないぎこちない不細工顔にデコピンをした。

私は幼少の頃から身体が大きかつた。

大きいうえに、太つていた。

ポッチャリと言えば聞こえがいいが、ようするになんてことはない、デブである。それが小さいころからのコンプレックスだつた。特に小学校の頃がひどかった。おまけに引っ越し思案で、頭もそんなに良くない。「このままではイカン」といつも思つていたが、い考えも浮かばず努力もせずにいた。

身体は大きく、やや太り気味、消極的で頭は中の下、しかも運動神経は鈍く、生真面目の面倒臭がり屋、暗いし卑屈っぽい。
最悪である。

これでは友達もままならない、私だってこんなやつの友達になんかなりたくない。

当然のごとく小学校の時はあまり友達がいなかつた。今でも思つ、その当時の自分に「しつかりしろ、努力が足りない」と喝を入れてやりたい。

それでも。

月日は人を変える。

そんな私でも今ではそれなりの大人になつた。

短大までポツチャリだつたが、社会人になつてからは仕事のストレスと稼いだお金でスポーツクラブとエステに通い、見る間に痩せた。痩せて背が高いとくれば、あらゆる服が着こなせて得だつた。不細工だと思っていた顔は意外とパーツがでかく、化粧すればそれなりに映えた。

自分でも結構努力したと思う。

良く見せるメイクを覚え、真美子から洋服のセンスや女性らしさを見習い、あらゆるお稽古事をして自分の肥やしにした。

おかげで稼ぐ給料、自分や交際費に投資してぱっかりだつた。今となつては〇一の標準の貯蓄をかなり下回つてるが、後悔はしてない。

そして魅力的な女になるための大変な要素。

恋愛。

見かけは変わつても、幼少の頃からの卑屈精神＆自信は皆無という性格はなかなか変わらなかつた。男なんてどうでもいいと半ば諦めてなりふり構わず仕事と自分を磨く努力をしていたら、自然と男が寄つて來た。

「欲しいものから心を離すと忘れた頃に願いが叶う」

まあ、世の中そんなものらしい。

社会人になつて初めてまともにした恋愛。

高校・短大と女子ばかりだったせいか、男の人と「お付き合い」というものを作ったのは社会人になつてからだった。太めで不細工で生真面目だった私でも、努力すればちゃんと彼氏ができるんだ！！……と、その当時は感動のあまりに涙なんかも出る始末だ。彼氏のいる女を羨み、いつも引き立て役、盛り上げ役に回っていた情けない役ではない。

自分が恋の主役。

デートし、手をつなぎ、キスをしてセックスをする。

学生時代に普通の女の子達が通る恋愛、小説・ドラマ・マンガに出てくるようなドキドキした恋をしてこなかつたから、初めて付き合った彼に舞い上がった。彼に夢中になり、戸惑い、余裕がなく、くだらないことで大いに悩み、最後は手痛い失恋をした。今も思い出すだけで恥ずかしさと申し訳なさと情けなさと恨み事で心がグルグルしてしまう。けどそのころの私は外見はイマドキを装っていても、中身は相変わらず真面目だった。

「バージンを捧げた初カレ＝絶対結婚する人」だと思っていたのだ。

真面目と言えば聞こえがいいが、お嬢様でもあるまいし、20代前半でこれではどうかと思う。

重くて振られるの、当然だ。

それが月日というのは恐ろしい。

史上最悪な失恋をして立ち直れないと思いきや、新しい恋人ができれば初カレのことは忘れた。今じゃ何処でどうしているかもわからない。初カレに振られてから居間で飲んでいるサンタに出会うま

での数年、デートや合コン、お見パー、週末クラブでオールなんてのも数え切れないほどやった。それこそ酒の勢いで一晩だけというワンナイトカー二バルな男もいたし、結婚する人は初体験の人どころか……まあ、ここは控えておこう。

それなりの場数を踏み経験値を上げれば、自信もついてくる。仕事にも慣れ、大人の遊びも覚え、恋も順調とくれば、人間余裕ができるしオーラも増すのだ。

ともかく、あんな地味だった人間でも変わる。
恐ろしいほど変わる。

次のページをめくつた。

3年7組。

中学のアルバムを開くと必ず見てしまつページがこの3年7組だつた。

担任は箕輪。超怖かつた。ゴル 13みみたいな眉毛でいつもしかめつ面してた。背が低く一年中ピッタリしたTシャツを着て乳首を浮かせていたマッチョな体育教師。

ぎこちない箕輪の顔にフハッと笑いが漏れてしまった。口を押さえながら、目線はいつものところに止まつた。

短髪の柔らかい爽やかな笑みを浮かべている男の子。尻に浮かぶ皺がなんとも可愛らしい。

そして。

茶髪の五分刈りで生意気そうな笑みを浮かべている男の子。こちらは尻に黒子がある。

自然といひからも照れくさにようなくすぐつたいよな気持ちにな

り、ぎこちない笑みをしてしまつ。

男子全員、きちんと白いカラーをつけた学ランを着て並んでいる澄まし顔の写真。

当時人気者と言うがクラスの中心にいるような「カツコイイ」と言われる男の子達は、眞面目に制服を着ることが「カツコ悪い」とでも言うように白いカラーをつけた子はいなかつた。長ランだの短ランだのボンタンだの着ていた。

一人ともいつもカラーなんぞつけていなかつたくせに、この写真はついている。

爽やか、目尻皺イケメンの「田宮」。
五分刈り、目尻黒子男の「尾島」。

初力レとは違う、淡い恋の思い出。
彼らは一生忘れられない、私の青春。

我が中学校は、ダッシュで1分

『198年 Y市立山野中学校入学式』

私、荒井美千子は新たな希望を膨らませ中学校の正門、いや、裏門をぐぐつた。

……と言つても、振りかえつた数メートル後ろには我が家があるのだが。道路で車に捕まらず、ダッシュすれば1分の中学校。

「本当、近いな」

これならギリギリまで寝れると不埒な考えをよぎらせながら昇降口に向かつた。

案内に従つて自分が利用する昇降口に入ると、群がる真新しい制服・上履き・カバンを身に付けた生徒達。下駄箱の自分の名前の札が貼つてある場所を確認した後真新しい運動靴を入れて、入学式前に中学校から届いた「入学式の案内」と「クラス名簿」を手に自分のクラスである1年8組に足を向けた。

我が山野中学校は3つの小学校から生徒が集まつており、新学年のクラス数は全部で10クラス、生徒数は各クラス約50名弱と今では考えられないくらいの生徒数だつた。なので自然と小学校6年の時に同じクラスだつた子と一緒にになる確率は低くなる。名簿を見たら8組のクラスには、同じクラスだつた生徒が自分を含め4人いた。

（別に私一人でもよかつたんだけど）

ともかく消極的で暗かつた私は、小学校の時の自分の姿を知つている奴が一人でも少ない方が自分の輝かしいスタートにとつて都合がいいと思っていた。残りの3人には悪いが、名簿で知つた名前を見つけた時には「チツ」と舌打ちをしてしまつた。

そう、私は中学を境に生まれ変わると密かにプロジェクトを練っていたのである。

今で言つと「デビュー」つていうやつに当たるだろ？ まずは積極的な友達作り。少しでも瘦せるため春休み中白米のおかわりはやめた。もちろん部活は運動部希望だ。本当なら帰宅部か絵が好きなので美術部に入りたいところだが、苦手を克服しないといけない。

勉強も頑張ろうと、春休みの間に入学前に買つてもらつた各教科の参考書に目を通した。特に英語。英語は皆スタート地点が一緒、小学校で個人的に習つていい奴は少なかつた。今でこそ小学生が英語を習うなんてのは珍しくない、むしろ幼児向けの英語なんてあるくらいだが、私たちの時代にはそんな子供は皆無に等しかつた。未知なるこの教科は自分にとって新たな扉を開いてくれるかもしれない、これだけでも他の奴を出し抜くチャンス！ ……と本気でそんなことを思つてた。

その頃から洋画が大好きになつたことも背中を押している。

小学の高学年や中学生の女の子が好んで占つての雑誌や「明星」「平凡」などのアイドル雑誌を買つていた頃、私は洋画の雑誌「ロードシヨー」や「スクリーン」を買つていたのだから。

その頃の夢は通訳になり金髪碧眼と運命的な出会いの後電撃婚、ハーフの子供を産むと本氣で考えていたことはサンタには内緒だ。さて、階段を登り教室に近づくと廊下には女の子が数組仲良さやうに話している。
おそらく小学校の時に仲良かつた者同士なのだろ？
8組という札が下がつてある教室の扉の前に立つと胸のドキドキが最高潮になつた。自分の心境を割合で示すと、緊張6割、不安2割、恥ずかしさ2割。

中を覗くと半分くらいの生徒が大人しく席に座つてたり、窓から校庭を眺めていたり、……この緊張する雰囲気を読まず、友達同

土ふざけてカーテンを身体に巻きつけて笑っている男子もいる。

「……」

すでに中学に馴染んでいる大物なのか、それとも小学生の気分が抜けない單なる能天氣なのか。こういう奴つてどこにでもいるんだなと思いながら黒板に目を向けると、今後の予定と教室内での指示がチョークで書かれていた。

教室では静かにしてください。

席は机の上に名前が貼つてあります、名簿順で座つてください。
10時から入学式が始まります、9時半までにカバン置き、貴重品を持って体育館に集合してください。

入学式の後、速やかに教室に戻つてください。

ホームルームの時に必要事項をお伝えします、筆記用具とノートを机の上に出しておいてください。

時間割、教科書、ネームプレート、校章はホームルームの時に配布します。

席は名簿順。

予想どうりだ、確かに私は女子で2番目だった。もう前の方の席になるのは仕方がない、「あ行」に生まれた宿命だ。

扉のすぐ傍にある机の名札を見たら青いペンで「石田」だった。どうやら一番端の廊下側の列は男子の席らしい。廊下から2番目の列、前から2番目の席に行くと札の上に赤い字で「荒井」とあった。ためらいがちに椅子を引くと、思ったより響いた音が出たので慌てて座つた。椅子は木と金属のパイプでできている椅子、なんてことはない、小学校の時とそんなに変わらない。かしこまつたまま机に視線を落とすと、小さいキズと鉛筆で書いた薄い落書き。この机が、椅子が、教室が、私の新たなスタートを切る必須アイテムとなるの

だ。

少し感動して、目を細めてしまった。

「ねえ、ねえ」

掛け声と共に後ろから背中をつつかれた。

ハツとして顔を上げ後ろを振り向くと、髪が長くて肌が浅黒い女の子がぎこちない笑顔を浮かべている。さっきまで自分の席の列は誰も座つてなかつたのに、気付かないうちに自分の後ろの席は生徒で埋まつてた。

「ねえ、何処小？ 山野？ 大野？」

女の子は恥ずかしそうにしているが、積極的に声を掛けてくれた。こっちも緊張はしたもの、嬉しくて横座りをしながら答える。

「あ～、山野小です。え～と、宇……井さんは？ 下山野小なの？」

机の名札を確認しながら聞くと、宇井さんと言う人は微笑みながら頷いた。

「そうそう、下山野小。クラスに同じ小学校の人少ないからや、これからもよろしくね？」

「あ、うん、こちらこそよろしく」

教室入っていきなり声を掛けてくれたことがにわか信じられなかつた。

クラスに知つた顔が少ないとは実に羨ましいと思いつつ、ぎこちなく挨拶を返した後、まわりはどんな感じで過ごしているのか目線

を泳がせて辺りを見回してしまった。回りの連中も席の前後で何人か会話を交わしている。

とりあえず私は好調のスタートを切つたようだつた。

もちろんこの程度で好調と言えるのがどうかは甚だ疑問だが、ともかく滑り出し順調である。脳内ではもう一人の自分が「やつたな！」とサムアップしてウインクをかましていた。

「し、下山野だつたら、と、遠いね。やっぱバスなの？」

多少どもつたが、せっかくお知り合いになつた宇井さんと距離を縮めなければという一心で、会話をなんとかつなげようと必死で話題を紡ぎ取る。

「そう、本当はバスで行きたいんだけどさあ、お金がかかるから歩きで行けつて親に言われているんだよね。面倒だわ」

スンマセン、ダッシュで1分のところに住んでマス。

とは言わず「大変だね」と言つと、「でしょ?」と大袈裟に溜息を吐き、机にうつぶせたと思つたら頬杖をついた。先程にも述べたとおり、我が山野中学校は「山野小・大野小・下山野小」の3つの小学校が集まつてあり、山野小が一番人数が多い。その次に大野、下山野と続く。後々卒業アルバムを見せてもらつたら、大野は4クラス、下山野は3クラスしかなかつた。ちなみに山野小は6クラスもある。クラスが少ない地域ほど中学校から遠かつた、下山野小の子は30分かけて歩きかバスを利用しなければならない。以前はチヤリもOKだつたらしいが、卒業生が問題を起こして禁止になつてしまつた。

「山野小だから近いよね、羨ましいよ。えつと、あ、名前なんて言

うんだつけ？」

「」で自分が名乗つてないことに気付いて慌てながら「」、「」めん！ 荒井美千子です、よろしく」と頭を下げる。

「ハハハ、荒井さんか、美千子ならひちやんだね。私、宇井和子。宇井でもいいし、和子でもいいよ」

いきなり飛び捨てしてもいいんですか、そんなに親密になつてもいいんですか？！ と宇井さんの手を取つて狂喜乱舞する私。無論、心の中で。

「じゃ、じゃあ、和子ちゃんって、呼んでもいいかな……？」

妄想を追い払つて控えめに言つと、宇井和子はもううんとうに笑顔で頷いてくれた。

いいよ。

この時点では荒井美千子、サムアップから勝利の拳を空に突き上げていた。言つまでもなく、心の中で。

「ねえ。もうそろそろ、入学式始まるよ、体育館に行こ！」

そう言つて席を立ちあがり、私の腕を取つてくれた。

席を立つた和子ちゃんを見てびっくりした。なんと背が私よりも大きかったのだ。ふつくらしてるとこよりも似てている。それを見て益々親近感が湧いた、彼女となら末長くよいお友達になれそうな気がしたのだ。ただ彼女は私と違つて暗く消極的ではない、明るく前向きのようだ。オマケによくよく見ると髪もブロードであるし、眉毛

もキチンと整えている。そして僅かにいい香りがした。

「あ、ちょっと待つて」

そう言つて和子ちゃんはポケットからリップと手に収まるぐらいの細長いコンパクトのようなものを出した。おもむろにコンパクトを開くと鏡でリップクリームを塗つている。極めつけはそのコンパクトを制服の上にあてていく。

鏡つきの携帯の埃取り。

ショックだった。自分の頭上に雷がピシャーンと直撃するほどの衝撃。

(「この世にこんなものがあるとは……！」)

田の前の「宇井和子」という人物がとてもなく大人に見え、突然としてしまった。

「…………ん？　どうしたの？」

「い、いや。ちや、ちゃんと綺麗にしていて偉いな……といふが、すごいなというか……」

慌ててひきつり笑いをしていたら、和子ちゃんは「やだーたいしたことないよ」と言つた。

(……いや、たいしたことあるんですけど)

同じ大きめ＆ボッチヤリでも一味も一味も違う和子ちゃんに一瞬劣等感がよぎるが、慌てて負の感情を消す。そんなこと気にしていたら前に進めない、私は変わらなければならないのである。こういう小技を盗み、見習わなくてはいけない！　と密かに決意をした。

(「これぞ中学生！　やっぱ小学生のガキとは違つわよね！　そうよ、電車賃だって中学生は大人料金じゃない！」)

またもや脳内ではバスロープを着た私が、色氣を醸し出しながらリップクリームで大人と子供を分けるラインをキツチリ引いていた。

私は即効和子ちゃんに問い合わせてしまった。

「そのコンパクト、どこで売ってるんですか？」

盗むどいじりかいきなり答えを求める荒井美千子、調子のいい乙女
な12歳。

「……ミツちゃんとて、面白いねえ」

和子ちゃんは笑いながら丁寧に教えてくれた。

販売場所は意外と近かった、中学の近所にある「大葉書店」。文
房具も本も売っている我が町の唯一大きい書店。
中学に近いということは当然我が家からも近い。
最初のミッションが決まった。

大葉書店でマンガや小説、雑誌に現を抜かしている場合ではない。
家に帰った後、携帯埃取り＆リップクリームを購入したのは言つ
までもない。

その男、チビ猿」と「尾島」――前編――

「おはようー。//ちゃん」

昇降口で靴を履き替えていると、後ろから声を掛けられた。

「お、おはようー。」

元気よく返した（つもり）相手は友達第一号の和子ちゃんだ。

「//ちゃん、近いからいいよなー、何時まで寝ているの？ うらやまちこ」

明るい笑顔をたたえながら和子ちゃんの横から声を掛けってきたのは、同じクラスの中山幸子なかやまさかずだった。

彼女は入学式の日に和子ちゃんに紹介してもらつた。和子ちゃんと同じ下山野小学校出身で家も近所らしい、毎朝一緒に登校している。

下山野と大野小出身の生徒は人数が少ないからか、それぞれ結束力が……いや、新密度が高い。山野小の連中には同じクラスになつたことがない人なんて結構いるが、他の小学校は人数が少ないため、6年間のうちに一度は顔を合わせたことがあるのである。

その為、クラスの中でも同じ小学校出身同士のグループが何組か出来上がっていた。特に女子にその傾向が強い。

最初に声を掛けてくれた和子ちゃんがいる下山野小の子が集まるグループにそのまま入れてもらつた私は、珍しい部類に入る。

和子ちゃんの友達は、山野小出身の私を快く迎えてくれた。

他の小学校出身の子が珍しいせいもあって、最初は質問攻めだったが。

それでも、人と付き合つのが苦手な私としては、相手からいろいろと来てもらつたほうが話題を提供しなくて済むし、間が持つていい。

(こんなによくしてくれるなんて……)

未知なる縁故に心を弾ませ、中学校の生活がスタートしたのであつた。

「おらおら、オマエら邪魔なんだよ。ヌリカベみたいにデカいんだから、ちょっとは気をきかせろよな」

出た。

朝の賑やかな昇降口に響いた、まだ声変わりしていない高い声。上履きに履き替えた私たち3人に向かつて「カツチーン」とくる辛辣な言葉を吐きだす悪魔は一人しかいない。

以前の私なら「あ、ハイ、スミマセン、退かせていただきます」とショックとムカつきを隠しながらも引き攣り笑いを浮かべて素直に道を譲るところだが、今の私は違う。朝からイラつとする言葉を投げつられて黙っているほどお人好しではない。しかも味方は2人。人数ではこっちが上だ。

振りかえるとそこには、背の低い五分刈りの生意氣顔があつた。くつきり一重の垂れ下がった目尻には小さい黒子。

その男子の真新しい学ランは「着ている」というよりも「着られている」と言つほうが近い。

「つるわこじよ、尾島！ チビ猿は黙つて猿山にでも帰つてな！」

「そーよー。『邪魔』なんて言葉、百万年早いのよー。っていうか、声の主が小さすぎて見えないんですけどお？ー」

えーここに出走馬の紹介をいたします。

早々とスタートを切った先行馬は、全開の瞬発力が鮮やかな仕上がり万全の下山野小出身・ブラックダイヤモンドウイ。

外から追走するのは、無駄のないシャープな走法……いや、ツツゴミで好調をキープする同じく下山野出身・フローラルレッドサチ。

口。

そーよ、そーよ！…………とは言えず領きと田線で抗議を訴えるのは、スタートで大幅に崩れ流れに乗れなく詰めの甘い超逃げ腰NO.1・アライマイチクイーン。

決して「ヌリカベ」を肯定するわけではありませんが、3頭……いや3人はクラスの女子の背の順で最後尾を飾るメンバーであります。

ちなみに背の高い3人は仲良く揃ってバレー部でもあるんですね。以上、パドック前から荒井美千子がお送りしました！……などという実況中継してた場合ではない。炎ではなく下駄箱をバックに睨み合う、3頭VS1匹。

「あ～う・る・せ！　いやだねえ、凶暴な女は。大体ドテチンヒラメとチュウのくせに生意気なんだよな」
ホント。君達、ジャマジャマ。

大袈裟に溜息をつき心底嫌そうな顔。ふんぞり返つてシッシッ手を振りながら大きいスポーツバックを持ち直し、私たちの間を無理矢理通つて行く。

さらにすれ違う時、ワザとバックをぶつけるという小技も忘れないところがまた憎たらしい。

「ちょっと、危ないじゃないの！　痛いのよ！」

真つ赤な顔をして怒鳴ったのは和子ちゃんだ。幸子女史も「あんた、サイテツ！」チビ猿のスポーツバックをバシンと叩いてる。私も本当は言いたい、「ふざけんな、テメエ！」という台詞を。負けるな、アライマイチクイーン！　ここは後方から追い上げてビシッときせー！　一発逆転、大穴狙え！！

「あ、あの、そのあだ名、や、やめてほしいんだけど……」

出夕言葉ハ、震エタドモリ声デシタ、マル

言いたいことの半分も言えず情けないオーラを滲みだしながら落ち込んでいると、チビ猿はこちらをチラつと見た後ヒヤヒヤと馬鹿にした笑いを漏らした。

ナンド、バカヤロウ。ヤメルカ、バカヤロウ。

チビ猿は聞きたくもないモノマネをしながらさらに笑い声を上げて、上履きのかかとを踏みながら足早に教室へ行つた。

ギリギリギリ……ボボボボ……

前者は心の中で響く歯ぎしりの音であつて決して虫の鳴き声ではない、無論悔しいからである。後者は恥ずかしさのあまり顔から火が噴く音。

「……つたく、アイツ本当生意氣！　もう行こう……」

和子ちゃんの号令で私たち3人は、チビ猿の悪口をかますことで消化不良を解消しながら教室に向かつた。
しかし、しかしである。

教室に戻つても、今のような小競り合いが繰り返されることは分かつていた。少なくともこの1年間、最低でも席替えがあるまでは。チビ猿こと「尾島」、彼もまた同じく「あ行」に生まれた男であ

る。

ヤツの席は後ろ、つまり和子ちゃんの隣の席なのであった。

* * *

教室に入るとひと際高い笑い声が聞こえた。

声の方に目をやるとチビ猿が友達と窓際で談笑している。そうかと思えばカーテンを身体を巻きつけぶら下がっている。行動が忙しがく、まるで本当の猿のようである。

そう、入学式の日に教室で初めて見たカーテン巻きつけていたヤツは尾島だったのだ。

小学校生の気分が抜けない單なるアホだと思っていたら、どうでもいいところで頭の回転が速いアホ。しかも恐ろしいほど弁が立つ。

背も顔も可愛らしいが、油断ならぬ悪魔のような中学生。彼はこの先3年間、良くも悪くも私を翻弄する存在にならうとは……その時は知る由もない。

その男、チビ猿」と「尾島」——後編——

「おじまけいすけ 尾島啓介。 大野小出身。 あまりにも運動神経がいいので、『二』の部活に入らうか迷つてます、よろしくー。」

これは一番初めのホームルームの時の自己紹介で、尾島が言った
台詞……らしい。

らしいというのは、もつすぐ自分の自己紹介が迫っている私は緊張のあまり人の挨拶を頭に入れてるほど余裕がなかつたからだ。男子の一番・「石田」から自己紹介が始まり、次に隣の席の「江崎」、3番目に元気よく挨拶した男の子が「尾島」だった。次々と自己紹介が終わっていく。

廊下側の列が終わり、2番目の女子の列がきた。女子のトップの「相沢」さんが挨拶している時点で緊張がピーク、手が震えてくる。前の相沢さんが座り、話声とおざなりの拍手が終わつた後そつと席を立つた。

……つもりだつたのに。

立つた瞬間、無情にも「ブブブブ~」といつイースの足と床が擦れる音がシーンとした教室に響き渡る。後ろから「ププ」という小さい笑い声が聞こえた気がしてモアつとした嫌な気持ちになつたが、振り向くのもなんだし、何より余裕がなかつたのでそのまま挨拶の態勢に入った。

「あ……荒井、美千子です。山野小学校からきましたよろしくおねがいします」

どもつて歯切れが悪いかと思いきや、息継ぎもせずそのまま言葉を続けて頭を下げた。

パチパチパチ……

疎^{まは}らな拍手を聞いた途端、真っ赤になつてゐるあらう顔を俯かせさつさと座つた。

(ああ、もつとゆつくりちゃんとした挨拶したかった……)

後悔と反省を頭の中で一杯にしていると、後ろから小さい声が聞こえた。

チュウだな。

は?

訳が分からず後ろを振りかえり、挨拶しようとしている和子ちゃんと隣のニヤニヤ笑っている男子をチラリと見る。

(そういえば……)

隣の江崎君の挨拶の時にもボソリとなにか聞こえたような気がする。

(確か「グリゴ」って声が聞こえたような……?)

よく見ると後ろの男の子は色が白くて可愛らしい顔をしていた。整った眉毛がキレイに上がっているのと反対にくつきりした一重の目尻がやや下がっており、右目^田の横には小さい黒子。

身体全体は小さうなのに、滲み出る存在感といつか霸氣といつか……ようするにオーラが強い。

ああ、この子、小学校の時モテただろうな。

そんな第一印象を持ちながらボートを見てたらバチッと田^日が合い、瞬間可愛らしい顔からとんでもない台詞を小声で浴びせられた。

何、見てんだよ、バカ。

チュウは前見てる。

弾かれたように前を向いた。

心臓がバクバク言つて、自己紹介前の時よりも手が震えた。いきなり、「バカ」。そのような言葉を面と向かつてハツキリ言われた

のは初めてだつた。昔から陰でコソコソ言われていることは分かつていた。情けないがほぼ事実だつたし仕方がないと思つて見て見ぬ振り、聞いて聞かぬ振りしていたが……正面から「バカ」。

ショックと悲しさのあまり喉の辺りがキュウッと締め付けられ息苦しくなつた。

そのうち怒りが込み上げ、握った拳がぶるぶると震えてくるが落ち着かせるようにお腹に押し付けガマンする。

(……なによ、大体見たくて見た訳じゃない。「チユウ」なんて咳くし、自己紹介する和子ちゃんの方を見るつもりで後ろを振り返つたらまたまた目があつたんだ。アンタ見た訳じゃないよ、この皿の中傲慢バカ！)

心の中で後ろの男を悪態つき、心を落ち着かせよつとした。

同時に嫌なヤツとクラスが一緒になつたもんだと溜息が出た。暫くは席が後ろだし、和子ちゃんと話すために後ろを振り返るたびに顔を合わせなきやならない。輝かしいスタートを切つたと思ったら、いきなり大きな落とし穴が出現……まったくイヤになる。こういうヤツは経験上無視に限る、変に対抗すると余計に調子に乗つて向かつてくるのだ。無視は慣れている。

(サラツと流せ、美千子！)

小学生みたいなガキに構つてゐるほど暇ではない、大人の女は余裕を持つて構えないといけないのだ。そう思ひながらも、「絶対コイツより勝てるものを一つ以上見つけてやるー！」と誓つた。

「……です、よろしくお願ひしますー！」

後ろの和子ちゃんが元気よく挨拶し座りつゝするとまたもや小さい咳き声が聞こえた。

ドテチン。

今度こそハツキリ耳に入つた。後ろの男がまた何か呟いてるのだ。
もう絶対振りかえるまいと決めていたので黙つて固まつていたら、
明らかに怒りを含んだ小さい声が真後ろから聞こえた。

「あんた、さつきから何言つてんの？ 耳障りだつづーの」

なんと和子ちゃんは隣の席の男にキッパリ言い放つたのである。
隣の男もカチンときたのかすぐに言い返した。

「うるせえな、ドテチンは黙つていろよ。自己紹介が聞こえないだろ
？」

(「うれいしょ」のはアンタだよ。)

心の中でレジット罵倒すると和子ちゃんがそつそつそのまま代弁
した。

「は？ 「うれいしょ」のはアンタでしょ？ それにドテチン？ 何それ
？」

「お前の事だよ。見たことないのか？」『はじめ人間ギャートルズ』
。それに出てくる『リラの名前』お前そつくり

「何言つてんの？ うるさいんですかど？ うつとおしいんですか
ど？」

「色も黒いしや、トカイしや、まわにドテチンだよな」

「……あんたわあ、自分の姿を見てからいいなさよ。なまつちうい
下つ端のチビ猿みたなくせしてや。動物園でボス猿のモづくろい
でもしてろつづーの」

クスクスクス……………クククク……………

小声ながらもヒートアップしてくる戦いに回りの席の子が笑いを
漏らした。この会話で後ろの男がブツブツ言つていたのは、どうや

ら「あだ名」を付けていたらしことが判明した。

江崎だから「グリコ」。

荒井だから「チュウ」。

体型や見た目で「ドテチン」。

しかも本人と実際の映像どがまつたくかけ離れている。隣の江崎君など震えながら下を向いて笑いを堪えているが。

(……アンタ笑つてますけど、「グリコ」って言われてますから…)

とてもじゃないが一緒に笑う気になれなかつた。

それよりも「いいぞ、もつと言つてやれ！」と無条件で和子ちゃんを応援した。ここまでハッキリ言えてしかも負けてないということは、一種の才能だと思いながら。和子ちゃんのおかげですっかり心は晴れ、低レベルなオツムの男に無駄な感情を使ったことがバカらしくなつた。

「そこ静かに！ 他の子の自己紹介に集中しろよ~」

「(...)」で1年8組の担任である梨本先生の注意で後ろの戦いは呆気なく幕を閉じた。

それでも。その後も尾島の小声は止まなかつたが。

それからというものの、「(...)」の「尾島」という男のおかげで何人のあだ名が勝手に決まつてしまつた。さすがに和子ちゃんのあだ名を面と向かつていう人は尾島だけだが、男子全員陰で言つてているのは知つてゐる。私や江崎君などは、当人達が大人しくて何も言わない（言えない）からか、それとも親しみを込めてなのか、「チュウさん」「グリコ」と平氣で呼ばれる。

しばらく江崎君は尾島から、「やっぱランニングにグリコつて書いてあるのか?」とか「バンザイして走つてみるよ~」とか言われ

てるし、私は英語の時間の前後に「おい、チユウ、『ディス イズ
ウ ア ペーン』って言えって！」と私のイスを後ろから蹴り上げ
ながらしつこく言われた。

まったく、腹立たしいつたらない。

（ちなみ平成生まれの子には馴染みが薄いだろうが、この「This
is a pen！」や「何だ、ばかやろ！」「何、見てん
だよ！」はドリフターズのメンバーであつた故・荒井注の有名なギ
ヤグである）

幸子女史などは和子ちゃんの席に遊びに来た時うつかり尾島の席
に座つたために、いきなり初対面で「勝手に座んな、ヒラメ！」と
言われた。言葉が出ない幸子女史に「丁寧にも「目が離れていて身
体が細いから」という理由を付け加えることも忘れなかつた。もち
ろんその直後、幸子女史と和子ちゃんから怒涛の反撃を受け、殴ら
れたのは言つまでもない。

彼のあだ名をつける勢いは生徒だけでは留まらなかつた。

担任の梨本先生を「リポーター」、社会の地理担当の青島先生を
「チンタオ」と命名したのも彼である。

その男、チビ猿こと「尾島」——後編（後書き）

ここでは、読み手の皆様によつては文中に不快な気分にさせた表現がありましたことをお詫び申し上げます。

本人の了承もなく、人の名前や体格、性格を面白おかしく言つたり、嘲笑したり、噂するのは、相手に精神的・肉体的にダメージを与えることがあります。

このような行為は人としてあるまじき行為であり、人の道を大きく外していると私は考えます。

これを見てる皆さまは常識ある人間ばかりで、このようなことがないことを強く確信しております。

作中の登場人物や内容はフィクションであり、架空の物語であることをご了承くださいませ。

良い子は真似をしないようにしましょうね！

また、私は幼少の頃ドリフが大好きで志村ケンは神でした！同様に荒井注がいたドリフも大好きだったんですね。

彼が言つた「This is a pen！」は日本人に最も馴染んだ英語のセンテンスと言つても過言ではないでしょう。

土曜の8時は一週間のうち最も極楽の時間だったのを覚えてます。

荒井注様のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

勉強ノススメ、部活ノススメ

ジリリリリ～！！

「はい、そこまで！ 筆記用具置いて、後ろから速やかに答案をまわせ～～！」

先生の叫び声が、過酷な数日間を過ごした生徒達の解放とも呼ばれるざわめきと筆記用具を置く音の中を駆け抜けた。

答案用紙が次々と前の席目指して回収され、慌ててノートや教科書を出し答え合わせをする者や筆記用具をしまい帰り仕度をする者、早々と部活の準備をする者と教室内は一層騒がしくなる。

初めての中間テストが終了した。

私は一気に緊張が抜けて机にうつ伏せ、安堵のため息をもらした。小学校と違つて集中して全教科のテストが行われ、ここ数日間は教室内が試験一色に染まり、嫌が心にも勉強ムードが盛り上がり焦燥感が増した。どの先生も「ここ出るぞ」という言葉を壊れたレコードのように繰り返し、その度に悲鳴とブーリング、ノートにペンを走らせる音とマーカーで線を引く音が響き渡った。

「もつと試験に出るとこひ教えろ～～！！」

これはこの先試験の度にチビ猿が先生に強^{ねだ}請^{ねだ}る名セリフとなる。

家に帰れば、先生のアドバイスを元に教科書、ノート、参考書を使って未知なる試験対策に取り組んだ。試験一週間前は部活も中止、職員室出入り禁止というのも初めての経験だった。こんなに真剣に

勉強と向き合つたのは初めてかもしれない。小学校の時は「勉強する」という言葉は私の辞書には存在しなかつた。そこまで重要と思つていなかつたし、危機感もなかつた。実際にやってなくとも0点を取ることもなかつたし、30～60点を彷徨つっていても親は溜息を洩らすだけで煩く言われなかつた。

ところがどつこい、中学ではそもそも言つてられない。3年後には高校受験という壁も控えている。中学で義務教育は終わり、その上に進学したければ否が応でも「入学試験」を受けなければならないのだ。もちろん入試一発を狙うのもありだらうが、勉強は日々の積み重ねが大事なのである。直前に勉強して身につくものでもない。なかには奇跡的に点数取れる人もいるだらうが、高校受験にそれは心もとない。一瞬で丸覚えできる天才か、よっぽど運がいい奴以外ありえない話だ。

もちろん私は入試一発に掛けるつもりはなかつた。
小学校の時に「本番一発」を通してきてるので、その結果どうなるかは自分がよく知つている。

「小さいことからコツコツと。得意な教科につんと力を、苦手な教科は……まあ、それなりに…」

私は3年間守れそうなスローガンを中心ひつぞりと立てた。

* * *

「//ちやん、部屋行こつよー。」

和子ちゃんは待つてましたとばかりに席を立ち上がり、カバンを机の上にドサリと置いた。

「あ、う、うん」

簡単な連絡事項が終わり挨拶も終了すると生徒達は今度こそ本当に終わったとばかりに友達同士話をしたり、部活に行くために教室を飛び出したり賑やかになつた。両隣りのクラスからも、校庭からも明るい声が聞こえてくる。

「ちょっと、最後の国語じうだつた?！」

幸子女史^{みやげ}がテストの最終教科であつた国語の問題プリントをヒラヒラせながらやってきた。

「最初の漢字の書き取りはいいとしてさ、次の問題のさ……」

「それよりもむしろ、この長文の問題、厄介じゃなかつた?」

和子ちゃんと幸子女史は問題用紙を覗きこんでいる。私も支度が終わり、後ろの席に振り向いて問題を見た。終わつたとはいえ問題を見ると頭が痛くなる。自称本好きな私だが、国語は苦手な科目だつた。大体、「筆者が指す『それ』とはどの部分か」とか「筆者の気持ちは何を表わしているか」なんて問題は私に問われても知つたこつちやないと言いたいし、そんなこと筆者しか知らんだろう！　とツツコミたい。ところが試験ではそうはいかない。それが問題と言うのならば答えなければならぬのが辛いところだ。「私もここがわからなかつた」と問題を指すと、お呼びでない奴が「おい、チュウ！」と横から割り込んできた。

「漢字の問題で『土産^{みやげ}』が出なくて良かつたな？」

チビ猿のバカにしたような声を聞いた途端、カアと顔が真っ赤になり俯いてしまつた。

尾島が『土産』といつ漢字を口元したのには理由がある。

あれは忘れもしない国語の時間。

私は先生から文章を読むようあてられた。文中にある『土産』といつ文字を疑いもなくそのまま『どさん』と読みきってしまったのだ。

……「イイツ、間違ってるよな？」

そんな教室内の空氣に最後まで氣付かず、数回繰り返す『土産』。読み終わった後、そこで初めて先生から申し訳なさそうに指摘される。

荒井。

はい？ と顔を上げると銀縁メガネの奥に浮かぶ先生の苦笑顔。

『お前が読んだ文中の「土産」って文字な、「みやげ」って読むのな？ 前もって辞書で調べておけ？』

『……』

クラスに失笑が流れることが数秒。

この授業の後、その日は後ろのチビ猿に「チユウ」とは呼ばれず、「どさん」と呼ばれた。

「ちゅうとー 勝手に余話に入つてこないでよー。」「わつわと部活こでも行きなきこよー。」

恥ずかしさで何も言い返せない私の代わりに、チビ猿にツツ「ミミを入れてくれる2人。当のチビ猿はいつものことく、「ヒヤヒヤヒヤ」と嫌な笑いを洩らしながら教室を退場して行った。

「……あいつ、本当、どつかの動物園に売り飛ばそつか？」
「いつそのこと野生に返すつてのはどう？ 外国のジャングルにでもさあ」

2人は「でもそのジャングル、すげえ迷惑だよね！」と尾島が出て行つた方を見ながら笑つた。その後いつものように私に向かつて「気にすることないよ」と優しくフォローを入れてくれる。私もこのやり取りがだいぶ慣れてきたので、「ありがとう」と一人にお礼を言つて一緒に問題用紙を覗きこんだ。

* * * * *

中間テストといつ最初の大きな壁を乗り越えた頃には、クラスメート同士の緊張もほぐれてきた。

同小のグループ間の結束は未だに固いが、私もクラス全員の女子と挨拶を交わす程度には打ち解けていた。女子の中でも尾島のようにからかい半分ではなく、親しみをこめて「チュウさん」と声をかけてくれる。不本意だが「勘弁してほしい」と思つたあだ名が潤滑油になつたのは否定できなかつた。

そしてクラスメイト以外で友達を広げるキッカケとなる「部活動」。

同じ小学校出身といつ限られた小さな和に、同じ部活と言つもつ一步踏みこんだ縁が加わる。仮入部から正式な本入部に決まり、クラスメート以外の新たな友達が加わつて学校生活をより一層盛り上げた。

この「部活動」というものは小学校のそれとはレベルも規模も違

い、一種独特な世界が広がっている。これ無しでは中学生活を語れないほど重要なポジションを占める存在であり、殆どの人がこの「部活動」で初めて先輩後輩の醍醐味を十分に味あわされ、「上下関係・縦社会」というものに触れるのだ。

私はバレー部に入部した。

当初は陸上部かバトミントンに入る予定だった。何故かつて？

答えは簡単、運動神経の鈍い私としてはボールを使う部活はNGだつたからだ。ボールを使う以外の運動部と言えば「水泳、剣道、体操、陸上、バトミントン」しかない。

水泳部はバス。水着なんて授業以外でお披露目する気はないし、だいいち25メートル泳げない。

剣道部もバス。防具が臭いというし、そんな「真っ向から勝負！」なんて代物、私には無理。

体操部、バス！ 自慢じゃないが、超ウルトラ身体が固い。自分の身体にレオタード……考えただけで恐ろしい。違う意味で「惱殺」できる自信がある、殺傷率200%だ。

残るは陸上部かバトミントン。

バトミントンはラケットやガットでお金がかかるけど、陸上なら身一つで走っていればいいと陸上部に気持ちが傾いた時。

ここで色々な噂がまことしめやかに中1の間を駆け抜ける。

陸上部の担当顧問が、いつも朝礼で生徒を怒鳴り散らしている顰め面の3年担当体育教師「箕輪」と判明したのだ。その時点で陸上部が即効候補から外れたのは言うまでもない。

残るはバトミントン。

しかしバトミントン部には一つ問題があった。

「恐怖のGO GOランニング」

校内で有名なバトミントン部の名物運動メニューである。

「どんな恐怖だよ！」とツッコミたくなるほどオメテタイ名前だが、内容は意外と厳しい。バトミントンの担当顧問である一之瀬先生（担当教科：2年英語、独身）が学校の周辺を「STOP！」と言つまで部員を走らせるのだ。別にこれだけなら「普通のトレーンングとなんのかわりもないじゃないか」という声が聞こえそうだが、それだけでは終わらない。担当顧問一之瀬先生自らストップウォッチ片手に正門で待ち構え、クタクタになりながら通り過ぎる部員達に向かって「GO！GO！」と郷ひみも真っ青なネイティブ並みの発音でエールを送つて部員を煽るという、なんともエンターテイメント満載なイベントなのだ。

しかも実施日が先生の気分次第で行われると言つからたまらない。三日間連続で実施という時もあれば、一ヶ月まったく音沙汰なく忘れたころにやつてくる天災的な時もある。素振りの練習中や試合をしている最中にいきなりフラリとやってきて、「正門までDASH！」という号令がかかればその時点からメニコーの開始だ。結果、バトミントン部員は「黒ひげ危機一髪」並みの緊張を毎日強いられなければならないのである。

小学生の時見かけた、学校の周囲をヒィヒィ言いながら走られていた人たちは、中学のバトミントン部のお姉さんやお兄さんということがこの時判明した。

痩せるのにはちょうどいいが、エールを送られながら真っ赤な顔をした不細工のポツチヤリが、ボテボテ走る姿を世間様に見せるほど私はボランティア精神に富んでいない。近所で「荒井さんとこれらの娘さんがゼーゼー言いながら走つていたわよ」なんて噂されるのは真つ平御免だ。

私はバトミントンを本格的にやつたことがないし、別に差別をするわけではないが……サッカー部や野球部などの青春一直線という感じの部活が、このメニューをこなすのは絵的にも内容的にも納得ができる。しかし線も細くていかにも温和で優しそうなイメージのバトミントン部員たちが、何故息も切れ切れになるまで走らねばな

らぬのかが疑問だつた。

「たかが羽、されど羽……なのかな？」

その姿を見て、いつ何といふか、切ないものがこみ上げたのは私だけではないだろう。

* * *

（さて困った、どの部活に入ろうか。）

真剣に悩んでいたら、和子ちゃんと幸子女史がバレー部に誘つてくれた。

「どうせなら小学校の時にやってない競技がいいじゃん？ テニスも考えたんだけど、せっかく背が高いからさ」

小学校の時やつていらない競技！

ここでも私のコンプレックスを乗り越える為のキーワードを思い出し、二つ返事で和子ちゃん達と同じ部活に参加した。

そうなのだ、全員同じスタート地点に並べる競技。これこそが私が中学に求めていたもの！

デカイ身体も考えによつては役に立つかもしれない、そう自分自身に言い聞かせ意氣揚々と仮入部に参加しそのまま本入部した。実際最初のミーティングの時に先輩たちと顔合わせした時、「今年の新入部員は豊作だ！」と熱烈歓迎を受けた。驚いたことに私ぐらいの背の子が何人か揃つていて、自分の知つてゐる世界の狭さを思い知らされた。バレー部で160～3センチなんてそんなに高くないほうだが、中一でこの背があれば十分だよと3年の先輩は言つてくれた。コンプレックスだった体型を真正面から褒められれば悪い気はない。ますますバレーというのが好きになれそうだった。

けど本当は……入りたい、やつてみたい運動部があつた。

私はバスケ部に入りたかつた。

小学校の特別クラブにもあつた、バスケ部。山野小以外にも近隣の各小学校には学校が主催する特別クラブというものがあつた。

男子はサッカーとバスケ、女子はバスケのみ。

そのクラブに入る子達は大概運動神経がよく、クラスの中心にいるような子達だった。またそういう子しか入れないという暗黙な了解も漂っていた。私のような地味で運動神経が鈍い子は入部できる隙間もなかつた。だから……中学に入つたら、もしかしたらイケルかもしけないと僅かな希望を抱えていたのだが。

仮入部の初日にバスケ部のコートに集まつた新入生の顔ぶれを見た途端、そんな希望は見る間に萎んでしまつた。

成田耀子。
なりた ようこ

いつも私のコンプレックスを刺激する女だつた。そして成田耀子の取り巻き達。陰でコソコソ言つていた女達。同じクラスにならなくて安堵した顔ぶれ。変わろうと思つても、どうしても一步踏み出せない、入れない領域。

(……どうもバスケとは縁がないみたい)

正面向いて勝負できず、結局違う畠で勝負しようと逃げるようにバスケのコートと成田耀子に背を向けた。嫌なやつがいるし、どんくさいところを見せなくてよかつたじやないかと心の中で目一杯フオローしながら

結果論からいくと私の選択は正しかつた。

バレー部は厳しいながらも楽しく過ごせたし、特別上手くはなりはしなかつたが球技の苦手意識は見事に消えた。人間やればできるということを身をもつて証明したからだろう。1年の終わり頃には大胆にも「これなら逃げずにバスケ部にでも入れば良かつた」と思つたが、入学しての新1年生当時では一年後の自分がわかる筈も

ない。

それに、「バレー部に入った私、ナイス！」と自分を褒めてやりたいくらい、これから迎える3年間の学校生活には部活が絡んだ様々な珍（？）事件が待ち構えているのだつた。

勉強ノススメ、部活ノススメ（後書き）

何度も何度も改稿しています、毎回微妙に変わっていてすみません！
：ていうか、よく読んで掲載しろよ！といつお怒りの言葉は勘弁願
います！（＾＾；）
さてもう一人の重要人物、「成田耀子」登場です。彼女もこの先「
美千子」に絡んで度々登場します、今後ともよろしくお願ひします
！

恋せよ、女子中学生（おとめ）！～運命へのハーフバウンド～

恋。それは、青春の象徴であり、胸をキュンとさせ切ない感情の塊。

恋。それは、暖かい日差しがふりそそぐ陽だまりの中を陽気に踊り歌う妖精の調べ。

恋。それは、突然やつてくる風のようにすべてを奪いつくす疾風のよみな……

「……あつー／＼ちちゃんー！」

バツコーン！――！

「×÷干つ！――！」

……思考が止まり星が飛んだ。つーか、目が飛び出た。

あまりにもマヌケな衝撃音、いつたい何が起こったといつか。（う、うおおおううつ！――）

下半身を襲つたあまりの激痛に前屈みになってしまった。

一瞬訳がわからぬ私にも、目の前に転がっている憎いボールで容易に想像できてしまう。先輩が打つた力強いスパイクが見事に決まつた！……まではよかつたが。信じられないことに、ボールがバウンドしたその勢いのまま私の股間をめがけて鋭く入つたのだ。男性「は」股間を打つと死ぬほど痛いというが、ウソだ。男性だけではなく女性「も」十分すぎるほど痛いではないか――！

「ミツちゃん！ 大丈夫？」

「荒井さん！ 平氣？！」

「一トのライン沿いに立っていた一年生や「一ト内の先輩達が慌てて近寄ってきた。しかし……緊迫した雰囲気とはおよそかけ離れた微妙な空氣。

「クスクスクス、ククク……」

殆ど^{いた}のバレー部員は^{いた}労わるよつた声を掛けながらも、今起^{いた}った事件というか……あり得ない珍事に笑いを噛み殺していることは、私にも（理解したくないが）理解できた。とりあえず激痛を堪^{いた}えながら、「だ、大丈夫です……」と弱弱しい声を出す。

今は笑われていることより、たとえ痛みが厳しくとも麗しき12歳の乙女が、股間に手を当てられないとのせうがよつぽど辛い。

「やつだあ、ミツヒヤん！ 本当に白いよねえ…」

隣に立つていた和子ちゃんは素直にガハハハと豪快に笑っている。笑いをガマンされているよりも、いつそ和子ちゃんのように笑われたほうが爽快つてもんである。

女で良かつた、男ならこれがホントの『珍（チ）』事件！ ……なうんてダジャレなど言えるわけもなく。私も「へへへ、ちょっと考え事を……」とわざとおどけて何事もなかつたように無理して立ち上がった。膝の砂を払い股間の辺りを見ると、ブルマにボールの跡がクッキリと泥の素材でプリントイングされている。（……マヌケだ、マヌケ過ぎる……）

たまたま、梅雨の貴重な晴れ間に行われた野外での練習。

たまたま、若干泥まみれのボールが股間に直撃。

たまたま、部活終了まで何度も落ち切れなかつた、ご機嫌なボール模様のプリティングブルマで立たなければならぬ屈辱。

情けなさを通り越して、逆に笑えてくる。

それもこれも、神聖な「ホール」の前で先輩のアタックに集中せず、
邪な考えをしている自分が悪いといえれば悪いが。

（そんなことより……）

女バレの部員達に笑われたことよりも、他の部活の連中が見てたらマズイと辺りを見回してしまった。

左隣の男バレ（男子バレー部）確認、特に異常なし。

右隣のテニス部確認、これまた異常なし。

陸上のトラックを挟んで後ろのサッカー部……嫌な予感がしたが、確認しないことには落ち着かない。

恐る恐る視線を向けると、一年が珍しくショート練習をしていた。ゴールポストの網越しに、次々とショートを打込むためにこちらに走つてくる姿が見える。すでにシユートを打ち終わつたであらう、ある男子と田が合つた。「しまったあ！！」と思つた時には、時既に遅し。その男はニヤリと笑い、同じ1年部員の何人かにヒソヒソとこちらを見ながらジェスチャーでボールの形を作り、自分の股間に当てる振りをして顔を顰め、次の瞬間仲間と共に大爆笑していた。もうおわかりであろう。ジェスチャーしてた奴はチビで五分刈り、色白たれ目の右目じりに黒子男。

（……最悪だ。本当、最悪すぎる……）

よりによつて、女バレ（女子バレー部）の「ホール」の真後ろにあるサッカーの「ホール」ポスト。

よりによつて、このタイミングで滅多に行われない1年のショート練習。

よりによつて、股間に当たつた瞬間をバツチリ見ていた超ラッキーマンが、サッカー部所属のチビ猿こと「尾島」。

ガツクリと頑垂れ、「見なかつたことにしよう」と自分に言い聞かせながらサッカー部から視線を逸らした。明日チビ猿から何か言

われようと完全無視だ。

それよりも。

サッカーのコートを隔てて、さらに向こうにある誰もいないバスケットのコートをチラッと見て安堵した。今日のバスケット部の練習が、野外のコートではなく体育館であつたことを心から神に感謝した。

尾島はこの際どうでもよい。

女バス（女子バスケット）の成田耀子（なりたようこ）に見られる方がもつと最悪だ。
ましてや男バス（男子バスケット）の部員である田宮俊平（たみやしゅんぺい）に見られたら
日には、この町から永遠に去らなければならないだろう……ヒュルルル

* * * * *

『田宮俊平（たみやしゅんぺい）、1年9組、バスケット部所属、下山野小出身、身長：163cm、体重：50キロ、血液型：A、好きなもの：バスケット・唐揚げ・アイス・ゲーム・週刊少年ジャンプ、嫌いなもの：アイス以外の甘いもの・にんじん・しいたけ、家族構成：両親・妹・弟、6年生の時バレンタインのチョコは5個……らしい』

以上、これが私が知りうる「田宮俊平」情報の全部だ。

恋はある日突然やってくる。私の恋は「親睦遠足会」と共にやってきた。

* * *

中間試験のある放課後、私は片手にノートと筆記用具を持ちながら憂鬱な気持ちで廊下を歩いていた。

『1年5組』

後ろの扉から目的の教室の中を覗き込むと、何人かの生徒が座っていた。どの教室も同じ形なのに、自分の教室じゃないというだけ

で違和感が漂う。

軽く中を見渡し、本来居なければならないチビで五分刈りの男が不在とわかると「ヤツパリ」という舌打ちしたい気持ちと、「所詮私は代理だし、ヤツと一人よりも一人の方が楽だし」という安心感が複雑に絡まつた。

これからこの教室で何が始まるのかというと、各クラス2名ずつ「親睦遠足会」実行委員が集まっておおまかな予定や決まりごとを確認し、各担任の先生やクラスに報告する為のミーティングが行われるのだ。

この「親睦遠足会」は1年生が最初に体験する大きなイベントである。

「イカしたマシンをチャーター、H A T ! ハイウェイ飛ばして、
ビーチでご機嫌、バカンスやっちゃえYO、Yeah ! !

……なんてことはない。「クラス分の観光バスを貸し切って、隣県の海辺で弁当食つて帰る」というただの遠足にすぎない。

大した行事でもないのに実行委員がわざわざ集まって会議するほどの事とは思えない。「先生たちが適当に決めればいいじゃん」と思つ私は、最早実行委員向きではないだろう。

(本当ツイテない……)

何故実行委員向きではない私が、このような事態になつたか聞いてほしい。

実行委員を選出するためのホームルーム。我がクラスは話し合いや拳手……では決まりず、やや気が短く面倒くさがりの担任・梨本リポーターの案により「クジ引き」で決めることにした。生徒も声を揃えて「異議なし」。

『よし、手つ取り早く現在座っている隣同士でペアになつてもら

うぞ！ 文句はナシだ！ そのペアでジャンケンして勝つた運の良い奴は、前に来てこのトランプを引けえい！』

リポーターは「実行委員決めるなんて面倒だなあ、オイ」という、同じ匂いがする面倒くさがりの生徒ばかりと予想していたのだろう。準備万端よろしくケースに入ったトランプを取り出し教壇に広げた。（トランプで決めていいのだろうか？）

教頭や教育委員会が見ていたら甚だマズインじゃないかなと思いつつ、私は隣同士のジャンケンでアッサリと負けてしまい、運命をグリコ……いや、江崎君に委ねた。

クラスの半分の生徒が教壇に立つていてるリポーターの元に集まり次々とトランプを引いていく。ざわつく生徒の中、「ほら、しやべるな！ 引いたら大人しく席に戻れ！」という先生の声が響いた。

全員席に着席し、期待と不安を抱えながら隣同士トランプを確認する。江崎君が引いたトランプは『スペードのエース』だった。周囲を確認すると、ハートかスペードのカードを見てザワザワと囁き合っている。「いつたいこれから何が始まるのか？」「このくじ引きに何の意味があるのか？」と生徒達の頭に疑問符が浮かび上がる間に、リポーターは残りのトランプをシャッフルし、一枚引いて捲くつた。

『あー、ダイヤのエースか。じゃあ、赤の1だな。ハートのエースを持つてるペア。委員決定。拍手♪』

『ええええっつー！…！…』

先生からアッサリ委員決定の宣告が降りると、真後ろの席からペアで悲鳴が上がった。

なんとアタリの「ハートのエース」を引いたのは「尾島&宇井ペア」であり、ものの数分で委員が決まってしまったのだ。

エースと聞いて一瞬ヒヤリとしたが、隣の江崎君と顔を見合させてよかつたねと一安心した。

しかしクラス全員満場一致で思つただろう。このペアで大丈夫だらうか、と。

文句を言い合つ実行委員の声をかき消すように、生徒達から祝福の拍手が1年8組のクラスに響き渡った。

恋せよ、女子中学生（おとる）！～運命へのハーフバウンド～（後書き）

「田畠君」名前だけ登場です！

美千子今回は災難でしたね。まだまだ試練は続きます、ほんの小手調べです。

バレーボールが股間に当たるという事件、実は菩提樹の実体験であります。

（小説の内容は実体験ではないですよ…）
信じられないようですが、事実です。

「何故砂のグラウンドのような地面の上を跳ね返ったボールにこんなに殺傷威力があつたのか？」
体育館ならわかるんですけどね…今だに謎です。（笑）

恋せよ、女中学生（おとめ）！～恋はある日突然～

相性が良くとも悪くとも関係ない。決定事項は曲げられず、実行委員は「尾島＆宇井ペア」に決まった。

『ドテチソとなんて、最悪だ』

『それはこっちの台詞だつづーの！』

『委員なんてメンドくせえ、お前適当にやれよ』

『クジを引いたアンタが無責任こと盡つたな…』

『ひつわあ、そのドカイ身体をいかして、カリッヒヤツヒヤツださいよ…』

『身体は関係ないでしょー！』

……言い合いは永遠に続いたが、決定は決定だ。

そう、決まった筈だった。

しかし和子ちゃんではなく、何故か私がこの委員のミーティングに来ている。

（てか、なんで私なの？！）

2話にまたがり、ここまで引っ張った割には答えは意外とアッサリ風味。今朝のホームルームで和子ちゃんが珍しく風邪で休みと聞き、終了後先生に呼び止められた。嫌な予感100%。

『すまんなあ、荒井。実行委員さ、風邪で休んでいる宇井の代わりに出てくれるか？お前友達だろ？相方の尾島はあんな感じだからなあ～心配でよ。』

『……え？でも、そんな委員、私には……』

押す、リポーター。

ホント、無理ですから！……と呟む美千子。

『ま、そりゃうなよ。あくまでも代理だから。一昨日の英語の課題、尾島と宇井にお前の答え[写]させたら？ そのペナルティとしてか。』

『ええつ？！』

威嚇射撃を放つ、リポーター。

「つわあ～なんで？ 即効バレよつてる……危つし美千子！」

『荒井は頼られてるんだよ、英語得意だし人徳つてやつだからしうがねえよな～！ んな訳で、とりあえず頼むよ、な？』

『……』

トドメを刺す、リポーター。

いや、英語得意はまったく関係ないっス、先生！ ……もはや何ともならない美千子

予感的中100%にうろたえ、なんのアクションを起こす間もなく先生は去っていく。ものの見事に押し切られる形でサクッと委員代理を引き受けさせられた。

（それにも……なんで2人に課題見せたのわかつたんだりう？
？）

確かに一昨日、慌てた様子の和子ちゃんが朝「英語の課題みせて～！」と泣きついてきた。もちろん快く見せていたら、どぞくさに紛れて隣の尾島も書き写していたのだ。

今思えばあの先生のセリフはハツタリだつたのだろう。大体中の、まだ2カ月もたつてない英語の内容、全員の答えがバラバラになるような訳など宿題に出るわけがない。何人かの生徒がまったく同じ訳でもおかしくないのだ。「ハメられた！！」と思つた時は、もう遅かった。

どうにもならないので教室に入った。何人かの実行委員が前の席に座っている。

他のクラスは男女ペアで座っているのに、何が悲しくて代理が一人で座らなければならぬのか。どんよりした気持ちで廊下側の席に座つたら、ガラリと前の扉が開いた。

「あれ、啓介^{けいすけ}じゃん、なに？ あんたも委員なの？」

自分の前の席に座つている子が扉を開けた生徒に声をかけた。

入つて来た生徒は、「既にジャージ姿で部活行く気マンマンだよ、この人」オーラのどつかのチビ猿だった。「あ」とマヌケな声を出した私に向かつて尾島はジロリとこちらを睨みながら教室に入り、乱暴に私の隣の席のイスを引いてドカリと座つた。別に悪いことしている訳ではないが、ビクッと身体を震わせてしまう。

「うるつせえな。明日香^{あすか}は黙つてろよ」

(え？ 明日香？)

尾島が大人しく委員のミーティングに来たことも驚きだが、まさか尾島が下の名前で呼び合つ異性の人間関係を持ち、そんな羨ましい……じゃない、本の中でしか見れない男女関係が実在することにビックリした。

(ほほう、これは……？)

意外な関係に怖いもの見たさか、好奇心がムクリと湧きあがつてくる。尾島をチラ見し、続いて前に座つている女生徒に視線を向けた。

明日香と呼ばれた女生徒は嬉しそうな顔をしながらチビ猿を振り返つている。

「それよりさあ、なーんでバスケ部じゃなくてサッカー部？ あん

た絶対バスケ入ると思つたのにさ、
また一緒にやれると思ったのに。

彼女はポツテリとした形のいい唇を尖らせながら大抵の男は思いつきり勘違いしそうな言葉を言い、尾島が座っている席の机をトントンと叩いた。

「いいから、前向けよ！ 僕が何処の部活に入ろうと勝手だろ？ 俺様は運動神經がいいから特にバスケに拘らなくていいんだよ！」

「やあだ、怒ることないでしょ！ フフ、ま～だ氣にしてるんだ？」
「まったく、しょうがないわねえ。

明日香という人はクスクスと余裕の笑みで、「だまれ」と言う険しい表情の尾島を適当に流している。尾島はますます面白くないという顔をした。その様はクラスで天下を取っているガキ大将の「チビ猿」ではない。

(あらあら、あのチビ猿が軽くあしらわれているよ。……そんなことより、「気にしている」って、何を気にしちゃってるんですか?)非常に「気にしている」内容を聞きたいが、残念ながら私じゃ役不足だ。ああ、和子ちゃんだったら確實に聞いてるだろうに！！

それにしてもこの二人の間に漂う親密さ。この明日香と言う人は同じ大野小なのだろう、さらに「あれえ～？」もしかして、ムフフ……な関係だつたりするう？！」と思うと……自然と頬が緩んできた。心の中で思いつきりヒヒヒと笑いながら、明日和子ちゃんに報告するべきことだがミーティングの結果以外に一つ増えたことにほくそ笑む。

「もつたいないよな、あんなに上手いのにさ。今からでも遅くねえよ、バスケに入れば？」

明日香さんの隣の席にいた男子生徒が振り向いた。

(……え?)

柔らかそうな短髪に日に焼けた肌、形のいい唇からこぼれる歯は白く、歯並びもバツチリきれい。何よりも優しそうな眼もとで目尻に皺をよせながら微笑んで……。

ズキューン!!!!

ヒットマンに狙われた音ではない。いや、ある意味ヤラレた音ではある。

この世にキューピッドが本当にいるとしたら、まさにこの瞬間その矢で打ち抜かれたと断言できる。理想の王子を思い描けと言われたら、今日の前にいる彼を描くだらう。漫画なら確實に薔薇の花とキラキラのスクリーントーンを背負っていること間違いなしだ。

尾島と明日香の存在は完全に消え去り、彼と私しかいな感覺に陥つた。私の前に、いや、正確には斜め十時の方向に運命の人がつ!

『出会つた瞬間に、君が運命の人とわかつたんだよ』

そんなありきたりな台詞が載つている恋愛小説を読みながら「そんなのナイナイ!」と突つ込んでました、神様ゴメンナサイ。

ああ、私にはこの人しかいない!と思つていた「リバー・フニックス」も、小学校の時憧れだつた「佐藤伸」も潮が引くようにな過去の男になつていく。

動悸が速くなり、顔が火照るのを感じ、身体が震え、視線が泳いでしまつた。本当は飽くことなく顔を眺めたいのに、あまりに眩しく後光が差しているようで目を合わせられない。『そんなあなたにフォーリンラヴ!』な決め台詞とポージングをしている状態の私

を、一気に青ざめさせ現実に戻したのはチビ猿の一言だった。

「はあ？ お前だれ？」

オオオイイツツ！

どこの野生猿は恐れ多くも運命の王子に信じられないほど失礼な口をきいた。

（もう一度ペキン原人から進化し直してこいーー）
心中でチビ猿の頭をスリッパで叩いていたが、その熱意と怨念が天に通じたのか、明日香さんがガツンとチビ猿の五分刈り頭をチップした。

「ちょっと、あんたねー！ 小学校の時に試合で何度か会ったことあるでしょ？ ほら、下山野小の田宮くん！ センターのさー！」

明日香さんは呆れた声で抗議し、隣の王子に「ごめんな、こいつ超口悪いし？」と謝つている。

「いいよべつに。けど覚えてなかつたとは残念だな。俺は尾島の事印象的だつたのにさ。あんなに威勢がいい奴初めてつだつたし、シート率も良かつたし？」

やっぱもつたいないよ。

王子は苦笑しながら囁つと、隣の明日香さんも「そりよねーもつと言つてやつてよーー」と腕を組んで頷いていた。

「あ？ ……ああ～わりい。覚え、ねえ」

隣のチビ猿は頭を搔きながら面倒そうな声を出すと、明日香さんに再び「本当、失礼なヤツだな」と言われた。

不貞腐れたのか照れくさいのか。尾島は両手をジャージのポケットに突っ込み、身体と首をを縮こませ、だらしなく椅子によりかかった。

「……」

わりと整った尾島の横顔を眺める。

（……ふ～ん、尾島もバスケ部だつたのか。どうりで、ね）

どうも苦手だなあと感じた訳がなんとなくわかつた。全国のバスケ部の皆さまには申し訳ないが、私と合わない人は何故かバスケ部が多い。この会話の流れからいへと、残念ながら「田富君」と呼ばれた王子はバスケ部なのだろう。しかし彼からは嫌な感じは受けない。是非自分と気の合ひ穏やかな人であつてほしいと願わずにはいられなかつた。

「それよりも尾島が委員のミーティングに素直に参加するなんて、めずらしいよね。アンタこいつのすぐサボるくせにさ?」

「う、うるせえな! ……さつき『リポーター』に捕まつて言われたんだよ、せつかく部活に行こうとしていたのにさー、それに、」

こいつ代理だし、頼んないし。

（ナつ、ナンですとおつづ?!)

野生猿のくせに器用に私を顎で指し、しかも不機嫌な声で「頼りない」とは聞き捨てならない。

バカ殿様が怒つて刀を取り上げる時のバックミロージックと共に力アツと血が上り、「テメエ、いい加減にしないと叩き切るぞ!」

という勢いの半分以下の抗議をしようと思つたら、再び教室の扉が

開いた。

やつてきたのは実行委員であるう生徒4人。

「なんだよ、尾島も実行委員かよー！！」

声もデカけりや、身体もデカイ。そんな男がズカズカと入つてき
てチビ猿の首にヘッドロックを掛けしていく。

「やだあ！ 後藤も実行委員なんだ。」

明日香さんは後藤と呼んだ団体の大きい男をバシンと叩いた。

「『後藤も』とはなんだよ！ それよりも小関と尾島、また、一
緒かよ！ 仲よろしいですねえ？！」

ヒヒヒと笑いながらからかう後藤という男に対し、チビ猿は「つ
ざけんな！」と顔を赤くして首にまわされた太い腕を解いている。
どうやら『小関』というのは明日香さんの名字のようだ。後藤は田
宮君にも「よつー」と話しかけていた。すっかりチビ猿の周りは賑
やかになり、抗議するタイミングを逃してしまった。いや、そんな
ことどうでもよい。

問題は後藤と言つ人と一緒に入つて来た他の3人。

一人は同じ女バレの「原口美恵」。

実はこの女も苦手だった。私に対して小馬鹿にした態度をとる、
被害妄想かもしれないが。

いくつになつても苦手な奴というのは、不思議なことに態度や仕

草で臭う。お互に言葉を発しなくて、なんとなく分かつてしまつのだ。

「尾島も小関も久しぶりー！」

原口美恵は私をアツサリと無視しながら、隣の尾島と明日香さんに嬉しそうに挨拶していた。チビ猿は素つ気なく「おう」と返し、明日香さんは「ありやー大野小元バスケ部揃つたねえ！」と笑顔で返している。

なるほど。

(……この原口美恵もバスケ部だつたのか)
同じく苦手意識を抱いたのも頷ける。
そして、もう一組。

「田畠も小関も委員なんだ？ やつた！ バスケ部率多いね～」

氣のせいではない。王子にだけ思いつきり可愛らしい笑顔で微笑んだのは、なんと「成田耀子」だった。

(原口美恵に成田耀子……最つつ悪やー)

当然のごとく、この女もしっかりと私をスルーした。まあ、小学校の時と変わりない。例え声を掛けられても挨拶もしたくないしこっちからお断りだけど。

でも。

最後の一人は違つた。

「8組の委員は尾島かよ！ それに荒井も委員？ 元6年4組率も多いな」

そう笑つて声を掛けてくれたのは、数分前過去の男になつた「佐藤伸」とうしん、「その人だつた。

恋せよ、女中学生（おとる）！～恋はある日突然～（後書き）

登場人物が多くなつてきました。やつと「田畠和」登場です。
小関明日香、原口美恵、成田耀子、佐藤伸、後藤…共々、よひしへ
お願い致します。

恋せよ、女子中学生（おとめ）！～揃つた顔ぶれ～

「8組の委員は尾島かよ！ それに荒井も委員？ 元6年4組率も多いな」

黒いシンシンヘアーの佐藤君は笑みを浮かべながら、切れ長のキリッとした目をさらに細くしてこちらを見ていた。私はみんなの注目を受け、顔を赤くしながら「う、うん」と引き攣り笑いでぎこちなく返す。

自分にとつて特別な人、しかも田宮＆佐藤というダブルの視線を浴びて照れ臭さと嬉しさが混じったなんとも言い難い気持ちだった。一言で表すと「もう、まいっちゃんぐ！」、そんな懐かしい名セリフがピッタリだ。

久しぶりに会う、佐藤伸君。

彼は仲良く並んで「こ登場した成田耀子なりたようこ」と共に小学校5、6年と同じクラスだった。勉強は普通だったが、「顔良し・性格良し・スポーツ良し」という3拍子揃つた持ち主で、いつもクラスを引っ張つていく明るい男の子だった。

しかもそれを鼻にかけることなく、始終面白いこと言いつてはおどけてばかりの実にフランクな人柄。

彼が得意とするモノマネはアイドル・お笑い芸人から担任の先生や校長先生までと幅広く、そうかと思えばクラスの男子を集めて「お楽しみ会」の度に当時「風見しんご」が踊つて流行つていた「ブレイクダンス」を練習して披露。

(現在では「ブレイクダンス」と言つと、ナイナイの岡村やガレッジセーラスのゴリが踊つている姿を浮かべる人が多いと思うが、私達の世代はなんと言つても「風見しんご」である)

芸人真っ青の多才ぶりであった。

小学校の時に「頬良し」はもちろんだが、「スポーツ万能＆面白い」というのは間違いなく「頭がよい」よりも確実にモテる要素であり、最高のステータスである。しかも差別なく皆に優しいとすれば、「天上天我唯我独尊」という言葉以外になにが当てはまるとうのだろう？

彼が所属していた特別クラブのサッカーが試合をすると5割増しで女子のギャラリーが増えた。6年4組ではもちろん、学年で1、2位を争うモテっぷりだったのだ。

そんな彼は当然、私にも優しかった。

偶然にも彼と隣の席になつた時、こんな私にでも熱心に話しかけてくれ笑わせてくれた。私も一緒になつて彼と笑つた。

『なんだ、荒井って普通じやん。結構しやべるんだ？』
『……』

(普通つて……いつたいどういづ噂が飛び交っているんですか)
たかだか「普通の女の子じやん」と認めてもらつただけだが、その言葉は私を満たし、十年近く生きてきた中で幸せな瞬間ベスト3に入つた。

他の人達はさておき、彼だけには迷惑かけないよう頑張つた。席が隣同士の時は一切忘れ物はしなかつたし、宿題も毎週行われた漢字テストも頑張つた。体育で同じ班の時は出せる力を振り絞つた。そうするといつも「荒井、やるじやん！」とお褒めの言葉をいただいた。

でもそれ以上の事は何もしなかつたし出来なかつた。

何故なら成田耀子とその取り巻きの視線が、ポツチャリの身体を貫通させるほど鋭く恐ろしかつたから。

バレンタインのチョコも渡せず、最後にサイン帳を書いてもらいつともできず、もちろん気持ちを打ち明けるなんぞとんでもない。そのまま静かにフェードアウトして卒業。

後悔しないと言えばウソになる、けど今となつてはそれでよかつたと思つ。確かにあれは恋と言えば恋だつたが、どちらかといふと憧れや尊敬、感謝の念に近かつた。まるで絶対服従に近い弟子と師匠のような気持ち、例えば「アニキと呼ばせて下さい……」みたいな感じ。

その証拠に田宮君と出合つた瞬間、佐藤君は過去になつてしまつたのだから。

* * *

揃いすぎたメンバーの顔ぶれを見て、私の気持ちはヤヤビヒロか大分複雑だった。

詳しく心情を説明せよと言われたら迷わず「少しある、『盆と正月ではなく、結婚式と葬式が同時に来た』」と。

方やお釈迦様も真っ青な後光が指す眩しいツートップの田宮&佐藤。もう一方は閻魔も黙るほどの負のプレッシャーをかけてくる悪魔トリオの尾島、成田＆原口。「一度に揃いすぎだろ！ 面倒だからまとめて出したな、オイ！」どどつかの作者に文句を言いたいようなこの展開に、私は心の中で派手な溜息を洩らした。

「……なんだよ。『チュウ』と『カッコ』って一緒のクラスだったのかよ？」

チビ猿は佐藤君と私の方を交互に見てる。

(し、信じられん……！…)

山野小ナンバー1ともいわれるほどモテ男を訳の分からぬ「あだ名」で呼んだ挙句……成田耀子、原口美恵、しかも田宮君や佐藤君の前で「チュウ」と呼びやがった、この類人猿！！

「その『カッコ』ってのさ、やめろよな、尾島」

佐藤くんは「しょうがねえなあ」という顔で苦笑いしながら通路を隔ててチビ猿の横の席に座った。

「それにチュウってなんだよ？ 荒井のことか？」

（スンマセン。佐藤君、ダメ押しで確認しないでもらえますか？）

「そうだよ、『荒井』だから『チュウ』。間違ってねえだろ。俺つて才能があるからさ、ポロッと発揮されちゃうんだよな？」

（チビ猿よ。私のあだ名ぐらいで発揮されるような才能なんぞ、ボロッと犬畜生にでも食わせてしまえ！）

そんな私の心の叫びも空しく、「だからどうした」的な態度の大きい尾島を囲み回りはクスクス笑っている。

「やあだ、『チュウ』だつて！ 上手いこというな、尾島！」

原口美恵は遠慮せずに私をチラリと一瞥して、クククと笑った。

「ほんと。お前、相変わらずだよなー」

デカイ後藤も笑いながら賛同している。

和やかな雰囲気がチビ猿を中心に広がり、和氣あいあいとしたグループが出来上がりつつあった。そのネタの元である私は若干蚊帳の外っぽいが。

「でもさ、『チュウ』はともかく、なんで佐藤くんは『カツコ』なの？」

（「チュウ」はともかくって、アンタ……）

成田耀子は私の事などどうでもいいよと言わんばかりに話題を変

えた。

田富君や佐藤君に微笑みかけるのと同様、キラキラな笑顔をチビ猿に振りまいっている。しかも自分が可愛く見えるだろ？と計算尽くしの角度ピッタリにチョコンと首を傾げながら。

佐藤君を「カツコ」呼ばわりしたチビ猿が人の輪の中心に来る人物と判断したのだろう。一瞬にして見分けるこの力：「こういうところは抜け目のない女なのだ。不本意ながら、何故か6年間も一緒にクラスだった私にはわかる。

（大概の男はこの笑顔にヤラれるんだよね）

半ば呆れて成田耀子を見たが、そんなことはおぐびにも出さない。これ以上ないくらい関係は最悪だし、さらに悪くなるのも恐ろしい。関わり合いになるのはゴメンだ。

尾島は愛想の良い成田耀子に対し鼻の下を伸ばすかと思いつきや、ジロつと見ただけで佐藤君のネームプレートを指した。

「書いてあんただろ？が」

「え？」と成田耀子をはじめ、チビ猿のまわりにいた人が一斉に佐藤君の胸元を見た。

『佐藤（伸）』

ネームプレートにはそう書かれていた。

（やだ……もしかして！）

「ブツー！」

いつもはチビ猿の言つことなんぞ笑わないよう細心の注意を払っていたつもりなのに、不意打ちで笑いのツボを刺激され思わず吹き出しました。

「そこ、荒井ウケすぎ。」

佐藤君は口をとがらせながら、「確かに間違つてないけどさ」と苦笑している。

それと同時に「お前も『チユウ』のくせに笑うんじゃねえ」とチビ猿がいつものニヤついた声で、俯いて笑いを押さえている私の腕をバシッと叩いた。

我が中学校は制服には学年色のネームプレートの着用が義務づけられている。しかしそんなのを守るのは1年だけで、2年以上になると検査の時以外全員外してしまったが。ほとんどの人は「名字のみ」なのだが、数人例外がいる。その例外に当たるのが、一般に「多い名字」と言われる人達だ。

例えば。

「石井」「石川」「加藤」「川口」「斎藤」「高橋」「田中」「中村」「村田」…などがそれに当たるだろう。

そういう名字に当てはまる人は、稀に同じクラスの中に自分と同じ名字の人があることがある、それを区別するために名字の後に下の名前の頭文字を所謂「（）…カッコ」でくくり小さくネームプレートに表記されるのだ。

先生方も同じ名字である一人を区別するために、大体下の名前で呼ぶ。

これが男女の違いなら「石井、男の方!」とか「高橋、女の方!」となるのだが、これが同性の場合にはさらに次のようないふ。
「加藤！」（カツコ正治ショウジ）のほう!」とか「中村！」（カツコ明美アキミ）のほう!」
…という具合だ。

佐藤君はまさにその例であり、サッカー部でそう呼ばれていたのである。よつするに尾島はさらに略して「カッコ」と呼んだのだった。

「そつか！ なるほどねえ～！」

いち早く気付いた明日香さんが「キャハハ」と屈託なく笑い、まだハテナ印が浮かんでいる他の人に丁寧に説明して全員が「あ～そうか！」とさらに笑いが湧いたところで和氣あいあいの空気は終了した。

教室に実行委員担当の先生が到着し、「親睦遠足会」のミーティングが始まったからだ。

ミーティングはそんな難しいものではなかつた。「親睦遠足会」の全体的な流れ、遠足中の注意事項、期日までに各クラスで決めてほしいこと、また追加したい希望を各クラスでまとめて報告すること、持ち物や遠足中に出される課題などの説明を受けただけだ。

（ますます集まる必要がなかつたんじや……）

そうは思いながらも大人しく説明の捕捉事項を配られたプリントに書き込んだ。それは明日キッチリ和子ちゃんに引き継ぎをする為であつて、決して隣のチビ猿から「ちゃんと書きこめよ？」と偉そうに命令されたからではない。

ミーティングが終わつた途端に尾島は、「チュウ！ クレグレモドテチンに引き継ぎ頼むぜ！」とテカイ態度と声で言い捨て、部活に飛び出していく。

私は恥ずかしさの余り、こっちに注目している実行委員達に背を向けそそくさと教室を後にした。

田富君と別れるのはチョッピリ名残惜しかつたが仕方がない。とりあえず顔は知つてもらつたし、彼がなんと隣のクラスの1年9組でバスケ部所属の下山野小出身ということも分かつた。本来の目的とはだいぶズレているが、十分実りあるミーティングだつたと思えば、「代理を受けたのも悪くなかったかも」と心を弾ませている自分がいる。

贅沢を言えば、最後のチビ猿の一言どテカイ態度さえ無ければもつとよかつたのだが。

* * *

廊下を歩きながら、チラチラと「実行委員」のプリントを見直して漏れがないか確認していたら、階段を下りてきた担任の梨本リボーターと偶然出くわした。

「お、グッドタイミング！ 実行委員、どうだつた？」

「あ、さ、先程終わりました」

「すまんな～荒井。そういうえばアイツちゃんと行つたか？」

「え？」

「尾島だよ」

「あ、はい。来ました」

私の答えに先生はホッとした顔になった。

「そつか！ や、尾島に一声掛けようと思つたけど、見つかんなくてなあ。そのまま電話で呼び出されちまつて。なんだ、万事OKだな！ よかつた、よかつた！」

御苦労さん！ と先生は私の肩をポンポンと叩くと職員室の方に向かうのか、階段を下りて行つてしまつた。

「……」

先生の背中を見ながら思い出すのは、教室に来た時の尾島の不貞腐れた顔。頭の中をグルグル回る声は、明日香さんの問いかけと面倒そうに返した尾島の台詞。

『それよりも尾島が委員のミーティングに素直に参加するなんて、めずらしいよね。アンタこいつのすぐサボるくせにさ?』

『う、うるせえな!……やつさ『リポーター』に捕まつて言われたんだよ、せつかく部活に行こうとしていたのにさー。それに、こいつ代理だし、頼んないし』

おそらく深い意味はないだろう。本当に頼りないから心配して来たのかもしれない。それこそ必要事項が洩れていたらこの場合責任を負うのは尾島自身だ。

それでも。

少しだけ、あくまでもほんの少しだけだが、心が温かくなつた。
（……ペキン原人からクロマニヨン人くらいには進化させてもいつか）

運命の相手を見つけ、意外な男から思つてもない優しさに触れた私は、スキップしたい衝動を抑えつつカバンを取りに教室へ戻つた。

じつして私達は出会つた。

波乱に満ちた私の中学生活は、このミーティングから本格的に回り出した。

彼らとの出会いは偶然なのか、それとも会つべくして出会つた縁だつたのか……それは今でもわからない。

それこそ神のみぞ知るというやつだらう。

それでも。

もし、もし……この日一日だけ、やり直しができるチャンスを』

えられたとしたら。

この日が今後の中学生活、いや、人生を分かつ分岐点だと知つていたら。

私はどういう選択をするだろう。

そのままミーティングに出ただろうか。

それとも この日は学校を休んだだろうか。

GO・GO・親睦遠足会～前編～（前書き）

食事中の人には不適切な表現があります、要注意！
「大丈ブイ！」という寛大な方のみどうぞ。

GO・GO・親睦遠足会～前編～

「当ても、おはよハリゼーます！」

バスガイドさんがお辞儀をしながら元気よく挨拶すると、1年8組の生徒は騒ぎ声を上げながら「おはよハリゼーます」という気の抜けた挨拶をバスの中に響き渡らせた。

「……当、アズマ観光バスを」利用頂きありがとうございます。今回ガイドをさせてもらいます、私は坂本、運転手は岸田、最後まで安全運転で参ります。どうぞよろしくお願ひ致します」

「ハイ、ハリイー！　バスガイドさんて独身ですか？」

「彼氏いんの？」

「先生なんてどいつ？」

ガイドさんが笑顔で挨拶を終わらせた途端、次々飛び交うお約束な質問。もちろん先陣切った奴は一番前に座っているチビ猿だ。先生の「黙つて座つてろ！」という言葉も、ガイドさんの苦笑いも、浮き立つ生徒達の前には何の効果もない。

今は梅雨に入る前の6月上旬。中間テストが終わって身も心も解放され、空を見上げるとまさに「親睦遠足会」に相応しい快晴日。山野中学校の1年生を乗せた10台のバスはC県に向けて渋滞もなくスムーズに進んでいた。

* * * * *

「遠足実行委員」のミーティングの一日前、和子ちゃんが登校して来たので、会議の内容をキッチリ引き継ぎした。

和子ちゃんは申し訳なさそうに「本当、『メン』を繰り返した。

私としても思いがけない出会いがあったのと、まんざら悪い仕事でもなかつたので、「気にして」と安心させた。……と思いきや、会話を聞き横から口を出す類人猿、約一匹。

『ドテチン休むからな～！ おかげでこいつはほとんどトバツチリだつたぜ。な、チュウ？』

（アンタは何もやつとらんだろうが……）

そういう冷ややかな視線を送る私と「ちよつと、アンタ！ ちゃんと会議出たくせに、なんで引き継ぎするのが代理のミツちゃんなんのよ？！」と凄む和子ちゃん。

『お～怖い、怖い！ 君達、そんな顔していると男が寄りつかないぜ？ いや、違うな。それ以前の問題だな』

ハツハツハ～と尾島の大きい笑い声に和子ちゃんは「もう話すのも億劫だわ」とあからさまに机を離して、私に引き継ぎの続きを促した。私も和子ちゃんに習い、尾島を無視して何事もなかつたかのように淡々と説明を続けた。

その後も、実行委員の仕事でこの一人は揉めに揉めた。

「ケンカするほど仲が良い」と周囲に冷やかされてはいたが、両者曰く「相手がコイツに限つてそれは死んでもあり得ない」とのことだった。

一番問題になつたのは、「バスの席順」を決める方法だった。

仲の良い者同士で座ればいいという和子ちゃんの意見に対抗するよつて、いつもは面倒なことはゴメンという尾島が、「せつかくの親睦遠足会にそれじや意味ネエだらー」と珍しくやる氣マンマンな意見をぶつけてきたのだ。

梨本先生には、尾島の態度は好意的に映つたらし。

リボータ

『せうだよな？ やる氣の出た尾島の意図とおりだ。男女仲良くなればアで座つたらいいじゃないか！ せつかくの親睦会だしなー。』

『『……』』

尾島は「親睦を広める為に仲の良い者同士で座わらない」と言つただけで、「いつそのこと男女ペアで仲良く座つちやおうぜ、ホウツー！」とまで話は飛んでいない。「や、そういうわけではなくてですね……」と一人が否定するのも聞かず先生は、

『そーか、そーか！ そんならまたクジで決めるか？ トランプ貸すぞ？』

……とそのまま話が進んでしまった。

二人のフォロー役として命名された私は彼らの横で静かに溜息を吐いた。

そんな訳で、我がクラスでは本来の目的を果たしていよいよトランプのクジ引きで席が決まった。

最初はクラス全員「えー！！」と複雑な反応だった。それはそうだろう。まだ中学生活始まって間もないというのに、浮かれるイベントでいきなり男女の急接近。「そんなあ～」「やだあ」と文句を言いながらなんとなく嬉しいけど恥ずかしいと思う複雑なお年頃。席順が決まるたびに悲鳴が上がり、思春期の甘酸っぱさが教室に漂う。しかも尾島がここぞとばかりに教壇の上から焦らすように発表し、照れ臭さを更に煽つた。

たかだかバスの席順でこの盛り上がり。その様子はさながら数年後に合コンで流行る「殿様ゲーム」並みだと言えばおわかりいただけよう。

男子は密かにクラス1、いやおそらく学年でも1、2を争うぐら
い守つてあげたいような美少女、「島崎由美しまねざきゆみ」の隣を誰がゲットす

るかで盛り上がりをみせていた。

『か～つ！ アダモちゃんの隣はグリコかよー！』

特等席をもぎ取った勝利者（winner）は、控えめな江崎君。悔しそうに言ったチビ猿も密かに「島崎さん」狙いだつたらしいが、残念なことに彼と和子ちゃんは実行委員仲良く揃つて一番前の座席と決まっていた。

アダモちゃんと呼ばれた島崎さんは「もう、その呼び方やめてよねえ」と可愛く尾島に抗議をしている。これがまた厭味でなくマジな可愛さなもんだから、尾島も「ハ～イ」って答えるよ！ それにおちやんと『ちやん』付けしてたんだろう？ とシャレも交えながら鼻の下を伸ばしていた。

（……他の人と態度が違うぞ、オイ）

私を含め女子全員はそういう視線でチビ猿を一瞥していただろう。何故可愛い島崎さんまであだ名をつけのかと問い合わせたところ、「つるせえな、だから特別に『チヤン付け』だろうが。丁寧だからいいんだよ！」とべもなく吐き捨てられた。

もともと「アダモちゃん」はそれで一つの固有名詞ではないのかと思つたが、あえて訂正はしなかつた。

* * * * *

「道路を進むよどこまでも～」

……と替え歌よろしく、バスは今のといひ問題なく田的町まで走っていた。が、人生思わぬところで落とし穴というものは存在するのである。それはバスが発進して一時間弱の時だった。

「え～テスティス！ マイクのテスト中、マイクのテスト中！ あ～

皆さま、これからお待ちかねの『おやつタイム』に突入したいと思います！ 皆様ふるつて御参加……じゃない、この時間を使ってますます隣同士の親睦を深め、さらにこの中から将来結婚まで続く力ツプリングが誕生することを願つて終わりの挨拶に返させていただきたいと……あ、いらっしゃー ドテチン、マイク取るなー！」

最後の方はマイクで放送されなかつたが、生徒の高揚した気分を盛り上げる「おやつタイム」の号令がチビ猿から発せられると、笑いと共にバスの中は湧いた。みんな「待つてました！」と言わんばかりに、カバンの中からおやつの袋を取り出す音と菓子独特のイイ匂いが辺りに充満する。

「つるせえな、わ～つてるよ！ あ～オホン、え～失礼しました。では改めまして、おやつの時間は今から30分、時間厳守とさせていただきます。ゴミは各自お持ち帰りです、こちらもあわせてお願ひします。ちなみにバナナはおやつに入りませんので持つてきた方は食べれません、ご了承ください。みなさん持つてきてないですね？！ つって言つても、男子全員前にバナナがぶらさがつてい…… キィイイン……！」

和子ちゃんが真っ赤な顔をして再びマイクを取り上げた。弾みにマイクがスピーカーに近づいた為、派手なノイズと共にチビ猿の独断演説は強制終了した。

チビ猿の下ネタに男子は異常な盛り上がりを見せ、女子は顔を赤らめながら「やあねえ？」恥ずかしそうに文句を言つついる。（……実行委員の仕事ノリノリじゃないの……）

私は周囲の湧いた雰囲気から一人冷めた表情で周りから叩かれているチビ猿を眺めた。

大好きなチョコポッキーに視線を落とし、隣の野口君に「いる？」とポッキーを差しだすと「……いらない」と小さい声で言われた。

あれ？ と野口君の顔を良く見ると真っ青である。

（これはもしかして……）

まさに「オレ、バスに酔っちゃつてます」の見本のような状態。もつ一押しすればエチケット袋が絶対必要なのは明らかだった。頬りなさそうに窓によりかかりながら瘦せてひょろ長い身体を縮めている。その姿は心なしかいつもより存在感が薄い。ここで吐かれては堪らないと思い、反射的にカバンから自作のエチケット袋を取り出した。

「あ、あの、野口君！ これ、持つてたほうがいいんじゃない？ 遠慮なく吐いていいから、そのほうが楽になるから。よ、酔い止め飲んできた？」

野口君は前者の問いに黙つて従つて袋を受け取り、後者の問いに首を振つて答えた。

私も小学生低学年頃までバスに乗ると吐いていたので、野口君の辛さは身にしみるほど良く分かった。こういう時「なんとか吐かずに済まそう」とガマンしないで、なるべく早い段階で思いつき吐いたほうが良い。いずれにしても最終的には嘔吐するし、どちらにしてもみんなから「こいつゲロつた」と思われるのだから。

野口君の朦朧とした田つきに「これはマズイ！」と先生が実行委員に一応酔い止めをもらつ為、声を掛けよう立ち上がったその時。野口君はエチケット袋に顔を突っ込んだ。

「おえエエエ～」

遠慮ない派手な音と共に放たれる僅かな異臭。

「せ、先生！ 和子ちゃん！…」

「わあ！ ノグティーがゲロつたぞ～！…」

私が普段の倍の声で前方に声を掛けたのと、周囲の男子が騒ぎ出し、女子が「え〜? !」と顰め顔になつたのが同時だつた。「どうした?」とリポーターとバスガイドさんが慌てて来てくれて、その後に実行委員が続いてくる。

「あちやー! ノグティー、またかよ! まさか、お前酔い止め飲んできてなかつたのか?」

尾島の呆れた問いに野口君は力なく頷きながら、「……たまたま薬が切れてて……一応朝ご飯抜いて来たんだけど……」とアレコレな声で答えた。

尾島は周囲に窓を少し開けると指示し、「コイツ、いつもこんなだから」と真面目にリポーターとバスガイドさんに説明しながら野口君を前の席に移動させようとした。

「おひおひ、お前らは菓子を食つてろよ! もうゲロ吐きたうな奴いねえな? !」

もらいゲロ、すんなよ! -!

尾島のおどけた一声でシーンとしていたバスの中は再び笑いに包まれ、元の賑やかなおやつタイムに戻つた。

その間に野口君はあれよあれよと先生とバスガイドさんに支えられながら前に連れて行かれ、一番前の尾島の席に座らせされると思つたら、バスガイドさんから冷たいおしほりと酔い止めをもらつなど和子ちゃん達の介抱を受けた。

「の野口君、後から聞けば大野小の名物常習犯らしく、6年間バスに乗車する度に期待を裏切らず吐き続けた。毎度毎度「絶対酔い止め飲んでこいよ!」と念を押され、毎回毎回薬を飲んでくるにも

関わらず、だ。さすがに中学に入つたら進言してくれる人は誰も居ないし、本人も油断したのだろう。実際バスに乗り込んだ野口君は遠足の高揚気分も後押しして元気だつたし、私とも普通に会話していた。本人も「もしかしたらこのままイケルかも?」なんて希望を持つたのだろうが、残念なことにそれは一時間弱で見事に散つた。

さらに彼は胃が弱いだけでなく腸も弱い。

常にトイレとお友達で、中1男子のトイレットペーパー使用率の90%が彼で占めていると言つても過言ではなかつた。彼が初めての場所に行く時も最初に確かめるのは、「何処にトイレがあるのか」らしい。噂によれば近所の公共施設、スーパー、最寄りの沿線の全ての駅のトイレの場所を頭にインプットしてるのだという。そんな出先でアクシデントに見舞われない為にも、常に携帯するのはポケットティッシュ。公私共々彼のカバン、身につける服には常にティッシュが常備されている。

「野口はいつもティッシュを持つていてる」、略して「ノグティー」。

数年後爆発的に人気の出る国民的アイドルの「キムタク」よりも、先駆けて省略されたあだ名を持つノグティー。名付け親はどつかの類人猿。

しかも野口君は次の年の春より後の「国民病」とも言われる花粉症を患い、更にティッシュの消費量を増やした。

その数は健康な中学男子生徒が3年間、ナニで使うティッシュの量より多いという伝説を残したのである。

GO・GO・親睦遠足会～前編～（後書き）

お食事中だつた畠さま、不適切なシーンがありましたことお詫び申し上げます。「アダモちゃん」懐かしいです。ドリフも好きですが、「ひょうきん族」も私の世代にとつて外せません。「ペイ！」「いながら暴れていたアダモちゃん、おもしろかつたなあ。個人的には「ひょうきんベストテン」が好きでした、西川のりおの「リアルオバQ」もツボ。

GO-GO-親睦遠足会ー～中編ー

引きずられるよつにして連れて行かれた野口君の心配をしつつ前方を見ると、実行委員と先生が何やら話し合ひをしていた。急に尾島がヒヒヒと笑い、座っていた補助席を立ち上がりて椅子をたたむ。こちらを指してカバンを抱え「あとは頼むぜ、ドテチン！」と片手を上げながら、「こら、勝手に決めんな！」と文句を言つ和子ちゃんを振り切つてドカドカと狭い通路をやつてきた。

「おひおひ、チュウ！　お前窓際に移れや」

「え？」

こきなり私の席のところに止まり手を振つて「席を詰めろ」という仕草をした。

なんで実行委員の君がここに座るんですか？　という顔をしていたのだろう、私の呆けた顔にチビ猿は外国人よろしく「ヤレヤレ」とわざとらしい仕草で首を振つた。

「あのですねえ。俺の席にはノグティーが座つているんですよ？　オマエは皆のために頑張つて実行委員をこなしている俺様に一人寂しく補助席に座れつて言つのですか？　それがクラスメートである荒井美千子さんのご意見ですか？」

冷たい、實に冷たい！

大袈裟な溜息きを吐きながら、「どう思います、この扱い？」と周りに同意を求める声に慌てて席を空けた。

「それでいいんだよ。詫びなんて気にするな、そのポツキ　半分でガマンしてやる」

チビ猿は袋の中から菓子をゴッソリ抜き取り隣に座った。

それからは「お前何気にサボってんじゃねえよ!」と次々文句を言つ周囲の男子から五分刈り頭を撫でられ叩かれるという歓迎を受け、そのお礼として「うるせえな!」と奪い取つたポツキーを武器に叩き返している。あつと言う間に群れ同士ジャレ合う類人猿達、さながら密林のジャングルと化するバスの中。

しかも偶然に通路を隔てて座っているゴールデンペアのグリコ＆アダモちゃんに「これお近づきの印に俺から。食えよ、遠慮なんかするな」と自分も3本いっぺんに食べながら残りの折れたポツキーを押しつけた。「あ、食つていいのはアダモちゃんだけ。グリコは当然ポツキー持つてきてるだろ?自分の会社なんだから」という憎い台詞を付け足すのも忘れなかつた。

* * *

「あ〜気持ちいいね!..」

田の前に広がる海は、太平洋。爽やかな潮風を受けながらノビをするのは山野中・1年8組の乙女達。

やつと「悪臭・騒音・汚染」……という公害極まりない3重の落とし穴から這い上がつた私は、じじぞとばかりに新鮮な空気を思いつきり吸い込んだ。

「まつたく、チビ猿超ムカつくんだけど!..」

砂浜に下りていく間も和子ちゃんはバスの中の一件を思い出してゐるのか、怒りを復活させた。海に向かつて「バカヤロー」と青春の雄叫びではなく尾島への愚痴をこぼしている。それもそのはず、「親睦遠足会」で肝心な親睦を深めるどころか仕事をチビ猿に押し付

けられ、ノグティーのマンツーマンケアで疲れきっているのだから。幸子女史は「本当、災難だつたよねえ」と私と和子ちゃんの方を見ながらフフッと口元に手をやつた。

「もう！ 幸子はいいよなあ。実行委員交替してよ！」

「そ、そうだよ。なんなら、幸子ちゃん、帰り座席交換しない？」

「あ、両方ゴメンだわ。どっちも最悪だし？」

和子ちゃんと私は呑気に笑う幸子女史に文句を言つと、幸子女史は笑いをかみ殺しながら「あ、ポップコーン髪についてるよ」と私の髪を触った。私は悪靈を払うかの如くバサバサと髪を振り払い、慌てて有害物質を落とす。その様子を見ていた幸子女史は笑いを我慢できずとうとう吹き出した。

笑い「とじや済まされないくらい、最悪なバスの旅。

座席を交替してからというものの、隣のチビ猿は前後隣の男子を相手に持参したポップコーンを鼻に詰め、「くらえ！」と言いながら鼻息でポップコーンを飛ばし不評を買つた。そのうちエスカレートして尾島の友人であり偶然にも前の席に座っていた諭訪君と「鼻息でここまでポップコーンが飛ぶか」と前方の席へポップコーンの飛距離を争つたり、終いには嫌がる隣のグリコに無理矢理鼻にポップコーンを詰めさせ、競技に強制参加させるなどムチャクチャなことをしていた。

おかげで隣に座っている私は尾島に対する反撃のポップコーンまみれ。しばらくポップコーンの匂いが鼻について、あたかも自分がポップコーンを鼻に詰めている感覚になりムズムズする始末。……しばらくポップコーンが食べれそうもない。

そんな私の思いとは裏腹にバスの中は大賑わい、クラス1の美女・アダモちゃんも幸子女史も面白がつて飛距離争いを一生懸命応援していた。

この大騒ぎを「納得できない」と思つたのは、落ちたポップコー

ンを片づけなければならないバスガイドさんや実行委員の和子ちゃん、チビ猿VS周囲の男子のポップコーン合戦でトバツチリを被つた私、口クでもない生徒達を持った担任のリポーターだけだらう。

砂浜に下りた生徒達は各クラス毎に集まり、先生と実行委員から連絡事項を受けた。

実行委員のミーティングに参加して初めてわかつたのだが、この「親睦遠足会」は「ただ弁当を食つて帰る」だけのイベントで終わらなかつた。全クラスに「親睦遠足会で学んだ事」という課題が与えられていて、砂浜の動植物の観察やこのイベントでどれくらいクラスの親睦を深めたかという感想などの結果を、学級新聞という形で模造紙にまとめて廊下に張り出し発表しなければならないのだ。

『遠足で親睦を深め、さらにその密度を濃くぢやおうNEET!..』

「親睦遠足会」後のアフターケアも万全と言わんばかりに駄目押しの学級新聞。しかもこの学級新聞の仕上がりで、そのクラスの密度・協力体制・やる気などの特徴が分かつてしまつ。

例えば。

挿絵や切り絵、細かいカメラワークでカラフルに仕上げるクラス。真面目に砂浜の動植物を本で調べて丁寧に説明し、本物の新聞のように見るからに活字の多いクラス。

調べる内容はそっちのけで、個人個人の感想を寄せ書きのように書くクラス。

「あきらかに手抜きだな、オイ」というような写真ばかりのクラス。

……などなど。

どちらにしても新聞作成の完成度は、「実行委員」の腕に全て掛つてゐるのである。

和子ちゃんは相方が『サル目・一応ヒト科・クラスのアホ属』なので、期待もせず完全無視を決めたらしい。「アイツと相談してたら、中学校卒業してしまう」という捨て台詞と共に早々と勝手に係を分担してしまった。面倒なことがキライというチビ猿も「課題」に関しては足を突つ込むことなく、和子ちゃんに押し付け……じゃない、一任した。

押ししが強く、ある意味豪快に人を引っ張っていく力のある和子ちゃんは、問答無用で各分担をクラス全員に発表した。クラスメート達は若干不服があるようだったが、「文句があるやつは、新聞作成の総責任者になつてもらつ」と本当に実行しそうな益荒男ぶりの台詞を吐いたので、クラス全員首を縦に振るしかなかつた。

お楽しみのランチタイムまで「親睦遠足会」の課題の為解散になり、生徒達がそれぞれ「えられた仕事をこなす為に散らばつていつた。我がクラスは海＆岩場は女子が担当し、簡単な海＆砂浜はチビ猿率いる男子の担当だ。

8組の女子達は岩場と岩場の隙間にたまつてている水の中の魚を見て様子を書き出したり写真を撮つたりした。

まだ6月だというのに、すでに気温は初夏並みの暑さ。太陽がジリジリと照りつけていて、生徒達は次々とジャージの上着を脱いで半袖の体操着姿になつていく。

どこもかしこも砂浜には生徒達の浮かれた声が飛び交い、男子など課題そっちのけで裸足になり、海に足を浸してふざけあつていた。女子も負けず劣らず友達同士しゃべつたり、写真を撮り合つていて。我がクラスの女子は真面目なのか全員集中して課題用の記録を書き留めたり写真を撮つたりしていた。

「ひつち、写真はOKだから。もうそろそろ終わりにしてよ。相沢さん、ミツヤん、そっちどう?」

和子ちゃんがカメラをポケットに入れ、散らばっていた8組の女子に声を掛けた。

相沢さんと私はクラスの女子が観察した岩場の様子をノートに書き留めていた。相沢さんは「こっちOK！」と和子ちゃんに合図をし、私も全て書き終わり顔を上げてOKのサインを出すと和子ちゃんは「女子の仕事終了～御苦労さまでした！」と頭を下げた。和子ちゃんの言葉で女子全員「お疲れ様～！」と挨拶をし、解散になった。

女子は2ヶ月の付き合いにも関わらずチームワークはバッチリだったのでも30分もかからず仕事が終わつたが……男子はどうだろう？ 和子ちゃんは非常に心配になつたらしい。元々責任感の強いタイプだし、新聞が岩場ばかり記事になつてもアカンと思つたのか、和子ちゃんはチビ猿に念を押す為に足早に砂浜へ向かつた。

チビ猿達はすぐに見つかった。
何故なら和子ちゃんや私が砂浜にレジャーシートを引いてリュックを置いていた場所に居たからだ。

しかも他のクラスの連中（全部女子）に囲まれ仲良く談笑していた。そうかと思えば江崎君に何やら命令して私達の荷物の写真を撮らせていく。その姿を見てちらりと尾島を囲んでいる生徒達が笑つた。

「……何、アレ？」
「ちょっとあ、なんかヤな感じだよね」
「やっぱ、真面目にやつてないじゃん。尾島」
「宇井、なんか言つた方がよくな〜い？」

8組の女子達は眉根を顰め、ヒソヒソ囁き合つ。そういうしていりつつも和子ちゃんと荷物を置いてある女子達はズンズン尾島の輪に向かつて歩いていった。私も慌てて後に続く。

「ちょっと、尾島！ アンタ、課題の資料集め終わつたんでしょうね？ こんなところで何してんのよ？」

和子ちゃんの一聲で尾島達は談笑をやめて、一いつを振り返つた。尾島の友人である諏訪君を筆頭に8組男子は「うるさいのが来た」という顔をし、他のクラスの女子達は一人を除いて「何このオソナ？」という顔をした。その一人といふのは同じ女バレの原口美恵だつた。

（うわあ……なんでいるの？ 男子につづつを抜かす前に実行委員の仕事してろよ…）

顔を会わせたくないの、一番後ろのポジションからそつと成り行きを見守つた。どうもあのミーティング以来、原口美恵の視線が厳しいのは絶対気のせいではない。

「あ、そつか。宇井も尾島と一緒にクラスだつたつけ？ 大丈夫丈夫、尾島ちゃんとやつてるよ。せつかから写真撮つてるよ。本人は命令だけだけど」

原口美恵は茶目つけたつぶりに尾島をフォローしつつ、チヨツピリけなす。しかし和子ちゃんにとつてそんなフォローは焼け石に水だ。

和子ちゃんは「あ、そう」と原口美恵をソツなく適当に流した。しかし後方から確認しても「原口は引っ込んで、私はこの野生猿にガツンと注意したいのよ！」オーラが立ち昇つているのがわかる。

「せうだよ、じこ田えつけてんだ？ 今スクープを激写中なんだから邪魔すんなよ。題して『これが環境汚染の実態だ！ 砂浜にポイ捨てされたゴミ達』つてえの、どうだ？」

尾島が私達の荷物を差しながら一いやーいやした顔で言つと、原口美

恵をはじめ他のクラスの女子は「ひびーい」と言つて笑いを噛み殺した。諏訪君達は屈託なく笑つている。

ピシッ。

心靈現象のラップ音でもなければ、SMの女王様が振り上げるムチの音でもない。

8組女子周辺の空気が固まり、顔が強張つた。あの和子ちゃんも黙つて拳を握つている、気軽に文句を言える程度の怒りではないのは明らかだ。

雲ひとつない真つ青な快晴に海から吹く潮風は爽快。私達は親睦を深める為に他県の海まで出向いているとゆつに。

今この周囲を取り囲んでいるのは、昼夜の愛憎劇場も真つ青なくらい修羅場が始まりそうな空氣。とてもじゃないが「親睦会」には程遠く「速崩壊」と言つたほつが近い。それに逸早く気付いたツワモノは江崎君だった。

「……お、尾島君。それマズイよ……」
「何言つてんだよ。そう言つグリゴが写真撮つたんじゃねえか?」「ええ? ! いや、だって、尾島君がヤレつて言つから……」

江崎君はこじらを見ないようソロソロとチビ猿に抗議している。「オレなんか悪いことした?」と、このシンンドラ気候な空氣を読んでないのか読めないのか、そんな尾島に対して私は怒りを通り越して厭きぎれてしまった。

(「いつそのこと、原口美恵と共に仲良くなってしまひまみれて環境汚染になつてしまえ）

私は男子は放つて置いて自分達で砂浜の観察をしようとした提案する為和子ちゃんの傍に行こうとした時、柔らかく可愛らしい呑気な声が後ろから聞こえた。

「あれえ？ 宇井ちゃん、どうしたの？」

声を掛けたのはトイレから戻つて来たアダモちゃんだった。

この方もある意味空気を読まない。天然丸出しでこの微妙な空気をザックリ切り込んできた。学年1の美少女出現という「うねり」に、場の空気は微妙に違う方向へ流れを変え始める。

「……島崎、聞いてよ。尾島達、ここにある荷物、ゴミとして環境汚染だつて学級新聞に発表するんだつてや。島崎の荷物も入つているのにねえ？」

怒りで何も言えない和子ちゃんに変わって、尾島達に冷ややかな視線と共にすかさず答えたのは幸子女史だった。

「えー！ それっ、ヒドぉーい」

アダモちゃんは眉根を寄せ可愛く口を尖らせたが、その言動に迫力は無い。本氣で怒つているんだか何だかわからない態度で腕を組んでいる。

しかし男性諸君には思つた以上の効果があつたようだ、その証拠に一斉に鼻の下を伸ばした。

その瞬間野生猿もビックリなほど俊敏に動いた尾島は、私達の荷物の背後にバラバラに落ちていた空き缶を寄せ集めた。

「いや、なんだ、ジョークだつて！ ほら、『この荷物……』の後ろに捨てられてた空き缶』を写真に撮つてたんだよ。な？ グリコ？」

尾島はすばやく立ち上がり、他の男子同様デレッとした顔をしてグリコの肩を抱き寄せ同意を求めた。そのグリコも例に漏れず鼻の

下を伸ばして一生懸命頷いている。

「やだあ、そうだつたんだあ？ それつて紛らわしいんだからあ、もつ～」
「　　「　　「　　「　　」」

アダモちゃんは満面な笑みでポンと尾島の腕を叩いた。

天然で愛らしい素のツツ「ミミ」に男子は「やつぱ、紛らわしかつたか？」とニヤニヤ笑い、尾島は再び江崎君に「グリロ、この環境汚染の写真でバツチリスクープだ！」と空き缶を寄せるよつに砂浜に置いて写真を撮るよう促した。

（オイオイ、そりや完璧に『捏造』だろつよ……）

一方、8組女子はその様を啞然とした気持ちで見つめ、尾島の良すぎる機転とアダモちゃんの態度に鬪争心を完全にもがれた。

この場で一番面白くないのは、原口美恵をはじめとする他のクラスの女子達だろう。突然の美女出現に、尾島をはじめ男子全員の心を一気に持つてかれたのだから。

特に原口美恵はアダモちゃんをギロリと突き刺す視線で見ていた。悲しいかな、その視線は学年1と言われる美女を突き刺す威力はおろか逆に弾かれている、それどころかアダモちゃんとチビ猿の間にも入れない御様子だ。不謹慎にも原口美恵の顔を嫉妬で歪ませたこの事態にヒヒヒと心の中で笑ってしまった私は、密かに8組の女子に頭を下げた。

GO・GO・親睦遠足会！～後編～

「そつちのハンバーグとアスパラ巻き交換しない？」

「わあ、サンドイッチおいしそう！」

「へへへ、紅茶に砂糖入れて凍らせてきたんだあ」

遠足のメインイベントであるランチタイム。レジャーシートを寄せ合って各自の弁当を披露し合つ生徒達。頭上から照りつける日差しの強さは相変わらずだったが、海から吹く柔らかい風は心地よく、砂が吹き飛ぶ心配もない。

数十分前にチビ猿がもたらした嵐は跡形もなく過ぎ去り、すっかり和やかな風景に戻つた。さすがに和子ちゃんも8組の女子達も、お弁当の前では燃え上がつた鬪争心も沈下した……かのように見えたのだが。

食べ終わつた後に残つているお菓子を広げ、女子特有のオシャベリタイムが始まつた途端、和子ちゃんは再びイライラの迷宮へ迷い込む。どうやら怒りの炎が再熱してしまつたらしい。話は部活の先輩の事や先生の事が話題だつた筈なのに、いつのまにかバスの中の出来事にすり替わり、何故か最後には尾島の「空き缶捏造事件」の話題に戻つてしまつたのだった。

「あんの、野生猿！^{バカ} 絶対最後の仕事は奴に全面的に押し付けてやるーー！」

和子ちゃんはたつた今口に入れたばかりの飴を、まるでチビ猿に見立てるよつに思いつきりガリガリ噛み砕きながら、最後の仕事の為に勢いよく立ち上がりがつた。「アハハハ」と引き攣つた笑いをした私と幸子女史は、和子ちゃんが鼻息を荒くさせながら、海でお互いに水を掛けあって青春を謳歌している尾島達の方へドスドスと向か

うのを黙つて見送つた。尾島は既にずぶ濡れになつており、これら最後の仕事があるのも忘れていいようだ。後方で「実行委員、今すぐ集合しろお！」と拡声器で召集を掛けている先生の声が聞こえ、前方には身体の大きい和子ちゃんがチビ猿を引きずつていて、が目に映つた。和子ちゃんの境遇を同情しつつ「やっぱり実行委員、代理程度で済んでよかつたなあ」と心の中で胸を撫でおろした。

＊＊＊

「親睦遠足会」の実行委員である生徒が、担当の先生から何やら説明を受けゴミ袋のようなものを渡された後、各クラスの元に戻つて来た。

生徒全員が各自持参するように言われていたスーパーの「ゴミ袋」、拾つたゴミを入れるようにと実行委員が指示をすると、生徒達は解散になつた。この遠足の締めであるクリーンアップ活動・「砂浜に落ちているゴミを拾う」という奉仕活動が始まつた。数人適当にグループを組んで、砂浜に落ちているゴミを拾つて次々と袋に入れていく。

(この頃はゴミの分別は現在ほど厳しくなく、粗大ゴミ等以外はほとんど一般のゴミとして捨てていた。リサイクルの良さが見直されたのは最近の話である)

この砂浜は関東周辺に住んでいる人が来るにはちょうどいい場所なのかな、落ちているゴミの数も思つた以上に多かつた。空きびん、空き缶、ティモテやママレモンなどの空き洗剤プラスチック用品。「……なんでこんなものが？」というような、熊の木彫り人形とか狸の置き物まである始末。とうとう思春期真っ最中な中学生を興奮……いや、動搖させる、とんでもないゴミまで出てきた。

「うわあー！」

聞きなれた男子の奇声の方向に視線をやると、巨木や古いポートが積み重なっている辺りで「類人猿とその仲間達」が興奮した面持ちで騒いでいる。

「オレ、外人の初めて見た……」

「うほお、スッゲエなあ！！」

「普通捨てるか？！ もつたいねえよなあ……」

「これゴミとして捨てるのか？」

「おい、じつち見ろよ！」

「おおっ？！」

「これ、ヤバくね？」

「やっぱ、デカいよなあ……」

「俺は日本人のほうがいいなあ」

チビ猿や諭訪君達の抑えきれない興奮振りからいくと、どうやらそうとう大物らしい。そのうち深刻な面持ちでコソコソ顔を寄せ合って話しあっている。その声に引き寄せられた男子や先生達が近付くと更に騒ぎが大きくなつた。それを鎮めようと先生が焦つた様子で「こら、オマエら！ これは没収する！ さつさと他のゴミ集めろ！」と声を張り上げた。

「先生ズルイ！」

「ゴミじゃない、まだ使える！」

「ネゴミババする気だな！」

チビ猿達の力強い叫びも空しく、男子生徒達は「大物のゴミ」を取り上げられ強制的に解散させられた。

チビ猿達が見つけ出したのは、なんとエロ本（プレイボーイ・しかも洋物）だつたのである。こういうゴミが砂浜に落ちていたことも疑問だが、何故よりよつて尾島あいつが見つけ出すのか……計り知れな

い負のパワーを宿しているのか、口クでもないものを引き寄せる人物なのか。少なくとも「超問題児」であることを証明する材料になつたのは間違はあるまい。

「……」

私はアホなクラスメートの騒ぎから視線を逸らし黙々と「ゴミ」を拾いを続けた。和子ちゃんも幸子女史も離れたところで一生懸命拾つてている。

本来私は面倒くさがりな気性なのだが、一度氣分が乗り出すと徹底的にやらないと気が済まない性格であった。根が真面目なせいもあって、「このビニール袋一杯になるまでゴミを拾つてやろう」という野望を掲げながら砂浜のゴミをゲットすることに集中する。しかも見る間に「ゴミ」のない海岸になつていいく様は見ていて気持ちがいい。

（ああ、私っていいことしてるじやん？）

たかだかゴミ拾い（しかも生徒全員）、人として当たり前な行為に優越感に満る私。こんな真面目な姿を是非あの人に見てほしいなあという下心バリバリな気持ちで辺りを見回すと、目的の王子様はすぐに目に入った。

恋する女は、意中の人を即座にロックオンするセンサーを持つているらしい。そんな技、誰に教えられた訳でもないのに……易々とターゲットは目の中に入ってしまう。

田宮君はジャージのズボンをまくりあげながら裸足で友達と「ゴミ」拾いをしていた。スラリとした身長、爽やかな笑顔。（多分。若干遠いのでハッキリわからない）恋愛フィルター越しのせいか、ゴミを拾うその仕草までも3割増しで素敵に見えた。

ガン見している姿を悟られないよう、且つ抜け目なく瞳に焼き付けようとする。……が、悲しいかな、こいつは時同時に見たくもないものまで見てしまう。

同じ実行委員の小関明日香さんとそのお友達が彼に走り寄り、笑顔で会話をしはじめた。それは何ともイイ雰囲気……同じ男女の和やかな会話でも先程のチビ猿達と原口美恵が談笑してた時とは大違いで、数倍温かく感じられた。

（やつぱり、人柄つてこういうところに出るんだろうな……）

一人で妙に納得しながら、「私も9組になりたかったなあ」と心中で溜息を吐く。和子ちゃん達と過ごす8組に不満があるわけではない、今まで私が過ごしたクラスに比べたらお釣りがくるほど素晴らしい筈なのに。好きな人と一緒のクラスなんて心が浮ついてまともに生活できないし、遠くから眺めている方が気兼ねしなくていい……なんて思っていた筈なのに。

最初は目に入るだけでいいと思い、そのうち一緒に会話できればいいと思い、さらに隣にいたらしいと思い、自分のことだけを見てほしい……と願う。人間の欲望は果てしなく、尽きることがないのである。田宮君の隣にいる自分の姿を想像したが、実際目の前にいる一人の姿が強烈なのか、上手く想像できなかつた。

「スキアリツ！！」

「つー！」

背中から大きな声がしたと同時に、思考が中断し目の前の景色がブレた。「やられた！」と思つた時には膝を折り曲げ尻を突き出したへっぴり腰丸出しの可笑しな恰好になつていた。

（……口、口ノヤロお！…）

男女関係なく無防備なところを背後から「膝カツクン」をカマす大胆な奴は一人しかいない。常に己の欲望のまま突き進み「大成功！」と得意そうに笑つている類人猿を、憎しみフィルター越しの5割増し鋭い眼光で睨んだ。

「……あ、あのさー、こついう子供染みた真似は、」

「あつ！ 啓介ーー！」

やめまてくれますか、という口詞を言つ前に、チビ猿に向けた小関明日香さんの可愛らしさ呼びかけで遮られた。彼女は満面な笑みでこけらを歩いてくるのに、チビ猿は「ゲゲつー」と嫌な顔をしながら慌てて踵を返し諭訪君の元へ行こうとする。

「……」

逃げるように去つていいく尾島と、それを追いかける嬉しそうな小関明日香さんの姿を黙つて見送った。

* * *

バスの窓に寄りかかり、対向車線を走つていいく車と流れる景色を黙つて眺めていた。

先程までバスの中は騒がしかつたが、今はもうナリを潜め静かだつた。思つた以上の気候の良さと心地よいバスの揺れは、疲れ果てた生徒全員をあつと言つ間に夢の国へ誘う。隣をチラリと見たら、尾島も例外なくグッスリと爆睡中だつた。いつもの生意氣そうな表情とは打つて変わり、白い顔をうつすら日焼けさせながら可愛らしい寝顔でスヤスヤと呑気に寝ている。

出来ることならヤツの額に「肉」という文字か鼻毛や瞼の上に田字を書いてやりたいところだが、そんなことはできる筈もないの（残念ながらペンもない）脳内想像だけで満足しておいた。

「トーン。

窓の方を向いた途端、隣の尾島がこちらに寄りかかって來た。

「…？」

(ちょ、ちょっと、勘弁してよー)

肩を動かして気付いてもらおうとしたが、尾島は全然起きる気配がない。

「……ハア」

これが田富君なら「よつこそおいでくださいました！」と三つ指ついて御出向かいしたいくらい大歓迎だが、現実は「チビ猿」。どう念じたところで隣の顔は一行に変わらない。しつこく何度も肩をゆすつても起きないので、そのうち諦めてそのままにしといった。どうせ周りも寝ているし、そのうち気付くだろうと思つたところで完全に意識が途切れ、山野中に戻つてくるまで私は完全に夢の住人だつた。

なかなかいい夢を見ていたのに、突然オデコを「パチン」と叩かれ、寄りかかっていたものが無くなりガクッと身体が傾ぐ。無理矢理現実へ引き戻され、寝ぼけた私に向けられた第一声は、チビ猿の呆れた台詞だつた。

「起きろ、チュウ！……オマエねえ、人に寄りかかるなよな？
腕が折れるだろ！ しかも涎！ 垂れてるぞつ…！」

* * * * *

「親睦遠足会」は無事終わつた。

課題発表の学級新聞も無事仕上がり、廊下に張り出された。我がクラスの新聞は、新聞の中央に大きく機能円を描き、その中に海辺の写真と簡単な動植物の紹介を書きこみ、機能円の外には「親睦遠足会」

の感想を一人一人書き込んでもらつて全員の手で新聞を作り上げた。もちろん和子ちゃんが撮つた岩場の写真も、チビ猿プロデュース&グリコ撮影の「空き缶捏造」の写真もしつかり掲載された。

しかし、それだけではもちろん終わらない。最後の最後で巨大な落とし穴が待ち構えていた。

新聞が無事に書き終わり、廊下に掲載された日の放課後。部活が終わった遅い時間に、チビ猿の友人・諏訪君が余計な細工を新聞に施^{ほどこす}したのだ。

それは、

ノグティーが先生とバスガイドさんに引きずられていく後ろ姿、グリコが鼻にポップコーンを無理矢理詰められている姿、チビ猿が「プレイボーイ」を先生に取り上げられる劇的瞬間、そして……尾島と私が互いに寄り添つて涎を垂らしながら爆睡している写真が、巧妙且つさりげなく新聞の隙間に貼りだされていたのである。しかもご丁寧に犯罪写真のように目を隠し、どうでもいいコメント付きで。

放課後から次の日生徒が登校してくるまでの数時間の間、無防備に廊下に晒された数枚のスクープ写真。諏訪君は余計な写真を晒された被害者達と実行委員によって怒涛の集中攻撃を受けた。特に実行委員2人から強烈などび蹴り（尾島）とグーで殴られ（和子ちゃん）、ちょっとした騒ぎになつたのは言つまでもない。

GO-GO-親睦遠足会～後編～（後書き）

ママレモン、ティモテ、知っていますよね？え？知らない？……おかしいなあ（笑）。

ところでティモテの金髪オネエさん、今どうしているんだろう？

「期末テスト返すから、静かにしろ……」

興奮して落ち着かない生徒達を一喝しながら、梨本先生は出席番号順に名前を呼び始めた。

やつと悪夢の期末テストが終了し、次々とテストが返却された。その結果は……まあまあ満足できるものだった。苦手な理科や国語は中間テスト同様あまり芳しくなかつたが。それは、まあ、仕方がない。いくら頑張つてもやる気の出ない、苦手な科目と言つものはあるものだ。かわりと言つてはなんだが、数学と社会はいい出来栄えだつた。特に英語は相性が良かつたのか、気合の入れ方が並みじやなかつたからか、戻つて来た答案は予想以上のものだつた。

しかも教壇から、リポーター直々に「クラスで最高点だ、よくやつたな」とお褒めの言葉も追加されたではないか！

たかだか中一の1学期の期末テストで一位はたいしたことはないかもしれないが、落ちこぼれ成績を取り続けてきた私には十分すぎる結果だつた。

「……さすがチュウだけあつて、英語はすごいな」

余計な感想が斜め後ろから飛んできたが、無視だ。勉強に關しては点数をとつた者が勝ち。

(フフン、負け犬。いや、負け猿は後ろで吠えてろ!)

頬を染めながらも胸を張つて堂々と答案を取りにいつた帰り、小6の時に同じクラスだつた子の顔がチラリと見えた。まるで信じられないという表情。

その顔を見た時、心の中でガツッポーズを取つた。この時ほど心が爽快になり、歓びを噛みしめたことはない。

テストの答案用紙が全て帰つてくる頃には、生徒達の気持ちは夏休みに飛んでいた。

どんな評価の通信簿が返されるかという不安はあるものの、中学生活初めての夏休みが待ち構えているのだ。夏休みをどう過ごすかと考えるだけで、全ての憂いを吹き飛ばすほどの長い休み。例え、それがほぼ部活動で占めると分かつていても。

「やつと1学期が終わつたあ！ 2学期の席替えでこの尾島とも、おさりばだあつ……」

本人の目の前で遠慮なくルンルンに浮かれまくる和子ちゃんに対して、私の気持ちは「とうとう夏休みが始まつてしまつ……」あまり喜ばしくないものだった。

確かに夏休みの宿題を除けば、起床時間は自由だし、強制されて勉強する必要はないし、プールやら田舎に帰省やらで楽しいことの目白押しながら……。

（あ～あ、田宮君と9月までサヨナラかあ）

田宮君の姿を見れない長い休みなんて、「チャーシューめん」の「チャーシュー抜き」に匹敵するほど味気なもんだ。

休み時間やお昼に行くトイレと手洗いの度に、9組の前を通るのが一日のうちで唯一の楽しみだった。偶然廊下であつたり、部活の帰りで姿を見かけたり、月曜の朝礼で整列する時に隣同士になる貴重な時間が、9月までお預けなんて……なんという拷問だらう。

彼に恋してからと言つものの、私の中学生活はバラ色に変わった。

「自分の生活の全てが、好きな男性を中心にして回る」女の典型的な見本を突つ走つていたのである。

* * * * *

「よ～し、15分休憩！！

バレーボー部顧問の岩瀬先生が休憩の号令を掛けると、コートの中にいた先輩達は「疲れた……」「やつと休憩だ……」とフフフフフフながら、「コートを出て冷たい麦茶が入っているビバレッジークーラーに群がった。1年生も先輩達に続いてコートを離れる。

「あ～暑い、暑過ぎる……」

隣で和子ちゃんが手で仰ぎながら空しくぼやいた。「冗談ではなく本当に暑い。午後3時、体育館の中は相変わらず蒸し風呂のようだつた。全員顔が真っ赤で、汗だくだ。タオルをオヤジみたいに首に下げてTシャツの中に入れているし（むしろそのままブラの下にまでタオルを通していくらい）、指定体操着の子は汗を限界まで吸い込んだ布地が乾いて塩が噴く始末だ。

全員倒れるように地べたに座り込み、少しでも涼をとるため、体育館の扉に密集し風を受けようとひしめき合っていた。先輩のなかには体育館の床に寝転がり、火照る頬を地面に押し付けている者もいた。その姿に乙女の恥じらいの欠片もない。

残念ながら扉からは涼しい風が吹くことはなく、熱風が僅かに流れてくるだけ。体育館から見えるグラウンドには、この時間でも真夏の太陽が容赦なく照りつけ、眺めているだけで余計に暑さを煽られた。さつきまで砂埃を上げながら走り回っていたサッカー部員もない。

しかし、もう少しの我慢。あと2時間ほどでこの一泊一日のキッイ合宿が終了しようとしていた。

「ねえ、もうそろそろ空いてそつだからさあ、外で水飲んでトイレ行かない？」

幸子女史は外から帰つて来た数人の1年生の方を差しながら囁いた。素晴らしい提案に私も和子ちゃんも頷き、立ち上がつた。本当は汗を出し切つてしまつて尿意はないのだが、外で水を飲むのは大賛成だ。

「冷たい麦茶を飲みたいなあ」とビバレッジクーラーのほうに視線を向けるが、ここは気を使つて後輩は水道水で済ますのが得策だ。

「麦茶」「先輩」、「水道水」「後輩」。

麦茶だけではない、他にも上げればキリがないほど目に見えない暗黙のルールが女バレだけでなく他の部活にも漂つていた。21世紀に入つてからの中学の部活事情は知らないが、少なくとも80年代後半であるこの頃は、先輩後輩の上下関係が異様に厳しかつたのである。

例えば。

一つ、先輩と廊下ですれ違つた時は、立ち止まつてキチンと挨拶をしなければならない。

一つ、コートの中に入る時は、必ず「失礼します」と言つて入らなければならぬ。

一つ、登校する時は部活指定の靴を履かなければならない。

一つ、靴下は長く、短いのは一年生、超短いのは三年生から。（）私達の時代はルーズソックスなどの長いものよりも、くるぶしが出るくらい超短いのが「クール」とされていた）

一つ、1年生は学校指定体操着でなければならない（土日・祝日、夏休みなどは白いTシャツOK）、白いTシャツ（ブランドなどのロゴワンポイント入りOK）は2年から、3年はどんなTシャツでもよい。

一つ、1年生は大きめのジャージを着てはいけない。

一つ、1、2年生の髪の色は黒のみ。地毛で茶色の人は、黒に染めるべし。無理なら親からの証明書を提出しなければならない。

一つ、1年生はカーラーやコテを使って髪の毛を派手にセットし

てはいけない。

一つ、カラーゴムは禁止で黒か茶か紺、カラーゴムやリボンやボンボン付きは2年になってから。

一つ、一年生は色つきリップはダメ、無色透明でなければならぬい。

……などなど、数え上げればキリがなかつた。

おそらく心の中では先輩も後輩も、「バカバカしい」とは思つていたに違ひない。しかし生徒達は代々この厳しいルールを我慢し、じ丁寧に守り続けているのである。決められたレールを踏み出すアウトローな奴は「生意氣だ」の一言で片づけられ、なんらかの制裁を受けるのが決まりだつた。大概の生徒は怖くて決められた枠からはみ出ることは滅多にないのだが。

* * *

体育館の外に出るとムアッと熱い空気が全身を覆つた。垂れてくる汗も一気に蒸発ほどの熱気だ。体育館周辺を覆つている補強したばかりの新しいコンクリートに容赦なく口差しが照りつけ、熱と共にキラキラと反射していた。グランドの方を見ると暑さで蜃気楼のように揺らいでいるように見える。つい先程撒いたばかりのスプリンクラーの水も完全に干上がつており、気休めにしかなつていない。ぼんやり見ていたグラウンドから手元に視線を移し、水道水の蛇口を捻つて温ぬるい水を飲んで顔を洗うと僅かだが涼しくなつた。

「ミツちゃん、先にトイレ行ってるね」

「あ、うん、すぐ行く」

和子ちゃんと幸子女史は「暑い暑い」と降り注ぐ太陽光線を避けるように体育館の中に入つて行つた。

ガコン

体育館に続いている校舎の扉が開き、和子ちゃん達と入れ替わるよにして出てきた5人の男子生徒達。

(……げつ！)

オヤジのように首にタオルを巻いたまま豪快に顔を拭っている勇ましい姿を見られ、慌てて首に巻いたタオルを引き抜いた。しかも、ある男の姿をバツチリ捉えてしまつた自分が憎い。このままタオルで顔を隠しフェードアウトしたいところだが、どうみても不自然極まりない。

(さつさと体育館に戻れば良かつた……)

なんでこんな地味な場所から出てくるのか。

そんな意味を込めた不羨な視線に「昇降口は閉まつていて、この扉のすぐ近くに裏門があるからに決まつているだろ！」と言う類人猿の厳しい視線が返つて気がして、心の中で舌打ちをしてしまつた。

「よお！」

荒井、久しぶりじゃん。

真っ黒に日に焼けた男の子。

ツンツンヘアーだった髪の毛は少し伸びたが、相変わらず切れ長の目を細めながら人懐こい笑顔はいつものまま。サッカー部であり、元クラスマートの佐藤伸君^{さとうしん}。

馴れ馴れしく「久しぶり！」……なんて答えることはできないので、曖昧な笑いを浮かべながらチョコンと頭を下げた。

彼の台詞からわかるように、佐藤君は中学に入つてからも思春期特有の「恥ずかしさ、照れ」などとはおよそ無縁だった。知り合いとすれ違う時や顔を合わせる度に、男女問わず爽やかに挨拶をしていた。それが同じサッカー部員であろうが、成田耀子^{なりたようこ}であろうが、

荒井美千子であるがお構いなしだ。彼にしたら相手がクレオパトラでも、マンドリル並みの顔の持ち主であろうとも関係ないのだろう。

面白いだとか顔がイケてるという噂は相変わらず飛び交っていたけど、なによりもモテることを鼻に掛けず人を差別しないところが「人気者」である最大の理由だった。結果、佐藤君は中学でも「学年一のモテ男」という地位を守り続けている。

「……カツコー！」

隣にいたチビ猿は佐藤君に強い語氣で声を掛けたが、私にはいつものように「一言モノ申す！」……どうか、目が合つとすぐ視線を逸らした。

（おや？）

定番となりつつある嫌な笑いを浮かべもせず氣難しい表情。こころなしか顔も赤い。他のサッカー部員に「い」づ「ぜ」と顎で裏門の方を差し、歩き出した。

何か言われると身構えていた私は、予想外のチビ猿の態度に「あれ？」と拍子抜けしてしまった。

（暑さにでもやられたのか？ それとも腹でも壊しているのか？
……ノグティーじゃあるまいし、まさかね？）

そんなチビ猿の態度とは裏腹に、他の3人は顔を見合させながら私を見てニタニタ笑っていた。すぐにチビ猿の後を追いかけ何やら耳打ちをしている。チビ猿は無言で3人の頭を軽く平手で殴つた後、4人で忍び笑いをした。

（……なんか、やな感じだな……）

「なんだあ、あいつら？ ……『めん、またな、荒井！』

佐藤君は訳が分からんという表情を浮かべてチビ猿達の後を追い

かけた。サッカー部達の背中を見送りながら、いつもと違つ違和感に眉をひそめる。
なにか引っかかる。

「……あ、そつか！」

違和感の正体がわかり、思わず独り言が漏れてしまった。
尾島だ。色の白かつた彼もさすがに連日の部活動のせいか真っ黒になり、佐藤君と同じく髪も少し伸びていたのだ。

それに。

背が低かつた筈なのに、私と同じくらいの背丈の佐藤君の隣に並んだ時、大きな身長差を感じられなかつた。
(もうそろそろチビ猿は卒業か)

昨夜の女の子同士のお話（今で言う恋バナ、ガールズトークか）で盛り上がつた話題の内容がふと浮かび上がり少し複雑な気持ちになつたが、部活の休憩時間が終わりそうなことを思い出し慌てて体育館の中に入ると……。

思わぬものが目に入った。

「つ？！」

体育館入口の正面の壁にあにある全身鏡。鏡の下の方には「昭和50年度・山野中学校卒業記念」と書かれた文字が所々消えかかつており、その上に映つていてる自分の姿を見て固まつてしまつた。
嫌でもバストに視線がいつてしまつ。

そこには。

最近キツイなあと思つて、新調したばかりのピンクのロカッパブラが、くつきり浮かび上がつていていたのだ。思つた以上に白いTシャツは薄い素材であり、おまけに汗でスケスケだつた。

真夏の合宿の夜～前編～

「んでも。荒井って、尾島と同じになつてゐるのよ？」

どうしてこうこう話になつてしまつたのか。

とんでもない台詞を言い出したのは、1年の副部長を引き受けている「奥住さん」で。彼女のからかうよくな笑みに対し、苦虫を噛み潰した顔をしてしまつた。

それはチビ猿達にスケスケブラを見られた前日のことだつた。部の一泊二日の合宿の夜のことだつた。

場所は職員室のある校舎の3階の教室、時刻は消灯時間が迫る9時近くだつた。学年ごとに3教室に分かれ、所狭しと敷き詰めた貸布団の上で顔を寄せ合つて女の子が話題にすることと言えば一つしかない。

なんとなく氣の呂ひ同士で固まつてゐるメンバーには、和子ちゃん、幸子女史、1年の副部長の「奥住さん」、彼女と仲の良い「光岡さん」と「加瀬さん」（奥住トリオと命名した）。そして同じ山野小出身でバー部に入つてから親しくなつた、大人しくて控えめな「茅野さん」とチイちゃんだ。

初めは3年の部長の松野先輩が、どうやらサッカー部の部長と付き合い始めたらしいといつ話だつた筈だ。

それなのに……。

「……あ、あの、奥住さん。それ、ありえないから

「また、またあ！　親睦遠足会の新聞に貼つてあったスクープ写真！」

「すんごく寄り添つて眠つてたもんねえ？」

「指を絡めて手をつないでたんだって？」

(んな、ワケ、あるかいっ！)

奥住トリオの置みかけるような言葉に軽い眩暈を覚え、盛大な溜息を吐いた。いつたいどこをどうしたらそんな噂になるのだろうか？　どうに忘れ去られたと思っていた昔の話を引っ張り出されて頭が痛い。

「……あ、あれば諭訪君が勝手に脚色したんです。尾島との間にはヤマシイことは一切ありません！」

「えへ！　本当に？　でもさあ、尾島が荒井にチョッカイ出してるところ結構見かけるんだけどなあ？」

私は余計な期待を持たせぬようにキッパリハツキリ言つたので、奥住さんは残念というより、おもしろがるような口調で口を尖らせた。奥住さんは7組だ。8組と体育が合同なので、そういう場面をよく見かけるのだろう。

「ま、尾島も諭訪も、『大野小隊・ロクでもないんジャー』のメンバーだもんねえ。大体そんなところか」

奥住さんはフハッと吹き出して、仲の良い2人に「ねえ？」と同意を求めていた。光岡さんも加瀬さんも頷きながら笑っていた。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』

ここで説明しよう。

この小隊は大野小名物のお騒がせ5人組の通称で、どつかの戦隊名のように正義の味方では断じてない。むしろショックカーなどの下つ端悪役メンバーというほうが正しい。

「尾島くオジマヌケ・赤」を筆頭に、「桂くバカツラ・黒」、「星野くアホシノ・青」、「諭訪くオタンコナスワ・黄」、「後藤くゴトンマ・桃」で形成されている、どうでもいいグループの名前なのである。

幸子女史が、「何故センターの赤が小さい尾島で桃のポジションがデカイ後藤君な」と聞いたら、「つっこむところはそこじゃないでしょ！」とトリオに返された。おそらく悪者オーラの差だろう。最早コメントする気力も失せる。それよりも、ご機嫌なあだ名をもれなく引っ提げてポージングを取る5人の姿を思い浮かべた自分が悲しい。

「もつ尾島の話題はやめよう、氣分悪いし…」
あのバカ

和子ちゃんは心底ウンザリという表情をしながら思いつきり嫌そうに言うと、「和子は尾島がキライだもんねえ」と幸子女史は苦笑いをし、これにはチイちゃんも笑った。

「……けど、荒井さん、氣をつけたほうがいいかもよ。尾島つて結構モテるから、目をつけられると……厄介」

笑いを止めて囁くように言つたのは、対極線上に数人で固まっている集団の方に目配せした、神経質そうな加瀬さんだつた。光岡さんも真顔になつて真剣に傾いている。集団の中心には原口美恵がいた。奥住トリオも大野小出身だが、原口美恵とは特別仲が良い訳ではなく顔見知り程度で、どちらかというとそりが合わない。

「モテると云つて、極一部が勝手に入れ込んでるの間違いじゃないの？」

「……やっぱ原口つて、尾島狙いなんだ」

物好きだなという表情を隠しもせず言つた和子ちゃんと真剣な表情の幸子女史に、奥住さんは腕を組んで力強く頷いた。

「大野小の間ではすごい有名な話。あんだけあからさまだと周囲にバレバレだし、尾島も気付いている筈なんだけね～」

「その割には原口に対する態度素つ気ないんだよ」

光岡さんは氣の毒そうに肩をすくめて、原口美恵のほうに視線を流した。彼女達の話によれば、原口美恵がバスケ部に入らずにバレー部に入ったのも尾島絡みだと教えてくれた。

「尾島、絶対バスケやると思つてたのにさ。何故かサッカー部だし」「だから原口もバスケ部入らずにバレー部に入つたんだよ」「バレー部とサッカー部つて、ほら、伝説があるでしょ？」

奥住トリオは顔を赤らめて声をひそめた。

ここにこの話の発端になつた、「3年の部長の松野先輩とサッカーチームの部長の菊池さんが付き合つてゐる」という話に戻る。我が中学校にはいくつかの伝説があつた。

「伝説」というからにはそれなりに信憑性があるわけで。それが「恋」に関するものだから、年頃の中学生の間で騒がられていた。

その一つが、「バレー部（女）とサッカー部はカップルになる確率が高い」というものだった。しかも「部長同士だとなお確率が高い」というオマケ付きで。

（そんなことのために原口美恵は、バレー部に入つて1年の部長を引き受けたのか……。『苦労なこつた』^{あのオカンナ}）

キツイ意見のようだが許していただきたい。大体そんな浮かれた伝説のためにバレー部に入部して1年の部長を引き受けた彼女に、パシリ扱いされる私の身にもなってほしい。女としては共感ができるが、一緒に部活をやる身分としては傍迷惑な話だ。大体私がそんな噂を知ったのはここ最近だった。それを原口美恵は入学当初から伝説の情報をGETしていた事実もスゴイが、その執念にも頭が下がる。

勝手な私は心の中で、「バレー部（女）とバスケ部（男）はカッフルになる確率が高い」というほうが断然良かつたと自分に都合のいいことを愚痴つた。まあ、こんなこと考える時点で私も原口美恵の事は言えない。

それにしても……。

「で、でも尾島つてさ、9組の小関明日香さんとアヤシイんじゃないの？」

私の何気ない一言に全員の視線がこちらに集中した。同意を求めるよう幸子女史と和子ちゃんに田配せをして、3人で「……だつて、ねえ？」とヒソヒソと囁き合う。

「は？ なんですかなるの？」

キヨトンとした顔の奥住さんが氣の抜けた声を出したので、私は慌てて親睦遠足会のミーティングの時の話を説明した。もちろん名前で呼び合つてることも。それを聞いた奥住トリオも顔を見合わせ、「それ誤解だよ」とハツキリ言つた。

「あの二人、家が隣同士で幼馴染なんだよ。ていうか、それ以前に小関と尾島は従兄妹同士だし。第一もし付き合つてたら、原口美恵が黙つてる筈ないでしょ」

イトコ？

イトコって、あの「親戚の」イトコ？

あまりにもアッサリと「2人が何故あんなにも親しいのか」という理由が簡潔に返ってきたので力が抜けた。和子ちゃんは「なんだ、そんなオチだったのか。つまらん」とチビ猿を攻撃できる唯一の情報が全くのガセだったことに、あからさまにガッカリしている。正直私もガッカリだった。

「え？ なになに？ 尾島と小関のこと気になる？」

奥住さんがとんでもないと言い出したので、「ち、違うって！？」と慌てて否定した。

『冗談ではない。

逆に私としては、小関さんは尾島に積極的であつてほしかった。それにはそれなりのワケがある。

9組で、部活で、田宮君を見かける度に、何故か隣に小関明日香さんが出るような気がするのだ。その結果、尾島の隣は「原口美恵」ではなくて、「小関明日香」のほうがより好ましいし、ありがたい。

「……そ、そうじゃなくて。できれば、是非ともカッフルであつてほしかったなあと思つて。だ、だつて従姉弟同士つて結婚できるでしょ？ 問題ないでしょ？」

私のそうであつてほしいという願望と誤解を解こうとしている必死の言い訳を、奥住さんは何を勘違いしたのか、「まあまあ照れれな！」とりあえずそういうことにしておいてあげるから」と言つて肩をポンポンと叩かれた。和子ちゃんと幸子女史は苦笑いをしている。私の台詞の本当の意味を知つていてるからである。

「安心していいよ、荒井！ 小関は完全なシロ！ それより尾島のこと、知りたいでしょ？」

「……」

（……真剣にそんなこと、どうでもいいんですけど……）

奥住さんは私の内なる叫びも知らずにニヤニヤ笑いながら、この当時なら水素爆弾並みの（現代ならテボンカ）情報を投下した。

尾島にはね、好きだった子に「うひびく振られた過去があるんだよ。」
アイツ

真夏の合宿の夜～後編～（前書き）

少々ヤンチャな暴れっぷりシーンや軽いイジメの描写があります。
R - 15には引っかかるない程度だとは思いますが…。設定上外せ
ませんので、ご了承下さい。

真夏の合宿の夜（後編）

奥住さん達が小学校5年の夏休み明けに、大阪から一人の女の子が、尾島率いる『口クでもないんジャー』や原口美恵のクラスに転校してきた。

その転校生は色が白くてスラリと背の高い、可愛いというより中性的で綺麗な女の子だったそうだ。

残念ながらその転校生は山野中にはいなかった。彼女は1年くらいしか大野小におらず、再び転校してしまったからだ。

尾島は転校してきた彼女を、ある日を境に何かと目の敵にしていた。そのある日と言うのが、体育でバスケがあつた日で。男女混合試合をしたときに、尾島と原口がいるチームと対戦していた転校生のチームは、尾島達を完全に封じ込めて大勝してしまったのである。

その転校生は天才的にバスケが上手かつたのだ。

「尾島を負かした」という情報を聞きつけた小関明日香さんは、特別クラブのバスケ部に彼女を誘った。

彼女は快く入部したが、尾島達や原口美恵達のイジメ同然の心ない態度で一週間も経たずにバスケ部を辞め、その後長でクラスでも孤立した。運悪く彼女に好意的だった小関明日香さんは、違うクラスだつたから。

学年で一番バスケが上手かった尾島は、そのプライドをズタズタに傷つけられた。

それからというもの、なにかとその転校生のことを「関西弁をしゃべる」だの「男女」だのと言つて難癖をつけた。奥住さん達から見れば、尾島達はその転校生を目の敵と言うより「キライキライも好きのうち」もしくは「好きな子に振り向いてほしくて、ついついイジメてしまう典型的な素直になれないアホガキ」丸出しだったらしい。もう、それは見てる方が憐れに思うほどの熱心さで。

それを気に入らない原口美恵とその取り巻き達が、嫉妬＆対抗心メラメラで転校生を無視しハブ攻撃をした。そのトバツチリを受けないように見て見ぬ振りするをする、その他のクラスメート達。また、担任がひ弱そつな若い新任の先生だったものだから、クラスは最悪の状態になり、酷い有様だつたといつ。

大人しい転校生はどんな仕打ちにも黙つて耐えた。

私にはその気持ちがわかりすぎるくらいわかつた。言い返せば相手が余計に調子に乗つてくる奴らだと分かつていたのだろう。しかも「関西弁」などで対抗しようものなら、これでもかとそこを突いてくるメンバーだ。

しかしそのイジメも、1年も満たないうちに幕が閉じる。彼女は再び大阪へ転校することになつたのだ。

梅雨が明け、茹^うだるような暑さが始まつた、6年の1学期が終わる終業式。

その事実を先生から告げられたクラスメートは驚愕し、なんとかく氣まずい雰囲気にシーンとなつた。その日の帰りの会まで転校する事をずっと黙つていた彼女は、一言「お世話になりました」と言つただけで、あとは無言だつた。

黙つて帰りの支度をする転校生に、複雑な思いで見送ることしかできないクラスメート達。からうじて頼みの綱である担任も不在なせいで、思いつきり暗雲立ち込める空気の中。

何を思つたのか、尾島は黙つて教室を出ようとした転校生の背中に大声で、「なんで転校すること、言わなかつたんだよ…」と詰つた。クラスメートも固唾を飲んで見守る。

突然好きな女の子が居なくなつてしまつ悲しさ。しかも「さよなら」も言わずに。

尾島の気持ち、わからなくもない。

しかし彼女にしたら「なんで転校すること、言わなかつたんだよ！」と詰られたところで尾島の行動を理解できないし、したくもないだろう。

彼女は振り向いて暫く背の低い尾島を見下ろした後、他のクラスメートを見回し、俯いた。俯むいた顔には、転校してきた時には短かつたサラサラな髪が彼女の表情を隠すように覆っていた。次の瞬間、頭を上げたそこには、うつすらと涙を浮かべながらも怒りに燃えた瞳と鬼のような形相があつた。綺麗な分だけ、それは恐ろしかつたらしい。

『……なんでアンタらに転校のこと言わなアカンの……。黙つて聞いてりやあ、調子に乗つてあんだけイジメくさつて、ようそこまでえらそなこと言えるわ！　それに今だから言つけどな、このドチビ！　そないにバスケで負けたのが悔しかつたなら、つよおなつて、男らしくバスケで勝負してこいや！　腐つた女みたいに口だけはペラペラとしょーもないことを言いよつてからに……一度とその顔私の前に晒すな！　あんたら全員、今度私の前に現れたりしたら、シバいて道頓堀に沈めたるっ！！』

転校生は華麗な容姿とは程遠い「横山ヤシ」も真つ青なドスの効いた声で、一年間の鬱積を晴らすかのように一気に怒鳴り散らした。そこには「大人しくてなにも抵抗しない可憐な転校生」の姿は何処にもない。

あまりにも衝撃的で声も出せず呆然としている、尾島とクラスメート達。

シーンとした空氣を破つた鍋の心臓の持ち主は、「口クでもないんジャー」の中でも一癖あつて雰囲気の怖い＆悪つぶつている、桂君^{かつら}だった。

『……はあ？　なんだよオマエ、急にキレてさつ。バカじやねえの？　大体オマエだつてさ、』

ガンッ！！

ガタンツ、ガシャーンー！

桂君が文句を言い終わらないうちに、派手な音と女子の悲鳴が教室に響き渡った。

なんと彼女はスカートにも関わらず、傍にあつた机を見事な長い脚で蹴り飛ばすといつアドメを差し、ギロリと睨んで桂君を黙らせたのだ。

『「オマエ」って、気安く呼ぶなやつ！　このハゲつ！』

ホンマ、ガキくさいアホな連中ばっかで、かなわんわつ。

浪花の転校生はそう吐き捨てる「清清した」と言わんばかりにスッキリとした表情でクルリと踵を返す。最後の最後でUSA並みのハリケーンをブチかまし、尾島に「大失恋」という苦い置き土産を残して教室を退場した彼女は、肩を怒らせながら大野小を去つた。

* * * * *

「……と、いうわけよ

奥住さんが人差し指を得意そうに振りながら話を締めると、7人は複雑な視線を絡ませた。まるでその現場に居合わせたかのように、全員ダンマリである。

「……転校生、スゴイし。けど、ちょっと切ないねえ」

最初に幸子女史がしんみり咳いたのに対して、すぐに気を取り直し「自業自得でしょ！ 本当お子様だわ」と手痛い意見を返したのは和子ちゃんだった。

私も尾島と転校生の別れのエピソードには、和子ちゃんと同意見

だ。気の毒だけ。

尾島達クラスメートに言ひ訳の余地はない、と思ひ。が、もしかしたら、彼女にも何か問題があつたのかもしない。ビウラが悪いかというのは愚問だ。それこそ過ぎてしまつたことは、ビウラしたつてやり直しがきかないのだから。

それでも。

彼女が一年間受けた仕打ちを思ひ、尾島に同情の余地は無いと思う私は、冷たいだらうか？

恋といつのは厄介で、人の心はどこもかくにも難しい。

(小説を読んで恋に恋をして空想に耽つている方が楽だし心が傷つかずに済むのかなあ。それで満たされるのかと言われば、「否」だけ)

「大体ねえ、そんな手痛いしつ返しをされたつていうのに、尾島、あのバカ

心を入れ替えるどころか反省した形跡が全く見られないつていうのはどういつことよ？ 全然ガキのまんまじやん！ 第一同級生なんて子供だよ、子供！ 全然良さがわかんない。やっぱ恋する相手は年上じやないと！ その点少年隊のヒガシなんて最高！ ね、チイちゃん？」

和子ちゃんは田をハートマークにさせながら「尾島なんてどうでもいい」と言わんばかりにサラッと話の方向を変え、熱烈ファンである「少年隊」がいかに素晴らしいかといつもの持論を披露した。チイちゃんも少年隊ファンなので「もちろん」と笑顔で頷いている。

その後は「1年の男子で誰が一番カッコイイか」という議論になり、これには白熱した意見が飛び交つた。結局「同級生はオヨビじやない」という和子ちゃんを除いた全員が、「1組のサッカー部の佐藤伸君が一番素敵」と意見が一致したところで、議論は終了した。

タイミング良いのか、見回りに来た若瀬先生が「早く寝ろよー！明日しごくぞー！」という声が廊下に響いた。

全員各布団に戻り、教室の電気が消え、明日の練習の為に目を閉じた。でも、なかなか眠気は訪れてはくれない。尾島の苦い失恋話を聞いたせいなのか、それとも肝心な自分の恋が「進展の兆し全くなし」と落ち込んでるせいなのか。

閉じた瞳を開いて教室の窓から見上げた夜空に描くのは、愛しい人の笑顔。

（田宮君……全然顔見ないなあ）

夏の星座に並んで田宮君の爽やかな笑顔が、いつのまにか尾島の顔に変わった。

（出でくんなんよー！……つたく、サッカー部はよく練習一緒になるのに、なんでバスケ部と練習かぶらないかなあ？ー）

夏休みに入つてから田宮君の顔を一度も見ていないという事実に気分はもやもやして一行に晴れなかつた。同じ体育館を使うから練習が重なることは皆無なのはわかつていても、せめて前後で練習が重なつてもいいじゃないかと文句を言いたい。女バレの練習の前後は男バレとかバトミントンかとか卓球とか体操部ばかりで、バスケ部に当たつたことが一度もないのだ。

（神様のイジワル！ー）

群青色の空に向かつてしつかり文句を言つたところで、瞼が重くなつた。

* * * * *

余談だが、部活の合宿はこの年を最後に無くなってしまった。

何故なら、私達の後に女バスが合宿をしていた時、不審者が中学に侵入して警察沙汰になつたからである。

2年の先輩が深夜にトイレで起きた時、夜中の学校の恐ろしさに友達を起こしてトイレまで付いてもらつた時のことだ。

扉をしつこく叩く音と呻き声が階下から聞こえてきた。抜群のロケーションなだけに、女バスの2年生達は悲鳴を上げて自分達が寝ていた教室に戻る。同時期に同じ物音をバスケ部顧問も聞いていた。声のした方に向かうと、ベロンベロンに酔っ払つたオヤジがクダを巻いて扉をガンガン叩き文句を言つていたのだ。すぐに警察に通報され、泥醉オヤジは2人の警官に抱えられながら学校から連れ出された。まだ酔つ払いだから良かつたものの、これが刃物を持った変質者だつたら冗談では済まされない。男子ならまだしも年頃の女子中学生を預かる学校側としては、不祥事があつてはならぬと判断したらしく、泊まり込みの夏合宿は一切禁止になつてしまつたのだつた。

真夏の合宿の夜～後編～（後書き）

「…」で関西在住の乙女の皆さまにお詫びを申し上げます。…という
私も実は関西在住だつたりなんかします。

笹谷さんの恋愛事情（前編）

夏休みが明けて体育祭が終わると、季節は秋へと移り変わつていった。

次のイベントである文化祭の話題がボチボチ出てきたある日の放課後。

バレー部の部室である2年1組の教室の窓からは、灰色の空が見える。暑くもなれば寒くもない穏やかな気候だが、湿った臭いが僅かに感じられた。幸いにもまだ雨は降り出してはいない。朝見た天気予報では、夕方から夜半にかけて雨になるのかもしれないとアナウンサーが言っていた。もうそろそろ振り出す頃だろう。窓からテニス部のボールを打っている音や後輩達の掛け声が聞こえてきた。

そんなバレー部の部室に、生徒が2人。

私と同じバレー部の1年生である「笹谷さん」^{（あさや）}は、貴重品等の荷物見張り当番として、窓際に肩を並べて座っていた。

ハッキリ言って笹谷さんとは最近まで口くに話もしたこともなかつた。何故なら笹谷さんは「原口美恵」^{（はらぐちみえ）}の友人の一人で、その原口美恵と仲のよろしくない私とも当然犬猿の仲だつたからだ。

それがどうしたことか。

夏休み明け頃、笹谷さんは原口美恵とケンカをしたるしく、原口グループを抜けた。彼女は奥住トリオの一員である「光岡さん」^{（みつおか）}と一緒にクラスでもあるので、奥住トリオといふことが多くなつた。その関係で最近私や和子ちゃんとも仲良くしているというわけである。……といつても、急に気安く話ができるほど距離が縮まつたわけではない。笹谷さんはいつ原口美恵と元のサヤに戻るかわからぬいし、ここは付かず離れずが無難だと顔には出さずとも心の中で身構えていた。笹谷さんはそんな私の心を知つてか知らずか、私達の

グループに入つても実際私とは特に親しく口を利くことも無かつた。あんだけあからさまに原口美恵から敵対心を向けられている私に、「気の毒だね」とも、その原因になつてゐる「チビ猿」のことも、原口美恵の事は悪口並じろか話題にもしない。

そう、この時までは。

「荒井さんのところ、何やるの?」

笹谷さんは爪を一生懸命磨きながら顔を上げずに聞いてきた。一瞬何の事かわからず、英語の単語の意味を調べていた辞書から頭をあげ、眼をパチクリしながら笹谷の方を見る。

「……え、何つて?」

「ほら、文化祭。確か内容の提出、締め切り今日までだつたでしょう?」

「……ああ、うん。一応決まつたよ。け、結構揉めたんだけど……」

私はその時の様子を思い出しながらぎこちなく笑うと、笹谷さんは爪にフウッと息を吹きかけ、こちらを見た。

笹谷さんは顎より少し伸びてゐるサラサラで綺麗な茶色の髪をワンレンにしている。確かに先輩に「少し髪が茶色いね」と注意されたが、ギリギリラインなので、親の承諾書を提出しあづめなしと聞いた。背は私と同じくらいだが、彼女はスラリとスタイルが良い。切れ長で奥二重の瞳も髪と同じ茶色。どう見ても私達と同じ中学1年には見えず、大人っぽい。そんな彼女は茶色い瞳を黒板の方に彷徨わせた後、コクンと息を飲んでニイツとした笑顔を作った。

ガタン

爪磨きを机に置いて椅子を座り直した。

「……あのね」

「？」

「ごめんね、荒井さん」

「えっ？」

「あの、一度ちゃんと謝りたかったんだ。それだけなんだけど……えーと、本当に『ゴメンナサイ』

急に頭を下げる殊勝に謝られてビックリした。

文化祭の内容とは違う言葉に一瞬なんのことだかわからなかつたが、彼女の言いたいことをすぐ理解した。おそらく今まで私に対し取つた態度の謝罪だろう。特に嫌がらせを受けた訳ではなく、許すも何もないのだが。ただ一言素直に謝られればこちらとて悪い気はしない。私は警戒心を解き頷いて少し微笑んだ。 笹谷さんも私の笑顔の意味がわかつたのか、照れ臭そうに「ゴメンね、急に」と笑つた後、話題を元に戻した。

「それで、文化祭。8組は何するの？」

「あ、うちの第一候補は劇をやることになつて、」

「え～！ 何やるのぉ？」

「あの、その、映画知ってる？……『バック・トゥ・ザ・フューチャー』……」

「え？ 映画？ ……名前だけは聞いたことがあるような……」

イマイチ理解をしていない感じの笹谷さんを見て、「そりだらうなあ」と心中で苦笑した私は、得意分野である洋画の話題を喜々として説明した。

『バック・トゥ・ザ・フューチャー』

それは近年公開され爆発的大ヒットした映画名である。マイケル・J・フォックスが演じる主人公こと『マーティ』が、

思わぬアクシデントで友人である博士が作ったタイムマシンに乗りこんでしまい、過去に行ってしまうというお話。現代に戻るまでのハラハラドキドキ感といい、自分の存在を消さないように両親をカツプルにさせる奮闘ぶりといい、アイデアも斬新ながら音楽もイケてるという非の打ちどころない作品。またタイムマシンとして改造された『デロリアン』が、シルバー・ボディのガルウィングという超クールな車なのだ。（美千子談）

笹谷さんは、「そんな話だつたんだ。名前だけは知つてたけど、以外」と感心して頷いている。それもそうだろう。この年頃の女の子が洋画を映画館まで足を運んで見る人は少ないと思つ。親、兄や姉に大の洋画ファンがいるならまだしも。女子中学生がファンになる対象の多くはジャニーズなどの「アイドル」であり、映画はその「アイドル」が出演していたものや、薬師丸ひろ子や原田知美が演じる「角川映画」の邦画か、アニメ映画が人気の時代であった。もちろん洋画もヒット作はあつたが、視聴対象年齢は大人向けばかりだつたように思つし、しかも現代のように溢れかえるほどの宣伝と公開数があつた訳ではない。上映館も総合娛樂施設に隣接している大型映画館などではなく、圧倒的に小さかつたものが多かつたし、しかも今のように綺麗ではなく、そのまま現代のように溢れかえる大型映画館などではなく、圧倒的に小さかつたものが多かつたし、子中学生が外国のアクターに熱を上げる子は自然と少なかつたように思う。友達になった子に洋画の話題を出しても、「？」マークが返つて来るだけだった。現に目の前の笹谷さんも、「マイケル・J・フォックス」というアクターについての説明をして、おそらく興味も湧かないし、わけわからないだらう。

「あ……いや、でも、決まつただけで。体育館の舞台が使えるかは今日の抽選次第だけど……」

「そつかあ。なら、抽選会、当選するといいね。それにしても荒井さんつて、映画詳しいんだね？ 好きなんだ？」

「うん！ 今はこの人達に夢中でや」

いそいそと雑誌の切り抜きが挟まっている下敷きをとり出す。海外アクリターの切り抜きが丁寧に並んでいる「メイドイン美千子」の力作だ。自慢じゃないが、中学進学と同時に通い出した知り合いの英語塾の先生から入手した、アメリカのアイドル雑誌の切り抜きまであった。そこには、なんとこの時点ではまだ日本で認知度が低い（ほぼ無かったと言つてもよい）ブレイクする前の「リバー・フェニックス」が微笑んでおり、当時としては激レアものだつたと確信している。そこを力強く指さす。

「このひと！ これから絶対人気出るから！ すっごいファンなんだあ」「へ、へえ……そうなんだ。……けど、文化祭で、そんな難しそうな内容を演じるの、大変じゃない？ 荒井さんがアイデアを出したの？」

「大丈夫？」と眉間に皺を寄せる笠谷さんに、「え？ い、いや、違う！ 私じゃないよ」と慌て手を振りながら否定した。

* * *

数日前の「結構揉めた」ホームルーム

文化祭というのは必ずなんらかのテーマがある。もちろん我が山野中学校も例に漏れずテーマを決めていた。

『明日へ繋がりゆく日々・過去・現在・未来』

今年のテーマがそれだ。

文化祭の催し物をなにするかと話し合つホームルーム。

2学期になつても、通路を挟んで私の斜め後ろの席に落ち着きやがつたチビ猿は、「どうせなら田立つ劇がいいんじゃね?」と意気揚々と無責任な発言をした。体育館を使う劇の枠は各学年1クラスだというのに。

尾島は『はじめ人間、ギャートルズ』を押した。「なんだよそれ? !」という周りの呆れた意見にも関わらず、尾島は更に一言いこう付け加える。

『オレが「ゴン」をやつてやるから、宇井、「ドテチン」を頼んだぜ! 心配すんな、マンモスの肉、分けてやつから!』

メデたくチビ猿と遠い席に離れた和子ちゃんに対し、久々五分刈りに戻った頭を振り返り堂々とサムアップで合図する自称「ゴン」こと尾島。教室に冷やかしの声やら笑いが響く中、綺麗にセツトされた自慢の髪を揺らす勢いで立ちあがった和子ちゃんは、すかさず冷めた声で吐き捨てる。

『言いだしつべの尾島に、一番責任の重い総監督を希望します!!』

もちろん、「尾島よ、ふざけてないで、真面目に考えろ!」という梨本リボータ先生の一喝で、『はじめ人間、ギャートルズ』はアッサリと却下された。当然だろう。大体文化祭のテーマと全然接点がない。かろうじて「過去」という部分が、かぶっているだけではないか。

そこで最近覚えの新しい『バック・トゥ・ザ・フュー・チャー』が候補に上つた。意外なことに、この名前を上げたのも尾島だった。担任のリポーターも担当教科が教科だけに、「おお? !」と窓に寄りかかっていたヤル氣のない身体を起こして、嬉しさを隠せない様子だ。

(類人猿、ナイスアイデア! !)

大好きな映画の名前が思わず人物から飛び出し、私も興奮してし

また。自称洋画ファンとしては大賛成だ。映画の内容も文化祭のテーマからかけ離れている……訳でもない（？）ので、そのまま勢いに任せて、「1年8組版・『バック・トゥ・ザ・フューチャー』」と決定した。

* * *

「……そつかあ、尾島かあ。相変わらず無責任なヤツねえ。どうせオタクコノス諷訪も面白がつて『ヤレヤレ！』って言つたんでしょう？」

ギクリ。

図星だと顔に書いてある私に、 笹谷さんは「 puff」と吹き出し、キヤハハやつぱり、と笑いを大きくした。

「アハ、アイツら、全然成長しないし。まだバカばっかりやつてるんだ」

笹谷さんは笑いが廊下に漏れるとマズイというように口を手で覆い、笑いを堪えていた。確か彼女は5・6年の時、原口美恵と共に尾島達『ロクでもないんジャー』と同じクラスだったと聞いた。その当時と重ねているのか、面倒くて仕方がないというように身体を震わせている。

「フフフ、あ～おつかしい！……あ、知つてると思つけど、私、尾島や諷訪と小六の時一緒にクラスだったの。なんとなくその姿が目に浮かぶんだけど、尾島がねえ～」

ふーん、そつかあ。

やたら「納得」と言いたげな言葉を連発する笹谷さん。頬に掛る

茶色い髪をそつと指ですくい、パラパラッと落とすと「あ、枝毛」と言つて、指で枝毛の髪を摘みながら学生カバンのポケットに手を伸ばして小さいハサミを取りだした。

「……でもさ、なんか、尾島が映画の名前を出したの、わかる気がする……」

そつか、そんなに……なんだ。尾島は。

そつと枝毛を切りながら呟いてるので、自然と声は小さくなり聞き取りにくい。切つた枝毛をハラリと床に捨て、茶色い瞳をキラリと輝かせながらこちらをしつかり見た。私は訳がわからず、「何が好きだつて？ 映画を？」という顔で 笹谷さんの目を見る。でもそんな話聞いたことがない。

「えつと……尾島つて、映画あんまり好きじゃない筈なんだよね？ 前、みんなで一緒に映画館行つたときに、アイツだけ完全に熟睡。本人も苦手だつて言つてたし。それが急に『バック・トゥ・ザ・フューチャー』だなんて……」

ホーン、可笑しいんですけど。

なんでだろ？

まだニヤついている 笹谷さんの意味深な視線と弧を描いている口元を隠すように当てている拳を見て、心臓の鼓動が僅かに速くなる。正直この空気は居心地が悪い。視線を逸らしたいのに逸らせない。この先、 笹谷さんが言つ言葉は、ややこしくなるような、[冗談で済まされないような……気がして。嫌な予感がした。

笹谷さんの顔の向こうに見えるのは、僅かに開いている教室の窓。

そこから聞こえてくる生徒達の声が一人きりの教室に滑り込んでくる。

空は相変わらず灰色だが、雨はまだ降り出してはいない。

笠谷さんの恋愛事情～前編～（後書き）

新キャラ、笠谷さん登場です。

笠谷さんの恋愛事情～中編～

笠谷さんはこの後浮かべる辛そうな表情とは無縁な悪戯っぽい顔で、ニヤリと笑っている。その顔つきは、心なしかチビ猿に通ずるものがあり、背筋に悪寒が走ってしまった。

「……少しは成長したのかな、あのマヌケは」
「……」

スッと真面目な顔に戻り感慨無量な面持ちで窓の方に視線をやる笠谷さん。その横顔を見ながらなんとなく落ち着かない様子の私。人との縁つて本当に不思議だ。

昨日までは交わす言葉が少なかつた筈の人とこうして親密に会話をしている。しかもその内容は、ちょっと込み入ったものになりそうな雰囲気だ。

「ま、小学校の時よりかは格段の進歩か。方向性は間違つてないけど……」
「マダマダかな。」

さつきから笠谷さんは独り言のような、それでないようなことを言い、「本当にお子様よね?」と私に同意を求めるように、一いちらを向きながら苦笑混じりの親しみのこもった笑みを向けた。男なら確実にダラしなく顔が緩む可愛らしい顔を向けられたところで、正直なんと答えていいかわからない。

「しかも荒井さん、『桃田』に少し似てるしさ。特に横顔、時々ドキッとしたしゃうんだよね」

(え?……桃田?)

何処かで聞いたことがあるような名字……だつた筈だが、思い出せない。それに、妙になんか引っかかる。モヤモヤした煙のようなものが頭に中を立ち込めていく。

「それよりね……荒井さんって、好きな人いるでしょ?」

『桃田』という名前が気になつて、「何処で聞いた名前だつだけか?」とウンウン頭を捻つて考えていたら、思わぬ方向から剛速球並みの質問が頭を貫通し、思考が止まつた。

頬が徐々に熱くなつていく。おそらく顔は真つ赤だらう。
某クイズ番組だつたら、笹谷さんは「はい正解!」と机を叩きながら言うキンキンの一聲と共に、もう一段階上の席に座れるほどズバリな直球。これが数年後の私の性格なら、「もちろん! リバー・フェニックスに決まつてるジャン、YO!-!」とラップ一喝しく手を前に突き出しポーディング付きで即答できるが、この時は「山野中学校1年8組出席番号2番の控えめな女子中学生」でしかなく、この頃は「ラップ」の「ラ」文字ですら世間での認識度は超低い。
だからといって、この話題は避けたいとハッキリとは言えないし、オマケに笹谷さんはお互い^{わだかま}蟠りが取れたと言つても、ついさつきの話だ。すぐに、

「私の好きな人は、1年9組のバスケ部の田富君です!」

……なんて堂々と宣言できるほど進展したとは正直思えない。それに好きな人の名前は、まだ和子ちゃんと幸子女史にしか教えていなかつた。

「……ああ、いいのいいの! 別に無理矢理聞こうって訳じやなの。けど、好きな人つて『尾島』じゃないでしょ? むしろ苦手な感

じ?」

笹谷さんの言葉にハツとして顔を上げた。

今まで「尾島となんかあるでしょ? アヤシイ」とふざけて言われたり、仲を疑われて睨まれたことはあれども、「尾島のこと、好きじゃないでしょ」と正面から理解してくれたのは和子ちゃん以来だつた。思わず盛大に頷くつと思つたが、彼女の表情が寂しそうな苦いような感じだつたので引き攣つた笑みしか出来なかつた。

「あ……えー、うん。ど、どちらかと言えば苦手、かも知れない……」

…

笹谷さんは言つにくそつに言葉を濁している私に、気分も悪くせずには頷きながら「そつか」と息を吐いた。例え私にとつて尾島は嫌な奴でも、笹谷さんにとっては元クラスメート。映画だつて見に行くほどの仲間みたいだし、もしかしたら男女の域を超えた大親友かもしれない。そんな彼女の前で遠慮なく「そりやもう、超絶苦手つづつかあ、むしろ嫌いの域なんつスよお(笑)」と軽々しく肯定するには憚はられた。

でも。

こうして笹谷さんに「私と尾島はなんでもない」と認識してもらえたのは喜ばしいことだ。そういう噂が広まれば少しは「原口美恵」の心も穏やかになるだらう。いや、是非ともやうなつてほいしい。そうすれば私のバー部でのポジションも過ごしやすくなると、知らず知らずのうちに都合の良い計算が働いてしまつた。この際、笹谷さんから原口美恵にその旨を伝えてもらえればもっと確実なのが、生憎彼女達は絶交中である。だからレバーリングして笹谷さんとも話す機会もあつたのだが……。

「……やつぱ、やつだつたんだね。お、あいつの性格じやあ、ねえ

？」

本当に仕方がない連中ばつかだね、と肩を竦めて溜息をついてい
る笹谷さん。その姿は本当に厭きれ正在るといふ訳ではなく、しつ
かりもの姉がどうしようもない弟を見守るような感じだ。

「本当に『ロクでもないんジャー』のメンバーってどうしようもな
から。『ブイとこうか、ホント子供と言つが……。今ならわかる、
『桃田』の言つひと間違つてない、ガキくさいアホな連中かも」

その瞬間、頭の中で笹谷さんが言つたある名前がパチンと弾けた。

『桃田』

……そり、思い出した。彼女の名前は確か「チビ猿」に苦い失恋を
体験させた浪花の転校生の名前じゃなかつたか。
(しかも笹谷さん、私に似てるつて言わなかつたつけか?)

「……荒井さん、どうしたの?」

おそらく険しい顔をしながら固まっている私に向かつて、笹谷さ
んが訝しげに聞いてきた。「なんでそんなに顰め面なの?」と軽く
眉根を寄せている彼女に、慌てて「なんでもない」と手を振つて答
える。

「や、笹谷さんはどうなの? 誰か好きな人はいるの?」

『桃田』といふ名前は気になつたが、それを聞けば尾島が失恋した
ことを知つていると笹谷さんに白状するようなものである。それに
尾島のことに対する興味があると誤解をされたくないし、話題から逸れる

チャンス！と、焦りながら逆に笠谷さんに話題を振つてみた。

「……え？」

笠谷さんは慌てた様子でどもつた。茶色い目がキヨロキヨロと忙しく動きだし、そわそわしている様子。

(……あ、ヤバい。マズったか？)

こちらこそ笠谷さんのことは言えないらしい。今日親しくなった地味な私に、恋の話を突っ込まれるとは思わなかつたというような感じだ。答えたくなれば答えないでいいし、曖昧に濁されても構わないし、「あ、ごめんね、やっぱり今の無し」と訂正しようとしたら、以外にも笠谷さんは息を整え、ガツツリ乗つて来てくれた。

「あ……うん。実は……ね」

笠谷さんは否定もせず、曖昧に濁しもせず、ハッキリと好きな人の名前を言った。

その名前を茶色のサラサラヘアと涼しい目元を持つ、大人びた笠谷さんの口から聞いた時は、耳を疑い思わず「えっ？」と最大に眉を顰めて聞き返してしまつた。

『桂 龍太郎』
かつら りょうたろう

お気付きの方もいるだろう。彼は『大野小隊・口クでもないんジヤー』の一員であり、クールで一匹オオカミを彷彿させる黒のポジションを名乗る人物である。

「通称・バカツラ」

その通称を呼べる人物は極々一部に限られている。私の知っているメンツでそのあだ名を堂々と言えるのは、「2人しかいない」と

言えばおわかりいただけるだろうか。もつとも、彼は既に『大野小隊・口クでもないんジャー』を脱退しているというのが正しい。

桂君は入学してから一週間も経たずにその名前を校内に轟かせ、知る者はいない程目立っていた。

それも悪い意味で。

入学式の翌日から髪と細く整えられた眉を黄金色に染め、制服は規格外の代物をお召しになり、極めつけは同じ匂いのする素行のよろしくない上級生との派手なお戯れ^{たわむ}。仲間が駆けつける前にその上級生を思いつきりボコつてしまつた。後藤君ほどのガタイ（なんと180センチ！）ではないが、決して名前負けしていない筋肉質な体格と背の高さ、さらに空手の段を持つてらつしゃるヤンチャな桂君には、それ相応の大物がバックにいることもあり、さらに「不良」という肩書に拍車をかける。

そのバックの名前は『山野中の鬼夜叉』。

この付近を統括している「伝説の裏番」と呼ばれ、裏番どころか、むしろ堂々と表番だよ！……と言いたいほど、『山野中の鬼夜叉』の肩書を持つ「桂寅之助先輩」は、なんと桂君の三つ年上の兄様でいらっしゃったのだ！ 在学当時、「山野中きつての史上最悪のワル」とまで呼ばれた桂先輩に、教師も親も手を焼いていた……どころか丸焦げだったようだ。その桂先輩は弟である桂龍太郎君が入学すると入れ替えに無事山野中を卒業され、その後は「美園工業高校」と言うおよそ名前とは程遠い、荒くれ者が多く進学する高校に通つていらつしゃることだ。

『山野中の鬼夜叉』を身内に持つ、桂龍太郎君。

中学に入学して早半年。ほんの少し前はランドセルをしょつていた人物が、数いる先輩方を押しのけて山野中のボスを若干13歳で襲名。「オマエ、本当に中1かっ？！」という無敵な彼の目の前には、敵はおろか、開けて道ができる今日この頃である。

そんな強面の桂君とお互い廊下で「よおー！」とか「おうー！」とか、なんの躊躇もなく挨拶を交わす尾島を含めた「口クでもないんジャ一」の姿に、私を含めた周囲の生徒達は恐怖と尊敬の眼差しを送るのであった。

篠谷せとの恋愛事情～中編～（後書き）

某クイズ番組の名前、わかつたかな？

笹谷さんの恋愛事情～後編～

(笹谷さんと桂……君?)

「どこをどうしたらそうなるのだろう? いくら小学校の時に同じクラスだったとはいえ、こんな大人っぽい綺麗な笹谷さんが、どうしてあの桂君なのか? クールというところは一人とも共通しているような気もするが、笹谷さんにはどちらかというともっと大人っぽく落ち着いた人が合う気がする。不良と言つより頭脳明晰な大人……」
「そう、年上がシックリくる。

思いつきり不可解な顔をしている私に、笹谷さんはバツが悪そうに目線を下げた。

「あ……桂君つて、あの桂君……だ、よね?」

「あの桂君つてなんだよ! と自分で言つておきながら自分でツッコむ、荒井美千子。

笹谷さんは顔を伏せたまま頷いた。今度は笹谷さんが顔を真っ赤にしており、その姿は見た目以上に乙女で、むしろ彼女のようなクールな子が真っ赤にしてるとあまりの新鮮さにグッとくるつもんである。

(……しかし、桂君……)

恋は十人十色。人それぞれ顔が違うのと同じで多様であり、自由だ。いや……自由なのだが。

(何故、桂君! ?)

「あ、アイツ、すごい噂が飛び交つてゐるけど、本当は違うんだよ? 上級生を殴つたのも、多勢に無勢で仕方なかつただけでつ……」

私がよほど歪んだ顔をしていたのだろう。 笹谷さんは桂君の印象を少しでも良くしようと、頬を赤く染めながら力説してくる。 そんなに彼の事が好きなのか。 彼女の一生懸命な説明をとりあえず神妙な面持ちで聞いた。

彼女の話だと、以外にも桂君は友達思いで、弱い者には手を出さないらしい。 裏番長であつた彼のお兄様も、見た目より気さくな人物だという。

（いやいやいや…… 桂兄弟の長所な一面を訴えられたといふで、なんの特典にもならないし。 それに私には一生縁がないと思う。 いや、ここは是非とも縁が無いことを祈りたい！）

例え笹谷さんの言つことは本當だとしても、「火のない所に煙は立たぬ」という諺があるではないか。 それに、嫌な噂が立つてゐるのは事実であつて、その噂の中には女の子が眉を顰めるような内容も含まれていた。 それを彼女は知つていて「好き」と言つてゐるのか。 そう考えていると、 笹谷さんは私の心を読んだのか、急に顔を曇らせ始めた。

「…… 本当は優しいんだけど…… ここ最近なんかオカシイの。 なんだか素つ気ないし…… それに…… 晴美先輩との噂が立つてるでしょう？」

笹谷さんは眉毛をハの字にして目を潤ませてゐる。 まさにその「噂」を考えていただけに、 こちらもどう返していいか困ってしまう。 私は見た目辛氣臭い雰囲気のわりには、 そういう雰囲気になることが苦手だ。 彼女の悲しそうな表情を吹き飛ばすように明るく言った。

「や、でも、う、噂でしょ？ 実際に3年の晴美先輩と一緒にいるところ見たことないし！ あの人、色々な男子と噂があるし、ましてや付き合つてるなんて…… ねえ？ そ、素つ気ないのも、 笹谷さ

んのことを思つて変な噂が立たないようにしていろんだよー。あききつとそりだよ！」

どもりながら慌てて捲し立てた私に、笹谷さんは寂しくクスクスつと笑いながら「ありがとう」と言つた。

「……でも、3年の晴美先輩と付き合つているのは本当かも。これ内緒だけど、夏休みに美恵……原口なんかと桂の家に遊びに言つたら、晴美さんと家から出て来たの。私達、そりやハッキリ付き合つて言つた訳じゃないけど……上手く言つてるかと思ったのに……」

…

だつて、キスまでしたのに……。

ドッカーン！！

あまりの衝撃的な告白に目を剥く美千子、乙女な13歳。

(つーか、中1で実際キスした人物を初めて見たよ、オイ……)

そんなこと、今日仲良くなつたばかりの人に対するいいのだろうか？！ といつこと田で訴えても、当の笹谷さんは俯いたまま。 笹谷さんとのことはさておき、確かに桂君は3年の晴美先輩と恋仲だという噂が飛び交つていた。またこの晴美先輩が、この年頃には珍しい程の恋多きクセ者で、学校では1、2を争う、いやおそらく学校1の色気とボディを持つモテ女だつたろう。アダモちゃんのような純情な美少女、天然な可愛さではなく、自分を良く知り計算された可愛さ。不良ではないけど真面目でもない、ちょうどよいポジションをキープしつつ、イケてる女を演出。3年になってからは最上級生という立場と桂君の彼女の位置を確保したので、やつかみによる女生徒からの嫌がらせは無くなつたようだが、1、2年の頃はそれはひどかつたらしい。

そんな学校1のモテ女こと晴美先輩と裏番長な桂君。

二人の付き合いは親密であり、『毎度おさわがせします』も真つ青な、「中学生にはまだ早いんじゃないか」と真っ赤になるような、「そんなところまで行き尽くしているんだぜ、俺達！」な最強力ツプル。

（それが本当なら桂君は一股をかけたといふことか……。晴美さんと「ムフフ」なことをして、一方で 笹谷さんともキス……）

「……私、本気だったのにな……」

いつの間にか 笹谷さんは顔を片手で覆いながら涙声で訴えている。その姿を見た私は、桂君に対し沸々と怒りが沸いてきた。桂君が「裏番」というのはこの際置いといて、大体中学1年生の分際で二股なんていい度胸である。いくら強面の不良だからってなんでも許されると思つたら大間違いだ。ここは女子プロの皆様（特にダンブ松本様熱烈希望）に竹刀で御仕置されても文句は言えない。さすが「チビ猿」の親友といったところだろう。

「……さ、 笹谷さん。 じつ言つちやなんだけど、 笹谷さんにはもつとイイ人がいると思う。 なにも桂君でなくてもいいと思う。 もつと……大人っぽい年上の人人が合うよ。 笹谷さん綺麗だし、 桂君にはもつたいない。 私は絶対、 そう思う！」

私は 笹谷さんと桂君が親密な友達だったという関係もすっかり忘れて、思わず熱のこもった声でキッパリ訴えた。他人の色恋事にはあまり頭をツツコミたくないし、たいして興味もない私でも、同じ女としてここは黙つてはいられない。こんなこと、 実際桂君当人に聞かれたら「えらいこつちや！！」だが。

笹谷さんは綺麗な茶色い目に大粒の涙を溜めながらこちらを見上げジッと見つめた後、無理して精一杯笑つた。やだ、荒井さん。：「すごい嬉しいんだけど」と言いながら指で目元拭い、グスグス

鼻を啜る。

その時、彼女のある部分を見て、ハツとして息がつまつた。

気付けば雨の臭いが教室に漂ってきた。彼女の心を写すように、ポツポツと降り始めた雨。それは次第に強さを増し、校庭で部活をしていた生徒達を校舎の中に押し込んでいく。いまだ涙を拭つてゐる彼女。衣替えしたばかりの長袖のセーラー服の袖元から見え隠れする手首。

そこには。

手首の内側に貼つてあるのは絆創膏であり、茶色いシミが滲んであつた。

笹谷さんは私が何処を見ていたのかわかつたようだ。私は動搖しつつも何も言わなかつた。その代わりに慌ててハンカチを取り出そうとする彼女にティッシュを差し出し、彼女も黙つてそれを受け取る。騒がしくなる廊下。生徒達の声が近付くと、笹谷さんはティッシュで素早く涙と鼻水を拭いシャンと背筋を伸ばした。若干目が赤いものの、いつもの涼しげで綺麗な笑みに戻り、静かに「ありがとう」と言つたのだつた。

* * * * *

この放課後の数日後、笹谷さんは原口美恵はらぐちみえと何事もなかつたかのように言葉を交わすようになる。が、昔のような友情を復活させることはなく、距離を置いたまま疎遠になつた。

それと同時に、笹谷さんと桂君の恋も、残念ながら「友達」以上には進展しなかつた。それどころか、言葉を交わすことも無くなり、険悪になつていいく。

私達が中2に上がる前、 笹谷さんは桂君への想いを抱えつつも、 一つ上のサッカー部の先輩からの告白を受け入れ、 山野中の「伝説」通り、 公認のカップルとなつた。 それでも、 彼女はずつと桂君のことを探つていた。 直接彼女からハツキリ聞いた訳ではなかつたが、 少なくとも私はそう思つてゐる。

結局桂君は、 噂通り晴美先輩と付き合つていたようだ。

でも、 桂君が色氣たっぷりの年上の女人に引かれるのは、 仕方がないことなのかもしれない。 納得はできなかつたが。 まあ、 この頃の中学生男子の心と身体の事情を、 同学年の女子に理解しようと言われても無理な話だろう。

そんな二股を掛けた桂君。 でも、 私は気が付いてしまうのだ。 彼が 笹谷さんの姿を見かけるたびに、 視線を追つていたことを。 彼女のことを忘れずに、 ずっと気にしていたことを。 それを知るのは、 もう少し後なのだが、 それはまた別の機会にお話ししたい。

そして、 私と 笹谷さんはこの放課後を境に急に親しくなつた。

それは和子ちゃんや幸子女史とは違つた種類の親密さであり、 言葉では説明できないような奇妙な縁だ。 四六時中一緒にいるわけではない。 けど、 一緒に入れば心地良い関係。 減多に会わない親戚だけど、 会えば気心の知れる、 気兼ねない親族のような人。

彼女はこの先、 私が大変な目にあうにも関わらず、 変わらない友情を示してくれた。 彼女自身も大変で不安定な時期だった筈なのに、 黙つて見守ってくれた。

ある事情で彼女とは一時期離れてしまうのだが、 不思議と彼女との縁は切れず、 数年手紙のやり取りが続いた。 その手紙が途絶えても、 年賀状と暑中見舞いで近況を報告しあつた。 その後お互い社会人になり、 彼女が結婚した時に、 涙の再会を果たすこととなる。 まさかこのような形で彼女と縁が続き、 ババアになるまで友情を育む存在にならうとは…… この時は想像もつかないのであつた。

篠谷さんの恋愛事情～後編～（後書き）

今回はホロリとしたお話をしました。けど、こんな中学生いるんかいな？私はノホホンと過ごしていたからなあ、きっと知らないところで色々あつたんだろうな…あつたんだ、と思いつこんで書いてます。イマドキの中学生はどうなんでしょう？

それにしても…今の若いモンは「毎度おさわがせします」わかるかな。当時もそうだけど、今じゃもっと問題になるほどキワドイ内容だったと思う。中山美穂のお宝映像アリ、そして異様に盛り上がった女子プロ全盛期の時代であります。

初めての文化祭？

<11月6日（木曜日） AM・10:31 体育館舞台・本番第
1幕>

「チロリアン？」
「そりや、お菓子だ」
「デカメロン？」
「そりや、少年隊の歌じやよ」
「わかつた、デトロイトだろ！」
「オマエな。そりや、アメリカの都市名だつづーの」
「じゃあ、これだ！ デストロイヤーだな？！」

そう言いながらプロレス技をかけているHセ主人公『マーティ』と、「バ、バカモン！ デロリアンじや……ギブギブ～！…」と叫び、本当に技を受けて痛そうにもがきながら舞台の床を叩く、頭も恰好も忠実に表現している『ドク』。

いかにも「手作り！」満載の舞台の上で、無駄にスポットライトを浴びながらプロレスに戯れる2人。

ワハハハ～！！

挾啓、ロバート・ゼメキス監督様。

信じられないでしようが、こんなしょーもない劇に対しても笑いの渦が湧きおこっています。マジで。

我がクラスメート達が知恵を絞つて台詞をアレンジしてるのはいいえ、「林家キク ウでも言わないようなダジャレに反応するとはなにごとか！」と、舞台袖からそつと観客席に座つて呑気に笑つてい生徒達に一喝したい気持ちを必死に抑える私。

薄暗い舞台裏。近くでは総監督である「片岡君」が、何故か全員

『ランボー』にしか見えないオバはんズラを被り、銃ではなく大型ハリセンを持ったテロリスト達に舞台に出るよう指示している。（ピコピコハンマーの予定だったが、予算の関係上、大型ハリセンになつた）

「ロツキー」のテーマ曲に合わせて出て行く、上半身裸の若干ひ弱なランボー達。なんだかんだと一悶着ありながら、赤のダウンベストならぬ「ちゃんちゃんこ」を着た主人公が「デロリアン」へと飛び乗っていく。

メチャクチャな演出だが、以外にも客には好評だ。

クリスマスの派手な装飾品を付け、どう見てもリアカーにしか見えない「デロリアン」は、「バック・トウ・ザ・フューチャー」の映画音楽とは程遠い「吉幾三の『おら東京さ行くだ』」のテーマ曲に乗つて発進する。主人公の『マーティー』は、「デロリアン」を一生懸命引いている黒子とグレ子の2人に對してトナカイの「ぐくムチを振り、さらに笑いを誘つた。

『……こうして主人公・マーティーは、博士の発明したタイムマシンに乗り込み、東京……いや、過去へとタイムスリップしたのであつた』

吉幾三の快活なラップと歌声が流れる中、体育館に響く和子ちゃんのやけにしつかりとしたナレーション。最早映画の原型から程遠い「デロリアン」の姿と奇抜すぎる音楽に涙する私とは裏腹に、予想以上の生徒達の拍手喝さいとヤジを受けた我が8組。

こうして無事、第1幕を閉じようとしていた。

* * * * *

—TING

「やつぱさあ、映画通りの話じや芸がないわけよ? ちょっとはアレンジを加えないとわあ」

わかるかね、君達?

偉そうに人差し指を「チツチツチ」と振り、学級委員・文化祭実行委員・主なキャスト・裏方の代表数名を田の前にして意見をするのは、不本意ながら主役の『マーティ』を演じることが決まった男。またの名を8組のお騒がせ者である「類人猿」と尾島。

「……それはいいけどさ。そつ言つ尾島は何か具体的な案があるのかよ?」

大江千里のような大きめの黒ぶちメガネを上げながら聞き返すのは、私と違つて正真正銘・生粋の眞面目でキリッとしている成績優秀な「片岡君」^{かたおかくん}であり、「学級委員」且つ「総監督」を務める人だ。

「当たり前だらう、つるちゃん!」

ピクリ。

尾島の向かい側に座つてこる「つるちゃん」と片岡君の太い眉がヒクついた。

「こんなふざけたあだ名を付けたのは、もちろんこの尾島だ。別に片岡君は油ぎつてゐるわけでもなく、『ブツシン』してゐるわけでもない。名字が『片岡』と書つただけ。『片岡=鶴太郎』、故に「つるちゃん」。

何とも安易な命名で、私や江崎君と同じパターンなのが逆に憐れである。

尾島はわざと「パチーン」させる為に呼んでるとしか思えないほど、真面目な片岡君にも毎度毎度絡んでいた。明らかにイラつとしているのに無表情を決め込んでいる片岡君を見て見ぬふりをする尾島。机の上に広がっている資料を指し、片岡君に対抗するようにわざとキリッとした表情で説明して行く。

「実際さ、映画と同じ内容のものを作るとなると、まず100%無理があるだろ？そこで… セットや小道具は一から作るんじゃなくて身近にあるもので済ますんだ。大体さ、『デロ……リ……だっけ？』ま、いいや。ともかくあのタイムマシンだってカツコイイけど、かなり厳しいだろうが？だから、なんか他のもので代用しようぜ。こういうのは身の回りにある物のほうがウケるんだよ。例えば事務のオッサンが使ってるリアカーとかな？」

ヒヤヒヤヒヤといつもの笑いに戻しながら、「な？」と右隣の諏訪君に同意を求めている。ライバルの『ビフ』役を演じる諏訪君はたいして面白くもなさそうに「そつか～？」と、どうでもいい様子だ。尾島は左隣に座っている「尾島＝無理矢理引ッ張り出サレタ被害者其ノ一」である『ドク』役の江崎君に、「なつ？ そう思うよな？！」と肩を強く叩いておどし……いや、説得している。

「で、でもさ。事務のオジさん貸してくれるのかな？ ……あれを体育館の舞台に上げるの大変じゃない？」

バスの中でもないのに弱弱しい声を上げたのは、主人公の父親役である『ジョージ・マクフライ』こと野口君。^{ノグチ}彼もまた「尾島＝無理矢理引ッ張り出サレタ被害者其ノ一」であり、文化祭本番はまだ先だというのに、既に目が泳いで落ち着かない様子だ。今からこんな状態では先が思いやられる。

「そんなんは、なんとかするんだよ！ それよりノグティーよ、今からそんなに緊張して本番大丈夫か？ どうでもいいけど、文化祭前夜と当日朝は絶対飯抜いてこじよー。」

尾島の見勝手だけどもつともすきる辛口な意見に全員苦笑した。ノグティーは「俺、別に裏方でもよかつたんだけど……」と納得しかねるという風に小さく抗議をしている。彼の気持ちもわからなくはないが、まったくもつて適任すぎるキャスティングの為、ここは是非とも内臓に気合を入れて頑張つてもらいたい。

「大変だけど、おもしろい！ 意外とウケるかもよお？」

可愛く尾島の意見に賛同するのは、主人公の母親の『ロレイン』を演じる「尾島＝無理矢理引ッ張り出サレタ被害者其ノ三」の島崎さんアダモちゃんだ。毎度毎度のことだが、彼女の無防備な笑顔にこの場にいる男子の顔が緩む。無論片岡君とて例外ではない。

「やつぱし？ やつすが、アダモちゃん！ 可愛い子は一味違うなあ～」

照れもなく思いつきり嬉しそうに頷く尾島と、「やだあ、尾島君つたら相変わらず上手いんだからあ～」と何気に尾島の言葉を否定しないアダモちゃん。2人の間には花が咲き乱れている草原が広がつており、ウフフ、アハハハ～と手をつけないで無邪気に踊つている「ハイジ＆ペーター的な景色」が垣間見える。それとは反対に、他の人達には「……まだよ、この一人」という空気が流れ、隣の諭訪君などは「バカバカしい」とだらしなくイスに寄りかかった。

「ウオッホン！……あ、え～と、他のみんなはどうだ？ 監修の荒井はどう思う？」

「は？ わつ、わたし？！」

片岡君が急に話を振ったので、尾島とアダモちゃんの世界を適当に流していた私は慌てて頭を上げた。既に全員の視線がこちらに集中している。しかも尾島からは「なんだあ？ なんか文句あるのか、テメエつ？！」という内容の熱い視線……どじろでない熱光線ビームを目から発射中。「こにはやつぱりや、映画に忠実にいこうよ！」という私の控えめな意見は陽の日を見る前に瞬時に破壊されてしまった。まあ、この人数の前で言えるような勇気があれば、入学当初から「類人猿」ときに苦労はしない。不本意ながらも、ヤツの意見を肯定するような言葉しか出なかつた。

「え、まあ……確かに『デロリアン』を実際作るとなると……限られた材料ではちょっと、大変かも……しれない」

「ほれみろ！－ ま、当然だよな。つーことでも、やつぱりにはリアカーにしようぜ？ もちろんそれだけじゃつまらないからや、各自家にあるクリスマスの飾りつけでもすりや、あつとは映えるだら」

（そういう問題か！－）

アダモちゃんの時は打つて変わつて、私に対してもいつも強気で畳みかけるような発言に戻る尾島。余りの豹変ぶりに言い返す氣力すら出でこない。毎回私がこのような扱いを受けているので、間違つても「尾島と荒井はアヤシイ」という噂を8組の連中は誰一人として信じちゃいなかつた。

（おかげで最近噂も下火気味。バンザイなことこの上ない。……なんだけどさ……）

それでもイマイチ納得いかない。「いつたい私が何をした？ ええ？！」と一度チビ猿を締めあげたいところだ。先日の笹谷さんのあの意味深な言葉はいつたいなんだつたのだろうか。やつぱりあれ

は彼女の勘違いといふところなのか。

(…まあ、それはいいとして)

そんなことよりも、心の中での見事にショボくなつた「デロリアン」に落胆を隠しきれない、監修・荒井美千子。一方、細かい設定や台本作成を仰せつかつた私の賛成ともとれる意見を得て、一気に機嫌良く話を進めるチビ猿。

さらに勢いに任せて「衣装は赤いダウンベストじゃなくてさー、赤いチャンチャンコでよくね?」だの、「いつそのことテロリストはランボーにしちまおうぜ」だの、「台詞ももっと捻つてさーこんなのどうだよ?」など、人がさんざん苦労して集めた資料や台詞を書き出した台本に勝手に付け加えていく。

そのうち他の人からも次々とアイデアが出て来て、いつのまにか多くの意見が飛び交い、私以外の生徒達は盛り上がつっていた。今回ナレーションをやることになつた和子ちゃんも珍しく、全員和気あいあいとなつた尾島の意見に反対する様子はない。

だいぶどころか、かなりオリジナルからかけ離れた「バック・トウ・ザ・フューチャー」。それもまたクラス全員が協力して作り上げる文化祭の醍醐味の一つと言わわれれば、私の細かな意見などは無粋というものだろう。

(……ロバート・ゼメキス監督、ホントスンマセン。どうか、どうかお許しください…)

私はクリスチャンではなかつたが、心の中で天を仰いで十字を切つた。

初めての文化祭？（後書き）

「」で映画ファンの皆様にお詫び申し上げます。ショーもない内容でけしからん！など、お怒りだとは存じますが、広い心で見守つて下さるとありがたいです。

さて、文中の「プツン」、流行語大賞にも選ばれたある意味すごい言葉です。普ツンと言えば、片岡鶴太郎の「鶴ちゃんのプツン⁵」でござります。これも大好きな番組でした、ほんと懐かしいですねえ。

初めての文化祭？

＜10月29日（水曜日） PM・04：17 体育館舞台・リハーサル＞

ダンダンダン、ガコン。
ナイシシュー。
(……)

「おーい、黒子とグレコ、試しにリアカー引いてみてくれ
「江崎！ 尻向けるな！ もっと観客側に身体向けるよ」

期待を裏切らず真面目に声を張り上げて指導するのは、黒ぶち眼鏡の片岡君。出演者達にあれこれ指示し、ビギツイ台詞も笑って言おつものなら容赦なく激を飛ばす鬼総監督化している、らしい。

ダンダンダン、キュキュ、バン、ダンダン。
(……)

「尾島と諷訪、もつと中央に寄ってくれるか？」
「声小さいぞ、ノグティーーー！」

これ以上ないくらいに丸めたボロボロの台本を振りながら、唾を飛ばす片岡君。普段のキリリと落ち着いた雰囲気とは最早かけ離れている、ようだ。

「片岡がクラスメートをあだ名で呼ぶところ初めて見たよ
「ほんと、なんか思つたより熱いよね……イメージが崩れた」

普段の様子から想像がつかないくらい豹変している片岡君の姿を見て、舞台袖でボソボソ囁き合う女生徒達。

ダンダンダン、ガコン。……ダンダン
ナイシュー

(……)

「普段真面目な人つてさ、一度熱くなると手がつけられないって言うじゃん？ 怒らすと怖いっていうし。確か山野小だよね、片岡つて。やっぱ昔からあんなに真面目だったのかな？ ねえ、ミツちゃん。……ちょっと、ミツちゃん！」

「えっ？」

急に肩を叩かれた私は、慌てて舞台に引いてある幕の隙間から視線を戻すと、呼びかけられた声の方に振り向いた。叩いたのは和子ちゃんで、その横には幸子文史が「聞いてた？」という顔でこちらを見ている。

「え？ あ、か、片岡君ね。すごいよね、こんなに真面目に指導してくれて、さすが学級委員」

咄嗟にアハハハと誤魔化し笑いをしてしまった。耳に入つて来た話題にからうじて答えたつもりだが、後半はまったくもつて聞こえていなかつた。和子ちゃん達には悪いが、現在私の全てを支配している関心事は、舞台で演じられているショボい劇やそれを熱く指導している片岡君などではなく、分厚い幕の向こう側で繰り広げられている神聖な部活動に他ならない。

ほんの数メートル先で行われている、バスケ部のショートやバスの練習。

ナイスなタイミングでブッキングした、我が8組のリハーサルの

使用日とバスケットボール部の体育館使用日。こんな間近で堂々とバスケットボール部を見れる機会はそう滅多にないことだし、次何時めぐつてくるかわからないほど貴重な時間なのである。できることならこの幕を全て開け放つて観察したいところだが、ボールは飛んでくるわ、お互いの気が散るわ、せつかくの劇の内容が漏れるわで、仕方なく中カーテンを引きさらには幕を下していた。監修などという立場でなけりや、出番のない出演者や裏方のようにのんびりと上のベランダからバスケット部の練習姿を拝みたいところだ。

「そっかあ、ミツちゃんは幕の向こう側が気になるよねえ？」

幸子女史の意味深な声にドキッとして慌てて人差し指で「シーツ！」と言いながら、スペイのように辺りをキヨロキヨロ見回す。本気で焦っている私の思いつきり拳銃不審な態度に、和子ちゃんと幸子女史は「ククク」と笑った。幸いにも周りにいた女子は少ないし、ほとんどは舞台上に集中しており、尾島達の言つ台詞に笑っている。

『大丈夫だつて！ 周りは気付いてないよ。ていうか、ミツちゃん、思い切りアヤしいし……』
『どれどれ？ 田宮^{たみや}、部活でてるんだあ。超ラッキーだつたね』
『…………うん』

「」と顔を寄せて囁き合つ、ヌリカベ……ではなくこの女な3人。

私は頬を染めながら和子ちゃんと幸子女史に微笑み、再び幕の隙間からバスケット部の方を覗く。和子ちゃん達も後ろから同じように覗いて……というより大胆にも舞台袖から身体を出した。私も同じでとばかりに2人に続く。

『けつこう部員少ないね』

幸子女史の言つとおり、部活に参加している生徒は少なかつた。

3年は既に引退しているし、文化祭が間近なので部活は自由参加なのだろう。顧問の先生も不在なせいか、部活特有の緊迫した空気は流れでおらず、練習も流している程度だつた。

人数も少ないので、広々と体育館全面を使つていているコート。しかも男バスのショート練習に使つてゐる「ゴールは舞台側。1年2年もごちゃ混ぜに並んで次々とドリブルしたと思つたら、片手でボールを器用にカゴに入れしていく。おそらく「レイアップショート」というやつだ。順番が回つて来た田富君も、キレイなフォームで身体をフワリと浮き上がらせボールをリングに入れた。絵になる完璧なシートの様（……おそらく。良くバスケを知らないので確証はない）に思わず胸の前で両手を合わせ、感動の溜息を漏らしてしまつた。

『……こりゃ、重症だね』

『ホント、完璧に田がハートになつてるよ、ミツちゃん』

『それにして、田富ねえ。確かに1年男子のなかではマシな部類だけども、けつこうボーッとしてるよ？ 半分天然入つてるし』

何故同じ年の男子を好きになるかなといつてユアンスのキツイ意見を披露したのは和子ちゃんだ。以前にも述べた通り、和子ちゃんは同年代の男子生徒に対して評価が厳しい。「男は絶対年上の大人でなければならぬ！ ガキはお呼びでない！」という搖るぎない信念を掲げており、少年隊のヒガシのような完璧な男がアベレージでは、そりやお呼びでないだらう。否が応でも厳しくなるのは当然と言えば当然なのが。

『……和子さん、相変わらず同学年の男子に厳しいッスね。それよりもさ、ミツちゃん。前から言おうと思ってたけど、田富の事そんなに好きなら、「仮ネーム」書いてもらえばいいじゃん？』

頼もうか？

「ええつつ？！」

仮ネーム。

それは山野中の恋愛事情において重要なアイテムの一つである。

我が中学校では、制服に学年色のネームプレートをつけるのが校則で決められているのは、9部を読んだ読者は「存じであろう。各自一つしか学校から配布されないので、万が一にも紛失した場合は、近くの大葉書店で注文しなければならない。新しいネームが出来るまでの間は、簡易性の手書きの名札である「仮ネーム」を付けるのが決まりであった。

その「仮ネーム」。どういう経路かは未だに不明なのが、好きな相手に「^{それ}仮ネーム」を渡して名前を書いてもらひたというのが、当時生徒達の間で流行していた。手つ取り早く言えば、「仮ネームを書いてください」と言つことは「あなたのことが好きです」と告つたも同然であり、ラブレターなんぞ渡すよりも遙かに効果が高いアクションだったのだ。

しかもその「好きです」のランクが、友達から本命までと幅広くアバウトだったのも生徒達に安心感をもたらした。ガチガチのマジ本命のような重い空気を臭わすことなく、「ねえ、ちょっと、これ書いてくれない？」と軽く頼むことで照れ臭さを誤魔化せるという、なんとも都合のいい代物だったのである。実際に仲の良い女子同士で交換している人もいたし、憧れの部活の先輩に頼む（同性同士を含む）人もいた。中にはコレクションのように仮ネームを収集している物好きさえもいた。（当時のレアアイテムは、もちろん桂児弟の仮ネームである）

バレンタインや卒業の時にもらひ第2ボタンや本ネームのよう冬季限定ではなく、「年中無休の24時間OK！」というイイ気分のコンビニのようなお手軽さ。これでは生徒達の心を鷲掴みするの

も無理はないだろ？

幸子女史の思いがけない提案に、「スターどきり（秘）報告」で仕掛けられた芸能人のような大声で反応してしまった私。慌てて自分でも口を押さえたが、和子ちゃんや幸子女史にも「ちょっと！ 声大きい！」と横から手を伸ばして口を押さえられた。しかもシート練習が終わってコートの中央に集合しているバスケ部員が、私の声に反応してこちらを振りかえる。もちろんそのメンツに田宮君も入つており、女子の中には小関明日香さん（じせきあすか）も成田耀子さん（あの大オナン）も入つていた。カーッと顔全体に血が巡り咄嗟に俯く。

「いたつ……」

幸子女史が叫んだと思つたら、自分の頭にも「パコン」という爽快な衝撃音を感じ、痛みで頭を押さえてしまった。和子ちゃんも「いつたあ！ ちょっと、痛いじゃないのよ……」と文句を垂れながら、すこし勢いで後ろを振り返つた。

（え？ ちょっと、なに？！）

頭を押さえながら後ろを見ると、真後ろに整つた顔があつて不覚にもドキッとしてしまつた。そこには、細く丸めたクシャクシャな台本で後頭部を叩きながら睨んでいる「チビ猿」が約一匹、仁王立ちしていた。

少し前までは見下ろしていたのに、最近は生意氣にも目線の高さが近いせいで「チビ猿」から卒業しそうな勢いだ。よほどの成長期なのか。食べる量も半端ではなく、親御さんには弁当を2つ用意してもらつていいらしい。朝練の後早弁、昼間にもう一個弁当を取り出してかつこんでいる。その他にもコンビニで「ナイスティック」だの「まるごとソーセージ」だの「アップルパイ」などを買ってはムシャムシャと食べていた。

（黙つていれば結構イイ顔なのに……。おまけに性格が温厚で、も

う少し背が高くて、頭が良くて、私に優しければ言つこと無しだな)
しかしそれは最早「尾島」ではない。自分の都合のいい妄想に慌てて叱咤し反省をした。ましてや愛しの田富君ターリンが傍にいるというのに、なんていうことを考えるのだ！まだまだ修行が足りぬぞ、荒井美千子！！

尾島は学校指定のジャージではなくサッカー部専用の白とブルーのジャージを着用しており、足元は相変わらず踵を踏んだ汚い上履きだった。

「……オマエらな。人がせっかく部活休んで劇に集中してるつちゅうに、なに呑気にバスケ部なんか見てるんですか？！ 特にチユウよ、そんな大声出せるんなら、監修としてつるちゃんと一緒に唾飛ばすぐらい指導したらいかがですかねえ？」

ブチッ。

(……口、口ノヤロ……)

確かに尾島の言つことは一理ある。が、果たして私が指導したところで、この「リアル磯野カツオ」が大人しく従うかどうかは、それはまた別の話である。一瞬キレそうになるも、今はそれどころではない。なによりバスケ部の視線をどうにかしなければならないしましてやどもりながら怒る姿など田富君ターリンに見られたくなかった。引き攣り笑いを浮かべながら「そつツスね、さあ、舞台稽古に戻りやしきう、親分」とドツ端チングピラよろしくせつやと舞台袖に促そうとする前に、和子ちゃんがすかさず尾島の頭を叩き返した。

「野生猿はイチイチつるたこのよー 第一リットちゃんが言つたこと、アンタ今まで一回でも聞いたことあんの？ 一度も従つた事ないじやんつ！」

「さうよー 私ただけじゃなくて、他の子もベランダから見てるでしちうがー 男のくせにネチメチと細かいんだから…… 尾島つて絶

対うるさい小舅になるタイプだよね

「ホントサイアクう～」

まるで狩人のように息の合つたハモリ方でまとめる2人。

和子ちゃん、さすが私と尾島の関係を見極めている！……と言い
たいところだが、素直に喜べないのは何故であろう。幸子女史も未
来の尾島の姿を見通せるその千里眼に頭が下がる。尾島は途端にヒ
クリと顔を歪ませ、台本を叩く手を止めた。

「……じゃあなんですか？ 男は細かくちゃいけない法律もある
んすかつ？ 人のことうるさい小舅呼ばわりする前にさあ、自分が
嫁にいけるか心配しin、このヌリカベ！ このままだとアンタら全
員ババアになるまで独身決定！ 間違いねえよ、賭けてもいいね」
「「なんですつてえ？！」」

いつものようにヌリカベ組と類人猿がギヤンギヤン言い争いを始
めたので、これはいよいよ舞台袖に引っ込まれなければと3人の姿を
バスケ部員から隠すようコートに背を向け、身体を押して退場しよ
うとした私。それを止めたのは、以外にも背後から聞こえてきたボ
ールを弾ませる音と低い声だった。

〔尾島あ！〕

4人とも声のする方を向けば、集団で固まっているバスケ部員か
ら離れて軽くドリブルして近づいてくる背の高い男子生徒。ジャ一
ジの色からして2年生であることは間違いない。

「暇ぶつこじてるなら、ちいと顔貸せや？」

疑問形のわりには否とは言わせない命令口調。誰かさんにも負けないくらい気が強そうで、恐ろしいことにニタニタ笑っているその表情は1年後の尾島の姿のようだ。この顔は見たことがある。もちろん密かにバスケ部を遠くから眺めているので、自然と目に入るのだが、それだけじゃない。この先輩は入学当初、何回か8組に顔を出しては、尾島のことを呼び出していた。

その後ろのバスケ部の集団では、一人の女生徒が「コートに下りてきなよ」というよう手招きしながら笑っている。「ひらもやつぱり2年生だ。

呼ばれているのは尾島一人。その尾島は。

「チフ……」

嫌そうに小さく舌打ちした後、横を向いて溜息を吐いた。

初めての文化祭？

<10月29日（水曜日） PM・04:31 体育館・バスケットボールコート>

尾島あ！

暇ぶつこじてるなら、ちいと顔貸せや？

バスケ部の2年生の声に、尾島は近くにいた人達にしかわからな
い程度の舌打ちと溜息を吐いた。

これには私達3人も自らの怒りを納め、「上級生に対してそれは
マズイのではないか？」というように顔を見合させる。当の尾
島は何とも思っていないようだが。

「……別に暇じゃないッスよ、へんみせんぱい辺見先輩。御覽の通り、文化祭のリ
ハーサルなんです。俺一応主役だし？」

尾島はさすがに上級生相手だからかいつものようにニヤニヤ顔で
はなく、苦笑いをしながら肩をすくめた。「辺見先輩」と呼ばれた
バスケ部員は舞台まで近づき、ボールをダンと舞台に置きそれに寄
りかかる。

「なーに言ってんだよ。女子3人に囲まれて仲良くチチクリあつて
んじゃねえか？ ホント、相変わらずだなあ、オマエ」

「こ、こんなヌリカベみたいな奴らに囲ましても嬉しくもなんとも
ありやしませんよ！ どうしたらチチクリあつてるようになれるん
ですか？ 辺見さん眼医者行つた方がいいんじゃないですか？！」

尾島の大声にバスケ部員数名吹き出した。

「ヌリカベ」という時点で和子ちゃんと幸子女史の目が釣り上がる。もちろん私も例外ではないが、なんせ2年生の前なので今の時点では3人とも言い返すことができない。それよりも、私は先輩に対して後輩らしからぬ尾島の態度にハラハラしてしまった。奴の心臓には毛が生えているのだろうか。それとも野生猿としてのパワーなのか。辺見先輩と言つ人は、尾島の台詞に気を悪くするどころか、「そうムキになるなつて」とニヤニヤ笑いながらボールをポンポン叩いた。

「それよりもさあ、これから試合すんだけど、男子9人しかいねーのよ。一人足りねえんだ。ちょっとだけだから、オマエ出
「ヤですよ！」

尾島は辺見先輩が言い終わらないうちに即答した。心底嫌そうに返答されたのにも関わらず、ニヤニヤしたまま上目づかいで見る辺見先輩。これにはあからさまに尾島も腕を組みながら溜息を吐いた。

「男子がいなけりや、女子部員にかわりに出てもらえばいいでしょうが。……飯塚さん！…男子の試合、出てくださいよっ！」

尾島は躊躇いもなくバスケ部の集団に声を掛けると、手招きをしていた2年の女生徒が「やなこつた」というように顔の前で手を振った。手を振った飯塚先輩と呼ばれた人は、「5時で部活終わるしどうせ1試合くらいしかできないんだからいいじゃん。出なさいよ？」それとも腕鈍つたから恥ずかしいのお？」と笑う。飯塚先輩の挑発するような意見に続くように、「尾島、降りてこいよー」とあのデカイ後藤君もデカイ声で嬉しそうに手招きした。後ろに控えている満面な笑みの小関明日香と田宮君も頷く。

(うわあー！)

気の乗らない尾島には悪いが、笑顔の田富君を見れて一瞬胸を弾ませる私。それとは反対に尾島は超不機嫌オーラを増加し、私の幸せオーラも容赦なく弾き飛ばしていく勢いだ。「YES」の返事をしないで黙っている尾島。辺見先輩は意味深に目を細め、「それともさあ」と身体を起こして器用にボールを指先で回した。からかうよつよつくりと口角を上げる。

「オマエが、本当にバスケやりたくないわけ？……それってマジである女のせ」

「わかつたよつ！……！」

再び辺見先輩が言い終わらない「ちかこ」、尾島の鋭い一声がそれを遮つた。

あまりの大きな怒鳴り声に、一瞬シーンと静まり返る体育館。「一体なんなの？」というふうにビックリしている和子ちゃんや幸子女史。8組のキャスト達も「なになに？」と次々と幕から顔を出した。辺見先輩の声が聞こえなかつたのか、「あの一年生、なんで怒つてるんだ？」というようになにバスケ部の連中も固まつている。

私も自分が怒鳴られたようにビクッと心臓が跳ねた。が、「あの女」と聞いた時点でわかつてしまつた。尾島の一喝した気持ちに気が付いてしまつた。

ある名前が頭の中をかすめ、笠谷さんとあれこれ話をした先日のことを思い出す。聞いてもいよいよ、「どうでもいいんだけどね」と言いながら彼女が話してくれた、奥住さんから聞いた話とは違つた視点での『浪花の転校生』と尾島の話を。

『本人はすつごい否定してたけど……もう、本当に好きだったみたいなんだよね、桃田^{ももた}の事。夏休み明けてもね？ 無理矢理カラ元気で頑張っちゃって。けどみんながいないところでは思いつきり落ち込んでるんだもん。まあ、私達にも原因あつたから？ ……なんか可哀想で、ね。桃田も仲の良い女子がいれば少しは違っていたかもしないけど……つて、これ、私が言える立場じゃないね。さすがに尾島も正月明けころにはいつもの元気を取り戻してたけど、でもよほど心に堪えたのかな……結局あんなに好きだつたバスケもやめちゃうし。辺見さん、熱心にバスケ部に勧誘したのねー。なんかサッカー部に入っちゃうし。ねえ？』

チラリと見た笠谷さんの顔が、「バシン！」という衝撃音で消えた。

尾島は持つていた台本を床に叩きつけると舞台から飛び降り、辺見先輩からボールを奪い取った。傍から見てもわかる過ぎるぐらい顔が赤く、ギロリと効果音付きの迫力で上級生を睨んでいる。まるで怒り猿のようで、いつものおふざけ半分とは違う本気モード。直接睨まれているわけでもないのに、「桂龍太郎^{かつらりゅうたろう}」に引けを取らないくらいの眼力に震え、握る手に力がこもる。

(……そ、そりや、触れられたくない過去のネタを出されちや、怒るの当然だよね……)

例えこの男が私にとつて好ましい人物でなくとも、好きな女の子との苦い思い出を無理矢理引っ張り出され怒り心頭の姿に、キュウっと胸が締め付けられた。同時に人の傷に土足で踏み入る大人げない辺見先輩に対して不快な気持ちになってしまった。

「やれやれ尾島！ 辺見サンなーんか伸しちゃえってんだ？！」

上から急に大声が振ってきて、全員声のした方へ振り向いた。

尾島を煽ったのは、いつのまにかベランダに上っていた「諏訪君」だつた。声は軽いふざけた感じだけど、眼は……笑つてない。諏訪君の隣には島崎さんアダモちゃんと仲の良い友達がいる。一斉に「尾島くん、頑張つてえー」と呑気な声援を送り、まるで緊迫した空氣の中を通りすぎるアホウドリのようだ。

「おい、尾島……」

総監督の片岡君ひがわきみが私達の隣に並び、ケンカが始まりそうな雰囲気を察して心配そうな声を上げた。いつもなら威厳たっぷりの片岡君でも、上級生にガンを飛ばしている尾島に対し意見を躊躇している様子だ。

「……片岡。もう少ハーサル、俺の出番ねえよな？」

尾島は辺見先輩から一寸の視線も逸らさず唸るよつな低い声で、片岡君に有無を言わさないように黙らせた。尾島は主役なので出番がないなんてことはほとんどない。片岡君はアダモちゃんのピンクの声援にも反応しない尾島の厳しい口調と、久しづりに本名で呼ばれたこの異常な事態に「あ、ああ……」と息を飲むよつに頷いた。

「……セーになくつちや！ 決まりだな？」

辺見先輩は尾島的眼光に一瞬怯み、「やべえ、本気で地雷踏んだか？」と緊張したものの、すぐに挑戦を受けるような表情に戻った。それも何故か徐々に悪戯つ子のような笑顔。尾島が乱暴にバスしてきたボールを難なく受け取り「おしつ！ 試合すんぞ！ 1年対2年でやるから、飯塚、審判頼む！」と次々指示して行つた。不安そなバスケ部員達も辺見先輩の声で散らばっていく。

せつかくのリハーサルが、違う流れになりつつあるこの状況。

私達は顔を見合させて「どうしよう……」とこう無言の視線を交わした。体育館がザワつきだす。勇敢にも和子ちゃんは、ジャージを脱いで乱暴に舞台の上に置く尾島に「あ、あのさ……先生来たらさすがにちょっとヤバくない?」と屈みこみながら小声で言つた。

「ああっ?!

尾島は超不機嫌な声で和子ちゃんを見上げた。

先程みたいな恐怖の眼力は多少なりとも軽減しているが、険しい目つきと眉間に深く刻み込まれた皺が「男の戦いに女が口出しすんな」と物語ついている。尾島の迫力に押されて言葉を飲みこんだ和子ちゃん。「関わらないでおいいよ……」と私が肩を叩こうとした時、尾島と視線があつた。

その時の私は、どのような顔をしていたのだろう。

不安そうな苦い顔をしていたのか。

気の毒そうに憐れんでる顔をしていたのか。

それとも、「そんな争い」とよそでやつてくれ「という顔だったのか。

尾島は眼を見開き、動搖したように揺らめかせた。
でもそれは一瞬の出来事で、すぐに口を一文字に引き締め、背を向けた。

尾島が1年生のバスケ部員の方へ駆け寄ると、真っ先に後藤君の胸ぐらを掴んで何か言った。後藤君は慌てて首を振り顎で女子部員の方を差すのと、田宮君達1年生の部員が2人の間に入るのが同時だつた。尾島が女子部員の方を見ると小関明日香（じせきあすか）さんが飯塚先輩の後ろに隠れる。後藤君は小関明日香さんの方へ険しい形相で睨んでいる尾島の肩を叩いて、田宮君達を交えて軽く円陣を組んだ。

話し合いが終了すると尾島は一人眼をつぶりブツブツとつぶやきながら、首や手首足首を回して身体をほぐしだした。一通りの柔軟が済むと散らばってドリブル、バス、ショート練習を始める。離れたところでは辺見先輩が、1年の方をチラチラ見ながら2年の部員と真剣に話し合いをしていた。

（あの辺見さんと言う人、「あの女のせいにバスケやめたのかよ」「つて言いたかったんだろうなあ……）

尾島の事がまだ諦められないらしい辺見先輩。あれは完全に尾島にバスケをさせる為の挑発だ。尾島もそんなのいつものように笑つて流せばいいのに、と思った。本人もそんなこと百も承知、だと思う。

バスケのコートをぼんやり見つめた後、足元にある尾島のサッカー専用のジャージと叩きつけられたクタクタな台本に目を落とした。台本を叩きつける程、今まで見たことない迫力のガンを飛ばす程、過去に囚われている尾島。

（……結構苦労して作った台本だつたんだけどな……）

あたかも自分が叩きつけられたような気分になつたのは、多分被害妄想だろう。

こんなモヤモヤした気持ちになるのは、「文化祭」の準備のせいで普段と違う生活パターンだからに違いない。

ましてや。

どうでもいいと思っていた尾島が、いまだに『桃田』との思い出を忘れられないことにイライラしてるなんて……絶対、氣のせいに決まってる。

初めての文化祭？

<11月7日（木曜日） AM・11：14 体育館舞台・本番最終幕>

「ドク、よかつた！ 無事だつたんだね！」

無事に未来から戻つて来た『マーティー』は、テロリスト達に大型ハリセンで叩かれている『ドク』を助け出す為、本人の得意技である飛び蹴りをお披露目した。ひ弱なテロリスト達は出番が終わつたとばかりに舞台袖へ逃げこんでいく。

「ドク、ドク！ 生きていて良かつた！」

「マーティーの手紙のおかげで、このとおり無事じや……」

『ドク』は着ていた白衣の前を開き、胸を守るよけに付けていた「お椀」を見せた。この後、ズラの上に被つていた「安全第一」とあるヘルメットを外し、ここでお互に熱い抱擁を交わし「メテタシ、メテタシ」でエンディングを迎える筈。

……が、ここで問屋があるさないのは、8組の運命なのだろうか。

ヘルメットを取つた拍子に、勢い余つてズラをも一緒に取つてしまつ、江崎君。

一瞬固まる舞台上の2人。啞然として袖で待機している出演者とスタッフ。ざわつく観客達。

(バ、バカヤロー！)

江崎君の粋なアドリブの計らいで、当の本人も尾島もすっかりセリフを忘れている御様子。こちらを見た尾島と目が合つた。舞台袖の私が「固まつてないで、セリフをしゃべるよ！」というジェスチャーをするのを見て、ハツと我に返つたようだ。江崎君つたらズラも一緒に取つちゃつたよ 事態にか、私の必死の形相にかわからないうが、尾島は必死に笑いを押さえながら「バカ！ 取れたぞ！」と小声で江崎君にズラを被せる。しかも被せたズラの方向がキッカリ90度違うとはどういうことだろうか？ この期に及んで「ウケ狙い」なんかしてどうする！

「ククク……あ～いやあ、無事でホント良かつたスねえ？ プハッ！ え～なんだ、ビックリした。いきなり髪フサフサになつた……つて違う！ イヤイヤ、グリコつて本当におもしれえなあ～！ ま、メデタシメデタシ！ ヒヤツヒヤツヒヤ～！」
「……そ、そうか？ ハハハ……」

若干台本と違う台詞を吐きながら笑つて誤魔化そうとする2人（うち一人はマジ笑いで、もう一人は引き攣り笑い）。

舞台袖にいる私や片岡君に向かつて『なんでもいいから早く最後のナレーションしろよ～』と涙目で訴えている。「どうみたって今のおあなた達、素丸出しですよね？」の8組の動きに、以外にも観客は大喜びだつた。

「宇井、最後のナレーション！ 中川はカーテン引くよう急いで伝えて！」

真面目な片岡君は笑うどころか慌てて周りに素早く支持して行く。幸子女史は拳で笑いを堪えながらなんとか頷き、奥の舞台装置を管理している放送部の方に駆け寄つた。同時に和子ちゃんの笑いを我慢する震え声のナレーションが響く。私は次第に湧いてくる笑いの

拷問に耐えながら、他のスタッフに舞台に上がる準備をするよう慌てて奥に引っ込んだ。

和子ちゃんのナレーションに合わせるように、左右から自動で引かれるカーテン。体育館に響く生徒達の笑いと拍手。残念ながらこれで終わりではない、これから出演者紹介のフィナーレが残っているのである。

「練習通り並べ！」

唯一笑っていない片岡君の声に従い、完全にカーテンがかかっている舞台上にクラスメートをひきつれて戻つて来た私は所定の位置に立つ。出演者を中心囲むように次々とスタッフも並んだ。全員無理矢理笑いを堪えているような変顔になりながら、宝塚のフィナーレのように鈴付きの星とポンポンを持って待機。一番端の片岡君が奥に合図すると「ジヨニー・B・グッド」の曲の冒頭であるギターの音色が体育館に響く。カーテンの向こうで再び沸き起こる拍手。曲に合わせてカーテンが開け放たれると、拍手の音が倍になつて舞台に滑りこんできた。

* * * * *

<11月7日（木曜日） AM 11：43 体育館舞台傍出入り
口・本番終了後、それから>

「あ～、笑い死ぬかと思った」

尾島のこの意見は、その時8組全員の意見だつたにちがいない。自分達の出し物が無事終わって、興奮というより笑い醒めやらずである。尾島を中心にあれだけ熱心に笑いのアイデアを出した演劇が、江崎 グリコ君のズラ一つでオイシイところを全てを持って行かれたという

事態に、いろんな意味で全員腰砕けである。諏訪君などは相当ストライクゾーンど真ん中だったようで、フィナーレが終わって幕が下りた途端、舞台にしゃがみこんで床を叩き「ヒーヒー」言いながら涙を流していた。

「つたくよお、ワザとだろ？ 本当は狙つてたな？ 僕を出し抜くとは隅におけねえなあ！」

当の江崎君（グリコ）は、そんな尾島の台詞と暴力と共に、称賛なんだか非難なんだかわからない洗礼を受けていた。顔を赤くしたり青くしたり忙しない江崎君（グリコ）。彼は瞬く間に8組の注目人物となり、一躍人気者に躍り出ることになる。

* * *

「尾島あ～お疲れ様！ すつゞこ面白かつたよお！」

数時間後には焼却炉行きになる手作りのセットを、次々と体育館の舞台傍の出入り口から外に運び出されているところに、数人の生徒達が押し掛けてきた。こんな鼻にかかる可愛らしい声は男の声である筈がない。この声は毎日部活でも聞かされている声、しかも私に対するときとはえらいトーンが違う。声の方を振り向くと、案の定原口美恵（はらぐちみえ）と取り巻き連中が尾島や諏訪君達を取り囲んでいた。尾島他出演者達は、衣装そのままで出入り口と舞台を忙しなく往復していたので、その目立つ恰好を目敏く発見したのだろう。

（早速来たよ……）

次の部は2年生が演じる出し物が控えている。なるべく急いで片づけなければならぬのに。出入り口で固まっている迷惑な連中に、「あんたら邪魔だよ」と言つてやりたいが、あいにくそんな度胸は1ミリも持ち合わせていない。

幸子女史もその「キャピキャピ」雰囲気に気がついたのか、『なんなの、あのハーレムは?』と厭きた様子で眼を細め、和子ちゃんに目配せした。和子ちゃんは田玉をグルリと一周しただけで、『そんなんの知るか』と言いつづけないと無言で片づけの方に専念する。

先週のリハーサル以来、和子ちゃんは心底尾島と関わりたくないらしく、接触を避けていた。せっかく尾島の為に忠告してやつたというのに、「ああつ?!」という台詞に加え、ご丁寧にも「ガンたれ」付きで返されたらそりや怒るのも当然である。

……というのは理由の一部であつて、本当はそれだけではなかつたが。

結果的に「野生猿」なんぞに負けたという悔しさと、尾島の並みはずれた運動神経を眼の当たりにして思わず感心してしまったから、らしい。「私としたことが、一生の不覚!!」と言いながらも、相当ショックだった様子。「まあまあ」と励ました幸子女史も尾島を見直したようだつた。彼女は和子ちゃんとは違つて、試合の後素直に尾島に走り寄り、「アンタ、すごい!」と褒めたそつだから。

* * *

辺見先輩率いる2年生と尾島を交えた1年生の試合。

ジャンプボールの為にセンターサークルに入ったのは、辺見先輩。対して1年生のチームは以外にも大きい後藤君じとうくんではなく、一番背の低い尾島だった。

睨み合つ2人の頭上に向けて飯塚さんがボールをトスした瞬間、飛び上がる2人。

背丈では完全に負けている筈なのに。信じられない高さを飛んだ尾島は、辺見先輩と同じくらいの手の位置でボールを触つた。その瞬間ボールが弾かれ、ボールは田富君たみやくんの手に收まり、2年生を振り切りながらゴールに向けてドリブルをすると全員弾かれるように後

に続いた。一番最初に「ゴール下に来たのは尾島。田富君のバスを受けるが2年生のディフェンスが立ちふさがる。そのままショートの態勢に入る！と思わせ、ボールを持つ手を背中にまわして斜め前方にいた後藤君にパスした。フェイク、しかも速い。まるで背中にでも眼があるかのようなノールック。そのボールはしつかりと後藤君の手に收まりショートをリングに向けて打つ。

ボールがガコンとリングに入ると諏訪君の口笛と歓声が体育館に響いた。「おりやあつ！！」とハイファイブをする後藤君と尾島。女子のバスケ部員からも称賛と溜息が漏れた。

「……」

唚然としてしまった。

体育の授業のようなボテボテ満載の試合ではなく、流れるような試合展開。その後も、中学生のバスケの動きとは思えない尾島に、只口息を飲むばかりだった。

* * *

「ねえ、ねえ、一緒に写真を撮ろつよー」

原口美恵はこじりとばかりにカメラを取り出した。尾島や諏訪君達はまんざらでもなさそうに「しあうがねえなあ」とぼやく。その声に原口美恵は嬉々として顔をほころばせ、取り巻きに「お願ひ、写真撮つて」と渡してしっかりと尾島の隣に並んだ。

あのリハーサルの時に、尾島がバスケの試合をしているという噂を嗅ぎつけた原口美恵は、いつものように取り巻きを連れて体育館の中まで押し掛けてきた。もしかしたら、リハーサルを見たいが為に体育館の周りをウロウロしていたのかもしれない。文化祭の準備

をしている時も時々8組まで覗きに来ていた。あいにく顔見知りの生徒は、同じバレー部で天敵第一号らしい私を筆頭とする馬が合わない連中ばかりだったので、堂々と入れなかつたようだ。

彼女は頬を染めて、恋する乙女全開で尾島を応援をしていた。その姿は女の私から見ても素直に可愛いと思つたし、好感が持てた。

原口美恵は尾島がバスケをする羽目になつた理由に気付いてない、と思う。辺見先輩の言葉を聞いていたのは私達3人だけで、本当の意味を理解したのはおそらく私だけだけだつたと思うから。
……もし、理由を知つたら原口美恵はどう思うのだろうか。それで もやつぱり尾島一筋なんだろうか。

「すげえ演劇だつたな」

制服のズボンに手を入れながらハーレムに声を掛ける生徒。山野中で彼を知らない人はいないくらい爽やかな3年生。爽やかさでは佐藤君や田富君も負けていないが、彼に比べて少し幼く見えるのは、やはり2年のブランクがあるからだろう。

ハーレムの中央にいた尾島に声を掛けたのは、サッカー部の元部長である「菊池さん」だった。その後ろには元女バレの部長「松野さん」がいる。噂のカツブルの登場に1年8組の生徒は僅かに色めき立つた。

尾島は菊池さんに「チワッス！」と元気よく挨拶し、原口美恵も「松野先輩、お久しぶりです！」とニッコリ微笑んでいた。松野先輩はおつとりとした控えめな人で、バレーをやつている割には背もあまり高くない。それでも先輩が繰り出すフローターサーブはなかなか力強かつたのが印象に残つていて、とても見た目では想像つかないほどの重いサーブだ。

松野先輩は原口美恵に挨拶を返した後、私や和子ちゃんに気付きこちらに寄つて來た。和子ちゃんは頬を上氣させ元気よく「お久しぶりです！」と丁寧に頭を下げて挨拶した。それもその筈、和子ちゃんは松野先輩を大がつくほど尊敬しており、いつもサーブやアタックの指導をお願いしていた憧れ同然の人だつた。私も同じように頭を下げる。「久しぶりね」と松野先輩は笑つた。

「劇見たよ、面白かった」

松野先輩はそういうと私をジッと見てフフフと笑つた。先輩から好奇心一杯の視線を浴びてどうしていいかわからず、モジモジしながら「あ、ありがとうございます……」と再び頭を下げる。

「監修・脚本のところに荒井さんの名前が書いてあるからビックリしちやつた。なんか思つてたより、ユニークな人だったんだね？」
「……え？」

一瞬なんのことかわからずポカーンと松野先輩を見ていたが、暫くするどジワジワと嫌な予感が足元から這い上がり、終いにはカーッと顔が熱くなつた。この時感じた「嫌な予感」は見事的中する。確かに校内に貼られたポスターと各生徒に配られたパンフレットには、「監修・脚本 荒井美千子」と名前が堂々と掲載されていた。私はこの後、全校生徒に「あのくだらない台詞とアレンジしたストーリーを考えたのって荒井さんなんだ。なんだが見た目と違つて、超以外～」という不名誉な印象を植え付けてしまつたのである。

* * * * *

約一ヶ月間という長い時間を掛けて準備した文化祭、2日間はあつと言つ間に過ぎていつた。

私達の劇は初日の一一番早い時間帯だったので、自分達の出し物が終わると文化祭をゆっくり楽しめた。もちろん田宮君のいる9組にも堂々と入室。

……幸子女史と和子ちゃんに挟まれ、多少へつぱり腰氣味だったが。それでも好きな人の教室に入れるというだけで、顔が崩れてニヤけてしまつ。席はどの辺りに座つてゐるんだろう？ とか、どこの口ツカーなんだろう？ とか、どの記事を書いたのかな？ とか。まるで事件を捜査する刑事のように眼を皿にして辺りを見回す、ちょいとアヤシイ荒井美千子。両脇の一人は生温かい視線を送つた後、「先教室戻つてゐる」と9組を出て行つてしまつた。

9組の展示品を熱心に見てゐると、廊下が騒がしくなつた。聞こえてきた声にトキメキ温度が上昇し、そして下降する。

展示してある張り紙の隙間から見えたのは、田宮君だった。……とその後ろには後藤君やその他のメンバー（おそらくバスケ部）、そして最後に諏訪君と尾島。

あのバスケの試合から田宮君と尾島は挨拶を交わす仲になつた。それも声を掛けるのは十中八九、田宮君からだ。私は尾島のポジションが非常に妬ましく、一人が顔を合わせてゐる現場を見るたびに、見えないところから密かに覗き見しながらハンカチを噛み引つ張つる始末である。

教室内に所狭しどぶら下がつてゐる模造紙に隠れながらコソコソと出口の方に向かう。田宮君と顔を合わせたいが、もれなくどうでもいい顔ぶれまで付いてくるのはイタダケない。絶対何か言われそうだし、しかも強力な味方が不在とくればここはすぐにでも撤収に限る。

……その他に理由などあつはしない。

リハーサルだった、あの日。

私は最後までバスケの試合を見ることなく、途中で体育館を抜けた。

私達が体育館で立稽古をしている間、8組の教室では体育館組と別れてセットの作成をしている生徒が数名いた。さすがに一度見に戻つた方がよいと片岡君に話しかけ、舞台の袖に引っ込む。「いいの?」と試合をしている田富君の方を目配せしながら和子ちゃんが声を掛けてくれたが、私は首を振り「ちょっと様子を見てくる」と舞台を降りた。

体育館フロアにつながる扉を開けると、バッシュが床に擦れる音やドリブルの音、声援が大きくなつた。静かに扉を閉めて体育館の端をそつと歩きだす。私はコートも見ずに、黙々と前を向いて歩いていた。

バカだ。

せつかく田富君の試合をしている姿が見れるというのに、こんなチャンスもしかしたら一度とないかもしれないというのに。けど、もう一人の自分がこうも言つていた。早く教室に行かないといけないし、片岡君や文化祭実行委員の子はすでに応援に夢中だから、と。

ムキになつている尾島、
一生懸命応援している原口美恵、
諭訪君の高い口笛の音、
眼を輝かせて男子部員を追う小関明日香、
田富君の名前を連呼する成田耀子、
満面な笑みで尾島に抱きつく後藤君、
そして、尾島と笑顔でハイタッチをする田富君。

例え前を向いていても、コートの方を見ていなくても、眼の端に

映つてしまつ。気配でわかつてしまつ。

様々な思惑が交差している熱いバスケットコート。スコア表の後ろを、そして小関明日香や成田耀子がいる女子部員の後ろを通り過ぎる。ひつそりと空氣のよう。

私は一度もコートの方を見ることなく、体育館を後にした。

タイガー＆ドラゴン～虎編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したものではないです。

タイガー＆ドラゴン～虎編～

「おい、そこのボイン！」

低いがハッキリとした声が店内に響き渡った。

それぞれの思惑を浮かべた顔を寄せ合つて座っていた5人は、声の主がいるカウンターの方へ向く。どう見ても5人以外に客はないので、私達に声を掛けたことは間違いないらしい。

「ボインのくせに無視すんな。のんびり座つてないで豚玉とミック
ス玉、運べや！」

数年後、流行語大賞にもノミネートされる「セクハラ」という言葉で訴えられても文句を言えない台詞と共に、ドンとお好み焼きのタネが入っている器が低いお店のカウンターに置かれた。

「ボイン」と言う言葉に、鉄板がひいてある机を囲んで座つていた私以外の4人が一斉にこちらを見た。注がれる視線の先は、祖母の手編みである白いタートルネックのセーターを思う存分盛り上げている私の豊満なバスト。

どういう状況なの？と思ふ読者の方々も多いだろう。ハッキリ言つて、どうしてこんな状況なつたのか私が聞きたい。

ただ今絶賛成長中である「デカイ胸」を指摘され、フルフルと震えるほどこつぱずかしかつた。赤い顔のままカウンターの方を睨む……が、数秒でリタイヤ。とても対抗できる相手ではないと悟つた私は、黙つて立ちあがり座敷から降りる。床に置いてあるお店のサンダルを履いた。

「……ちよつと、なんでミツちゃんが運ばなきやなんないのよ？！
私達はお客様なのよ！ 従業員らしくお金もらつてた分の仕事しな

さこよー！」

「そ、そつよー。」口まで運びなさいよ、この口店員……」

「……だって、お兄ちゃん」

「……」

和子ちゃんはその正義の塊のような心ゆえに堪えられなかつたのだろう。男の不遜な態度にたまりかねて、封印を解くように一気に行動に出た。それに幸子女史も続く。まるでどこぞで聞いたような会話が飛び交つてゐるが、生憎相手は「類人猿」ではない。

5人の女子中学生から非難の言葉と視線を浴びてゐるのは、カウンターの中でスゴイ勢いでキヤべツの千切りをしながら煙草をふかしている愛想の悪い男。とても飲食店の店員には見えない身なりと態度の青年。

「ピーチクパーチク、うるせえぞ、ガキ共！ オラオラ、オッパイ星人もチャツチャと運んで、そのでかいボインにへラ挟みながらお好み焼き焼けや！ ……ああ、チイちゃんは何もしなくていいでちゅよ？ 可愛い君はオイラの為に微笑んでくれるだけでいいからね？」

青年は普ッと短くなつた煙草を流しに吐き捨て、4人に抹殺しそうな強面の睨みと強烈な文句をおみまいし、1人に蕩けるような満面の笑みと口説き文句を捧げた。口は「超」が付くほど悪く、「からね」なんて言葉使いが世界一似合わない男だが、身なりは背が高くなかなかの男前だ。

……ただし、その真つ赤に染め上げた髪と耳にズラツと並んでいるピアスさえ無ければ。

「態度が違う過ぎるじゃないのよ、この給料泥棒……」

「ホント信じられない、このスケベピアス男！」

「……だ、だつて、お兄ちゃん」

「……」

どう見積もつても「素行の悪い不良」にしか見えない相手に、ヘラを振りあげながら大胆に文句を言つ和子ちゃんと幸子女史。「お兄ちゃん」と言つたのは 笹谷さんで、和子ちゃん達と青年の会話に必死で笑いを堪えていた。茅野さんことチイちゃんは予想を反し、頬を染めて黙つて俯く。「……」こは青褪めるところでは? と突つ込みたいが、空しいのでやめた。

「バカヤロッ！ 男は全員ドスケベなんだよ！ 大体な、スケベを粗末にするやつはスケベで泣くつて昔の人も言つてるだろ？ が！？ ……ま、オマエらみたいな色気のないガキ共には到底理解できねえだろ？ けどなー」

「「なんですつてえつ？！」」

赤髪ピアス男はハツ！ と鼻で笑いながら器用に手元を動かし、私達が注文したお好み焼きのタネを次々と準備していく。
(……スケベでなくて1円玉の間違いでしょーが)

ムカつく誰かさんにソックリなのが余計癪に障る。絶対身内だと思い 笹谷さんにこいつそり聞いたが、どうもそうではないらしい。やたらと眼を泳がせ曖昧な言葉で濁していたが、ハツキリと「尾島に兄はいない」と言つた。

それにもしても、この扱いの差は酷過ぎる。和子ちゃん達はまだいい。けど私はいきなり「ボイン」。いくらなんでも初めて顔を合わせてから1時間も経つていない年下の女子中学生を「オッパイ星人」呼ばわりするとはいかがなものか。

いつものごとく表情に出さず心の中で思い切り舌打ちし、非常に歪んだ得意の外面スマイルでいそそとカウンターに近づいた。器

を持つて席に戻ろうとする私の背中に、上口店員はすかさずトドメを刺す。

「 いじりボイン。顔、ブサイクになつてゐるぞ」

* * * * *

秋の色鮮やかな紅葉が散り、吐く息が白く変わり始め、日に日に冬の景色が濃くなつていいく12月。

セーラー服や学ランだけでは登下校が厳しくなり、制服の上にジャージや学校指定のコートに袖を通す生徒達が多くなり始めた、そんな冬のある日。期末試験が終わった後の部活の帰り、和子ちゃんが言つた提案が事の発端だつた。

『ねえねえ、試験も終わったことだし、ここいらでパーティーをやらない？ クリスマスも近いし！』

まるで無事にプロジェクトが完了し、打ち上げをやる会社員のような口調の和子ちゃん。期末試験から解放された私達の中に反対する者はいない。幸子女史がマフラーを首に巻きながら即効でナイスなアイデアに飛び付く。

『いいね、それ大賛成！ 私達でクリスマスパーティーでもしようよ！ つて、終業式の日がクリスマスだよね？ 終業式の後つて、部活？ 年末も部活、正月明けも部活.....』

幸子女史の言葉に全員溜息をついた。そう、私達中学生の運動部に休暇などいうものは存在しない。一年中というわけではないが、盆暮れ正月以外はほとんど部活なのが現状なのである。そりやあ部活が楽しくないってわけではないが、季節は大人も子供も心が弾む

1~2月。いつの時期にお楽しみを求めてソワソワするなどいつも
うが無理な話だ。

『でもや、いわせ瀬が練習今年は27日の午前中までつて言つてたでし
よ? なんならその後集まつてパーティーしない? クリスマスは
過ぎ去りやつるけど年末の忘年会つて感じでどうかな?』

5組の下駄箱から靴を持ちながら言つたのはかねや篠谷さんだつた。相
変わらず綺麗な茶色いワンレンで髪の毛が秋よりも少し伸びている。
部活中は先輩が髪を括れとつたのでおとなしく従つてゐるが、
結び田の跡が気になるらしく一生懸命手櫛で伸ばしていた。

『それイイじやん、貴子! 誰かの家に集まる? それぞれ持ち込
めば安く済むし?』

和子ちゃんはウキウキと明るい表情で篠谷さんの意見に賛同した。
「貴子」というのは篠谷さんの名前で、10月初旬に私と仲良くな
り始めてから、篠谷さんは和子ちゃんとも意気投合したようだつた。
2人が心を通わせるキッカケとなつたのは「オシャレ好き」という
点であり、ファッショング雑誌を広げては「あーでもない、こーでも
ない」と議論を交わしている。ちなみに今篠谷さんが着てゐる学校
指定のコートとカバンは五つ年上である彼女のお姉さんのお下がり
であり、デザインが一新したものを見につけている山野中の在校生
のものとは若干異なる。もう既に手に入れることはできない使いこ
んでいい感じのヴィンテージアイテムを2つ身につけている篠谷さ
んは、何処からどう見てもオシャレ上級生そのもの。違う意味で女
の子達の注目の的であつた。

『じゃあ何処で集まろうか? 27日つて確か土曜だよね?
あ~父親が年末休みに入るから、ウチは駄目かもしれない』

幸子女史は腕を組みながら、みんなはびっしりと振り向いた。これには全員「あ、うちもそうかも……」と難色を示した。それ以降になると年末正月とみんなの予定が合わないということになり、全員眉根を寄せた。

『でもせっかくだから、みんなで集まりたいよね？　来年の今頃は『ア・テスト』の準備しないといけないだろ？』

隣の7組の下駄箱の前で靴を履いていたチイちゃんの「ア・テスト」という言葉に、5人は顔を曇らせ項垂れた。

アチーブメント・テスト、略して「ア・テスト」。K県の中学校2年生は必ず通らなければならない試験。そうなのだ、気分的にクリスマスや年末を氣兼ねなくのんびり過ごせるのはおそらく今年だけだろう。2年生は「ア・テスト」、3年になるといよいよ「高校受験」が控えている。

『……あのさ、家でパーティーがダメなら外で食べない？』

笹谷さんの言葉に皆眼をパチクリした。笹谷さん以外の4人が「どうする？」というような顔を合わせた。もちろん私は構わなかつたが、外となるとお金がかかるのが難点だ。全く無いというわけではないが、中学生の限られたお小遣いの中で食べれる物と言えば、ファーストフードくらいしかない。しかもこのローカルな地元にはそんな気の効いたお店どころか、フードコートがある大きいスーパーすら無かった。そば屋かラーメン屋がいいどこである。ファミレスも隣町の国道のほうまで自転車で走らなければならない。

『私の近所に安くて美味しいお好み焼き屋さんがあるんだ。そこ顔見知りだから、ランチ終わった2時以降にちょっと開けてもらつて、

少しだけお菓子を持ち込ませてもいいの、どうかな?』

『『『『それにしよ!』』』』

「この案件は全会一致で可決されました」というように、予算委員会に出席している議員並みの拍手をかます5人。安くて、おいしくて、さらに持ち込み可。しかも貸し切り状態とくれば「OK!」という言葉以外出てくる筈もない。

それからはトントン拍子で話が進んだ。場所の予約などの大まかなプロデュースは笹谷さんに任せ、他の4人がお菓子などの持ち込みを担当した。最近母親の影響でお菓子作りを始めたので、私は「す、過ぎちゃつたけどクリスマスにちなんだお菓子でも作って持つて行くから」という言葉に、チイちゃんも「じゃあ、せつかくだから私もなにか作つてこようかな……」と乗ってきたので、ますますパーティの話は盛り上がりを見せたのだった。

* * * * *

そして27日当日。

午前中は部活に専念し、一旦家に帰つてから「お好み焼き屋」から近い区民センターの前で待ち合わせということになつた。本当は部活の後そのまま直行したかったが、制服や学校指定のジャージでお店をうろつければ校則違反になる。

部活で汗をかいだというわけではないが、気分的にシャワーを浴びてみた。急いで着替え、祖母が編んでくれた手編みのセーターに袖を通す。少しラメが入っている素材でお気に入りの一着だ。クリリと回りながら鏡を見る…と、嫌でも胸のあたりに視線が行つてしまつた。

最近益々大きくなつてきたバスト。

小学校の時もかなり大きいかなと思っていたけど、中学に入つてから少し身体が締まるのと反比例するように盛り上がつていてる気が

した。和子ちゃん達は羨ましいと言うが、この年頃にロカッブの胸など邪魔になつても、全然役に立たない。肩は凝るわ、走る時胸は揺れるわ、オバサン用の可愛くないブラになるわでまったくいいことがないというのが現実だった。役に立つのは……え、そのなんというか、大人の男女限定の話である。けど今日はパーティー、特別な日なので解禁だ。ジーパンも止めて某私立の制服のように縁のチェックのスカート（もちろん下にはブルマ）と紺のハイソックスを履く。

（……ちょっと胸が目立つけど、女の子ばつかだしかまわないよね？）

このときの判断の甘さを数時間も経たないうちに後悔する羽田になるとは、この時は夢にも思わない。

昨日の夜焼いた粉砂糖をふんだんにふりかけた「ショトレ」をアルミホイルに包んだ。チイちゃんはケーキを焼くと言っていたので、私はパンにしてみた。なかなか地元のパン屋でも売っていないようなものをと母親と相談した結果、ドイツのクリスマス用のパンにしたのだ。パンを静かにカバンに入れてダックフルコートを着こむ。寒さも吹き飛ばすほどのウキウキした気持ちで自転車に跨った。何故にそんなに気合が入っているのか？ と言われる少し照れ臭い。小学校まで口クに友達を作らなかつた私は、初めての友達とのパーティーにとつても浮かれていたのだ。

自転車を急いで走らせ、待ち合わせの区民センターに着くと既に全員揃っていた。

心なしか全員オシャレをしていくように見えたのは、決して氣のせいではないだろう。やつぱりちょっと気合い入れてきた良かつたと、心中で安堵のため息をついた。オシャレ上級生の笹谷さんや和子ちゃんはもちろんのこと、幸子女史もチイちゃんも色つきリップだし。しかもボンボンのついたゴムやポニー テールなどして髪型も全

員バッヂリである。かくゆう私もムースを付けてサイドを流してみた。……ドライヤーが無いので椅子の上にのっかり暖房の強風に眼をシバシバさせながらのセットだったが。まあ、結果が同じならば、過程はこの際どうでもいいのである。

『すぐそこなんだ。申し訳ないけどお店の前道路だし自転車置くスペースないから、区民センターにおかせてもらおう。たしか夕方遅くまでやっているから』

笹谷さんがそう言つと全員自転車を施錠し、区民センターを後にした。

区民センターは市立図書館やスポーツ施設、大きい広場やグラウンドも併設されているので何度も来たことがあるのだが、大野小の学区であるそこから先の場所には足を踏み入れたことがなかった。オノボリさんのようにキヨロキヨロと辺りを見回しながら歩く。どうやら笹谷さん以外のメンバーもそぞろしい。持参したお菓子やジユースの種類、トランプ持ってきたよーなど的话题をしながらお店の前に到着すると、全員照れ臭いような緊張したような顔を見合わせた。

紺色の暖簾には江戸文字の書体で「お好み焼き まるやき」と書かれてあつた。

その奥にはいかにも年季入つてます！ といつよつな木製の枠に曇りガラスの引き戸。引き戸の真ん中に垂れさがつてこる「準備中の札」。一瞬見た感じではお好み焼き屋というより居酒屋というほうが近かつた。しかし扉の前にいる私達の鼻をくすぐるのは、僅かに漂うソースの焦げた匂い。昼食を食べていない5人を一斉にニヤけさせる、なんとも憎い香り。

『ここにちはー。』

引き戸を勢いよく開けたのは笹谷さんだつた。

笹谷さんの後に続いて「オジャマシマース」と4人の乙女達が続いて中に入る。中は思ったよりも広かつた。長い鉄板を囲んでいる口の字型の低いカウンター、10名ほど席があり、狭い通路を挟んで座敷にテーブルが3席ほどある。

『……オイオイ、外の札見えねえのか？　ただ今「まるやき」は準備中ですがな』

低いやる気のなさそうな声が帰つて來た。

声の主は、カウンターの席にだらしなく踏ん反り返つてゐる男。机一杯にスポーツ新聞をひろげ、どこぞの巨乳美女がパンツいっちよでオネダリのポーズをしているスケベな記事を読みながら、煙草なんぞをふかしている。

『　『　『　『　……』　』　』　』

男はだるそうにこちらを振り返り、口と鼻から煙を吐き出した。

タイガー＆ドラゴン～虎編～（後書き）

文中にある「ア・テスト」についてすこしお話を。

これは神奈川県で行われていた制度だったみたいですね（80年代当時）、私は後に全国制度ではないと聞いてびっくりしました。

2年の3学期に主要教科5科目に加え、音楽・美術・体育・家庭教科と9科目のテストをまるで受験本番ながらのような形式で実施。恐ろしいことにこのテストの結果云々で、下手すれば3年に上がる前に志望校がほぼ決まってしまう代物だったのです。個々の気持ちはどうであれ、「3年になつてから受験に本腰」なんて呑気なことを言えなかつたのが、当時神奈川県在住の中学生の実態でした。この制度は90年度の中ごろまで続き、色々と問題があつた為、1997年に完全撤廃になつたそうです。まあ、そうだよね。

タイガー＆ドリーム～虎と蝶編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したものではないです。

タイガー＆ドラゴン～虎と蝶編～

『……あんだよ、貴子^{たかこ}ちゃん』

男は煙草を灰皿でもみ消し、コラリと立ち上がりてこちらに近づいてきた。鮮やかな赤い色の短髪に耳の周辺を彩っているのは無数のピアス、しかも背が高く威圧感あり。その姿はまるで生身の人間を襲うゾンビ……のような迫力。

『な、なんで、とら……いやつ、そうじゃなくてっ！　あ、そうだ！　お、お兄ちゃんがいるの？？！』

『はああ？　そんなの見りやわかるだろ、バイトに決まっていますがな。最近金欠でよお～、オマエも早く大人になつてオレに貢いでくれや』

『バカなこと言つてないで、蝶子^{かづこ}さんは？！』

いきなりヒモ宣言した赤髪ピアス男は、私達が来ることを知らされていなかつた様子。

仕方なく 笹谷さんが説明すると「あんだと？！……つたく、あのジジイ、また言い忘れてたな！」と懲態付いた。その怒鳴つている姿は、まるで地獄の閻魔大王そのものだ。 笹谷さんは滅多に挙むことのできない不良を目の前にして固まつている私達に気付き、「あ、この人、大丈夫だから、危害加えないから、取つて食つたりしないから～」と慌てて弁解らしき言葉を捲し立てた。

『おい、そりゃどういう意味だ？！』

『部活の友達なの、うんとサービスお願い』

笹谷さんは華麗にスルーして、赤髪ピアス男に私達を紹介した。

「サービスなどこらぬから、普通の店員とチョンジ可能かな？」
なんて台詞は心の中だけで留めておく。

逆に赤髪ピアス男を私達に紹介する時は「この店のオーナーである『蝶子』さんの甥っ子さんで、ん~なんて言つたらいいのかな。私にとつてはお兄ちゃんみたいなもんで……」となんとも歯切れの悪い言い方で、何故か視線を逸らしている。

私達は笹谷さんの曖昧な言葉よりも、目の前の不良が強烈過ぎて「……ああ、そななだ……どうぞよろしく……」としか言えなかつた。じつ寧に身体を90度曲げて挨拶する私達。赤髪ピアス男は満足したように「ん！」と頷いたが、次に放つた一言はこれだった。

『ホー、貴子のダチねえ。こりやまたずいぶんと地味なダチだな、オイ』

これには4人の引き攣り笑いも固まつた。
(……そりやアンタから見たらこの世の人間は全て「地味」かろうよ……)

心の中で吐き捨てていたら、「ん~でもこのチビッ子ちゃんは可愛いね~お名前はなんでちゅかあ？」と大柄な4人とは違つて148センチしかないチイちゃんに迫つていた赤髪ピアス男が、急にギリツヒリちらを睨んだ。

『おーー！ そこの女ーー！』

全員ビクつとして直立不動の姿勢を取つた。まさかとは思つたが、男は私を指さしている。「ええ？！ 思考を読むなんて反則ですがなつ！」と思つたが、そんな筈はない。超能力者もあるまいし。お好み焼きにありつける前に根性焼きでもされるのかと、冷や汗を垂らしながら一応周りを見回し「……私？」といつもつて自分の事をそつと指差した。

『そうだ！ オマエ、いくつだ？！』

『え？』

『え？ じゃねえよ、いくつだって聞いてんだよ！』

『あ……13、です』

『バカヤロウ、オマエの年齢なんか興味ねえんだよ！ オッパイのサイズに決まつてんだろうが、もつと空氣読めよ！…』

『…………は？』

赤子相手にしか聞かない衝撃的な言葉を、質問に織り交ぜながら偉そう言う男。そして間の抜けた疑問形で返してしまった私。

余りの迫力に、ここは素直に「Dカップでございます」と答えたほうが得策かなと心の中で折り合いをつけた時、奥の暖簾がフワツと揺れた。

いきなり出てきた白い物体にギョッとした。

物体は人間で、白い割烹着を着た大柄な女人だった。赤髪ピアス男の背後に音も立てず能面のような無表情で近寄っていく。

『「は？」 じゃねえだろ？！ これだから最近のガキはなっちやいないって言われんだよ……ま、貴子のダチだし？ 初対面だからとりあえずその失礼な口のきき方だけは許してやる。オレの見解だと、Dカップってところか。だがよ、もうひとつスリムになれ？ 痩せたらもう一度出直して来い！！ 今日は……しあうがねえなあ～、ちつとだけ俺様が相手してやるか。とりあえずそのボインを触らせ』

次の瞬間、衝撃的な映像が繰り広げられた。

グワーン！！

ドリフの『ント』で上からタライが落ちてきた時の音が響き渡った。

見事にへこんでいる銀色のお盆を持つ大柄な女人。声も出ず震えながら蹲る赤髪ピアス男。それ以上に言葉の出ない、山野中学校

1年女子バー部員5名。

『ぢょっとおおー！ お客様になんて口、きくのあおつづ？…』

掠れた低い濁声が店の中を通り抜けた。

こうして、「過ぎちやつたクリスマスパーティー」というより「この場を過ぎ去りたい乱交パーティー」というほうがシックリくる時間が幕開けとなつたのだった。

* * * * *

(……くそお、このうへだなしの不良め！)

ブサイクというドメをされた私は、怒りを我慢しながらタネが入つてゐる器を机の上に置いた。多少なりとも自覚があるだけに言い返せないとこがまた悔しい。もし本当にサンタクロースといふものがいるのならば、「どうか赤髪ピアス男の息の根を止めることができ�の武器を靴下に入れてくれ」と念じるところだ。

「お兄ちやあん、ダメよお？ 女の子相手に『ボイン』とか『ブサイク』なんて言つちやあー」

艶めかしい濁声が奥から聞こえてきた。

厨房とフロアを仕切つてゐる暖簾をかき分けて出てきたのは、不良にお盆を叩きつけた年齢不詳の大柄な女人。手にはジュースとグラスをのせてお盆を持っている。

おくれ毛を少したらしながらアップにしてゐるふんわりとした茶金の髪。アイシャドーは真つ青、そしてマスカラバリバリの色っぽ

い流し眼。真っ赤なグロスを塗つてあるポッティリとした唇。上唇の近くには色気を醸し出す黒子。もちろん顔には皺一つ見当たらない。極めつけは、色は浅黒いがキメ細やかな肌とこれでもかというボンキュッポンの豊満なボディ。

私の「ボイン」など足元にも及ばない大きい胸が割烹着をさらりと盛り上げている。その下は超ミニのラメスカート……なのだが、割烹着に隠れているので後ろを振り返らないと見えない。その姿はまるで男性が一度は夢見る「ハダカエプロン」そのものだ。そのさきはむつちりとした太ももだけど、キュッと締まつた細い足首。

どつからどう見ても……いや、完全に所謂世間で言うところの、「ベティちゃん」にしか見えないのだが……何かがおかしい。

さつきから気になっていたのだが、首のところの盛り上がりに入る喉仏はいつたいどういうことなのか。しかも女人に対しては若干声が低いし……まさか、いやいや、そんな、ねえ？

とりあえず現時点ではハッキリわかつていることは、暗い夜道で積極的に出会いたくない部類の人物であろうとこゝことだ。

「べつに顔が『ブサイクだ』とは言つてねえ、『ブサイクになつてる』つて言つたんだよ」「……」

問題は決してそこではない。

赤髪ピアス男は豊満ボディのベティちゃんにピクリとも反応せず、小指で耳をほじり、一度眼で確認した後フツと汚物を飛ばした。飲食店にあるまじき行為を堂々するその姿に、言葉も出ない女子中学生5人。

「そ・う・い・う・問題じゃないのぉつ！……本当に兄ちゃんはしようがないわねえ。ごめんねえ？　こんな店員でえ。……あとできつちりオ・シ・オ・キ、しておくからあ」

ゆるしてくれる？

私の前で胸元をグッと寄せながら前かがみで迫る涙田のベティちゃん。「オシオキ」と聞いていかがわしいことを思い浮かべてしまつた私は異常だらうか。

「あ……いえ。お、お気遣いなく……」

私は引き攣りながらもなんとか笑顔で返した。

ベティちゃんは、「もおうう、イマの若い子は、デキてるのねえええ～？　お兄ちゃんに見習わせたいわあ」と男を落とすようなウインクを投げつけ、鉄板の火をつけてくれた。あまりの迫力に、 笹谷さん以外の4人は若干引き気味。

「」、「」、「」、「」
蝶ちゃん
子さん

笹谷さんは涙をぬぐいながらベティちゃんに向かつて言つと、「まつ！ タカコちゃんつたらあ～。そおねえ、お友達もどんどん、お兄ちゃんに注意してやつてえん？」と再び熱いワインクをかまし、獲物を皿の前にして舌舐めずりするジャッカル……いやいや、悪戯っぽいスマイルを浮かべた。

「ホラア、お兄ちゃん、せつかくだから焼いてあげなさいよ。こんなに可愛い子がそろつて、ウハウハなのにいい、ねええ？　あ～あ、たまにはこおいう子を連れて来てほしいいわあ。そおそお、聞いてよお？　この間なんかあ。お兄ちゃんつたら、私より一年上っぽいホステスさん、お店に連れてきてえ、イチャイチャしてたのよお～？！」

「ありやホステスじやねえよ、センコーだ。ジジイ

ヒュン!!

ガアーン!!

グアン! シュンシュンシュン...

何か銀色のものが目の前を横切り、金属同士がぶつかる派手な音が店内に広がった。

「……へ?」

目の前に広がる光景は。

ベティちゃんがカウンターの方へ向いて何か投げた後のような腕を伸ばしている態勢と、赤髪ピアス男が金属製のお盆を取り上げて確実に攻撃を防いだ姿。そのお盆にはクッキリと窪んだ跡があり、鉄板の上ではヘラが空しく音を立てながら回転している。

猛獸……ではなくて、人間2人が睨み合う」と数秒。

「もううう、この子つたら、何言つてるのかしらあああつ! 本当にこどうしようもないんだからああ。「めんなさいねええ? こんなヤツう、無視無視いつ!!」

ベティちゃんはクルリと私達の方へ向いて、「本当、デリカシーのない野蛮な男つてえ最低えつ!! や～ねえ～」と恼ましい溜息を吐いた。笹谷さんも「そうそう! 家に女なんか連れ込む二股男つて最低!!」と誰のことを思つて言つてるんだか、酷く不機嫌な態度で吐き捨てている。

2人とも何事もなかつたかのようにしているけど、今確実に「人が狙われた。

(スマイセーン、ここで殺人未遂事件が行われましたよーーー)

「　「　「　「…」　「　「

べラをなんの迷いもなく投げつけたベティちゃん。先生をたらしこんで連れ込んでいる赤髪ピアス男。非日常的な光景そっちのけで別な男を怒っている笹谷さん。

他4人は「この店のお盆のストック数、大丈夫なのかな?」と心配することと、ダンマリングを維持する以外に何ができるというのか。

タイガー＆スリランカ虎と蝶編（後書き）

本当、何ができるかのうのか。いや、できるじとは何もない。（漢文重要句形の反語形の用法よつ）勉強になつて、イーネッ！－！

タイガー＆ドリーム～虎と蝶との女達編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますせんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したもんじゃないです。

タイガー＆ドリームン～虎と蝶と乙女達編～

「かんぱーい！」

華やかな掛け声と共にグラスが鉄板の頭上で砕わさり、ガツンと当たった勢いで飲み物が少し鉄板の上に落ちた。水分の蒸発する音と水蒸気が熱々の鉄板から登る。もちろん飲み物の中身はアルコールではない、中学生らしくコークやオレンジジュースで乾杯だ。やだ〜零れちゃつた、という声と乙女達の笑い声が店内に響き渡つた。

「やつだあ、零れちゃつたあ」

「…………」「…………」「…………」

後から色っぽいオカマ声で調子を合わせる赤髪ピアス男に、冷ややかな視線を送る女子中学生5名と、鬼の形相で睨んでいる年齢性別不詳のベティちゃん。

鉄板があるテーブルを囲むのは女の子5名だけの筈が、知らぬうちに7名になつてしているのはどういうことか。只でさえ5人でも席が一杯なのに、さらに大柄な2人が座っているせいかギュウギュウで密着度が高い。

(……どうでもいいけど狭いな)

「ちよつとおおお、なんでビールなんか飲んでるのあつ？ アンタ高校生でしょうがあああ！」

「えつ？！」「…………」

そういうベティちゃんはすでに水割りだ。いや、そんなことよつ。ベティちゃんの言葉に笠谷さんを除く中学生4人は驚いた。いや、

さつき「センマー」とか言っていたので学生だとはわかつていたが、どうみても二十歳位に見える。専門学生か大学生だと思っていた私は正直ビックリだった。反応が気に入らないのか、途端に細い眉を歪める赤髪ピアス男。

「ああっ？ なんだその反応は？！ それは『うわあ～大人っぽくてステキ！』って意味か？ 『つわあ……オヤジっぽくって最悪……』って意味か？！」

赤髪ピアス男以外全員眼を彷徨わせ、ジュースを飲む振りをしながら視線を逸らす。どう考へても後者だる、という無言の訴えを察してほしい。

「おい、ボイン！ ビッちだ、答えるー！」
「『ステキ』のほうです」

（神様仏様ごめんなさい。即効で大嘘ついたことをお許しください。そしてどもらず速答できることに感謝します）

……中学生になつてから何度も嘘をついたことか。神棚と仏壇のお供え物を増やしておこうと、この瞬間心に決めた。

全員そつと笑いを堪えているが、ベティちゃんだけは『本当にごめんねえええ』と両手を合わせながら口だけ動かして謝罪を送ってきた。「そうだろ、そうちだらーー」と満足そうに頷くこの赤髪ピアス男は、笹谷さんとチイちゃんの間に座り、まるで飲み屋のホステス扱いだ。ずうずうしくチイちゃんの肩に腕など回している。しかも一気に飲み干したグラスをわざわざ私の方へ差し出し、「もう一杯つがんかい」と顎で指図する始末。

私は「何が悲しくてこんな奴に酌などせねばならぬのだ」オーラを隠すように無表情を装い、無言で瓶を持ち上げグラスにビールを注いだ。断じて臆病風に吹かれた訳ではない。

「わわ、可愛子ちゃんたちいいい！　お兄ちゃんなんか、ほつて
おこでえ、ジャンジャン食べてエエ？」

よいしょおお！　と焼き上がったお好み焼きをひっくり返しソースを塗るベティちゃん。途端に「ジユウウ！」といつソースが焦げるイイ匂いが広がった。お客である5人はパアアッと笑顔になり「イタダキマース！」と声を揃えた。やつと本来の目的にありつけた私達は頬を緩ませ、H口店員が「おつ、心して食え」と言い終わる前にお好み焼きをわっさと口に運ぶ。お腹が空いてた分、いつもよりお好み焼きが特別な御馳走に感じられた。

「オイシイ！」を連発する私達に向かって、さらにも瀉けるような満足顔で頷きながらかいがいしくお好み焼きを切り分けるベティちゃん。その姿は親鳥がせつせと雛鳥に餌をやっている姿にちょっと似てるな、なんて思つてしまつた。

「……それについて未成年のくせにビールとお酒飲むなんて、本當信じられない」

「貴子、それがお好み焼きを作つてやつた俺様に対する態度か？！
それにな、オレんちの飲み物は昔からアルコールのみつて決まつてるんだよ」

「焼いたのは蝶子さんで、と……お、お兄ちゃんじゃないでしょ。
それに飲み物がアルコールのみつてどんな家なのよ」

不良な赤髪ピアス男に遠慮なくツッコむ笠谷さん。普段はクールで落ち着いている雰囲気なのに、どうやらこっちが素なのか言つたことを言つてはいる。それにしてもさつきから気になることが一つあつた。「おにいちやん」がどもりがちで、最初に「と」などの言葉が入る。

……私のどもり癖が移つたのだろうか？

「そりだよねえ？ 貴子の言つとおり！ 材料切つただけじゃん」「本當、材料切つて混ぜただけだし、ねえ？」

和子ちゃんや幸子女史は早くもこの異常なメンバーに馴染みつつあつた。普段同じクラスに2人もお騒がせがいるからだろう、十分免疫がついたのかもしれない。赤髪ピアスな不良男を軽くあしらつた上に、「蝶子さんのお好み焼きつて、とっても美味しい！」と完全にナメている。2人に挟まれている蝶子さんも「あらああ、うれしいわああ」と顔を赤くし、「あらためてカンパニー」などと3人でグラスを合わせているし。赤髪ピアス男は「ケツ！」と言つた後ビールを一気飲みした。

「それにしてもよお、貴子。オマエ、『まるやき』に来るの久しぶりじやね？ しかもいつものメンツと違うじやん。あの『猫なで声』のダチはどうした？」

私の前にグラスをズズイと出しながら言つた工口店員の言葉に、全員ピタリと動きが止まつた。

何故か『猫なで声』という部分でダチの名前がわかつてしまつた。おそらく和子ちゃん達も同じじろつ。「赤髪ピアスのくせに上手いことうな」と感心しつつ、「その話題、笠谷さんの前ではタブーですよ、ダンナ」と言つ代わりに、相変わらず無言無表情なままグラスから溢れるほどビールを注がせてもらつた。

「ああつ？！ こりあボイン！ ああ～もつたいねえ」と……」「大変申し訳ございません」

私の非常に控えめな態度に固まつていた笠谷さんはクスッと笑い、こちらを見て「良くやつた！」といつのようにウインクをよこした。

赤髪ピアス男は心底悲しそうに手にこぼれたビールを性懲りもなく舐めている。

「……別にいいでしょ。大体、みえ美恵は私じゃなくて他が目当てなようですし？それに中学になつたら交友関係を広げないといけないですからっ？！ 大体、と……お兄ちゃんが言つたんじやん、『いろんな女を見ろよー』ってさあ」

「オマエ、そりゃヤロー共に対しての心得であつて、女子の皆さんに対する言つた訳ではないですがな」

「この際どつちでもいいですがな」

手酌でジュースを乱暴に注ぐ笹谷さんの不貞腐れた態度に、苦笑する赤髪ピアス男。「そおねえ、友達は多い方がいいわあ。もおちろんっ、男も女もねええ？」この場を和ませるよつにベティちゃんが菩薩顔で頷く。

(男も女も多い方が……いいのか。そりや、そつだよな)
どちらにしても私は笹谷さんがとつても羨ましかった。

見た目と人格はどうであれ、赤髪ピアス男やベティちゃんみたいな学校以外の「外の世界」の縁を持つてるし、今は原口美恵とは疎遠になつても、かつては互いの恋を励まし合つ親友同士だったのだ。オマケにグループ交際みたいなことまでしていた。相手が例えあの類人猿や裏番であろうとも……つて、あ、あれ？

……裏番……。

……なんだか、妙な不安が広がるのは気のせいだらうか。

「そりそり、原口以外にも交友関係広げる」とはいいことだと思つよ? せつかく3つの小学校から生徒が集まつてきてるんだからさあ」

和子ちゃんは篠谷さんの言ひ方とおり、といつよつにキッパリ言い切つた。「原口ってだれだ?」といつ赤髪ピアス男に、「美恵のことよ。紹介して2年も経つてるんだから名前ぐらい覚えてよ」と篠谷さんは素つ氣なく返す。

「でもさあ、私、最近原口見てるときの毒になつてくるんだよねえ……」

幸子女史がお好み焼きを細かく切り分けながらボソリと呟いた。
「え、なんですよ? 別にあのバカ一筋で幸せそうじゃないの」という和子ちゃんのキツイ意見に、幸子女史は苦い笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「それが誰にでもわかるくらいハツキリしているから、余計にねえ。尾島もいい加減なんか行動してあげればいいのについて思うよ。あれじゃ蛇の生殺しじゃん。気が無いならスッパリ断つてやりやあいいのにな。どう見たつて原口は本気だけど、尾島はその気ゼロだもん」

幸子女史の意見に和子ちゃんを除いた女子中学生4人はなんとも気まずそうな顔をした。当たつているだけに、だ。あれだけ積極的なアプローチを受けて気付かない男は相当二ブイ奴だし、救いようがないと語つべきだらう。もし田宮君がそんなに鈍かつたら……ハツキリ言つてやりきれない。

「ま、いいんじゃない? 原口だつてキャアキャア言つてる間は夢

見るし？

尾島

バカ

も言わてる間が華だともいうしねえ？ そつか、素つ氣ないお騒がせ者の尾島とアプローチ全開で猫なで声の原口美恵か。考えてみればすつごいお似合いじゃん！ 根性が似たもの同士っぽいから？ チョイとキッカケさえあれば案外口口つとまるく収まるかもよ？ この際2人が無事カップルになつた暁には祝杯あげてやろうよ！ 少なくとも奴らの相手になる筈だった、何の罪もない未来の伴侣を2人救つたことになるんだからさあ～

「――――――……」

本氣で「よし、景氣良く前祝いだ！」尾島と原口、そして明るい日本の未来の為に、乾杯！」と叫び、高々とグラスを上げる和子ちゃん。

赤髪ピアス男もベティちゃんも「宇井和子の真の姿」を垣間見たのか、今度は2人がダンマリングである。

「あ、オイラ、夜の準備始めちやおうつかな」と逃げる……いや、席を立とうとする赤髪ピアス男。それを逃がすまいと「あ、あら、やつだー！ と……お兄ちゃん、遠慮せずもつと飲んで！」と無理矢理座らせる笹谷さん。そして、和子ちゃんの奴当たり先の恰好な的を確保しようと、「わざ、遠慮せずどづど」と自ら進んで赤髪ピアス男のグラスに酒を注ぐ私。

「あ、エーとおお……みんなの話からいくとおお、もしかしてええ、『ケイクン』と知り合ひなのかしらああん？」

「テメエは大人しく座つてろー」という男らしい田つきで赤髪ピアス男を睨ではいるが、口元は口角上げながら言つ器用なベティちゃん。さすが店長、どんな時でも営業スマイルを忘れない。

「ケイクン？」と眉根を顰める女子中学生4人に、笹谷さんが「あ、マヌケ尾島のことだよ。まつたくもつて似合わないけど」と捕捉してくれた。

怖いくらいにすぐさま反応したのは和子ちゃんだった。

「はああっ？　『ケイクン』？…蝶子さん。どう見たって『ケイクン』なんて面^{づら}じゃないでしょ？　全国の『ケイクン』に失礼でしょ？！　BAKA^{ベーカ}だとか類人猿だと野生猿なんかで十分でしょっ？！　むしろ猿に申し訳ないでしょっ！…」

「お、落ち着いて、和子！」

「か、和子ちゃんああん、大丈夫ううう？！」

震える拳をダンツと机に叩きつけながら怒鳴る和子ちゃんを、慌てて宥める幸子女史とベティちゃん。私も「尾島の話題」を逸らすべく、先程から気になつてたことを、じいじやとばかりに笠谷さんこ聞いてみた。

「あ～！　そ、そういうば、さつきから気になつてたんだけど。笠谷さんとお、お兄さんつて、本当の兄弟じやないんだよね？　どういつた御縁で？　近所の知り合いなんですか？　山野中の卒業生なら、先輩ですねえ！…」

一気にしゃべった。

噂好きな近所のオバサンみたいな言い草だが、これだけ言葉が出れば上出来、私もやるう！　と称賛を自分に送る。

しかし、笠谷さんの顔を見るとたちまち気まずそうに眼を泳がせた。赤髪ピアス男は呆れてるんだが、怒ってるんだが、悲しんでいるんだが、なんともいえない複雑な表情でこちらを見ている。「え？　もしかして、やつちまつた？」的な雰囲気^{ムード}に、自画自賛タイムは瞬時にして消え去った。

「あ～え～と、実は……」

笹谷さんはグラスを静かに置きながら息を整え、全部言い終わる前に口を挟んだのは、赤髪ピアス男の悲痛な訴えとベティちゃんの高笑いだった。

「なんだよ、ボイン！　まさかとは思つたが、オマエ俺が誰だか本当にわかんないわけえ？　マ・ジ・でえつ？！」

「オホホホホオオオ！　やつだあ～超ウケるんだけどお～！
あ～ああ、もうお兄ちやあ～んつて大して有名じやないつてわけえ
ねええ？　やつぱ卒業しちやうとおお、『裏番』なんて効力失つち
やうのかしらあ～？　『鬼夜叉』が聞いてあつきれちゃうう～！
そういうえば今は『龍ちゃん』の時代だもんねええ、ホント、笑
えるわあ～！！」

「黙つてろつ、このクソジジイ～！」

ガツキーィン～！

鉄板の真上でヘラが交差し火花が散つた。

2人とも親の敵！　と言わんばかりに睨み合い、手をフルプルさせながら押し問答を続けてゐる。

(隊長、予定通り和子ちゃんの意識を尾島から逸らせはしましたが、別の問題が発生です！　どうやら「ジジイ」と言つ言葉はベティちゃんにとつて禁句用語らしいことが判明しました！)

……と川口探検隊長に報告するように心中で叫ぶ荒井美千子。

そんなことより、ベティちゃんの言つた言葉が頭の中で反響し、「まさか……」と忘れかけた不安が広がつた。気分は「ちょっとち
ょつと、奥さん！　今のきいたあ？！」に近い。

笹谷さんはオホンと咳払いをして居住まいを正した。いまだ頭上で攻防戦を繰り広げ、若干押され気味である赤髪ピアスの方をあらためて紹介するように手を差しだす。

「え～こちらのエロ店員は今年の春、山野中を卒業された先輩でして。忘れ去られた『伝説の裏番』もしくは『山野中の鬼夜叉』こと桂寅之助先輩です」

「～お～らあ、貴子おおつ～『忘れ去られた』は余計だあつ～～」

虚しく叫んだのは赤髪ピアス男。……そして、

「……なにやつてんだよ、兄貴と蝶子は
「ドテチンてめえ……さつきから黙つて聞いてりや、何が『猿に申
し訳ないでしょ～』だあ？！　ふざけんなつ～！」

湧いて出てくるといつのは、いいつことだらつ。

笹谷さんの衝撃的な告白とエロ店員の雄たけびの他に、クリスマス・パーティーには決して相応しくない顔と声がゾロゾロと奥の暖簾から出てきたのであった。

タイガー＆ドラゴン～虎と蝶と乙女達編～（後書き）

川口探検隊長、覚えている人いらっしゃいますか？当時水曜スペシャルの番組を見たときはマジ衝撃的でした。あの時的心躍る娯楽番組、今の時代に求めるのは無理だらうなあ。

タイガー＆ドラゴン～龍と猿の群れの襲撃編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますせんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したものではないです。

タイガー＆ドラゴン／龍と猿の群れの襲撃編

暖簾をかき分けて出てきた数名のメンツは、決して冬休みに出会ひのない、いや、出会いたくない顔であった。

「正面の引き戸からではなく裏口から侵入する奴がいるか、この卑怯者！」

……という想定外な出現に、5人の乙女たちは口をポカンと開けたままだ。

いや、もはやこのショックの原因が、

「衝撃の事実！！」工口店員は、忘れ去られた『伝説の裏番』こと桂寅之助先輩だった！

なのが、

「謎の生物発見！！不時着した星は『猿の惑星』だった！」

……か、わかりません、隊長！！

「ちょ、ちょっと……なんでアンタがここにいるの？！」
「そ、そうよ！この店『ただ今準備中』の筈でしうが？！」
「あつらあ～？ アンタ達、今は乙女限定の貸し切りよおおお？！」
「ムサイ男共は出て言つてちょ・う・だ・ア・い！！」

ガツキン！！

和子ちゃんと幸子女史はすぐ我にかえり、謎の生物達のヘッドで

ある尾島おじまに文句を言った。それにベティちゃんが心強い援護をしながら、赤髪ピアス男から目線を離さずに渾身の力を込めてヘラを押しした後、勢いよく離した。熾烈を極める攻防戦は一応引き分けに終わったが、まだ「ハアハア」言つてゐる怪獸……いや、虎と蝶モスラはお互い睨み合つてゐる。

「じゃあ、なあんで蝶子と寅一イはいるんだよ」「しつかも地味な中学生侍らしてんじゃねえよ

ベティちゃんに向かつて無謀な発言をする『猿の惑星のリーダー』こと尾島と、同じその不良なエロ店員と同じことを言ひ、忘れ去られていらない現在の『裏番』こと桂龍太郎かつりゆうたろう。

一方、忘れ去られた『裏番』こと赤髪ピアス男は、自分の立場も危ういくせに呑氣に大爆笑だ。

尾島と桂龍太郎の余計なひと言は、「兄弟つて通じ合ひつものがあるんだな、とつても不思議」 「とどうでもいいことを思つてしまつた宇宙一オメデタイ私と、チイちゃん以外の女性(?)陣に、一気に怒りの炎を焚きつけた。ベティちゃんと笠谷さんの手からヘラが一本、龍と猿に向かつてに勢いよく飛んだのは当然といえよう。

* * *

「あの『山野中の鬼夜叉』がコレ?」

和子ちゃんはそう言つて赤髪ピアス男を疑いの目で指差した。笠谷さんとベティちゃん、類人猿達は頷いてゐる。……どうでもいいが、人数が増えすぎて座敷はギチギチだつた。ギュウギュウどころの騒ぎではない。私達女子中学生が5名、ベティちゃん、大野小隊口クでもないんジャーのヤロー共、そして。

「そつそつ、コレが忘れ去られた『裏番』なんだよお」

私達のお好み焼きを「ちょっと頂戴ね?」と頬張りながら言つたのは、なんと小関明日香だつた。

ようするに振つて湧いたメンバーは6名だつたのである。後藤君じとうくんと小関明日香がいたので、「もしかしたら田宮君たみやくんも?」なんて思つたが、残念ながら思うだけで終わつてしまつた。

あれからどうなつたかというと、ベティちゃんと笹谷さんが投げつけたヘラがゴングの合図となり、激しい宇宙大戦争が始まつた。主な登場人物は、ベティちゃんと筆頭とする和子ちゃんと笹谷さん、対抗するのは尾島と桂龍太郎と諏訪君すわくんだ。まとまりのない勝手な言い合いが悪口合戦に変わり、流血者が出る前にそれを止めたのは、最後に出てきたリストみたいに小さくて、唇ポツテリのショートカットな可愛い子だつた。小関明日香が「ハイハイ、そこまで」とパンパンと手を叩きながら両者を宥め、一時休戦状態になつたのだ。

「いひあ、明日香!『忘れ去られた』は余計だ!!!」

何度も訂正し悪あがきを繰り返す、赤髪ピアス男かいつがひのすけこと桂寅之助先輩。

彼は予定外の客が増えた為、ベティちゃんによつて強制的に厨房へ追いやられた。工口だろうが飲食店に相応しくなからうが、店員は店員である。給料をもらつてる限り文句は言えない。ていうか働け。

「いやだつて、まさか、ねえ?」

「こ、んなドスケベだなんて、聞いたことないよねえ?」

「私、強面の部下1000人連れてるつて聞いたんだけど、どこにもいないじゃん。つていうか、いるの類人猿だし?」

「チエーンソーで人を切り刻むつて話だけど、実際切つてるのキヤ

「べツだし？」

「そう言えば身体に筋肉強制ギブスを巻きつけて田々励んでるって聞いた。しかもモヒカンだつたって！」

「そりそりー そのモヒカンで人を刺すつて聞いたよーーー！」

寅之助先輩は「一体どんだけ俺は凶暴なんだよー」と言わんばかりの酷い言われように、苦虫を噛み潰したように顔を歪めて口を尖らせた。

「オイオイ、ガキ共……そんなの真に受けんじゃねえよー 第一モヒカンでどうやって人を刺すんだよーーー！」

「ああ、威力、なさそうですよねえ」

「結構マヌケですよねえ」

「……」「ノロヤロ」

「ハイハイ、わかつてますよ」と適当に流す、和子ちゃんと幸子女史。

私は思わずモヒカン姿の桂寅之助が、不良相手に殺傷力ゼロの凶器を突進させているマヌケな姿を想像してしまい、ホワッと生温かい笑いが出てしまった。私の想像していることがわかつたのだろうか。寅之助先輩は私に向かって「今すぐその想像を止めないと、全員の前でそのチチ揉んでやるぞ、オラアー！」といふような目で睨んできた。

しかし、である。

本人目の前にして言いたいことを言つている和子ちゃんと幸子女史、気まずい顔で俯いている私とチイちゃんは新一年生であり、噂でしか「桂寅之助」を知らなかつたのだから仕方がない。しかも和子ちゃん達が言つた事は実際に広まつてている噂話だったのだ。

「それよりも貴子ちゃん、今日はどうしたの？『まるやき』にお

菓子なんか持ち込んでさあ。しかもいつものメンバーと違つじゃん?
？」

小関明日香が遠慮なくお菓子に手を伸ばしながら囁託なく聞いた。
再び固まる女子中学生組。さつきから度重なる「ジヤブ」な現象に
いい加減私は頭が痛くなってきた。 笹谷さんは既に落ち着きを取り
戻し、普段通りのクールで落ち着いた雰囲気で髪を搔き上げながら、
小関明日香をジロッと見上げた後お好み焼きをつついた。

「……別に友達は誰だつていいじゃない。 明日香には関係ないでし
ょ? 過ぎちゃつたけどクリスマスパーティーつていうことで、こ
うしてみんなでワイワイ食べてた訳」

(……あ、あれ?)

私は内心驚き一杯の気持ちで笹谷さんを見た。

いつもクールで落ち着いている彼女。人当たりも良く大人っぽい
雰囲気で余裕があるのに、何故か少しイラつとしている。私の知っ
ている限りでは、仲の良かつた原口美恵はらぐちみえと小関明日香の関係は良好
だった気がする。 そうなると自動的に 笹谷さんともいい関係を築い
ているかと思つたのだが、 そうではないのだろうか。 しかしそんな
疑問も次の瞬間吹き飛ばされてしまった。

「女同士でクリスマスかよ、 色氣ねえの」
「違ひねえ!」

『まるやき』の店内温度が5度下がった。

色氣ねえと、 とんでもないことを言つたのは、金髪でこれまた兄
と同じく煙草をふかしていた桂龍太郎けいりゆうたろうだった。余計な相槌を打つた
のは尾島と諭訪君。

「お、お猿さん達、なんていうことをつー！」

……とは言えなかつた。 笹谷さんの方を見ると桂龍太郎を凍死させる程の冷ややかな冷氣をまとつてゐる。 温度が下がつた原因はこれかあと納得！ ……している場合ではない。

「ちょっとお、そんな言い草ないじやん？ あんたらだつてムサイ男がさみしく5人揃つてお好み焼き食べに来てるんだからさあ」

（おつとお、小関さん、ナイスフォローー！）

小関明日香のクリティカルヒットに胸をなでおろす私。 それにしてもあの桂龍太郎に意見を申すとは、この小関明日香も悔れない。まあ、尾島の親戚だといつし、口と度胸は遺伝なのだろう。ありがたいことにロクでもないんジャーの分のお好み焼きのタネが出来上がりつたようで、寅之助先輩が「できたぞー」と器を次々とカウンターに置いた。

（さつすが『元裏番』！ だてに不良のヘッドやつてないよこの人！ 空氣読んでるうー）

「おら、ボイン！ 菓子食つてないで、運んでくれや

即効前言撤回。

（さつすがありがたくない言葉を店内に響き渡らせた、空氣を読めないあの赤髪ピアス男を地獄に送つてよろしいでしょ？ うか、神様！）

思春期真っ最中の男子生徒と女子生徒がこちらを凝視する中、 笹谷さんに続くように一気に零下を身にまとう私。 お供え物より呪いの藁人形のほうが先だと本氣で考えていたら、またもやベティちゃんが「そうそううう、ジュース補充しなくちゃああ」と冷蔵庫に行く振りして、ナチュラルに寅之助（もう呼び捨てで構わぬ）の背後にまわつた。

何のためらいもなく、お盆を上から下へ振り落とすベティちゃん。

「あんたあああー…いい加減にしなさああーーー！」

ベティちゃんの攻撃をまともにこらへった寅之助を見て、僅かに留飲は下がつた。が、出てしまつた言葉は取り消せない。ニヤけた顔でボソボソ囁く男共の姿に恥ずかしくて俯いてしまつた。何を思つたか、小関明日香がズズイと近寄つて私の隣に座り、ジイッと私のバストを凝視している。

「ねえ。ちよつとだけ、いいよね？」

質問と言つより確認と言つた感じで小関明日香は手を伸ばした。「え、何を？」と聞く前にいきなりとんでもないことが身に起つた。

ガシツと私の胸を掴んだ、小関明日香。

「× @ ··*つ?ー」

悲鳴を上げる女子中学生と田を丸くする男子中学生の喧嘩。

「うわああ、本物だよー！」

(そりやせうだらう、何が悲しくて偽物をいれなければならぬのか
……つて違う…そういう問題じやない…)

まだモリモリじてこむ明日香さんは「やわらか~い」と頬託ない

笑顔だ。

「あああああの、ちょっと！..」

「どけ、明日香あ！ 次は俺に触らせろおおおー！」

「あ……へつ？！ バババカッ、やめろっ、明日香！ 寅二イもマズイだろ！..」

参加しようとしてきた寅之助と慌てて止めにはいる尾島。小関明日香は手を離して「本当にやわらかいんだねえ～うらやましい～」と目を輝かせながら屈託ない笑顔全開でジイっと胸を見ていた。動悸が激しくなり言葉が出ない、というか出てこない。

（荒井美千子、中学1年で「ABC」のAをすつ飛ばしていきなりBまで行きました。しかも初めての相手は女性です！）

思わず胸を庇いながら心の中で未来の夫に事後報告＆謝罪していたら、さらにスゴイ言葉が店内に響き渡った。私のボインを揉まれた事態なんて足元に及ばない程の爆弾が、前触れもなくいきなり投下されたのだ。

小リスちゃんは両手で胸を揉む仕草をしながら小悪魔的な微笑を湛えて言った。

「ねえねえ、龍太郎。やっぱ晴美先輩も、これくらい胸デカイの？」

タイガー＆ドラゴン～龍と猿の群れの襲撃編～（後書き）

美千子、胸揉まれ、ピーンチ！！

タイガー＆ドラゴン～ロスの暴走編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したもんじゃないです。

タイガー＆ドライバーの暴走編

「ねえねえ、龍太郎。やっぱ晴美先輩もこれくらい胸デカイの？」

『まるやき』の店内温度がマイナスまで下がった。

一瞬にしてシベリアの大地と化した店内。下手すればバナナでクギが打ててしまうほど、モールもビックリだ。

吹き荒れる風に見えないブリザードに全員固まり、数ミリも動けなかつた。

「ネエさん、ijiには史上最悪の禁句用語ですがなつ！」と、たとえ小関明日香に忠告したところで、時既に遅い。和子ちゃんと幸子女史、チイちゃんは顔を真っ赤にしてるが、その他は真っ青だった。私の「ボイン」など忘れ去られて一安心……ijiではない！

（考える、考えるんだ、美千子…）

緊急サイレンが鳴る頭の中で死ぬ氣で知恵を振り絞った結果、ふと今日のテーマである「クリスマスパーティー」というキーワードを思い出した。人間絶対絶命ピンチの場面になると、意外な力が發揮されることを身を持つて学んだ瞬間である。

「あー！ そうだあーすっかり忘れてた！！ チイちゃん、確かケーキ作つて来たんだよね？！ せつかくだから皆で食べません？！蝶子さん、冷蔵庫の中ですかあ？！ チイちゃんもいよね？！」

シーンとした店内に空しく響き渡る私の声とパチンと手を合わせる音。遭難した雪山で山小屋を発見した時のような声を出した私は、縋るようにベティちゃんの方を見た。ベティちゃんもこの不穏な空気を察したのか、「アイわかつた、ガッテン承知！」というよう口頭き、「そうそう、チイちゃんがもつてきてくれたお菓子出さないとなえええ…！」と素早く冷蔵庫からケーキの箱を出す。

「えつ？ ケーキ？！ 楽しみイ」

爆弾発言の主である小関明日香は天然ちゃんなのか、自分が言った台詞などどうに忘れ「ケーキ、ケーキ」と浮かれている。しかも「よかつたね～^{けいすけ}」啓介も甘いもの好きじゃん？」といまだ固まっている尾島を呑氣にチヨンチヨンと突いていた。

（……そつか、尾島は甘いものが好きなのか。そういうえばよく菓子パン食べてるもんなあ……って違う！…）

なんでこいつらにケーキをやらんとならんの？！ とブツブツ文句を言い始めた和子ちゃんを「まあまあ」と宥めながら、そおつと 笹谷さんを盗み見た。

「……」

そこに座るのは、美しい雪女が一人。

目で人を殺せるというのはこのことかもしれない。それも非常に危険な意味で。

絶対零度の視線で桂龍太郎を睨んでるのもそうだが、その延長線上にいる小関明日香にも容赦ない氷結光線を送っていた。膝の上でギュウっと拳を握り、怒りを抑えている。

不本意とは言え、原因の一部に私の「ボイン」が噛んでいるので居た堪れなくなつた。笹谷さんは手首に絆創膏を貼るほど思いつめていたのに。彼女の苦しい恋心を逆なでするような事を語つ、小関明日香と桂龍太郎に複雑な視線を投げつけることしか出来ない自分が不甲斐ない。

桂龍太郎はもう少し笹谷さんに思いやりのある態度をしてもいいんじゃないいか、小関明日香に至つてはもう少し女性として言動に慎みをもつてももらいたい、と思つてしまつた。

正直、同じ天然でもまだ「アダモちゃん」のほうが人畜無害だし

可愛らしい」と思つ。

(多分小関さんは、桂龍太郎と笹谷さんのこと知らないんだがつけ
ど…… わあ)

ベティちゃんは営業二重スマイルでケーキの箱を持つてきた。店内はすっかりクリスマスマードに移り変わり、とりあえず内心安堵のため息をついて笹谷さんの方を見たら、大きく息を吐き、引き締めた顔を上げてこちらを見た。「ゴメン、もう少しで殺るところだつた……」といつような弱弱しい笑みに、私は「いいのいいの」と笑つた。

「はああい、チイちゃん」

ベティちゃんがチイちゃんにケーキの箱を渡すと「え、でも、そんな大したもんじゃ……」と小さい声でいいながら顔を赤くし手で箱を抑えた。みんなが注目する中、そつと箱を開けるとそこにはなんとも可愛らしいケーキが鎮座していた。

綺麗にデコレーションされたブッシュ・ド・ノエル。

丸太の形をしたクリスマスのケーキで、ロールケーキの上にチョコレートのクリームでデコレーションしてあり、普通の丸いケーキよりも手間暇がかかるものだ。しかもキリ株の上にはフルーツが乗つており、雪に見立てる粉砂糖が振つてあってなんとも豪華な一品である。

「うわあ～！」

それこそ有名ケーキ店に劣らないあまりの完璧なクリスマスケーキに、一同歓喜の声が上がる。これには男子中学生共も「すげえな」

と感心と称賛の溜息を漏らした。いつの時代も料理上手といつのは男性の心を鷲掴みするものだ。「超ウマソ……」とケーキを凝視している尾島に、チイちゃんの顔はケーキの上に乗っているイチゴのように真っ赤になった。

「あの、お口に合ひつかどうか……」

「そんなことないよ、すつゝこ美味しそうじやん!!」

小さな声で謙遜するチイちゃん。小関明日香は「今日はラッキー!」と無邪気に喜んでいる。ベティちゃんが「それじゃあ、切りましようかあああ!でもお……なんだか人数分切ると難しいわねええ?」と試行錯誤しながらケーキに包丁を入れた。女の子たちは甘いものを目の前にしてホクホク顔だ。

この時点で「晴美先輩」などという言葉は宇宙の彼方に消え去ってしまう、もう一度と戻つてこないだろうと、やつと安心できた。
…………しかし。

(…………びびり…………アレ)

私は自分のカバンが置いてある方をチラリと見た。その中には昨日焼いた「ショトレーン」が入っているのだが、この状況では非常に出しずらい。チイちゃんのケーキの前に出せば良かったと早くも後悔はじめた。元々ケーキとパンでは違うものだし比べるものではない、とはわかってはいるけど……どう見たつてこのケーキの後に私の「ショトレーン」は厳しい。

「…………オイシイー!」「…………

チイちゃん以外の女性陣(?)は小さく切り分けられたケーキを頬張り、「満悦顔だ。男性諸君も一口で食べ終わってしまい、「ウ

マイな」と食べている。あの桂兄弟でさえでもだ。想像以上に貴重な光景を見れてなんとも摩訶不思議なクリスマスパーティーである。（……こりや、このまま知らんふりする方がいいな）

せつかく作ったけど、このまま出さずに持つて帰ろうと決めた。この後で出してもシラけた雰囲気が漂いそうだし、それこそなんか言われたら今度こそ立ち直れない。ただでさえ「ボイン」などと呼ばれているのに。幸いにもみんなは、私がお菓子を持って行くと言った事を覚えてない様子だ。

（やうやく、知らんぷり！）

「足りねえな。おっそうだ！　おい、ボイン。確かオマエもなんか持ってきたって言つてただろ？　すぐに出せや」

無情にも閻魔大王が、か弱い乙女を地獄へと突き落した。

（神様、あなたは何処にいるのですか？　ていうか、存在するのですか？！）

今日はよほどの厄日らしい。閻魔大王の言葉にビクッと反応し、壊れている機械のようにギギギと声の方に向いた。どうでもいい時には人の思考を読むくせに、肝心なところで役に立たぬ男・桂寅之助は、「ん？　どうした、はよださんかい」とこうひょうごに囁々しく手を差し出してくる。

「わうだよ、ミヒちゃんも作つてくるって言つてたもんね
「え～つか？！　今日はトトローンワッキー！　楽しみイ！」

和子ちゃんや小関明日香の声に後戻りできなくなってしまった荒井美千子、ピンチでボインな13歳。

……何故いつもこのよつうな事態になつてしまつのが、原因があるのなら、ぜひ教えてほしい。

(尾島が絡むと本当口クなことが起きない、どうしてくれよつ……)

心の中で理不尽な奴当たりをしながら「ハハ……」と疲れた笑みを浮かべ、少し後ろに移動した。カバンの中からアルミホイルに包まれたブツを取り出して、そつと机の上に置く。

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

一体中身はなんだといつよつな顔が一点に集中してゐる。あのケーキの後では「シユトレン」に関するウンチクを述べたところで敵う筈もないのに、黙つてアルミホイルの包みを開けた。そこにはケーキを同じく長細くて粉砂糖がふんだんにかかつた白い物体がチヨンとあるだけ。

全員無言で眺めており、シーンとした空気が辺りを包む。予想通りの反応に落ち込むじりか妙に納得してしまつた。

「……これなあに?」

一番に沈黙を破つたのは小関明日香であり、ジロジロと眺めまわした。私は「パンだよ」と短く答え、ケーキを切つた包丁を取り、ちり紙で刃の部分を拭つてパンに刃を当てた。通常のパンより固めでお菓子に近いパンなので、普通のパンより切りやすい。切れ込みが入ると辺りに洋酒の香りが広がつた。ささつと適当に切り分けて、お好きに取つてくださいといつよつにアルマリと前に差し出した。

「え~これがパン? なんか普通のと違つて何入つてるの? 干しブドウ?」

「……ラム酒付けのドライフルーツとナッツだよ」「え~じゃあ、フルーツケーキなの?」

「ちゅ、ちゅっと違うんだけど……」

小関明日香の素っ気ない質問に遠慮がちに答えた。明らかにチヤンのケーキよりもトーンダウンしているが、それも仕方がないというものだ。私も彼女の立場だつたら、同じ事するかもしない。むしろ無理矢理褒め称えられるほうが余計に落ち込む。

でも、次の言葉にはさすがに閉口した。

「あ～残念。わたし干しブドウとかドライフルーツ苦手。洋酒もダメなの、「ゴメンねえ。ほら、啓介、アンタ大好きなんでしょ？」

小関明日香はアルミホイルからパンをヒョイと摘みあげ、尾島の前にグツと差し出した。

『アンタ大好きなんでしょ』

彼女の言葉にドキッとしてしまい、顔が赤くなっているのを見られたくないで少し俯いてしまった。訳もなく何故か心の中がホンワリ温かくなつた。それがなんのかわからないけど、一人でも口に合う人がいればそれだけで作つて来た甲斐があつたというもんだ、とスカートの上でそつと汗ばんだ手を握る。

「へつ？！……ベ、別に、大好きなわけねえだろつ？！」

「え～だってあんたブドウパン大好きって言つてなかつたっけ～？」

「…………ブドウ、パン……？」

「そうだよ、しかもナツツも入つてるよ？ アンタの好みばっかじやん、食べてあげなよお。せつかくミツちゃんが作つてくれたのに

さ～

「……あ、いや、パン、な……。や、でもよお、これまわり砂糖だらけじやねえの。……虫歯になつちまうつーのー！」

息が、

「……」

ヒュウッと、止まってしまった。

『大好きなわけねえだろつ？！』

『食べてあげなよお』

『虫歯になつかけまつついのー』

…………今日一日、色々言われてきたけど、これはさすがに堪えた。

いや、いつも通りの展開だ。尾島からはいつも酷いことを言われている。今に始まつたことじゃない。それこそ入学した時から続いていることで、こんなこと日常茶飯事だった。

普段なら誤魔化し笑いなどをしながら、心中で愚痴つてゐる。実際にさつきまで出来ていた筈なのに。

今回だけは、無理だった。

何故か怒りで頭に血が登るどころか、逆に音が聞こえるほど血の気が引き、身体の芯が冷えて寒くなつた。悲しみを通り越して虚しくなつてしまつた。

握る手に力が籠り、目頭が熱くなり、身体が震え出して、喉がキ
ュウっと縮みだしたのだった。

タイガー＆ドラゴン～リスの暴走編～（後書き）

小里斯、大暴走。

モービル1の宣伝、いまだに衝撃的で心に残っています。数秒しか映らないコマーシャルなのに、あれだけのインパクトを残すつすごい。CM作る人に改めて頭が下がる思いです。

タイガー＆ドラゴンへ穢やかな星と魔（貴）の逆襲編～（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとびり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。R15ではありますんが、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したもんではないです。

タイガー＆ドライバー 穏やかな星と魔（貴）の逆襲編

「ほりあ～」「しつけえんだよ、明日香はー。」

尾島と小関明日香は私のパンを押し問答しながら、仲良くジャレ命い出した。その様子をみながら「ヤレヤレ」だの、「絶対尾島に食わせる」だの、男子生徒が尾島に掴みかかる。「バカ、てめえら、いい加減にしろ……明日香あ！…」と真っ赤な顔して大声で抵抗する尾島の口に、笑いながらシコトレンを入れようとする小関明日香。

「！」、「いらっしゃあ、アンタ達いい！ セつかく人が作ったものをなんてことあるのおおお？！ 暴れるならああ、店を出なさああい！」

最年長らしく、諭しながら類人猿達を注意したのはベティちゃんだった。

だが彼らにとつてはいつものことなのか、なかなか止めない。さすがにベティちゃんもイライラした様子で、「いい加減にしねえと、店から放り出すぞ、ゴリラア……」と可愛らしい声ではなく、こっちが素じやないかといふドズスの効いた声を出した瞬間、この騒ぎに終止符を打つたのは店内に響く派手な音だった。

バン！！

音の方を見ると、笹谷さんが両手で机を思いつきり叩いたようだつた。

おそらく最後の一線を越えてしまったのだろう。笹谷さんは雪女を通り越して般若のような顔だ。これには溢れてきた涙も引っ込ん

だ。前に座っている和子ちゃんの目にも炎がメラメラと燃えている。……せつかく話を逸らす為に、なんとかケーキの話題を絞り出したというのに。何故か友達の怒りを倍にしてしまった事態に、もう知恵も声も出できやしない。

(マ、マズイ……)

とうとう笹谷さんが大声をあげそになつた時、「ガタン」と椅子が動く音が響いた。

さつきから尾島達とは離れてカウンターでマンガを読んでいた人物が立ち上がつた。その男の子はフЛАリと寄ってきて、小関明日香の手からパンをスッと取り上げる。

「腹減つてゐから、俺が食つ」

「でも砂糖は勘弁」と机にあるアルミホイルのところまでやつてきて、トントンと砂糖を振り落とし口の中に入れた。モグモグと頬張りながら静かに食べる姿は、コッタリと草原で食事をしている馬を連想させた。

あまり知らない顔の男の子だった。

けど、学校で何度か見たことはある。時々尾島達と一緒にいる子だ。多分この男の子が「大野小隊ロクでもないんジャー」の5人目のメンバーなのだろう。尾島も諏訪君も（野球部は全員短い）髪の毛は短いが、こちらは正真正銘の坊主で色が黒い。鼻筋がスッと通つていて、目はそんなに大きくなくつぶらな瞳をしていた。この男の子の存在が薄くなりがちなのは、どう見ても他の4人が強烈すぎるせ이다。4人とは正反対の穏やかでおつとりとした空気を纏つてゐる彼は、後で言つところの「なごみ系」というのがぴったりだつ

た。

「……あんま甘くねえよ、啓介。けいすけ普通に上手いじゃん。けど、これがパン?」

「『ひつや』、『シユトレーン』だな。確かドイツのクリスマスパンだろ」「つぶらクン」の疑問に答えたのは、なんと赤髪ピアスな桂寅之助かつらひといのすけだった。

意外な展開で田の前のブツの正体が判明したことにより、全員の驚いた顔が赤髪ピアス男に集中した。私も例外に漏れず「え? !」といふ声を発すると、「はんら、ホインほのはおは?! ホへはひつへしゃハスヒんはい?!」（なんだ、ボインその顔は?! オレが知つてちやマズインかい? !）とパンを食べながら凄む、桂寅之助先生輩。

「『』これ知ってるんですか? ?」

「あつたりめーよ! ……って、いやな? 学校の購買部にくるパン屋の可愛い娘つ子とクリスマス間近にお近づきになつてな? これが小股の切れあがつた情の深いイイ女でよお~。熱い嘗みの後にその娘つ子との『パンシユトレーン』を食べながら愛のピロートークを……つて何言わせんだ、ボインは! !」

「……」

純情な私には、赤髪ピアス男が言つた言葉の意味がよくわからなかつたが、少なくともこの男がセンコーの他にも校内にいる女に手を付けており、兄弟揃つて二股をする口クでもない人物であることは分かつた。

それにしても、もつともキリストから遠い男・桂寅之助が『シユトレーン』を知っているとは驚きだ。私は我に返つてこじぞとばかり「つぶらクン」にウンチクを説明する。

「そ、そり、桂先輩の言つとおりで、ドイツのクリスマスパンな。田持ちするよ、うに粉砂糖をふんだんにかけるんだけど、今回かけすきちやつて……。どちらかと言つと、パンというよりお菓子に近いの。でもパンに使うイーストが入つてゐるから……」

「ぶらクンは「ふうん」と別に興味なさそつな返事をして、「明日香の分もらう」ともう一個取つて砂糖を落とした。これには零れおちそうだつた涙もすっかり干上がり、「ははっ、ありがたき幸せ！」とひれ伏す代わりに、自然と満面な笑顔が出てしまつた。「つぶらクン素敵！！」と喋つたこともない相手なのに一気に惚れてしまつほど、感情が天まで急上昇した私も大概単純だ。

「……ていうか、寅二イ。お好み焼き、まだ？」オレ腹減つた」「……ていうか、カズよ。残念だが俺様の身体はこの世の全ての女の心と身体を焼きつくすのが専門でよ、ヤロー共のお好み焼きにまで手がまわねえんだ。よつて腹が減つていたら、テメエらで焼くようだ。以上！」

「……」

「カズ」と呼ばれたつぶらクンの切実な訴えを、憎い台詞で跳ね返す、桂寅之助先輩。

桂寅之助先輩の言葉には心底厭きれてしまつが、なんだか無性に可笑しくて笑つてしまつた。さすが『元裏番』、3年早く生まれているのもあつて、あの尾島を筆頭とする猿の惑星軍団もグウの根もない様子だ。それと同時に尾島があんだけ悪ガキなもの、妙に納得してしまつた。桂寅之助の側にいれば、嫌でも口も態度もデカくなるつてもんである。「数年後は工口店員のようになるのか……」と思うと、自分の中学生活にいさか不安がよぎるが。

寅之助先輩とつぶらクンのおかげで陰悪になりそうな雰囲気はす

つかり過ぎ去り、私の気分もしつかりと上昇した。ベティちゃんも苦笑だけど営業スマイルに戻っている。和子ちゃんや幸子女史も私のパンに手を伸ばしながら「そーよ、そーよー」「自分で焼きなさいよー」といつもの強気発言まで出だした。

「星野～」ここで一緒に食べよう。寅二イの代わりに私が焼いてあげるよ

なんと 笹谷さんは般若から一転して後光が差す女神顔で、お好み焼きのタネが入った器を持ちあげた。つぶらクンは「いい、自分で焼く」とアッサリと辞退したが、「まあまあ遠慮せずに呼ばれなさいよ」とつぶらクンを無理矢理座らせ、自分たちの鉄板の上でお好み焼きを焼き始めた。男性諸君の「一幸^{かずゆき}ズリイぞ！！」という文句に、笹谷さんはギロリと尾島達を睨んだ。

……まだ雪女は健在だつたらしい。

「あら、いぢいらは『地味な中学生』ですもの。よほど自分に自信がある気になる方々には小関さんにもやつてもらつたらいかがですか。やだ明日香何気に逆ハーレムねとても羨ましいー

「ちょ、ちょっと、貴子ちゃん、余計なことを……」

笹谷さんのちつとも羨ましくないような心がこもつていらない棒読みのセリフに、小関明日香は焦り出し、尾島と桂龍太郎の顔が歪んだ。しかし女神の御仕置はこれだけでは終わらない。最後の決定的なトドメを刺しにかかった。

「しつかし、せつかく美千子が焼いたパンなのに酷いことするデリカシーのない連中よねえ。美千子も遠慮しないでガツンと言つてやればいいのよ。あ、でもこんな『ガキ臭いアホな連中ばっか』じや怒る氣にもならないかあ！ ね、美千子？」

「え……ええつ？…」

(どうやら女神ではなく、魔王降臨の間違いみたいですね)

今までの恨みつらみを一気に晴らすようになり、一発逆転サヨナラホームランを隣の類人猿達の席に叩き込んだ笹谷さん。思いつきり意味深な流し眼で尾島の方をチロリと見た後、私に満面な笑みで同意を求めた。お菓子だのジュースだのつぶらクンに奉仕をしていた私は、予先が自分に回ってきたので慌てて引き響つた笑みを漏らした。本当は「んだんだ！」と一緒に厭味の一つでも言いたいが、そうするところの後正月明けが恐ろしい。これ以上尾島に標的にされるのも勘弁である。

「あ……の……」

「うんうん、わかってる！ 美千子は優しいもんねえ？ 私だつたら確実に『机を蹴り飛ばしたいくらい』ムカつくところだわあ。…あつらあ？ 笠さんどうしたのよ？ 顔色悪いわよお？ ほらあ小関さん、わざわざとお好み焼き焼いて、『傷ついている』……じやなかつたわ、『顔色が悪くなるほどお腹すいている』だった！超失礼な男子生徒を元気づけてやんなさいよお

私が一緒になつて厭味を言わないところまで計算づくした魔王の言葉は、尾島達を黙らせるには十分すぎる効果を発した。

この時点で試合終了の「ゴング」が鳴り、圧倒的な勝ちで笹谷さんの勝利に終わった。

事情がイマイチ読めない和子ちゃんと幸子女史はハテナ顔をしながらも、尾島をダンマリングさせた笠谷さんに「良く言った！！」とお褒めの言葉を投げた。ベティちゃんと桂寅之助は、笠谷さんの態度に見慣れているのか、「ここ」でチャチャを入れたらこっちに火の粉が降りかかる」と言わんばかりに黙つて大人しく飲んでいる。チラリと隣の席を見ると尾島と「バチッ」と目があつた。

尾島のテーブルでは小関さんがブツブツ文句いいながら人数分のお好み焼きを焼いていた。尾島はパツと目を逸らしバツが悪そうな、不機嫌そうな顔をした。当然だ、人がせつかく作ったものをあれだけ粗末に扱えば、気マズくなるつてもんだ。

あの時はどうしようもなく悲しかつたが、今はむづ立ち直つてゐる。
……多少心の奥は燻つてゐるけども。

（少し可哀そうかな……）

過去をほじくり返され、複雑で元氣のない尾島の顔を見て氣の毒になつたが、すぐそんな気持ちは吹き飛んだ。

バカバカしい。大体この場合氣の毒なのは、折角作つたものをオフザケの小道具にされた私の方だ。勝手に過去に囚われた尾島を心配する義理などない。

（……別に尾島なんてどうでもいいし？……そうだよ、私の輝かしい未来と日本の為に、いつそのこと原口美恵と小関明日香と両方仲良くしてもらつて、慰めてもらえばいいじゃん！　この際一股でも三股でも、私が許す！！）

心の中で思いつきり愚痴つてはいたが、何故か無性にイライラした気持ちはなかなかおさまらなかつた。嫌な感情を一掃しするためにトイレにでも行つておくか！　と、席を立つた。

「焼きが甘い！」

無事に嵐が去つたと安全確認をした桂寅之助先輩は、ビシッと笹谷さんにお好み焼きの指導をしだした。どさくさに混じつて、チイちゃんを侍らしながらビールを注がせている。「うるさい！」と怒鳴る笹谷さんと頬ずえをつきながら「……腹減つた」と呟くつぶらくな。その姿を見て笑つている和子ちゃん達。すっかり和んだ風景になり私もちょっと微笑みながら、座敷を降りた。

（桂先輩つて、本当はいい人なのかもね。噂つて当てになんないんだな）

そんなことを呑気に思いながら尾島達の席を通り過ぎた時、「待てボイン！」と桂寅之助先輩が声を掛けた。

(……この『ボイン』さえなけりや、もつといいのだが……)

それに振り向く私も私である。

「勝手に何処へ行く？！」

「……え？ 何処って……その……（トイレの方へ向かっているの

だから察しろよ、エロ店員）」

「ショーンベンの帰りに冷蔵庫からビール持つてきてくれや

「……（わかつているなら聞くくなつ、この『元裏番』……）」

私は怒りを抑えながら仕方無く頷いてトイレに向かったその時、また「ボイン！」と呼びとめられた。いい加減ムカついてジロリと睨みながら振りかえり、「なんでしょうか……」と低い声で聞いた。

一ヤリと笑つた寅之助が言つた言葉はこれだつた。

「パンツおろすの手伝つてやうつか？」

「けつ、結構です！――

今日一番の怒鳴り声を上げ、真っ赤になりながらトイレへ駆け込んだ瞬間、寅之助のギャハハハという笑い声とお盆が振り落とされる音、そして「この、変態……」という女性陣の声がドア越しに聞こえた。

タイガー＆ドラゴンへ穢やかな星と魔（貴）の逆襲編～（後書き）

口クでもないんジャーの最後のメンバー、青担当・アホシノ」と「星野一幸」登場。

タイガー＆ドッグンへ可愛いリスト用心編（前書き）

え～この章は、未成年の飲酒や喫煙シーン、ちょっとぴり「エッチ・スケッチ・ワンタッチ！」風の表現があります。（オマケに労働基準法、食品衛生法なども無視してるかも…）R15ではあります
が、PG12ぐらいになるのかなあ、なんて。でもそんな大したも
んではないです。

タイガー＆ドリームへ可愛いリスト用心編

「うわあ、寒い。」

『まるやき』を出たとたん、冷たい北風が乙女の間をすり抜けていった。その風は乙女達に「名残惜しさ」を再確認させる風だ。今まで暖かい場所でお好み焼きを食べていたお店の方をチラリと見たが、「行きますか」と言つた和子ちゃんの会図で仕方なく歩き出した。その和子ちゃんの声にも珍しく寂しさが潜んでくる。

あれから夜の開店時間まで、私達は持参したトランプで盛り上がった。明らかに確執があった私達と類人猿達も、ベティちゃんの取りなしでゲームで勝負ということになり、トランプで対戦するうちにそんなことも忘れてしまっていた。

一喜一憂しながら、過ぎちやつたクリスマスパーティーを楽しんだ中学生達。

現にゲームでエキサイトした私達の身体と心はまだ熱を持つており、最後には帰るのが名残惜しかつたくらいだ。尾島達はそのまま『まるやき』に残っているが、私達は夕方遅いので後ろ髪を引かれる気持ちで先にお暇することにしたのだった。

区民センターに向かつて歩く私達の頭上には、澄み切つた満天の星空が広がつている。冷たい空氣の中を白い息が立ち昇つていた。

「や、笹谷さん、今日はありがとうございました？」

私は隣を歩いている笹谷さんにお礼を言つと、笹谷さんは「やだ、こつこつモー」といつものクールな笑みをした後、申し訳なさそうに眉毛をハの字にした。

「あ……それより美千子には申し訳ないことをしちゃつた。……寅二イが、失礼な口きいてさあ。それに尾島達も予定外だつたし。しかもアイツらのせいで余計な仕事を……私からも謝る、ゴメンネ」

笠谷さんが頭を下げるで謝つたので、「いいよいよ」と慌てて返した。確かに桂寅之助、口は悪いが、人柄は……悪い！ もつと悪い！！

（くそお、あのエロ店員め！…）

私は怒りの鉄拳を空に突き出したい衝動に駆られた。

* * *

女子が仲良くトランプを始めた時、エロ店員は夜の準備の為にゲームから一人追い出されたのが気に入らなかつたのか、文句を言わぬ（言えない）私がたまたま席を立つたのをいいことに、強面の顔でねめつけながら店員助手を強要してきた。

しかも尾島がタイミング良く「寅二イ、メシ追加！」と注文しやがつたせいで、食べ盛りの中学生男子が「ひつちも」と次々と追加しだしたのだ。

『おらおら、早速仕事だ！ ボサッとしないで手始めに注文聞いてこい、ボイン！…』

『腹が減つてるんだ、早くしろよ、チユウ！』

『……（こいつら絶対いつか殺つてやる……）』

無理矢理割烹着を着せられたうえに、注文聞きまでさせられた、荒井美千子。お好み焼き屋の筈が、何故か揃つているご飯や味噌汁、お茶漬け、おしんこなどを運び、全員にお茶やらジューースを配給して回る始末。ついには鉄板で焼きそばまで作らされる羽目になつたのだった。隠し味に七味トウガラシをまるごと一本入れられなかつ

たのが非常に心残りだ。

男性諸君のお腹が一杯になり注文が終わって食器も片付くと、今度は夜の開店準備の為に無理矢理コキ使われ出す、荒井美千子。さすがに頭にきた私は、いつもの静かで大人しい可憐な女子中学生の仮面を剥ぎ、相手が『元裏番』だったことも忘れて言い返してしまつた。

『いらっしゃつ、もつと細かくキャベツ切れやー!』

『いー、これが精一杯です!』

『そんなにデカいボインだからキャベツもまともに切れないんだ!』

『胸は関係ないです!』

『よからぬ。今すぐそのけしからんボインにサラシを巻いてやる、こっちにこーー!』

『は、犯罪です! (つーが自分の口にサラシ巻け)』

『なにおつ? ! そつちこそ中ーのくせに犯罪まがいなボインしゃがつて! それよりも、自分の口にサラシ巻けつて言つたな? !』

『えつ? !』

『オマエの顔はダダ漏れなんだよつ!』

『ひひひ、人の考え方まないでくださいー!』

やることなすこと遂一こんな感じで、まるで売れない夫婦漫才かおバカな師匠と弟子のコントのような掛け合いである。そのうち「ミッちやああん、いつそのことおおお、この男の嫁にこなああい?」と、最初は工口店員に怒っていたベティちゃんからも勧誘を受けたほどだ。「あ、私にはもつたいたいない御縁で」と丁重にお断りさせていただくと、「いらっしゃつ、ボイン! 『私にも選ぶ権利があるんで』って、そりやどうじつこつた? !」と思考を読んだ工口店員から叱りを受けた。これには全員爆笑だつたが、こつちはちつとも笑えない。

最後の最後までこんな調子が続き、店を出る時などは、「スリム

になつてFカップになつたら来て良し!」といふお言葉を賜つたが、「今度は絶対不在を確認してから来てやる」という満面な笑みでベティちゃんにのみ頭を下げる。

「ううして意外な形で『元裏番』と知り合つた私。

もう一度と念つこともなかろうと思つていたこの男が、この先思ひがけないところで縁があるとは……。人との繋がりというのは、自分が思つた以上に摩訶不思議で、複雑に絡んでいるもの、らしい。

「ほんと。寅一イがあんな感じだから、アイツらにも悪い影響がねえ……」

笹谷さんの溜息に私は「ハハハ」と引き攣つた笑いをした。

(……影響されすぎだろ、あの類人猿め!)

想像した通り、尾島はある桂寅之助をえらい慕つているらしく、それこそ幼稚園に入る前からの親分子分の関係だそうだ。尾島には以外にお姉さんがいて、そのお姉さんが寅之助先輩と同級生ということもあります。桂兄弟と大変仲がよろしいらしい。しかし尾島のお姉さんは山野中には進学しなかつた。なんと頭がすこぶる良い優等生だった為、女子大まである有名私立のお嬢様学校に進学したと聞いた時は、さすがにぶつ飛んだ。世の中って平等じゃないんだないことも、この時学んだのだった。

尾島は桂龍太郎以外にあのつぶらクンとも幼稚園からの縁だつた。諏訪君と後藤君は小学校からの縁で、後藤君はバスケ繫がり、諏訪君はつぶらクンと『リトルリーグ』という野球繫がりで親しかつた。五年生の時に同じクラスになつた五人は、自然と仲良くなつたといふ。ちなみにつぶらクンは、野球部には入らずそのまま外部の、それはそれは厳しい『シニアリーグ』に属する野球バカだということだ。

原口美恵達は、そんな尾島達の仲間に五年生の同時期から加わったんだそうだ。 笹谷さんも五年の時からの縁なのかとおもいきや、原口美恵より古かった。 小学校一年の時にこの地に引っ越ししてきた 笹谷さんは、その頃は極度の引っ込み思案だったたらしく、なかなかみんなと馴染めなかつたところを、五歳年上の姉様のおかげで尾島達と一緒に遊ぶようになつたのだといつ。

『紹介するよ、アタイの可愛い妹だ。寅之助、くれぐれもよろしく頼むよ、しつかり面倒見てやんな。もしなにかあつたら……わかつてるんだろうなつ？！』

『……』

小学生で既にこの迫力を身に着けていた、 笹谷さんのお姉様。

越してきたその日に近所のガキ共の総大将となり、 桂寅之助ですら敵わなかつたというのは知る人ぞ知る有名な話だそうだ。 そのままお姉様はスケバンの名をほしいままにしたが、 号泣する部下に惜しまれつつも中学を卒業したと同時に引退した。 その後のお姉様は、 彼女の事を知らない都内の私立へ通つて華麗なる高校デビューを果たし、 可憐な女子高生を演じているとのことだ。 もしお姉様の過去をバラした者は、 お姉様を心酔する部下によつて逆にバラバラにされるとの噂が流れているのは、 あながち嘘でもないらしい。 私はこの時、 笹谷さんが何故クールで大人っぽく、 余裕のある落ち着いた雰囲気があるのか、 なんどなく理解した。

* * *

「……そ、 それにしても、 後半は賑やかになつたね。 どうなるかと思つたけど……」

桂寅之助にしてやられた事よりも、 類人猿達が乱入してきたこと

よりも、小関明日香の問題発言の方があまりにもすごかつたので、こんな言葉が出てしまった。別に悪口を言いたいわけではないが、それほど本当に焦つてしまつたのだ。もうあんな生きた心地がしないのは勘弁である。

小関明日香も尾島の親戚なので、小さいころから彼らと一緒にだつたといつ。彼女は人の人懐っこい性格のおかげか思春期特有の難しい年頃などとは無縁なようで、いつも尾島達の後にくつついていたらしい。どうやらそれは今でも現在進行形のようである。

「でもさあ。結局、尾島^{マヌケ}、美千子のパン食べてたじやん？ まったく素直じゃないんだから。ねえ？」

私は笹谷さんのニヤニヤ笑う顔にカアッと身体が熱くなつた。

……そう、意外な出来事が一つ。

私が忙しなく片づけていた間、ふと見ると私のパンが入つていたアルミホイルが私達の席から消えていた。何処に行つたのかと見渡すと、全部食べられて空になつたアルミホイルが、さつきまで食べていた尾島の席のところに置いてあつたのだ。エロ店員の命令で食べ終わつた食器を回収しに尾島の席に行くと、そこは食べカスと粉砂糖が落ちていて汚い。

『……』

つぶらクンの時も嬉しかつたけど、何故かその倍以上の嬉しい気持ちが広がつた。

もうこの席には誰も座つておらず、尾島と和子ちゃん達は今まで空いていた三つ目の席で白熱した戦いを繰り広げている。私は一人汚い食器の後片づけをしていたが、全然苦にならなかつた。むしろルンルンと鼻歌が飛び出す勢いだつた。

……そのせいで、「余裕があるな。よし、次は食器洗いだ！」とH口店員に仕事を追加されたのは納得いかなかつたが。

（そつか、やっぱ食べててくれたんだ……）

なんだか妙に高揚する気持ちと頬が緩むのを、 笹谷さんに悟られるのが恥ずかしくて必死で押さえた。

「でも、美千子」

「は、はい？」

笹谷さんは前を向いたまま、そつと声を顰めた。

数メートル先では和子ちゃん達3人が今日のパーティーの感想を言い合つている。『元裏番』がどうのとか、蝶子さんがステキだとか議論している後ろ姿。私達は前から視線を外し、同時にお互の顔を見合つた。

笹谷さんの表情は楽しかったパーティーの余韻はすっかり消えうせ、怖いくらい真剣な顔だつた。

「……あのさ、『彼女』には十分気を付けてね？ 油断しちゃダメ」

絶対に気を抜かないで。

笹谷さんの声は低くて固い。険しい表情を貼りつかせながらまだこちらを見る。そのまま笹谷さんは『彼女』がまだいる『まるやき』の方へ振り返つた。私も遠くなつたお店の方へ視線を追つ。

笹谷さんが言う『彼女』が誰なのかはなんとなくわかつたが、言つてる意味がわからない。

「え？ そ、それは……」

「基本的にはね、イイ子なのよ。問題は自分の『お気に入り』が他の人と友達以上になりそうなのを嗅ぎつけると容赦ないのよね」

「…………」

意味なのかと聞く前に、暗い夜道でキラコと田を光らせながら、
笛谷さんはこう言った。

「厄介なことにね、自分が一番じゃないと納得できないのよ、あの
可愛いリスは。やうとうまい相手よ」

明日香に比べれば、美恵なんてまだマシね。

そんなバカな……と思つた。

しかし、この先の中学生生活で、私はその言葉を身を持って知ることになるのだ。

タイガー＆デーランへ可愛いリストに用心編（後書き）

小リストこと小関明日香、彼女の真の姿はいかに？！

「ちょ、ちょっとー！」

「が、我慢できない……」

「つか、無理！ ありえないーー！」

ただ、「」ではない台詞が、この場にいる中学生全員の口から漏れていた。……ていうか、こうこう言葉しか出でこない、と言つぽつが正しい。

何故なら歯がガチガチと上手くかみ合はないほど極寒で、しかも唯一の望みである日差しはあるが、空はまるでグレーの絵の具を溶いた水を間違つて画用紙にぶちまけたのような曇り空。

季節は冬真っ只中である2月。屋外の現在の気温は5度以下。半端なく寒い。

「ひひあ、シャキッとした、シャキッとした！ もうやれやれ2年男子スタートするぞーー！」

競技場がある大きい公園の一隅で拡声器でアナウンスして回つているのは、3年の男子保育担当教師、箕輪みのわ先生だった。思いつき北風が吹いているにも関わらず、いつものように乳首が浮くほどピツタリとしたTシャツの上に薄手のジャージ前全開と言つ姿で、堂々と闊歩している。現在行われている競技に興奮しているのか、顔が赤く、生き生きとした表情。

「あ～あ、帰りたい…………」

思いつきり嫌そうにボソリと呟いたのは、和子ちゃんだった。

学年色のジャージの上に、女バレ専用のグレーと刺し色でピンク

が入っているシャリジャージ（歩くとシャリシャリ音の防水防寒用のウインドブレーカー）を着ているにも関わらず、身体を縮こませ、ブルブルと震えていた。

「本当、こんな日にわざわざ壘りになんなくてもさあ。……しかも雪になりそうじゃん」

同じような格好で寒さと戦いながら空を見上げるのは、幸子女史。しかも学年色のジャージと体操着の下には、渋々借りた母親の毛糸のチョッキと父親のズロースが装着してあるとのことだ。「親に無理矢理押し付けられたせいで、ありえない恰好をしてきた」と朝一番に悔しそうに舌打ちをしていた。言わなければわからないのに、あまりの寒さに思わず口が滑った模様。

しかし私も似たようなもんだった。ポケットにはカイロも入っているし、それだけではなく祖父の腹巻きに挟んで腰とお腹にカイロを当てている。

「……ちょっと、ミツちゃん、大丈夫？」

和子ちゃんが心配そうな声に、私は芝生に座つて膝の上に乗つけていた顔を起こした。「ミツちゃん、顔色悪いよ……」と呟く2人。私は2人に弱弱しい笑顔で「大丈夫」となんとか立ち上がった。ゆっくり立ち上がつたつもりが、フラリとよろける。

（……ハア。結構キツイな……）

どうして私達はこんなに寒くて凍てつく大地に立っているのか。

それは、これから5キロのマラソンコースを走らねばならないからだる、と自分で問ひて自分でツッコむ荒井美千子。

今日は山野中の3学期のメインイベントである、「校内マラソン大会」の日であった。

山野中では1学期に遠足や郊外活動（修学旅行を含む）、2学期に体育祭と文化祭、そして、3学期には合唱コンクールとマラソン大会、球技大会が行われる。マラソン大会と球技大会は毎年交互に行われており、今年はマラソン大会の年だった。男子が約7キロ、女子が5キロのコースを学年ごとに別れて順番に走る。でも実質走るのは1、2年だけで、3年はウォーキング可だ。これは受験を控えた3年の為の配慮であり、心理上受験前に勝負事でハッキリ勝ち負けをつけぬ為の対策であった。

私達の年代は運悪く在学中に2回マラソン大会することになるのだが、このマラソン大会がかなりの曲者なのだ。

「山野中大マラソン大会」、別名「部活対抗体力合戦」

別名が付く通り、マラソン大会とは表向きの名前であつて、要はどの部活が体力的に優秀な人材が揃っているかという、しょーもない部活同士の戦いなのである。

大体部活動はそれぞれ趣向も意図も異なるので、比べて競うのは基本的に無理な筈だ。「しかし体力は別！」というのが運動部の顧問や保体の先生たちの持論であり、体力の度合いを比べるには、「走る」が最も手っ取り早いと考えているのだ。もちろん、正確な体力測定云々を抜きにしての話だ。

このイベントになると、部活の部員同士……といつより、顧問同士が火花を散らす。

正真正銘、マラソン本業の陸上部を担当している3年体育教師の箕輪。

「恐怖のGO GOランニング」で名を馳せている、バトミントン部顧問こと2年英語担当・一之瀬。

サッカー部の顧問で、同じく2年担当体育教師の堂本。

野球部顧問で普段はおとなしい国語古株教師なのに、「こつちが

本業じゃないか?」と尊されるほど、部活の野球となると途端に厳しくなる「重人格の住友爺。^{すみともじい}

特にこの4者は並々ならぬ情熱を注いでおり、「隔年2月限定鬼の四天王」と呼ばれるほど、マラソンに掛かる気合の入れようつたら尋常ではないらしい。

が、迷惑なのはその顧問をもつた部員達である。それ以上納得でききないのは、運動部でもないのに巻き込まれ氣味の文化部の生徒達だろう。

「ハハちゃん。あまり辛いようなら、先生に言つた方がよくな?」「でもさ、あの『沖』^{おき}が生理くらいで休ませる?」

「問題はそこだよね」

私は非常にありがたいこと、生理一日田といつなんとも「グッジョブ!」なコンディションであった。
(くそ、いつもは生理不順なくせに、マラソンする今日に限つて規則正しく28日周期ピッタリにお客が来るつてビックリつた?!)

やはり立つて立つのが辛くて、頃垂れると同時にまた座りこんでしまつた。

そうなのだ。心配してくれる2人言つとおり、プールじゃない限り、あの「沖先生」は生理」ときでマラソンを棄権させるなんてことは絶対にしない。1年女子保体の担当「沖先生」は、箕輪と同じく非常に生徒に厳しかった。まあ、保体の先生は極度に厳しいが、フランクで面白くて生徒に人気があるかどちらかではないだろうかと私は思っている。そんな沖先生は生理痛くらいではビクともしないえに、「月一回の出血くらいなんだ! 運動して思う存分垂れ流しひけ!」などとピンクの口紅を塗つて口から唾を飛ばすようなお人だ。

「……だ、大丈夫。なんとかいける……かも」

私は膝の上に頭を乗つけながら、縮こまつた。「ミツカちゃん、頑張れ！」と2人は私を挟むようにピッタリ寄り添ってくれる。この年頃女子特有のジャレ合いで、「フフフ」と笑い声を上げる3人。

「……それよりもさあ、来週のバレンタインー、ねえ、ミツちゃん？」

気分がすぐれないものの、心はドキッと反応してしまつた。

そう、来週の土曜はバレンタインなのだ。女の子にとっても男子にとっても1年でもっとも落ち着かないメインイベント。もちろんチョコをあげたい相手はいる、が……。

「本当に、田畠にあげないの？」
田畠たみや

幸子女史が具体的な名前を言つたので、カアッと顔が赤くなつてしまつた。コクンと頷くと「なんでー?！」と不満そうな声を上げる。

「……だ、だつて、見てるだけでいいし。チョコなんて恥ずかしいし、告白する勇気なんて、とても……」

私が声を小さくして言つと、「えへー、やつてみなけりやわからないじやーん」と幸子女史が残念そうに口を尖らせた。私は苦笑しながらまた膝の上におでこを乗せた。

本音を言わせてもらひれば、そりや私だつて……といつ気持ちはある。できればチョコを渡したいし、告白もしたい。けど、相手はあの田畠君。

(普通に無理だよ)

最近の女子情報網の中で、「爽やかだし乱暴じゃないし背が高いし、イイ感じだよね」というのが、田富君について聞く噂だった。佐藤君や類人猿ほどではないにしろ、笑うと田尻の皺がなんとも可愛らしいといふこともあって結構人気が高い。あの成田耀子が狙っているという話まで伝わってきている。私に言わせてもらえば、「みんな、気付くの遅すぎですかから…」と全女生徒共に喝を入れたいくらいだ。

「やうだね、いいんじゃない? 無理することないよ。本人が告白しようと思った時でいいんだからわ。周りが騒いだり、おせつかいしたら上手くいかなくなるよ」

和子ちゃんは優しい声で言いながら腰の辺りをさすってくれた。

そう、和子ちゃんは「好きなら告白は本人の口から言つべし!」という硬派な考え方の持ち主で、よっぽどの事がない限り橋渡しなどを引き受けないし、そういうた行為が嫌いだった。「お願い、一緒にについてきて?」だとか「ねえ、代わりにお願い!」などの代理を頼む女は、「ケツ」と鼻毛以下の扱いをする厳しいお方である。その関係で入学当初、尾島田前で和子ちゃんに近づいた原口美恵と上手くいかなくなつたくらいだ。でも、私には絶対持ち合させていない、その搖るぎない態度に羨ましさと眩しさを感じる今日この頃である。

それに田富君に関しては今のところ眺めているだけで十分お腹が一杯というのも正直な気持ちだった。もれなく付いてくる成田耀子と争う気力はこれっぽっちもないし、まず勝てる気がしない。

……そして、小関明日香。

(なんだかなあ……)

彼女は何故かいつも田富君の傍にいる。もちろん同じクラスで同じ部活だから、当たり前と言わればそれまでなのだが。どうもあのクリスマスパーティー以来、私は彼女が苦手になってしまった。 笹谷さんの言葉を聞いたせいもあるかもしれない。

『問題は自分のお気に入りが他の人と友達以上になりそうなのを嗅ぎつけると容赦ないのよね』

あのリストのような可愛らしさに潜んでいる毒がいかなるものなのか、私にはまだ理解できない。しかし、あの天然爆弾発言を思えば、近づかない方が無難であることはわかる。どちらにしろ厄介な相手ばかりが、気になる人の周りをウロウロしているのは確かだ。繩張りをマークイングしている手強い獣達の領域に近づくほど私もバカではない。

(成田耀子、小関明日香、それに原口美恵かあ。…………って、あれ? 何故、原口美恵? ? ?)

最後に出てきた関係のない名前。別に彼女は田富君狙いではない筈。

訳がわからず辛い頭を捻つて考えてはみたがすぐに止めた。第一それどころではない。なんせ腰とお腹が痛い。心なしか頭痛がひどくなってきた。

(薬飲んできたけど、大丈夫かな)

心配になつてお腹を摩ると、後ろからトンと背中を叩かれた。

「ちょっとお、寒いから私も入れなさいよお」

背後から声を掛けたのは、笹谷さんだつた。

長くなつた茶色いサラサラのワンレンを二つに括つて、唇にはリップが塗つてあるらしく濡れているように光つている。もちろん 笹谷さんも女バレ専用のシャリジャージ上下を着こんでいた。

「あら？ 美千子、どうしたの？」

「ほー、アレだよアレ」

「今日一日田だつて」

「……あちやー、薬飲んだ？ 私持つてるよ~」

笹谷さんは眉根を寄せながら私の前に座った。私は「大丈夫、一応飲んできた」と再び顔を上げ、溜息を吐いた。ともかく早くこんなマラソン大会などを終わらせて、家で横になりたかった。こんな凍えた芝生の上では横にはなれない、凍死してしまう。

拡声器を通して「2年男子、スタート地点に集合しやー」という箕輪の声が辺りに響き渡った。またその声が辛い身体によく染み渡るからやり切れない。

「あ、そうだ！ ね、ね、貴子、昨日どうだったの？ やっぱり下部先輩（べせんぱい）に告白されたの？！」

斜め下に見えるグラウンドのマラソンスタート地点に集まっている男子生徒を見ながら、幸子女史が声を弾ませて笹谷さんの肩を叩いた。

RUN・乱・ラン？

「ええ？！…………昨日つて、その…………」

笹谷さんはほんのり頬を染めながら声を段々と弱めていく。そんな可愛らしい彼女の身体に、「このお、羨ましい奴め！」「し、幸せ者～」「詳しく聞かせなさいよ！」と私達はふざけて一斉に抱きついた。笹谷さんも「きやあ～助けてえ～」と調子を合わせて暴れだす。

「あ！　ね、見て！　あそこ、日下部先輩いるよ～。ほら、貴子、手を振つてあげなよ～！」

幸子女史がスタートラインの前方にいた上半身だけ白とブルーのジャージを着たサッカー部の集団の方を指さして叫んだ。「ほら～」「え、いいよ…」と幸子女史と笹谷さんが押し問答していると、サッカー部の集団の方がこちらに気付いたらしく、何人かが日下部先輩を叩いたり肘鉄を食らわせながら、逆に私たちの方を指さした。

「やつた、氣付いた！　せんぱ～い、頑張つて下さ～い！…………つてほら、貴子も～！」

幸子女史は立ち上がりつて2年のサッカー部男子に向かつて声援を送ると、笹谷さんを無理矢理立たせ前面に押し出した。笹谷さんは「え？！　ちょ、ちょっと」とグラウンドに背を向けそうになるのを、3人でガシリと身体と腕、足を押さえつけて、代わりに笹谷さんの腕を振つた。日下部先輩は照れ臭そうに片手を上げるだけだったが、顔は嬉しそうだった。

周囲のサッカー部員から、さらに激励の一撃を受ける日下部先輩。

そのうち算輪の「位置について、三ーイ！」の声が響き渡り、「バンー！」といつピストルと共に2年の男子が一斉にスタートを切った。男子は競技場のグラウンドを一周した後、外に出て公園をグルリと囲む5キロのマラソンコースを一周半するのだ。

「始まつたね」

笹谷さんがホッとしたようにポソリと呟くと、私達も溜息を吐いた。

「……田下部先輩つて、素敵よねえ」
「文句無しの満点よね、なんせ落ち着いているしね？」
「きょ、今日はメガネじゃないんだね」
「うん、サッカーの試合と走る時はコンタクトなんだって」
「「「ちょっとお、いつのまにそんな情報をつ？！」」」

幸子女史、和子ちゃん、私の順で感想を漏らすと、笹谷さんが口つと答えた。すぐさま食らいつく3人。キャアキャア騒ぐ4人は恋に一喜一憂する乙女な中学生そのものである。そんなピンクな雰囲気のおかげで私の身体も少し熱くなり、痛みは多少和らいだ……気がした。笹谷さんの顔を見たら、頬を染めているし、まんざらでもなさそうな顔をしている。

（……良かった。笹谷さん、もう桂君のこととは過去になつたみたいだね）

かつては手首に絆創膏を貼るほど桂君のことを思いつめていた笹

谷さん。

晴美先輩

晴美先輩と桂君の噂はこの頃になると搖るぎないものに変わり、最近では卒業する晴美先輩との短い学校生活を満喫するため、かなりの頻度で一緒にいる現場を目撃することが多くなつた。

しかし、私から言わせてもらえば、桂君は晴美先輩に言いように

操られているだけのような気がしてならない。どうみても晴美先輩は、彼女の立場やポジションにハクを付けるためだけに、桂君を利用しているとしか思えないのだ。その見返りにお楽しみな時間がもらえれば、それはそれで年頃の桂君にとっては十分魅力ある取引になるかも知れないが。

（まったくもつて不潔だけだね。でももう篠谷さんには関係ないよね？　日下部先輩の方がうくんと素敵だし！）

競技場を出ていく2年男子の後ろ姿を、なんとななく田で追った。

先頭を陣取っているのはサッカー部のジャージである白とブルーの集団。その中心にいる日下部先輩。

現在2年生である彼は、成績優秀だけではなく、サッカー部の副部長と生徒会の役員を務めており、「優等生」を模範にしたようなお方である。

3年の元部長の菊池先輩のようにすこぶる爽やかで明るいってわけでもないし、特別顔がイケメンってわけでもないのだが、黒目が大きく優しい目元をしており、キラッと光る（ように見える）八重歯が魅力的の男子だった。普段は銀縁のメガネをしてるが、スポーツの時になるとメガネを取ってしまう。これがまた女生徒には堪らないらしく、後で言うところの「萌え」をつくと言つてもいいだろう。メガネ特有の大人っぽい真面目なお堅い雰囲気から、メガネを取りた途端、スポーツを得意とするヤンチャな少年っぽい可愛い雰囲気に180度変身してしまうのだ。それに加え、女子生徒の十人中十人が母性本能をくすぐられ完全にヤラしてしまったの噂だった。また、山野中一のイイ女・晴美先輩が言い寄つてもビクともしなかつた、というのが彼の女子人気にさらに拍車を掛けた。

そんな影で絶大な人気を誇る日下部先輩が見染めた女生徒が、目

の前にいる 笹谷貴子である。

彼は頭も人柄も雰囲気も良いだけではなく、女の日の付けどころも相当肥えた眼力をお持ちのようだ。キッカケは去年の秋の運動会。体育祭委員であつた 笹谷さんは、生徒会役員と一緒に仕事をする機会があり、そのときに日下部先輩とお知り合いになつたとのことだつた。

山野中の『伝説』通り、サッカー部である彼は、バレー部員の中でも抜きんでて綺麗系で大人っぽいクールな雰囲気の 笹谷さんが、スピードティー且つ出ししゃばらない仕事ぶりと痒い所に手が届く心遣いに、完全ノックダウンされたらしい。

体育祭が終了した辺りから、バレー部の方をサッカー部の集団がチラチラ見ていた日下部先輩をからかっていたが、それはどうやら 笹谷さんが目当てだった模様。3学期に入つたとたん、日下部先輩が 笹谷さんに猛烈アタック！……とまではいかないが、サッカー部から転がつて来たボールを 笹谷さんが拾つと、日下部先輩自ら取りに行くという光景が目に付き、廊下や部活の帰りに顔を合わせると積極的に挨拶するまで行動に出てきた。そしてとうとう昨日、部活の帰りに、 笹谷さんだけサッカー部の2年生数名に拉致されてしまつたのだ。

「んで、やっぱ、昨日、告白されたの？」

幸子女史の言葉にグッと息を飲む2人。一方 笹谷さんは顔を真つ赤にした。それだけで答えを出したと言つてもよい。

「……告白されたのね？！」

3人が大きい声で一斉に叫ぶと、 笹谷さんは既に茹でダコ状態で湯気が見えそうな頭を、ノクリと縦に動かした。その姿はギュウつ

と抱きしめたいほど可愛くて、女の私でさえも「ハートにズキュン」ものだった。さすがに身体が本調子でない私も和子ちゃん達と共に「ギャー……」とせりに騒いだ。静かにしてと人差し指を唇に当て慌てる笹谷さん。

「え、え、じゃあ、カレシ決定なの?...」

「……あ、いや、もうこいつんじゃ……」

「どうこいつ? 部田されたんだしょ?！」

「やつ、なんだけど……」

笹谷さんは幸子女史と和子ちゃんの迫る意見に困ったように微笑んだ。

静かに話し始めた笹谷さんによれば、サッカー部2年数名に拉致されはしたが、それは田下部先輩が頼んだ訳ではなく、周囲が煮え切らない田下部先輩を見かねて、笹谷さんと2人つきりにしたかつただけらしい。

田下部先輩は笹谷さんに「なんか……情けないんだけど、アイツらのおかげで一緒に話せて嬉しい」と言つたそ�だ。とりとめのない話を少しした後、とうとう田下部先輩は「君が好きだ」と告白した。お互い真っ赤になりながら黙つていると、「あ、でも、そんなすぐ付き合つてくれつというわけじゃなくて、最初は、友達から色々話をするだけでも……」と欲求不満な飢えている野獣を匂わすことなく、なんとも健全で清い男女交際希望を前面に押してくれたのだ。

盛り上がりを見せる展開に、「ギャー……」とパワーアップした興奮で騒ぐ乙女なヌリカベトリオ。

「で、で、貴子はどうなの?...」

「なんて答えたの?...」

「え? ……それは」

鼻息の荒い2人の質問に笠谷さんが答えるよつとしたところで、拡声器から出るあの「キイイイイーン」という不快な音が響き渡った。いいところに水を刺すのは、お呼びでない体育教師・箕輪。

「1年女子！ もうそろそろ準備しろ！ 今のうちトイレ済ませるよー！」

超テリカシーのない言葉を周囲に振りまいている箕輪の声で、一気にピンクな雰囲気が空と同じグレーに塗り替えられてしまった。少しはマシになつたお腹の痛みが再びぶり返してくる。ビリやら痛みが和らいだと思ったのは気のせいだつたらしい。

「あ～もうー いいところなのにー」

思いつきつボヤく幸子女史に笠谷さんは苦笑いをしながら「まあ」と言った。後で詳しく報告するよつにてー と3人から迫られた笠谷さんは、觀念したように笑つて頷いた。ひとまず笠谷さんの恋の行方話は休戦に持ち込み、私達はマラソンの準備をし出した。

「……それにしても、美千子大丈夫？ トイレ行っておいたら？」

笠谷さんがシャリージャージの下を脱ぐと顔を覗き込んだ。私も同じくフランフランになりながら下を脱ぎ頷く。部活用のジャージ着用可だが、上下着てしまふと学年がわからなくなるので、上着のみ残す。一枚脱いだだけなのに、本格的に寒い……。

「ちょ、ちょっと、トイレ行ってくる」

「あ、私も行くよ」

ハアと一息溜息を落としてトイレの方へ歩きだしたら、笹谷さんも隣に並んでくれた。和子ちゃん達は私達2人分のジャージを持つて、向こうで待ってるからと下の方へ降りて行つた。1年の女子らしき生徒もボチボチ競技場のトラックに降り始めている。私と笹谷さんは「急いづ」トイレがある体育館の方へ歩きだした。

* * *

用をたしてナップキンを変え、トイレの洗面所で手を洗うと幾分か気分が和らいだ。これで少しば持ちこたえられるかもと自分を励ましながら腰を摩る。

「それにしても一日田なんて、最悪だね。美千子も生理痛重いの？」

私は首を振つた。いつもならこんなに生理痛も酷くないし、不快感が少しあるだけだ。生理不順で周期が長い筈なのに、年に数回キツカリ28日周期で来る時がある。その時だけ生理痛が重く出血も多いのだ。普段生理痛が軽い分この当たり日の痛さが尋常ではない。それを笹谷さんに言いつと、「そつかあ」と頷いた。

「さ、笹谷さんはどう？ やつぱり重いの？」

「うん、私は28日ピッタリに来るよ。しかも一日田なんて最悪、薬ないともうダメ。腰痛くてオバアさんみたいになるもん。量も多いしナップキンじや不安だから…」

笹谷さんはヒソヒソ声で『多い日はタンポン使わないと安心できないくて』といつそり打ち明けてくれた。ギョッとした顔で笹谷さんを見ると、ん？ とした表情している。『わ、私、使ったことないの』と囁くと、ああと納得したように笑つた。

「中学生じゃ使っている人、少ないよね。うちは姉貴が使ってるから、自然とね」

私はハハハ……と力なく笑い、ポケットからハンカチを出して手拭つた。

さすが笹谷さん。こんなところまでススんでいるとは、どうりで大人っぽい訳である。私なら考えられない。だってアレをアソコへ……と変な想像しただけで赤くなるどころか、さらに気持ち悪くなってしまった。

（ダメだ、別の事考えよう……今はマラソンに集中だよ。あと数時間持ちこたえないと……）

頭の中で大好きな「元が出るテレビ！」を思い浮かべ、ビートたけしと高田純次の何とも言えないド・ストライクなコメントを無理矢理記憶から引っ張り出した。なんとか気持ち悪さから気を逸らすように精一杯気分を盛り上げる。

「ねえ、ねえ、美千子は来週どうする？ チヨコ、上げないの？」

精一杯盛り上げたおかげか。薄ら笑いまで出てきたところで、 笹谷さんが肩を押しながら聞いてきた。

「え？」

笹谷の方へ向くと、彼女は意味深な顔をして体育館の入口の方を目配せした。

RUN・乱・ラン　？（後書き）

新キャラ、日下部先輩登場。「天才たけしの元氣が出るテレビ」、これも大ヒットした番組ですね！見たことがない方は、機会があればYOUTubeなどで検索してみてください。ビートたけし先生と高田純次先生若い！！「こんな　はいやだ」シリーズに大爆笑した記憶があります。それと「ダイブッコン」（漢字忘れました）あまりのバカバカしさにむしろ神がかり的なものを感じます。

そこにはかなり大きい人だから……。とこより、大まかな2つのかたまりが合わさっているという感じの、賑やかな集団が目に入った。

集団はうるさい2年も3年もマラソンで出払っているので、堂々とベンチに座つて寒さから非難しているらしい。

……体育館などの施設の中にはトイレ以外入つてはいけないというのに。

片方の塊には派手な赤と黒のジャージを着ているバスケ部の集団だつた。もちろんその中には田富君もいた。そして小関明日香や成り田耀子も。

もう一方は白とブルーのジャージ。その中心人物は言わずと知れた野生猿で、佐藤君も一緒だ。他の部活のジャージもチラホラ混じつていて、その一つにグレーとピンクのシャリジャージが数名いる。こちらは原口美恵とその取り巻き連中だつた。

マーキング中の猛獸が揃つていてるせいなのか、それとも生理中だからか。急激に気分が下降し、腰が痛くなつた。せつかくの高田純次大先生のコメントも効果が薄れしていく。

(和子ちゃん達、来なくて大正解だな)

隣の笹谷さんも、嫌な連中がいるなという複雑極まりない顔をしている。私は首を振りながら苦笑いで返した。

「そ、それ、さつき幸子女史からも言われたよ。でも、やめとく」「告白しなくてもさ、チョコだけあげたら?」「ん……だけど、ほら……」

田富君の周りにいるバスケ部女子の人だからに視線をやると、

「ああ……彼女らね」と今度は笹谷さんが苦笑した。

「そ、それに見てるだけで十分だし。どちらかといつて、田の保養つていうか……」

「確かに。田尻君って笑うと可愛いよねえ。田尻の皺がさあ、背も高くなつてきてるしね？」

「そ、そうなのー。クシリとした笑顔を初めて見たあの時は、さすがのリバー様も霞んじやつたよ」

私が後半興奮気味で言つと、「やだあ、美千子つてば」と笑つた。私達は顔を見合させてあらためてフフフと笑つ。

（まだ私には告白なんてなあ……。もつと瘦せて、もつと自信がついてからでないと。それに私にはリバー様がいるしー。）

将来伴侶になるであろうリバー様似の、金髪碧眼である未来の夫を思い浮かべ妄想を繰り広げると、再び気分が高揚して来た。なかなかいい調子である。

「そ、それよりもさ。昨日和子ちゃんと話してたんだけど……」

私は昨日笹谷さんが拉致られた後、3人で話し合つた話題を彼女に告げた。

昨年暮れにお世話になつた『まるやき』の店長こと「蝶子さん」に、お礼としてチョコを上げてはどうかと話が出たのだ。決して、「蝶子さんって男だよね?」という意味ではない。あくまでも休憩時間を開けてくれた感謝のしるし、としてだ。笹谷さんは顔をパアッと綻ばせて盛大に頷いた。

「蝶子さん、きつと感激して泣いちゃつわ!」

「そ、そつ? でさ、来週の祝日に集まつてチョコ作らないかつて言つてるんだけど。ちょうど試験休みに入るから、14日の土曜日の午後にでも渡しに行こうかって」

「……え？　土曜日？」

笛谷さんは急に気まずそうに声を弱め俯いた。頬が薄ら赤くなつた様子にさすがの私もピンときた。バレンタイン、試験一週間前で全部活動停止、しかも土曜で午後はフリー。

「……あ、も、もしかして、日下部先輩？」
「へつ？！　あ……あの」

下からのぞいて言つと、笛谷さんは恥ずかしそうにしながらも観念したのか頷いた。「実は……」とモジモジしながらキヨロキヨロ辺りを見回し、お預けになつた笛谷さんと日下部先輩のその後を教えてくれた。私は一足早くお宝情報をGETのようだ。

『土曜の午後……一緒に図書館で、勉強しないかつて』
『えつ？！　さ、早速デートですね？！』
『……そう、なるの、か……なあ』
『そ、そつですがな！』

興奮した面持ちだが、逆に声を響める2人。

さすが日下部先輩、勉強と言つ大きな盾を掲げて、しかもバレンタインの日に初デートを誘うとは……なかなかの策士である。私はヒソヒソと話しながら、ざわついている集団の横を通り過ぎ、外に出ようとしたところをある声が呼びとめた。

「ちょっと、ちょっと、貴子ちゃん！…」

呼びとめたのは、あの「小リス」こと小関明日香だった。興奮したような大きな声が響き渡り、それぞれ固まつて談笑していた集団も話を止めて、小関明日香の方へ注目した。

シーンとした空気が体育館入口を通り抜ける。

小リスは満面な笑みに小悪魔的なスペースを口元に湛えながら、ズンズンとこちらに寄つてくる。私はその笑みを見ただけで、背中が寒くなり気分が悪くなってしまった。無性に嫌な予感がして……。こいつときの予感は何故か当たるのだ。

「ちょっと、聞いたよ、貴子ちゃん！　あの日下部先輩から告白されたんだってえ？　付き合つの？！」

彼女の大きな声は体育館入口付近に響き渡った。

その場にいた全員の息を飲む音が聞こえた……気がした。が、次第にざわつく生徒達。「え？」「うそ？」「日下部先輩と笹谷さんが？」などの声が僅かに聞こえてくる。（ななな、なんで小関さんが？！）

こんな昨日の放課後出来立てホヤホヤのショッキングネタ、ニュース速報でもなけりや知り得る情報ではない。小リスはお宝情報どこから仕入れてきたのだろうと感心しつつも、私も笹谷さんも固まつたままだった。

「ね？　ね？　どうなの？」

当の小関明日香は屈託ない顔をしていた。

……無垢な顔をしているが、私にはそれが薄ら寒く感じた。背後から黒い羽と細くて先が鋭利な尻尾が見えるのは氣のせいではない。彼女に対し、怒鳴りたい気持ちが沸々と湧いてきた。顔が強張るのが自分でもわかる。

本人のなんの了解もなく、あんな大きな声で皆の前で披露している内容では決して、ない。

普通の神経ならばありえない。ハッキリもしない噂話なんて、本人の前にして大声で言つていいことではないし、もし確かめたかつたらこいつそり聞くのが礼儀つてもんだ。ましてや後方の集団の中には……。

集団の中には、知つてゐる顔ぶれも数名いた。

彼女の友人であつた原口美恵もいるし、そして「口クでもないんジャー」のメンバーもいた。もちろん、あの桂龍太郎まで「丁寧に揃つて」いる。

原口美恵は口に手を当て、ショックを隠せない様子だ。尾島、諷^す訪君、後藤君にいたつては、口を見開いたままだつた。

では、桂龍太郎は？

「……」

一言で言つなら、「ヤバイ」である。

冷えるよつた日で笹谷さんを見ている……とこより、睨んでいた。

(おいおい……不良なら、マラソン大会くらいバツくれるよ！ こんな時に限つて何故ご丁寧に参加している？！)

無論心の中だから言えることであつて、実際はその姿を見るだけで怖い。

ここに和子ちゃんがいなことが悔やまれた。小悪魔に対抗できるパーティーとしては私では役不足だ、しかも「コンティショニングが非常にによるしくない。激しくなる腹痛腰痛を抱えながら必死にここから」の撤収方法を考えていたら、箕輪の事を思い出した。そうだ、もうそろそろ一年女子のマラソンが始まる。ここでくつろいでいる皆さんには、あのアナウンスは聞こえなかつただろう。「もつそろそろ集合時間だつて箕輪が言つてたよ」と口を開けようとする前に、ある声に遮られた。

「へえ～生徒会役員さんとねえ。地味な中学生同士お似合いじゃねーの？」

絶対言つてはいけないこの世の禁句用語が、絶対言つてはいけない人の口から出た。

こんな大勢の前で、とんでもない発言をしたのは、命知らずの『裏番』こと桂龍太郎。 笹谷さんと桂龍太郎は、途端に全員から好奇心と驚愕の視線を受けた。

(ど、どうして?)

笹谷さんから離れて行つたのは彼の方だつた筈だ。

なのに元彼女の恋を応援するどころか、こんな非難まがいの言葉を吐くしかできないなんて。

私は怒りと同時に、そんなことしか言えない桂龍太郎がとても気の毒になつた。

笹谷さんはギリつと歯を食いしばり、グッと拳を握つた。彼の殺人光線ビーム並みの視線を真っ向から受け、それに負けないぐらいの凍結ビームをお見舞いしている。

両者の間に目に見えない火花が激しく散つた。

瞬く間に辺りがいつぺんに地獄と可する体育館入口。灼熱のマグマや血の池、針の山などが私には見える。けどそれは数秒で、急に 笹谷さんはフツと笑つた。

「……あら、やだ。悪いけど桂君にだけは言われたくないなあ。あなたと晴美先輩から見たんじや、どう見たつて全校生徒はみんな地味でしょよ」

厭きたような、しつかりとした余裕のある笹谷さんの声。

(お、お見事、笹谷さん!)

「確かに」という無言の答えが、この場にいる全員から聞こえた。しかも笹谷さんは口元だけニヤリと弧を描いていおり、『裏番』はその暗雲たち込める笑みに一瞬ギクつとした……ような気がする。 笹谷さんの氷結光線は、もうすでに存在しないかのように龍からあつさり逸れて、子リスに移動した。小関明日香をチョイトイと呼ぶ笹谷さん。「え?」とウキウキした様子で笹谷さんに近付く小関明日香の耳に、そつと何かを囁く。

小関明日香の顔が最初笑顔だったのが、その内笑みが消え、強張り始めた。

笹谷さんがスッと小リスから顔を離すと、小関明日香はたちまちギラリとした眼で笹谷さんを睨んだ。その姿はさすが親戚同士、類人猿の本気モードを彷彿させる。ぜひこの顔を後方に控えている集団の皆様に見ていただきたいが、残念ことに小関明日香は彼らに背を向けていた。一方笹谷さんは小リスのそんな睨みはビクともしないどころか、意味深な笑いを浮かべ、小リスの肩をトントンと二度叩いた。

「どうわけで、そりんと」ロジク、小関さん。や、こいつが、
美千子」

笛谷さんはポカンと見守つたまま動かない集団と、いつも通りの表情に戻そうとしている小関明日香に冷たい一瞥を残し、私の腕を取り体育館の扉を開けた。

緊張の糸が切れたようにザワザワと話をする集団。「こちらを睨んだままの桂君とその横で何か囁く尾島達。そして、「ちょっと、なんて言われたの?」、「やっぱ日下部先輩のこと本当なの?」などと小関明日香に走り寄るバスケ部員達が見えた。

RUN・乱・ラン ? (後書き)

貴子は小リストになんと書いたのでしょうか。その内容はいずれ出で
くる…かもしない(^ ^ ;)

「や、笹谷さん！」

小走りする笹谷さんの後を追いかけ、隣に並んで顔をそっと覗きこんだ。まっすぐ前を睨んでいた笹谷さんは、唇をきつく噛んでいた。

「……」

私はその顔を見た途端、胸が締め付けられ、不覚にも自分が泣きそうになってしまった。

（バカ……私が泣いてる場合じゃないのに……）

何故か無性に自分のことのように悔しかった。女子プロ並みに腕力と勇気があれば、あの場にいた小関明日香じせきあすかと桂龍太郎かつりゆうたろうの頬を張り飛ばして、ギッタギタにしてやりたいくらいだ。脳内で二人の胸倉を掴んだところで、笹谷さんはとつとつ足を止めて俯いてしまった。

「……ホント……もう、やだ……」

やつとの思いで絞り出した、笹谷さんの呻く声。

聞くだけで苦しくなってしまったその声に、我慢できずにとつとつ私の方が先に涙が出てしまった。

（……笹谷さん……まだ、桂君のことを）

おそれらくそういうことなのだろう。

桂龍太郎はほんの好奇心程度で笹谷さんにチヨッカイ出したのかかもしれないが、笹谷さんは本気で彼が好きだったのだ。それなのに桂龍太郎の方から一方的に離れて行き、しかもちゃんととした別れの言葉もないまま有耶無耶になってしまった。中途半端に断ち切られ、

「まだ心中で燻^{くすぶ}つっている相手を忘れようと思つても、『はい』そうですね」とできるほど人間都合よくできていない。

それなのに、桂龍太郎は、絶対言つてはいけない冷たい言葉で、まだに想いを秘めている笹谷さんを突き放してしまったのだ。

「…………美千子」

「…………うつ…………」

「私…………多分、日下部先輩と付き合^{くわい}うことになると想つ…………」

「…………うん…………グスツ」

「もう、桂なんて知らないし、関係ない。だから、前に言つたこと、忘れてくれる?…………日下部先輩のこと応援してくれる?」

「…………」

笹谷さんは顔を上げて私を見た。その茶色い瞳に怒りと悔しさと悲しさと寂しさと……そして、涙をためて。
私にできるのは……。

「た、貴子…………」

「…………！」

「わ、私、去年言つたよね…………覚えてるかな?」

私は一呼吸おいて、ハンカチで涙と鼻水を拭いながら言つた。初めて笹谷さんと近づいた、あの秋の日のことを思い浮かべながら。

『『大人っぽい年上の人^が合^うつよ。』』 笹谷さん綺麗だし、桂君にはもつた^{ない}。私は絶対、そう思つ^つって。わ、私、あの時から意見変わつてないから。日下部先輩は桂君とは違う。おお大人っぽい年上だし、絶対イイ人だ、よ。それに、た、貴子にちゃんと『好きだ』つて言つてくれた

「…………美千子…………」

私は頑張つて鼻水を啜りながら一気に言つた。ここでハッキリ言わなければ、いつたといつ言うのだ、というより。初めて笹谷さん这件事を名前で呼んだりして、ちょっと恥ずかしかつたけれど。照れ臭さを誤魔化すように、きこひなく笑うと、彼女は涙を赤口リとこぼし、慌てて袖で拭つた。

「……ありがとう」

笹谷さんはお礼の後に、「……でも。日下部先輩、人気あるから、大丈夫かなあ」と苦笑した。

確かにそうだ。あれだけ人氣がある日下部先輩、例え公認の仲になつたとしても、ヤツカミが多そうだ。桂龍太郎にしろ日下部先輩にしろ、大物ばかり相手で笹谷さんもなかなか難儀な人生を歩んでいる。

「だ、大丈夫。和子ちゃんや幸子女史もいるし。……わ、私じゃ、あんまり役に立ちそうもないけど……」

「そんなことないよ、頼りにシテマス」

笹谷さんは涙田だけど悪戯っぽい表情をすると、やつとお互い頬を緩め、微笑みあつた。

「おい！ そこの一年、もうそろそろスタートだぞっ！」

急に声を掛けられ、2人ともビクッとした。なんと薄手ジヤージ姿の箕輪がこちらにズンズン歩いてくる。私達2人は一気に背筋を伸ばし「ハ、ハイ！」と即答し駆け出そうとしたが、何を思ったのか笹谷さんはぐるりと方向を変え、箕輪先生の方に近づいた。

「先生！」

「ん？ なんだ？」

「体育館に1年生が大勢いました！ 休んでいるみたいです」

「なにい？ 本当かつ！」

「はい、まだいると思います！ 注意しようとしたのですが、時間が
がなくて……」

「そうか、わかった！ オマエ達は早くグラウンドへ行け！」

「はい！」

笹谷さんの言葉に箕輪は目を吊り上げ、ドスドスと肩を怒らせながら体育館に向かった。「フン、イイ氣味！」と、笹谷さんは静かに吐き捨て意地悪い笑みを浮かべた。唖然としながら笹谷さんを見たが、箕輪が体育館に消えると、これから起ることを想像してしまい、私は思わず吹き出してしまった。

（佐藤君と田宮君には気の毒だけど、しょうがないよね）

さりに笹谷さんは体育館に向かつてアッカンバーをしたので、私はお腹も痛いのを忘れて爆笑してしまった。

ささやかな復讐を果たした2人は、「あ～スッキリした」と言いながらグラウンドの方へ向かつたのであった。

* * * * *

ハア、ハア……。

誤解しないでほしい。

これは電話越しに聞こえる変態男の喘ぎ声でもないし、満員電車の中で背後にピッタリくつつく痴漢の興奮した声でもない。

この声はれつきとした、荒井美千子の喘ぎ声である。しかも糖度はゼロ。どちらかといつと非常に辛いシチュエーションの中で醸し出される声であった。

(つーか、もうダメ……)

女子1年のマラソンがスタートして、そろそろ30分……が経過している、多分。

初めは緊張で気分の悪さがなんとなく誤魔化されていたけども、グラウンドから出てマラソンコースに入った途端、お腹と腰の痛みが増してきた。また前方から吹きすさぶ北風がさらに拍車を掛ける。和子ちゃんや貴子の励ましを受けながら、先頭とはいかなくてもなんとか中堅どころの集団についてこれたが、開始10分を切った辺りでもう限界だった。

『ミツちゃん、大丈夫?』

『さつき沖おきがいたでしょ、戻もどって先生に言つていよつか?』

『なんか、顔色真まことう青だよ……無理むりしない方がいいよ』

和子ちゃん達だけでなく、奥住トリオまでが私に氣おへいすみを使つてくれた。

おかげで全員の足が止まつてしまつて、その横を、どんどん通りすぎるのは生徒達。その中には赤と黒の派手なジャージのバスケット部や原口美恵達の集団がいた。彼女たちはチラリと見ただけで、我関せずと通り過ぎて走つていく。

(……くそ、なんかムカつく……。けど、今はそれどころじゃない)

自分の身体は自分がよくわかっている。もうこれ以上無理して走つたら、おそらく倒れるだろうと自覚した私は、みんなに先に行くよう言つた。どうしようとも顔を見合わせる彼女達。貴子と和子ちゃんは反対したが、私としては、特に貴子には、あの通り過ぎた原口美恵と小関明日香に絶対負けてほしくない。それに、ここにみんな立っているだけでは何にもならないし、どんどん1年女子は先に行ってしまう。

『「い、ごめん。私はゆっくり歩いてゴールするから、やっぱ先に行つてくれる? と、途中で待機している先生に事情話すし……ね?』

私が何とか笑いながら言つと、みんなは渋々ながら頷き「絶対先生に言うんだよ!」と言つて先に走つて行つた。最後まで心配していた貴子は、「一緒に歩く」と言つてくれたが、私は首を振り、そつと前方を促し「ま、負けるな!」と密かに声援を送つた。貴子はハツとしたように前を見据えて「了解!」といつづりに頷き、絶対無理しないようにと強く念を押してダッシュした。

(が、頑張れ、貴子!)

多分、日下部先輩は上位に入るだろ?。10位以内に入れば全員の前で一緒に表彰を受けられる。是非とも貴子には日下部先輩と一緒に並んでもらいたかった。それなのに私のせいで足を引っ張つてしまつた……と、申し訳なさで一杯になる。

女バレの友人達の背中にエールを送りながら一人解放された私は、長いであろうゴールまでの道のりを思い溜息を吐いた。

(いかん、ここでボンヤリしていたら、余計具合が悪くなる……)

ほとんどウォーキングに近い走りでなんとか前進するが、前方の集団から距離が広がるばかり。そのうち文化部の生徒達にも追い抜かれ、とうとう最後尾コースとなつてしまつた。

(うわあ、最後尾でドン尻決定だ。……けど、ここで無理しても)

キリキリとお腹に痛みが増し、腰はこれ以上ないくらいダルくなり、なんだか寒気もした。これだけ外が寒けりや当たり前といえば当たり前だが。

もう足を動かすのも辛く、私はとうとう足を止めてしまつた。

マラソンコース沿いにずっと張り巡らされている低い木の柵に手をついて腰掛け、息をつく。前屈みになり膝に肘をついて手で顔を覆つた。こうして座つていれば、先生が来てくれるかもしれないと思

思いつつ、あと『一』ルまでどれくらいあるんだ？！と、指の隙間から落ち葉が敷いてある地面をぼんやり見つめた。

ザツザツザツ……

遠くから、落ち葉を踏む音が微かに聞こえてくる。

その音は規則的で早い。歩いているより走っている感覚だ。

(……？ もしかして、和子ちゃん達が先生に知らせててくれたのかな)

先生が来てくれたかも、と期待で胸が膨らみ急に安心し気が緩んだ。

何故和子ちゃん達が向かったゴールの方向からでなく、出発した競技場のトラックの方角から聞こえてくるのだろうか？ と不思議に思ったが、そんなどちらでもいいことはすぐに消えた。多分沖先生だろう。ともかく誰か来てくれたことにホッとして、ワザと顔も上げずにそのまま疼くままにした。もちろんそれは本当にシンディーということもあるが、「もう磨^{まつ}は走れぬぞよ、アーヴィング……」アピールというなんとも小賢しい悪知恵の為である。

とうとう規則正しい足音は止んで、私の目の前に止まった。

ハアハアと乱れた呼吸音が聞こえる。

助かつた、と思って目を開けたその視界に入つて来たのは、沖先生が着ていたジャージではなかつた。自分と同じ学年色のジャージ。深い紺に白のラインが入つてゐる見慣れたジャージ。

一瞬、まだ私の後方に1年女子が走つていたのかと思つたが、履いている靴はどう見ても女子のサイズよりも大きい。

ビックリして顔を上げると、上から声を掛けられたのが同時だつた。

「大丈夫、荒井さん」

「?！」

「……でもなさそうだな、顔色悪い」

「……あ、え」

声を掛けてくれたのは、1年男子。

年末にお知り合いになつた、つぶらクン」と「星野君ほしの」だった。

(何故こんなところに星野君が? !)

訳がわからずパニックになつた。

しかし、すぐに今日のマラソンの予定が思い浮かんだ。1年女子の後、最後の滑走者が1年男子。時間差でスタートした筈なのに、ここに星野君がいるといつことね……。

(まさか、男子の先頭? !)

後ろに男子が続いている気配はない。ということは、ブツチギリでトップを独走していたということだ。

(す、すごい、星野君!じゃなくて、じりや、ヤバ

(イ)

呑気に感心している場合ではない。

星野君がここにいるということは、もうすぐ1年男子もやつてくれる、ということだ。こんなコノコノの姿を男子に見られようとは……さすがにそこまで考えていなかつたので、余計に血の気が引いた。それにここで星野君を足止めさせては、せっかくトップを走つてゐるのに申し訳ない。私はなんとかお腹の痛みを抑えて微笑んだ。

「だだだ大丈夫……ちょっと調子が悪くて。『ごめんね、せっかくトップ走つているんでしょう? もうすぐ他の子が来ちゃうから、構わづ先に行つて?』

「そんなのいい。それより先生呼んでこよぶか、せつき、沖がいたから」

星野君は少し眉根を寄せながら、覗き込んできた。

あまりにも顔が近付いたのでギョッとして、慌てて「いいよいよ」と首と手を振つてのけぞつた。女性特有の止む負えぬ事情で具合が

悪いところを、何が悲しくて男子生徒にわざわざ先生を呼んできてもらわねばならないのか。それに生理の独特の嫌な臭いがしてるんじゃないかと気が気がでないので近付いてほしくない。ここはなんとしても他の一年男子が追い付くまでに、先で待機している先生に事情を話して、棄権しなければ。星野君からジリジリ離れつつ立ち上がりとした。

その時である。手がニコッと伸び、おでこにフワリと柔らかい感触を感じた。

(……大きい手だな…………って、アホんだらっ！ 私ったら何を？！)

星野君の手の感触が心地よくて一瞬ウットリした私だが、すぐに自分がどういう状況にいるか一気に我に返り、ボンッと顔が熱くなつた。星野君はまだ私の額に手を当てて、難しい顔をしている。

「あ、あ、あ

「やっぱ熱い。やめておいたまうがいい。沖に言つてくる」

おでこが熱いのは、YOKOのせいですがなー

……とウツカリ言いにになつてしまいそうになるのをギリギリ寸止めした私、エライ。

「やつ……あ、あのつ！ 本当に大丈夫ですかりつーー！」

声を裏返しながら慌てふためいていると、競技場の方からザザザザという落ち葉を踏みつける音と、ゾワリとものすじに殺氣を感じた。

何故だか周囲の温度が冷ややかになつている。「あ、あれ？ 気温が下がった？」と腕を摩ると、星野君が「待つてろ」とザツと落

ち葉を蹴り今まで走つて来た方向に踵を返そつとした瞬間。

遠くから聞きなれた声が耳に入つて來た。……といふか、槍のよう

に耳に突きさつた。

「おー、一幸……」

緩やかなカーブを描いている道の向こうから、白とブルーのジャージを着た1年男子が、猛スピードで走つてきていた。

「あ、啓介

「×@%&¥つ！……」

（ゲゲゲゲ、ゲロンパつ！……いやつ、な、な、なんでこんな時につ？！）

今の今まですっかり忘れていた。あの男、スポーツだけは動物並みに優れているということを。マラソンとて例外ではなかつたらしい。

じつちに突進してくる類人猿……いや、腹をすかせたというより腹の虫があさまらない的な『グリズリー』の憤怒^{ふんぬ}の形相を見て、このまま倒れて死んだフリをキメたかった。

（それか今すぐにでも『マタギ』を呼んでくれ、頼む……）

尾島は私達の前で止まり、膝に手をつきハアハア息をついた。息を整えた後、キッと顔を上げる。なまじ可愛らしい整つた顔だけに、怒ると半端なく怖い。月一の出血という事態だけで、どんどん騒ぎが大きくなつていいくのは何故なのか。

（ヒィイ……な、なんで私が睨まれないとアカンですたい……）

もう方言もじつぢや混ぜな程、焦る荒井美千子。

もしやさつき体育館に箕輪を送り込んだのは、私と貴子だという
のがバレたのだろうか？

それとも「俺の親友の足を止めたのはテメエかっ？！」と熱い友
情を破裂しているのか？

まさか！ 先日の合唱コンクールの時の本番で、尾島の指揮も見
ず、音を外したのがバレたのか？！

（いやいや、そんなアホな！）

心当たりが一杯ありますぎて、どれに当てはまるか皆田田見当つかな
い。腹と腰の痛みではなく、別な意味で冷や汗をかいていると、尾
島は私と星野君に怒鳴り始めた。

「オ、オマエらあ……何やつてんだよ、こじでっ！」

「ちょうど良かつた。啓介、先に走つて先生に知らせてくれ。もし
かして誰か立つてるかもしれないから」

「は？ 知らせてくれ？ ……つて、なにをだよつ？！」

「荒井さん、熱がある。このまま放つておけない」

「つ！－！」

……ななな、なんで俺がつ！

一瞬尾島は厳つい表情を崩し、驚いた様子でチラつとこちらを見
たが、すぐに「なんで俺が、そんなことせにやならんの」みたいな
口調になつた。星野君はその澄んだ瞳でジッと尾島を見た後、「そ
う」とアッサリと言つた。

「荒井さん」で待つてて。俺、沖呼んでくるから

「はあつ？！ 沖つて……今から元来た道、戻るのかよつ？！」

「俺シニアだから順位なんて関係無いし」

「なんで、おまえがそんなことつ？！ 一緒に走つて先にいる先生に
言えばいいだろーが！－！」

「はあつ？！」

「どれくらい先に先生が立っているかわかんないだろ？ それより沖に言つた方が確実だし、そんなに遠くない」

「つー！ やつ、け、けどよ……どうして」

「啓介も早く行けよ、もうそろそろ他の連中もくるわ。『5位以内に入る』って、明日香や原口達にも宣言してただろ」

「へつ？！ そそそなんどうでも……つて、あつ、おい！ チョイ待てつて！…」

星野君は尾島の掛け声も聞かず、クルリと踵を返して競技場の方へダッシュした。どんどん遠ざかる星野君の背中。あつと言ひ間に姿が見えなくなつた。

* * *

尾島は星野君の背中に呼びかけても無駄だと悟つたのか、「なんだよ……」と舌打ちをして、こちらに向き直つた。

「……」
「……」

……稀に見る氣まずい状況である。

しかも尾島の顔は眉間に思いつきり皺が寄つており、非常に怖い。まるで蛇に睨まれた力エルのように、一步も動けなかつた。先程の体育館での貴子と桂龍太郎かつらりゅうたろうの時よりも酷い。こんなのは年末の小リスちゃんの爆弾発言以来だ。

(な、なんで、こんなことに……)

星野君が沖先生に呼びに行つてくれたのは確かに助かつたが、来るまではここから勝手に動けないのが辛い。

さて、この絶対絶命の大ピンチからいかにして脱出するか……と考えた結果、とりあえず尾島には先に行つてもうのが一番だとい

う答えが出た。この際気を使つてもらうなどと、う贅沢は言つてられない。それでなくとも今は具合が悪いのだから。不本意だが、これは原口美恵の『猫なで声』を見習つて、「このまま気にしないで走つて」と柔らかい口調で言えばいい。なによりも事を穩便に済ますのが得策だ。

そうだ。それがいいに決まつてこる。

このまま走れば尾島は確実にトップだらう。
原口美恵達に宣言した通り、尾島は確実に『5位以内に入る』ことができる。

(……けど、ヤだ)

私はなんだか無性に腹立たしく、そして……ひどく悲しかった。
こんなところでへバッている自分が惨めだった。

尾島に好かれてないのは十分わかつてゐる。それはさつき尾島が言つた台詞でも明らかだ。それなのに私はこの男に何を期待していのだろうか。こんな時ぐらには、星野君の半分とまでは言わないから、ちょっとの優しさを見せてほしかつたなどと思つてしまふなんて。

そんなこと、無駄のことなのに。

(なんかもう放つて置いてほしい。てか、なんでこんなに辛いのよ
……)

私は今にも涙がこぼれそうになる顔を見られたくなくて、「早くこの場からいなくなつて」と俯きながら必死で尾島にテレパシーを送つたが、尾島は黙つたまま動かなかつた。

やつとの思いで息を呑み、仕方なく口を開く。

「……あ、あの」

「ああつ？」

「！」

「あ、その、めめめ迷惑掛け……」「めんなさい。……

先行つて。サツカー部つて上位に入らないとマズイ」

「イイんだよつ、そんなことは……それよりも」

「……なんでアイツが……額に……手え……

尾島は私の素つ氣ない言い方にカチンときたのか、最初は大声で怒鳴つたが、そのうち声を小さくして、「ゴーヨゴーヨ訳のわからないう」と言い出した。その声はどぎれどぎれで全然聞き取れない。（……ヤバイ、こりゃ本格的に具合悪くなつてきた）

もう尾島の小言を聞く体力もなくなり、悪いと思つたが座つている柵から身体をずらしズルズルと地面に座り込んだ。

「あ！ お、おい、大丈夫かよ……」

（……大丈夫の訳、ない）

既に文句を言える気力も残つてない。さすがに尾島も私が本気で気分が悪いと悟つたのか、心配そうな声を出した。出来ればもっと早くそのしおらしい態度を見せて欲しかつたと思い、この際もつと大袈裟にしてやるかと意地悪な心がムクリと起き上がつた。いつもしてやられているのだから、これくらいは許されるだらう。このまま心配させるもよし、無視して行つちゃうもよし、と半ば投げやりな態度で、私はワザと辛そうな表情を作り（実際に辛いのだが）、

田を瞑つて足を抱え膝の上におでこを乗せた。

その時。

頭上から聞こえたのは、ジャットジッパーを下す音。

ふわっと頭の上に何かがかぶさつた。身体が一瞬温かくなり、視界が暗くなる。

僅かに鼻をくすぐるのは、洗濯洗剤の香りと自分以外の人の匂い。

(…………え？…………えええっつ？！)

ガバッと頭を上げると、頭に覆われた布が背中の方に落ちて肩に引っかかった。肩に視線をやると、そこには白とブルーのサッカーボードのジャージ。

啞然とした表情で尾島を見上げようとしたときには、尾島は学年色のジャージ姿で背を向けて走り出していた。

「あああああのっ……！」

「じゃージ、ぢづして？！」と言おうとした時、尾島がクルリと後ろを振り返った。

「しょ、しょうがねえから、オレ様の俊足で先に立っている先生に知らせてやる！ ありがたいと思えよっ？！ とりあえず寒いから、

そのジャージ着てろ！ 遠慮すんな、あくまで親切心であつて、間違つても礼など期待してるわけじゃねえからな！！ ちなみに俺は菓子パンと『キャベツ太郎』が大好物だ、覚えとけッ！！！」

「……」

尾島はビシッとこちらに指をさしながら、実に恩着せがましい言葉と図々しい要求を催促し、終いにはどうでもいい情報を置き土産した後、再びゴールに向かつてダッシュした。

私はものすごい勢いで走つて行く尾島の後ろ姿を、見えなくなるまで見送った。

後ろから見た彼の耳と首が真っ赤だったのは、普段全然使つていない親切心を出したせいなのか、それともただ単に寒い中を走つていたせいなのか。

(…………とりあえず、一応氣を使つてくれたつてことだよね？)

尾島の取つた行動をあらためて思い返すと、さつきまで私を支配していた、惨めさや悲しさなどはどこかへ飛んで行つてしまつた。それどころか尾島に対して、このままトップまで頑張れ！ などと思つてしまつた。たとえそれが、原口や小里斯ちゃんを喜ばせる結果になつたとしても、だ。

野外の気温は5度以下、しかも2月の曇り空。……本当は寒い筈なのに。

尾島のジャージ一枚羽織つただけなのに。

私の身体は信じられないくらい温かくなつた。それに自分以外の人肌の香り。不思議と尾島の匂いは不快じゃなかつた、むしろ……ギュッとジャージを抱き寄せたい気分になつてしまつた。

(男の子つて、こんな匂いなんだなあ)

思わずクンクンとジャージの匂いを嗅いでしまつたが、ハツ！ と我に返つた。

(へ、変態じみたことをしてもうた！)

急激にカーッと身体中が熱くなる。

(わ、私ったら、なにをバカなことを… 今のナシナシ!…)

誰も見ていないというのに、顔の前で手を思いっきり手を振るその姿は、傍から見ればちょっとイタイと思つ。少し深呼吸をして、なんとか落ち着かせようとしたが、やることなすことドンドン深みに嵌る勢いに、恥ずかしさで身体は熱くなるばかり。

そのうち意識が朦朧としてきた。

身体は着実に具合が悪くなつてこむるというのに、わずかに残る意識に不快感は無く、雲の上に浮かんでいるよつた夢見心地だった。

ただのお礼

「えええええ！ ほんとうううにいい？！」

数か月ぶりの強烈な……いや、感動の再会を果たした私達。女子中学生からのチョコを手にしながら、目の前で星一徹のよつな男泣き……いやいや、感極まって号泣してるのは、『まるやき』のオーナーこと蝶子さんだつた。おかげですっかりアイマークが落ちて、マズイ」となつてゐる。

「「「「年末は本当にありがとうございました」」「」「」「まあまあそなんああ、ほんとにイマドキの若い子はああ……オネエさん、涙テチャッタアアア！」」

5人そろつて頭を下げる、蝶子さんはレースのハンカチをおもむろに取り出し、「ブツ・ビィーッシッ！」と豪快に鼻をかいだのであつた。

今日は試験前で部活のない土曜日、待ちに待つたバレンタインデーである。

和子ちゃん達と計画した通り、5人全員で蝶子さんにお礼を兼ねてチョコ手渡しに来たのだ。ランチが終わつた頃の時間に滑り込んだ『まるやき』は、まだランチの名残が漂つており、お好み焼きの匂いが充満していた。

どうやら今日はエロ店員はない様子。それもそうだろう、今日はなんてつたつて、恋人達の日。こんな日にあの男が一人寂しくバイトに勤しんでいるとは考えにくい。

(一段かけて、修羅場になつてたりして……フツ)

心の中で2人の女から袋叩きにされている桂寅之助の姿を浮かべ、

一やつと笑ってしまった。まあ、そうなつていたとしても、それもいい薬だうと一人納得する。世界中の女を焼き尽くすより、己の節操なしの態度を焼き尽くしてしまえばいいと思う、荒井美千子。

それでも、一応5人全員、桂寅之助用に仕方なくチヨコは持つてきていた。億が一にもお店にいた場合、ベティちゃんだけにチヨコがあつて、エロ店員には無などと言えば暴れるかも……と物騒なことを貴子たかこが言つたからだ。あんなデカイ団体の男に暴れられでもしたら、か弱い女子中学生5人だけではひとたまりもない。あれだけ怖い噂が立つていてる男だが、構つてももらえない（特に女性から）捻くれる性格らしいのだ。しかも恨みがましく何年も覚えているというから大人げない。まるで子供である。一生会うつもりもなかつたが、さすがに今後外で出会つた時に気マズイ思いするのは嫌なので、後腐れないように一応作つて持つて来たのであった。

明らかにベティちゃんの物とは差があり、「どう見ても、THE 義理」とわかるものだが。

「……あの、みんな」「めんね？ 私、もう行くね？」

そんな悪魔的な思考をパチンと弾くよつに、貴子の可愛い声が遠慮がちに響いた。

あいかわらずファッショソ雑誌から飛び出たような素敵な格好で、時計を見ながらソワソワしている。その理由をわかっている他の4人は、途端にニンマリとした顔をした。

「あらあ、どうしたのぉおお、タカコちゃんあああん？」
「蝶子さん、恋ですよ」
「デートらしいですよ」

和子ちゃんと幸子女史の近所の奥さん口調にベティちゃんは目を剥き、「まつ！ いつの間にいいい？！」と奇声を発した。

「なんてつたつて、日下部先輩くわせかべだもんね」

「大人で、落ち着いていて、頭もいい！ 運動神経も文句なし……」

「貴子ちゃんハジコちゃんと日下部先輩なら、お似合いだよね？」

チイちゃんの意見に他の女子中学生3人はウンウンと頷くと、ベティちゃんは貴子の顔を一瞬ジッとみた後、なんとも寂しそうな複雑な顔をして苦笑した。

「あああ。タカコちゃんは、素敵な人見つけちゃったのねえええ……。あーあ、みいいんんな、どんどん大人になっちゃうからああ、寂しくなっちゃうわあああ」

ベティちゃんが両頬に手を当てながら盛大な溜息をつくと貴子は徐々に真っ赤になり、「も、もう！ 私、行くからー！」とそそくさと踵を返し、『まるやき』の扉を開けて出て行ってしまった。その後ろ姿を追いつぶつに続く私達。『まるやき』の入口から顔を出して、「頑張れ！」「よ、色女！」などの声援を貴子の背中に送った。これから貴子は近くの区民センターに隣接している図書館で、日下部先輩と勉強会という名の「初デート」なのだ。彼女のカバンの中には勉強道具の他に、手作りのチョコが忍ばせてある。それでも貴子はギリギリまであげようかどうか迷っていた。それこそ、『まるやき』に来る道のりの途中も。

『な、なんか、告白受けの気マンマン……なんて思われちゃったりしないかなあ』

……なんて年頃の可愛い恥じらいを気にしながら。

私達は「絶対そんなことありまへん！」と強く否定した。おそらく日下部先輩も今日ハレンタインという日を意識しているだろ？ 和子ちゃんなど

ど、こんな日に持つて行かないなんて、失礼すぎるー。と逆に説教する始末だ。

『ほ、ほら、勉強教えてくれるお礼……って言つてもいいんじゃない、かな？ 絶対先輩喜ぶよ』

『……そう、だよね？』

私の言葉に貴子は安心したように頷き、いつものクールな笑みでなく、女らしく柔らかい笑みでフワッと笑つたのだ。その女神のような美しい表情を見て、私はあらためて「恋のパワーって本当にスゴイんだな」と思つてしまつた。今の桂龍太郎かつらりゅうたろうでは、貴子にこんな笑顔をさせることはできないだろうと思つたから。

図書館に向かつて走つて行く貴子は、過去の恋と決別し新たな未来に向かつて飛び立つ、愛の翼を持つた天使そのものだつた。

* * *

「貴子ちゃん、もうチョコ渡したかな……」

『まるやさ』の帰り道、区民センターの横を通り過ぎながらボソリと呟いたチイちゃんの声に、私達4人は割と最近に建設されたアイボリー色のタイルで覆われている図書館の方を見上げた。

貴子の背中を見送つた後、私達はベティちゃんにエロ店員宛のチヨンを渡してくれるよう頼んだ。時間があれば本当はお好み焼きでも食べて行きたいところだったが、すでに「準備中」の札もかかっているし、来週は試験。少しでも勉強時間が惜しい為、「食べていきなさいよおおお」と言いながら引きとめるベティちゃんの気持ちだけありがたく頂き、早々お暇することにしたのだ。

「大丈夫だよ、貴子なら上手くやるつて」

「やうだよね。あ～あ、私も早くチョコを上げる本命が欲しいなあ！」

幸子女史の実感のこもった言葉に、私達は「ホント！」と一緒に頷いた。

貴子は今どんな気持ちで口下部先輩の隣に座つているのだろう。好きな人はいれども、チョコを渡す勇気がない私は、素直に貴子が羨ましかつた。チョコを上げたい相手が喜んで受け取つてくれるなんて、とっても素敵なことだ。

「……三つねやんも田宮たみやにあげればよかつたのに。あんなチビ猿なんかにあげないでさあ」

私は幸子女史のからかう様な口調にドキッとして、カアツと真つ赤になりながら俯いた。

「……あ、あれはチョコじゃないよ。……ただのお礼だし……」

私は言い訳がましい言葉を言いながら、先程まで中身が入つていた、畳んである紙袋をギュッと握つた。

* * * * *

マラソン大会だった先週。

私は尾島のジャージを羽織りながら地面の上でボーッと暫く座っていた。さすがにジャージに袖は通すことはできなかつた。そこまでずうずうしのはいかがなものかと思つたし、もし……ジャージがキツかつたらちょっとショックだなという考えが過つたからだ。そのうち数名の一年男子の滑走者がやって來た。彼らはマラソンコースの端で蹲る私を見てギョッとした様子だつたが、すぐに走り

出して行ってしまった。その後にすぐ、星野君と沖先生がやつてきた。それ同時に、ゴールのほうからも先生が来てくれて私を解放してくれた。

尾島は宣言した通り、本当に知らせてくれたのだ。

沖先生が私の額に手を当てるとき、相当熱かつたらしく、慌てた様子で車を回してくれた。先生がそのまま病院に直行してくれた時は、高い熱と生理痛のダブルパンチのおかげで、吐き気に寒気と大変だつた。「もしやインフルエンザ?」と心配になつたが、ただの風邪だと診断されたときにはホッと胸をなでおろした。試験前の大変な時期なのにも関わらず、祝日まで学校を休む羽目にはなつたが。

後から和子ちゃん達にマラソンの事を聞くと、バレー部1年女子で唯一貴子だけ10位以内の表彰組に入つたとのことだつた。しかも田下部先輩と同じ8位という結果だつたのだ! 原口美恵と小関明日香を抜いたと聞いて、私は自分のことのようにバンザイ三唱してしまつた。

一方尾島は最後までトップを独走し、そのまま1位でゴールした。沖先生を呼んでくれた星野君は遅れをとつたにも関わらず、後半ぐんぐんと巻き返し、10位に食い込んだらしい。それを聞いた時、私は申し訳なさと後悔で一杯だつた。沖を呼びに戻らなければ、そのまま1位を狙えた筈だつたのだ。

沖先生に連れて行かれる時、朦朧とした意識の中で、星野君に「ごめんなさい」「ありがとう」を繰り返しはしたけども、あの程度で1位の可能性を台無しにしたことが帳消しになるとは思えなかつた。

それにおれ……だけでも

「もひ～ミリちゃん、氣の使いすぎだよ！ 星野君は大賛成だけどさ、野生猿には必要ないでしょ？！ 大体アイツ図々しいんだよねー！」

和子ちゃんは一気に不機嫌そうな空気を身にまとい、吐き捨てるよつに文句を言った。和子ちゃんが図々しいと言ったのは、祝日明けに登校してから昨日まで、尾島が私に余計な言葉をしつこく浴びせるのを見ていたからだ。

『あ～腹減った！ 僕、菓子パン超好物なんだよなあ』

『すげえ寒かつたのに、チュウにジャージを貸しちまつたばかりに、俺が風邪をひきそになつて……』

『キヤベツ太郎って、どちらへんがキヤベツなのか知つてるか？あの青いやつ、どうみたつてアオノリだろ？』

『本当、稀に見るダッシュで先生呼びに行つた俺つて健氣だよなあ

』

……最初にお礼を言わなければならぬ星野君より先に、登校一番で尾島に頭を下げたというのに。ハッキリ言つて、「恩着せがましい」の一言以外何が当てはまるというのか。

三学期になつても私の後ろの席に落ち着き、年間通して後ろから小言を言われる羽目になつてしまつた私は、とうとう昨日の帰りに後ろを振り向き、「大変申し訳ございませんでした。お礼はキッチりさせていただきます」と宣言してつるさい小言を黙らせた。

『は？ どうしてもお礼したいって？！ そつかあ～そづ言ひながら、仕方ねえよなあー！』

『……』

尾島はワザと田を大きくしてすうじばけてはいたが、その小さいお顔には、

「オレ様に礼をするのは当然だろ！ 忘れやがつたら、末代まで呪つてやるからな。覚悟しとけ！ フハハハハ！！」

……などとこう文字が首筋にまで書かれていた。

非常に不本意だったが、相手が悪魔なので早々にあきらめた。それにお礼をしたかったのは事実だつたし。でもそれは尾島がつむさかつたせい、ではない。他に理由があつたからだ。

それは心の底から本当に申し訳ないと思つた星野君に、お礼をするキッカケができたということだつた。

本来ならばイの一一番に1組まで出向いて、星野君に直接頭を下げてお礼をするべきであるが、マラソン大会から口にちが経ち過ぎている上に、このこのお礼などを言いに行って星野君があらぬ冷やかしの対象になつてはならぬと判断したからだ。間違つても私なんかと噂なんかになつてしまえば、恩を仇で返すことになる。だから尾島がお礼を強請つて来たのは、それに便乗して星野君にもお礼できる絶好のチャンスだつたのだ。

私はいまだブツブツ文句を言つてゐる和子ちゃんを宥めるように、元気もつともうじい言い訳を口にした。

「で、でも、後々怖いし……。星野君にあげて尾島にあげないと、なにされるか……」

「ま、そりや一理あるわ。あいつネチネチ恨みがましそうだもんねえ。なんだかエロ店員とそつくりじゃん？ 弟は桂君じゃなくて、

実はチビ猿のほうだつたりして！

幸子女史が大胆発言すると、それ大いにありえるよねと和子ちゃんは笑いだし、チイちゃんは苦笑いをした。大仕事を終えて、嬉しいような緊張がほぐれたようなホッとした気持ちだった私も一緒になって笑い、手元の紙袋をチラリと見た後、もつとも緊張した『まるやき』の帰り際を思い出した。

* * *

私は、もうひとつ重要な頼みごとをベティちゃんに頼む為に、一步前進して紙袋からラップングしたものを取りだした。中身はそれぞれ手作りの菓子パンと駄菓子、である。

パンは母親にも手伝つてもらい、手間のかかるデニッシュを焼いた。カスタードクリームも手作りし、その上にフルーツを載せてマーマレードジャムも丁寧に塗つた。自分で言つのもなんだが、快心の一作だ。

そして、尾島の方にはしつこく押す「キャベツ太郎」を一緒に入れた。星野君には貴子から好みのお菓子をリサーチしておいた。

『た、貴子。星野君で、どんなのが好きなのかな？』

『え？ 好みのタイプ？ やだあ、もしかしてつ？！』

『ち、違うよ！ 好みのタイプじゃなくて、好みのお菓子なんだけど……』

『なーんだ。でも星野はオススメだよ？ 野球バカで無愛想だけどね。あ、あの、友達も口クな奴がないな』

『あ、あの、そりゃなくてですね……』

『フフ、わかつてるつて！ どうせマラソン大会のお礼でしょ？ しかし、見かけによらず星野もやるわね。やっぱ、苦労してるか

らかなあ……』

『苦勞?』

『あ、いいの、いいの!』

『?』

『え、えーと。そう! 星野つて5人兄弟の長男なんだよね』

『ええつ? !』

『ビックリでしょ? そんなわけだから星野、面倒見がいいんだよね』

『……へえ、そ、そうなんだ』

『そうよ! どつかの口クでもない他の小隊員とは大違ひなんだよねつ! -!』

『……』

『あら、やだ、私つたら。ああ、星野の好みのお菓子だよね。たしか……酢昆布じゃなかつたかな?』

『……なるほど(シブイな)』

『そうなの、見た目も中身もやることもシブイんだよね。でも野球してると結構力ツコイイよ? オタソコナス諏訪いわく、職人みたいな構えでバッターボックスに入るらしいし。もしその気になつたら、橋渡にしてあげるから? 試合見に行きたいならいつでも言ってね?』

『……ハハ』

職人みたいな構えつてどんなだろうと思つたが、とりあえず試合観戦は辞退しておいた。何気に私の思考を读懂だ貴子もニヤニヤした顔しているところを見ると、からかい半分なのだろう。しかし、星野君がそんな大家族なんて、驚きだつた。きっと優しくて面倒見がいいお兄さんに違ひない。とりあづ星野君には「都こんぶ」を一緒に入れておいた。迷惑だと思つたが、せつかくなので、余つた生地で小さいクロワッサンもどきを焼けるだけ焼いて一緒に付けた。

今日のメインイベントは、あくまでもベティちゃん（プラス桂寅之助）にチョコを渡すことだった。しかし……ベティちゃんに申し訳ないが、どちらかといつと、このうちのほうが私にとってメインイベントとなってしまった。

『あ、あのぉ……』

『「うん？ なあにいい？」』

『星野君と尾島……君って、今田お店に来ますか？』

『カズくうんとケイくうん？ 来るわよおおおお、呼んでもおなああいのにい、週末ううほつとんどお来るんだからあ！……つてえ、あれえええ？ やつだあああ、もしかしてえええ？…』

ベティちゃんは真っ赤な私の顔と手に持つているラッピングしている一つのプレゼントを交互に見た後、ニンマリ笑った。思いつきリアイメイクが落ちている妖艶の微笑みといつものは、バタリアン並みに恐ろしい。

『やつ！ ち、違います！ チョコじゃなくて……そ、その、お、お礼つていうか……』

『おれいいい？』

『は、はい！ マラソン大会のお礼と書つて渡していただけますかおねがいします…』

息継ぎもせず一気に書つて頭を下げ、はてなマークを頭につけているベティちゃんに、お礼にいたるまでの過程を簡単に説明した。尾島と星野君には大変お世話になつたので、そのお礼もかねて……とこう言葉で締めると、ベティちゃんは「あらあああ、そんなのいいのにいい！」と息子の活躍を喜びつつも「そうだろ、そうだろ」と親バカを隠せない父……母親のような口調をした。

『わかつたわあああ、じゃあ、渡しておくからあああ

『お、お願ひします！』

『でもおお、直接渡した方がああいいんじゃなあい？　あの子たちもおお、よろこぶわよおお？』

『い、いえつ！！　めめめ滅相もない！！』

私は慌てて首と手を振って、風が起きるほど否定した。

実を言えば、学校に登校するまで私は、「尾島ぐらーには、渡せるかも」なんて呑気に構えていた。

……が、その余裕は見事に吹き飛んでしまう。何故なら、今日学校で尾島はバレンタインチョコの嵐を受けていて、渡す隙すら無かつたからだ。

クラスメートの女子に数日前から「俺はチョコが大好きだ！」14日受けてたつ！！宣伝してまわったいた尾島。それを聞いて「クラス全員の女子が尾島に？　まさかねえ？」と思っていた私だが、予想は大外れだった。大穴よろしく、尾島は私たちヌリカベトリオ以外の女子全員からチョコを受け取っていたのだ。それに加え、他のクラスの女子から何度も呼び出されていたのは、正直驚きだった。確かに尾島は顔がいいし運動神経も良かつた。加えて文化祭では主役、マラソンをやらせりや1位、オマケに秋のバスケの試合のせいで、バスケ部の2年からもチョコを渡される始末。

よくよく考えてみりや、私や和子ちゃん以外の女子には至つて態度が普通だ。それどころか巧みな話術で女の子を軽くからかい、逆に彼女たちの乙女心をくすぐるほどだ。楽しい話題で周囲を和ませ、言葉づかいは乱暴だが基本的には優しい。これではいくら頭と口と態度が悪かろうが、モテる筈である。

……わかつていたつもりだった。けど、本当に「つもり」だった、

らしい。

私は苦手意識がある上に、尾島から毎回小言を言われているせいで軽く流すようにしていた為、あまりよく見えていなかつたのかもしない。

その現実をあらためて突き付けられた私は、目の前が真っ暗になるほど衝撃を受けた。尾島は私のことが相当気に入らないんだなあと寒感してしまつた。あそこまで邪険に扱われ続けたことに、それを今まで耐えていた自分に、落ち込むどころか滑稽すぎで笑いたくなつてしまつた。

客観的に自分の位置を確認してしまつた私は、嫌な緊張と震えが湧きあがつてしまつたのだ。

それだけではない。尾島がチョコを渡される姿を見るたびに、段々とお礼をする気が萎んでしまつた。まだ高をくくつていた登校したばかりの朝に、さつさと渡せばよかつたと後悔した。朝、尾島が得意の悪魔顔でニヤリと笑いながら私に声を掛けようとしたあの時に。その時ちよづじ尾島は他のクラスの女子からの呼び出しだされていたけど、無理にでも押しつければことは済んだのだ。

それなのに。なんで私は、フイフと明後日の方向を向いて無視してしまい、完全にタイミングを逃してしまつたのだろう。

おかげで一日中後ろから「お礼はどうしたよ、あの言葉は偽りか?！」というような無言のプレッシャーを受け続けた。某アニメのニコータイプも真っ青なほどのプレッシャーに、後ろを向く勇気が出でこなかつた。別になんてことはない、「ハイ、どうぞ」と軽く渡せばそれで済む筈なのに、どうしてもできなかつたのだ。

(……べべべ別に今日渡すと言つてないし!)

私は苦しい言い訳で自分を納得させつつ、帰りに尾島が原口美恵から呼び出しを受けている間に、和子ちゃん達とそそくさと教室を

出てきてしまったのだ。

それは断じて逃げたという訳ではない。貴子の「トーーートの時間に間に合つよつて」ベティちゃんのところに行つと約束していたという理由があつたからだ。それに、学校で一人に渡せば、あらぬ誤解を招きかねない。とくに尾島。これだけモテる男とこれ以上面倒なことに巻き込まれるのは御免だし、とてもじやないがそんなこと私は超無理と思い込んだ。

……思い込ませた。

学校の校門を出る時、お礼すら渡すことのできない自分が、もどかしくて情けなかつた。

おやぢりへいりこりうといこりうが尾島の瘤に障るのだろう。
けぢ尾島にとつてあのお礼の請求は、からかいのネタにすぎないのだ。

星野君の分をベティちゃんから渡してもらつ予定だつたので、ついでに一緒に渡してもらえばそれでいいと、私は前向きに気軽に考えることとしたのだった。

* * * * *

後ろを振り返り、遠くなつた『まるやき』の暖簾を見た。来月一杯でこんな気の張る生活ともお別れなんだな、と考えながら。

2年に進級し、尾島とクラスが離れてしまえば、私には波風が立たない平凡で平和な日々が訪れるだらう。尾島も私のことなど気にもかけないだらうし、「あ、そういうふうにこんな奴いたっけか」程度で忘れてしまうのだらう。余計な騒動に巻き込まれず、部活や仲の良い友人に囲まれ、ちょっとした恋に焦がれる……そんな普通の中学生生活を送りたかった私には、それは嬉しいことの筈だった。

それがどうしたことか。

心の奥底ですごく寂しいと思っている自分が確かにいた。もしかしたら尾島と一生接点が無くなるかもしれない可能性に、まるで冬の海に一人で立っているような悲しさと切なさが押し寄せた。胸が締め付けられるこの感情が、今日一日尾島に対して感じた自分の気持ちが、一体どういうものなのか……。私はこの時気付くことができずにいたのであった。

登場人物 中学1年編 ネタバレあります（前書き）

！－注意－！

中1編を全部読んで無い方は、ネタバレ全開です。

登場人物 中学1年編 ネタバレあります

主な登場人物

荒井美千子（あだ名：チユウ、ミツちゃん）

本編の主人公。山野小出身・バレー部所属。8組。

身体が大きくポツチャリなのと豊満なバスト（現在Dカップ、さらに成長中）が悩みの普通な女の子。何故か無駄な苦労が多い。

中学デビューを狙っていたが、実際あまり上手くいっていない。尾島から何かとチョッカイ出される（ほぼイジメ）日々。

映画好きで金髪碧眼に弱い面食いだが、現在「田宮俊平」に熱烈片思い中！……の筈。

「長いものには巻かれる、がモットーです。ともかく平穏な日々が欲しい……」「

尾島啓介（あだ名：チビ猿、野生猿、類人猿、他色々）

美千子のクラスメート。大野小出身・サッカー部所属。8組。

背が低く色白の可愛らしい男の子だが、性格は悪魔。ややたれ目のハツキリ一重に右目尻に黒子があり、頭は五分刈り。

クラス…いや、学年一の問題児。あだ名の命名を生きがいとし、元大野小バスケ部で運動神経はいいが、その他はアホ。甘いものが好き、特に菓子パンには目が無い様子。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』の赤担当・通称オジマヌケ。

「別に、バスケ部入らなかつたことは後悔してねえ。や、だつて、これからの時代、サッカーだろ？ 目指せマラドーナだろ！？」

宇井和子（あだ名：ドテチン、和子ちゃん）

美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。8組。

何事にも大柄な性格で、クラスを引っ張っていく姉御肌だが、それは身なりにかなり気を使う年頃な女の子。

少年隊のヒガシの大ファンであることが判明。尾島とは犬猿の仲。

「ともかく、あと少しの我慢！　2年になれば、あの尾島^{ばが}とはオサラバだよ！」

中山幸子（あだ名・ヒラメ、幸子女史）

美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。8組。

痩せてスラッと背の高い女の子。美千子が女史と呼ぶだけあって、頭がいいらしい。

宇井和子とは御近所さんで、小さい頃からの幼馴染。

「和子つてば、男子の基準レベル高すぎるのよねえ」

笹谷貴子

大野小出身・バレー部所属。5組。

髪の毛と目が茶色い、落ち着いた大人っぽいオシャレな女生徒。

原口美恵と仲が良かつたが、ケンカして疎遠になり、その後美千子と友情を育むことになる。

桂龍太郎が好きだが……。

「男で二股する奴は最低よ！　しかも家に連れ込むなんて……言語道断！！」

茅野陽菜美（あだ名・チイちゃん）

山野小出身・バレー部所属。7組。

おとなしい女生徒で身長148センチ。少年隊大好き。

「最近お菓子作りにハマつてます。もう少し背が欲しいかなあ」

田宮俊平
たみやしゅんぺい

美千子の思い人。下山野出身・バスケ部所属。9組。
程よく日に焼けて、目尻に皺を寄せて笑う様が爽やかな男の子。元
下山野小バスケ部。

学年でもモテ男に入る部類。

「尾島、もつたいねえよ。バスケ部に入ればいいのに」

桂龍太郎
かつらりゆうたろう

大野小出身・一応柔道部所属だが幽霊部員。6組。

山野中の「伝説の裏番」と恐れられた『山野中の鬼夜叉』こと「桂寅之助」の弟。

現在は兄の後を継いで「裏番」を襲名中。こちらは違う意味で学年（学校）一の問題児。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の黒担当・通称バカツラ。

「ギャンギャンうるさい女も地味な女も勘弁」

諏訪英行
すわひでゆき

大野小出身・野球部所属。8組。

尾島の悪友、もちろんアホ。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の黄担当・通称オタンコナスワ。

「巨乳が好み、けど『力かければいいってもんじゃない。全般的なバランスが大事なんだよ』

後藤洋
ごとうひろし

大野小出身・バスケ部所属。2組。

声も身体（180センチ）もデカイ尾島の悪友。元大野小バスケ部。何も考えない能天気な性格だが、根がまつすぐで友情に厚い。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の桃担当・通称ゴトング。

「バスケ、バスケ、バスケ！バスケ最高！！」

星野一幸
ほしののかずゆき

大野小出身・外部でミニアリーグに所属。1組。

5人の中では一番落ち着いて（？）おり、必要以外しゃべらず、無口の野球バカ。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の青担当・通称アホシノ

「……腹減った」

小関明日香
こせきあすか

田宮俊平と同じクラス。大野小出身・バスケ部所属。9組。

明るくてポッテリとした唇の小さくてリスみたいな可愛らしいショートカットの女の子。元大野小バスケ部。

尾島、桂、星野、笹谷貴子とは、下の名で呼び合う古い仲で幼馴染でもある。尾島とは従姉弟で家も隣同士。

問題発言は天然なのか、計算なのか？

「啓介をからかうと、本当に面白いのよね～」

成田耀子
なりたようこ

美千子の天敵。山野小出身・バスケ部所属。2組。

モテ男には敏感で、自分を良く見せる才能はピカ一。しかし嫌いな奴には容赦なくプレッシャーを掛ける女の子。元山野小バスケ部。小学校の時は「佐藤伸」命だったが、今は「田宮俊平」に乗り換え

か。

「佐藤君もいいけども、田宮君も素敵！ 本当迷っちゃう」

原口美恵
はらぐちみえ

美千子の天敵其の2。大野小出身・バレー部所属の1年部長。1組。尾島大好き女の子。何かと美千子を小馬鹿にし、尾島と親しい？美千子が気に入らない様子。

元大野小バスケ部。

「尾島、サッカー部の部長、やるかなあ……」

佐藤伸（あだ名：カツコ）
さとう しん

美千子や成田耀子の元クラスメート。山野小出身・サッカー部所属。1組。

「顔良し・性格良し・スポーツ良し」と3拍子揃つた、元山野小サッカー部所属で学年一のモテ男だった、中学でも記録更新中。切れ長の田のキリッとした精悍な顔立ちで、いわゆるお醤油顔。

「『カツ』って言つの、やめろよな」

江崎君（あだ名：グリコ）
えざき きみ

山野小出身・バトミントン部。8組。

温和で大人しい性格が災いしてか、尾島にコキ使われている。

文化祭によりポイントUP。

「誤解しないでくれ、別にワザとズラ取ったわけじゃないんだ！ た、たまたま偶然に！」

島崎さん（あだ名：アダモちゃん）
しまざき さん

下山野小出身・体操部所属。8組。

学年一の美少女、天然で空気を読まない。

「もう、尾島君つたらあ、本当に調子いいんだからあ～」

野口君（あだ名：ノグティー）

大野小出身・バレー部所属。8組。

花粉症＆お腹と腸が弱く、瘦せ形でひょろ長い身長の男の子。常にティッシュを携帯。

「最近妙に鼻水が出るんだよな、なんかの病気かな？」

片岡君（あだ名：つるちゃん）

山野小出身・理化部所属。8組。

真面目で成績優秀。眉毛が太くて黒い大縁のメガネをした男の子。尾島のおふざけにはとことん無視。

「尾島の言つことを気にしているわけではないけど、断じて僕は脂ぎってるワケじゃない！」

奥住さん

大野小出身・バレー部所属の1年副部長。7組。

奥住トリオのリーダー。

ベリー・ショートで活発な女生徒、噂好きのミーハーな性格。尾島と美千子の間を「怪しい」と睨んでる。「原口美恵」とは肌が合わない。

「絶対あの二人怪しいわよ、私のカンは外れたことないのよー。」

光岡さん

みつおか
さん

大野小出身・バー部所属 5組。

奥住トリオの一員。

「とりあえず原口が部長だと何かとやりにくいやうのよね……」

加瀬さん

大野小出身・バー部所属 10組

奥住トリオの一員。細面の神経質な性格。

「尾島つてそんなにいいかな？ 騒がしいし、イマイチ理解できないんだけど」

* * * * *

その他の登場人物

日下部 孝司

山野小出身・サッカー部所属、現副部長。

生徒会役員も務めている優等生。現在2年生。

笹谷貴子のことが好き。

「君が、好きだ」

桂寅之助

大野小出身。

桂龍太郎の三つ年上の兄。

口が悪く、どうしようもないエロだが、かつては『山野中の鬼夜叉』『伝説の裏番』など様々な肩書を持ち、かつては山野中の先生と生徒達を震撼させた不良。

現在は赤髪ピアス姿で「美園工業高校」へ通学中、通称『美園の赤

鬼』。

お好み焼き屋「まるやき」でバイトしている。

「お好み焼きより、この世の全ての女の心と身体を焼きつくすのが専門なんだよ、俺様は」

蝶子さん
ちょうこ

桂兄弟の伯母であり（？）、お好み焼き屋「まるやき」の女性オーナー（？）

「デリカシーのない男って、サイツテヒヒ。好みは高倉健みたいな渋い男よおおお」

辺見先輩
へんみせんぱい

大野小出身・バスケ部所属、現部長。

尾島や後藤が所属していた大野小バスケ部の先輩。現在2年生。尾島を熱心にバスケ部へ勧誘していた。

「女のせいでもバスケやめるなんて、本当バカじやね？」

晴美先輩
はるみせんぱい

下山野小出身・手芸部所属だが幽霊部員。

山野中一のモテ女、現在3年生。

桂龍太郎の彼女。

「完璧なボディが自慢です 将来はアイドルを目指してるので！」

桃田
ももた

尾島や原口の元クラスメートで、1年しか大野小さいなかつた、浪花の転校生。

尾島の初恋の相手で、苦い失恋を味あわせる。

「ガキ臭いアホな連中は、淀川にでも沈んどけやーー！」

梨本先生（あだ名・リポーター）

美千子の担任。

面倒なことが苦手な中一英語担当の独身教師。

「面倒なことはとりあえず勘弁だな。ていうか、俺のクラスの生徒、英語の成績悪すぎだろ？！」

菊池先輩

3年生、元サッカー部部長。

松野先輩

3年生、元女子バレー部部長。

岩瀬先生

バレー部顧問。

箕輪先生

3年担当体育教師、陸上部顧問。

一之瀬先生

2年担当英語教師、バトミントン部顧問。

青島先生（あだ名・チントオ）

1年担当社会科教師。

* * * * *

今後の出演予定人物

渡部 伴 伏見 安西 荒井 東
部 ばん ふしみ あんさい あらい あずま
遥 丈 新 真美子 雄臣
はるか じよ あらた まみこ ゆうじん
一朗 かおり ういちろう

「東」方神起な男たち（前編）

「ミチ、全然食べてないじゃないか。エビチリもつと食べろよ」「好きだらう？」

円卓の中華テーブルに座っている私の左隣の少年は、すっかり声変わりした低い魅惑的な声で言つた。あと数年も経てば、彼の父親のようにすばらしいバリトンの声色になるに違いない。

「……あ、ありがと」

俯いて言うのも失礼なので、彼の方に向けば、両親譲りの罪な甘いマスクをこちらに向けていた。なんの曇りもない笑顔でニコッとしている。その顔を見てドキッとしたが、すぐ嫌な感じで心臓がドツドツと響くのが自分でもわかつた。

（「好きだらう」「……かあ」）

その言葉は、彼との距離が暫く開いていたと感じさせるのには十分な言葉だった。確かにエビチリは好きだった。しかし今は昔のようにガツつくほどのものではない。

ふと向こうの彼の隣に座っている妹・真美子の厳しい視線とぶつかった。その眼は「ズルイ！」と言つてはいるが、私だって好きでこんな想像以上の好意を受けている訳ではない。むしろ驚いているくらいだ。

……理由を問い合わせたいほどに。

「昔は俺といい勝負で食べてたじゃないか。ほら、遠慮するなよ」

「……」

昔大好物だったその朱色の塊が、今日は美味しいように見えない。

そもそも食すら進んでないのは、油の多い中華料理はダイエットの敵！　という理由だけではなく、別の理由が大きいということは明らかだ。円卓をそつと回し、エビチリの大皿を自分の前で止めて、レンゲですくい自分の皿に盛った。

次々と料理がチャイナドレスを着たキレイな女性店員によつて、中央の円卓に乗せられていつては下げられていつた。まだ料理が残つてゐるお皿はそのまま、自分の前を、そして3組の家族の前を通過していく。

何度も何度も。

その日は、突然来た。

朝は神々しいまでの太陽の光が町全体を照らしていたのに、日が傾くにつれて灰色の雲が太陽を覆つていく、ある春休みの出来事だつた。

* * * * *

「……ただいま」

見慣れている、茶色い古めかしい玄関のドアを開けながら、ホツと息を吐き小さく呟いた。

身体を見下ろすと部活用のシャリジャージに水滴がいくつも付いていた。部活をやつている途中に降ってきた雨。もう3月の下旬だというのに、体育館から外に出ると、冬のように寒くて、吐く息も白かった。近いし、面倒だと思つて折りたたみの傘もさすにダッシュしてきたが、思つた以上に髪の毛がしつかり濡れてしまい顔に張り付いている。タオルを持つてきてもらおうと母親を呼ぼうと思ったが、ふと足元に目がいった。

「……？」

家族の靴以外のものが、何足か並んでいる。どうやら客がきているらしいのだが、その靴の種類に一瞬眉根を寄せてしまった。

ベージュの細いパンプスと大きくて黒い革靴、革靴よりも少し小さいサイズで、大小のスニーカーが2組。

パンプスと革靴はピカピカに磨かれており、中学生の私でもわかるほど有名なブランドのシューズであった。スニーカーの方は適度に履きこなしている感じだが、特別汚れているというわけでもない。当然我が家の中のものではないのだが、何故かパンプスと小さい方のスニーカーは何処かで見たことがあるような感じなのだ。

（はて、何処だつたつけか？）

それも極最近のような気がする。とりあえず濡れネズミのままでお客の前では出れないと思い、見かけた場所を記憶の底で探りながら、仕方なくカバンから汗の染みたタオルを出して髪の毛とジャージ拭いた。

一通り拭いた後、カバンを持って台所に入ると、口口口口と鈴をころがしたような笑い声がした。

この声は絶対我が家族が出せる声ではない、お客の方だろう。

笑い声の主の顔とベージュのパンプスが一致した瞬間、見知らぬ靴の持ち主である人物達の顔が頭の中をサッと横切り、急に心臓が高鳴り出した。

笑い声と重なるように、渋くて低いバリトンの美声が聞こえてくる。

（ま、まさか……！）

「美千子？ 帰ったの？」

カバンを椅子において、慌ててボサボサになつた髪の毛を整えながら、挨拶をしに居間の方へ向かうタイミングを図つていたら、向

「うから声を掛けられた。

「あ！ ハ、ハイ！」

フーと息を整えた後、恐る恐るビーズの暖簾をくぐり、「こんにちは」と言いながら顔を出すと、母親と対面するように綺麗な女性と精悍で逞しい男性が座っていた。

女性は、肩まで伸ばした茶色い髪を内巻きにカールしており、上品なアイボリーのツイードのスーツ姿。清楚という言葉がピッタリで、ほつそりとした身体によく似合っている。いつもはラフな格好しか見たことが無いのだが、それでも十分綺麗だった。しかしそのよそ行きな格好は余計に美しさを際立たせいる。

男の方はグレーのスースにストライプのワイシャツ、紺のネクタイ姿。髪の毛も短くサッパリと整えられているが、こちらは色が黒い。キリリとした眉毛に彫りの深い顔だが甘いマスクで、まさしく「色男」という言葉以外何が当てはまるというのか。

その2人はどことなく顔つきが似ていた。2人そろって座つている姿も佇まいも、良い意味で実際の年齢を感じさせないほど若々しく、爽やかで美しい。この雰囲気をえて表現するならば、この年に話題になったコカラーラのCMの澄み切った歌声と出演者達が醸し出す空氣と同じと言えばおわかりいただけるだろうか。

「こんにちは、美千子ちゃん。今日は部活？」

女性は日本人離れしている彫りの深い顔をこちらに向けて、洗礼された笑顔をこぼした。そして、視線を少しづらすと、隣にいる男の人と目が合つた。

ドキンと心臓が跳ねる。

「久しぶり、美千子ちゃん。バレー部に入ったんだってね、お母さ

んから聞いたよ。いやあ、本当に大きくなつたなあ。暫く見ないうちに女らしくなつちゃつて、オジさんビックリだよ……子供の成長つて早いんだなあ」「

男の人は眩しそうに目を細めながら田尻に皺を湛え、優しい笑顔で頷いた。

「……」

……いつまでも変わらないその慈しみ溢れる温かな笑顔。小さい時に初めて見た、見た瞬間に抱いた時と変わらない憧憬が胸に蘇る。

「しかも英語も相当頑張っているそりじゃないか。聞いたよ、安西先生から。成績すごいいんだって？ 感心だな」「

その言葉を聞いた瞬間、私の目の前に壮大な道が開けた。それはまるで、モーセの十戒の一場面のように。……もしくは、廊下を歩く桂龍太郎のように。

この時私は心底勉強を頑張ってきてよかつたと思った。そう、この世でいちばん尊い言葉を、神から啓示されるつてこんな感じかもしれない。この時の私の瞳は相当潤んでいたに違いない。私はそれを誤魔化す為に、「……ありがとうございます」と頭を下げた後、精一杯笑顔を浮かべた。

「もう、兄さんつたら、相変わらずなんだからあ。ホラホラ、美千子ちゃん顔が真っ赤じゃないの！ オジサンなのにイヤあねえ？ ごめんなさいね、美千子ちゃん、レッスン滞つちゃつて。来週からは新しい家の方に来てね？ 時間は変わらないから」

「は、はい！……もう引っ越しの方は、終わつたんですか？」
「そうなの、週末にやつと片づけが終わつてね？これからは近くになつたから、通いややすくなるわよ」

ブランの瞳を隠すようにウイーンクした女のは、「あらためて、よろしくね？」と笑つた。私も慌てて「こ、こちらこそ、2年の英語もよろしくお願ひします」と頭を下げた。

「美千子、今日は安西先生の引っ越しと東さんの海外転勤のお祝いを兼ねてみんなで一緒に食事に行くことになつたから。着替えてね？」

母のその言葉を聞いた途端、パアッと嬉しさが込み上げた。このメンバーで、しかも目の前にいる男性と一緒に食事するなんて何時以来だらうと思いつつ、母がいつもよりめかし込んでいるのはそのせいから、この時わかつた。……が、後半に聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

「…え？ て、転勤？ 海外？」

東小父さんは外資系のメーカーに努めており、国内外あちこち飛びまわつている。それでも県内から拠点を移すことにはなかつた、それが……。

（……ああ、そつか。もうここにいる理由が無くなつたから、なのかな）

まだ未成年の中学生で、子供の自分が恨めしい。だからと言つて、大人なら彼を引き止められるのかと問われれば、それも絶対ありえない。そもそも私にはとやかく言う権利どころか、こうして会つことも無かつたのかもしれないのだから。それが彼が転勤する前に一日会えるなんて……奇跡に近い。そして、今度こそこれが正真正銘

最後かも知れない。

(……なにがなんでも髪の毛を乾かし即効マシにつくろわなければ
！ そして、少しでもいい印象残しておかなくちゃ……)

「ああ、新君あらいたとね、雄臣おうじん君、一階の真美子の部屋にいるから、挨拶してらっしゃい。2人ともうちにくるの本当に久しぶりだもの」

母親はこの2年間、例え耳にしても心の動搖を悟られないようにしてた名前を言った。娘の気持ちも知らない呑氣な母は、「フフ」とおつとりとした笑いをして目で天上方に視線を流した。

「……」

(アラタと…………雄臣…………)

その名前を聞くと、今まで高揚していた気分が萎み足が僅かに震え、再び心臓の鼓動が速く打ち出した。しかもその鼓動は心躍る嬉しさは秘めていない、迫りくるような複雑な動きだ。久しぶりで緊張しているせい、ではない。

非常にバスしたいところだが、挨拶は常識人としてしなければならない。私は動搖を隠しながら頷いた。できることなら、このまま居間にいて東小父さんを眺めていたいが、そうもいかない。私は大人3人に頭を下げてそっと居間を出た。母親の「ケーキ頂いたから、後で食べなさい」という背後からの声に慌てて返事を返しながら、少しでも髪を乾かしてマシな姿になろうと洗面所の方へ足を向けた。

* * *

高速でタオルを動かした後に鏡を覗き込むと、髪の毛はあちこち跳ねあがり、ボサボサのボンバーへッドになっていた。櫛で髪の毛を撫でつけて少しでもマシになるように形を整える。肝心な時にドラ

イヤーがないなんて……残ってるお年玉を使って思い切って買つてしまおうかと鏡の向こうの自分に問うた。

(「やうだよね、4月からは先輩にもなるし。いつまでも暖房の前でセツトするなんて悲しすぎるってもんだよ」)

でも欲しいのは今この瞬間。お客がいる、しかも東小父さんのいる居間の暖房でセツトなど絶対無理だ。

(「……前もつて教えてくれればいいのに。きっと父さんが急に決めたんだな」)

確かに嬉しかったが、タイミングが悪い。もつと晴れた日でおめかしバツチリの私を見て欲しかったと憂鬱な気分になつた。せめて鏡に映つている、自分の顔の頬にある二キビがなくなつてからが良かった、とフウと息を吐いた。

これ以上やつても良くならないとこまでマシに整え上げ、洗面所を出た。そつと廊下を歩き階段の前に立つて上を見上げると、微かな話声が聞こえてきた。その声のトーンからして、楽しく盛り上がりつている。

「はあ」

(「のまま無視して自分の部屋に直行したい」)

楽しそうにしている中に入つて行くのが躊躇われた。ただ挨拶するだけなのに。邪魔だつて思われないかな……と、嫌な「黒い記憶」が心の奥底から隙間を縫うように漏れだす。腹の中で「ゴチャゴチャ」言つるのは得意なくせに、肝心なところで「黒い記憶」が邪魔をして口が噤んでしまうのだ。

彼とは最後に会つてから2年も経つている。きっと……いや、多分大丈夫。私だつてそれなりに成長しているのだ。

(「ちょっと挨拶したら、すぐ部屋に引っ込もう。いや、急いで着替えて下でケーキ食べた後、お茶のおかわりを淹れて居間に連ぼうかな……」)

そうすれば東小父さんを見れるし、「イイ子」をもつとアピールできるかもなどと下心を一杯にして、軋む階段を登った。
その時、部屋のドアがガチャリと開いた。

「やっぱり、ミチだ」

ドアノブに手を掛けたまま、入口から顔を出したのは背の高い少年だった。

傍にある小さい窓から光を受け、濃いブラウンの長めの髪の毛が明るい金茶に輝いている。見下ろす彼の瞳の色は実は黒ではない、東小父さんと同じ濃いグレーであつた。圧倒的な力強い光を背負う、彼の父親と同じ類まれな容姿を持つ少年。こちらを見下ろしている優しそうな笑顔は、最後に別れた時と全然雰囲気が違っていた。2年と言う時間が彼を成長させたのだろうか。与えられた時間は同じ筈なのに、自分とは全然違う。いや、周りの中学生達とは違う大人びた雰囲気を漂わせていた。

「久しぶりだね、ミチ」

「……雄……あ、東くん」

第一声はマズマズだつた。幸いにも声は震えていない。

少年は長年変わらない呼び名で呼んでくれた。それに対しても私は、とてもじゃないが「雄兄ちゃん」と昔のように呼べなかつた。それでも懐かしさと切なさと苦しさと……一言では言い表せない感情が渦巻いて胸が一杯になつた。彼と過ごした幾日かが頭の中を高速で過ぎ去つていき、最後に顔を合わせた場面がピタリと停止した。その映像と目の前の顔が重なるのを振り払うように頭をさげ、「お、お久しぶりです」と先輩にするような他人行儀な挨拶をしてしまつた。

「……」

彼はスッと真顔になり黙つて見下ろした。そんな彼を見てマズかつたかと一瞬ビクついたが、今の私にはこれが精一杯だと思い直した。彼が何か言いたそうに口を開いた途端、彼の後ろから2人顔を出した。

「おかえり、ミチ」
「おかえりなさい」

子供っぽい表情が残る真面目そうな男の子と、楽しい会話を中断されて怒っているのか、妹の真美子の不機嫌そうな声。

「……ただいま」

おそらく私の顔は、先日までクラスメートだつたどつかの猿相手に見せる不自然な笑顔以上に引き攣つていただろう。私は「ごめんなさい、着替えるから」とそそくさと階段を上り、自分の部屋へ逃げ込んでドアを静かに閉めた。

「東」方神起な男たち～前編～（後書き）

「CMはYouTubeで見れます
<http://www.youtube.com/watch?v=IXFiccrmQph&feature=related>

「東」方神起な男たち～中編～

「つーか、アイツ信じられないよね。せつかく超難関校の私立に受かつたのにさあ。なんで山野中？」

妹の真美子は勝手に私のベッドの上で寝そべりながら、私の大事なアメリカのアイドル雑誌を乱暴にペラペラと捲っているようだ、不快な音が聞こえる。

(セリヤ アンタの為でしょ(ひ))

……とは言えない。そんなこと言えばアラタの立場が無い。私は「羨ましい奴め」と声には出さないで口だけ動かした。英語の参考書を田で追いながら、真美子がこれではアラタが報われないなあと、少し頼りない生真面目そつな少年の顔を思い浮かべた。

「そ、それよりも、真美子。私の雑誌、もっと大切に」

「ま、アラタはどうでもいいわ。それより雄兄ちゃん！ 4月から一緒に中学校なんて信じられない！ なんだかドキドキしちゃうし、絶対モテちゃうよね……」

真美子はアッサリと無視してバシンと雑誌を閉じた。ガバリと身体を起こした後正座をし、「神様、雄兄ちゃんに変なムシがつきませんように！ そして、どうかワタクシめと両想いに！…」とウンウン唸りながら胸の前で十字を切つて、腕を伸ばしてながらアラーの神に祈るように身体を伏せた。

その姿を黙つて眺めていると、ジロリと睨まれた。

「ちょっと、なに？ その眼！ 言つとくけど、オネエちゃんにも絶対渡さないからね！ 姉妹でも手加減なしだから！」

「……可哀想に、アラタ」

「え？」

「べつに。そ、それよりも、もう彼女くらいいるんじゃないの」

「あのね……『遠くの恋人より近くの幼馴染』だよ。わかつてないなあ、オネエちゃんは！　ま、オネエちゃんは、どうせ東オジサンのほうだもんね」

「……あ、あのさ、祈る神様一つに絞つたら？　一股かけたら、願い事叶わないよ」

「ちょっと、そんなこと言つてる場合？！　あんだけイイ男なんだから、なるべく多く祈つとかなきや！」

「……」

「そうそう、いつしちゃいられない。夜更かしはお肌の敵だわ。オネエちゃんも早く寝た方がいいよ、またここにニキビできてるし？」

真美子は自分の頬を指しながら、私の意見をサラリと無視した。こちらにチラッと顔を向けた後、長くて綺麗な黒髪を揺らしながら部屋から出て行く。

「……そつ思つなら、先にお風呂入らせて欲しいんですけどね」

また今日も真美子の長風呂の後なんだろなあ、と半ば諦めた気持ちで真美子が出て行つたドアに背を向けた。鍵付きの机の引き出しを凝視した後、鉛筆立てに手を突っ込んで鍵を取り出し、引き出しを開けた。そつと奥にしまつたままのフォトフレームを取り出す。ついさつきまで楽しく食事をしていった面々が写つている写真を眺めながら、立ちあがつてベッドに寝転がつた。

* * * * *

フォトフレームの中に映つているのは、大人が6人、子供が4人。

大人6人のうちの2人はうちの両親だ。

私の父はこの年代にしては背が高く、顔はなかなかの男前だった。最近では髪の毛が薄くなってきており、そのことを気にしているらしいが。母は父よりも2つ年下で、どちらかというと平凡な主婦だ。唯一自慢できるところがあるとすれば、料理がなかなかの腕前であるといふところか。

華やかな父と地味な母。

何故この組み合わせで結婚したのかと、子供ながらに疑問に思うことがあつたが、それは最悪な形で判明することになる。ようするに、私が母のお腹に宿つたからだ。いわゆる両親は後に言つ「授かり婚」だった。

地味な専業主婦でヒッソリとしている母に対して、父は非常に人目を引き社交的だ。普段は仕事が忙しく、接待にゴルフに飲み会とサラリーマンの王道を駆け抜けっていた。それ故、私も真美子も幼少の頃は滅多に遊んでもらえず、家族サービスをされた記憶が無い。

日本のサラリーマン事情だと思つて仕方がない……などと思つていたら、その実は只でさえ少ないプライベートな時間を、自分の付き合いに優先して充てていたからだと後になってわかつた。

父は底抜けに友達付き合いがよく、いつも誰かしらに呼び出されてはいそいそと出かけていた。普通、仕事の疲れを癒すのは家族との団欒である筈なのに。若くして結婚したせいもあるのか、何故か仲間が優先で家族はいつも一番だった。一時期子供の目から見てもひどかった時がある。大人しくて控えめな母は、そのことをよく理解しているのか見て見ぬふりしてゐるのか……黙つて父を見送つていた。私は横でその母の寂しそうな顔見ると我がままを言えなくなり、口を噤んでしまつたのを覚えている。

だがある時、父は気付くのだ。娘2人が自分に全然置いていないということを。たまにうちにいても「なんで居るの?」といつて見ていることを。

さすがに「こりやマズイ」と思つたのだろう。それからの父は己の行動を省みて反省し、家族と過ごす時間が多くなつた。いや、多

くなつたというより、自分の付き合いに家族を連れて行くようになつたと言つべきか。ようするに家族ぐるみでの付き合いがスタートしたわけである。

そのおかげで、父は家族からの株は上がつた。特に真美子からは「お父さん、大好き！」と抱きつかれ、デレデレ顔だつた。私も同じように嬉しくて、苦手だった父と打ち解けた感じになつた筈なのだが……ある出来事がきっかけで、なんだかんだ理由をつけてあまり顔を出さなくなつてしまつた。母もそんな私を心配して、一緒に家に残るようになり、父は真美子だけを連れて行くようになつた。この写真はそうなる前の一枚であり、最も仲の良いメンバーが揃つている。その頃の私は両親の前できこちなくとも笑つてゐるし、妹の真美子などは父親譲りの整つた顔で、バラのような笑顔だ。

中央に立つていた両親の左隣の男女に視線を写した。

そのうちの一人が、夕方挨拶した女性だ。彼女の名前は「^{あんさい}安西・グレース・マリ」。

現在私が通つてゐる英語塾の先生である。先生は名前の通り、アメリカ人と日本人のハーフだつた。先生の肩を抱くように立つてゐる小柄な人が先生の旦那様で、安西小父さんだ。その2人の前に小さい男の子が、私といい勝負のぎこちない顔付きで立つてゐた。安西夫婦を足して2で割つたような可愛らしい顔立ち。クオーターナのでやはりどこかに外国の匂いを感じさせながらも、髪と瞳は黒い。そしてこの写真の中では一番背が低かつた。

彼の名前は「^{あんさい}安西新」。

安西家の一人息子で、真美子と同い年の男の子だ。安西小父さんは大学で英語の講師をしており、マリ先生は翻訳や通訳の仕事をしている傍ら、個人的に英語塾も開いてゐる。そんな優秀な血を引いたアラタは当然頭もよく、この春なんと超難関校であるK成中学に受かったと言うのだ。それを先生から聞かされた時は、素直に「おめでとうございます！」とお祝いを述べた。が、帰つて来たのは苦

笑だった。

『それがね？　あの子、急に行かないって言いだして。引っ越しが決まった途端急に合格蹴つちゃったのよ』

『は？　……な、なんで？　せっかく受かったのにですか？！』

『そうなの。記念で受験はしたけど、よくよく考えたら電車通学する時間がもつたいたいから、ですって。ま、そんのは嘘だと思うけどねえ』

『ああああの！……あ、いえ、ス、スミマセン……』

『！……あら、いやだ、美千子ちゃんが謝ることないのよ。ま、本人がよくよく考えたことなのでしょう。自分の人生だしね？　今回は残念だったけど、高校からという手もあるし。それに中学からあんな東京の方まで通わせるのもね？　アラタには塾で頑張つてもうらうらになつたから』

『……そり、ですか』

『そういうわけで、アラタ、山野中行くことになつたからよね？　美千子ちゃんも真美子ちゃんもいるから安心だわ。ほらあの子ちょっとシャイでしょ？　知り合いが誰かいれば心強いし』

『……あ、あの……私じゃ役に立たないけど、真美子ならきっとアラタの力になつてくれると思います』

『あら、それなら息子も喜ぶわ』

安西先生はパチッと可愛らしいウインクをしてくれたが……。

私は写真を眺めながらアラタとマリ先生の気持ちを思い、溜息を吐いた。先生は明るく言つていたが、内心とても残念だったに違いない。中学からK成に通えば、公立中学では絶対味わえないしっかりとした教育と、約束された将来が待つてているのだから。行きたくても行けない人が多いと言うのに、それをアッサリ蹴つたアラタがスゴイというか命知らずというか。同時にその真の意味を知つていて私としては複雑な気持ちになつた。

「真美子……責任重大だぞ」

アラタも真美子も気持ちは一方通行。よく小説や漫画に出てくる
そういう幼馴染同士の恋なんて、現実そう上手くはいかないものだ。

そして、最後の家族。

両親の右隣には、やはり一組の男女が立っている。2人とも綺麗な顔立ちで、美男美女という言葉がぴったりだった。男の人は「東・ルーサー・健人^{ケント}」。

東小父さんは、マリ先生と双子の兄妹であり、父と東小父さん夫婦は大学からの友人でもあった。父もそれなりにモテたというが、この東小父さんは敵わないだろう。

父に手を引かれながら、初めて東小父さんを見上げた時のことは今でも胸に焼き付いている。その時の衝撃と言つたら、悪いが田宮君やリバー様の比ではない。この世で初めて美しいものに触れた感動に近かつた。彼は目尻に皺を寄せながら二ヶ口リと笑い、私の目線に合ひうようにしゃがみこんで、頭の上にポンッと手を置きながらそっと撫でてくれた。それはまるで、今まで日蔭のように生きてきた野花に、思いがけず美しい蝶が舞い降りてきたような光景だ。

『……やつと美千子ちゃんに会えた。お母さんに似て、とっても可愛らしいね。お父さんに似なくて良かつた、良かつた』

『おい、そりやどういう意味だ？ それよりも俺の娘に手を出すな！』

『早く大きくなつて、雄臣^{おうじん}のお嫁さんにおいでね？』

『こらこら、無視すんな！！』

『いやいや、こりや将来が楽しみだよ、オジサン』

『ちょっと待て…』

東小父さんはハハハ」と笑いながら父の言葉を無視して、私を軽々抱きあげてくれた。その時耳元で「……私、オジチャンのお嫁さんになりたい」と言つたのは2人だけの秘密だ。

東小父さんはそれはそれは私を可愛がってくれた。親以外、親戚も近所の人も大体私より妹のほうを向いて「あら、こちらのお嬢さん、とっても可愛いわね」と言われ続けていた私は、すっかり東小父さんに心を許し、父よりも懐いたのは仕方ないと思つ。おそらくあれが初恋だったに違いない。

それからというものの、テレビや街で外国人を見かけると、すぐ目を追つてしまふクセがついてしまつた。外国の匂いがする、東小父さんや安西先生の家に行くのが楽しみになつてしまつた。子供達は玩具やゴツコ遊びや外遊びをしているというのに、私だけはいつも、外国の絵本や洋書、雑誌眺めては未知なる世界に夢を馳せていたのだ。

そして、時々東小父さんを盗み見ては、ホウッと溜息をついていた。私の洋画好きや英語好きは、全てこの東小父さんに繋がつている程、東小父さんは私の「理想の世界」そのものだったのだ。いや、「理想」などという言葉では片づけられないかも知れない。彼は私にとつて「神」というものに近かつた。眺めるだけで、傍にいるだけで心が洗われる存在だ。

それは、迷える子羊が祈りを捧げる十字架のイエスのように。座禅を組む修行僧を導く仏陀のように。

大袈裟だが、それぐらい尊い存在だったのだ。

そんな東小父さんの横にいる権利を与えるのは、それ相応のものでなければならない。今でもハツキリ思いだせるが、東小父さんの奥さんである「東多恵子」さんはとてもキレイな人だった。父や東小父さんと同級生で一緒に大学だった彼女は、在学中4度ともミスキヤンパスに選ばれるほど容姿端麗才色兼備な人で、ありとあ

らゆる褒め言葉は欲しいままだつたらしい。大学卒業と同時に結婚した東小父さんと多恵子さんは、その時には「雄臣」と言ひ名の神の子を授かっていた。そんな二人は誰から見ても理想のカップルだった。

けど、私はこの多恵子小母さんが苦手だった。

「東」方神起な男たち（後編）

初めは東小父さん同様、憧れだつた。

多恵子小母さんは、綺麗で気配りが効いて……全てにおいて完璧だつた。理想そのもの、こうなりたいという女性像に近かつたのだ。

しかしその夢のような憧れは、出会つたその日に砕け散つた。

彼女が私を見る目は、東小父さんと真逆な冷たい眼差しだつた。真美子はとても可愛がるのに、私には気を使つてゐるフリをする多

恵子小母さん。

しかも皆が見ていない時に急に素つ氣なくなる態度、そしてそれをひた隠しにしていた。幼稚園の頃からイジメられ体質だつた私は、彼女の態度といじめつ子の態度のそれと変わりないのはすぐわかつた。そんなの被害妄想だ、子供のくせになにがわかると言う人もいるだろう。けど子供だつて同じ人間だ、バカじやない。少なくとも無条件で可愛がられてゐるかそうでないかくらいは肌で感じるものなのだ。

『美千子ちゃんも……母親じゃなくて、悟^悟に似れば良かつたのに。氣の毒ねえ』

(「悟」つて、お父さんを呼び捨て?)

彼女は私に聞こえてないとthoughtたのだろうか。

みんなが見ていらない時に、大人しく本を眺めて私の背に向かつて残念そうに言つたのだ。私はそれを聞いた時、初めは訳がわからず全身硬直して呆然としてしまつた。ショックが抜けると底知れぬ悲しさと行き場のない怒りがカツと体中に燃え広がつた。最初に抱いた憧れが強かつた分、あの時の言葉では言い表せないような衝撃は一生忘れないだろう。

その一言をきっかけに、私の足は東小父さんの家から遠のいた。

例え多恵子小母さんから嫌な態度を受けようと、東小父さんに会える事といろいろな外国の絵本で帳消しだった筈なのに、だ。

そして、珍しく安西先生の家に遊びに行つた時、ちょうど来ていた多恵子小母さんが私だけではなく、さりげなく母も除けもの扱いしている事にも気付いてしまつた。しかも東小父さんの前で、うちの父にベタベタしながら甘える多恵子小母さん。その姿は人の神经を逆なでするような、ザワリとした嫌な感触を直接心臓に当てられたようだつた。しかもうちの父親は困った顔をしながらも、多恵子小母さんといふにさせたままなのだ。それどころか、必要以上に氣を使ってマリ先生を手伝い、黙つて悲しそうにしている母の顔に全然気付きもしない。

仲のいい親友同士、楽しい時間を共有する集まりが、私にはまるでド素人の茶番劇に感じた。こんな痛い劇、誰が好き好んで自分も混ざらなければならぬのか。

それからは「行かない」とゴネ続ける私を、父親はなんとも言えない顔で見ていたが、そのうち真美子だけを連れて行くよつになつた。

しかし　月日が経ち、そんな子供を交えた家族ぐるみな付き合いも、意外な形で結末を迎えることになる。

2年前、突然多恵子小母さんが病氣で亡くなつたからだ。

その前はいろいろ大変だつた。うちの父親はよほど東夫婦と仲良かつたのか知らないが、病院に通い詰めだつた。私も家族で一度だけお見舞いに行つたが、やせ細つた多恵子小母さんの身体を見て多少は同情はしたもの、悲しいなんて気持ちなど湧かなかつた。しかも「ある会話」を聞かされたのでは、同情した気分を返して欲しかつたくらいだ。

それは、私がトイレに立ち、父と真美子が売店へ言つた時のことだつた。

* * *

広い病院をうろついてトイレを見つけ、用を足して戻つてくると、多恵子小母さんの病室の中から声が聞こえた。その声色からして、あまり感じがよくない。私は入つて行くのを躊躇い、その場で突つ立つたまま聞き耳を立ててしまった。

『どうせ、イイ氣味だと思つてゐるんでしょ』

『……そんな』

『私の事嫌いなくせにわざわざ見舞いに来るなんて、そんなに健人の感心を引きたいわけ？！ 奪い返したいわけ？！ 結婚してからも周りをウロチョロウロチョロ、田畠をわりなのよ…』

『……』

『悟も可哀そうよ！ 健人の傍にいたい為に、自分の友達に未練タラタラな女に引っかかった揚句、ご丁寧に妊娠までさせられてしまつて！ 悟は優しいから後に引け無くなつたのよ！ 大体、あの美千子つて子、本当に悟の子？！ 全然似てないじゃないの…！ あんた達2人揃つて健人と悟にベタベタベタベタ… 本当にムカつくわ。ああ、そういうずうずうしい点、美千子は絶対アンタの子ね。それが雄臣ゆうじんの嫁！？ 「冗談、じゃないわ！」

『……子供のことは、どうか…』

『……うるさいのよ……私に説教しないで！ もう一度と来ないで！ アンタの顔なんて見たくないの…！』

私はその場から逃げだした。
気がつけば病院の中庭のベンチに何十分も座つて、途方に暮れていた。

それからは、どうやつて家に帰つてきたのか覚えていない。記憶があやふやなのだ。もう小学校高学年だったので、来た通りの道を引き返し、持つていたお小遣いで切符を買って一人で電車に乗つて

帰つたのだらう。その日はなぜ勝手に帰つたと、両親からひどく怒られた。

それからの私は、家の口数が減つた。両親の顔を見ると、多恵子小母さんの顔と言葉がチラついて、まともに会話ができなかつた。そんな私は母は心配そうにしてたが、「思春期だら、心配するな」と一言で片づけてしまつ、父親。

(……ああ、そうか。そういうことか)

あの時、多恵子小母さんは言つた。私は本当に父の子かと。母は結婚しているのにもかかわらず東小父さんを慕つてゐる。父親と上手くいかないのも、多恵子小母さんが素つ氣なくするのも、東小父さんが母似の私を可愛がるもの、ちゃんと理由があつたのだ。

それは想像以上にショックを与えた。

男女の違いを「性教育」という形で知り始めたばかりの多感な年ごろだつた私には、耐えがたい事実だつたから。よくよく考えればそんな脣メロのようなことあるはずもないのに、すっかり私は多恵子小母さんに振り回されていたのだ。

私はますます家でも学校でも暗くなつてしまい、一時期家族とは挨拶だけ多恵子小母さんが亡くなるまで、まともな会話すらなかつた。

後になつてよく思うことがある。この頃から中学卒業する頃にかけて、よく道を踏み外さなかつたと。大人しい性格で、自らダークサイドを歩く勇気も無かつたのが幸いしただけだ。たまたま運が良かつただけ。とりあえず少年鑑別所にお世話になるようなことにはならなかつたが、それと引き換えに過度のストレスによるどもり癖、いわゆる「吃音症」が発症してしまつた。

短い入院生活を送つた多恵子小母さんは、クリスマスを迎える前

に亡くなつた。

彼女の死を父から聞かされた時は、涙すら出なかつた。むしろ彼女が亡くなつたことで、あの時聞いた会話も全て無かつたことのようを感じ、胸をなでおろしたほどだつた。母は泣いていたが、何故あんだけ罵られた上に、自分を嫌つていた女の為に泣くのかと、その気持ちが全く理解できなかつた。ただ残された東小父さんや雄臣が氣の毒だつただけだ。

お葬式は冷たい雨が降る寒い日にひつそりと行われた。

弔問客がやけに少ないとthoughtたのは、来るのは大学の友人関係や東小父さんの親戚関係の人ばかりで、多恵子小母さんの親族関係はいなかつたからだ。この時に初めて私は、偶然聞いた東小父さんの親族のヒソヒソ話で、多恵子小母さんが天涯孤独の身であつたのを知る。彼女は子供の頃に両親を亡くし、施設で育つた後、大学入学を奨学金制度という形で勝ち取り、苦労を重ねた人だつたとのことだつた。

私は多恵子小母さんのもう一つの顔を知り、式の間中、多恵子小母さんに向ける感情をどのようにすればいいのかわからず複雑な気分だつた。残酷にも、私の中では多恵子小母さんへ憧れは微塵も残つていなかつたから。

人が亡くなつたというのに、ボーッと考え事をして涙を流さない私を、雄臣は睨んでいた。

雄臣は両親の素晴らしいところだけを全部受け継ぎ、この世に受けるべきして受けた「神」に選ばれた子だ。東小父さんに似た顔、二人の優秀な頭脳を譲り受け、並みはずれた運動神経、異国を思われる容姿と身のこなし。そして、紳士でやさしい性格。

ただし、極度のマザコンで、気に入らない人間には容赦ない二重人格だつたが。

私は彼が苦手だつた。東小父さんと仲良くしているとすぐに邪魔

するように割つて入つてきた。それはまるで、東小父さんが「俺と母親のもんだ」というように。

逆に東小父さんに近付かなければ、私にも普通に優しかった。初めは多恵子小母さん同様一目見て憧れを抱いたが、すぐに判明したそんな雄臣の性格が、彼の背後に見える多恵子さんの面影が、どうしても馴染めなかつた。よくよく考えてみれば、東小父さんに「顔が似ている」だけで、彼はまったく別の人間だ。

父の付き合いに顔を出さないようになつてから、彼の態度が段々と硬化し始めた。多恵子小母さんのように素っ気なくなる、雄臣。少しづつ狂い出した歯車。

最後の決定打が、多恵子小母さんのお葬式での私の態度だった。お通夜の後、人気のないところでぼんやり座つていたら、雄臣が来ていきなりグイッと乱暴に立たされた。強張つた表情をしながら、泣きはらした赤い目で睨まれた。

『こんなところで、なにしてるんだよ』

『……』

『ミチは、泣きもしないんだな』

『……』

『マリは泣いていたの……』

『……』

『そういうえば、ミチは全然見舞いにも来てくれなかつたもんな』

『……』

『どうせオマエにどつては父さんだけだもんな？…………母さんの言うとおりだ。母子揃つてこんな薄情な奴らと付き合つてたなんてさ、父さんも悟小父さんも見る目ねえよな。しかも俺の嫁？ アホらしく……』

『…………もつ俺たちに一度と近づくな！』

雄臣は低い声で吐き捨てた後、みんながいる方へ行つてしまつた。

私は何も言い返せず俯いたまま動けなかった。

私は悔しくて悲しくてやりきれなくて、この時初めて泣いた。お葬式の時には一滴も涙が出なかつたというのに。

東小父さんに冷たい奴だと思われたに違ひない、嫌われたに違ひないと思つと、涙が流れた。多恵子小母さんには一生嫌われたまま、存在を否定されたまま会つことがないという事実に、涙が止まらなかつた。しかし例え本当の事を雄臣に言つたところで、複雑だつた気持ちを伝えたところで、ママっ子だった彼が私の言葉を聞く筈もない。信じる筈もない。

好きでこんな立場に生まれた訳ではないのに……どうしてこうなつてしまつたのだろう。

それから私は一度と東親子に近付かなかつた。

* * * * *

目尻からこめかみに温い涙が落ちて行く。

久しぶりに思い出した嫌な記憶。振り払うように慌てて指で拭つた。ベッドから身体を起こし、写真を抽斗の奥に乱暴に押し込んで、音を立てて閉め、鍵をかけた。

写真の中の雄臣は、東小父さんと多恵子小母さんの前に立つて笑つていた。あの頃は彼も、何も知らない私も、幸せだつた。それが無情にも、月日は残酷な方向へと流れて行つた。

今日顔を合わせた時や食事をした時、彼の態度は出会つた頃に近かつたと思う。2年前の憎しみが籠つた感情は見えなかつた。
……あの巧妙に作られた仮面の下はわからないが。

(嵐が来る)

窓に叩きつける雨と風の音を聞きながら、来月からアラタだけで

なく、雄臣も山野中に通つてになると困つて、正直複雑な気分だつた。

『父ちゃん、仕事が忙しいって言つし。それに、母さんも日本で眠つてる』

これは、雄臣が食事の時に言つた言葉だ。

東小父さんは仕事が忙しい上に頻繁に移動するといつて、最低中学卒業するまでは安西先生のところに居候することになった、雄臣。

それを聞いた父は「えらいぞ！ さすが男の子だな」と、もう中学生3年生になる彼に對して小学生にするような口調で褒めた。真美子も目を輝かせ、飛び上がらんばかりの喜びよつだ。

『アラタとマリ、それにミチもいるから、心強いよ。4人で仲良くやつていこうな？ オレは中学最後の1年間だし』

親たちの信用をしつかり握つている容赦ない笑顔で力強く言われたら、誰が「とっても胡散臭いので、私は無視していただいて結構です」などと言えるだろ？

私は多恵子小母さんが亡くなつた時と同じように無表情ではなかつた。あれから2年が経ち、やつと傷が癒え、類人猿に鍛えられた私は、「よろしくな、ミチ」という雄臣に、「よ、よろしくお願ひします」と愛想笑いを浮かべて頭を下げる。

『美千子ちゃん。すまない……雄臣を頼むよ』

食事会の後にさりげなく私の側に来て、真剣な顔で言つた東小父さん。

彼の増えた目尻の皺を眺めると、この2年本当に一度も会わなか

つたんだなという実感が湧いた。あれだけ憧れた人でも、会わなければ自然と忘れていくものなのかなと思った。私は曖昧に微笑んで頷いたが、おそらく期待には添えないだろう。大好きな東小父さんに応えたい気持ちは十分にあつたが。

（大体学年が違うし、そんなに接点がない筈。たつたの1年だ。もう、絶対に雄兄さん、いや、『多恵子小母さん』に振り回されたりしない）

東小父さんには申し訳ないが、私は密かに心に誓つた。

引き出しから皿を逸らし、結露がひどい窓に近付いて水滴を手でグイッと拭つた。

ますます強くなる暴風雨。

外で吹き荒れる嵐に、私は嫌な予感を感じた。

春の訪れと共に突然「東」からやってきた風。その風はまさしく「神」が起こす凄まじい神風となり、私の周囲を根こそぎ巻き込んでいくのだが、この時の私には想像もつかなかつた。

「東」方神起な男たち（後編）（後書き）

美千子結構キツイです。冷めて、るのかな?こうして見るとスゴイ小学5年生やな……。コメディ路線を求めていて、シリアス苦手な方、スミマセン。m(—)mでもこれ書いて、親のあるべき行動を再確認せしめちゃつたりして。

幼馴染といつよつ、ただの知り合いく前編

春。桜が舞い散る4月。この季節がくるたびに、新たな気持ちになる。

ほんのひと月前までは、それこそ卒業式の時には、「なごり雪」の歌がピッタリなほど寒く、薄暗い空の下で3年生を送り出した山野中学校も、学校の周囲を取り巻く桜の木が初々しい新入生を歓迎したのは記憶に新しい。

現在私がいる頭上には、先日まで咲き誇っていた淡い桃色の花びらの代わりに、新緑の葉が生い茂り眩しい程だつた。その葉を揺らす風も穏やかで、冬の影はもう無い。空を見上げれば、澄み切った青空が目に飛び込んでくる。春のなんともいえない空気が、あまりに気苦労を重ね過ぎてポツチャリ度が若干下がつた全身を覆つ。

「……って、ちょっと… 荒井さん、聞いてるの?…」

「へ? ハ、ハイ?…」

不機嫌な声で我に返つた。

目の前の集団は私がボーッとしているのがわかつたのだろう、全員顔を強張らせていた。先頭にいる少しキツそうな顔の女人が、ズズイと一步近寄つて来る。

いけないいけない、目の前の厄介事から思わず現実逃避をしてしまつた、荒井美千子。現在進級して中学2年生である。

「だ・か・ら! 東君あずまって彼女がいるのかつて聞いてるの! それにアナタの妹、ちょっと東君に馴れ馴れしくない?! いつたいどういう関係なのよ?…」

鼻息を荒くしながら、勝手な意見を捲し立てる女。

(そんなの知るか。気になるなら、真美子に直接聞けよ…)

……とは言えません、絶対に。

そんなことを言つてしまつたら、絶対この集団からリンチ決定である。ここはいつもの通り、適当に誤魔化して穩便に済ます得意の方法が手つ取り早い。

「ああああ、あのですね……雄、つて、いや、え、えーと…あ、東先輩のことは、私もよく、その、知らなくてですね……」

女子の皆さんは「雄」の時点で目がつり上がつた。その形相は、下手したら2年になつてから益々迫力とハクが付いた桂龍太郎より恐ろしい。

「知らないってどうこうことよ？！　アンタら姉妹と東君は幼馴染つていうじゃないのよ！…」

(そこまで知つてゐなら、「どういう関係なのよ」つて、聞くなよ
……)

溜息も文句も必死で飲み込んだ。

そもそも何故私はこんなところで貴重な昼休みを過ぐしているのか。先生にプリントを届けに行つた筈が、何故呼び出しの定番である体育館裏で3年の女子に囮まれないといけないのか。誰でもいいから教えて欲しい……というより、救つてほしい。

2年に進級してから一ヶ月も経つていないと、こういつた呼び出しが今回で5度目だった。しかもありがたいことに、毎回毎回違うメンバー。

思い起こせば、初めて集団に囮されたのは始業式が始まつて一週間後だった。

体育館裏のゴミ焼却炉にゴミを捨ててたら、前触れもなくいきなり囲まれた。

何がなんだか訳わからず、怖くてパニックになり、今にも泣きそうで言葉も発せないほどショックだった。一番先頭に立っていたのは、新3年女子の中で一番可愛いと噂されている、女子バスケ部の錦戸先輩(にしきど)。いくら可愛い顔でも、上から目線で「アンタ、東君のなんのさ！」とドスの効いた声で詰られれば、普通の人は泣く。

が、天は罪のない「ザ・普通女子」を見離さなかつた。

超運がいいことに、女子バレー部の部長である新3年生・平畠先輩達が、こんな人気のない体育館裏にもかかわらず、偶然にもたまたま通りかかったのだ。思わず強力な助つ人が、錦戸先輩の前に立ちふさがる。私そっちのけで、火花を散らしながら睨み合う女子プロ……いや、3年の先輩方。既に私の頭の中ではリングアナによつて彼女達のリングネームがコールされていた。

赤コーナー、リングに咲く華麗な毒花あー、ラフレシア・錦戸オオオオ！！

続いて、

青コーナー、小糋なロープの魔術師いー、アマゾネス・平畠アアア！！

山田君、座布団一枚荒井美千子にやつて！！

……なんて自画自賛してゐうちに、試合開始の「ゴング」が早くも鳴り響いた。

『ちょっと、あんた達、うちの後輩を囲んで何してるのよ！』

『う、うるさいわね、ちょっと荒井さんに用事があつただけよ！』

『ちょっとの話の割には、荒井さん怯えてるじゃないのっ？！ 大体、こんな人気のないところで寄つてたかって、何の騒ぎよ？』

『そ、それは、だから……た、頼み』とがあったからよ！ 別に何もしちゃいないわ！』

『フン！ どうせあ・す・ま・君、の』とでしょ？！ 荒井さんは単なる幼馴染つて言つてるじゃない！ そんなに気になるなら、直接東君にでも聞けばあ？』

『そ、そんなのあなた達に関係ないでしょ…… もづ、行こう……』

金魚のフンのようにゾロゾロと退散していく、錦戸お姉さま率いる女バス軍団。私は一気に気が抜け、その場でフラついてしまった。

『ちょっと、大丈夫、荒井さん？！』

バレー部の先輩達は慌てて私の腕を支えてくれた。私は違和感を覚えつつも、脳内で密かにリングコールをしたことを心中で詫びつつ、助けてくれた平畠先輩達に深々と頭を下げてお礼を言った。違和感と言うのは、年が一つ違いの先輩はなんとなく先輩後輩というより、ライバル意識の方が近くてお互い近寄りがたいものがあつたのだが、今この場にいる先輩達からはそんな雰囲気は感じられなかつたからだ。

(……なんだ、平畠先輩達つて結構優しいんだな)

感動半分安心半分で、これ以上ないくらい低姿勢で礼を述べ続けながらこの場を退散しようとしたら、平畠先輩にガシリと腕を掴まれた。

『ちょっと、待つた！』

『へ？』

『あのや。荒井さんつて、実際のところ、東君とビリの？』

『え……』

『あれだよね、ただの幼馴染なだけ、なんだよね？』

『……』

『東君って、スポーツ何やつてるの？……サッカーやらないのかな？』

『あの』

『ん、もう、荒井さんつたらー。全部言わせないでよ！　あ！　そつそつ、とりあえずこれ、お願ひできるかな？』

そつ言いながら握られたものは、未使用的仮ネーム。

(……ま、所詮そんなもんだよね……)

アマゾネス先輩に対して勝手に期待したのはこっちで、相手に非はない。むしろ勘違いして感動したほうが悪い。いや、都合よく助けが通りかかるなどと、偶然などと、世の中そんなに甘くないといふことが分かつただけでもヨシと、納得しなければならないこともあるのだ、人生といつやつは。

* * *

そんなこんなで、このような呼び出しが5度目ともなつてくると人間嫌でも慣れる。いつもの通り「いや、東先輩ヤツとはただの知り合いです、まったくもつて関係ないですから」アピールをすれば、相手は言いたいこと言って、最後に「東君に近付くな」か、「情報お願い！」か、「これ渡しておいて」と手紙や仮ネームやプレゼントを無理矢理押し付け、勝手に撤収するのである。

3年女子のコンコンと続きそうな説教を神妙な面持ちで聞く振りをしたが、今回はそういうわけにはいかなかつた。心中は「もうすぐ予鈴が鳴る、こつから教室まで遠いし、しかも次の時間は英語の一之瀬いちのせだよ」とイライラが募るばかり。早くもソワソワし出した。「恐怖のGO GOランニング」でお馴染のバトミントン部顧問、今年も2年英語担当になつた一之瀬先生は、マラソンの時だけ巻き舌発音で生徒を煽るかと思ひきや、授業でも思う存分生徒に対して恐怖心を煽つていた。本鈴が鳴つた瞬間に席についていなかつた者に

は、その場で厳しい御仕置が待つているのだ。

「……って、アナタまた聞いてないでしょ、荒井さん。もしかして私達の事ナメてるつ？！」

ハッとした。

顔を上げると、先程よりもさらにキツイ歪んだ顔。ヤバイ！ と思つた時は、もう遅かつた。

(あわわわ、こりやマズイ！)

怒鳴られるか、叩かれるか……と覚悟したその時。

丁度私の頭上にある、体育館一階の放送室に当たる窓ガラスと乱暴に開いた

窓から素行のよろしくない強面の顔と金髪を覗かせ、追い打ちを掛けるように低い不機嫌な声が女生徒達に襲いかかる。

「……さつきから、ピーチクパーティク、つるつせえんだよつ、バス共ー！」

幼馴染といつも、ただの知り合ひへ中編

ハアハア……

目的地である自分の教室の前で立ち止まり、全力で駆けて来たせいで乱れた息を整えた。

「2年1組」

よりもよつて、新しい教室は体育館から一番遠くてボロい校舎の端だった。唯一救いだつたのが一階の教室だということだが、それも今この状況では意味がない。何故なら廊下にはもう誰もおらず、この時点で予鈴はあるか、本鈴も鳴り終わつて授業が始まっていたからだ。僅かに一之瀬の声と2年1組の生徒の声が聞こえた。

一之瀬のいつものよつと良すぎる発音で、

“Be quiet! Please open your teeth book!”

という声が響いている。

「……最近、本当にツイていない……」

思わず小さい声で呟いてしまった。

(春の嵐と共にやつてきた「神風」と再会してから……つて、までよ。いや、中学に入つて「類人猿」に会つてから……、いやいや、それ以前の小学生の時も！－！)

そこまで考えたところで無理矢理思考を中断させた。よつするに生まれて物心ついてから、ツイテないことだけだったことに気付

いてしまったからだ。どうやら今に始まつたことじやないことを悟り、落ち込むのは後にして、とりあえず田の前の災難を突破しようとした。ここでウジウジしたといひで、時間が無駄に過ぎゆくだけで、一向に解決せず事態は悪くなる一方だ。

(けど、教室の中には……ハア)

頭の中をチラつく数名の顔。その顔達を思い出して、最大の溜息を吐いた。

(ああ、どこか遠くへ行きたい……それも私のことを知らない、最果ての『網走』辺りに……いやいや、この際北方領土でもシベリアでも!!)

ありつたけの願いを込めて祈つたがやめた。大体そんなこと叶う筈もない。

グッと腕に力を入れて、覚悟したように思いつきり! ……ではなくて、そつとクラスの後ろの扉を開けた。静かに開けたつもりなのに、建てつけが悪いのか、「カラカラ、ガコツ」と大きい音を立てて開く引き戸。

その音に気付いて一斉にこちらを見る、2年1組の生徒達と一緒に瀬先生。

「……あ、あの、遅れて、スミマセン……

扉の前で小さこ声で謝罪する私を見て、一之瀬は眉をひそめた。

「本鈴はとつぐに鳴つてゐる?」

「ハ、ハイ、スミマセン……

「名前は?」

「あ、荒井です」

“NO, NO! English!!”

「……マ、 “My name is Michiko Ar
a-i-”」

扉を閉めるや否や、その場で慌てて姿勢を正して答えた。この時点で教室内に忍び笑いが響き渡ったが、一之瀬の御仕置タイムが既に始まっているので、ここは無視して大人しく従つた。一之瀬先生は本鈴が鳴った時点で席に座つてないと、英語での受け答えを要求し、しかも発音が良くないとしつこく繰り返しの刑に処するのだ。恥ずかしいなどと書いて黙つていたり、適当に流していると、授業中立ちっぱなしの刑が追加される。

「オーケー、ミス・アライ！ 」ううう遅れた時、英語でなんて言うかわかるか？」

「あ……、 “I’m sorry I’m late.”」「グッ！ その通りだ。次回から気をつけろよ？ ま、“Better late than never.”だ。ミス・アライ、“Can you put this sentence into Japanese? (日本語に訳せるか?)”

「……サ、サボるよりは遅れた方がまだマシ……」

「エクセレント！！ おお？！ よくわかつたな、グッジョブ！」

「ミス・アライ」

“Take your seat (席に着け) !!”

どうやら一之瀬の期待に応えたようで、胸を撫で下ろした。

(……ハハ、やっぱ安西先生のところで留つてて正解だよ。先生、ありがとうー！)

心の中でお礼を言いながら、そそくさと席の一番後ろを通る、の

だが……。たちまち生徒達の声でザワザワとする教室。その中から、

「ほーい、やつぱつ……」

「英語翻つて」

「幼馴染だつて」

「あずま」

といつ囁き声が耳に飛び込み、好奇心と殺氣の混じつた視線が突き刺さつていると気が付いた時は、非常にマズい。力をやつたと悟つた後だった。

(シマつた……。「わかりません」と言つておくんだつた〜！) 後の祭りである。

どうやら今の受け答えは、最近自分に降りかかっている事態を煽り更にややこしくさせたらしい。私は「……はどこ? わたしはだれ?」と全ての記憶を無くしたかのように、教室に充満する異様な空気に気付かないフリをしながら、窓側から2列目の一一番前である自分の席に向かって通路を歩いた。

ポンポン

叩かれたのは、左腕。

なるべくそちらを見たくないのだが、無視するわけにはいかぬ。チラリと見れば、腕を叩いた主、ベリー・ショートで好奇心旺盛な目をクリクリさせた女の子が「すー!」と口真似だけした。なんとか引き攣り笑いをしながら視線を上げると、彼女の隣にいる、ある男と目があった。瞬時に熱くなる私の頬。

男はだらしなく学ランのボタンをとめず全開にしており、カラーをつけている。しかもガクランの下はカツターシャツではなくて、校則違反である派手な真っ赤なTシャツだった。中1までは、いや、進級して始業式までは、好奇心旺盛なヤンチャな目をした悪戯小僧

そのものだつたが、ここ最近子供っぽさが微塵も感じられない程、冷ややかな目つきをしていた。

彼は鋭い眼光で睨んだ後、その五分刈りより少し伸びたオサルさんみたいな頭をフイッと窓の方に視線を移した。……まるで、おめえの顔なんぞ見たくねえ、といつよに。

「……」

私は我に返り、負けじとスッと黒板の方を向きながら、一番前の自分の席に向かった。

机の中から英語の教科書やらノートを出して、鉛筆を握る。その握る手は僅かに震えているが、気にしないことにした。そもそもベリーショートの彼女の隣にいる男とは、始業式の翌日から一度も口をきいてない。それは、なるべく平和に生きる為には、重要不可欠なことだ。それよりも、同じ教室の遠くの方に座っている『猫なで声』の彼女からの厳しい視線が緩くなつたことに逆に感謝しなければならない。もともとこれが正しい関係だし。

(……だからって、あからさまに無視、か)

もう中学1年の時のように、振り向けばすぐ後ろに居るわけではない。冷たく感じる視線も、とりあえず今は3席分の距離が開いたおかげで、居心地悪くならずに済んだ。

気を取り直し、ノートに下敷きを挟もうと手に取ると、その下敷きには私を慰めるように微笑んでいる海外アクターの雑誌の切り抜きが挟まっていた。彼らの金髪は、2人の男性を嫌でも思い起こさせた。

一人は現在山野中の女子の心を独り占めし、安西家に居候している3年の東雄臣。
あずまゆうじん

彼の少し長いブラウンの髪は、日差しを当てるときの金髪のように見える。その100%ナチュラルな色は校則違反はおろか、生徒も先

生をも虜にした。もちろん、顔も体格もしげさも頭脳も、だ。特に英語。彼のネイティブ並みの発音と会話力はこの頃の中学生には脅威と言つていい。そんな雄臣、全てが神の恩恵を受けているかの如く……なのだが、私にとっては絶対的に迷惑な存在になりつつあった。

もう一人は、ある意味雄臣とは対極の立場にいるだろう。

私の腕を叩いたベリーショートの彼女の隣に座つてゐる、冷たい目をした男の親友だ。不良にもかかわらず、ここ数年賑わせている「リーベンツ^{ビーバップ}&剃り込み」や「PUNCH^{アイバー}」でもない、忘れ去られた兄と同じく短髪だった。しかし髪を不自然なくらい真っキンキンに染めているので、まつとうな道を大幅に逸れてゐる。もしや兄弟揃つて同じ床屋なのだろうか。これで身内がもう一人青く染めていたら信号機だなどどうでもいいことを思つてしまい、慌ててバカな考えを振り払つた。ともかくそんな彼は、2年になつても山野中の「裏番」として学校一の問題児の名を独り占めしている。

教科書を読む一之瀬の良すぎる発音を聞き流しながら、頭の中は別な映像が再生されていた。それはほんの十数分前の体育館裏の出来事。

この授業に完全に遅れる原因になつた、「桂龍太郎^{かつらりょううたろう}」との短いやり取りだつた。

* * * * *

『……さつきから、ピーチクパーティク、つるつせえんだよつ、バス共！』

ギャアギャア騒いでんじやねえ！ 寝れねえんだよ！

山野中裏番の怒声が体育館裏を突き抜けた。

蜘蛛の子が散る様に逃げて行った、3年のオネエ様方。予想外の演出に私は啞然とし、マヌケ面のまま首を逸らし頭上をポカーンと見上げていた。窓枠に手を掛け見下ろしている、悪役商会のような迫力あるその顔と金髪の頭を。

逃げ遅れたと思った時には、既に3年の先輩達の姿はない。残るバスはこの場に一人。

……ということは？

（え？　え？　ももももしかしてこの落とし前、私がしなきゃなんのつ？！）

3年オネエ様の集団リンチなど足元に及ばないような絶対絶命のピンチに、頭が真っ白になつた。裏番の快適な睡眠を邪魔したのは大変申し訳ないとは思うが、決して私が望んでやつたことではない。私はハハと無理矢理笑い、顔を仰いだまま体育館の壁伝いに校舎の方へ移動した。

ヒュツ！！

『　\$　×@%&つ？！』

気が付けば、大きくて黒い物体が頭上を舞い、目の前に着地している。青い空をバックにしながら、彼のヤンキー使用の極太ズボン（またの名をボンタン）がムササビのように膨らんだ光景は、最近見た怖い映像の中でもベスト3に入るだろう。

（にににに、二階から飛び降りたあああつーー）

窓枠から顔を出していた筈が、いつのまにか裏番は強面の恐ろしいその顔を、ドドンと目の前に近付けていた。しかもほぼ眉毛ナックスイングの睨みを利かせた鋭い眼差しをギラギラさせながら。（オオオオ、オーマイガツーー）

あり得ない出来事続きに驚愕して声も出ず、ショックの為か力が抜けたその場に座りこんでしまった。

幼馴染といつも、ただの知り合いへ後編

『……おこおい、泣くんじゃねえよ。別にとつて食いやしねえつづの』

桂龍太郎はショックのあまり地面にへたり込んだ私に会わせるよう、田の前でヤンキー座りをした。睨みながらも少し困った顔をしている。意外なことにその顔は涙目で謝罪する「蝶子さん」に少し似ていた。親戚だから似てるのは当たり前なのだが、……なんかこう、複雑だ。でもそのおかげで少し余裕を取り戻し、あらためて自分が泣いていることに気が付いた。ハッと我に返り、慌ててポケットからハンカチを出して涙をぬぐつ。

(とととととりあえず、睡眠の邪魔をしたことを探びる……べきだよね?)

そうだ、今後憂いを残さない為にも、今なすべき最も重要なことは「謝罪」だ。貴子の事を思うと口惜しいが、正直今はそんなことを言つてられない。

(貴子、「ゴメンね……私はまだ生きていきたいのー。」)

『あ、ああああの……』

『ああ？！』

『ヒツ！（こわつー）ヒツ、ヒツク……そそそその、ですね』

『あんだけ？！』

『スススミマセンつ！　かかかか快適な睡眠を邪魔して申し訳ありませんでしたあつー』

『……』

ガバッと上半身を伏せ完全土下座の謝罪に、桂龍太郎はしばらく黙っていたが、そのうち大きな溜息をついた。そつと顔を上げると、

彼はヤンキー座りのままで、三年の女子が退散した方を見ながら金髪頭の後頭部をボリボリ搔いている。

『オマエセ』

『ハ、ハイ！』

『見ると無性にムカつくんだよな』

『えつ？！』

『イライラするってゆーか』

『そそそそんな！』

『……こんな鈍くせい奴のどつこがいーのか……ぜんつぜん、わっかんねえんだよなあ』

『へ？』

『なーんか、歯がゆいしょお』

『！……まままさか、ワタクシのせいで、頭が痒、い？』

『はあつ？……ちげーょつ！頭搔いてるのはそういう意味じやねえ！…』

『ヒイツ！ス、スンマセン！…』

『いちいちビクビクすんな！……つたく、これだから呼び出し食らうんだつづーの。大体さ、ボイン、ここに呼びだされるの、三回目だろ？いい加減に学習しろやつ？！毎回毎回人が寝てるときにはヤー、ヤー騒ぎやがつて……』

本当に五回です、オヤジン！

……とは言えない。しかも何気に「オマエ」から「ボイン」になつてゐぞと訂正したいところだが、とりあえず事態をややこしくしない方が好ましいので、ここにはグッと堪える。桂龍太郎は膝に手をついて「よつじらせ」と立ち上がった。その時無情にも予鈴が体育館裏に響き渡つた。

(ゲゲつ、マズい！ 本鈴まで時間が……)

ここはダッシュで逃げ切るべきか。それとももう一度涙でも鼻水

でも流してボンタンに縋りつくより謝り、さつさと解放してもらいうべきか。

プライドもなにもあつたもんぢやないが、この際贅沢は言つてられない。前者は難しそうだし後々呼び出されてもシャレにならないので、後者でいこう！ と決意して彼を見上げたら、以外にも桂龍太郎は私の腕を取つてグイッと引き上げた。

『――』

『きつたねーな。泥、ついてるぞ』

『ハハハイ！ ももも申し訳ありません！』

いつたい誰のせいやつ――

……ではなく。非常に心温まる忠告に慌てて姿勢を正し、スカートの泥を手早く払つた。意外な心遣いにほんの少しだけ感動したにも関わらず、心中では「遠いお空へ飛んでいけ」と恩知らずな言葉を吐く、荒井美千子。動かない一人の間に不自然な沈黙が流れる。しかも裏番は動くどころか、腕を組んだままこちらをジッと睨んだままだつた。おかげで私の中の恐怖計測器の針がマックスをふり切つてしまい、測定不可能な状態だ。チビリそつなのを我慢していると、裏番はメンチを切つたまま……いやいや、双眸を細めながら口を開いた。

『ボインセ、実際あの三年と、どうなのよ？』

『え？』

『噂の東雄臣つて奴だよ』

『……』

余計な御世話だ、と思った。

それに彼との関係を説明するのは、はつきり言つて難しい。簡潔に答えられるのは「親同士が知り合いで、幼馴染という関係だつた」

『……だけだ。むしろ仲が悪かったと言つても、今の雄臣の態度じや、それを信じてくれる筈もないし、なんで？』と詳しく根掘り葉掘り聞かれれば、その背後にある事情も説明しなければならない。こんな複雑で個人的な事情、人に説明するのも億劫だし、大体説明する義理などない。それが例え三年のオネエ様方だろうが、裏番だろうが変わりはない。

唇を噛みしめたまま黙つていると、桂龍太郎はハツと鼻で笑い、「ま、オレにやあ、どうでもいいこいつた」と吐き捨てた。

『氣があるなら別にいいけどよお、ないならビシツと態度で示せよ。じゃねえと男はつけあがるぜ？』

『氣がある…………って、とととんでもない！……』

『それにしちゃあ、始業式の日、アイツと一人で仲良く登校してたんだつて？』

『仲良くなつ？！』

『しかも教室までお迎えにきたらしいじゃねえか』

『お迎えつ？！』

『イチヤイチヤしながら校内をグルグルしてただろー』

『い、イチヤイチヤあつ？！』

『幼馴染にしちゃあ、随分ベタベタと慣れ慣れしかつたよなー』

『ゴツゴツ誤解であります！』た、ただの知り合いです！……』

『ほー、『嫁に来い』とまで言われた、知り合いねー』

『ほああつ？！なななんんでつ？！』

『言つてたそعداً. 東先輩、ご本人様が』

『ヒヨヒーツつ！』

私はビックリして飛び上がった。

確かに、始業式の日は一人で登校した。でもそれは初日だから一緒に行こうと誘われたからで、深い意味はない。しかも我が家から学校までは至近距離なので、一緒にいた時間はせいぜい数分だ。

そもそもこんなに近いのに、一緒に行く必要性があったのかどうか疑問だ。こんなにややこしくなるとわかつていれば、絶対ドタキャンを決行していた。それに始業式の後、雄臣がわざわざ私の教室に来たのも、こつちは予想外の出来事だったのだ。

お色気垂れ流しの雄臣。

これ以上ないぐらい焦りながら彼を廊下へ引っ張り出し、「なんなんで来るの？！」と怒りを押し隠して問いただせば、教室の位置に慣れる為だとふざけた答えが返ってくる始末。決つしてお迎えなどではない。

『ついでに学校案内してくれないか？
てくれると助かるんだけどな』

絶対効果をわかつてやつてるだろ……。という完璧なスマイルで返つてきた時にやあ、卒倒しそうになつた。そんなことクラスメートに聞けよ！ と言つ前に、そのまま引きずられるように一緒に校内を軽く見て回つた学校案内。それも決して二人だけじゃない。雄臣のフェロモンに引きつけられるように友人達も続いてきて、気がつけば大所帯だつた。どうみてもあれはイチヤイチヤベタベタなどとは無縁だ。少なくとも私だけは。

『…………その様子だと、嫁はガセじやねえのか』

タ チヤンマン風に誤魔化してみた。

あぶないあぶない。一体私は裏番相手に何を熱く言い訳しようとしたのか。「好きな」と叫けびながら咄嗟に頭に思い浮かんだ顔がありえない人物だったので、途端に顔が熱くなり焦った。いや、裏番の顔を見て怒鳴つていたから、思わず田の前の男のダチの顔などを思い浮かべてしまつたのだ。

不細工な愛想笑いをしながら田を泳がせていると、「雄臣より、ねえ」と桂龍太郎は、あきれ半分からかい半分のような苦笑いをしながら肩を竦めた。

『なんでもないなら、そうハッキリ言えつづーの。だからややつこしいことになるんだよ』

『……』

私はガックリと頃垂れてしまつた。

(そうだけども……)

そんなことわかつていて。でもそれができれば苦労はしないのだ。それに毎回毎回何でもないと言つてゐるのに、全然話を聞いてないのは三年女子の方である。大体幼馴染と言えば全てが友好な関係とは限らないのに、何を誤解してゐるのか。私と雄臣の組み合わせではどう見ても釣り合わないことは火を見るよりあきらかではないか。私はすっかり気が抜けてしまい、目の前の男が全然無関係の裏番・桂龍太郎ということをすっかり忘れてしまつて、恨めしそうに見上げてしまつた。

『……あんだあ、その顔はつ？ 言いたいことがあんなら、ハッキリ言えやつ！』

『つ！ めめめ滅相もない！ 雄……いや、あ、東先輩とは本当になんでもないんですよ？』

『そんなこたあ俺に言つてもしょうがねえべやつ？！』

『そ、そつこスよねー!』

確かにそつである。こんなこと裏番に言つたところでなんの解決にもなりやしない。

(……それにして、雄臣め！…)

私の知らないところで彼は何を言いふらしているのか。怒りが沸々と湧きあがり、余計なことを言つたらしい雄臣が憎たらしくしようがなかつた。いくら私のことが気に入らないとは言え、このような嫌がらせはあまりに酷過ぎる。雄臣は私の平和な生活を、真綿で首を絞めるようにジワリジワリと崩壊させたいらしい。どうりでこんなに頻繁に呼び出しつづらのか原因はわかつたが、こんな生活に一年間耐えられるかと不安は募るばかりでハアとため息が出てしまつた。

『まあ、なるべくさうとケロリつけや。でないといつまでもトバツチリが来てしゃーねーんだわ』
『え……？ ト、トバッチリ？』
『つたく、外でも店でも暴れやがつて……機嫌が悪いつたらありやしねえ。おかげで蝶子が泣きだすしよ』
『……な、なぜ、蝶……子さん？』
『うるせえ！ 全部ボインがハッキリしねーからじやねーかつ…』
『ヒイツ！ そそそそんな！』
『ともかく！ 一度といいで騒ぐなつ、わかつたな？…』
『ううううう…』
『それからよ』
『え？』
『どうでもいいけど、本鈴鳴つただ』
『…』

今度こそ私は桂龍太郎を置いて、超ダッシュで自分の教室に向か

つ
た。

幼馴染といつよつ、ただの知り合いつゝ後編（後書き）

美千子、ほぼ子分と化してます。

最高で最悪のクラス？

カラカラカラ……ガコンッ！

「 「 「 「 「 キヤーッ…」 「 「 「 「

古く建てつけの悪い扉を開けると、乙女達の悲鳴が教室内にこだました。

開けた当人である私も驚いてその場で固まってしまったが、教室内にいる友人たちが私の姿を見て目を見開いた後に安堵のため息をつくと、じゅらもホツと息を吐いて扉を閉めなおした。

「……あ～びっくりした、『ニチ』か！ すつゞ～タイミングで入つてくるんだもん、驚いた～」

幸子女史は大袈裟に言つた後、机の上に顔を伏せた。そしてすぐには焦った様子で貴子と和子ちゃんに向き直ると再びふーっと息を吐く。

「さっすが！ 2人とも、10円玉から指離してないしぃ」

幸子女史が言つと、和子ちゃんと貴子は生真面目な顔で当然とうように頷いた。

「……ちょ、ちょっと、幸子ちゃん、その『ニチ』つてヤメテよ…。せつか騒ぎが治まつてゐるのに」

「まーいじやないのー、どうせ私達だけだし？ ウルサイ3年も

いないしね。それよりも今まさに東先輩のこと聞いててさあ？ そしたら、応えてもらつてる途中で荒井ちゃんが入つてくるんだもん」超ビックリした。

私の言葉に応えたのは、トリオのリーダーである奥住さんだつた。好奇心旺盛な目をクリクリしながら私を見てたけど、すぐに和子ちゃん達の手元の方に視線を移した。

「……やっぱ、来てるねよね。荒井ちゃんがこのタイミングで入つてくるあたり、信憑性大きいよ」

奥住さんのムードあるヒツソリとした言葉に全員ゴクリと唾を飲み込んだ後、机の上に乗つてゐる一枚の紙と10円玉、そして10円玉を抑えている2人の指を凝視した。私もさつきまで座つていた席にそつと腰かけ、紙に書かれていた鳥居やひらがな、「はい・い・いえ」の文字を目で追う。2人が押さえている十円玉は「み」の文字で止まっていた。

「な、何を聞いてたの？」 奥住さん

「『東先輩』の好きな人」

「……」

「……これさ、『みち』って言おうとしてたんじゃない？ だつて、だつて……10円玉が……」

そこで奥住さんが音を立てて席を立つと、全員再び悲鳴を上げた。私は一人冷静に、そんなアホなと溜息を吐いた。

* * *

気候がいい5月下旬の放課後。

本来ならば部活に勤しんでいる筈の時間帯であるが、珍しく雨が降りだしたので、野外での練習が中止になり、室内でトレーニングをした後早々解散となつた。こんなに部活が早く終わるのは、3年とバレー部顧問の若瀬が修学旅行で出払つてゐるからであり、2年の天下のお陰だ。すでにバレー部の後輩と2年のほととぎは下校していた。……私たちを除いて。

「ちゃんと紙、破つておかないとね」

貴子は今まで使つていた物騒な紙を音を立ててビリビリと破いている、「あ～怖かった」と咳きながら。

幸子女史は、答えを望む者に真実を導いてくれる……好奇心をそるようなイベントをやるキッカケとなつた、『とんねるず』の2人がポージングしている本を手に取つた。おもむろにカバーを外すと、裏表紙には貴子が破つてある紙に書かれたものと同じ絵図が描かれている。私も一緒になつてその裏表紙を覗き込んだ。

「奥住つて、『とんねるず』好きだつたんだ？　けどさ、カバーの裏にこからはちょっと怖いよね……」

「もうなんだよ、私も買った後、何気なく表紙を取つたら出て来てさ。ビックリして本落としちゃつたわ」

本の持ち主である奥住さんはそう言ひながら、使つていた10円を財布にしまおうとしたが、「そういえば……この10円つて、二日以内に使わないとマズイんだっけ？」と慌てて取り出した。

「あれ？　その日のうちにじゃないの？」

「私は3日以内だと思つたけど」

情報があやふやである。

まあ、この手のものは噂が噂を呼び、確かな情報もなければ信憑性も薄い。和子ちゃんが「一応今日中に使つたら?」とアドバイスをすると、奥住さんが「そうだね」と頷いた。

私は教室の空気がなんとなく籠つた感じで気持ち悪かったので、窓を開けに席を立つた。

今私達がいる教室は、学校の校舎の中でも一番端の古くて小さく、不気味な雰囲気が漂う2階建ての建物の中にある。一階に理科実験室と準備室、そして第二音楽室があるからかもしれない。ちなみに一階は教室が2クラスと生徒会が使用している教室があり、計6つしかなかつた。古いせいでどの扉も建てつけが悪く、窓を開けるのも苦労する。思いつきり力を込めて開けると「ピシャン!」と言つて窓が開き、湿気を含んだ空気が教室に入り込んできた。水を含んだ土の匂いがするのは、窓の下に花壇があるからだろう。すっかり晴れて夕日もでている空を眺めながら爽やかな空気を吸い後ろを振り向くと、バレー部の部室でもあるこの「2年1組」には、5人の女子バレー部員が本を覗きこみ、2人の生徒が談笑していた。

「それにしても、3年がいないつてすごい開放的だよね」。それも今日で終わりかあ

本から田を離し、伸びをしたのは奥住さんだつた。

彼女は引き続きバレー部の2年副部長を引き受け、噂好きの性格は相変わらずである。去年までは「尾島と荒井が怪しい!…」と豪語してたのに、2年に進級した途端「荒井と東先輩は怪しい!…」に変わつた。よつて彼女が振りまく噂の信憑性は、先程盛り上がつたイベント同様に薄い。2年に進級する時、どんな人とクラスが一緒になるかとドキドキしたが、2年1組の名簿の先頭に自分の名前を発見した後、すぐ近くに彼女の名前があつた時は喜んでいいのかどうか……ちょっとだけ不安になつたことは内緒だ。

「そつか、今日帰つてくるもんね、3年生。『東先輩』よつやく来週見れるじゃん！ ね、和子？ 『ミチ』？」

一いつマツとした顔で言つ幸子女史の言葉に、途端に顔を歪める私。何度訂正しても『ミチ』と呼び続ける彼女は、今はもう「東先輩」の大ファンだ。

始業式の日に「同じクラスで良かつたね」と奥住さん、光岡さんと手を取り合つて喜んでいたその時、雄臣がこの教室に来た。私が慌てて雄臣を廊下に引っ張りだして彼を無理矢理この場から撤収させようとしていたら、一番遠いクラスの筈なのに、目をハートにした10組の幸子女史が背後霊のように後ろに立つていたのだ。憐れにも「わ、私も一緒にお供させて下さい！」とフエロモンにやられた犠牲者第一号となり果て、屍状態となる。

「ええ？！ そ、そうだね」

話を振られた和子ちゃんの顔は真っ赤だった。

それは廊下から差し込む夕日に照らされて……というわけではない。第一この教室まで夕日は届いてない。和子ちゃんは途端にモジモジし出し、慌ててエチケットブラシを取り出して制服を撫でつけた。いつもは「男は年上の大人でなければならぬ！」という強気な発言をしていた和子ちゃんだが、雄臣の話題になると途端に大人しくなる。どうやら雄臣は和子ちゃんのアベレージを軽く超えたようだ。彼の前では借りてきた猫のように大人しくなり、拳動不審であった。

同じく始業式の日、廊下で奥住さんや幸子女史達を渋々雄臣に紹介してたところ、ホームルームが終わつて出てきた隣の2年2組の生徒達が全員固まつてこちらを見ていた。その塊りからスースと幽霊のようになってきた和子ちゃん。その後ろから貴子、加瀬さんが、幸子女史同様「雄臣フエロモン」に引き寄せられるように近づいて

来たのだ。その絵図らは、まるで美しい花に群がる昆虫のよつだつた。

普通じうじうシチュエーションの場合、男女逆のよつな氣もするが……。

「それにしてもミチコつたら、あんな『最終兵器』隠してるんだもの。初め見た時はビックリしちやつたよ」

貴子はپーっとワザとふくれながら、和子ちゃんに「ねー?」と同意を求めていた。和子ちゃんも顔を赤くさせたまま、腕を組み「ウンウン」と頷いている。

「イ、イヤ……だつて、実際2年も会つてなかつたし! すっかり忘れていたし! 親同士が知り合いつてだけだし! 大体雄…ああ東先輩と何にもないし!!」

私はいつものようにどもりながら慌てて弁解すると、私以外の昆虫……いや、女子七名が一斉に吹いた。

「ハイハイ、わかってるつて。『ただの知り合い』なんでしょう?『『ミチ』つて、東先輩のことになるといつとも力入れて否定するよねー。ちょっと東先輩可哀そつだよお。それに貴子も和子も、もう怒つてないつて、ね?』

奥住さんが全然信じてない表情をしながら肩を竦め、次に幸子女史は貴子と和子ちゃんに確認するように聞いた。貴子も「そうそう、怒つてないつて!」と膨れ顔を崩し、笑いを漏らした。

私は心底安堵しながら、雄臣との学校案内が終わった後の事を思い出した。

蕩けた顔をした七人が雄臣の後ろ姿を見送り、見えなくなつた途

端一瞬にして「鬼」に変わったときのこと。

最高で最悪のクラス？（後書き）

ミチコ達がやっていたのは「コツ つさん」です。（怖くてなんとなく伏せ字です、わざと小説上に名前を出すのも控えました。今でも巷の中学生さんや小学生さんはやるのかな？）確かにとんねるずの「ホルマリン漬け」という本の裏表紙にこの絵図が書かれていたと私は記憶しています。現在その本を手にすることが難しいので違つていたら、ゴメンなさい！！（一人）その際には訂正します。

最高で最悪のクラス？

私はまだ何人か残っていた和子ちゃん達のクラス・2年2組の教室に無理矢理連行され、「さあ、吐け、吐くんだ！！」と『なまはげ』達に詰め寄られた。

『あんなイイ男の存在を黙つていた、わるこにはおめえが？！』

机をバンバンと叩き、『デスクライトをかざされるが』とく、7対1の事情聴取が始まる。

『ちょっと、なんなの、あのお方は？！』

『どういう関係なの？！』

『なんで今まで教えてくれなかつたの？！』

『んで、どこまでいったの？！ A？ B？ 思い切つてCかつ？

！』

『『『『『オイつー』』』』』』』

最後の奥住さんの鼻息を荒くしながら言つたきわどい質問は置いておいて、それ以外の質問に納得いくまで応えるよう要求された。私はなるべく簡潔に、しかも嫌な「黒い過去」は触れないようになんだ、どこまでいったの？！ A？ B？ 思い切つてCかつ？

答えた。

あれは個人的なことだし、私の醜い影の部分を知られたくないなかつたし、それに勝手に過去の雄臣とのやりとりを言つ気にはなれなかつたのだ。第一信じるでもらえる可能性は限りなくゼロに近い。

私の説明にみんな半信半疑の様子だったが、必死こいて縋りつくと「わかつた、わかつた」と許してくれた。それでも貴子と和子ちゃんは「一言言つてくれればいいのにい！」友達でしょ？！』と、お怒りが暫く続いてしまったのだが。

私はシコンと落ち込む半面、彼女達が私と真剣に友達として接してくれていることに、本気で怒ってくれたことに感激してしまった。はにかんでいる私を見て、「ちよつと、いつたいどうしようがないなあ～」とお怒りを解いてくれたのだ。

けれど、「東先輩とヤマシイことは一切なし！」とこう言葉は全面に押し続けた。ただでさえ上級生からヤツカニを受けてるのに、友達まで信じてもらえないくなつたら元も子もない。

「それにしても荒井けやん、先輩からの呼び出し無くなつて、よかつたねえ？」

光岡さんが愛読書の『My Birthday』と云ひうる雑誌をペラペラめくらながら言つた。

「やっぱ、あんな裏番に『喝』入れられたら……ねえ？　あの男が教室にいるだけで怖いもん。ねえ、チイちゃん？」

「…………う、うん。いるといないとでは一〇組の雰囲気全然違つんだよ……。よく!!ちやん、耐えられたね、スゴイ」

「あんな裏番」と一緒にクラスである幸子女史とチイちゃんは、お互い顔を見合わせて氣の毒そうな視線でこちらを見ると、私はあの日の事を思い出しづるると震えた。

* * *

5回目の呼び出しを受けている最中に、怒鳴り散らしながら登場した、桂龍太郎。

それ以来3年女子からの体育館裏への呼び出しがピタリと止んだのだが、ありがたくない噂がその日の放課後に山野中を駆け抜ける。

『裏番の次なるコレ（小指）は、荒井美千子らしい』

史上最悪のピンチである。

一体誰が本鈴間近の時間がねえ時に、体育館裏などを呑気に見ていやがつたのか。

私が泣きながら裏番に土下座して浮氣していたことを謝罪していだとか、裏番は荒井の腕をねじり上げながら、次やつたら外国へ売り飛ばしてやると睨んでいたとか……。

合つてるんだが間違つているんだか、肝心なところが非常に歪んでいる事実が流れたのだ。

どうしたら説教以外なものでもないあの時の会話が、いきなり「カレカノ」の修羅場の現場になつてしまふのか。

これには私も「ムンクの叫び」のよつになつた。雄臣の次は裏番……つくづく荒井美千子も不幸な女である。けれどもこの噂はすぐ下火になつた。素行の悪い3年男子の先輩達が、ひやかし半分で桂龍太郎に真実を問い合わせたところ、

『あんな鈍くさくて地味な女、死んでもお断りだ！ 今度そんなふざけた事を言つた奴はその場で地獄を見せてやるぜっ、夜露死苦！』

『！』

……というような内容を、殺氣を伴いながら思いつきり親指を下げて宣言してくれたおかげである。オマケに裏番は、興味本位で騒ぐ生徒達に熱光線デビルビームもお見舞いしてくれた。

『もしかして私に対しても失礼なことを言つてやしませんかね？』

的な桂龍太郎の発言には、噂を即効沈下させた優れた手腕に免じて大目に見てやることにした。

が、実際は腸が煮えくり返りそうだった。誰が好き好んであんなデビマンみたいな男と噂にならなければならないのか。それこそ死んだつてお断りだ。人の愛を知り、その優しさに目覚め、正義のヒーロー並みに更生してから出直してこい！ と言いたい。

噂の放課後、少し機嫌が悪かった貴子の態度も次の日には軟化し、逆に私の評判が「鈍くさくて地味な女」に成り下がった事を怒つてくれた。

……なんとなくわだかまりは残るが、結果オーライである。

それでも貴子には裏番との会話は事細かに説明しておいた。「そ、そんなのどうでもいいしつ？！」と言つていたが……非常に大事なことだ、……うん。

* * *

「あ、あのときは本当ヤバくて……」「殺されるかと……」「

私は震えを抑えるように机に手をついて俯いた。私が本気で怯えている姿を見た乙女達は、貴子以外ゴクリと再び息を飲んだ。貴子は「もう大袈裟だよ、あんな恐怖くないって！？」と怒つてはいるが……あの恐怖はその場にいた者でないとわからないだろう。

「だつ、大丈夫！ 今、荒井ちゃんの星座見てあげるから！ ええええーっと、……座だよね？！ 今年の運勢は？ 「前半は……荒れた海の上に漂つ子船のように……浮き沈みが激しく……翻弄され非常に……苦しみ……ま……す」 ……つて「」

光岡さんは急いで愛読書を捲り今年の運気を見ててくれたが、「丈夫！」と豪語した割にはあまりにイタイ内容に段々声が小さくなつていく。

シーンとした教室には、それを黙つて聞くことしかできない乙女達六名と翻弄されまくっている子船が一艘。

「……こんなの占い占い、大丈夫大丈夫！ これから絶対運気上がるつて！ 続きあるし？！ ……えつとね、『苦しみますが、後半は穏やかになり嬉しいことも重なるでしょう。人によつては、人生を委ねられる大きい船のような存在の人と接近できます。前半の苦しさに打ちひしがれず、諦めないで努力していきましょう！』だって！ ほら、すごいよ、良かつたねえ？！ エーとそれからなになに？ 特に異性関係ではモテモテ期が到来しますが、……意中以外の人に甘い顔は現金です……キッパリとした態度をしなければ争いことが大きくなり……取り返しのつかない事態となる……可能性が 大 で す」

微妙なモテモテ期が来ている、顔面蒼白のいたいけな女子中学生にトドメを刺す驚異の占い雑誌、「My Birthday」。

構手がキレイだからあんまり必要ないよね？？」

最後の最後でフォローらしきことができてあからさまにホツとしている光岡さんの褒め言葉は置いといて。私は飢えてくるライオンが獲物に飛びつぐが如く自分の席に戻り、ノートを開いてラッキーを書き出した。

「ええええーと、『手のお手入れ』だよね？！ そんぞれに『湖、公園、バンドエイド、ハチマキ、手袋、数字の5、星』ひとつ！」

全員の憐れみの視線を一身に受けながら、「」寧に復唱し真剣に書いていると、奥住さんが「あつ！」といながら、ポンッと拳を掌に打った。

「『湖』？！ ちょっと、湖と言えどもあ、早速キーワードが御登場じやないの？ だつて来週私達、湖にいるじやん？」

「」マコと笑う奥住さん、「」金剛ついたるよつて「あつ！」と声を揃えた。

私も思い出した。

来週、確かに私達は『湖』にいる。2年の遠足の為に。

最高で最悪のクラス？（後書き）

「デビルマンの歌、覚えてらっしゃいますか？」この歌を水木一郎アニメや佐々木功並みに感情こめて歌える男の人には本気でトキメキを感じる菩提樹です。それと、「My Birthday」懐かしいです。ちなみに本当にあった古い雑誌ですよ？現在は休刊中です。あ、もちろん文中の占いの内容はフィクションです、「My Birth day」に罪はありません。」了承くださいませ。m() m

最高で最悪のクラス？

新年度に入つて初めて迎える学年行事が「遠足」である、我が山野中。

1年はバスで隣県の海へ。3年は2泊3日の「京都・奈良へ修学旅行」。そして2年は、1泊2日の「富士五湖へキャンプ＆レクリエーション」と決まっていた。生徒達の間では「寺ばつか見学する修学旅行より数段マシ」と毎年好評な、この2年の遠足。中間考査も終わった2年生の間では、この話題で持ちきりだった。

「これをキッカケに男女が急接近しちゃいますか？！」

……な、「ドキドキお泊り遠足」。「桃色ハーピング」が起きそうな予感に心が浮つく生徒達。特に女子。何故なら、山野中の伝説の一つに、この遠足を機会に恋が成就する可能性が高いと噂されているからである。

それに各クラスの保体の時間などは、キャンプ初日に催される「クラス対抗大縄跳び大会」の練習で盛り上がっていた。

キャンプの醍醐味である「自主炊事・カレー作り」に並んで催されるメインイベントで燃えるぜつ！！

……な、「クラス対抗大縄跳び大会」。これには並々ならぬ意欲を注いでいる生徒達。特に男子。何故なら、優勝したクラスには、なんとカレーの肉が3割増しになるからである。

この時点での年頃の男子と女子の成長度の違いが垣間見えるが、多分気のせいだろう。

「キャンプといえばわあ。そつちの2組、今日の縄跳びの練習ビーツ
だつた？」

奥住さんがキラツと田を輝かせながら聞くと、和子ちゃんも怪しい光を田に湛え奥住さんを見た。

「……そういう組はどうなの？ 全員の息がピッタリと合つてい
るのかしら？」

奥住さんと和子ちゃんは腕を組み、「フフフ」 と不敵な笑みを
浮かべながらお互い牽制している。

この会話から「桃色ハブニング」より「カレーの肉3割増し」に
傾いているように見えるが、絶対氣のせいだろ？ ……たぶん。

「Jリーグは運動神經バツチリなのが揃っているからね。多分そちら
さんには負けないわよ？」

「あ～ら、どうかしら？ そりや男子限定の話じゃなくって？ 要
は女子の部で勝てばいいのよ。それに男子なんかに頼つていたら、
あの尾島^{バガ}、絶対女子にまで肉を回さないでしようねえ？」

火花を散らす2人に、まあまあと言ひながら宥めたのは幸子女史
だった。

「2人とも落ち着きなよお！ ま、残念だけど、男子の部は1組で
決まりだね、多分。ちょっとすごいのが揃いすぎだもんさ。なんて
つたつて野生猿を筆頭に運動部のホープが集中しそぎ

ねえ？ と幸子女史が私に向かつて同意を求めるとき、私は動搖を
隠すように曖昧に笑った。

「本当、1組ちよつと揃いすぎだね。一体何を基準に選んだのかな？他のクラスの女子からもブーイング上がってたよ、『絶対1組が良かつた』って。私には気持ちが全然わからないけど」

騒がしい男子が苦手という加瀬さんは厭された様子で肩を竦める
と、奥住さんは「いや、そうは言つてもねえ？」とニヤニヤしながら答えた。それを見てあからさまに眉根を寄せたのは和子ちゃんと貴子だ。

「加瀬ちゃんの言つ通り！ 女子全員眼が腐ってるんじゃない？
どこをどうすれば『1組が良かつた』になるのかね？ あんな口ク
でもない尾島バカがいるクラス、どうこがいいのか全然わかんないよ。
『史上最高のクラス』って言つけど、私にとつちや『史上最悪のク
ラス』だわ」

「それ、私も同感」

「私も」

2人に続いて迷わず即答し、溜息を漏らしてしまった私。

全員一斉にこちらを見た。なんとも言えない表情をしている顔から視線を逸らし再び深い溜息を吐く。和子ちゃんと貴子が気の毒そ
うな顔をしながらこちらに寄ってきて、そつと肩を抱いてくれた。

「…………やん元氣出して？ 1組じゃなくて、2組だったらよ
かったのにね。あんな連中と一緒にだなんて、本当に氣の毒だよ」「
狼の群れに生息する羊みたいだもんねえ。美千子、辛くなつたら、
いつでも2組においてね？」

「…………、あ、ありがと……和子ちゃん、貴子！ 多分遠足
の時即効行くかも」

「なんなら一〇組においでよ』『チ』……『裏番』がいるけど、チ
イちゃんもいるし、ね？」

「やうそ、幸子ちゃんと一人で待ってるから」

「さ、幸子ちゃん、チイちゃん……うう、あ、ありがたいけど、
気持ちだけ受け取つておく、かも……」

半べそ搔きながらヒシツと抱きあつら人に、歪んだ顔でツツコミ
を入れるのは奥住さん。

「ちょっと、ちょっと… 荒井ちゃん、そりゃないよ？！ 私達が
いるじやん！ そりやあさあ、尾島にまわりついてる原口と、田
宮君と佐藤君にベツタリな成田耀子は相変わらず小ウルサくて荒井
ちゃんを敵視してるし？ その尾島は荒井ちゃんを完全無視だし？
おまけに『口クでもないんジャー』を中心に男子は騒がしくて授
業中超迷惑だし？ …… つて確かに口クなクラスじゃないな」

頼みの綱の奥住さんにまでそんなことを言われ、私は顔を歪ませ
てガバッと机にうつぶせた。本気で涙が出そうな私を慌てて宥める
和子ちゃん達。慰めてくれるのは非常にありがたいが、厳しい現実
はどうあがいても変えられない。

そう。2年に進級した私を待つていのは、地獄だった。

新クラス名簿の中に尾島の名前を見かけた時、ガン！ つと/or
衝撃を全身に受けた。漫画なら二トンの錘が頭上に落ちてくるベタ
な展開だ。その前までは何を血迷ったのか、「寂しいかな」なん
て思っていたのに。あれは単なる勘違いだったのだろう。その証拠
に始業式の朝一番に類人猿と顔を合わせた時、ニヤリと例の悪魔顔
で微笑まれた時、意味もなく「人生終わった……」と思つたのだか
ら。

しかし、悪夢はそれで終わらなかつた。

最高で最悪のクラス？

史上最高のクラスと噂された、1組。しかし、私にとっては史上最悪なクラスとなつた。

本格的な氷河期は始業式の翌日からである。

突然尾島のいつもの調子でからかうような言葉が一切無くなつた。それは尾島が一晩で改心したというオチでもなんでもない。その証拠に他の女子には相変わらずいつもの調子だ。尾島は私限定で「声かけるんじゃねえ」と冷たい目で睨み、誰から見てもわかるほど避けるような無視攻撃になつたのだ。信じられないことに、始業式の翌日から一言も口を聞いていない。今でもだ。その尾島の態度が恐ろしい程クラス全員に浸透し、雄臣や桂龍太郎の件がさらに追い打ちを掛け、私の存在は好奇心と腫れものに障るような扱いで浮きまくつていた。それは同じクラスで頭は超がつくほどいいが、変人と呼ばれているオカツパメガネ&歯列矯正の「伏見かおり」^{ふしみ}、通称「ブキミちゃん」に次ぐ扱い困難な存在と化している。

雄臣のことで心に不安を抱えていた私にとって、2年のクラス編成はせめて無事に平稳な1年を過ごせるかどうかの大重要な要素だったのに……。

葛籠^{つづら}の蓋を開けたら金銀財宝ではなく魑魅魍魎の生き物が出てきてしまつたという現実。

1組の男子の名簿にバーンと書かれていた「尾島啓介」という名前に続き、その名簿をずっと下まで目で追えば、「後藤洋」「佐藤伸」「諭訪英行」「田宮俊平」そして「星野一幸」。

男子の名前を見て、一部「ドッキーン！」と心臓が高鳴つた私が、女子の名簿に「成田耀子」「原口美恵」の名を発見した時点

で、高鳴りを通り越し心肺停止した。

やつと自分の羽を使って世に飛び出そうと巣立つた幼い野鳥が、舞い上がった途端猟銃でズドンと容赦なく撃ち落とされた瞬間である。

禁獵区を犯した密猟者達に、「クラス編成ヲ見直サナイト、学校ヲ燃ヤス！」と放火魔も真っ青な予告文を学校へ送りつけようかと思つたくらいだ。例えプラス要素がとてもなくデカくとも、それにマイナスを掛ければどんな答えもマイナスになるのが自然の法則つてもんである。

(……くそあ……何が悲しくて10クラスもあるつていうのに、私がいる1組に「ロクでもないんジャー」のメンバーが4人も集中していく、天敵が2人もいなけりやならんのよつ！…)

転校したい、切実にそう思つた。

いや、佐藤君ましてや田富君に罪は無い。けど現在の尾島と仲がよろしいという時点で完全にアウトだ。よつて、いくら好きな相手だろうが、私に優しくしてくれただろうが、すでに過去の出来事。その証拠に彼らとは同じクラスになつてから一度も口をきいていい。

唯一救いだつたのが……幸子女史とチイちゃんには悪いが、小関明日香と桂龍太郎が一番遠い10組（それでも小リスはしそつちゅう遊びに来る）ということだけ。奥住さん、光岡さんが一緒のクラスだつたということだけ。

「元気だして、『ミチ』ーー例えクラスの中で『ミチ』が浮いていても、私達は絶対味方だよ！！」

「そうだよ！ 例え田宮君が、いや、クラスの男子全員が荒井ちゃんに対してもよそよそしくてもさ、荒井ちゃんには東先輩がいるじやん！ こうなつたらもう東先輩と付き合ひちゃえよー、笹谷ちゃん

と田下部先輩、荒井ちゃんと東先輩、いつそのことグループ交際なんてどうだつ？！ 山野中のモテ男2人、仲よさげだしねえ？」

卷之二十一

幸子女史の後に続いた奥住さんの無責任な発言に全員突つ込んだが、それ以上に確信をつくような疑問を投げてきたのは、光岡さんだった。

「……それでもさあ、奥住。あの尾島の態度は異常じやない？　どう見たつて普通じやないでしょ？　あ、でも逆に好かれても大変なことになる」と、間違いなしだけど

光岡さんは心配そうな不安そうな、どちらにしても浮かない顔をしながら言った。

「ん~せつやあせつだかどれ。廻島つて昔からあんなむごじやなかつたあ?」

奥住さんは別になんてことはないと首をかしげた後、すぐに田を見開き、さも今自分が考えついたことが正しいといつよにニヤリと笑い、頷きながら言った。

「ははあ……よつするにや、尾島は悔しいんだよ。だつてさ、今まで好き勝手いじくつてた文句の言わないお氣に入りのオモチャの、本当の持ち主が現れちゃつた訳だからや。しかも！ その持ち主は幼馴染と言ひ超強力な絆を引つ 提げた超絶完璧な男ときたもんだ！ これじゃあ面白くないの当然じやん？ 尾島の出る幕、全然ないもんねー。それこそ『尾島』じゃなくて『お邪魔』？ やつだあ、私つたら上手い！！」

.....

アクセルをめいっぱい踏み込み、暴走する奥住さん。

「今ならわかるよ、あんだけ荒井ちゃんが尾島の」となんでもない
つて否定し続けた理由。あれほどどのいい男がいたなら当然だわ。も
う、いいよ尾島なんてさ、ねー荒井ちゃん？ そのうちあの男も自
分の至らなさに気付いて大人になるさ！ そうやって大人の階段を
登る訳だよ！ ま、どう見たって今の尾島は階段を突き落とされた
つて感じだけどねっ！ やつだあ、私ったら何気に冴えてるう～」

和子ちゃんを遙かに凌ぐ大物がここにいた。

勝手に階段から突き落とした隣の席のお嬢さんは普段結構ヨロシクやつてゐるのに、本人がいなければいなで好き勝手なことを言つてゐる、何気に冴えた奥住さん。心中でそんな奥住さんを感心しつつ、「どうか、私は才モチャだったのか」と複雑な気持ちで一杯になつた。

「……でも、羨ましいな。やつらん」

ボソリと小さい声が聞こえた。

声の主は、よつやく一五〇センチになつた、小ちくて、元裏番お墨付きの可愛らしげ、お菓子作りの得意な女の子。

(……羨ましい？ なんで？ ビニが？ クラスで超浮きまくつて
るの?~)

「……え？ オ、オモチャにされてる」とが？」

「やつだあ『ミチ』！ 」いつも場合を、着用点、そこじやないでしょ？ しかも何気に『オモチャ』って、いかがわしいでしょ！」

幸子女史の意味深な顔とツツコニーに瞬きをするものの、意識はチイちゃんに向いていた。ここにいる乙女達全員が茅野陽菜美に注目する。

幸子女史が「ホラホラあ～、言っちゃえば？！」と言つと、チイちゃんの顔は真っ赤になりながら、はにかんだ、やわらかい笑顔になつた。

それは、貴子が口下部先輩を見るような、真美子が雄臣を見るような、まるで……恋している時の女の子の顔。

「私も、1組になりたかったんだよね」

突然の意味深な告白に、数人の乙女が奇声を上げ、チイちゃんに群がつた。歓声や悲鳴や笑い声が教室に響き渡る。

私は大きく目を見張り、呆然としてしまつた。

そんな私の横顔を、この雰囲気に不自然なほど冷静な顔で見ていた貴子。

その姿が目の端に映つていたが……この時の私は、彼女の視線に気が付く余裕がなかつた。

から騒ぎをする乙女たちの仲間にに入るまで、私は思つたよりも長い時間を要した。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～英語塾処安西家編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪、英語塾処安西家編

「今日はここまでにしましょ」

安西先生の言葉でホッと一息をつき、テキストから顔を上げた。
「学校の方の教科書はかなり進んだわね。美千子ちゃん、予習して
きてくれるから飲み込みが早くて助かるわあ」

先生からお褒めの言葉をもらい、私は少し頬を染めて「い、いえ、
そんな」と返した。

中学生から通い始めた、安西先生主催の英語塾。

月日というものは本当に早いもので、週一回の割合で先生のお宅
で個人レッスンを受けるようになつてから1年2カ月が過ぎた。

『海外へ出て金髪碧眼と結婚する！ そしてハーフの子を産む！…』

小さいころから秘めていた野望を成就するため、英語の成績をア
ップしようと決心した中学生に入る前の私。

中学の授業まで待てないと思った私は、母に頼んで暫く交流が滞
つていた安西先生にアポを取つてもらつた。多恵子小母さんのお葬
式以来、東一家と関係することは避けていたのだが、知識が無けり
や何処から手をつけていいかわからなかつた私には、背に腹は替え
られなかつたのだ。

（安西小母さんに勉強の事聞くだけだし、これぐらいはいいよね…

…）

電話でよかつたのに、わざわざ家に招待してくれた安西先生。久

し振りに先生の御宅にお邪魔した私は、懐かしさの為に鼻の奥がツーンとしてしまった。見慣れた箸のマンショングヤけに小さく、そして狭く見えた。それは私が少し大きくなつたせいなのだろう。

1年以上御無沙汰した私を安西先生は快く迎え入れてくれ、色々と相談に乗ってくれた。

オススメの英語の参考書や辞書、勉強方法などを事細かに説明してくれ、英語を勉強していくうえで最終的にどういった目標を持つていくのか……などを話し合つた。

もちろん、邪な野望はそのままバカ正直には言わず、『留学を考えている』という言葉で伏せたが。

それを聞いた安西先生は嬉しそうな顔でウンウンと頷いてくれた。多少後ろめたさが残つたものの、留学は最終目標に到達するための過程の中に入つていた項目だったので、間違つちゃいない！…と言ひ聞かせた。日本にいるだけでは外国人の方々と会えるチャンスは少ないし、ましてやリバー様クラスの上物は特に厳しい。外資系大企業に勤めている東小父さんクラスの人と出逢うにもそれなりの英語力が無ければ無理である。

『それなら美千子ちゃん、一生懸命勉強しなきゃね

』
『ハ、ハイ！』

『そうねえ……もしよければ、週一回くらい私のところに来ない？

実は私も主婦ばかり対象の英語塾……というよりも勉強会なんだけどね？ 中学生なんて教えるの初めてなんだけど、中学英語は基礎の基礎だから、一緒に勉強できればお互いのためになるし楽しいと思うの。もちろん学校の勉強だけでも、他の学習塾でも構わないけど……どお？ お試しつつ感じで、ね？ もっと英語を身近にするような勉強を一緒にやりましょうよ…』

当初は安西先生も私もそんなつもりは全くなかつたのに、いつのまにか先生はその案がお気に召したようだつた。私も飛び付きそうになつたが、咄嗟にある男の顔が浮かんだせいで、口から出そうになつた言葉を飲みこんだ。とりあえず両親に相談してからとこようとになつたのだが、結局安西先生のところに通うことになる。

結果は先生のおかげで英語の成績は絶好調。それに安西先生の勉強以外の外国の話は非常に興味をそられた。そのほか私の大好きな外国のアクターのことでもいに盛り上がつたりと、毎回楽しい時間過ごせた。それに外国の雰囲気が詰まつた安西先生の一室にいるだけでも、学校での鬱積が解消されたから。

安西一家が私達の街に一軒家を買い引っ越してくるまでは、休日に母が車で送り迎えてくれた。今は平日の夜に変更になり、自転車で通えるありがたい距離になつたといふのに。

非常にやつかいな問題が付いてくるとは、まったくもつて予想外であつたし、ましてや……自分が波乱万丈劇場を地で行くとは思つてもみなかつたのだった。

* * *

「来週からは教科書は読み上げだけにして、構文の暗記テストと文法を進めちゃおうつか。さつき言つた場所の構文、暗記してもらつていい?」

私はハイと言つて力強く頷いた。

最近の私は、益々英語に力を注いでいた。理由は簡単、淡い恋やささやかな青春を満喫するということをすっかり諦めたからだ。

クラスで……というより学校で浮きまくっている私に、相変わらず尾島率いる男子の態度は素つ気なかつた。その中には田富君や佐藤君の名前も入つてゐる。そもそも彼らは素つ気ないと言つより、私の存在すら眼中にも入つてない様子だ。オマケに天敵の成田耀子

と原口美恵、この二人大いに気が合ひうらしく、タッグを組んで尾島を中心としているグループにベッタリで、私を視界に入れさせないものだから余計に、だ。これではいくら田富君に恋心を募らせたところで、成就する可能性はゼロ……というより、嫌がられる可能性の方が大きい。別に好かれようとは思っていないが、嫌われるのはさすがに耐えられなかつたので、このまま静かに恋を終わらせようと決めた。

今の私に残されているのは、長年温め続けてきた「あの野望」だつた。

中学一年の時はなんだかんだありながらも楽しく過ごせたので、すっかり野望が薄れてしまつていていたのだが……ここにきて再確認、俄然やる気が漲ってきた。

ある意味ふつきれた私は、先生に積極的にアプローチを開始し、わからないことはすぐに先生に聞いた。本当は身近な友達に聞いたのだが、幸子女史は遠いし、クラス1の秀才はある「ブキミちゃん」こと「伏見かおり」。自分のことは棚にあげて、さすがに私も近寄り難い。だからといってこれ以上塾に通う余裕は我が家にはない。……約一名、勉強という点で非常に頼りになる男がいるが、ヤツだけは大金積まても遠慮したい。そうしたら、残る望みは先生しかないのである。とりあえず目標は普段の成績を上げることと、「ア・テスト」対策だ。

お陰で中間テストの結果は十分納得いくものだつた。英語はなんと満点で、その他の教科もぐんぐんと結果が伸びていた。下手したら「ブキミちゃん」に追いつく勢いである。勉強という点も、浮いているという点も。

ただ、彼女と私と決定的に違つ点は、彼女は見かけの不気味さから考えられないほど、ハッキリと物事を言うところだつた。それが教師をも怯ませる理にかなつた正論で、問答無用で痛いところを突いてくるという厄介なモノなのだ。

正真正銘正論正当を貫く、学級委員且つ生徒会役員を務めている

「ブキミちゃん」。

しかもそれだけではない。彼女のバツクに控えるのは、正真正銘権力がある家柄とステイタス。地元の大地主で伏見病院の娘である彼女。市会議員の祖父を持ち、親戚一同揃いもそろつて医者の家系。市の医師会の会長を筆頭に、大小問わず地元の大きい企業や名のある団体の理事には必ず「伏見」の名前ありといふ、伏見一族の本家の一人娘であった。この辺の大きい家は、十中八九「伏見」という表札が掲げてあり、この伏見家より大きい家を建ててはいけない、という暗黙の了解が漂つてゐるくらいだ。……それに、よくない噂もチラホラある。「893」のような風貌な方が伏見家に入りしているというブラックな噂だ。

これでは、さすがの天敵女子一人も1組男子も叶わない。それは尾島とて例外ではなかつた。

(……そつよ、留学するためには英語だけじゃダメよね。まずはいい高校へ行つて、いい大学に入らないと!)

私の野望に応えてくれた中間テストの結果は、少しだけ寂しい心を救つてくれた。

全ての鬱積は拭えなかつたけれども、教室では奥住さんや光岡さんがいるし、放課後になれば和子ちゃんや貴子がいたから、それで十分だつた。

……それに、唯一態度が変わらない男子がいた。星野君だ。

彼は私に話しかける時、よそよそしい態度はあるが、周囲に流れらず淡々として普通だつた。それは私に限つてではなく、「ブキミちゃん」を含めたクラス全員に対してそうだつたのだが。それでも、私にとつては十分すぎるほど嬉しいことだつた。

「ちょっと大変になるけど頑張りましょうね？ 気合入れてやつち

やこましょー！」

安西先生の言葉に現実に引き戻され、私はハツと先生の顔を見た。先生は一ヶコリとした笑顔で頷きながらテキストを片づけ始める。私も慌てて広げていた教科書やノートを閉じて勉強道具をカバンにしまい込んだ。

トントン。

部屋のドアが叩かれたので、先生が「ハーケ、今終わったわよ」と答えるとガチャリとドアが開いた。開いたドアから新しい空気が流れてくると共に、一人の男の子が顔を出した。無駄に甘い笑みを浮かべている。

「先生、コーヒー入れたけどどう？ よかつたらマチもどうだい？ それに修学旅行の土産、渡したいんだ」

いえ、帰らせてもらいます。

そう言つ前に、「そうね、美千子ちゃんの分もお願ひ。カフェオレにしてあげて？ すぐ下に行くから」と安西先生が頼んでしまった。雄臣は「OK！」という言葉と極上スマイルを残して階下へ降りて行つた。

学校行事的宿泊前夜ノ怪へ帰宅道中警報発令編（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

「……お、お邪魔しました」

長居をし過ぎだ。

コーヒーを飲むだけの筈が、先生と雄臣の修学旅行話に付き合わされた。熱いカフェオレを無理矢理早く飲んだと言つのに……火傷したかいもなく、気付いた時にはすでに夜の7時を過ぎていたのだ。しかも明日から2年の遠足。途中で不機嫌そうなアラタの「もう長話やめたら、母さん」という一言がなければ、8時過ぎになつていただろう。私はホッと息をつき、そそくさと挨拶をして安西家を退散しうつとした。

「すっかり話しこじやつたわあ。明日から遠足なのに、ごめんねえ、美千子ちゃん。さうさう……」

安西先生が耳元に口を寄せてそつと囁く。

『真美子ちゃんに風邪お大事について言つてね？ それと……申し訳ないけど、ちゃんと予習をしてくるようにして、言つてくれる？』

安西先生の申し訳なさそうな言葉に私は恥ずかしくなり、カアと赤くなりながら、「……す、すみません」と頭を下げる。

妹の真美子は英語がどうも苦手のようで……せつかく一緒に安西先生のところで英語を習い始めたといつのこと、予習をおろそかにしていた。彼女の場合英語を習うというより、他の目的で安西家にきているようなものなのだが、さすがにそれを大っぴらにするつもりはないらしい。まったく困った妹である。

「ミチ、これ、持つて行つて」

靴を穿き、挨拶をして玄関を出て行こうとしたら、アラタが紙袋を渡してくれた。中を覗くとオレンジやレモンが入っている。その意図にピンときてアラタの顔を見ると、心なしか顔がほんのり赤い。

「あ、ありがと……。必ず真美子に渡すから」

アラタの心遣いに感動し、引き攣り笑いではなく自然に出た笑顔で真美子の代わり素直にお礼を言つと、「べ、別に、マミだけじゃねえし！」「ミチも食べなよ」と照れ臭そうに益々顔を赤くした。その様子を見て、私は真美子がとても羨ましくなった。こんなに心配してくれる男性がいたら、私だったらきっとホロリと絆されて口づと傾いてしまうに違いない。それなのに、真美子は何故雄臣なのか。真実を「知らない」というのはなんと気楽で、残酷なことなんだろう。

そんなことを思つていたら、今まで部屋着だった筈が、どう見たつてわざわざ着替えましたよね？ という雄臣が時計をつけながら玄関まできた。嫌な予感ゲージが徐々に上昇していく。

「ミチ、遅いから送つていいくよ」

結構です！！

……とは噛みつかず、「だ、大丈夫、自転車だし！」と慌てて否定した。

「冗談ではない。ただでさえ外で一緒に歩くのは避けているのに。しかも2人つきりだなんて……誰か知り合いに目撃されたらエライことである。それにこれ以上学校に居づらくなるのは正直キツかつた。まだ痴漢に襲われる方がマシ……な気がしないでもない。

「そうね、雄ちゃん、送つて行つてあげてくれる？ 大分遅いし、人気がないところもあるしねえ」

（せせせ先生！ 余計な心配は無用です！！）

「オレも行こうか？ 帰り雄兄さん一人になるだろ？」

（アラタ、エライ！ ナイスアシスト！！ むしろ君が来てくれつ！！！）

「大丈夫だよ、オレも自転車で行くから平氣」

（なら私も一人で平氣だろつ？！）

私の必死の叫び（心中）も空しく、雄臣はさつと靴を履き、苦い顔のアラタと満面な笑みで手を振る安西先生に「行つてきます」と残して、私の腕を引っ張りながら玄関を出でしました。

* * * * *

「……」
「……」

閑静な住宅街を自転車を引きながら歩くのは、中学生男女2人。

その2人に静かに月の光が注いでいる……。だが、決してロマンチックな雰囲気は醸し出していない。

男の方は家を出た途端、それまで顔に張り付いていた愛想笑いという仮面を取り外し、言葉はおろかまるで息もしてないような能面顔だつた。その無表情さが夜の静寂な空気に浮かび、すれ違う人がいたら恐ろしさで道を開けるだろ？。

一方、女の方も口を噤んだままだつた。こちらは息をしてないと、つより、この雰囲気に押されて息ができないと言つていい。男の纏う闇に飲み込まれぬよう、必死に距離を取りながら隣を歩いていく。

(……はやく、はやく家に着いてくれー)

必死に願いはするが、雄臣の歩みはゆっくりだった。門を出て自転車を走らせるかと思いきや、彼は有無を言わさず自転車を引いて歩くといつ行動に出たのだ。マジハ並みの超高速回転でペダルを漕ぎ、即効で帰ろうかと迷ったのに……お陰で私も歩かざる負えなくなつた。普段は何の変哲もない道のりが、三途の川を渡るような恐怖を感じるのは、私の気のせいだろうか。そう考えながら進んでいくと、雄臣は私が通るいつもの道のりから一本逸れた道を進んだ。

(あ、あれ?)

おひおろしてこの間に、雄臣は先に進んでしまつ。私がどうしようか迷つていて、やっと雄臣は振り向いた。

「……なにしてんだよ、早く来い

「や、だ、だつて、そっち、遠回り……」

「こっちの方が明るくて道が広いだろ? ……もしかして!!チはい

つもそっちの暗い道の方、通つているのか?」

私は頷いた。その方が山野中付近まで続く大通りへの道に近かつたからだ。多少木々がうつそうと生い茂っているお寺と墓場の近くを通るが、普段は数秒で通り過ぎるから問題ない。そうすると雄臣は眉根を寄せながら息を吐いた。

「危ないだろ。次から遠回りでも安全なこっちの明るい方を通れよ。いいから行へべぞ」

雄臣はそう言って再び歩き出した。

(……なみ、みたま、こつもは時間が早いし明るいもん。それに自転車に

乗つてやつせと通ればいいじゃん。それに……そつちは行きたくないんだよ……（

雄臣の背中に向かって心の中で文句を吐いたが、雄臣は振り返ることなく歩き続ける。

（もう！　ああ……どうか、どうかだれに見られませんよう！…特にアイツらはいませんよ！…！）

私はハアとため息をついた後ゴクリと唾を呑み、天に祈りながら後ろに続いた。

学校行事的宿泊前夜ノ怪ノ正体御開帳編（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪／神ノ正体御開帳編

雄臣の少し後ろに並ぶよつて歩いていると、彼は不意に忍び笑いを漏らした。暫く続いた気まずい雰囲気も、会話を交わしたことによりて多少和らいだ気がする。あくまでもほんの少しだが、見慣れた場所に出た。この辺りは去年の暮れとバレンタインの時に通つた場所だ。

アンラッキーなことに、安西小父さんの新しい家は大野小学区の住宅街の中にあり、区民センターよりさらに奥まった場所にあった。せつきの暗い道を通れば、区民センターの付近を避けて大通りに出ることができるのだが……。からうじて救いなのは、例のお好み焼きの前を通らずに済むことだ。

(……それでも油断はできない。ヤツらと鉢合戦させる事態だけは絶対避けないと!)

「……せつからなにソワソワしてんだよ、キョロキョロしてゐるや？」
「えっ？！　い、いや、別に、なんでも……は、早く行きま、せん？」

「せつかくだからゆづくつに行こうぜ。気候もいいし？」

「で、でも遅いし、遠いし、自転車に乗つた方が」

「確かに自転車じゃないとよけつと遠いよな。やっぱ安西叔父さんのところじゃなく、無理言つてミミチの処に届候すればよかつたかな」「……え……はつ？！」

「なんてつたつて学校から近いだる。実際そういう話もあつたんだぜ？」悟小父さんは賛成してくれたけど、父さんが猛反対したんだ

(当たりまえや！…)

〔冗談ではない。何故そこまで我が家が東一家の為にしてやんなきやならんのだ。この場合東小父さんが猛烈に正しい。〕

学校でも家でも一緒になんて……考えただけでホラーもんだ。翌年の某滋養強壮ドリンク剤のキャッシュコピーである、「24時間、戦えますか?」を地で行くなんて死んでもゴメンだし、命がいくつあっても足りやしない。第一私は中学生であって、ビジネスマンではない。

父も父である。いつたい何を考えているのだひつ。年頃の男女を同じ屋根の下で住まわせるなんて……こくらなんでもハレンチすぎる。いや、例え天地がひっくり返るうとも、この世に雄臣と二人きりしか生き残らなかつたとしても、彼だけは「間違いがない」と断言できるが、人間の感情に絶対という言葉は無いに等しい、と思う(この場合被害者はもちろん私だ)。そもそも、それ以前に雄臣ほどの色男がこんな地味で鈍くさいのに手を出すとは考えにくいし、それこそ彼女には困つてないだろひ。

いつの間にか区民センターまで来ていた。
隣接している公園にある照明が、チラッといちらを振り向いた雄臣の顔を照らす。

「それに、ミチの前では気を使わなくて済む」
……楽なんだよ、素のままを出せるからな。

青白い彼の顔は、ゆつぐつと能面の「小面」のように微笑んだ。

「……」

修羅がいる。

形の良い口元は弧を描いているのに、目は笑っていないその顔に「神」は宿っていない。むしろ「鬼神」を連想させた。眩しい照明が当たつている濃いグレーの瞳から出る眼力は、鋭利な刃物のように研ぎ澄まれており、獲物を易々と捉え決して逃さないことを物語っていた。

狼に追い詰められたウサギのように、ガタガタ震えだ出す私の身体。その反応が可笑しかったのか、それともお気に召したのか……雄臣は薄笑いのままだ。

「そう言えば、ミチといつして2人つきりで話すのって、母さんの葬式以来か」

震えているウサギの喉笛を捕えている狼は、息の根を止めるようにその顎に力を入れて一気に噛み碎いた。

今まで一緒に話す場面は幾度もあつたけど、その時は周りに人がいたし、お互に痛い過去には触れないよう避けていたと思う。特に私は細心の注意を払っていたし、極力2人きりにならないようにしていたから。

『……もつ俺たちに一度と近づくな!』

そう言つた時の雄臣の姿が思い出され、私は恐ろしくなつて彼から田を逸らした。

「まあ、俺がミチにあんな酷い事言つたから……当然といえば当然か。あんときはガキだったからな。それでもあの後、結構反省したんだぜ? きっと傷つけただろうつなつて」

雄臣は自分の自転車を片手で支え、もう片方の手を伸ばして私の自転車のハンドルを……私の手の上から握った。その手の感触はあの日の気温のように冷たい。

「ミチの、そのどもる癖、以前は無かつただろ?」

彼の静かな言葉にビクッと震え、唇を噛みしめる。

「悟小父さんが言つてたよ。母さんのお葬式辺りからだつて。よっぽど強いストレスがあつたんだろうって言つから……俺のせいなんかつて。申し訳なつて思つたんだ。けど、近寄るなつてあれだけ強く言つた手前、謝りにも行けなくてや。……ずっと苦しかつた

私の手を握つている雄臣の手に力がこもり、熱を帯びてくる。

「……それが、父さんの転勤が決まって、安西叔母さんのところに挨拶に言つた時に、叔母さん満面な笑顔で言つんだぜ? ミチが、最近頑張ってるって。中学校楽しいみたいって」

私は反射的に手を引っ込めようと思つたが、私の手を握る彼の手の力が強すぎて動かなかつた。

「もしかしてミチにとつて、俺たちのことが、俺の傷つけた言葉が過去になつて、忘れてしまつたのかもつて思つたら……嬉しかつたんだ」

雄臣は手が食い込むほど強く握りしめた。私は痛さに顔を歪め、ギュッと歯を食いしばり、この拷問に耐えた。

2年半前の12月、冷たい雨が降るあの冬の日。

あれだけダメージを受けたにも関わらず、目の前の鬼神に再会するまですっかり忘れていた自分が恐ろしい。顔を合わせない日々が続き、新しい中学生活に慣れようと悪戦苦闘していると、不思議と辛い思い出は風化されてしまつていた。

「…………もう一度やり直せるって。昔みたいに戻れるって。だから、父さんについて行かず、じっと来たんだ」

この時私は、自分の行動の甘さと迂闊さに死ぬほど後悔した。

何故雄臣を取り巻く世界に接触してしまつたのか、と。
何故あの時の出来事を一時でも忘れてしまつたのか、と。

そして……悟つてしまつた。

目の前の鬼神・修羅は、あの過去を一瞬でも忘れた私のことを決

して許さしないのだ、ということを。

「それに、ミチを立ち直らせた、そんな中学生活を覗いてみたかつたんだよ」

薄ら微笑む、雄臣と言う皮を被つた「鬼神」。

（この男……絶対ヤる気だ……）

目の前の「鬼神」は昔から一重人格だった。それも氣に入らない相手には容赦なく徹底的に打ちのめすのだ。

「……そんな顔するなよ。大事な妹には何もしゃしない。これでも成長したんだぜ？　ただ兄貴として、幼馴染として、元許嫁として……ミチを見守つて行きたいし、あの時の償いをしたいと思っているんだ」

だから、俺をミチの世界から追い出すな。

徐々に見開く私の瞳に映る雄臣の顔は、残酷なまでに神々しく、鬼氣としていた。

私の中で、困惑と焦燥と恐怖と憤りと……グチャグチャに感情が混ざり合っていたのにもかかわらず、その人間離れした姿に魅入ら

れてしまった。

「」の時私たちは、お互に違う意味で青白い顔をしていたと思う。
十一一分見つめ合ひ、そして、睨み合っていた。下手したら殺氣を
伴つほど緊迫した状況であつただろう。

だから、ここが危険地帯だといつこともすっかり頭から抜けてい
たのだ。

ましてや。

今いるこの場所が、明るい照明のお陰で公園のバスケットボールコート
から丸見えなどと、そこに入影があつたなどと、気付くことができ
ずにいた。

ヒューッ――!

高い口笛の音が張り詰めた空気を引き裂いた。

「よう一東あ！　噂の幼馴染と夜のデートかよつ――！」

恐る恐る声の方を向けば、田に飛び込んでくるバスケットボール。
そこには、数人の男女がこちらを見ていた。

私は突然降りかかった忌々しき事態に、驚愕のあまり身動きとれ
ず、突つ立つたままだった。だから、背を向けている雄臣の様子に
気が付かなかつた。

彼の端正な顔立ちが一瞬陥しくなり、すぐに挑むような、残忍な微笑を浮かべたのを。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～公園内籠球区画編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪／公園内籠球区画編

「よーー東あ！ 噂の幼馴染と夜の『テートかよつ…』」

一瞬言われている意味がわからなかつた。

……というか、言われた言葉に身体が拒否反応を示し、脳が勝手に一体どこの御國の言葉だらうかという処理をした。いや、どちらかというと宇宙人からの暗号通信だらうか。

脳内が許容範囲オーバーでショート寸前、顎が外れそうなほど驚いている私を置き去りに、雄臣はあらうことか自転車のスタンドを立てて、公園に張り巡らされている低い金属の柵を長い脚でまたいだ。

(ちょ、ちょつと… なんでいちいち相手すんの？… こじまつと手でも振つて退散だらうがつ！…)

「なにしてんだよ、8時近いのに。補導されるぞ！」

あわわわ…と慌てふためく私を無視して、雄臣は注意と警つくり、厭きた様子でバスケットコートに向かつて声を上げた。

「つるせえ、別に学校帰りじゃねえよ。それにこんな時間に堂々とデータをしてる奴に、言われたかねえし…」

声をかけてきた男は笑い、照明の眩しい光をバックにボールを小脇に抱えながらこちらに近づいてきた。

この声と雰囲気、以前にも感じたことがある。

そう、去年の文化祭のリハをしたときの体育館の時と一緒にだ。やつと雄臣の手から解放された私の右手を見ると真っ赤になつており、ジンジンしている。その痛みと雄臣の手の感触を振り払つよう息

を吹きかけ手を振つてゐると、逆光のせいで不鮮明だつた男の顔が明らかになつた。

(……3年バスケ部キャプテン、辺見先輩……)

「こんな遅くまで、練習かよ。熱心だな」

「もうすぐ大会が始まるからな、少しでも時間が惜しいんだよ。それより東だつてこんな夜遅くにデートですか？ 女子共に知れ渡つたら、大変なことになるぜえ」

辺見先輩の言葉に手の痛みが吹き飛び、凍りついた。

「そりやこいつちのセリフ。そっちだつて人の事言えないだろ？ あそこに『飯塚さん』、いるし」

雄臣はこっちを黙つて見てゐる集団に向かつて顎で差しながら、からかうよつた笑みで辺見先輩を見た。途端に辺見先輩は「う、うるせえな！」と顔をほんのに赤くして抗議した。

（雄臣、今すぐバスケ部に入つてくれ。そして一緒に練習してろ！
私はとつとと帰らしてもらひーー！）

期待を込めて雄臣を見たが、彼は口を歪めて笑つただけで、何も答えなかつた。

その時、私はふと思つた。

そう言えば何故、雄臣はバスケ部に入らないのだろう。確か彼は小学校の時からバスケを続けていた筈、しかもかなりの腕前で、学

校のクラブだけではなく外部のクラブチームに入っていた筈だ。でも、今回の引っ越しの際、外部のクラブチームは遠くなつたので辞めたと聞いた。だから学校のバスケ部だけでも入るかと思ったのに……。よりによつて入つた部活は、あの「ブキミちゃん」も所属する地味な生徒が集まつた、『英語・英文タイプ部』。しかも女子ばかりの中に雄臣男一人という黒一点状態だ。

そのおかげで、新3年生が不在だったこの地味なこの部活に、我が家を含め、女生徒がいきなり集中しだした。2年生にもかかわらず、すでに部長の地位を獲得していた「ブキミちゃん」は、邪な入部希望者駆除……いやいや、対策の為か、毎回日本語絶対不可のディベートを実施し、入部希望者の度肝を抜いた。日本語を少しでも使つたものはペナルティが加算される。学年を問わず、ペナルティ1ごとに高校入試用の必須構文を5、単語を10を丸暗記しなければならないという厳しいものだ。そして入部したからには、英検を必ず受けることを必須条件に加えた。これでは、英語に対して眞面目でやる気のある人物しか残る筈がない。もちろん結果は、「ブキミちゃん」の圧勝で試合終了。妹を含めた邪な入部希望者は『英語・英文タイプ部』を去つた。

「別に俺は噂なんてどうでもいいけど。第一、彼女は安西先生の英語塾の帰り道で、夜遅いから送つてるだけの話しだし」「

「そんな言い訳で女子共が納得するかよ。なあ、一緒にバスケやろうぜ？ あんな英語部に入つて、腕鈍らせることねえだろ？ そりやあオマエにとつて学校の部活じや物足りねえかもしないけどさ。オマエとさ、ほら、あそこにいるデカイのと小さいのがいるだろ？ かなりの腕前なんだよ。これだけいれば神奈川、いや関東、下手したら全中狙えるかもしねえんだ。部活掛け持ちがキツイならさ、俺からも顧問に頼んで、気が向いたときだけでいいからさつ。顧問

も絶対それでいいって言つて！……つーか、英語部つてそんなに大変じゃねえだろ？！　絶対悪いようにほしないから、な？ 頼むよー！」

片手だけで手を合わせるような仕草をする、辺見先輩。彼の台詞の中に聞き捨てならぬ言葉をいくつか発見した気がした。

（あんな英語部つて、そりゃないんじやない？！）

英語をバカにされたように感じ、ちょっとムカつときてしまった。第一、あの英語部に居られる人物は、かなりの英語力がなければ無理だと私は睨んでる。雄臣がいなければ、私が掛け持ちを考えたいくらいだ。

（それに……「デカイのと小さいの」って……）

私はなるべくバスケットコートにいる集団にピントを合わせないようにしていた。さつきからひしひしと感じる最悪の事態と殺氣から必死に現実逃避をしていたのだが……。気候の良い涼しい宵なのに、背中と脇に嫌な汗をかいてるのがハツキリと感じられる。

「……まさか、オマエも女がらみじやねえだろうなっ？ そんな理由で辞める奴はアホだ！ しかも才能ある奴に限って、そんなことほぞくなんざあ、我慢できん！…」

辺見先輩は雄臣から私の方に視線を移し、ジロツと睨んだ。

私は恐ろしさに身体が硬直し、慌てて「私のせいじやありません！」と首と手を高速で振った。雄臣はそんな私の様子が可笑しかつたのか、フフッと笑いながら肩をすくめた。

「俺だつて別にやりたくないくて部活に入らないわけじゃないんだぜ？ 膝がさ、結構厳しいんだよ。お遊びなら構わないけど……本格的にやるとなるとドクターと相談しないと、な

「えつ？！」

私は思わず大声をあげながら雄臣の顔を見ると、彼は困ったような寂しいような表情をして私を見降ろした。

(……そんなの、知らなかつた……)

外部のクラブチームは辞めたとは言つてゐるけども、土田地元の方に出かけていると聞いたので、てつきりクラブの方に顔を出しているのかと思つていたのだ。

だつて、雄臣はそれはバスケが好きで、小学校の時から練習一筋だつた。何故なら東小父さんがかつてバスケをやつていて、名選手だつたから。悔しいが、彼のバスケをしている姿はさすがの私も称賛のため息が出るほどだ。ハッキリ言つて、尾島の比じやない、と思う。……そのおかげで、一時無謀にも私もやってみたいと思つてしまつたのだ。そうすれば、東小父さんに少しでも近づけるかなと思つたから。

(父さんにだつて……)

無性にやるせない気持ちが湧いてきたので、考えるのを止めた。

結局自分のやる気と実際の運動神経、そして雄臣と成田耀子……その他諸々の事情を天秤にかけ、バスケの道から遠のいてしまつたのは私自身だし、今となつてはそれで良かつたと思っている。なんせバレー部に入つて、マイナスの要素はあれども、プラスの方が大きかつたから。それにバスケ部なんぞに入つてたら、今頃退部届を出していただろう。

……けど、雄臣はどうだろう。

父親に尊敬の念を抱いていた彼は、父を超えるといつも意氣揚々と亡き母親に語つていたのに。それさえも道が断たれようとしている。

「なんだよ。ミチ、そんな顔するな」

「……だ、だつて……」

「いいんだ。これも運命だよ。身体が動かないんじや、仕方がない。

諦めも肝心なんだ、時には「

遠くを見つめながら、雄臣の言葉に、さすがの辺見先輩も苦い顔になつた。

「……それに、運動部じゃ、土日に女と遊べなくなる」

珍しく同情的な気持ちを寄せていたのに。

急にニヤリと笑いながら私の方を見て言った雄臣の言葉に、感傷的でしんみりしていた空気が一気に殺氣立つた。

「……てめえ、やっぱ女絡みじゃねえか！　おい、幼馴染、どういうことだ？！」

「ちちちち違います！　私は関係ありません！　だだだ第一、私も土日部活です！！」

私の慌てて弁解した言葉に、雄臣は堪え切れず吹き出した。
……どうやら完全に遊ばれているらしい。

（くそお……呑気に笑っているその顔を、苦痛で歪ませたい！　私の同情した気持ち、返せ！…）

「ククク……冗談だよ。それに、そこのデカイのはバスケ部で見たことあるけど、隣の小さいの。彼は確かサッカー部で、バスケ部じゃないよな？　田下部が言つてたぜ、『絶対尾島をバスケ部にはやらない』ってな」

雄臣がからかうように辺見先輩の後ろの方に目配せすると、ハッとして私も辺見先輩もその視線の方に目をやつた。いつのまにか、私達三人の傍まで来ていた、数人の男女。

「すみませんねえ。その小さいのがバスケット部じゃなくてサッカー部で」

地獄の底から轟かせるような声を出したのは、小さいほうの尾島だった。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対斎天大聖編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

「……デートならオレらに構わぬ、2人でとつととどつかに行つてくれませんか？」

練習の邪魔なんですよねえ。

とうとう出た。「ロンギヌスの槍」並みの征服力を持つ男が。勇敢にも、その槍を持って神に攻撃を仕掛けているのは、クラス一無謀で悪魔のような男でなく、悪魔そのもの。またの名を、釈迦にケンカを売る怖い者知らずの孫悟空……じゃなくて、類人猿。一方、ケンカを売られている神……ではなく、どちらかというと鬼神・修羅は、後輩の失礼な口のきき方に怒りもせず、フツと笑つた。その笑い方に親愛の意味は籠められていない。

（……むしろ思いつきりバカにしてらっしゃいますよね……）

長年裏の顔を見続けてきた私にはわかる。尾島も野生すぎるカンで瞬時にそれを察知したのだろう。見る間にタレ目がつり上がり、瞳孔にメラメラと仄暗い炎^{じょうあか}が点火された。その炎、ぜひとも明日の遠足のキャンプファイヤーまで大事にとつとけよ、と言いたい。

（……そんなことより、逃げよう。ここはどう見たつて逃げるのが得策だろ）

こんな妖怪同士の争い、しかも厄介な親玉クラス。まともな人間が敵う筈もないし、積極的に参加する必要もない。こんなところでグズグズしていたら、こっちが煽りを食つて殺^やられてしまう。

……けれども。

(「2人でどうとどつかに行つてくれませんか」、ですか……)

私の頭の中で尾島の台詞が何度もリピートしていた。

そりや、尾島に嫌われていることはわかつてゐるけど……そんなことわざわざ他人に言われる筋合いもない。それよりも何故バスケットをあれほど避けていた尾島が、こんなところで呑氣に練習などしてゐるのか。しかも大人しく練習してれば良いものを、なんでこんなところにまで丁寧に顔を出してくるのか。

そもそも、彼がいちいち文句を挟んでくる原因は、一体何なのだろうか？

(私、尾島に嫌われること何かしたのかな？ 裏番のお墨付きなど、地味に生きている私が？ それともただ気に入らないだけ？)

「……」

ただ気に入らないだけ。

(……キツイな……)

それをあつさり認めるには、心にかなりのストレスと痛みを伴つた。

もし「気にらない」というのが本当の理由だとしたら、とつても悲しいことだし、もはやどうにもすることはできないと思つたからだ。そりや、世の中全員に好かれることはまずありえない。実際私も苦手な人は沢山いる。けれども、その感情をいちいちむき出して接するほど、もう子供じゃない。

(……嫌なら、放つて置いて欲しいのに。……なんか疲れた。とつと帰る(?)

本気でそう思つたので、天然ボケを力マすようにわざと時計を見

て、

『もつ八時すぎやうなんで、アッシは先に帰りやすぜ、ダンナ。あとは妖怪同士よろしくやつて下せえ。むしろ粗鄙になつてぬ』とを望みますぜ、ゲへへ』

と雄臣は一言言おうかと思つた、その時。

「あ～!! やんだあ！ 噛の東先輩とアーティなんて、やるや～！
！ ね、啓介？」

出でこなくていい処まで首を突っ込む、妖怪・ろくろつぐび……いや、小リスこと小関明日香が、絶賛炎上中の尾島の後ろからひょっこり登場した。

「……ほ～んと。こんな夜遅くよくやるよなあ。明日キャンプだつてえのに、お熱いですねえ。それとも一晩会えないから？ ちよつとの時間でも逢瀬つてことですかねえ？！」

尾島の槍ヤリフが真つすぐ心臓に突き刺さった。

勢いよく刺さった槍は簡単に抜けないほど深く抉りこみ、傷つけられた痛みは悲しみと憎悪の感情となって全身を蝕ませた。

(……な……なによ……ー)

私は急に息が苦しくなり、新鮮な空気を求めて鼻と口を少し開け

ながら、呼吸を忙しなく繰り返した。その間にも喉が締め付けられ、心臓の辺りがズキンと痛む。……というか動悸がどんどんと激しくなつていて。

小リスの余計な発言と孫悟空の厭味、しかも2人は似たような顔に憎たらしい笑みを浮かべており、それ以外の外野は冷やかし笑いをしていた。

(……ふ、2人仲良く一緒に燃えてしまえ……揃つて……揃つて、この世から消えてしまえ！－！)

完全に切れた。

一気に疲れが吹っ飛び、私の身体にも怒りの炎が焚きつけられ、全身に力が漲つた。

(……そうだ、そうだよ！)

何故、小リスや尾島なんぞにここまで言われて黙つてなきゃならんのだ。

何故、3年の女子や裏番なんかに説教されねばならんのだ。

何故、クラスでひつそりと縮こまる様に生きないとならんのだ。

何故、気に入らないというだけで、クラスメートに無視攻撃されて卑屈にならないといかんのだ。

何故、雄臣や多恵子小母さんにあれだけ言われ、遠慮しないといけないのだ！－！

(間違っている！ 絶対、間違っている！－！)

じういう場面こそハツキリと言わねばならない。人生決めねばな

らないといひをビシッと決めなくて、いつ決めるといつのだれつへー！

武者震いが体中を駆け巡る。

震える拳をギュッと握り、刺さった槍を無理矢理引っ抜くよう
に心臓に手をやつた。大体、こんな槍、大したことないではないか。
たかが猿の如意棒もどきに傷つくほど、無駄に苦労している訳では
ない。

私はゆっくり顔を上げ、ギラつと尾島と小関明田香を見んだ。

一瞬、尾島がビックリしたように目を見開いた。彼の瞳が動搖し、
怯んだ気がしたが氣のせいだろう。その証拠に生意氣にも真っ向か
ら睨み返し、怒りの炎はいまだにその目に宿ってる。

（ハーハーじゃないの……その炎、買ってやるうぢゃないのせりー！）

出合つてから、早1年と2カ月。まともに真正面から対抗するの
は、初めてではないだろうか。その自信がさらに拍車を掛け、後先
考えず憎悪と共に、「一言物申すー！」の態勢に入ろうとした時。

雄臣の弾んだ華やかな笑い声がそれを遮った。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～鬼神修羅対足輕編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪／鬼神修羅対足軽編

雄臣の華やかな笑い声が夜の公園に響いた。

(なななんのよつ！…)

私は勢いを削がれたことに完全に頭にきて、今度は雄臣の背中の方を勢いよく睨んだ。

雄臣は私の殺気に気付いたのか。ゆっくりと振り返り、挑戦を受けるように好戦的な笑みを浮かべ、こちらを見下ろした。お互いの目から炎が出て、導火線を舐めるようにバチバチと伝い、中央で一気に弾ける。

「ハハハ、困っちゃうよな。『デート、『デートつて、なんだか照れるよ。な、ミチ』

「……そうよね。なんの冗談かしら。『れのど』が『デートなんですよ』

「幼馴染つて本当微妙だよな。いくら言つても全然信じてもらえないし。みんな本の読み過ぎじゃないか？それともせ、よほど俺たちお似合いのカップルなのかな」

「……ホ、ホホホ、お戯れを。私なんかとてもじやないけど、雄兄さんに釣り合わないつてもんですわ」

「釣り合わないつて、大袈裟だなあ。恋は自由だし釣り合つ釣り合わない関係ないんだよ。だれに強制されるものでもないしね」

「……私には雄兄さんは過ぎる人ですよ。それより真美子の気持ちに応えてあげて。もしかして……彼女いるの？ きつといふわよね？」

「俺はマミもミチも同じくらい好きだよ、兄としてね。大事な妹じやないか。ずっと見守つているよ、約束する」

「本当に？」 真美子と何かあっても、泣かすようなことはしないでね。あの子はまだ中1なの、姉として泣く姿は見たくないわ」

「わかつているよ。大丈夫、大事な妹を泣かすもんか。父さんや天国の母さんの名に誓つて、絶対だよ」

「一生よ？」

「当たり前じゃないか。これでも紳士を心掛けているつもりだよ。父さんに習つてね」

「そうよね、小父さま、とっても誠実な人だもの。雄兄さんもきっときつとそうなると信じてゐる」

「ありがとうございます。ミチは優しいな。いつも俺の歩む道を応援してくれる。感謝してるよ。是非期待に応えないといけないよな」

「いいのよ。こんな私だけど、東小父さまにしつかり頼まれているし役に立ちたいの。それに妹として兄を応援するのは当然でしょ」

血の絆を超越した麗しい兄妹愛。

……といつより、血反吐が出るサムライ流芝居。

正式に訳すと、

『ハハハ、そんな顔するなよ！ いいじゃないか、デートにしておけば』

『冗談はその意地の悪い性格だけにしてくれる？ それにこれのどこがデートなのよ？！』

『いちいちムキになるなよ。どうせ幼馴染つて答えて、だれも信じないだろ？ 昔からそつなんだから、いい加減適当に流せよ。それよりもさ、よっぽどみんな俺たちをくつつけたいみたいだぜ？』

『ホッホッホ！ そのギャグ笑えない。あまりに寒くていつそスベルわ』

『じじはどうだい？ 期待に応えて付き合つてみないか？ 幼馴染

から恋が芽生える、結構王道だろ？』

『悪いけどその気は全く無いの、雄兄さん。真美子と彼女さんに悪いわ。いるんでしょう？ 100人くらい』

『この際マミも一緒に構わないよ。俺は平等にみんな愛せる、約束するよ。考えてみないか？』

『できれば真美子の夢、壊さないで上げて。あの子はまだ中1なの。姉として心が痛むわ』

『そうか、そりや残念だな。結構いいカップルになれるかと思ったのに。……やっぱり、父さんには敵わないのかい？』

『一生ね』

『速答かよ。つれないな。これでも父さんに近付けるよう、努力してるんだぜ？』

『私は一般女子らしく、健人小父さまのような、まともで誠実な人が希望なの』

『ありがたいお言葉、感謝するよ。それならこの期待に応えて彼女一筋にしておこうか。もう少しで俺もまつとうな道を踏み外すところだつたぜ。是非止めてくれた礼をしないといけないよな？』

『結構よ！ こんなどうしようもない他人様だけど、東小父さまにようしく頼まれているし。不本意な妹という立場として、どうでもいい兄の間違った道を正すのは当然でしょ？』

……となる。

以上が殺氣を伴いながら長い間鍛錬を重ねた鉄壁の防御で跳ね返す足軽と、余裕綽々で戦いを仕掛ける鬼神修羅の会話の全てだ。本音と建前に若干誤差が生じているが、この際外野は棒読み大根役者並みの建前だけで、本音は知らなくてよい。大体当事者一人の問題だし。

暫く睨みあつていたが、先にこの試合から撤収したのは、雄臣の方だった。

「……と、いうわけで。残念だけど、ミチと俺はただの幼馴染で、お熱くも冷めてもいい。ましてや逢瀬でもない。だから安心していいよ、尾島君」

雄臣は完全に置いていかれ氣味の啞然としているその他大勢の方に向かつて、ひどく真面目な表情と声で言った。しかし私にはわかる、必至に笑いを堪えていることを。鼻がピクピクしてるし。一方、急にふられて我に返り、慌てたのは尾島だった。一瞬キヨトンとした顔をした後、カアアアアと真つ赤な怒り猿のような顔になる。

「ハアッ？！ な、な、なんだよ、そりやつ…」

「！」 言葉通りだよ

雄臣はとうとう堪え切れず、爆笑し始めた。まつたく何が可笑しいのか、「いやいやいやいや」と膝を叩いたてている。

さつきまで緊迫した空気が流れていたのに。

見事麗しいイケメンが涙を流しながら「ヒーヒー」一人で爆笑しているこの事態に、その他大勢はどうすることもできず、辺りを漂う微妙な空気の流れを感じることだけ。

「アツハツハ！ ……ごめんごめん、クク、い、今更なんだけど、俺、彼女いるんだよね？ 前の中学校に。だからミチは本当に違うよ？ ……それに、俺、とつぐの顔にミチに振られてるし。な、ミチ？」

雄臣はなんとも朗らかな顔で、どうでもいいことをのたまつた。

学校行事的宿泊前夜ノ怪～妖怪大決戦終結後編～（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪／妖怪大決戦終結後編

「……疲れた」

お風呂から上がってやつと一息つくと、私はベッドにダイブした。（今日は本当に本当に本当に本当に史上最悪な厄日だよ！）

枕に顔を埋め、溜息を吐くと、顔全体が自分の吐いた息で温かくなる。暫く埋めていた顔を横にして、机の上に用意してある明日のキャンプの荷物を見上げた。

「よつこもよつて、キャンプの前日。よっぽど運が悪いだろ、私

明日休みたいと思った。今日の疲れが風邪を引き起こし、高熱の状態にでもならないだらうか。とりあえず明日、尾島や後藤、小関明日香に会いたくない。

（絶対、明日のキャンプの夜、話のネタにされるな……）

それでも、心は僅かに軽かつた。

雄臣に彼女がいると判明したいま、これで忌々しい噂は解消されそうだ。それに自分の感情を押し隠し、ビクビク生きてきた今までと違つて、ちょっとの勇気で雄臣にあそこまで対抗できるとは……私もやればできるのかもしない。これも全て中学生になつてからできた友達と「尾島」という名の試練のお陰だ。

そうだ、第一勇気が出たキッカケは尾島の余計な一言だった。よくよく考えてみれば、あの時理性が吹っ飛び、前後見境いなく怒鳴りつとしたではないか。

「よくそんな勇氣でたな……」

中学1年まではあんなの日常茶飯事だった。

久しぶりの嫌味におそらく過剰反応したのだらう。それが雄臣のせいでおよっぽど虫の居所が悪かったのか。結局尾島への怒りの矛先は雄臣に変わってしまったが、この際結果良ければ過程はどうでもよい。今日をお手本に、これからはこの調子で勇気を持つて対抗しなければならない。

(これでも少しさ成長してるんだよね。それにしても雄臣め、今後どうやってこの1年を乗りきつて行こうか……)

私はベッドの上で胡坐をかきながら今日の出来事を頭から追い出し、ウンウン唸りながら、今後の妖怪退治のプランを練った。

* * * * *

あれから私達は、もう夜の8時を過ぎて図書館も閉館しているし、区民センターの職員さんがチラホラ出てきたので、「万が一学校に通報されたらいカン」ということで解散になった。

その直前までは、「彼女いるんだぜ、オレー!」宣言した雄臣に、辺見先輩や飯塚先輩達3年から質問責めだった。

『なによ、やっぱ彼女いるんじゃないの、東君。それならさうと早く言いなさいよね? こんな2か月も引っ張っちゃって。錦戸も、東君の彼女さんも可哀想じやん』

『わうだよな。てっきりその幼馴染と本当にデキてるかと思ったぜ。ま、そんなわけないか』

(そここの幼馴染とそんなわけなくて、スミマセンねえ……)

思わず尾島流に悪態付いてみた。無論心の中で。

すぐさま「マル秘!! 美千子のイ・ケ・ナ・イ ブラックリストへ迷わず瞬殺したい人間達へ」に、3年バスケットボール部長・辺見と名前を書き込んだのは言うまでもない。

まったく、雄臣も雄臣だ。彼女がいるならいと、わざと初めから教えてくれればいいのに。2ヶ月間、あることないことに尊された私の方が、^{ラブレタージ}錦戸先輩や雄臣の彼女よりよっぽど可哀想だ。

『それにしてもお、ハサウエイ、東先輩振ったんだあ？ もつたになーい』

どうでもいいところに着目するのは、小リスじゃなくて小悪魔こと小関明日香。「小」という字がトリプルで付く癖に、吐き出る言葉と声は「小」なんて控えめどころか、厚かましく無駄に音量がデカイ。しかも今言つた言葉はどう頑張つて受け止めても好意的には聞こえない。むしろ、『こんなイイ男振るなんて、アンタ何様？』といつ風に聞こえる。

『雄臣の見かけに騙されると、痛い目に合つわよ。外見は素晴らしいも、中身は真っ黒焦げで食えないから。アンタみたいにね！』

……という視線をお見舞いしてやつた。普段なら引き攣つた笑いをするが、今日はさすがに私も気分が悪く頭にきていたので、そんな気遣いは出来なかつた。よくよく考えてみれば、そんな必要もないし、答えてやる義務もない。

『——寧にも黙秘権を貫く私の代わりに小リストの疑問に答えたのは、雄臣。要らぬ情報を投下し、私の怒りをさらげたつた。

『アハハ、振られたつて言つたけど、すげえガキの時だよ。ミチは俺じゃなくて、俺のオヤジが好きなんだよ。なんてつたつて初恋だもんな、ミチ？』

『ちよ、ちよつとー』

『いやあ、初めて会った時、オヤジがさあ。ミチと俺を結婚させるのどうのとか言つたら、ミチ、なんて言つたと思う？俺じゃなくて、オヤジの方がいって言うんだぜ？さすがの俺も子供ながらにショックだつたよ。つれないよな、ミチ』

『……』

なんという地獄耳である！

東小父さんと2人だけの内緒の秘め事で、淡い桃色の思い出だと思つていたのに……。どうやつてあの時の会話を聞いたのか。さすが妖怪親玉クラス、普通に人間ではない。

益々殺氣立つ私を置いて、幼い思い出話に和む雄臣と、尾島以外のその他大勢。

『え～そんなに東先輩のお父さんつてステキなんだあ。見てみた～い』

小リスの言葉に、雄臣は笑顔で頷いた。身内の自慢なんて、この年頃なら絶対にやらないが、雄臣がやると厭味にならないのだから不思議である。そんな彼は機嫌がいいのか、次々と言葉が出るようだ。

『俺から見ても頭くるほどね。あんな身内持つた俺が可哀想だよ。特にバスケやらせりや、天下一品だし。な、ミチ？』

『……………そうだつたかしら』

『よくいうよ、ミチのオヤジさんだつてそうじやないか！なんてつたつて、強豪　大学のバスケ部のポイントガード、且つキャプテンだつたもんな？　確かにキャッチフレーズが……そう！　甘いマスクで恋もボールも自由自在！！』

『…………ハハハ、いえいえ、お恥ずかしい過去ですよ。今はただのしがないサラリーマンですよ。普通のオヤジですよ！』

『そんな事言うなよ、悟小父さん可哀想じゃないか！　せつかくだからミチもバスケやればよかつたのに。きっとオヤジさん喜んだぜ？　そういうえば、マミも辞めちゃったもんな。なんでかな？』

『さあ、どうしてでしょつねえ……』

そう。素直な真美子は誰かさんの為にバスケットを始め、小学校の特別クラブのチームに入っていた。

が、入った小学5年生の1年間は大変だった。何故なら、当時小6だった成田耀子とまったく気が合わなかつたからだ。真美子と成田耀子、お互いそれなりに自信があつてメチャ気が強い者同士。上手くいくわけがない。この点に関してだけは不思議と気が合つ私たち姉妹。成田耀子をツマミに、軽く一晩談義がイケる。

真美子は成田耀子の嫌がらせに決して負けなかつた。もともとバスケ部の間で小学5年と小学6年の仲が悪いことが幸いして、何度も食らいついては必死に対抗していた。しかし最終的には真美子に軍配が上がる。どうやら父親の血筋が目覚めたらしく、一年もしないうちにレギュラーの座を実力で勝ち取り、成田耀子と同じ土俵に上がつたからだ。まあ、正規の試合には「チームワークが乱れるから」と試合には出してもらえなかつたようだが。それでも成田耀子が卒業し、真美子がキャプテンになつた途端、山野小は結構強くなつたという話だ。

そんなバスケの実力十分な真美子なのに、中学の部活は英語部に敗れた途端、何故かアダモちゃん率いる和み美女系の可憐な体操部。理由は、

『はあ？　バスケ？　ちょっと、雄兄さんが入らないのになんで成田耀子のいるバスケ部入らなきゃならないのよ！　バカバカしい。それには、バスケはある程度極めたからもういいの。それより体操部よ！　見た？　このレオタード、可愛いくない？　私のナイスなプロポーションにピッタリでしょ？　むしろ私が着ないとレオター

ドが泣くつてもんよ。この姿、雄兄さん見たらセリヒイチコロだわ
！ リンダ、困つちやうへ』

……だそつだ。

英語部で惨敗したにも関わらず、すぐさま立ち直り、次の作戦で雄臣を狙い撃ちするリンダ。脱帽である。

目の前の雄臣は真美子がバスケを辞めた理由をわかっているのか、いないのか。しきりに頭を捻りながら「どうしてだろうな？」などと言つてゐる。呑氣なもんだ。ここは大人しくリンダに狙い撃ちされてしまえ。

『どつちにしてもオヤジさんガツカリしてたぜ？ 娘両方ともバスケやらないんだもんな』

『……本当、何故でしょうね。非常に残念ですわ。でも真美子は体操部楽しいみたいですよ。一度くらい（レオタードを）見に行つてあげてはいかがですか。（そして体操部に変態扱いされる）私も何故かバレー（の方）が（何十倍も）楽しいんですの。今度生まれ変わつたら、考えてみるわ（きやないだろつ！）』

ホホホ
ハハハ

「 「 「 「 「 「 ……」 「 「 「 「 「

どう見ても不自然に笑い合つ私達二人に、またもや黙りこむ、オーディエンス達であつた。

学校行事的宿泊前夜ノ怪々鬼神的心中未理解編（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

学校行事的宿泊前夜ノ怪／鬼神的心中未理解編

『なんだよ。そんなに怒るなよ、ミチ』

肩を怒らせながら自転車を引く私の背中に、からかうような声を投げる雄臣。肩越しにジロリと睨むと、雄臣は「わかった、わかつた、謝るよ」と言つたが、口だけどころ見ても誠意は感じられない。

『……』

もう一生関わりたくないというようにフイフと正面を向くが、雄臣は本性を隠さなくていい人物と一人きりで気を許しているのか、怒る様子もなく再び忍び笑いをこぼした。

『まあ、誤解が解けて良かつたじゃないか。これでミチも少しは学校で過ごしやすくなるだろ?』

『……は、初めっから、彼女がいふと言つてくれれば、こんな目に会ひつともなかつたのでは?』

『それじゃあ、面白くないだろ』

『お、面白くないつて……』

『初めてミチの教室に行つた時さ、アイツすんげえ睨んできたんだよ』

『え? 熱いクソゲーになんて飽きたんだよ?』

『すぐピンときてな』

『スカドンのコーナー?』

『確かに恋は障害がデカイほうが燃えるし、ライバルがいると張り合いが出るよな』

『確かにコーヒーはジョナサンの方がイケるし、フォルクス、ガスト、バーミヤンが迷うよな?』

『こりや本腰入れてやるかつて思つたんだ』

『コリアンホンコンヤンバルクイナでホモつたんだ……つて、ちょっと、雄兄さん大丈夫?』

『おい。そのセリフ、そのまま熨斗つけて返すぜ。……そつか、ミチは気付いてないのか。奴も氣の毒にな、敵ながら同情するよ』

『は?』

『いや、いいんだ。奴のことは永遠にそつとしといてやれ。ま、気付いてもこれまた一興だけどな』

『一休?』

『……いい加減にしろよ。トンチ効かせてどうすんだよ。どうせなら愛の言葉を聞かせる。いい加減中二になつたんだから、恋愛のスキルをアップさせろよな』

『おつしやる意味がまったくわかりません』

『いいだろう。スキルアップ作戦その一だ。今日ミチを送つたのは他でもない。例の昔からの約束、まだ無効じやないってことを言いたかつたんだよ』

『……へ? ……はあつ? !』

『喜べ。オヤジ同士はそのつもりらしい』

『ちよちよちよつと! まさか、嫁がどうのこうのって話じやないでしょ? ! そそそれに雄兄さんの方から冗談じやないって断つたじや……とつこの昔に無効じよ? !』

『残念ながら、そんな過去の事忘れたよ。それに償いするつて言つたろ? もし嫌なら抵抗しても構わないぜ。その方が達成した時の喜びが倍になるし、なんせ俺は個人の自由と基本的人権を尊重する男だからな』

『……とてもそういう風には見えないんですけど……』

『ま、うかうかしてゐうちに東美千子になつてたというのがオチだな。東が嫌なら俺が荒井になつてもいい。この際名字はどうちもいいだろ、同じア行だし。そんな大した問題じやないよな』

『バツバババ力なこと言わないので! そそそそんな償い、いらな

い！ ジゅじゅじゅ十分大問題でしょ？！ そそそれにつき彼女いるつて！』

『目障りで気に入らないライバルにはな、少し牽制した後甘い情報で油断させておくんだよ。トドメは目一杯高いところまで持ち上げたところを、思いつきり叩きつけた方が威力があるんだ』

『…………ですね……訳わかんないんですけど。わ、私が聞いた質問の答はつ？ 付き合つてる彼女はどうするんですか？！』

『残念ながら、どんな天才でも未来の事はわからないんだ。それに今付き合つてる彼女は単なるライクだよ、セックス込みのな。ラブじゃない』

『…………（何気に最低だな、オイ）』

『誤解するな。ミチの期待に添えるような男になる為に必要な過程なんだ。暫く目を瞑つてくれ。ヤキモチはいくら焼いてもいいけどな、間違つても警察沙汰は勘弁してくれよ』

『…………（最低と言つより、ここまできたらもはや外道だな）』

『一緒に中学生活が送れるのもあと10ヶ月か。俺が行く高校のランクまで目一杯成績上げる。先に行つて待つてやるから』

『…………私まだ中一になつたばかりで、ア・テストもまだなんですがそれまでは秘密の清い関係でいこうぜ。いくら親公認つて言つてもな、この手の印象は大事だからな』

『…………（親公認の前に、私の意見聞けよ）』

『いいか、間違つても俺をミチの中から追い出さうと考へるなよ。そんなことしたら、俺の気に入らないリストに真つ先にミチの名前が載るぜ？ そうすると自動的に学校に居れなくなる。俺の威力、この一ヵ月で十分わかつたよな？』

『…………その威力、なにか間違つてるような…………』

『とにかく、明日のキャンプは気をつけろ。こういうイベントになると浮かれて気が緩むバカがいるからな。桃色ハプニングなんてふざけた伝説もあることだし、用心に越したことはない。つたく、ただでさえミチは中2の身体じゃないつていうのに……。そうだ！

言い忘れるところだつた。キャンプに行つたら、大浴場に入るな。
あそこは死角があつて、外から覗けるんだよ。この目で確かめたか
ら間違いない』

『……私の記憶が正しければ、雄兄さんは確か今年の3月まで他校
だつた筈では……』

『言つとくけどな、わざわざ見に行つたわけじゃない。俺だつてそ
んなに暇じやないんだ。たまたま前の学校も去年そこでキャンプし
たんだよ、その時確認した。驚くほど丸見えだ』

『見たんスか……』

『バツチリな。今回は生理と言つて、個室シャワーにしておけ。お
つと、それから夏のプール授業も生理とか理由付けて全部休め、わ
かつたな』

『……普通に無理なんスけど……』

『そこは気合いでなんとかしろよ。いいか、ミチ。良く聞くんだ。
人間にはな、時に死ぬ氣でやらなきゃならない場面があるんだよ。
スキルアップ作戦その二だ、覚えとけ』

『『プール』ごときで、どんな場面ツスか、それ』

『明日は残念ながら、俺は付いて行つてやることができない。だか
ら真操はガツチリ自分の力で守るんだ。絶対一人で行動するんじや
ない、常に誰か友達といふ。間違つても男に愛想振りまくなよ？
そうだ！ 念の為にコレを渡しておく。痴漢撃退用の警報機だ、紐
を引っ張れば音が鳴る。俺だと思つて常に肌身離さずもつとおけ。
本当はスタンガンにしようかと思つたが、そこまで大袈裟にするこ
とはないだろ。……ツチ、油断はキャンプの後にすりやよかつたな
あ。少し早かつたけど、まあいい。この二ヶ月、奴の態度からして、
そう急にコロツと態度は変えられないだろからな』

『やつぱり言つてる意味、良く分からぬツス』

いい加減日本語でしゃべつてくれと言つ前に、コンパクトサイズ
の警報装置を私の手に握らせる雄臣。そこで我が家についたので、

会話は強制的に終了した。

* * * * *

(……一体、あの男は何をしたいのだろう?)

目的がわからない。とりえず当面の目標は、あの傲慢で自分勝手な妖怪をなんとかすることなのだが、なんとか出来るほど簡単なレベルじゃないのが厳しいところだ。

(一緒に学年じやなくて、本当によかつた!)

どうせあの男は先に卒業してしまう。そしたら何処へ行こうといつちの勝手だ。念の為、雄臣が転校できないところを狙えばいい。(そうなると……やはりここは女子高か!)

冴えている。

さすが普段使いで試練に立ち向かっている、荒井美千子。絶好調だ。さつそく英語に入れている女子高を探さねばならない。キャンプから帰つたら大忙しだある。

(女子高から女子大に進み、海外へ高飛びだな。いや、この際高校出たらいきなり留学つていうのもアリだろ! そうなると、私立高校に、留学費用……ウチ、お金大丈夫かな? こりや早めにアプローチ……って、うちの家族にバレないようになないと! バレたら完全にアウトだ)

悪いがウチの両親や安西先生、学校の先生も信用できない。

(万が一のことがあれば、『最終防衛ライン』を引こう。あの言葉を使えばいい。……被害が大きくなりそうだから、なるべく使いたくないけど……)

今のところは、ギリギリまで極秘に事を進めるることを決心した荒井美千子であった。

ちなみに。

帰つて雄臣の修学旅行の土産を開けてみれば、「家族全員で食べてください」と、八つ橋のお菓子と漬物だつた。ここまでは良い。問題は個人的な土産だ。開けた瞬間、私と真美子は文字通り固まつた。

真美子には京都のペナント、私には「奈良」、「大仏」と書かれた提灯。

「…………」

「ご丁寧にも二人揃つて金閣寺のミニチュア模型がオプションでついていた。

どうみてもいやがらせにしか思えない私は、普通の神経だと思う。それとも、性根が腐つてるのだろうか。

学校行事的宿泊前夜ノ怪々鬼神的心中未理解編（後書き）

「スカドンの奇人変人」「コーナー」を知っていますか？知っていたら、同志ですね、フフフ。ちなみに「ガスト」はまだこの頃には世に出でなかつたかも。提灯のネタは創りました。本當にあるかどうかは不明です。でもありそう。奈良、大仏という字がセットの提灯を見かけた方は、ご一報ください。m() m

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプtのキャンプdeハッピーニング？

「ふわわわわあああ～」

大きな欠伸が出た。

オマケに涙も出る。それもこれも完全に寝不足のせい……と、目の前にある玉ねぎのせいだ。

(あ～あ、対策練つてたら、寝るの夜中になっちゃったからな)
楽しくもないのだが、せっかくのキャンプだというのに、すべて雄臣のせいである。……まったく、ろくな男じやない。いやその前に人間じやなかつた。この場合「ろくな妖怪じやない」が正しい。

「それにしても……」

私の前には野菜がてんこ盛りに置いてあつた。

それもこれもキャンプの自主炊事・カレー作りのためなのだが、私の班のメンバーが一人もいないので。

私以外は、何故か全員釜戸の準備と飯盒焚きに行つてしまい、カレーの具材を切る人が私以外誰もいなかつた。しかもかなり時間が経つてゐるというのに、全然調理場に帰つてきやしない。どうでもいいが、ついでに肉の量が考えられないくらい少ない……。

(くそあ……絶対、尾島のせいだ！ 繩跳び大会で1位になつたのはテメエ一人だけの力じやないくせに！)

キャンプの目玉商品……じゃなくて、メインイベントその1である「クラス対抗大繩跳び大会」。

男子の部は圧倒的に1組の勝利で終わつた。

大繩を回し、一人ずつ繩の中に入り、全員入つた時点で引っかかるずに飛んだ回数を競う。三回勝負で合計数が多いクラスが勝ちと

言う、平凡なルールだ。1組の大縄の回し手を後藤君と佐藤伸君が担当し、縄に入る先頭は尾島だった。この場合、最初に入る奴が一番キツイ。全員が入るまでずっと飛ばないといけないからだ。しかも回し手に近いから飛ぶ縄の高さが上がるし。けど尾島は息が上がった様子もなく、平然とした顔で飛んでいた。その勇ましい雄姿に女生徒達から黄色い声援が上がる。原口美恵と成田耀子を中心に。一方女子は可もなく不可もなく……五位という順位に落ち着いた。今回私は積極的に回し手に立候補した。これが結構キツいのだが、それをも凌ぐ重要な理由が一つあったからだ。

一つは胸が揺れるから。

「なにをふざけたことを……」とお怒りになる方がいらっしゃるかもしれないが、胸が大きい十代前半の人にとっては死活問題である。決して自慢などではない。全校生徒が見てる前で、胸を揺らしながら飛ぶのは拷問以外なものでもない。

実はこの件に関する「御指導」が、意外な人物から意外な形でやつてきた。今朝、早朝6時と言つ迷惑な時間にも関わらず、一本の電話が我が家に鳴り響く。

『……はい?』

『俺だ』

『…………どちらの俺様でしょう…………』

『時間がないから手短に言う。昨日確認し忘れた。今日の縄跳び大会、ミチのクラスの大縄の回し手はだれだ?』

『えーと、後藤君と佐藤君?』

『あのな、野郎の方はどうでもいいだろ。女子の方だよ』

『……鈴木さんと私』

『なんだよ、スナック菓子の名前が揃つて回し手かよ。まあいい。取り越し苦労だったみたいだな。回し手じゃなかつたら、どんな手を使っても回し手になるよう忠告しようかと思つたんだ。まだそつ

ちの方がマシだ。なんせバストの揺れが少ない

』……『

『いいか、念の為サラシを巻いていけ。サラシがなけりや、ガツチ
リスボーツタイプのブラだ。ほら、あれ、ベージュの色氣が無いヤ
ツがあつたる。それをつけていけ、いいな？ 間違つても薄くて可
愛いピンクのレースのブラなんかしていくなよ！』

チン

返事をする前にそつと受話器を置いた。

(……変態め、いつの間に……！)

電話口で怒りがこみ上げたが、ここは自分の為でもあるので、大
人しく従つた。お陰で、胸の件はバツチリだつた。この電話がくる
まで、「キャンプだし、誰に見られるかわからないし」とフラン...
…じゃなく、浮かれ氣分でロックンロールな勢いで、生地が薄めの
可愛いピンクのレースが付いているブラをしていたからだ。

あともう一つの理由は、自分のせいに引っかかつたら、天敵にな
にか言われるか、わからなかつたから。それでも、あの天敵のグル
ープ達は、

『もつと大きく回してくれればいいのに、そうすればもしかして
勝てたかも、ね～』

……と、尾島達率いる男子にわざと聞こえるようにさりげなく文句
を言つていた。背の高い私が腕一杯力一杯使つて回していくと言つ
のに。私は今さらなのでサラシと流したが、鈴木さんが氣の毒だつ
た。そもそもあの天敵グループは練習の時も全然やる氣なんてなか
つた。理由は、髪のセットが乱れるから、だそうだ。奥住さん達一
部が頑張つたけれども、女子の半分がアレでは結果が5位で当然だ

る。い。

ちなみに女子の試合の結果は、学年で最もスクラムが強い2組が一位となり、女子の部の肉三割を搔つ攫つた。しかも男子の一位である運動部粒揃いの1組より遥かに多い数を飛んで。そんな肉食系2組女子一同は草食系2組男子の皆さんから拍手喝采を受けていた。2組のリーダーである和子ちゃんと貴子の顔がわざわざ1組の方を向いて、

『あらあ奥さま～、1組男子の大縄跳び、見ましたあ？』

『見ましたザマスよ！ なんでも運動部ホープが粒揃いザマスって？ ねえ？』

『なんだかそのようですわねえ。でもその割には……フフ、大した実力じやないようですわあねえ？』

『そうザマスねえ。なんせ……女子に負けてるザマスものお～！ オホホホ～』

『ありやだ奥さま～たら～あんまり笑うと氣の毒でじやこますわよお～』

『そうそひ、奥さま～！ いいことを思いついたザマスわ！ いつそのこと、粒揃いというより、カス揃いと改めたほつが親切つともんじやありませんザマスこと？』

『やつだあ奥さま～たら～、1組男子がおかわいそうですわよお～』

『「オホホホ～」』

……といつような、上から目線且つ鼻で笑っていたとしても、それは勝者の特権というものである。

お陰で屈辱的な敗北を味わった尾島は、今にも湯気が出そうなほど顔を真っ赤にしながら怒っていた。ま、それも仕方なかろう。人間それぞれ違う形で試練というものはあるのだ。ヒヒヒ。

私は玉ねぎから包丁を上げ、戦利品うしろに薄づくべらべ色の悪い肉を摘んで持ち上げた。

(……ま、私はカレーの肉が好きじゃないから少なくていいけど。どつちかといふと、肉は別添えがベストよね。衣サクサクのカツを添えるのが王道ってもんよ。しかもこの肉、思いつきりますそうだしな……)

まな板の上に置いて、勢いよくダンシッと切る。

「なあ、これどうするんだ?」

「やだあ、切りすぎちゃったあ~」

隣の班から声が聞こえてきた。

「……」

他の班は和氣あいあいとしながら、みんなで手分けしてカレー作りをしているところだ。

ベタな嫌がらせに溜息が出た。

(やることが子供なんだよな。まあしょうがないか、メンバー全員尾島や原口の手下だしな)

……しかし。

いくら強がりを言つたところで、寂しさは拭えなかつた。さすがにこの班ごとのカレー作りの時は、違う班の奥住さんや光岡さんのところには行けないので、このまま頑張るしかない。

(……上等だよ。去年の暮れから料理の腕を上げた私の包丁をばきを唸らせてやるつじやないのやーーー)

忘れもしない去年の暮れ 某お好み焼き屋の某不良店員に口キ使われた私。

お菓子作りはもとより興味があつたが、キャベツの千切り極意の

厳しい洗礼を受けてから、料理にも目覚めた。

（まあ、単なる悔しかつただけなんだけど）

キッカケはなんであれ、私はあの時から包丁を持つ快感を覚え、自分の手で食材を自由自在に切り刻む……じゃなかつた、思つた通りの形に変化するのがすつかり楽しくなつてしまつた。今では料理も定番なものならある程度できるようになつた。中一に上がつてから、勉強に打ち込む他に自分の弁当も作りも始め、料理の腕を上げるのに躍起になつてゐる荒井美千子。

（高校出たら、一人暮らしじゃい……絶対あの街を出てやるけんのおつ！）

私の心は既に未来へ飛んでいた。壮大な夢を胸に秘め、叶えるまでは絶対故郷に帰らんと後にする……というより、天敵や妖怪のいる地元に一度と戻つてくるもんかと旅立つ勇者の心境だ。それには一人暮らしの為の生活能力がなければならない。家事炊事はどうしても必須になつてくる。

そんなことを考えながら超高速でタマネギを切つていたら、涙が出てきた。

「ううううう……ズズズ」

玉ねぎが目にしみて涙が出てくるついでに、鼻水が出てきた。

さすがに材料に入るのはマズイと思った私は、ポケットからハンカチを出して、目と鼻水を拭つた。ついでに思いつきり鼻をかみたが、乙女がこんなところで醜態をさらすわけにはいかぬ。

（……うークソ、もどかしいなあ！ チーンとティッシュで鼻かみたい！！）

グズグズと鼻にいつまでもハンカチを当ててたら、周りからヒソヒソと話声が聞こえた。何気にそっちの声の方を向けると、隣の班の子と目があつた。その子はなんとも気まずそうに視線を逸らす。

「？」

違う方向を見ると、田があつたその子も同じような仕草をした。訳がわからずぐるっと辺りを見回したら、全員視線を逸らしたり、氣の毒そうな眼をしていた。

「……」

私は下を向いて、黙つてその憐みの視線を耐えた。

おそらく周囲は私が泣いていると思ったのだ。ハツキリ言ってこの手の類は、一番性質が悪いと思う。「氣の毒だけど、それを助ける力がない」というやつだ。まだ尾島や原口、成田耀子のわりやすい行動の方が救われる。……どちらにしても決して氣分のいいものではないが。

私はそつと溜息を吐いた。

（いかんいかん、外国へいけば最初はもつと孤独感が襲つてくる筈だ……それに慣れる為の修行修行。言葉が通じるだけマシ。周りは全て埴輪だと思えばいいんだ）

一心不乱に野菜を切つた。だいいち料理は一人でやる方が捲るのだと思いながら。あつと言う間に切り揃えられ、ボーラーに山盛りになる野菜達。最後のジャガイモにとりかかるとしたら、後ろから声かけられた。

「……あれ、他の連中は？」

低い強張つた声にハツとまな板から顔を上げ後ろを見ると、星野君が立っていた。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイブリッドキャンプのハッピーライフ？

「…………」めぐ。他の連中、もうひとびと來てるかと思つたのに

星野君は器用にジャガトイモの皮を剥いた。

しかもペーラーじゃなく包丁で。おまけに薄く剥かれていって、まるで板前さんのようだ。

(しかも私より上手い……)

「…………あ、い、いいのよ。ほら、料理つて、一人でやつたほうが早いでしょ？ それにもつ終わるし……。そ、それより星野君、ひとつも上手だ……ね……」

「家や『まるやき』で手伝わされてる。だから自然と上手くなつた。そつこいつ荒井さんこそ上手い、これなら他の班に追いつける。去年の暮れに見た時はあんまり上手じやなかつたけど、練習した？」

私はウツと言葉を詰まらせた。

どうしようかと思つたが、相手が穂やかな星野君である」とと、去年その現場に一緒にいたことを思い出し、小むく顫きながら思つて理由を言つてみた。

「…………あ、あの、内緒、ね？ あの時、桂君のお兄さんに『下手くそ』って言われたのが……悔しくつて……」

そつと小声でわざやくみで言つと、以外にも星野君は声を上げて笑つた。つぶらな瞳がなくなり、田尻にくつさりと皺ができる。その姿を見て少しギョッとしてしまつたが、心に温かいものが広がつた。その田尻の皺を見て、不覚にもドキつをしてしまつた。(星野君も田尻に皺ができるのか……。私つて、田尻に皺ができる

人に、弱いんだなあ）

完全に田尻皺フェチだ。それ言えば田畠君も田尻に素敵な皺ができる。……その特徴に引かれる理由は一つしかない、「東小父さん」の影響だ。

（その小父さんと同じ皺ができる雄臣にはじめてトキメかないんだろう？ やっぱ人柄の問題よね）

「荒井さんって、見かけによらず負けず嫌いなんだな。よっぽど練習した？」

「…………あ、う…………ん。…………かなり」

「ハハ！ もしかして、いつも持つてくるあのうまそうな弁当って、荒井さん、自分で作ってる？」

「え？！ ……あ、い、一応。も、もちろん前日の残りモノとかもあるけど」

どうして弁当の中身を知ってるのか？ と聞こうとした。何故なら私はいつも昼食時になると、奥住さんや光岡さんと一緒に2組へ行くからだ。たまに貴子達や幸子女史達が来て1組で食べる時があるが、ほぼ間違いなく教室内が険悪なムードになるので滅多にないし、たぶん一年になつてから5回も満たないと想つ。

「たまに貴子達が昼飯の時に1組に来ると、美味しそうだつて騒いでるから立つ。貴子達がおかずの取り合いでしてただい？」

「…………」

私は後ろめたくて、星野君の澄んだつぶらな瞳から目を逸らしてしまった。

和子ちゃん達が私のお弁当の件であれだけ騒いだのは訳がある。あまりにも私の評判が落ちていたので、なんとかその汚名を挽回しようと、

『荒井さんって、お弁当自分で作ってるのね！ スゴーイ！ しかもおいしそうや〜』

などという「荒井美千子は『キル女』」をアピールする演技を披露してくれたのだ。ここで断わつておくが、決して嘘を言つてる訳ではない。弁当も自分で作つてゐるし。ただ、一緒に食べているチイちゃんの弁当の方が、ハツキリ言つて豪華でカラフルだ。

この星野君の発言で、和子ちゃん達の作戦は見事「大成功！」るのが証明された。しかし、星野君みたいな善良な市民を罷に嵌めるこの作戦、きっと罰が当たる。1組でお昼を食べるのを止めようと、この時私は決心した。

……
が。

(……けどそりすると……チイちゃんの件が……ハア)

そうなのだ。もつひとつ、雄臣に続いてその厄介な問題を抱えているのが辛い。

私は知らず知らずのうちに星野君の言葉を聞かずそと溜息をついていたようだ。星野君の「荒井さん！」の声で我に返った。

「つ？… „ジジジ“めん！ なに？」
「……ジャガイモ、千切りになつてる」
「え？ ……………ああつ！ ヒ、ヒヒつ……」
「『ヒヒつ』つて……。しかも、超薄いし」

星野君私が話を聞いていなかつたにも関わらず、ペラペラのスライスしたジャガイモを摘みあげながらまた笑つた。私はさらに顔が熱くなり、もうなにも言葉が出なかつた。
(は、恥ずかしい……。確か『体育館裏説教』の時も裏番に言つた

気がする……って、あ、あれ？」

ジャガイモを摘んでいる星野君の腕に擦り傷があつて血が滲んでた。それも結構大きい。

「あ、あの……」

「ん？」

「腕が

「え？…………ああ、これさつき鎧戸を作つてるときに……」

私はポケットの中に絆創膏が入つていてそれを思い出した。ラッキーアイテムと聞いて以来、いつも肌身離さず持つていて。包丁を置いてポケットを探ると案の定あつた。

「星野君」

「え？」

「」「これ、よかつたら、使つて」

「……」

「ふ、普通のだから。キャラクターじゃないから」

そう言つてみんなに見えないようになつと渡すと、星野君は絆創膏をジッと見た後、「…………ありがとう」と言つて受け取つた。

「…………そういうえば、あのお礼もまだだつた

「え？」

「かなり前だけど。『マラソン大会のお礼』、確かに蝶子からもらつた。ありがとう」

「…………え？ ええつ？！ あ、あああれね……」

「お礼が遅くなつて、ゴメン」

「そそそんなの、いいよつ

「…………それにもしても、よく俺が酢昆布好きなの、わかつたな

「ああ……あれは、貴子に、ちょっと……その……」

「そつか。……パン上手かつた。それと、いっぱい小さいパンが入つてた。あれつて……」

「あ、御兄弟が多いつて聞いたから……も、もしかして、迷惑、だつた?」

「いや、実を言ひつと小さいのはほとんどトに上げたんだ。というより取られた」

「そ、そう。よかつた」

私は安堵のため息を漏らし、迷惑じゃなかつたことにホッと胸を撫で下ろした。もう一度律儀に小さくお礼を言つてくれた星野君の心遣いが嬉しくて、「こちらこそ本当に助かつたから」と笑顔で返すと、星野君は「あんなのたいしたことない」とパッと俯いてジャガイモを切り始めた。……私もなんとなく恥ずかしくなり、慌ててジャガイモ切りに専念した。

(……同じ班に星野君がいて、本当に良かつた。カレーの方もなんとか間に合いそうだし)

いつの間にか野菜が切り終わっていた。さつさと作つてしまおうと野菜のボールを持とうとしたら、星野君が「俺が持つ」と言つてくれた。

「俺が運ぶから、荒井さんは油を隣から借りて来て

星野君は軽々と野菜が入つたボールを持ちながら言つと、ササッと行つてしまつた。私はその後ろ姿に向かつて慌てて頷いて、隣の班の方へ振り返つた。

そうすると、隣の班の人たちが慌てて自分たちの油をさらに奥の班に渡してしまつたのだ。

「……」

(ちょ、ちゅうと……)

「……」

さすがにこうこう行動は堪えた。

私は一瞬どうしようかと固まつたが、ここでのままボーツとするわけにはいかなかつた。コンロのところで星野君も待つてゐる。このままジッとしていても何も解決しない。ヨシーと氣合入れて、油を渡された班のところに向かつた。

しかし、その班は。

そこは、どういうわけか厄介な天敵揃いの班だつた。平等にいうことでクジ引きで決めたと言つのに、どう見ても裏工作しだら？ というメンバーばかりだつた。逆にそのメンバーの中に星野君が入つていなかつたのが不思議なくらいだ。

(……埴輪、埴輪、目の前にいるのは全部埴輪。あの鬼神修羅よりはマシ。昨日の修羅場を、あの時の勢いを思いだすんだ私！)

自分に言い聞かせながら、油が置いてある班の調理場に近づいた。ヒュウッと息を吸い込む。

「あ、あの……」

やつとの思いで出した声。蚊の泣くよつた声で話しかけると、全員の動きがピタリと止まつた。

「……」

じちらを振り返る無数の目。しかも……どう見たって温かい親しみのこもった視線ではない。むしろ、冷やかで感情が籠っていない。

思い出してしまった。そして、あらためて思い知られてしまった。

「嫌い」「気に入らない」という感情を直に受けたことが、とても辛くて悲しいということを。

(……同じだ。田の前にいる連中は、あのひとと同じなんだ……)

こんな時に最悪な事実に気付いてしまった。
過去の辛かつた時期のさまざまな想い出が、少しづつ闇の底から浮上する。

私は足が震えて、その後一言も言葉が出てこなかった。

彼らの友人である星野君とついでつりきまで朗らかに会話していた分だけ、余計に辛さが身に染みた。しかも相手は無言を決め込んだまま。後藤君や諏訪君、原口美恵や成田耀子も。彼らの親玉である尾島などは、ソッポを向いたまま、じつにすら顔を向けていない。

そして、田宮君も。

まさか彼にまでそんな態度をとられるとは思わなかつた。
いや、薄々は気付いていた。ただ「勘違いかもしれない」と僅かな希望に縋りついていたのだ。しかし、今この瞬間、その希望も打ち砕かれてしまった。

(……もう、ダメだ……)

黙つたまま動かないでいると、尾島がニンジンを乱暴にまな板の上に置いた。その音で、情けないほどブルツと身体が震えた。

その音を合図に、尾島の班の人達はまるで私の存在が見えないかのように、それぞれの作業をし出した。「早くそっち切れよ」とか「こんな感じでどう?」とか呑気に会話し始めたのだ。

(……文句を言われ方が、昨日の方が、まだマシだ……)

何か言われれば、それに対抗できる。しかし、なにも言われなければ、無視されれば、対抗する術がない。ただの独り善がり。独り相撲だ。

田の前が段々とかすみ、ボヤけてきたので咄嗟に俯いた。田から零れ落ちないよう、必死で涙を堪えた。

(……もう、いい。もう、たくさんだ)

私はやつとの思いで足を動かした。尾島の班のさらに奥にある、

奥住さんや光岡さんの班に借りればいいじゃないかと思いついたからだ。勇敢にも挑んだ自分の行動に激しく後悔しながら。

そんな私を止めたのは、女性にしてはハスキーな声だった。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイブリッドキャンプ場ハッピーハウス？

私を止めたのは、女性にしてはハスキーな声だった。その声は容姿を裏切らない程不気味で低かつたが、ハツキリと調理場に響き渡る。

「モモタさん」

一瞬何を言われているかわからなかつた。

「『モモタさん』、これ使って？ うちの班終わつたから

ハスキーボイスの主であるブキ!!ちやん……じゃない、「伏見かおり」は、私の前に立ちはだかり、長い前髪とメガネ越しに私を見上げた。ギラつと歯列矯正を光らせながら滅多に見せない笑顔で、私の目の前に油を差し出した。

「……え、え？」

「だから使っていいわ、『モモタさん』」

「あ、あの……」

「うちの班もう使わないから、『モモタさん』」

ブキ!!ちやんはまだ二ヤリと笑つたままだ。

「……」

ショックだった。

自分に存在感がないことは重々承知していたが、まさか名前を聞
違えられるとは思わなかつたから。

「ほら、早くしないとカレー作り間に合わないわ、『モモタさん』」「
……あ、あの……伏見さん、私……『モモタ』じゃ……ないんだ
……けど……」

やつとの思いで絞り出すよつに声を出したが、……これを自分で
言つのはあまりに辛かつた。

しかも周囲から絶対笑われると思ったが、この先違つ名字のまま
覚えられるのはそれ以上にキツイ。それも「ブキミちゃん」に。
(い、いくらなんでも、酷いよ……私、モモタじゃな、い……つて
……モモ……タ?)

「……」

モモタ。

それは、足元から徐々に冷気が上つてくる感覚。まるで流水の上
に立つてるような過酷さ。その冷気は頭の天辺や指先、爪にまで浸
透した。

この恐ろしい事態を切り裂いたのは、成田耀子の笑い声だった。
他の班からも僅かに笑いが漏れている。

「やつだあ、伏見さん！ 酷くない？ 名前、違うわよお～。『モモタさん』なんて、『冗談キツツク～』

成田耀子がわざわざ「キリサヘンの肩をポンと叩くと、彼女は大膽にも汚れを落とすように、肩に置かれた成田耀子の手を振り払った。ニヤリとした笑いを引っ込め、ジロツと睨みながら。

「肉触った手で気安く触らないでうりょうだい。普通洗ってから触るのが礼儀じやなくて？ 非常識よ」

ブキリサヘンの言葉に、周囲の笑いが止み、シーンとする調理場。

「なつ？！ ……ちよ、ちよつと、失礼ね！ ねえねえ、酷くない？ いの……ひ……ヒ」

成田耀子の険しい声が段々と萎んでいくのがわかる。
なぜか。答えは簡単だ。

尾島を取り巻く一部の連中が、口をつぐんだまま顔面蒼白だったからだ。異様な空気にさすがの成田耀子も察したらしく。

「あれ？ 何やつてるんだ？ 全員手え止まつてるが。……って、荒井どうしたの？」

その声は、どうやら釜山から戻ってきたらしい、尾島の班である学年一のモテ男・佐藤伸君だった。

彼から声を掛けられたのは、一緒のクラスになつてから初めてじゃなかろうか。しかも、佐藤君はこの空氣にいまだに気付いていない。佐藤君が現れることにより、成田耀子は微妙な空氣から息を吹き返し、佐藤君に甘い口調で愚痴を言った。

「ね、ねえ聞いてえ、佐藤君！ 伏見さんつたら、ひどいのよー。荒井さんのこと『モモタさん』なんていうのよー！ ……そりよ、伏見さんこそ非常識じやない！ 荒井さんのことを『モモタさん』つて、名前間違えるなんてさー！ 大体『モモタさん』なんて人、このクラスにいないじゃん、ねえ？」

事情を知らないのか、成田耀子は何度も何度もNGワードを繰り返す。

「は？ 名前を？ ……伏見、いくらなんでもクラスメートの名前を間違えるなんて失礼だろ。一ヶ月も経つてんだぜ？ 大丈夫、荒井？ それよりなんかうちの班に用事があつたんだり？」

「…………あの……油を、借りようと……」

私は誰にも田を口わせないよつに俯いたまま震えた声で答えると、佐藤君は「なんだ、持つてけよ。いいよな？」と班の人へ聞いた。その問いに尾島は答えない。もちろん原口も後藤も諷訪も田富君も。答えたのは成田耀子だった。

「え～伏見さんのところが貸してくれるって言つからそつち使つてもらおうよ。私たちも使うから、荒井さん、悪いけど」「めんねえ～？」

成田耀子が全然悪く思つてない口調で言つた。

「…………あらやだわ、そうでした。『モモタさん』じゃなかつたわ、『荒井さん』でした。『めんなさい』。『荒井さん』、ほら、油持つて行つて？」

「…………」

今まで黙っていたブキミちゃんが、学年一モテ男の佐藤君に注意されたにも関わらず、さらにニヤけた顔で私に油を押し付けた。その顔は、成田耀子同様、どうみても反省している様子はない。

その時。

ダンッ！ と派手な音が調理場に響き渡った。

原口美恵の小さい悲鳴が上がった後、デカイくせに後藤が不安そうに「……おい、尾島」と声をかける。

尾島は包丁を振り下ろし、二ンジンをまな板の上に串刺しにしていた。

その姿は地獄か天国か、ジャッジを下す閻魔大王の姿だ。そして、問答無用で今すぐにでもブキミちゃんを冥府へ引きづり込もうと、鋭い牙と爪を剥いていた。

(……ママママズイだろ、こつや……)

一方ブキミちゃんは余裕の顔だった。

尾島のジャッジを真正面から迎え討ち、歯列矯正の歯をいまだ隠さず、滅多にお皿にかかるない薄ら笑いを惜しげもなく披露していく。

る。

(? …… もももしかして、この人……)

まさか？！ と思つた。しかし、私の考えを裏付ける発言が、とうとう目の前のブキミちゃんから発せられる。

「……そうですわね、佐藤君の言うとおり、『モモタさん』なんて、

失礼だつたわ。やだわ、ワタクシ『荒井さん』が昔のクラスメートの『モモタさん』とすつじい似てたから、うつかり間違えてしまいました！……ねえ？』

ブキミちゃんは私の方は一切見ずに、尾島や原口の方を見てニヤニヤしながらハツキリと言つた。しかもたっぷりと時間をかけて。その後私の方を向いて、キュー・ティ・クルが素晴らしいオカツ・パをサラッと揺らしながら「『ごめんなさい』とニヤリと一笑しメガネをクイッと上げる、ブキミちゃん。その後「フツ、フフフフ……」と不気味な笑いを残して、自分の班へ戻ってしまった。

* * *

「……なんだ、アイツ？ 訳わかんねえな？ あ、おい、尾島も危ねえから、包丁まな板から抜けよ！ 荒井、『ごめんな？ 気にするなよ。俺、去年一緒だつたからわかるんだけど、伏見つてちょっと変わつてるんだ。けど悪い奴じゃないからさ』

佐藤君はいまだにこの雰囲気に気付かず、穏やかな声で励ましてくれた。

荒れ果てた大地に降り注ぐ、久し振りに見た佐藤君の爽快スマイル。

威力が絶大すぎる彼の笑顔は、あまりにも眩しすぎて直視できない。私の身体は嬉しさのあまり、一気に温泉に浸かり解放されたようになつてしまつた。

(……佐藤君はやっぱり佐藤君だつたんだ。変わつてない、頼れるアーチキだ！……若干、ピントがずれてるけど)

今まで私は、成田耀子という障壁のせいで佐藤君に自分の存在を目に入れてももらえない、人のせいばかりにしていた。考えてみれば、佐藤君とは同じクラスで息を吸つているというだけで、委員や

部活などの接点が一つもなかつた。大体男子とは用がなければ会話を交わすなんてことはまずない。それは一年の時も同じだった筈だ。
……一人を除いて。それなのに私は、恋人でもあるまいし……「一
言もしゃべってくれない」と僻んでばかりで、相手ばかりを責めていたのだ。

（……そうだ。佐藤君はいつだって普通だった。それを私つたら、
どこまで根性が曲がってるんだろう……）

知らず知らずのうちに責めていた佐藤君に申し訳なくて、自分がとても恥ずかしくなつた。今の心境は、穴があつたら入りたい、この一言に尽くる。

それに、ブキミちゃん。

あんなことを突然言つた意図はわからないが、彼女は大野小で、もしかして尾島と一緒にクラスだったのかもしない。最初は名前を間違えられてとてもショックだったが、結果的には助けられた。
……でも。

助けられたのだが、何故かスッキリしない。心の奥底にモヤモヤが残つている感じだ。それは決してブキミちゃんに対してもいいのだが、では一体何に対しても聞かれれば説明できないものだった。

（本当、いつたい何なんだらう？……でも、あとで伏見さんにはお礼は言つた方がいいよね）

私はブキミちゃんのいる班を見た。彼女の隣には奥住さんと光岡さんがいて、3人でなにか話している。

意外な味方かどうかわからないが、奥住さんと光岡さん以外に助けてくれる人物が出現し、少しだけヤル気と元気が出てきた。不穏な噂はあるし、まだどんな人か謎で、このモヤモヤが解消されないけれども。

（そうよ、私自身も実際囁かれてる噂とはかけ離れてるし。眞実は

自分の目で確かめないとわからないよね。今度、勉強のことでも聞いてみようかな)

私は隣から刺さる成田耀子の厳しい視線にも負けず、佐藤君にだけ頭を下げる。実際、彼の顔を見てどもりもせずにお礼を言つたら、「大したこと、してねーし」と笑顔で言つてくれた。

単純にもすっかり立ち直った私は、星野君が待つ自分の炊事場へ戻ろうとした時、未だに固まつたまま荒れた大地に立つている尾島達の姿を目に入れてしまった。

少し前に心を埋め尽くした絶望に近い感情、モヤモヤした訳のわからない感情が湧きあがつた。

「……」

私はこの時決心した。絶対尾島達と関わらないことを。相手も無視なら、こっちも無視だ。例え何を言われても、完全に無視だ。それ有限る。それにこのキャンプが終われば、もうすぐ夏休み。クラス内で協力しなければならない行事は二学期の文化祭まで皆無だ、その文化祭だって内容による。他の体育祭や合唱コンクール、球技大会は委員になりさえしなければ、大したことない。

(三年になれば、今より最悪のクラスになることは絶対にあり得ない。私は今、試練の中にいるんだ)

早く二年に、そして卒業がくればいい……そう思いながら私は、尾島の姿を目から追い出すように瞳を固く閉じた。

ハイブリッドキャンプ場ハッピーハウス（後書き）

ブキミちゃん」と「伏見かおり」、これからもどうぞよろしくお願
いします！

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイパート・キャン普法のハプニング？

私はこの時、後悔をしていた。雄臣の忠告をすっかり忘れていたことを。

……確かに、「一人で行動するんじゃない。常に誰か友達といろ」と言っていた。まだ24時間経っていないというのに、どうして私はこんな大事な言葉を忘れていたのか。

私はつこさつき、決心をしたばかりだった。本気で尾島達と関わるのを止めるのを。

……数時間前、カレー作りをしている最中のことだ。24時間どじろか、半日も過ぎていないというのに、どうして私はこんな危険な事態に巻き込まれているのか。

声を出したくても出せない私の前で、懐中電灯の僅かな明りの中で口に人差し指を当てて静かにしろという仕草をするのは、数名の男子達。そして、私の腕や身体を抑え込み、口を塞ぐ物騒な男は、その男子達のボス猿である。

『静かにしろ、チユウ！ 大声を出したらどうなるか……わかってるんだろうなつ？！』

尾島の鋭い声が、耳元で囁かれた。

* * * * *

話は少し前に遡る。

不穏な雰囲気で始まつた冒頭の直前まで、私は穏やかな……でもなかつたが、普通にキャンプを過ごしていた。

「荒井ちゃん、私達大浴場に行つてくるね！」

洗面セットを抱えながら、満面な笑みで大部屋を出る奥住さんと光岡さん。

遠足のメインイベントその一、二である、カレー作りとキャンプファイヤーも終わり、生徒達は未だ興奮冷めやらぬままだ。この後のガールズトークに備え、大浴場へ向かつて行つた、我が1組女子。私は引き攣つた笑いを湛え、「い、いつてらっしゃい……」と弱弱しく手を振つた。

(……ごめん、2人とも！　その大浴場、死角から驚くほど丸見えらしいけど、うちのクラスはお風呂の順番が早いから、きっと大丈夫！　……だと思う。男子がたどり着く前に上がれるよ！　……多分)

心の中で精一杯土下座しながら、大部屋で一人自分の洗面セットを抱え、彼女らの後ろ姿に向かつてエールを送つた。

「さて、私も行こうかな」

私は一人大部屋を出て、大浴場とは反対側の廊下を歩いた。

これから向かう個室シャワーは、団体用の宿泊施設の中ではなくて少し離れたバンガロー やテントが密集しているところにあつた。もちろんこれを使うのは女子だけだ。言わざと知れた女性特有の事情の為であつて、こちらに男子がくることはまずない。

妖怪からの垂れ込み情報により、今回は個室シャワーを使うこと

にした私。

別にインチキをしたわけではない。実際本当に生理だつた。……ほとんど終わりかけだつたが。この際そんなことは問題じやない。なんせ自分の身体がかかつてているのだ。こんな胸だけ発達してあとは大したことない身体を見たつて仕方がないとは思うが、一応私だって女の子である。やっぱり全裸を見られるのは抵抗があつた。他にも生理の人がいますように！…………と心から願つたが、我が1組では、個室シャワーを使う希望者がなぜか私一人。成田耀子や原口美恵らはこつちを見てヒソヒソ言つていたが、無視した。別に彼女らの全裸が見られようが、見られまいが、私にはどうでも良かつたからだ。

六
六
六

「……一人で行かないといけないけど、しょうがないよね」

私は懐中電灯を付けながら一人寂しく呟いた。しかも大浴場は温泉らしいのだが、全裸ウォッキングの餌食にはなりたくない。仕方なく月と星が夜空に瞬く満天の頭上を眺め、ロマンチックな気分に浸ろうとした。

（……が、ロマンチック以前に。）

(……暗い、それにしても暗過ぎる……)

宿泊施設玄関を背にして裏手の方にまわり、静かに歩き出す。施設がある周辺はかるうじて明るかつたが、少しでも離れてしまうと真つ暗闇だった。バンガローに続く細い道に明かりはなく、手元にある懐中電灯と遠くに見えるバンガローがある辺りの明かりが頼り

だ。

卷之九

ガタガタ震えながら、鬱蒼とした茂みの間に続く細い道を恐る恐る進んだ。

（……つーか、なんで今まで女子風呂が丸見えという事実がバレなかつたのか、そっちのほうが怖いよ。どんだけ男子の間で秘密厳守なんだ！）

女子風呂の外に覗きスポットがあるらしい、今回のキャンプ宿泊地。だが実際は、男子と女子の寝泊りする棟が別という、思春期対策を施した施設だった。オマケに男子の棟と女子の棟の間にたちはだかる、「広くて暗いグラウンド」という小憎らしい障害物付き。その結果、年頃の男女がお泊りと言うアダルティーなシチュエーションで「ノルマンディー上陸作戦」……ではなく、「桃色ハブニング大作戦」を遂行しようものなら、そのグラウンドを突破しなければならなかつた。

しかもこれが只のグラウンドではない。周囲に明かりはあるか、敵襲対策の為にグラウンドの周囲を、今年二年の男子保体、且つ10組の担任に着任した箕輪ヒトラーを筆頭としたナチスドイツ軍が、交代制でウロウロしている超厄介な代物なのだ。

毎年この包囲網を突破するのが連合軍である男子生徒達の、その奇襲を迎えるのがナチスドイツ軍である教師達の、それぞれの腕の見せ所となつており、この攻防戦が名物な二年の遠足キャンプ。

見つかれば一晩じゅう正座の刑に処せられた上、反省文を書かせられる刑が待ち構えているのに、なぜそんな危ない橋を渡つてまで女子の元に男子がやつてくるのか？

それは、この世に人が誕生した時から繰り返される歴史、男と女の身体に深く刻み込まれた本能……という高等な理由かどうかはわからないが、少なくとも、映像や紙面ではなく目の前で「生全裸」がタダで揉める至福の時間が待ち構えているとなれば、そりや別つてもんだろう。

告白が成就する伝説か肉三割増しか……精神的な恋愛面に関しては、女子生徒の方の成長度に軍配があがるが、肉体的な欲望面に関

しては、俄然男子生徒の成長度に軍配があがるのがこの年頃の特徴である。

(つーか、アホ過ぎるだろ。でもそんなすぐには、ねえ？ いくらなんでも来れないよ、ねえ？)

たとえ女子の大浴場に覗きスポットがあらうとも、まずグラウンドを突破しなければそれも無理なのだ。時間帯からして、まず我がクラスはセーフであろう。……後半のクラスは怪しいが。

これでも私は全女生徒の操を守るため、事前に先生に報告しようと思ったのだ。だが、事実かどうかわからないし、宿泊施設にケチつけるようで、とても実名で進言する勇気はなかつた。誰から聞いた？ と詰問されても困るし。もしガセだつた場合恥ずかしい。ただ私にできることは、「一人でも多くの人が生理になりますように」と祈ることと、自分の身の安全を守ることだけだった。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイブリッドキャンプ場ハッピーランド

「あ～せつぱりした

髪をクリップで止め、オヤジのようにな手ぬぐいを首に巻き、カレーのような煤のような匂いからやっと解放された私は、石鹼の良い匂いに包まれる心地良さを存分に味わった。個室シャワーは想像通り狭かったが、誰の目も気にせず一人たっぷりと時間をかけてシャワーを浴び、ゆったりとした時間を過ごすことができたから問題ない。一晩浴槽に浸かれなかつたところで、どうとこうことはない。個室シャワーの入口に待機していた女子の保体の沖先生に一言挨拶してから、女子の宿泊棟の方へ向かつた。私は個室シャワーに来たのが思いのほか遅かつたようで、他のクラスはほとんどもう使いつ終わっていた。

『今年はシャワー使う子、少ないわね』
『……』

沖先生の一言で今年は犠牲者が多いことが判明したが、もうどうしようもない。私は「ハハハ」と笑うしかなかつた。

(……それより、早く戻ろう)

一度通ってきた道とはいえ、暗くて薄気味悪いことには間違いない。早歩きで女子の宿泊棟に向かつた。それに、2組の和子ちゃんのところへ遊びに行くことになつてゐるのだ。さすがに男女の棟はわかっているので、消灯まで自由行動の間は「他クラスのところへ行っちゃいかん!」とは学校も厳しく言わない。私としては十分すぎるほどの待遇だ。

(やっぱ、和子ちゃん達に昨日のこと、報告しないといけないよね

……)

雄臣に彼女がいることが判明した今、まだ傷が浅いうちに告白しておいたほうがいい。それにすぐバレることだし。なんせ三年のバスク部の連中やあの小里斯も現場にいたのだから。

（まったく、厄介な連中だよ。一度とあの公園の傍は通るもんか！ラツキーキーワードに確か……公園が入っていたけど、全然ダメじゃん！）

光岡さんには悪いが、まったくもって当たつてない。「湖」も入っていたが、今田の様子からみると完全に大ハズレである。ラツキーディスカウントで、最悪の展開になりそうだった。

（せうだよねえ、全部が全部占い通りになるわけじゃない。……やっぱ、『ラピス』でも買わないとダメなのかなあ？）

雑誌の合間合間で登場する、幸運アップのアイテムが載っている広告達。その中でひと際多い宣伝数と読者の喜びの声が大袈裟な『ラピス』の購入を一瞬考えたが、辞めた。そんなんで幸運が舞い降りれば、人間苦労はしない。

全てを悟った身体に夜風が身に染みた。

「……ちょっと、寒いなあ」

さつきまで火照った身体ははいつの間にか冷えていた。6月上旬といえども、夜は冷える。お風呂上りに薄手の部屋着のままで風邪をひきそうだ。せっかく身体を洗ったのに……この上にカレーの匂いがしみ込んだままのジャージを着るには忍びないが、一旦立ち止まり、懐中電灯で照らしながら袋からジャージを取りだした。案の定カレーと煤の匂いが満載だった。その匂いを嗅いだ時、カレー作りのことをふと思いついた。

ブキミちゃんから油を借りた私は、さつきと炊事場に戻ろう振り返ると、そこには頭一つ大きい険しい顔の星野君が仁王立ちしており、心臓が飛び出しそうになつた。

『油!』ときでこんなに時間かけてんじゃねえ!』

……などといつお怒りの「」様子だったのかわからないが、ともかく私は本気で焦り、なるべく明るい調子で『あああ油借りたよ?』と星野君に引き攣りスマイルを見せた。それよりも普段穏やかな星野君の顔をこんなに気難しい顔にする私の行動つて一体……などと落ち込んでしまった。あんな恥ずかしくて情けない場面を見られるとは計算外だつたが、そこはどんな辛い時も起き上がってきた不屈の精神を目一杯發揮し、精一杯気分を持ち上げるだけ持ち上げ、カレー作りに勤しんだ。

尾島はもうどうでもいいし、田宮君のことも仕方がないと諦めた。けれども全員平等の学年一モテ男子・佐藤君や、ましてや穏やかな星野君にまで嫌われたくない。嫌われたらそれこそ再起不能だ。

その努力の甲斐あつてか、カレー作りをしながら他愛ない話をしているうちに、星野君の顔もいつもどおりに戻つたので、一安心した。しかも、肉がシヨボイ量のカレーのわりには、なかなか良い出来栄えに2人揃つて歓びの声を上げた。終わつた頃に他の班の人があ戻つて来たとしても、それはそれで良かつた。だって、星野君と2人で作ったカレーは、意外と好評だつたから。

まあ、カレーはどの状況で誰が作つても間違いなく上手い。

(……星野君みたいな人は、きっと彼女を大事にするんだろうなあ。言葉は少ないけど、なんかこう、温かいし。神様は絶対そう言う人に幸運をもたらすよ。つーか私が神だつたら、普通に幸せなレールを引いて上げちゃうし…)

あんだけ星野君を不機嫌にさせたくせに、生意氣にも上から田線で彼の人生を応援する荒井美千子。そんな人の応援より、自分の中学生生活心配しろよという神の声が聞こえてきそうだ。

(将来は野球選手なのかなあ……いつも放課後ダッシュで帰るもんね。ところでシニアってどれくらいスゴイんだろ? 確かとっても厳しいって聞いたけど、あの住友爺の指導より厳しいのかな? 多分高校は甲子園常連の強豪校に行くよね? 将来はプロ野球選手で、ゆくゆくはキレイな女子アナと結婚か。星野君だったら、見持つの固くてお嬢様タイプがお似合いだよね)

その星野君はいまだ中学生なのに、人の人生設計を組み立ててはその内容に納得する荒井美千子。間違いなく私の心配などいらぬ星野君の将来より、オマエの現在の立ち位置を心配しろよという神の声……というより、キーン山田様の声が聞こえそうだ。

適齢期を迎えた息子を心配する出しやばったオカソの如く、「星野君には、絶対悪い女に引っかかる欲しくないわ」とウンウン頷きながら暗い夜道を歩いていると、ふとある事実を思い出した。

(……でも、既に引っかかっているかも。あの小リスが纏わりつく限り、星野君の彼女、絶対苦労するだろうな。星野君優しいから、無碍にもできそうにないし。こりや厳しいかもね。そうなると、他の4人も可哀想にねえ)

口クでもない連中だけど、これから先のことを考えると、なんだか気の毒になつた。今はいい、けど人は必ず大人になる。いずれ自分の道を決め、それぞれ旅立つ時がくるのだ。ずっと今の関係のままでいられるることは、絶対にあり得ない。……その時になつたら、彼らは一体どういう選択をするのだろうか。そして、どう心に折り合ひをつけるのだろう。

(……って、私ったら何を考えているんだか。それこそ彼らにしたら余計な御世話をもんよね)

私の未来への道は既に決まっている。夢に向かつてひたすら突き進む為に、今と言う時間を全て注ぎ込む事が良いことなのか。それとも、彼らのように、未来のことなど考える暇がないほど今を樂しく生きることがいいのか。完全に僻みなのはわかつていただけども……果たしてどちらが幸せだろつかと考えずにはいられなかつた。私はいつの間にか立ち止まり夜空の星を眺めながらそんなことを思つた、その時。

ザツ！

「」の場に相應しくない物音に我に返り、全身が硬直した。

(……あ、あれ?)

確かに音が聞こえたのだが、今は聞こえず辺りはシーンとしている。

「ま、まさかね……？」

私は「ハハハ」と一人笑つて、恐怖に染まる自分の心を鼓舞した。だからといって、音がした草むらしき方角へ懐中電灯を照らす勇気はない。

(……ややややだあ、きっと氣のせい……よね!)

洗顔セットが入っている袋をギュッと握り、私は宿泊棟に向かつて早歩きで歩き出した。

ザザザツ！

私の歩調に合わせて、今度こそ確実に聞こえてきた。

(……まままさか、幽霊なんてことはつ? !)

そんなことある筈がない。あつていいわけがない。だからって、このまま腰を抜かす余裕もあるわけない。

(ちよちよちよちよつと! 視きスポットのほかに、心靈スポットがあるなんて聞いてないよ! !)

涙目を前方の女子宿泊棟へ向けた。「ゴールはすぐそこだ、早くこの場から逃げ出さうと走りだした、その瞬間。

ザツといっ音と共に、後ろから無数の手が肩や腕に触れた。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイパーテキャンパーのハプニング？

人は本当に恐ろしい場面に遭遇すると声が出ない、そんなことを聞いた気がする。

「うーーー」

悲鳴を出したつもりなのに、声にならない空氣のよつなものが喉を取つて口から洩れただけだった。

心臓の鼓動がガンガンと鳴り出し、夢中でいくつもの手を振りほどこいつと暴れると、手に持つてゐる懐中電灯の光があらゆるところを照らした。といづ洗面セットと共に地面上に落ちた拍子に消えてしまつ。

（う、うわあっ？！）

同時に後ろから両腕と口をガツチリ塞がれると、やつと声らしきものが出了

「ムムムムうあっ！－！（だだだだれかっ！－）」

宿泊棟の窓から差し込むほんやりした明かりだけが頼りの真つ暗闇の中、私は無理矢理横の草むらの方へ引きずられて行つた。空しく響くいくつかの足音と私が引きずられる音。私はこれから自分の身に起つる最悪な事態を想像して震えあがり、必死にもがいた。（まままさか、そんな！ この小説、たしか年齢制限してないわよねっ？！ 良い子の皆さんが読む、清く正しい全年齢向けの小説でこんな破廉恥なことあっていい筈ないわよねっ？！）

「貞操の危機」という文字が頭を過り、マジで逃げないとヤバイと

渾身の力を込めて動かすがビクともしない。それどころがますます建物から離れていく始末。見えない相手との攻防の中で、息は上手く吸えず、心臓が嫌な感じで収縮と拡張を高速で繰り返す。とうとう感情の高ぶりが最高潮に達し、出したくても出せない悶哭が別の形で目から溢れた。

涙の粒がいくつも落ちると、私の口を塞いでいる主が一瞬身体を震わせ手を緩めた。その隙をついて大声を出そうと息を吸い込んだ途端、私の身体を押さえていた腕と口を塞がれていた手の力が一層強くなり、ギュウッと抱きしめられた。

(ヒィイイ～もう、もうダメ…)

とうとう覚悟をするように、いつまでもギュウッと口を開ると……。

耳裏、次に耳へとなぞるよう柔らかい感触を感じた。それはフワッとしたマシュマロのような感覚。

「ツーーー」

その生温かい得体のしれない何かに、思わず恐怖の震えとは違う種類の感覚が身体を走り抜ける。

『…………めん、な…………もし…………えから』

(え？ え？ ななななにつ？！)

聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの囁きが聞こえ、ゾワッと鳥肌が立つた。そして、わずかにカレーとスナック菓子のソースの

匂いが
？

(キヤベツ太郎……)

「こんな非常事態に、どうでもいいスナック菓子の名前が頭の隅に過つた。そして生暖かい感触が首筋に強く押しつけられ……。

（アーヴィング）ヤダ……イヤー！

押しつけられたと思いきや、急にガブリと首筋を噛みつかれ、離れたその時。

田の前でバツと明かりが灯り、亡靈のような顔が映し出された。

\$ & % # @ . ! - - - - -

私の意識はそこで途切れ、完全にブラックアウトした。

六
六
六

ボンヤリとした意識の中。

ペシペシ

(……なに?
頬になにかが当たっている?)

重い瞼を開けると何か人のようなものが天井に映っていた。手を動かすと天井に居る人間も同じような仕草をしている。どう

やら天井は鏡張りうし」とが判明したが、なぜこんなところに鏡があるのか。

普段用途することは使いづらい場所ではないか。

『……私?』

どうやら映っているのは自分の姿らしいのだが、薄い部屋着を着ていた筈なのに、何故か芸子のような着物姿だ。派手な天涯のついた丸いベッドの上に着物を着ていて自分がゆっくりと回っている。いや、回っているのは私じゃない、ベッドそのものが回っているのだ。オマケにムーティー満載で、無駄に薄暗い。

(……つーか、ここ何処よ？ 確か私、キャンプ場にいた筈では？)

田をぐるりと回し、少し起き上ると……どう見てもチンピラ風情の男が、いきなり視界に入ってきた。

(ヒイイイツー！)

ビックリして仰け反ると、田の前の男はニヤリと笑いながら人の上に跨ってきた。

その男は白いステッスの上下に紫のシルク素材の派手なシャツをインし、薄い色のレイバンなサングラスとゴールドチックなアクセサリーを嫌味な感じで身につけ、下品な笑いを浮かべていた。

手にしている諭吉の束で、私の頬をもつたいくぶるようじバく。一瞬見たときは元裏番かと思ったが、よく見ると……チンピラは桂寅之助というより尾島啓介だった。

どうでもいいが、その格好、意外としつくりキテるぞ。

『やつとお田覚めかい！ つたく、手間取らせやがって……まあえ

えわ。ほんなら早速熱い當みといじりや？ とりあえす……まあは

そのボインで「パフパフ」やな。へッへッへー！』

『はあ？！ ななんでアンタがここに……つて、パフパフう？！

ななな何寝ぼけたこと言ひてるの……』

『寝ぼけたのはオマエの方や！ ホレ、束が一つあるで～？ 晚でこれなら、文句あらへんやろつ！』

『ダダダダメ！ そんなはした金程度で……じゃなかつた！ お、乙女の身体をお金で買うなんて最低よ！ 人間じゃないわ！ どうぞいてよつ、この人でなし！』

『ホオ～よあわかつたのあ？ せうや、ワシは人間じゃおまへん……人間の皮を被つた化け物や！』

『自分で言つちやつたよ、この人！ ……今更だけどこれつて夢よねつ？ 夢ならこつちのもんよ！ 取り巻きがいない今がサシでやるチャンス！ 田代の恨みつらみ、カレーの屈辱を晴らしてくれるわつ！』

『なななんやつ、急に！ ちよ、アワワワ……そないな怖い顔せんといて、な？ やつ、だから、ぢや、ぢやう、ぢやうねんつて！ あれはな？ 僕と言う男がおるくせにオマエが勝手に星野かずゆきといイ感じでようやつとつたから……。だだ大体なあ！ 僕のお気に入りのオモチヤのくせして、雄臣だの、龍太郎だの、一幸だの、浮氣したのはそつちやん！！ ……つて、そないに怒らんでもあ～。あれはその……そう！ じう、お仕置きしとくかつ！ ……て、感じで、やな……』

…』

『お仕置きつてなによ！ それにいつアンタが私の男になつたのよつ？！ 勝手なことばかりい～！ お気に入りのオモチヤのわりには、よくもあれだけ飽きもせずに可愛いためつけがつてくれたわねつ？！ もうアタマきた……問答無用で成敗してくれるつ！』

『わつ、じらつ、ホテルの備品投げるなやつ！ わわわわかつた！ 謝るから落ち着かんかい！ とりあえずここはこの束2つと、俺の熱い大砲で勘弁してくれや、な？』

『オバカ！！ そんなんでこの一年一ヶ月の鬱積が勘弁できる訳ないでしょっ！ 大体そんな熱い大砲を持つている人はね、自ら大砲なんて言わないもんよっ！』

『……鈍臭くて地味な割には、言うことじゅうつうキツイやんけ……』
『アンタにだけは言われたくないわッ！ それにそんな二百万程度で熱い営みができると思つたら大間違いよッ！ ……そう、慰謝料と操を合わせて最低でも一億よ！ それくらいサクッと大盤振る舞いしなさいよッ！』

『……オマケにえらいガメついのう……』

『悪いけど、私は金髪碧眼と出会うために全てをかけてんの！ これから留学費用諸々でお金が必要なのよ！ ……つて、ちょ、やめ、汚らわしい手でそんなつ！ いきなりつ、アツ、ダメツ、もつと優しく……料金一億、キャッシュ前払いとヨロシク』

『ヒツヒツヒ、そつそつキャッシュ前払いせなアカンな！ ……つて、オイ！ まだ何もシとらんわッ！ それに金髪碧眼つてなんやつ？！ なによりも一億はどう見ても高すぎるやろッ！ もつと勉強せえつ！』

『フツ、見た目も小さけりや懷も小さい男ね！ それにここまでできたら、もうヤツたも同然でしょ！』

『んなアホな話、あるかい？！ しかも見た目も小さいつて何気に失礼なやつちゃな……言つとくけどな、オマエよりは大きいわいつ！ ……5ミリやけど……つて何気にギャグ路線に逸れてムード台無じじゃ！ えいクソッ、仕切り直しじゃわいつ！ 嘘くなやつ、じつちは大枚はたいてるさかい？！ 大人しく覚悟せえ！！！』
『あ～れえ～御無体なあ～……つて回り過ぎて……気持ち……わるい、オエエ～』

『アホ！ こんなイイ雰囲気な場面で吐くなやつ～……』

私はチンピラに帯を解かれ、グルグルと回り……しかもベッドもグルグルグル……。

今までたまたまつた恨みつらみを吐きだして心は軽く爽快だったが、ついでに胃の中も軽くなりそうな勢いだ。

(「う、カ、カレーが……！」)

ペシペシー

(カレー……いや、顔はやめな、バティバティ……って、三原順子姉さんも嘗つてゐるしじょうが！)

バチツ、バチツー！

(本氣で、地味に痛いんですけど……)

遠くの方で誰かの声がする。それもドスの効いた声が。夢の筈なのに何故か頬の辺りに感じる、リアルな鈍い痛み。

『……あひ、ボイン……』

(ちよつと、そのボインがいま直操の危機に晒されやうに……)

『オイ、オイシ！ 起きろ、ボイン！』

その声と肩を揺ゆぶられて完全に覚醒した。

ハツと田を開けると、そこには諭吉の束を持つてのチンピラ……ではなく。懐中電灯を下から照らした、ある意味立派なチンピラ候補である、裏番の顔がドーンと田の前にあつた。

「ああ、んぐぐぐぐ……」

「コンツー！」

『いてえつー』

(いつたあー)

悲鳴の途中で再び口を塞がれ、慌てて起き上がりつつしたら、後ろに居た人物に頭をぶつけ、目から星が出た。

『バカツ、落ち着け、ボインー!』

恐る恐る目を開けると、裏番の姿をした亡靈……ではなく、亡靈のような裏番・桂龍太郎が相変わらず懐中電灯を下からかざしたまま、「静かにしろ！」と鋭く言い放った。

……どうでもいいが、亡靈ちっくなヤンキーはそれはそれで恐ろしい。

目を見開いたままその亡靈を見上げていると、目が暗さに慣れ、彼の周囲に何人か人がいるのがわかつた。薄暗いながらも、そのメンツが誰だかわかると途端に震えが襲ってきた。

(まままさか、リンチ……とか……じゃないよねつ？！ カレーの時の腹いせ……って、あれは私のせいじゃないでしょ！ がつ！) 炊事場の件で復讐をされる！ とガクガク震えていると、後ろから聞き覚えのある低い声が聞こえてきた。

『…………ドウモ、コンバンワ。ゴ機嫌イカガデスカ、荒井美千子サン』
『…………』

普通に挨拶されているのに、何だこのプレッシャー。
口を押さえられているにも関わらず、無理して後ろを振り向けば、

見覚えがある。……『じ』ではない。つこわひ さまで（夢の中で）一億円払わず私の貞操を無理矢理奪おうとした、忘れたくても忘れない「ザ・悪魔」が、眼光を鋭く放ちながら弱い乙女を羽交い絞めにしていた。

『ほひはつーー』

『おつとー。…………隨分と暴れてくれたうえに、氣絶をしたと思いまや』「寧に寝言や頭突きまで……イテーうえに、世話が焼けぬつたらありやしねえ！…………『ト、ゴザイマスネ。荒井美千子サン』

『んむむ』おあつーーー』

暴れる私に、シーツと一緒に口に指を当てる、数名の亡靈……ではなく男子生徒達。

夢の続きにしては性質が悪すぎる。しかし、背中の感触が「こんどこそ現実だよん」と物語っていた。夢同様張り切つて悪魔に応戦したいところだが、モノホンの尾島は……いや、なかなか、手強そうだった。

『静かにしろ、チユウ！ 大声を出したら死つなるか……わかってるんだろ？』

史上最悪な展開だ。

ハイパーテキストのハプニング？（後書き）

パフパフ…ドリゴン ル参照。

一部健全な良い子の皆様には相応しくない表現がありましたことを深くお詫び申し上げます。m(—)m

ちなみに、チンピラの姿は一見見「ねずみ先輩」のような姿を想像していただければ幸いです、ポツポ。そして、夢の中の関西弁は意味はありません。ただ雰囲気を醸し出す為使ってみただけです。f()
^—^;) 菩提樹は関西がじもびーではないので、文法の使い方が正しいとは限りません、「了承ください」。

また、今時のラブホには回るベッドがないと思つ…私は当たつたことがありません（笑）。「今でもここにあるよー」と知つている方、「」一報お待ちしております！

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイブリッドキャンプ場のハプニング？

抜き足、差し足、忍び足……

ギシッ！－！

「－－」

慌てて歩みを止めた。

音を立てないように歩いていたつもりが、施設が古いのか。誰もいない廊下に派手な音が響き渡った。

皆さま、こんばんは。いかがお過ごしでしょうか。

荒井美千子は今、女子の宿泊棟の廊下にいます。何をしてるのかつて？ 見ての通り廊下を歩いている訳ですよ。え？ 前回の拉致られた件はどうなったって？ 実はあれから少し時間がたつてあります、へへ。え？ お楽しみのシーンを飛ばすな？ いやいや、そりや、年齢制限をしていないのでねえ、そこんところは勘弁してくださいよ。それに、そんな大したこと書けない作者でありやすからね、ましてや ピーンなんて、ねえ？ え？ そんなのいいから、詳しく聞かせろ？ まあまあ、落ち着いて。その前にこの田の前のミッションをコンプリートしないといけないんスよ。なんせ、たつた今、教師が寝泊りする部屋の前を突破したばかりでして。これから目的地である裏口の非常出口のところまで行かないといけないんスからね……。

……などと独り言をしている場合ではない。第一私は誰に報告しているのか。

（くそ……なんで私がこんな夜這いの手引きなどしなきゃならん

のー)

もし誰かに見つかつたらエライことである。しかし、ヤラねば、やられる。今後の中学生活がこのミッションの成功に全てが掛つているので、何としてもやり抜かねばならない。背に腹は代えられないといふやつである。

私はやつとの思いで目的地に到着し、周囲を確認した。非常出口の内鍵の施錠を……とそこで、ハンカチを出し、おもむろに内鍵に当てて解除した。別に指紋を採取されるわけではないとは思うが、念には念を入れる。

ガチャつ！

その音にビクッと動きを止め後ろを振り返つたが、幸いにも人は通つていなかつた。

ホツとし、再び扉のノブに手を掛けゆっくり開けると、さつきまで私を拘束していた男がサッとドアの隙間越しに姿を現した。こちらに向かってギラつと鋭い視線を超至近距離で投げつけていく。

(ヒィイツ！)

急に妖しい光を湛えた眼球が現れれば、そりや驚くつてもんである。どうやら既にドア付近に待機していたもよう。

『遅え！』

「……大変申し訳ございません」

……わざわざ危ない橋を渡つて協力してやつてると言つのに。

「指図」と「文句」だけは素晴らしく発達しているが、「お礼」と「感謝」という文字はどうやら進化の過程で退化してしまったようだ。

『……誰にも見られなかつただろうな?』

(中一のくせして、何故迫力だけは一級品……)

顔が片側だけしか見えてないというのに。無駄に威圧感がある類人猿に確認されると、私は慌てて首を縦に振った。それを合図にしなやかな動作でドアの内側に滑り込む尾島。その姿はどうからどう見ても街中で暴れる為に山から下りてきた不埒な猿。

『よし、よくやつた。……いいぞ、入れ！』

滅多にないお褒めの言葉だが、素直に喜べないのは何故であろう。尾島は後方に控えていた連合軍の同士に中に入れと合図した。次々と男子が非常口から侵入しては近くの空き部屋に入つて行く姿に背を向け、

『あつしひれで用済みでやんスね。』『おこづかせても
りこやか』

……と、せつないの場を退散しようとしたら、肩をむんずと掴まれた。

「全員無事に入るまで、オマエは人質だ。ついでにそこで見張つて
る』

尾島は振り向く私に「その廊下に立つてろ」と顎で指図した。私は仕方なく頷いて丁字の廊下の角でソワソワしながら見張りについた。

背後の物音にハラハラしながら、Jのニッシュヨンから解放されるのを今か今かと待っていた。

* * * * *

さて、前回のお話から冒頭のお話しまでの大事な部分を割愛させてもらつたわけではない。

尾島に拉致られた後、私が落ち着いて話ができるようになるまで、かなり時間を食つてしまつたらしい。なので彼らは焦つていた。しかも、当初は私を拉致るつもりはなかつたそうだ。詳細はこいつである。

毎年恒例の「桃色ハプニング大作戦」。

代々男子の間で受け継がれているこの作戦を、もちろん尾島達を筆頭に、今年も決行することとあつた。各クラス、女子のところに忍び込む希望者を募りメンバーが決定すると、残る男子に囮と援護射撃を頼んで先鋭部隊はミッションを開始した。

自分たちの宿泊棟を抜けるのは問題なしだ。もちろん玄関などから堂々と出るわけがない。非常出口やベランダ、一階の者は窓から出るのである。もちろん周囲を見渡し先生がいないのを確認してから、である。

ここまでは良い。問題は宿泊棟の間に立ちふさがるグラウンドである。ここには御存じの通り、ナチスドイツ軍が徘徊しており、普通にゾロゾロ立つて歩いていては箕輪ヒトツラの放つた教師達に見つかってしまうので通れない。

ではどうするのか？

『歩腹前進でいくんだよ』

ハツハツハ、そんなバカな！

……と言つような顔をしたら、敵の包囲網を決死の覚悟で潜り抜け

てきた連合軍の皆様に睨まれた。よくよく見れば男子全員前が若干汚く、冗談ではないことを物語っていた。彼らは本当にやつたのだ。お陰で女子の宿泊棟にまで無事到達し、お楽しみの覗きスポットを堪能することに成功する。

まあ、その堪能した部分は濁し、口には出さなかつたが。

しかし私にはすぐわかつた、残念ながら顔が全て物語つていたから。彼らの顔は妙に赤くてスッキリした表情だつた。思わずジロリと睨むと、全員気まずそうに視線を逸らした。

『さて、お宝全裸も見れたし、いよいよ女子の宿泊棟の中に忍び込むか!』

……と意気揚々と侵入口である非常用裏口に向かつたまでは良かつたが、実際行つてみれば鍵がかかっていた。代々受け継がれた秘伝の教えを忠実に守つたのに、何故鍵がかかっているのか?

答えは簡単だ。中に手引きする女子に話をつけるのを忘れたからである。

こればっかりは、スパイ協力者がいなければさすがの連合軍も無理なのだ。もちろん正面から入れるわけもない。

『……おい、オマエ女子に言つてなかつたのか?』

『は? オレは知らないぜ。オマエ言つたんだろ?』

『ええ? 僕はとっくにオマエが言つてるものと……』

連合軍は慌てた。

それよりこんなところで、「オマエが」「オマエが」「オマエが」などと責任のなすりつけ合いをしている場合ではない。勢いとヤンチャが売りの先鋭部隊は(こうじうことに)進んで参加する奴は、大概クラスでもヤンチャで品行方正・頭脳明晰から程遠い奴らばかりである)、無い知恵をなんとか絞つて解決策を練つた。その結果、

女子が数名個室シャワーを使うのを思い出したのだ。その彼女達と接觸して、中から鍵を開けてもらえばよいと結論を出した。二一世紀に入った今なら携帯のメールでチヨチヨイと送れば済むことだが、この時代は携帯電話など夢のまた夢という時代だった。からうじてあつたのは無線やトランシーバー。奇襲作戦を盛り上げるアイテムとなりそつだが、たかだか女子の宿泊棟に忍び込むのに、いちいち「～です、オーバー！」などのやり取りはハッキリ言つてマヌケである。

連合軍は「善は急げ！」と女子宿泊棟の裏手にある草むらに潜伏して、個室シャワーを使い終わった女子の帰りを待つた。
……しかし、待てども待てども女子は来ない。今年は運が悪かつたのか、個室シャワーを使った女子が少なく、連合軍が彼女らの存在に気付いた時は、すでに宿泊棟に戻った後だったのだ。そのことを知らない連合軍共が待ちくたびれて諦めかけたその時、呑気に考え方をしていた私が通つたのである。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

エイプたのキャンプ場ハプニング？

私を見て一瞬連合軍の幹部達は躊躇した。

マッカーサー

そりやそうだろう。連合軍の最高司令官である尾島を筆頭とした幹部達と私は、数時間前まで最悪の関係だったからだ。果たして彼女に頼みこんで素直に「いいよ」と快く引き受けてくれるか甚だ疑問だ。むしろ逆に密告され捕虜になる可能性が大だった。

再び諦めモードに入った連合軍。

……が、代々続いているこの奇襲作戦が自分たちの代だけ中止して撤収するなど、プライドの高い最高司令官が納得する筈もなく。私を力づくで捕獲し脅して共犯にしてしまえばいいという考えに達したのだ。

『どうせ地味でドンくさい荒井美千子のことだから、ちょっと脅せば口ひとつと言いなりよ』

実際に物騒で失礼極まりない話である。

しかし連合軍は尾島の意見に頷いた。言いだしつぺである最高司令官と幹部達自ら捕獲に乗り出し、作戦は見事成功！……だったのだが、ここで誤算が生じる。思つた以上に捕虜が暴れ、泣きだす始末。さすがに暗闇の中で、か弱い女子生徒を手籠にするのはマズイだろと仏心を出したのが失敗だった。危険を承知で懐中電灯をつけ安心させようとしたのが仇となり、突如現れた裏番の顔に捕虜がビックリして白目向いて気絶してしまったのだ。お陰で私が起きるまで5分のロスタイルムができたという。もちろん無理矢理起こしてもパニックになる始末。

『別になんにもしないから、とにかく落ち着け！』

裏番の御言葉に、落ち着けるか！！と文句を言いそうになつた。大体背後から羽交い締めして口を塞いだ拳銃、草むらに連れ込むなんて……どう見てもまつとうな人間のすることじゃない。本気でリンチか貞操の危機かと思ったのだ。あの時の恐怖ったら、味わつたものでないと、女でないとわかるまい。涙目で睨むとさすがに連合軍はバツの悪そうな顔をしたが、ここで時間を食つてられない、と思つたらしい。

未だに懐中電灯を顎の下から照らしながら、目の前でヤンキー座りをしていた桂龍太郎が、強硬突破に出た。

『ボインに頼みがある』
『おおおお断りします』

田の前の亡靈は途端に険しい顔になつた。

けど私は曰くの彼らの行いから、どうせ口クなことではあるまいと反射的に口応えしてしまつた。非常にマズイと思ったが、時既に遅し。出でしまつた言葉は取り戻せない。もしなにかされたら大声を出し、雄臣推薦の痴漢撃退装置の紐を解除するつもりだった。さつさと逃げようとして立ち上がろうとした私に、いまだ背後から抱きついている尾島に引っ張られ、目の前の桂龍太郎に肩を押し込まれた。いよいよポケットに忍ばせた警報機の出番だと取りだす前に、後ろの最高司令官に頬をガシッと抑えられ、痛いほどグリンと後ろを向かされた。

……どうでもいいが、首がグキッと嫌な音がなった。それに、腰に回されている腕が徐々に上へ上へと上がってきてるのは気のせいだろうか。ちなみに風呂上がりの上に、こんな大事件に巻き込まれると思わないで、ガツチリタイプのブラではなく、生地が薄めの可愛いピンクのレースが付いているブラである。非常に危険極まりない。

『……いいか、良く聞けよ、ヒヨットコ！ 大人しく交渉に応えるなら危害は加えない。約束する。しかし俺達の交渉を断つた場合、この先の中学生生活がどうなるか、わかつてゐるよな？ それが嫌だつたら、俺達に協力するしか、ねえよな？ おつと、ここで暴れて大声を出しても無駄だぜ。この状態で見つかれば、オマエも立派な同罪だ。つーか、絶対道連れにしてやるー』

完全に脅しである。

それにもう既に危害を加えている状態で何を言うと文句を聞いたいが、この時点で捕虜に選択権はない。私は仕方なく頷くと、連合軍は安堵のため息を漏らした。やつと頬を押さえている尾島の手も外れ、「ヒヨットコ」から解放されたが……なにより首と頬が超痛い。

『そんじゃ、交渉開始だ。わりいんだけどよ、女子の宿泊棟の一階の奥、大浴場へ行く廊下の突き当たりを右側に行って、さらに奥に非常用の出入り口があるんだよ。けど鍵がかかっていて外から入れねえんだ。そこで、ボイン、オマエの出番だ。そのカギを中から解除しろ。いいか、誰にも見つかれないようにしろよ。途中センサーの部屋がある筈だ。そこは特に気をつけて行け。以上だ』

なにが「以上」だ、裏番よ。

そんな高等なミッション、この地味でドンくさい私にできるとお思いですか？ ……という不安そうな顔を裏番に向けると、裏番は無言で頷き「健闘を祈る」と返してきた。後ろの最高司令官はよいしょと立ち上がり、私の脇に腕を通して持ち上げ立たせてくれた。そしてクルツと自分の方に向けて、肩にポンと手を置く。

『そういうことだ。全ては君の腕に掛っている。このミッションが

無事達成されれば、君の1組での学校生活は保障される。この俺様が約束しよう。なんなら昨日のこと、俺様自ら噂をばら撒いてもいい。東雄臣に彼女がいるってな。大体な、チユウも悪いんだぜ？あんな紛らわしい態度とるからこんなややこしいことになるんだよ』……

オマエにだけは言われたくない、そう思った。

『ま、そうだよな？ 確かにあの男とチユウじやなあ～どう見てもおかしいと思つたんだよ！ 気の毒だけどせ、幼馴染つてそんなモノだよ。ハツハツハ～』

『……』

既に尾島啓介という名前は、「マル秘！！ 美千子のイ・ケ・ナ・イ ブラックリスト～迷わず瞬殺したい人間達～」に掲載済みだが、たつた今瞬殺優先順位第1位の雄臣を抜いてトップに躍り出た。

そうとも知らない目の前の司令官の瞳には、数時間前まで感じていた冷たさは既になく、好奇心旺盛で悪戯好きな少年の輝きが戻つてきてている。おまけにずうずうしい態度まで。

『お、そうだ。さつきの歩腹前進の時、ここヶガしたんだよな。確かオマエ絆創膏持つてただろ。カレーン時、星野^{かずゆき}に渡していたもんな。遠慮せずに出せよ。しうがねえから、俺様ももらつてやるぜ』……

厄介な大物妖怪がもう一人増えた。

そつと見えないように星野君に渡した筈なのに……あの距離で一瞬の出来事を見ていたとは。わかつていたが、普通に人間ではない。無言で絆創膏を取りだし渡すと、ごつそり持つてかれ、『他に怪我した人～』と勝手に配布する始末。私はそれを複雑な気持ちで眺め

ていた。

(事態が悪くなつてゐる……いつそのこと、今までの最悪の関係の方が良かつたのでは)

私は不安と不満で胸を一杯にしながら、満天に輝く星空を見上げた。

* * * * *

「つ、疲れた……！」

やつと連合軍から解放された私は、ヨレヨレな姿で自分の大部屋へ戻つた。

リラックスと身体を綺麗にするためにシャワーを浴びに行つたのに……連合軍のせいで髪は乱れるわ、服は汚れるわ、最悪である。

部屋に入ると既に奥住さんと光岡さんの姿はなく、大人しめな感じの女子が数人いた。彼女たちは部屋に入ってきた私を遠くから眺めていたが、私は極度の疲労の為、挨拶する余裕もなく静かに自分のカバンのところに戻り洗面道具をしまつた。

(2人とも、先に行つたのかな)

乱れているであろう髪型を整える為に手鏡を覗けば、私はすっかり生活に疲れた中年のオバハンのような顔をしていた。ボサボサに乱れた髪、目は充血し、涙の痕まである始末。しかも髪を止めたいた黒いクリップが拉致られた時に落ちたのか、いつの間にかとれていた。

(あ～あ、探しにいくのも面倒だし、あんな暗いところもう行くのヤダし……。それより、絶対和子ちゃん達に何かあったのかとツッコミ入れられるなあ。あ、行く前に顔を洗わなきゃ！)

少しでもマシになるように、髪に念入りに櫛を通した。

「あ、あの……荒井さん」

背後から弱弱しい声を掛けられ、後ろを振り向くと、二人の女の子が立っていた。それも少し複雑な表情をしながら。

「……は、い？」

「……あ、その……えっと、奥住さんと光岡さんがね？ 先に2組に行つてるからって、伝言頼まれたの。帰つてきたら、3階の『百合の間』に来てねって、言つてた」

「あ、ありがとう」

普段ならありえない光景だった。

誰かさんのせいで、クラスの連中は男女問わず私に話かけるなど滅多にない。これがいつも私だったら、それこそ尾島に拉致される前だつたら、飛び上がって喜んだかもしれない。けれどもこの時の私は疲労困憊の状態でグツタリしていた。我がままを言わせてもらえれば、このまま2組に行かず寝てしまいたいくらいだった。なので、お礼の声も霸氣がなく素つ気なくなってしまったのだ。けれどそんな私の態度を彼女達は何を誤解したのか、ますますバツの悪そうな顔をして顔を見合させた。一人のうちの一人、縄跳びで一緒の回し手だった「鈴木さん」が私の前に座った。

ハイパーテキストのハッピーハッピング？（前書き）

この章は多分に過激な表現が出てきます。PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ハイブリッドキャンプのハッピーハウス？

鈴木さんは俯いていたけど、おもむろに顔を上げ苦しそうな切ないような表情で私を見た。

「あ、あのや。荒井さん、気にすることないよ。原口さんと成田さん、尾島君達に気に入られようとして、荒井さんにあんな態度なだけだから。ほら、荒井さんと2組の宇井……さんと笹谷さんだけ？ 尾島君達と仲良わけでしょ？ だから気に入らないんだよ。それに今日の縄跳びだつて、私達、結構頑張って回したのに。あんな文句言つたのも、多分悔しいからだと思つ。だから、彼女たちのことは気にすることないよ」

「は？」

田の前の鈴木さんが熱く語るので、田が点になってしまった。

確かに田の前の彼女たちは原口グループではない。しかもクラスで大人しい感じのグループに入る子達だ。いつたい急にどうしたといふのか。それに……何を誤解してゐるのか、和子ちゃん達と尾島は決して仲良くない。むしろ犬猿の仲と言つていい。

「あ、あの……今日の油の件、ごめんね？ 私、怖くて……。私が隣に回れなきや、あんなことにならずに済んだのに。私も悪かったけど、いくらなんでも、成田さんと尾島君達の態度、あれはないと思つ」

「え？」

今度は田中さんが鈴木さんの隣に座り込み、涙声で謝つているのをポカーンと見てしまった。

「『めんね、私達、助けてあげることができなくて。そうだよな、
荒井さんいつも尾島君達にあんな酷い態度取られたり、桂君と噂されたり、三年の女子に呼び出されたり……平然として頑張っている
けど、平氣な訳ないよね？ 本当にごめんね』

とうとう鈴木さんと田中さんはグスグスと泣き始めてしまい、今度は私の方が面喰つてしまつた。

「あああの、2人とも、一体なにがどうして……」
「ううう、グスッ……だつて、荒井さん泣いてたんでしょ？ だつて目赤いし、涙の痕が」「ほ、本当に、ごめんなさい……」
「……」

言えない。

まさかその尾島や裏番達に拉致られた恐怖で泣き、脅された揚句、今後の中学生活を掛けて夜這いの手引きまでしましたとは。

私は引き攣り笑いをしながら、激しく誤解している彼女たちに「あああの、大丈夫だから、気にしないで」と慌てて慰めた。確かにあの時は辛かつたが、もうその辛い日々とお別れが来そうだ。……たぶん。……きっと。

「あ、荒井さんって、本当にすごいね。私だったらもう学校来れないかも」
「うん、そうだよね、尊敬する」
「……ハハ、そ、そんな、大袈裟な」
「それに、さつき伏見さん凄かったよね！ 荒井さんには悪いけど、ちょっとスッとしちやつた。成田さんって、ちょっと、ね？ あと、佐藤君もかつこよかつた！ さつすが佐藤君よね！」

「本当！ 荒井さん、羨ましいなあ。なんか佐藤君の口調からして知り合いつぽかっただけど、一緒にクラスだつたの？」

「それに、ほら……東先輩とも噂もあるでしょ？」

鈴木さんと田中さんは涙を引つ込め、ウソトリとした表情で言った。

（いや、別にその2人とは、まったく何にもないんだけど……って、そうだ！）

私はこじわざばかり、自分の身に降りかかっている誤解を解くため、昨日入手した最新情報を漏らした。

「あああのね、みんな誤解しているよつだけど。東先輩、彼女いるから。前の学校の人だつて。だから私、全然関係ないよ」

「…………え～っ！ うつそお……」「…………」

田の前にいる田中さんと鈴木さん以外に、遠くに離れていた、数名の女子からも同時に悲鳴が上がった。

「…………」

（聞いてたのか……）

一斉に私に群がる女子達。少し前までは決してあり得ない光景に、私は心の中でそつと溜息を吐いた。

* * * * *

「…………ふう」

トイレで顔を洗い、顔を上げてタオルで拭うと、疲れた顔が鏡に映つた。

(あ～あ、一晩、いや二晩です)「年を取つた感じだな。絶対十年分の氣力、使い果たしたよ)

大きな溜息を吐くと、タオルをお菓子や水筒などが入っている袋に入れた。雄臣の話題を聞き出そうと迫つてきた鈴木さん達から逃げるようになってきたので、髪の毛もまとめずにダラッとしたまま。ヌボーとした顔のまま鏡を覗き込み、髪をピンと輪ゴムでトップにまとめてトイレを出た。

なんとかマシな感じまで仕上げたのだが、目の充血はどうにもできなかつた。重い足取りで和子ちゃん達のところに向かうが、……唯一キヤンプで楽しい時間の筈なのに、あまり気が進まない。(疲れたな。一応顔を出すだけで早めに部屋に戻ろう)

自分の部屋の前を通り過ぎながら廊下をトボトボ歩いていると、先にある隣の大部屋から黄色い声が聞こえた。そこは原口美恵と成田耀子がいる部屋である。この声の感じからして、おそらく尾島達がいるのだろう。

ついそれっきりまで拉致された出来事があるで夢のようだった。

頭の中で連合軍の先鋒隊員達の顔が浮かんでは消えていく。あの先鋒部隊には、佐藤君と星野君の姿はなかつた。居れば絶対にあんな無茶なことはしないだろう。例えそれが地味で鈍臭い私に対してもあつても。

(やうやく、やっぱり紳士は違うんだよね。でも……田富君はいたな)
そう、田富君は尾島の傍にいた。同じ部活の後藤君とも仲の良い彼は、最近では星野君や桂君に代わつて「口クでもないんジャ一」に入隊しそうな勢いだ。今日のカレーの油事件の時も……悲しいが尾島や原口達と一緒に態度だった。オマケに連合軍のメンバーに混じっていたという事実に、正直落胆の色を隠せない。
(もつと紳士っぽい人柄を想像していたのに。入つて見かけによらないんだな。いくら目尻に皺があつて、私好みの顔でも、ハア。)

再び大きな溜息を吐いた。

どうやら恋というのは、夢見る間は人を幸せにするものだが、実際はかなり厳しいもので、そう上手くいかないものらしい。現に今私には、どうも山野中の伝説の一つである「桃色ハブニング」から程遠いようである。

(それなのに、そのほど遠い私が「桃色ハブニング」作戦に加担せねばならぬとはっ!)

最も縁がない者がその手引きをしなければならないこの現実。この世はなんと無情で皮肉なのだろう。まったく、一体誰がこんなしようもない作戦とネーミングを考えたのか。「桃色ハブニング」というより、「もういいよ、ハブニング……」とは非改名して欲しい。しかも今日カレーのときにあれだけ酷い扱いを受けたにも関わらず、いや、中一になつてからずつとなのだが、そんな敵同然な奴らに手などを貸してしまったお人好しごりに、正直自分でも飽きてしまつた。

(私つて、相当マヌケでオメデタイだろ?)
なんだか無性に腹が立つてきた。

プリプリと怒りながら歩いていたら、真横の成田耀子と原口美恵のいる大部屋がガラッと開いた。

急に開いたので、私はビッククリして音の方を見てしまった。

中から開けたのは「ブキミちゃん」こと伏見かおりだつた。彼女の背後に部屋の中が見え、中にいたメンバーも音にビッククリしたのか、話を止めてこちらを見た。

案の定、中には尾島達がいた。
小関明日香まで。

輪の中心にいる、尾島と一瞬目が合つた。

が、彼が何か言おうと口を開きかけたところで、私は慌てて開いた襖から廊下へプイッと視線を戻し、

『ああああっしは部屋の中を見てませんぜ！　ましてや夜這いしてきたクセモノがわんさか居るなんて間違つても言こやせん、へえ！』

……といつよに、その場から立ち去つとした。けれどもその前に、その尾島や男子の視線と女子の厳しい視線が遮断される。

バン！！

なんとブキニちゃんが勢いよく襖を閉めたのだ。

「荒井さん！」

「ハツ、ハイイ？」

こきなりブキニちゃんはメガネを上げながら一歩ズズイと踏み込んだ。その顔は笑つておらず、不機嫌さが滲み出ている。私は後ろめたさ満載の為か、声が裏返つてしまつた。

「悪いけど、荒井さん達の部屋に行かせてもらえるかしら？　ここは部屋、ひぬさい誰かさん達が押し掛けてきたせいでもつくり休めないの。……いつたいどうやって忍び込んだのかしら。非常に迷惑なのよね」

ギクッ。

その原因に一枚噛んでいたりして。何気にブキニちゃんの鋭い視

線が痛い。眼鏡越しなのに。

「あ……う、うん。ビリビリ」

「助かったわ」

「い、いえ」

圧倒的に人を寄せ付けぬオーラを放ちながら、ツカツカ歩いていくブキミちゃん。その姿を恐る恐る見送っていたが、ハツとカレーの時のことと思い出し、私達の部屋に入ろうとした時、思い切って声をかけた。

「あ、あのー 伏見さん」

「なに?」

「カ、カレーの時なんだけど……」

「カレー?」

「そそそ、油、ありがとうございました」

丁寧に頭を下げるが、ブキミちゃんはそんな私をジッと見た。彼女の視線が痛いくらい刺さり、あまりの気まずさにどうやってこの場の会話を終わらせよいかと考えを巡らせながらモジモジしていると、ブキミちゃんは急に例の不気味な笑顔でニヤリと笑った。

ハイブリッドキャンプのハッピーライフ？

「……いいのよ。それよりワタクシの方が頭を下げなければ、名前間違えてごめんなさい。さつきも言つた通り、昔のクラスメートに似てたの。横顔なんかソックリで、思わず間違えてしまいました。だから悪気はないの、信じてくれるかしら？」

「あ、う、うん……」

「よかつた」

ブキミちゃんは口に弧を描き、まだこぢらをジッと見てる。さすがにこれ以上和子ちゃんのところへ行くのが遅くなってしまうとマズイと無理矢理理由をつけて、会釈だけしてその場を後にしようとしたら、今度は逆に私の方がそのハスキーボイスに呼び止められた。

「荒井さん」

「は、はいっ！」

「今までに……似てるって言われたことないかしら？」「ワタクシが間違えた『桃田さん』っていう人と。特に仲の良い『笹谷さん』辺りに」

ドキッ。

既にその貴子から言われてたりして。何気にブキミちゃんの微笑みが怖い。滅多に見れないのに。

「いといいえつ！ そそそそんな名前、あさき聞いたことないじゃいませんっ？！」

「……そう。てっきり聞いているかと思ったわ」

「ハツハハハハ」

「今度是非聞いてみて？ 面白い話が聞けるかもしだせんわ」

「……ハ……ハ……」

「もつとも、荒井さんことについては迷惑極まりないでしちうけだ」

「……」

フツフツフツフツ……ヒギラリと歯列矯正を見せながら笑う、ブキミちゃん。

私は引き攣り笑いをしながら、その場から即効退散しようとしたら、再び「ねえ」とブキミちゃんに呼び止められた。

「余計なことかもしれないけど。もし、お友達のところに行くんだつたら、髪、下ろした方がいいんじゃない？」

「え？」

「首筋に『赤い噛み痕』ついてるわ。見掛けによらず意外とやりますのね？　お相手はいったいどこの誰なのかしら？」

一瞬、ブキミちゃんの言つてることがわからなかつた。
けれども彼女はニヤニヤしながら、自分の耳の後ろの首筋辺りをトントンと指で叩き、「口口よ」とジロスチャーをしている。

「え？　か、噛み……痕？　……つ……」

ブキミちゃんが指している同じ場所に手を当てながら呟いている途中、ボンッと急に顔が熱くなつた。その噛み痕が、「いつ、どこで、誰に」つけられたか思い出してしまつたからだ。

（アアアアイツめえつー！　噛み痕つて、痕がつくくらい噛みつきやがつてえつー！－）

犯人は間違いないあの男に違いない。

ずっと私の後ろにいた男は尾島だつたから。こんなところに思つくり痕を……誰かに見られたら（既に一人、しかもブキミちゃんに見られているが）、エライこつちやである。特に奥住さんや和子

ちゃん、ましてや原口や成田、それにチイちゃんに見られたらマズイ。なんとしても隠し通せねば！

私はその場でアップしていた髪に手を伸ばし、ゴムヒヤンを急いで取つた。とりあえず髪をおろせば噛み痕は見えない。

「あら、自覚はあるのね。……フフ」

「……」

しまつた……墓穴を掘つたらしい。

「あああああー！ ジハジハジハジハ」とまつ

私は思いつきり拳動不審満載な口調になつてしまつた。しかしこのまま放つて置くわけにもいかない。熱意を込めて縋るよつにブキミちゃんに近づくと、彼女は益々残酷な微笑みを湛えた。

まるで「妖怪人間ベム」に出てくるベラ様のようなお顔で、目元も口元もギラつとさせながら声無く笑う。

「わかつてますわ。『一人だけの秘密』……つてことね？」

シーンとした廊下に低く響く意味深なブキミちゃんの声に、私は音と風が出るほど何度も頷いた。

「あら、一人忘れていたわ。その噛み痕をつけた、『3人の秘密』つてところかしら？」

ブキミちゃんはわざわざ私の耳元で囁いた。私は顔面蒼白になり、無意識のうちに再び噛み痕を抑えた。眼鏡越しに見る彼女の視線は、相手の隙を一瞬たりとも逃がさぬ狡猾な獣のよう。

「やつやつ、忘れてました。荒井さんに渡すものがあったの」

黙……いや、ブキミちゃんはまだニヤリとしながら、手に持っていたカバンからスッと黒いモノを出した。

「これ、荒井さんのじゃない?」

そう囁いて私の目の前に差し出したのは、拉致騒ぎのときに落とした簪の、私の黒いクリップだった。私はビックリして「あっ!」といつ大げい声を上げると、彼女はさらり色濃い笑いを披露する。

「落ちてたわ。個室シャワーへ行く道の途中で」

「ふえっ?!」

「実はワタクシも急にアレになつちやつて、個室シャワーへ行きましたの」

「え?」

「帰り道に懐中電灯照らしながら歩いてたら、偶然見つけました。確かシャワーに行く時、これ付けていたでしょ?」

「…………あ、ありがとう……」

「いいのよ。そうよね、いくらなんでも全裸をタダで見られるなんて、納得できませんわよね。こういう時は個室シャワーに限りますわ」

「いつ?…」

私はブキミちゃんのセリフに目をひんむきながら彼女の顔をマジマジと見詰めた。私の顔にはこう書いてあつただろ?。「何故覗きスポットのことを知っているのか」と。

ブキミちゃんはクイッと眼鏡を上げた。

「大切な部員が教えてくれました。『彼』には感謝しなくては

「…………力、レ…………つて、まままさかつ？…」

『彼』に該当する人物の顔が頭の中を飛び交う。鬼神・修羅というその名の通り、色々な表情を次々と貼り替えながら漂う姿は、亡靈よりも性質が悪く恐ろしい。

「『彼』って、ほんとうに素晴らしいですわー。お付き合いでいる人がいるなんて非常に残念。ま、そんなのはワタクシにとってどうでもいいことだけど」

「……」

そう言つた彼女は妖艶な微笑みを浮かべながら、顎に手をやつた。生まれて初めてみた彼女の艶めいた笑顔にドキッとする荒井美千子。まるでマフィアの情婦のような印象を受けるのは何故だらう。やっぱりその筋との縁が深かつたりするのだろうか。

「でも、なかなか落ちそうになくて。のらりくらりとかわして、まるでいくら求めても掴めない『風』のようですわ」

「……」

「もしくは難攻不落の要塞つてどこかしら」

でもワタクシ、ゾクゾクするの。ああいう裏表がある男。

顎に当たる手を、まるで涎を拭くように顔の縁をゆっくりなぞる、

ブキミちゃん。

それはまるで、暗闇に潜む、ラブハンター愛の狩人・黒い雌豹。

(やややややー ！ ） なんときにキヤツチフレーズなんて命名しどりの場合でないからつ、私 !)

私は『クリと唾を飲み込み、鬼神・修羅を『風』というポエマーなブキミちゃんを黙つて見た。

(ヤヤヤヤバイよ、雄臣、アンタ完全に見抜かれてるよー)
よりによつてブキミちゃんが、雄臣の眞の姿を見抜くとは……予想外の展開に思考が追い付いていかない。いや、ある意味大物同士、下々には理解できない何か相通じるものがあるのか。

ブキミちゃんは無言しか通せない私の手を取り、スッと私の落としたクリップを静かに私の手に握らせた。

「 実はワタクシ、『彼』に頼まれていますの」

ブキミな容姿とはほど遠い、艶を含んだハスキーボイスが耳元で囁く。

「 荒井さんつて『大事な妹』なんですつてね。『荒井美千子に何かあつたら、よろしく頼む』って言われているの。だから、今日のフレーの時も…… そう言えば理解していただけるかしら ? 」

「 …… 」

「 ここのワタクシが尾島や原口みたいなお子様を相手にするのは気に入らないけど、これも『彼』の為だから、仕方なく、ね？ いずれは荒井さんとも姉妹のよつな関係になるかもしれないし。これからも仲良くやつていましょーう？」

「 …… 」

「 大丈夫よ。今日の事は内緒にしておいてあげますわ。ましてや尾島達に草むらに連れ込まれたなんて『お兄さん』や原口達に言いませんから」

「 × ÷ @ & % # ! !」

「ワタクシって何故か人の弱みを握ってしまうことがあります
のよ。でも、くだらない記憶はすぐ忘れてしまう性質だから、荒井
さんには是非大船に乗った気持ちでドンと構えて欲しいですわ」

フツフツフツフツ……オホホホ……！」

狡猾な黒い雌豹は、不気味な笑いと異様な空気を残して部屋に入
つて行つた。

「……」

私は青褪めた顔をしながら、無言で彼女が消えた襖を眺めていた。

「ここにも妖怪が一人、と思いながら。

* * * * *

「ここから先は蛇足になるのだが。

宿泊施設の廊下でブキミちゃんから知りたくない事実を色々聞
かされた私は、完全に放心状態だつた。

フラフラしたまま和子ちゃん達が待つてゐる「百合の間」へ向か
い無事友達と合流できたが、前日の夜から続く睡眠不足と色々な意

味で疲労状態だつた私は、彼女らに『雄臣には彼女がいるらしい』情報を投下した直後、「真っ白に燃え尽きたぜ……」とホセと対戦した矢吹 ヨーさながら瞳を閉じて爆睡してしまった。消灯時間になつて奥住さんと光岡さんが起こしてくれたそつだが、ピクリともしなかつたそうだ。結局そのまま目を開けず朝までグッスリで、気が付けば和子ちゃんと貴子の間に寝ていたのであつた。

一方、見事「桃色ハプニング大作戦」を大・成・功・！……させたかのように見えた連合軍。だがそれは問屋が卸さなかつた。結果から言えば、結局尾島達は先生に見つかり、一晩じゅう正座と反省文の刑に処せられた。もちろん全員捕まつたわけではない。各クラスに散らばつた連合軍達、ころ合いを見計らつて撤収した者は無事男子の宿泊棟に戻つた。しかし尾島達は消灯が差し迫つているのにも関わらず、ずつずつしきも、

『今帰つたらかえつて危険だ！　このまま女子の寝床で夜を明かして、明け方戻ろうぜ！』

などと不埒な意見を言いだしたのだ。もちろんそんなオバカな意見を率先して言う奴は一人しかいない。

先生が各部屋に見回りに来るという情報が流れるごとに、慌てて女子の布団の中に潜り込む男子生徒達。しかし、原口美恵と成田耀子のいる部屋にだけ集中すれば、そんなベタな方法で見つかぬ方がウソつてもんである。すぐに機転を利かした尾島は何を思つたか、原口美恵が止めるのも聞かず数人連れて隣の部屋に移つた。そこへちようど奥住さんと光岡さんが和子ちゃんの部屋から戻つたタイミングと重なり、無理矢理彼女たちと共に部屋に押し入つた。そこは私を含め1組の中でも大人しめの鈴木さんや田中さんがいる部屋。突然の男子の訪問に大人しい乙女たちは黄色い声を上げ、ブキミちゃんは目を吊り上げたが、事態は先生の見回りが迫る刻一刻を争う事

態。無理矢理布団にもぐりこんだまでは良かつたが、ある一人の男子のせいで見回りに来た先生にバレてしまう。

いくら布団にもぐつたところで、180センチの後藤君のデカイ身体が、女性サイズに見えるわけなどないからだ。

どうでもいいが……まったく、アホすぎるとしかいよいのがない。

そして。

後日このキャンプ場に一本の匿名の電話が入った。

その電話の内容に驚愕しつつもキャンプ側は当初、「どうせ悪戯電話だろ?」と取り合わなかつた。しかし、「一応念の為に調べておくか」と宿泊棟の大浴場とその周囲を点検したところ、外から覗ける死角があることが判明したのだ。すぐ外から覗けないよう補強し、後輩が次の年このキャンプ場へ行った時は既にお宝生全裸は拝めなくなつたそだ。そのうち山野中一年の遠足は時代とともに場所も内容も変わつてしまつた。

ちなみに、キャンプ側はその情報を教えてくれた電話の主に謝罪とお礼をしようとしたらしいが、匿名だつたので結局連絡を付けることはできなかつた。

ただわかつてることは、声の主はどうも男ではなく女で、低くハスキーで不気味な声だつたと後に関係者は語る。

B&M～冷たい視線は「あつても」苦勞、「なくとも」苦勞・前編～

「『めんなさいね、荒井さん。』の『体育祭運営委員用のプリント』を全部2つに折ってくれるかしら？ 終わったらいつの机に置いて下さい」

不気味な声が数名の生徒しかいない2年1組の教室に響いた。声の主である伏見かおりこと「ブキミちゃん」の含みのあるニヤリとした笑いに、私は目を逸らしながら慌てて頷いた。言われた通りにプリントを一枚ずつ取つて丁寧に折つて行く。

……どうも最近、ブキミちゃんと純粹な気持ちで接することができない。

何処に居ても纏わりつく視線を感じ、逐一行動を監視されているような気がする。隣の彼女は私の心を知つてか知らずか、隣の席でピッタリ席を付けて同じように作業を始めた。

「悪いですね。生徒会の仕事を、期末試験前の大事な時期に手伝つてもらちゃつて」

「い、いえ……」

「でも、荒井さんは先日『体育祭サポート委員』に決まつたから、逸早く委員の内容をGETできて、いいわよね？」

「……」

「せうだわ。どうせならこの失敗作のやつ、あげる。今から田を通しておいた方がいいんじゃないかしら？ なんせ男子の体育祭サポート委員が『アレ』じゃあ……ねえ？」

先月末無事「生徒総会」を終わらせ、生徒会副会長に就任した彼

女は、ピリピリしたムードを漂わせることなく、ニヤリと笑いながら印刷が薄くてよれているところがあるプリントを私に手渡した後、窓際の方にある机に向かってクイッと顎で差した。私もその方向へゆっくり顔を向けたが、ブキミちゃんの黒い笑顔とは程遠い苦虫を噛み潰した顔で眺めた。

その机は一番端の窓際、前から五番目の机。隣の席の女子は噂好きなベリーショートの子。

「……」

机の主は既にこの教室には居なかつた。

帰りの会が終わつた途端、掃除もほつたらかしで友人たちと教室を飛び出して行つた。試験一週間前にも関わらず、体育館でバスケなんぞを熱心にやつてゐるに違ひない。噂では、サッカー部は続けるけども、バスケ部にも助つ人として顔を出すそうだ。どうやら掛け持ちでやるらしい。

「本当に荒井さんつて、氣の毒ですね。ま、私は『原口』なんかより、体育祭サポート委員が荒井さんで大いに助かります。嬉しいんですけど」

「……」

「只でさえ男子のサポート委員が尾島なのに……『悪魔』に加えて『悪女』が揃つて委員だつたら、私も一緒にサポートする学級委員として辛いところだつたわ。贅沢を言わせてもらえば、本間君があの時に休んだのは痛かつたですわねえ」

「……」

憂いを含んだ声を吐きだしながら遠くを見つめるブキミちゃん。私はブキミちゃんの言葉に心の中で大きな溜息を吐いた。どうやら

ら私は、身近にいる凶々しくて傲慢な「神」だけでなく、天にいる本物の「神」にも嫌われているらしい。

(……神様、こんな地味で鈍クサイ乙女をいじめて、楽しいのですか?)

きつと神様は、「志村けん」か「加藤茶」に似ているに違いない。『は? あんたって? とんでもねえ、わたしや神様だよ』……などボケたおしているのだろう。それか「神様」でなくて、ブー高木の「雷様」なんだろうか。

次第に怒りが込み上げ、フルフルと震えるのを懸命に抑えたが、思わずプリントを勢いに任せて乱暴に折つてしまい、ブキミちゃんから「もつと丁寧に」と指導が入った。

* * * * *

キャンプが無事終了し、一学期のメインイベントが終わると、あとは夏休み前の期末考査や個人面談以外これといって目立った行事もなく、いつも通りの面白みのない授業と部活の波風立たぬ日々が続いた。

しかし、私にとってこの「面白みのない授業と部活の波風立たぬ日々」は、「暴れ太鼓を乱舞する祭りだワシショイ!」に匹敵するほどの狂喜であった。

何故なら、今だに忘れられぬ悪夢のようなあの波乱に満ちた「二年のキャンプ」から帰った私を待っていたのは、その前とは比べ物にならない程の平和な日々であったから。

私に「疲労困憊」という思い出だけを残したあの忌々しいキャンプ。

大縄跳びでは成田曜子や原口美恵達に文句を言われ、カレー作りの時は完全にシカトされ、シャワーの帰りには拉致された揚句夜這いの手引きをさせられ、トドメは鬼神・修羅と裏で繋がっているこ

とが判明した、雌豹・ブキミちゃんに弱みを握られ……まったく、恐ろしいキャンプつたらありやしない。思い出すだけで震えが走る。そのキャンプが終わり次に日に登校してみれば、雄臣自ら宣言した「俺、彼女いるんだぜ！」情報が既に学校中に広がっており、妹を含めた女子生徒達を落胆させていた。一方、あれだけ騒がれた私と雄臣の噂はあつと言つ間に一掃され、まるで始めからそんな事実なかつたように、ものの見事に消滅していく。

『東君と荒井美千子か……よくよく考えれば、そんな筈ないわよねえ？』

……などといふ目線と囁きと共に。

まったくもつて失礼な話だが、ijiはグッと堪えた。さすがに学級生の大半を我がプラスクリストに載せるには、いささか無理があつたからだ。お陰で女バレの部長・平畠先輩からの度が過ぎる口マスリ作戦は無くなり、態度が急激に冷えたが。まあ、錦戸先輩率いる女バス軍団の厳しい視線が無くなつたので、プラスマイナスゼロだ。逆にアマゾネス先輩から特別扱いを受けずに済むのはかえて喜ばしいことだった。あからさまに部長自ら特別扱いの部員がいると、周囲の空気は悪くなるし、後輩にだつて示しがつかない。そして何より劇的に変化したのは、1組での私のポジションだつた。

私に対して男子の態度が急に軟化し、女子も一部だが、大人しい鈴木さんや田中さん達との交流が増えたのである。間違つても荒井美千子が急に「激力ワ」になつたわけでもなければ、女子に積極的に話しかける明るい性格になつたわけでもないのに、何故か。

それは、1組のボス猿こと「尾島啓介」の態度のせいであった。

尾島はあれだけ私のことを冷たい目で「近寄るな！」と睨んで避

け続けてきたのに、その厳しい視線と態度が急に無くなつたのだ。

あの男一人の態度でこうもクラスメートが激変するとは……まつたくもつて恐ろしい男、いや、猿である。中学生且つ猿のクセにここまで人を動かす力があるなんて、尾島といい雄臣といい、口クでもない男しか私の周りにはいないらしい。女難ではなく、それこそ男難な相もあるのだろうか。

……と言つても、いきなり男子達の態度が柔らかくなつたところで、「桃色ハプニング大作戦と共に乗り切つた同士よ！」などとそこまで馴れ馴れしくなつたわけではなかつた。その証拠にキャンプで以降も、相変わらず尾島達とは口をきいていない。よくよく考えてみれば、普通に学校生活している地味で鈍臭い女子が、男子と話す機会などそう滅多にあるわけないのである。

去年あれだけ尾島と関わり合いが多かつたのは、彼に対抗する和子ちゃんや幸子女史が傍にいたのと、単に振り向ければ常に後ろにいたからにすぎない。

それに比べて今現在私と尾島の間には、何層もの見えない壁がある。それは、原口美恵や成田耀子であつたり、尾島や私を取り巻く友人達であつたり、今までに尾島自ら撒いた態度であつたり、そして、最近何故か交流が増えまくつている、横でプリントを折つている鬼神のスパイ……いや、「ブキミちゃん」であつたりした。

さすがの尾島もそれらを無理に取つ払つて、私をからかつて遊ぶ余力はないようだつた。

非常に喜ばしいことだ、平和万歳。

それに、ここが重要なのが、私は尾島から受けた仕打ちを忘れたわけではなかつた。あれだけの嫌がらせを受けたのに、急に掌を反されたからと言つて、すぐに許せるほどお人好しでもなければ忘れっぽいわけでもない。今でもカレーの時のことや、あの夜の公園のバスケットコートでの一言や、クラスで受けた無視攻撃の事を思

い返せば胸がズキンと痛み、ザワザワと嫌な感情が湧いてくる。もう一度とあんな思いをするのは「メンだった。だから私は、尾島を取り巻くグループに対して、よっぽどの用事が無い限り一切近づかないことを決め込んでいたのだった。

B&M～冷たい視線は「あつても」苦勞、「なくとも」苦勞・前編～（後書き）

m&mでもない、B&Bでもない。B&M。ブキル/ハヤシ/モロ

「もう一度と尾島と関わらない」

何度もそう誓ったが、今度こそ正真正銘固く心に誓った。

例え尾島達男子の厳しい包囲網が解けても、「油断せず警戒を怠らず隙を与えず」の調子で、接触をせぬよう細心の注意を払っていた。それこそ私自身も田立たぬより細々と生きていた筈！……なのに。

それなのに。

原口美恵と成田耀子達の視線だけは相変わらず厳しいのだからやりきれなかつた。

彼女達が面白くない原因はわかつてはいたが、今の私にはどうすることもできないのが辛いところだ。どうして私の行動に反比例して事態は悪い方向へ進むのか。原因があるなら誰か教えて欲しい、切実に。

現時点では、その彼女たちが面白くない大きい原因は2つあった。

そのうちの一つは、勉強と部活中心とする学校生活の中で唯一オアシスの時間である、ランチタイムであった。

* * *

キャンプ前までは、ほとんど2組でお昼をしていた荒井美千子。奥住さんが我が1組に2組の和子ちゃん達や10組の幸子女史を何回か呼んだが、前にも説明した通り、私達も尾島達も悪女達も100%険悪なムードになるので、私は丁寧に頭を下げるべく1組でランチをするのを避けるようにしてもらつた。1組に行きた

がっていたチイちゃんには悪いと思つたが……とてもじゃないが、彼女の為に1組で毎日お昼を食べるなどと、ましてや彼女の恋を応援する氣になどなれなかつたのだ。

何故なら、チイちゃんの恋のお相手が、厄介事の中心人物だったからである。

どうやらチイちゃんは、去年の暮れに例のお好み焼き屋で尾島と接触した時から恋を温めできたらしい。なんでも手作りのケーキを褒められたのがキッカケだそうだ。和子ちゃんや幸子女史、私に遠慮して言いづらかったらしいが……どうにも堪え切れなくなつて、二年になつて一緒のクラスになつた幸子女史に思い切つて打ち明けたそうだ。そして、とうとうチイちゃん自ら、キャンプ前の雨上がりの放課後に恋の宣言をした。

チイちゃんの恋は私達に大きな衝撃を与えた。

それと同時に、彼女の恋に意見が真つ一つに分かれること

和子ちゃんや貴子、加瀬さんや光岡さんは、チイちゃんの恋に難色を示した。もちろん理由は「相手が悪すぎる」とこつものだ。私も問答無用で反対派だつた。だつて、尾島と関われば私が受けている仕打ちをそのままそつくり受けことになるから。こんな思い、絶対友達に味わつてほしくない。

どう見ても前途多難な恋に、反対派の和子ちゃんが先頭を切つて異を唱えると、チイちゃんは困つたよつた悲しそうな顔をした。これにはさすがに和子ちゃん達もバツが悪そうに黙つてしまつ。それもさうだろつ。「恋」というのは理屈ではない。当人が「それでも好き」と言えば、どうすることもできないのだから。

逆に幸子女史や奥住さんは、反対するどころかチイちゃんの恋を応援する氣マンマンだった。

『チイちゃんなら優しくて小さいから、尾島もそう無碍に扱わないと… カップルになれば、逆に守ってくれるんじゃない？ それに見た目も尾島とバランスいいし、お似合いだよー。』

『原口じゃなくてチイちゃんと付き合った方が、面白いじゃん！

原口どんな顔するかね？ ヒヒヒ～』

前者が幸子女史で、後者が奥住さんの意見である。

強く推す一人の姿に負け、そのうち和子ちゃんは何も言わなくなってしまう、他の二人も「まあ、仕方ないか」とチイちゃんの恋をそつと見守るようになった。

一方私は、反対も賛成もせず始終無言を通した。曖昧な笑いで誤魔化し、自分の口から話題を盛り上げるような無責任なことも一切言わなかつた。何も言わないどつちつかずの私にチイちゃんは何か言いたそうにしたが、何も聞かずそつとしておいてくれた。私がどんな目にあつているのか知つていたからだろ？ 酷く申し訳なさそうな顔をしていた。私はそんなチイちゃんの心遣いに感謝しつつ…：心の中ではチイちゃんからこの話題に触れられないことに安堵した。何故だろ？ この話題になると胸ズキンと痛み、モヤモヤして落ち着かなかつたから。

そんな微妙な状態が続いていたのだが、キャンプから帰つきて尾島の態度が一変すると、奥住さんと幸子女史は、

『ーーーは思い切つて解禁でしょー… わたそくプロジェクトを開始しないとね？！』

……などとこつ強気な発言を言い、「なんるべく尾島の田にチイちゃんの存在を植え付けるプロジェクト」を発動させたのだ。

そういういきさつで、一組で頻繁にお昼を食べるプロジェクトが

開始された。

和子ちゃん達や幸子女史達が我が1組に頻繁に来るようになると、尾島達はキャンプ前とは違つて、一年の時のように和子ちゃん達にチョッカイをかけるようになった。しかし、騒ぐのはいつも幸子女史や奥住さんばかりで（和子ちゃんと貴子は完全無視）、肝心なチイちゃんの印象を植え付けるどころではなくなつてしまふのだ。それでもチイちゃん本人は気にしている風もなく、静かに笑つて楽しんでいる様子。それに幸子女史と奥住さんはプロジェクトの目的を忘れたりしなかつた。以前和子ちゃんや貴子が執行していた荒井美千子の株上げ大作戦を、そのままチイちゃんの株上げ大作戦に変更し、尾島達が私達の席の傍で食べる時は、チイちゃんのお弁当をベタ褒めした。それにつられて尾島達男子がこちらの席に覗きこむ。オマケに幸子女史と同じクラスの小関明日香も乱入ってきて、チイちゃんの隣に仲良く並んで、お弁当をソマミ食いする始末。……余計なリスがもれなく付いてきたが、どうやら作戦は順調の意図を辿つている模様。

ところがどういい。

世の中そんなに甘いわけがなく、ここで大きな問題が生じる。この光景を面白くないと睨んでいる女生徒達の存在がいたのだ。言わざと知れた原口美恵や成田耀子達である。

初めは尾島達が先にチョッカイかけているので、さすがに彼女たちも「んもう！他の子に話しかけちゃイ・ヤ」などと彼女気どりで注意することはできなかつた。それこそ鬼の形相で私達の方を睨むだけで我慢していったようだが、とうとう堪忍袋の緒が切れたらしく、尾島達男子がいない時間帯を狙つて、奥住さんや私に苦情を申し立てた。

『ちょっと、休み時間うるさいのよね！』

『そーよ、せつかくイイ気分でお皿を食べてるのに、食事がまずくなるのよ』

『それによ、他のクラスの子をあんなに沢山入れていいと思つてるので？！ す”」に迷惑なの？』

ほとんど自分達が相手にされないから嫉妬丸出しの意見を捲し立てられ、私は途方に暮れた。

一言、「お嬢さん、それだから尾島に振り向いてもらえないのではないかでしょ？」とよっぽど原口美恵に言つてやりたかったが、言つたところで「どうよね～」と素直に聞き入れてくれる相手でもない。怒りがむらに倍々ゲームで返つてくるだけならまだしも、物を隠されたり、便器に顔を突っ込まれるなど、イジメの見本のよつな危ない日にあわされたらたまたものではない。それに、「一年が終わるまでは一緒に教室に暮らさないといけないので、我慢……」と、かるいじで言葉を躰んだと言つた。

しおりしく反省をしている振りをしながら無言で通す私の横で、無謀……いや大胆にも「だからなに？」とこつ奥住さんの態度は余計悪女達を煽つた。

『あら、やつだあ。別に学校の規則で他の教室で食べちゃいけないつてルールはないでしょ？ 第一さあ、尾島の従兄妹の小関さんはどうするの？ しおりちゅう組にきてるじゃない。それにチヨツカイかけてくるのは男子で、私たちじゃないしい。それを私たちに意見するの、筋違いつてもんでしょう？ それにそんな暇があつたらあ～あ～と尾島君にでも告つたらどう？』

『ハセフクしてしまひナビ！』

……とは付け足さなかつたが、田は口ほどに物を言つていた。

このセリフに私の大きい身体と寿命が縮んだのは言つまでもない。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・前編～（前書き）

17日で公開一周年となりました、皆様ありがとうございました！

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・前編～

（……こんな生活、あつと一年で終わるわよね？…………ていうか、本当に終わるんでしょうね……。いや、確實に終わらせねば。クラス編成って、どうやつたら裏工作できるんだろ？　やっぱ先生に賄賂を送らねばならないのだろうか。手っ取り早くお中元、お歳暮から責めてみるか？？）

そこまで考えたところでハツとした。どうも先程から思考が危険……いや、あらぬ方向へいつてしまつ。悪い方へ悪いほうへ考えてしまうそんな自分に叱咤し、プリントを折る作業に集中集中と気合を入れれば、相変わらず淡々と不気味な様子を醸し出しているブキミちやんが、トントンとプリントを揃えていた。

「それにしても、ウチのクラス奥住さんを始め……荒井さんの周りの友達つて賑やかですね」

「え？」

今まで考えていた思考を読んだかのよつて、ブキミちやんの口から奥住さんの話題が出たので、私はビックリして隣を見た。彼女の手元を見ると、折り目正しく折られてあるプリントがいくつも積み重ねられている。明らかに私よりも作業のピッチが速い。

「ほら、最近隣のクラスの笛谷さん達や10組の……中山幸子さん、でしたつけ？　よくこのクラスに来るよつになつたでしょ？…………益々1組が賑やかになつたものね」

ブキミちやんはバシッと整えたばかりのプリントで机を叩くよつに置いた後、ギラつとメガネを輝かせながら（もちろん本当に輝か

せているわけではないのだが、不思議とそのように見える（クイック）とメガネを上げた。どうもその仕草は彼女の癖なようで、最近よく一緒にいる為か目に入ることが多い。私はブキミちゃんの意見にギクつと身体を縮め、「『う』めんなさい……」と慌てて頭を下げた。

「あら、どうして荒井さんが謝るのかしら？」

「え、だつて……に、賑やかというより、もももしかして、騒がしいんぢやないかと……思いまして……ハハハハハ」

「そうね、確かに」

ブキミちゃんのズバッと遠慮ない意見にグッと息が詰まった。

「でも、1組の男子達の方がもつとうるさいし。それに奥住さんや中山さん達にいちいちチョッカイかけるんだから仕方ないわ。決して大人しい荒井さんのせいではありません。気にしてないわよ」

「……ハハ……」

（気にしてるんだな……）

ブキミちゃんは否定してるけども、熱烈歓迎とは程遠いようだ。最近殺氣だつている原口美恵や成田耀子達とは違う意味で、彼女も騒がしいランチタイムに納得できないようである。

もうなんスよ~尾島達には私も困つてしましてね~！

……などと言いながら朗らかに笑いたかったが、この場では引き繩り笑いしか出てこなかつた。

「……」

私は俯きながらプリントを折ることに集中し、今度こそ、確実に、

やつやといの作業を終わらせることを図指した。

「やついえば、荒井さんのお友達といえば、隣の2組の『笠谷さん』も体育祭サポート委員では？ 彼女去年もやっていたから、なにかあつたら彼女に聞くといいわ。2組の学級委員は……たしか『宇井さん』でしたよね？ ……良かつたですね。ほら、ウチは『佐藤君』は頼りになるけど……当のサポート委員相方が全然頼りにならない男だし。荒井さん、頼んだわよ？」

「……ハイ」

『体育祭サポート委員』。

なんて憎い響きなのだろう。

私は心中でガックリと頃垂れた。

何故ならこれが悪女達の機嫌が悪いもう一つの理由だつたからだ。それは、建てつけの悪い校舎にシットシットと雨が降り注ぎ、期末テストも迫つた七月上旬の梅雨のある日。つい先日のホームルームでの出来事である。

散々揉めに揉めた拳句、結局最終的にはジャンケンで委員が決まり、私と類人猿がサポート委員をやる羽目になつた時から、悪女達特に原口美恵の視線が益々厳しくなり殺氣だつてているのだ。またたく原口美恵も大袈裟だ。別にジャンケンで私に派手に負けたからと言って、尾島と永久に別れるというわけでもなかろうに……。（それにしても……原口美恵相手に無駄にストレート勝ちしてしまつた私の右手、空氣読めよ！）

思わずその右手が恨めしくて、グッと握った拳に文句を言つてはみたが、決して私の右手も私自身にも罪はない。ましてや臨んだことでもない。

大体原口美恵も尾島にアプローチしてゐる暇があつたら、ジャンケンに勝つ必勝法にでもアプローチしてればよかつたのだと心の中で悪態つきながら、ホームルームの時のことを思い出した。

* * * * *

雨のせいが、試験前のせいが…ジメつとして憂鬱な雰囲気が漂つ、その問題のホームルーム。

先生に一任された学級委員達は、席を立つて教卓に向かった。

『それでは、△第　回・山野中秋季体育祭大会』の体育祭サポート委員を選出したいと思います』

学級委員であるブキミちゃんがメガネをクイッと上げ、教卓からクラスメートをねめつけ……じゃない、見渡した。

その他のクラスメートはダルそうに私語をしながら、明らかに「メンドクサイ」という雰囲気を隠そうともしない。それもそうだろう、体育祭は夏休み明けの2学期の行事であり、今の段階では実感が湧かないからだ。

その時、ブキミちゃんの横に立つてゐる同じく男子の学級委員である、佐藤伸君がバンバンと教卓を叩いた。

『オラオラ、オマエら良く聞けよ！　これから体育祭サポート委員の大まかな仕事を、伏見から説明してもらうから。伏見、お願いできるか？』

佐藤君はやる氣のない返事を上げる生徒達に対して「しょうがねえなあ」というように顔を顰め、ブキミちゃんをチラツと見た。ブキミちゃんは頷き、低いハスキーボイスを淡々と教室内に響かせた。その内容は、

一つ、体育祭サポート委員は男女一人ずつ選出すること。

一つ、生徒会役員、通年の体育委員は体育祭サポート委員から外すこと。（体育祭の運営メンバーになつてゐる為）

一つ、学級委員も体育祭委員から外すこと。（体育祭サポート委員と共にサポートメンバーになつてゐる為）

一つ、体育祭委員と共に、色別対抗リレー・応援合戦のメンバーの選出をすること。

一つ、軍旗・応援合戦等のアイデアを各色別でまとめ、提出する」と。

……などである。

ブキミちゃんが一通り説明すると、クラス内は一層ダルそうな雰囲気に包まれた。

『誰か立候補する人、いますか？』

ブキミちゃんの問いかけで、今まで騒がしかつた教室は急にシーンとなつた。お互に顔を見合わせ、「こんな面倒なこと……やる奴いるのかよ？」というふうに田配せをしていく。もちろん私も俯いて学級委員の一人と田線を合わせないようにした。「ま、期待はしてなかつたよ」というように佐藤君が溜息を吐き、ブキミちゃんがトントンと教卓を指で叩きながら「王立ちしている姿が目の端に映る。

『……仕方ありません、手つ取り早くクジ引きにしましょう。先生、それでいいですか？』

待つだけ無駄といつよつな口調で、先生に指導を仰いだブキミちゃん。急に聞かれた我が1組担任・社会科歴史担当の青島先生は、チントオ

穏やかな動作で手を上げ、「いいぞ、それで。」口からは気にするな」という合図を送った。その合図を受け、佐藤君はサッと「クジ」が

入った二つの紙袋を教卓の下から出した。何気に用意がいい。

再び教室内は文句と非難で騒がしくなつたが、『文句のある奴にやつてもうひづぞー』といつ佐藤君の一言で生徒達は不満を飲み込んだ。

『それでは体育委員の後藤君と成田さん以外の人、クジを引いて下さい』

佐藤君とブキミちゃんはそれぞれ紙袋を持ちながら窓際の席、つまり私の方に寄つて來た。その紙袋の中のクジを順番に引いて行くのだろう。私がブキミちゃんがズイと前に出した紙袋に手を入れようとしたその時、甲高い声がそれを遮つた。

『すみません!』

生徒達がざわめく教室に、鼻にかかった耳障り……じゃない、可愛らしい声が響き渡つた。その声にクラス中の視線が集中する。声の主は教室の中央辺りに座つている「成田耀子」だった。

『……あら? 成田さん、何かご意見でも? それともあなたが委員を決めてくれるのかしら?』

進行を妨げられ明らかに機嫌の悪いブキミちゃんが、メガネをクリつと上げながら低いハスキーボイスを轟かせる。それに対して成田耀子は、『そんな訳ないでしょ!』と睨んだ後、「ちょっと提案があります!』と鋭い目線と間逆な甘い声を上げた。

『いつも出席番号の早い人からクジを引くのは不公平かと思いま
す。たまには、最後の方の人から引いてはどうでしょうかつ!』

ブキミちゃんにガンを飛ばしたまま発言する成田耀子の意見に、
教室内はまたざわめきだした。反対する者、賛成する者、再び騒が
しくなった生徒達に佐藤君が「おい、静かにしろよー」と声を掛け
る。

……が、成田耀子の意見に原口美恵は「それ賛成〜！」と同意し、
女子のボスナンバー1・2の意見にその他の女子は抵抗できずに黙
つていい。オマケに廊下側の出席番号後半の生徒も賛同し、益々混
乱した。

私は伸ばした手を引っ込めてブキミちゃんと佐藤君を見た。すると
佐藤君は「どうする？」というような顔をブキミちゃんと向ける。
そのブキミちゃんは、「うるさい雌豚共めー」……といふ意味は
こめられていいかどうかはわからないが、あまり感じのよろしくな
い視線を悪女一人に向けた。しかし反論するだけ時間の無駄だと思
つたのか、無言で佐藤君に目配せしながら出席番号の最後尾の席ま
でツカツカ歩き、クジ引きが開始された。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・中編～（前書き）

お食事中の人（それ以外の人にも）には不適切な文があります。お許し下さい。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・中編～

『それでは、1組の体育祭サポート委員は、男子は「星野君」、女子は「荒井さん」に決定しました。両者席を立つて下さい。皆さんも拍手をお願いします』

ブキミちゃんのハスキーボイスによる最後の判断と、その後に続くやる気のないクラスメートの拍手が教室内に響き渡った。彼女のセリフの中に時々見え隠れする弾んだ口調は氣のせいなんか。……いや、氣のせいではない。その証拠にブキミちゃんの口元に滅多に見れない奇妙な笑いが浮かんでいる。それは、

“……フフフ、本当に良かつたわ。サポート委員が操りやすいメンバーで”

……という、あからさまな安堵を隠しもせずに、ニヤリとした眼と口をこちらに向けている。

私は学級委員に促されて、一番最後に引いた「アタリ」というクジを握りしめながら席を立つた。本當なら沢山あるクジの中から選べた筈なのに、成田耀子の提案のせいでの運命が大きく枝分かれしてしまつたのだ。

(くそあ……あの「悪女」らめえ！　余計なことを言つてくれて、どうしてくれよ！……！…)

最後の最後までジリジリさせられ、私の後ろの席の子がハズレだとわかつた時点でマジでそう思つた。紙袋の中に一つだけ残されたクジ。引かなくてもクラスの女子の顔が全員喜びに満ち溢れていたら、最後の1枚は当然「アタリ」と決まつている。が、早い段階で

男子の「アタリ」を引いたのが星野君だとわかつていたので、悪女に対して抱いた憎しみは少しだけ静まつた。そしてパートナーがある星野君で良かつたと心底安心した。運が悪かつた、仕方がない程度で諦められる。

それでも不安は拭い切れない。体育祭を運営する通年の体育委員は「後藤君」と「成田耀子」であり、両方ともに尾島の取り巻き中心人物だからだ。それでも彼らは体育祭運営そのものが担当になるし、きっと忙しくてそれどころではないはず……多分。

それより、サポートするメンバーは星野君の他、学級委員の「佐藤君」と「ブキミちゃん」。そのうちブキミちゃんは生徒会も兼ねているので実質活動するのは三人だとは思うけども、その男子二人が最も安心できて気兼ねなく心から協力できる人物なので心配ない。確か佐藤君と星野君は以前も同じクラスだったから知らぬ仲でも無いだろう。それに女子の方の選抜メンバーを決めるのも、ブキミちゃんさえいれば、成田耀子に対抗できる。

(……それに、2組の「学級委員」は和子ちゃんだし。生徒会OBとして日下部先輩も手伝つから、貴子も「サポート委員」を今年もやるつて言つてたつけ……ちょっとはマシかも!)

俯いた顔を起こして学級委員の方を見れば、二人とも「よろしく頼むな」という顔をして頷いてくれた。星野君の方を確認すると、やはり彼も「しうがないよな」という顔で苦笑いだつた。その表情を見て私を嫌がつてゐる感じではないのでホッと一息ついた、その時。

異議あり!!

その声は背後から聞こえた。

低くて耳障り……だけじゃない。怨念が籠つてそうな呪いの言葉

が、「俺（私）じゃなくて、本当に良かつた！」という安堵の雰囲気が漂つ2年1組の教室を切り裂くように突き抜けた。

それはさながら「ギャートルズ」出てくる、叫び声が石になつて襲つてくるような感覚。どうやら「いきあり」という文字の石が、学級委員に直撃したらしい。その証拠に一人は突然のダメージ（によるのかわからないが）になんとも顰め面である。

もう既に耳に染みついている声と殺気の方向に恐る恐る振り向けば、1組のボス猿が怖いほど真剣な顔で、「ハイル、ヒトラー！！！」というようすに独裁者さながら手を上げていた。

（オオオイ！ ななんんでアンタが異議を申し立てるのよ…！）
せつかく平和なメンバーで落ち着いたのに……これ以上何が御望みなのか。もしや、お猿さんが大活躍できる体育祭という神聖な競技の委員が、荒井美千子だと気に入らないってか？！

私は（心の中で）目を光らせた。

同時に即座に立ち直ったブキミちゃんの目もギラッと光った（気がした）。それは、

“……ほほう、非常にムカつくわ。猿のくせにイチャモン付けるとはいひ度胸ね”

……という御立腹な様子を隠しもせずに、眼鏡を上げながら厳しい視線をボス猿に向いている。無論（心の中で）私も。

バチバチバチッ！！

小さくざわめく一組の教室を横切る一本の導火線。

それはボス猿である孫悟空と、その猿を押さえつけようとするオカツパ眼鏡の三蔵法師から放たれており、中央で派手に火花を弾かせてる。どうでもいいが、最近こんな光景ばかりだ。

『……あら、尾島君。それはどういう意味かしら？ それともなに？ この結果に御不満でも？』

『御不満もなにも、男子は今日一人欠席者がいるだろ、「マイケル」だよ！ もしかしたら星野^{かずゆき}がクジ引く前に、そのマイケルがアタリを引いたかもしだねえじゃねえか！ 不公平だから、マイケルが学校きたらやり直しした方がイイんじゃないでしょうかあつ！！』

『マイ……いえ、「本間君」が休みなの仕方ありません。諦めてください』

『それじゃ星野^{かずゆき}が氣の毒だろーがつ！…』

『それなら何故クジをやる前にそのことを言わなかつたのかしら？ 後から言われても迷惑なのよ！』

『～つつ～！ そ、そ、それじゃ公平じやねえだろつ！』

段々ヒートアップしていく妖怪……いや、尾島とブキミちゃん。

尾島の意見に悪女と取り巻き達は「そーよ、そーよー！」と同意していたが、尾島以外の男子には微妙な空気が流れていた。せつかく無事委員が決まったのに、今更やり直しなんて冗談じゃないという空気が。そりゃそうだろう、万が一もう一度やり直しになった場合、今度は自分にその厄介な役割が回つてくるかもしれないのだから。しかもパートナーは「荒井美千子」。自分で言つのもなんだが、体育祭という派手な行事に選抜された委員にしては非常に微妙な人材だ。しかし「やり直し」意見を豪語するのは、裏番とは違う意味で学年一厄介なボス猿。結果、だれも意見ができない。

(こんな時にが休むなんて……まったく間が悪いよ、本間君！ ……つてもしかして……またわざと？)

自分が考えたついた思考に顔が歪み、本間君の氣も間も抜けた顔が頭の中を横切つた。

「マイケル」という名の愛称で2年1組に在籍している、こんな大事な時に休んだ「本間君」。

しかし彼はハーフどころか、「本間マイケル」という名前でもなければ、「パオッ！」などと雄たけびを上げるわけでもない。生粋の日本人である本間君の正式なフルネームは「ほんまじんた本間厳太」と言う。冗談のようだが、本名だ。そんな本間君が初めて尾島と『対面』した時、

『ホンマにゴンタか？！』

などと尾島からバカにされ、笑われていた。

普通なら佐藤君のように苦笑しながら『やめろよ』と対抗するか、一年の時に一緒にいた「グリコ」や「ノグティー」のように不本意だけでも黙りこむか、「ツルちゃん」のように青筋を立てるか……ともかく、尾島のあだ名命名の心をくすぐる反応が何かしらあるもんだが、本間君の場合は皆と少し違う。彼はなんと反応を示すどころか、尾島の爆笑に対して欠伸で返したというツワモノだったのだ。しかもこの本間君、「厳太」などと厳つい名前とは程遠い身なりと雰囲気であり、彼の事を言葉で表現すれば以下のような言葉が出てくる。

ダルイ。

メンドクサイ。

やる気がない。

天然くるくるパー・マ。

万年寝太郎。
ヘコキ虫。

……まだまだ上げればキリがないが、まあ、こんな感じである。

こんな感じの本間君は授業でもやる気を見せるどころか、思いつきり眠気を披露して先生に何度も何度も注意されていた。たまに起きたと思えば、直後にオナラをかます始末。

『マイケル、クセえよ！ 屁なんかすんな！』

もしくは、

『マイケル、またかよ！ 屁なんかすんな！』

この台詞は一年を通して我がクラスで飛び交う最も印象深い言葉となるのだが、本間君はそんなことを言われてもどこ吹く屁……じやなく風で、屁だけにへラへラ笑っていた。しかし彼の後ろと隣に座っている生徒はたまたものではない。

しかもその本間君は、時々学校を休むクセがあった。それも学校の行事がある時や、大事な決めごとをしなければいけない時に限つて狙つたかのように本間君の席が空いているのだ。（もちろんキャンプも休んだ）その理由は様々で、病欠の時もあれば、単なる寝坊の時もあり、親戚が危篤だという時もある。1年からそんな感じで、一体何人の親戚が生死の境を彷徨つたかわからぬ程だ。

学校に来れば来たで、いきなり靴下を脱いで背もたれに干すという意味不明な行動を取る本間君。

どうも彼は大の靴下嫌いらしく、常に素足に直で上履きを履いていた。（間違つても石田一のような無駄な色氣や、ましてやセレブ感などとは当然無縁である）たまにその上履きすら脱いで教室を

歩いている時があった。野生児丸出しで、某ネコ型ロボットの寄生虫……ではなく、友人である「野比の太」のような「本間巖太」君が生み出す奇怪なエピソードはこれだけではなかつた。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・後編～

そう、あれはキャンプ後の抜き打ちで行われた身体検査の時。欠伸で返されたことを根に持った尾島の悪戯のせいで、靴下を隠された本間君。ピンチである。しかしこんなことで本間君は慌てない。彼は何を思ったのか、靴下を探そうとはせず、ノートを一枚破き上履きに挟んで薄い縞模様の靴下に見立てるという偉業をやつてのけたのだ。奇跡的にも一瞬パスしそうになつたが、結局先生にバレた。暫く無言だった先生は、ボーッと立つて本間君に対して注意どころか「靴下、探しておけ」という静かな一言を残してスルーした。

一方、派手なTシャツを着るな、この短ランはなんだ、カラーはどうした、裏ボタンを「乙杯羅武」などといふのがわしいものを付けるんじゃない、大体そんなものを何処で手に入れたんだ！……などといふいくつもの叱りを受け、「平等じやネエ！」と文句を言つ尾島に対して検査した先生のお言葉はこれだった。

『尾島よ。オマエの数ある校則違反と本間の靴下の件では、そもそも罪の重さ……いや、次元が違うんだよ。それにな？ 本間が取つた行動をよくよく考えてみろ？ バカバカしいながらもある発想の豊かさと何食わぬ顔で検査を受けた凶々しい度胸は、称賛に値するだろうが！ あのやる気のないダラけてトボけた本間がだぞつ？！』
『……』

検査した先生は本間君の行動にいたく感心したせいもあるが、その日の授業で本間君の靴下が背もたれにぶら下がっていることを既に確認していたそうだ。

余談だが、先生達は例え本間君がたまに何処かへフラつき、教室以外で寝ついて授業に出席していないとも、その靴下の有無で本間

君の出欠席を把握しているとのことだった。

ちなみに尾島の「乙杯羅武」^{オッパイラブ}という裏ボタンはスルーする訳にはいかず、没収となつた。尾島は渋々「世界征服」という裏ボタンを代わりに使用してゐらしげ、しつこく「特注だつたんだぞ、乙杯羅武返せ！」と先生に訴えており、現在交渉中だそうだ。ま、特注だろうがなんだろうが、そんな宇宙一くだらないことはどうでもよい。つーか、そんなものを特注すること自体問題だ。大体「世界征服」という裏ボタンも笑えないだろ。

ともかく、ある意味大物的な本間君の行動の数々に、さすがの尾島も「クツ、負けたぜ……」と素直に本間君に頭を下げ詫びを入れた。それに対しても堂々と欠伸で返し、「気にしてないから」という寛大な……というよりむしろどうでもいいよ的な態度の本間君。尾島はそんな本間君になにかキラリと光るものを感じたのだろう、それからは「我が同士よ！」と彼を認めた。

それからというもの、「マイケル、マイケル」としきりに面白がつて話かける尾島に、鬱陶しそうに流す本間君。

「そんなツレナイ態度すんなよお、マイケルう^{マイケル}」とさらに食い下がる尾島^{バブルス}に、とうとう諦めて答えてやつてる本間君。

主従関係が逆なのでは？……と思つありえない奇妙な友情関係が、ここに成立したのであつた。

一日中寝ている以外はオナラをかまし、一体学校へ何しに来ているかわからず、やることなすこと見た目通りでイメージを裏切らない本間君の生活は一体どうなつてゐるのか。非常に気になるところではあるが、不思議と彼の生活スタイルは謎に包まれたままだ。

それもその筈、本間君は中学に入る時に「群馬の富岡」からこの地に引っ越してきたらしく、過去の本間君を誰も知らないのだ。

この時点でもう勘のいい読者はお気付いただろう。

本間は「富岡」から引っ越してきた。

富岡。

マイケル富岡。
マイケル。

以上が、尾島が本間君に「マイケル」というあだ名をつけた過程である。

バカバカしいが本当だ。本間君は「マイケル・ジャクソン」とも、「マイケル富岡」とも似ても似つかない存在ではあるが、何故か我が1組の間で「マイケル」の愛称で親しまれているのであった。

* * *

本人がいないとこりで「マイケル」の名前が飛び交う2年1組。（……いや、ここは本間君がいなくて正解だろ。むしろ本間君がアタリを引いたらエライこっちゃだよ！）

多分この教室にいる生徒達が同じことを思つただろ。無論、学級委員や^{チントオ}担任も。とうとうこのどつじょうもない争いを止めたのは、黙つて聞いてた佐藤君だった。いつもの温厚で爽やかな雰囲気とは打つて変わり、再び教卓を叩きながら「いい加減にしろよ…」と怒鳴つたのだ。

『悪いけど尾島、今までに委員を決定しなきゃならないんだ。だから大人しく従え！』

どうやら佐藤君には、尾島のボス猿威力^{パワー}など効かぬようだ。彼は学級委員の威儀をふるわせ、尾島に向かつてビシッと「異議」を却下した。そう言えば……誰にでも平等で温厚な佐藤君だが、クラスの足並みを乱す奴には、例え仲間であつても迷わず意見を言つ搖るぎない精神を持つ一面があつたことを思い出した。

『はあつ？ マジかよつ、カツコー。』

『そのカツコつてやめろ！…………そつか、わかつたよ、尾島。そこまでこのクジが不満なら、オマエに委員をやつてもいい。意義を唱えたんだから、文句はないよな？！』

以外にも未だに「カツコ」というあだ名を根に持つてゐる……じやなく、少し機嫌の悪い佐藤君がポロつと出した意見に、私を含めクラス全体が「ええつ？！」とどよめいた。

(わわわ佐藤君！ ななななんてことをひへーーー)

私は「そりや横暴ですがなつ！」という顔で慌てて佐藤君の方を見た。

委員のパートナー一名が、「星野」と「尾島」ではかなり……ビリうではない、雲泥の差がある！ ありすぎるー！

私のこの時の心情を詳しく説明すれば以下のようになる。

新婦の父（佐藤君）に引かれ、バージンロードを厳かな気分で歩いている新婦（荒井美千子）。神父（伏見かおり）の前で待つてゐる旦那様は、数億円稼ぎ出すプロ野球選手の穂やかスマイルの新郎（星野君）。そんな二人は「これからも一緒に力を合わせて子作り……じゃないつ！ 体育祭サポート委員をやると近います！！」と宣言した後、誓いの濃厚キス……いやいや、熱い青春のハグを交わしてメデタシメデタシとなる筈が。

「一緒に委員やりぬこうぜ！」という熱いスクラムを組むようにガバッと抱擁していたが、何故か新郎は私のボインに密着するように身体を擦り付け、オマケに尻を撫で回している。新郎の異変を感じとり、少し顔を上げてパートナーを見上げてみれば、そこには同じ白い燕尾服だけどもシルク素材の紫のシャツをインして、どうみても不埒な商売で稼ぎまくっているチンピラスマイルの新郎（尾島）

にすり替わっていた。

……という感じだ。

これではいくら鍛錬を積み重ねた荒井美千子さんでも、あまりの衝撃に驚きもするつてモンだわい。まあ、手取り早く言えば、今まで晴天だった空が、曇りなどというまじろつこしさを飛ばしていきなり「台風」が来た心境だ。しかもかなりの大型だぞ！

（じょじょじょ「冗談じゃない！ これ以上争い」とに巻き込まれるのは「メン被る…」）

それこそこちらが「異議あり！」の顔を畳えようとした、その時。

『私、体育祭サポート委員、立候補します！』

原口美恵の鋭い声が私の背中に突き刺さった。

彼女の力強い「恋人宣言」に、教室内に黄色い悲鳴が飛び交い、冷やかしと口笛の嵐でどうにもできない状態になつた。私は「ガツチヤ！ これ幸い！」というように、笑顔と揉み手で「いやいやいや、原口美恵さんにこの体育祭サポート委員を譲りますんで、ヘエ」と言おうとしたら、前方から機嫌が最高潮に悪いブキミちゃんの魔光線と背後から刺す人間以外……そう、猿の殺気に動きを封じられてしまつた。とうとうこの騒ぎに終止符を打つたのは、今までノホンと見ていた担任の青島先生。

『いやいやいや、今年の生徒は積極的だな。そんなに委員やりたけりや、四人とも前へ出る。ここは恨みっこなしでジャンケン三回勝負にしよう。二回先に勝つた方がメテタク委員決定ー』

『…………』

(……おい。この時点で委員を希望してるのは原口だけだろ、青島先生よ……)

どうみても四人の心中を無視した鶴チントタオの一聲で委員選抜方法が決定し、それぞれの思惑を秘めた温度差のある男女四人が、大勢が見守るギャラリーの目の前でジャンケンの勝負を行つた。

その結果。

男子は温度が高い方の「尾島啓介」が勝利し、女子は温度がマイナスの方の「荒井美千子」が勝つたのであつた。

紙袋に残った最後のクジを引いた私は、この時一つの教訓を得る。「残りモノには福がある」という諺は、必ずしも全ての事態において適用することではないということを。

B&M～残りモノには「福」じゃなくて、「訳」がある・後編～（後書き）

本間君、この先も出番があるといいなあ。出したいなあ。

8月15日のN女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

ミーン、ミーン……
ジジジ……

開けっぱなしの窓から、蝉の鳴き声が聞こえてきた。その大合唱
ぶりが午後の茹だるような暑さをさらに煽っている。外に出て空を見
上げれば、澄み切った青空に厚い入道雲が浮いているに違いない。

「あ～暑いねえ……」

私は缶ジュースについていた水滴から田を離し、横になつて雑誌
を片手に扇ぎながら呟いている和子ちゃんを見た。和子ちゃんが「
暑い」と呟つとおり、外は三十度を超える夏真っ盛りだが、私達が
今居る部屋はかなり上の階数にある為、窓から入る風のお陰で幾分
か涼しい。マンションの八階ともなると風通りが良いのだろう、そ
の証拠に薄いレースのカーテンを大きく波立たせている。そのまま
寝てしまえばきっと身体も冷えてしまうに違いない。この部屋に招
待してくれた貴子は、玄関を開ける時申し訳なさそうに、

『「じめんねえ、ウチ、ちょっと暑いかも。クーラーが故障しててさ。
今お盆時期だし修理が来週なんて、ホント最悪』

……とぼやいていたが、部屋を通り抜ける風の他に、扇風機とジュ
ースもあるので問題なかつた。

それでも暑がりの和子ちゃんには厳しいのか、この場にいるのが
女子だけなので、Tシャツの裾をガバッと持ち上げ、臍を見せながら
雑誌でバサバサと音を立ててTシャツの中に風を送り込んでいる。

「ちょっと、和子！ 暑い暑い言つてないでさつさと宿題写しちゃ
いな。ゴロゴロしてると夕方になっちゃうよ」

「……ん~ そなんだけれど。うう、メンディイっていうかあ……」

幸子女史が食べ終わつたアイスの棒で、やる気のない和子ちゃんのわき腹を刺していた。ちなみにアイスの棒はハズレだつたみたいだ。和子ちゃんがやつと起きるような仕草をしたと思つたら、うつ伏せにまた寝ころんでしまつた。仰いでいた音楽情報雑誌「P A T i・P A T i」をペラペラめぐり始める。もづ、和子！ と幸子女史が苦笑いした時、今迄台所でなにやら作業をしていた貴子がお盆に人数分のスイカを乗せて部屋に入つて來た。

「お待たせ~冷えてるよ」

スイカを持つてきてくれた貴子は、ショートパンツにタンクトップ姿という涼しげな恰好をしていた。スラリと伸びた綺麗な足が羨ましい。私だつて背が高くて決して足は短くないというのに……やはり太さの問題だろう。小学生の時よりは痩せたが、まだまだスタイル抜群の貴子には程遠い。その貴子は大分伸びたサラサラな髪を二つに括つていた。なんでも来週の夏祭りで浴衣を着る時に結い上げたい為、切らすに我慢しているのだそうだ。

「待つてました!!」

赤く熟れたスイカを見て叫んだ和子ちゃんは急いで雑誌を閉じて飛び起き、机の上に広げていた勉強道具を急いで片づけスイカの為にスペースを開けた。

* * *

「あ～あ、夏休み、もう半分過ぎちゃったねえ」

スイカを食べおわった和子ちゃんは、しみじみと言ひ言葉がピッタリな憂いのある言い方で呟いた。私も最後の一切れを口に入れながら頷き、幸子女史も「ハア」と溜息をついた。貴子はスプーンを置いてテーブルの上にあつたテレビのリモコンに手を伸ばし電源を入れると、白黒の古い映像が映し出された。ラジオを目の前にして泣いている人や、神妙な顔をしている映像。流れてくる音は、パチパチヒノイズが入つたラジオから流れる昭和天皇の肉声。

『ちん朕深く世界の大勢と帝國の現状とに鑑かんがみ、非常の措置を以て時局を收拾せむと欲し……』

厳かな声が静かな居間に響き渡る。壁に掛けてある日めぐりカレンダーの「15」という数字が日の端に映つた。今日は終戦記念日なので、その特集をやつていいのだろう。

「……もつー5日だもんねえ。それよりもさあ、来週の山野神社のお祭りどうする? 今年もみんなで行くよね? 貴子は?」

幸子女史がテレビから田を離し、スイカの種を一か所に丁寧に集めながら聞いてきた。

「やっぱ田下部先輩と、行くの?」

和子ちゃんは扇風機の前を陣取り、涼しい風を田一杯受けている。冷たいスイカも食べたので暑さが治つたのか、眠たそうなトロンとした目を細めながら呟つと、貴子は「あ～うん……」と少し言葉を濁して、私の方をチラッと見た。

「いーなあ。私も少年隊のヒガシのエスコートでお祭りにでも行きたいなあ」

「やうよねえ。あーあ、どつかに東先輩みたいな人、いないかなあ

……「……

幸子女史は溜息と共に呟くと、和子ちゃんはビクッと身体を震わせ、その後ガックリ肩を落としてしまった。それを見て幸子女史はマズつた！と思つたらしい。「あら、やだ、じょ、女子だけの方が氣楽でいいじゃん？！」と慌てて弁解した。私もバツクアップするように、「そそそうだよ！一杯美味しいの食べよつよーーー」とフォローする。和子ちゃんは寂しそうに背を向けたまま、無言で小さく頷いた。

「 「 「 …… 「 「 「

(……やつぱ、まだ引きずつてるのか……)

和子ちゃんの落胆ぶりを見て、そつと息を吐いた。

私があのキャンプで雄臣に彼女いるらしい情報を落とした時、和子ちゃんと幸子女史はあからさまにショックを受け、ガックリしていた。特に和子ちゃんは暫く元気がなかつた。その証拠に、いくら尾島がランチタイムにチョックカイ出そうともほとんど上の空状態で、尾島を無視していたというより存在すら目に入つてなかつた様子だ。その姿は見た私達は、「和子ちゃん、本気だつたんだ……」と改めて思い知らされた。いつも元気な和子ちゃんが落ち込んでいる姿は本当に氣の毒で、私も心が痛んだが、告白する前に雄臣がカノジョ持ちと判明して良かつたと思っている。だつて、告白した後に彼女がいるとわかつたら……、もし付き合つことができても、後々大好きな人が人間じゃなく鬼神・修羅フキミヤに和子ちゃんはもつたないくらいだ。大体あの鬼神・修羅に和子ちゃんはもつたないくらいだ。それに、一筋縄ではいかない雌豹ブキミヤも雄臣を狙つてるし、むしろ変な

争いごとに巻き込まれなくて良かつたと思つた。

7月に入ると和子ちゃんはやつと少し元気を取り戻し、再び少年隊のヒガシ一筋となつた。「宇井和子を励ます会」として皆で行つた原宿でゲットした、ヒガシのプロマイドを眺めては「浮氣して『メンネ』とボソリと呟く和子ちゃん。皮肉なことに、少年隊のヒガシと同じ「東」がつく雄臣。最初から「俺、付き合つてる彼女がいます!」と言つておけば、罪もない乙女達をこんなに翻弄せずに済んだのに。まったく、あの鬼神・修羅め……腹立たしいことこの上ない。

平和な日々を過ぐす為、これ以上私達に近づいて欲しくないのだが……世の中そつぱ上手くいかないらしい。

「ねえねえ、ミチ。お祭りつて……東先輩来るの? なにか知つてる?」

幸子女史の言葉に私の頬は引き攣つた。貴子は私の方を見て再び目配せした後、少し微笑みながら話に集中させる為テレビの電源を切つた。

「そのお祭りと東先輩のことなんだけど……美千子」

私は言いたいような言いたくないような複雑な顔で小さく息をついた。雄臣の話題になると、どうも顔が引き攣つてしまつがない。和子ちゃんは黙つて背を向けたまま扇風機の風を受けていたが、身体全体が一語一句逃さぬよう敏感になつてゐるのは嫌でもわかつた。できればこのことを言いたくなかったが……妖怪が生意氣にも足軽に命令、いや、懇願して來たので、私はつい先日雄臣と（無理矢理）約束させられたことを渋々口にした。

「……も、もしかして、東先輩……私達と一緒に来る、かも……」

「「えつ?ー!」」

私の溜息混じりの言葉に、幸子女史と和子ちゃんが同時に声を上げた。私にとつては有り難くない展開だが、彼女たちにしたら予想外の幸運な展開だったのだろう、思いつきり声が上ずつっていた。和子ちゃんがクルッと扇風機に背を向けピシッと正座をしながら身を乗り出してきた。私は貴子にチラリと目配せすると、貴子は頷き遠慮がちに口を開いた。

「実はね? 私、日下部先輩からお祭り一緒に行こうって誘われたんだけど……こひ、二人でお祭りに行くなんて……恥ずかしくつて……。ほら、山野中の生徒がほとんど来るじゃない? その中を堂々と一人で行くのは、ちょっと……。それだったら皆で行かないかって、日下部先輩が言つてくれて……」

貴子は顔を赤くしながら、徐々に声を弱めて言つた。その後を追うように私が捕捉を説明し始める。

「ほ、ほら、東先輩と日下部先輩つて仲がいいでしょ? だだから、日下部先輩が東先輩に話したみたいで……貴子とみんなで行かないかつて……」

「「うつそあ!ー!」」

「あ、で、でも、いい色々とオマケがついてくるのー・妹とアラタも一緒に……あああとねつ?ー! 他にも」

「「ギャー!ー!」」

全部言い終わらないうちに、幸子女史と和子ちゃんは奇声を上げた。「ああの、それでですね……」とまだ大事な続きがあるので、抱き合っている一人には声が届かないみたいだ。貴子の方を見れば、

彼女ははにかんだ笑いを浮かべている。
収まるまで辛抱強く待つことにした。

私は和子ちゃん達の興奮が

8月15日のN女たち？（後書き）

雑誌「PATTI・PATTI」、今でもあるみたいですね！菩提樹も中学生の時買って読んでました。今も素敵なミュージシャンが多いですが、この話の舞台である80年代後半から90年代にかけてはバンドブームで、花形ミユージシャンが目白押しでした。懐かしいです。（*^-^*）

8月15日のN女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日の乙女たち？

我が町にある山野神社は規模はそう大きくないのだが、由緒正しくかなり古い神社である。

その神社で毎年行われる夏祭りは、山野中に通う学区の子供達の心くすぐる夏のメインイベントの一つでもあった。盆踊りのやぐらが立ち、神社までの細い道に所狭しと露店が並び、数十発だが花火も上がるのだ。

私は毎年山野神社で夏祭りが行われているのを知つてはいたのだが、実は中学に入つてから初めてこのお祭りに行つた。小学校まで友達がろくにいなかつた私には、一緒に行く相手がいなかつたからだ。お祭りなんて、小さい時に行つた母の実家の近くのお祭り以来で……初めて友達同士で行くお祭りに私は心を躍らせた。

お祭りという空間はなんとも不思議なもので、普段見あきている学生服から私服や浴衣姿という違つた姿をお披露目することもあって、生徒達に自然と気合いのスイッチを入れてしまうようだ。何故か照れ臭さと嬉しさが入り混じつた甘酸っぱい気持ちになつてしまふ。友達同士妙にハイテンションで、祭りでクラスメートや知り合いを見つければ、学校ではさほど交流があるわけでもないのに大袈裟に歓びあつたり挨拶をかわしてしまう、なんとも摩訶不思議な空間。そして好きな人を見かけた時のあのなんともいえない高揚感……まさしく祭りは青春の一ページに相応しいシチュエーションであり、そんな一時を和子ちゃんや幸子女史、奥住トリオ達と七人で分かち合つたのは去年の話である。

……では今年は？

残念ながら「青春の一ページ」が「地獄のダメージ」となりそうな予感に内震える、荒井美千子。

事の発端は貴子が話した通り、日下部先輩が貴子を夏祭りに誘い、
『二人きりは、ちょっと……生徒も多いし……恥ずかしいし』と渋
ったところから始まる。年下の可愛いカノジョ思いの日下部先輩は
『そつか……』と残念そうにしながらも、その意見を取り入れると
いう年上としての配慮を見せた。しかし、例え品行方正・成績優秀
のデキた日下部先輩でも、年頃な普通の中学生男子である。「二人
きりでイチャイチャ ルンルン」とまではいかないが、やつぱりそ
れなりに愛しのカノジョとラブラブしたいというのが本音だろう。
毎回図書館でデート＆学校と家への送り迎えだけでは一行に一人の
仲は进展しない。その相談を受けた雄臣は、『それじゃあ……』と
ある提案をしたのだ。その結果、私が安西先生の塾へ言つた時、妹
がレッスンをしている間に雄臣から有り難くない相談をもちかけら
れることになった

安西家のダイニングで英語の構文をブツブツ暗記していると、雄
臣がおもむろに向かい側に座つた。

『ミチ、夏祭りの日には開けとけよ

『……え?』

『え? ジゃないよ。祭り、一緒に行こうって言つてんの。好きな
ものを買ってやるから、その代わり浴衣着てこい。そうだな……や
っぱ紺生地で帯は赤か黄色だな。もちろん髪はアップにしろよ』
『はあつ? -』

『はあ? - ……て、オマエね、せっかく俺様がデートを誘つてや
つてるというのに……と言いたいところだが、今回はちょっと違う。
日下部とその彼女も一緒だ。ほら、笛谷貴子つてオマエの友達だろ
? そいつらのお供だよ。女の方が日下部と一人で行くのを渋つて
るんだと。なかなかガードが固いらしいな』
『ちょ、ちょっと、デート……つて、その前に貴子のこと悪く言わ

ないでよー。ま、まだ中学生だから、当然でしょ？！……そもそもの、きっと……恥ずかしいんだよ。……』

『だから俺達がサポートしてやるんだろ。あの二人、見た目より結構奥手みたいだからな。最初だけお膳立てして途中でバツくれようぜ。俺達が急に居なくなつてもいざその場になつたらなんとかするだろ、子供じやないんだし。そしたら一人で神社の境内の裏へ回つて花火でも觀賞しよう。ちょうどカップルが寝そべられるところがある。いや、それより祭りなんて暑苦しい場所からさっさと引き上げて、涼しい俺の部屋で熱いことをしてもいいしな』

『あああの、雄兄さん！』

『ああ、心配するな、その日安西叔母さん達遅くまで一人つきりでデートなんだ。年頃の男の子が一人いるからイチャイチャできないらしい。もしかしてそのまま何処かでお泊りコースかもな。ちょっと早いが、いい機会だからこの際俺たちもグッと奥まで親交を深めようぜ』

『……グッと奥まで…………つて！ ななな何を言つてるんすかっ！……』

『バカ、誤解すんな。熱いと言つてもキス程度で留めてやるつていきなりセックスなんてミチにはハードル高すぎるだろ？ 徐々に段階踏んでやるから心配しなくていい。なんせ俺は忍耐強い男だからな。まあ、その場の雰囲気に流されても…………つていうのもアリか。ああ、浴衣が乱れるなんて気にするなよ、俺は浴衣の着付けもできるからアフターケア万全だ。もちろん家まで送るし、オヤスマニのキスも忘れないしな。年上つていいだろ？』

『……オヤスマニのキスか…………つて！ そそそういう問題じゃないですよねっ！－（つーか、いつぺん死んでこい！－）』

思いつきり先まで想像してしまい、『丁寧にもオヤスマニのキスまで思い浮かべた私のイタイ思考はこの際置いといて。

一体何処で浴衣の着付けなんて覚えたんだとか、この町に来たば

かりのくせになんで神社の境内裏の事情まで知ってるんだとか、ツツ「ヨミ」どこのは満載だが、要は日下部カツプルとWデータをしようということだった。今年に入つてから一度目の貞操の危機に直面しそうな私は、急いで貴子に連絡を取り詳細を確認した。電話に出た貴子は申し訳なさそうに、『あー巻き込んじゃつた? ……「メンね?』と謝り、ボソボソと語り出した。日下部先輩と一人で出掛けるのは構わないのだが、なるべく山野中の生徒達の居ないところがいいということ、二人の姿をあまり見られたくないということを。

『ほ、ほら、日下部先輩人気あるし、あんまり他の人に刺激を与えない方が……ね? それに、私は友達同士皆でワイワイやるほうが楽しいし……』

『……』

貴子の気が乗らない弱弱しい声を聞いて、それ以外に理由があるんだな……となんとなく気付いてしまった。もしかして貴子は「山野中の生徒達」というより、「山野中のある生徒」に見られたくないのだろう。あの学校一手に負えない裏番で金髪な男一人に。

私は貴子の胸中を思い、複雑な気持ちになつた。できればあんな裏番さつさと忘れて日下部先輩と愛を育んで欲しいのだが……そうスッパリ忘れられるものでもないのだろう。心のどこかで、あの男に誤解されたくないと思っているのかもしれない。和子ちゃんと同じくらい元気のない貴子の声に、私は何も言わず貴子の提案を受け入れた。

……が、それと私の貞操は別の話である。四人でWデータなどありえない。あつていいわけがない。この状況を如何にして打破するか悶々と悩んでいたところ、タイミング良く救いの手が意外な方向から伸びてきたのだ。

それは安西先生主催の「英語強化合宿」のことだった。

安西先生がやっている英語教室。私と妹の真美子は先生の「」厚意で英語を習っているのだが、本家大元は主婦が対象の勉強教室だつた。英語好きな主婦が集まって「結婚して子供を産んでも勉強心は失せずにやっていきましょうよー」というコンセプトの元、集まつているらしい勉強会。

本家の主婦たちは毎年夏に、「英語強化合宿」と言つ名の英語漬けのカリキュラムをやっているのだが、これに私も妹も飛び入り参加することになったのだ。

合宿と言つても、本当に泊まり込みをするわけではない。なんせ主婦ばかりなので皆わざわざ家庭があり、それをおろそかにするわけにはいかないから、九時三時の六時間だけだ。それでも内容は本格的。その間はなるべく日本語不可でカリキュラム（スピーチやプレゼン、ディベート、ゲームなど）をこなすという、かなりハードなものなのだ。妹は渋っていたが、私は緊張しつつも楽しみで仕方がなかつた。

合宿日当日、安西家に行つてみれば、主婦達と荒井姉妹の他に雄臣やアラタも参加することになつていた。部屋に入った途端、雄臣は主婦の皆さんに「目の保養になるわあ」と囲まれていたのだが、その中に信じられないメンツが混じつていたのである。

『「」もげんよう、荒井さん』

……と挨拶しながら、雄臣の隣にちやっこり座つてメガネを光らせているブキミちゃんを発見したときにやあ、ビックリして飛び上がつてしまつた。大体夏休みだと言うのに「妖怪人間ベム」の横に「ベラ」が揃つていたら普通に驚くだろ。

そんなこんなで六時間耐久レースが無事終わり、緊張も解けてくつろいでいる時に、ブキミちゃんがお祭りの話題を私達に振つただ。

『皆さんは山野神社で開催されるお祭りにいらっしゃいますわよね？』

まるで伏見家主催のホームパーティーのよつな口ぶりで言つブキミちゃん。

あながち嘘でもない。なんせ地元の権力者・伏見一族、出している寄付金もハンパないだろう。

私は何も考えず貴子達カツブルと行くと言おうとしたら、殺氣の矢が前方から飛んできて顔面に刺さつた。矢が放たれた方向へ顔を向けると雄臣が「余計なことは言つな」と脅し……いや、目で訴えている。ブキミちゃんは気付いたのか気付かないのか、メガネをクイッとあげながら口元に弧を描き、普段では考えられない柔らかい口調で言つた。

『四人だけではなくて、是非お友達も連れてみんなでいらして？VIP席に喜んでご招待しますわ。ジュースも食べ物も全部フリーですよ』

伏見一族の権力を振りかざしながら「四人」なんて具体的な人数を出し、私に「雄臣を一人占めすんなよコラ、私も混ぜんかい！」と牽制をかけるブキミちゃん。一体何処から貴子カツブルとのWデートの情報を入手したのだろう。それとも今ここにいる荒井姉妹と雄臣、アラタのことを指しているのだろうか。できればそうであつてほしい。

ともかく、私にとつては「Wデートから逃れられる！」と渡りに船だつた。愛想笑いを張り付けた雄臣以外の三人は素直に喜び、真美子などは雄臣と一緒に行けるキッカケができたのに浮かれて、「それじゃみんなで一緒に行こう!」と宣言した。こうして私達はブキミちゃんの『招待を受けることになつたのだつた。

8月15日のN女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日のN女たち？

「……お祭りの件、『ゴメンね？』

貴子は食べおわったスイカや種を一つのお皿を集めながら、ボソリと呟いた。

「……あー、い、いいよ、みんなで行った方がお祭りは楽しいよ、ね？ そ、それにブキ……や、伏見さんも誘ってくれたし」

私は机の上を台布巾で拭きながら、いつしかそ色々オマケが付いてくるから……と慌てて付け足した。

「……本当に？」

「ほ、ほら！ 和子ちゃん達も喜んでたしね？ ……きっと奥住さん達やチイちゃんも大丈夫だと思つ」

「そつか、なら良かつた。いや、美千子から電話來た時、ちょっと不安そうだったでしょ？ だから迷惑かけたかな～と思つて……」

貴子は上目使いで私を見ながら遠慮がちに言つた。私はギクッと身体を震わせ机を拭く手を止めたが、すぐに「そんなことないよ！」と引き攣った笑いをしながら慌てて手を動かした。貴子は何か言つたそうにしていたが、何も言わず少し笑つて、集めたお皿をお盆に載せて台所へ運んで行つた。

私は貴子の後ろ姿をボンヤリ眺めながら聞こえないように息を吐いた後、カーテンを揺らしている窓の方へ視線を向いた。外は夕焼けで赤く染まり、貴子の家の居間に西日が差している。外からはヒグラシが鳴く声が聞こえ、夏の終わりを感じさせる何とも言えない寂しいような気持ちになつた。

もうこの部屋には和子ちゃんと幸子女史はいなかつた。

先程やつと和子ちゃんが宿題を写し終わり、意気揚々として「また部活でね！」と幸子女史と一緒に帰つて行つた。貴子が住んでいるマンションのベランダから一人を見送つた時、和子ちゃん達はこの部屋に来た時とは打つて変わって元気が漲つており、力強く手を振りながら暑さもなんのその、自転車を豪快に漕いで帰つて行った。夏祭りの件が一人を元気にしたのだろう。

思いがけず雄臣達と一緒に行くことになつた夏祭り。

真美子やブキミちゃんの招待を受けるなど余計な要素は付いてくるが、和子ちゃん達にとって雄臣と一緒に行くことが大事なので、その他のオマケは関係ないのかもしれない。さすがにブキミちゃんの名前を出した時には、「伏見さんかあ……」と不安そうな顔をしていたが。

和子ちゃん達はおそらく「893のよつた男が出入りしている」とこう例の噂を心配しているのだ。正直言つて私もその真相を確かめられるほど親しくなつたわけではなく、聞く勇気もなかつた。本音としてはやつぱり気になるところだったが、それはもつとお互い仲を深め、親友になつてから聞く内容だ。私としては永遠にそんな機会をもつても構わない。これ以上親交を深めてドッボに嵌るのも勘弁願いたい。

『そついえば、ハリちゃんつて夏休み前頃から伏見さんといふひと、多かつたよね~』

和子ちゃんが不思議そうに言つたので、私は咄嗟に「そ、そつかな？ 気のせいだよ」と顔をヒクヒクしながら適当に誤魔化した。実は弱みを握られていて……などと言えるわけがない。それでも、三年のオネエ様方にターゲットされるよりはブキミちゃんの方がずっと

つとマシだった。いくら不気味な変り者で、不穏な噂が絶えず、人の弱みを握りまくっているとしても。彼女は私に雄臣との橋渡しをお願いすることもなければ、呼び出してネチネチ厭味を言つわけでもなく、ちゃんと自分の権力と地位を使いまくつて雄臣をGETしようとする姿勢だけは褒めてあげたい。……まあ、荒井美千子じや役に立たないことを悟つているのだろう。

「ねえねえ、私達もそろそろ買い物に行こつか?」

貴子が台所から声を掛けってきたので、私はわかつたと言つて、汚れた台布巾を台所に持つて行つた。

「……夕方なのにまだ暑いね
「……ん」

夕焼け空を眺めてポツリと呟いた貴子に、私は短い返事を返しハンカチで扇ぎながら頷いた。マンションから出る前に思いつきり制汗スプレーを吹きかけたけど、効いているんだが効いてないんだが……汗で流れているので、意味がないような気がする。

私は貴子と一緒にスーパーに向かっていた。今夜の夕食の買いだしの為だ。

「今日、残念だつたね、和子ちゃん達」

私は暑さで半ばボーッとしながら貴子の方を向いて言った。貴子はカツカツとサンダルを鳴らし、財布が入っているらしいポシェットをいじりながら「そうだね」と少し笑つた。

私はこれから貴子の家にお泊りすることになつていた。和子ちゃん

ん達も誘つたのだが、一人とも「さすがにお盆だし、家族で送り火をするから、今回は残念だけど……」と帰つて行つた。チイちゃんは数日前から田舎に行つていて、私だけが貴子の家にお世話になることになつたのだ。

「世間はお盆だもんね、仕方ないよ」

「……ほ、本当に今日泊つて大丈夫だった？　せ、せつかくのお盆なのに……」

「いいよいよ、気にしないで。どうせ姉貴と二人きりだし、父さんは病院だし……全然遠慮しなくていいって！　それよりさ、美千子を誘つて良かつたのかな」と思つて。家族みんな、実家に帰つてるんでしょ？」

「…………う……ん、そ、うなんだけど」

私は貴子の言葉に弱弱しく笑つた。

貴子の言つとおり、私の両親と妹の真美子は父親の実家へ帰省していた。父の実家は東京の奥多摩なので特別遠いというわけではなし、小学生まではお盆と年末年始には恒例のように帰つていたのだが、中学生になってからは「部活や勉強があるから」「友達との付き合いがあるから」とお盆だけは帰らなくなつてしまつた。本当は正月も遠慮したいくらいだつたが、さすがに年始だし親戚一同集まるので、自分で勝手に欠席するわけにはいかなかつた。

父方の実家に行きたくないのは、それなりに訳がある。私は物心つく頃から父方の実家が苦手で、なんとなく居心地が悪かつたのだ。私と母は何故か父方の祖父母や親戚とそりが合わず、良い関係が築けなかつた。真美子は凄く可愛がるのに……それはまるで多恵子小学校までは我慢してついて行つたが、中学に入つたら義理のお付き合いはもういいだろうと判断し、母には悪いと思つたが一緒に行く

ことを辞退した。母は笑顔で一生懸命馴染もうとして頑張つてはいたが、私は途中からそんな努力も止めてしまつていた。始終無表情で黙りこんでいる子供……後々考えてみれば随分可愛げのないガキだつたと思つ。でもぞんざいに扱われれば、そんなものだろう。大体小学生の分際で愛想笑いに長けて世渡り上手の方が普通じやない。歓迎してくれない所へわざわざ顔を出す今年の正月は本当に苦痛だつたが、お年玉の為に我慢した。バイトができない中学生の身としては、お年玉が大きい収入源だつたからだ。

「でも良かつたんだ、行きたくなかったから」

「……え？ そう、なの？」

私の声が珍しくどもらず、硬くて険を含んでいることを感じたのが、貴子は少し驚いて目を丸くながら、慌てて言つた。

（……あ、やだ、いけない）

貴子は関係ないのに……ちょっと配慮が足りなかつたなと思い、私は話を逸らすべく明るい口調で、「う」、ごめんね、そ、それより泊らせて貰つてありがとう」と頭を下げた。いくら誘つてくれたとはいえ、こんなお盆の時期に泊めてくれるなんて助かつたから。もちろん家で一人というのも楽だけど、友達と一緒にの方が楽しい。それにこんな娘でも親が一応心配したので、貴子の提案は有り難かつた。

「そ、そういうえばお姉さんは？ 夜帰つてくるなら、一人分多めに用意しておいたほうがいいかな？」

「うん、一応ね。母さんのお見舞いに行つてから、友達と会うつて言つてたから、きっと飲んでくるかも。久し振りだからって、ハメ外さないでくれるいいんだけど……」

貴子は苦い顔をしながら、「ちょっと酒癖悪いんだよね……」と

溜息を吐いた。

貴子のお姉様は、以前にも紹介した通り、かつてはこの辺りを牛耳っていた泣く子も黙る伝説のスケバンとして名を轟かせたツワモノだった。

その名を 笹谷厚子ささやあつこ といつ。名前の通り、仲間に對して情も信頼も厚く（熱く）、族のヘッドも頭を下げるほどの凄味と器量と懐の深さを持ち合わせ、ケンカをすれば天下一品。あの桂寅之助ですら敵わないというのは有名な話らしい。五年も年が開いていると言つのに、妹の貴子が、まったく面識もないその筋の人には「笹谷」の名前を出しただけで、摔倒たり逃げ出したりされるそうだ。

私はお姉様のかつての雄姿を写真で拝見させてもらつたが、なんか、こう、コメント出来なかつた。……というよりコメントしようがなかつた。だって、どの写真もスカートが地面に着くほど長いものをお召しになり、ヤンキー座りで斜め45度の角度で睨んでいる写真ばかりだつたからだ。しかも金髪のスパイラルパーマ（けつしソバージュ）という可愛らしい名前のパーマネントではない）で、眉毛ほぼナッシングのガントレ&マスクを付けて顔の半分以上隠れていれば、どんな顔かコメントする方が無理つてもんである。そんなお姉様は中学を卒業と同時に不良から足を洗い、可憐な女子高生に生まれ変わつた。実はそれには訳がある。

お母さんが身体を壊して倒れたのだ。

貴子のお母さんはもともと身体が弱く病院通いだったそうだが、お姉さんが中学三年、笹谷さんが小学四年生の時にとうとう大きな心臓の発作を起こして倒れてしまう。それからは入退院の繰り返しだそうだ。現在も入院中で、何回か貴子と一緒にお見舞いにいったのだが、初めて病室に行きその入院患者の名札を見た時は……驚きを通り越して動搖し、呆然としてしまつた。

その辺には「笠谷妙子」と書いてあったのだ。

8月15日のN女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

雄臣の亡くなつたお母さんと同じ名前を持つ貴子のお母さん。

貴子のお母さんは貴子に似ていて、とても綺麗な女人だつた。いや、貴子がお母さんに似てるといふべきか。ベッドの上で一生懸命笑みを浮かべながら見舞いに来た貴子を気遣う姿は、なんだか切なくて、見ていてとても心苦しかつた。時々透き通つて見えるほど存在が薄く、魂が薄いと言えばその雰囲気をわかつていただけるだろうか。実際今のところ退院は難しく、見通しもたつていないと言う。私は多恵子小母さんのこと嫌でも思い出してしまい、いつのまにか篠谷さんのお母さんを多恵子小母さんの姿に重ねていた。

『もしかして、あなたが美千子ちゃん？ 貴子から話を聞いてるわ。これからも貴子のことをお願いします』

そう言いながら微笑む貴子のお母さんは、まるで聖母マリア像のように神々しく、複雑な思いもあって直視できないほど眩しかつた。（もし、多恵子小母さんが貴子のお母さんみたいだったら……、私の人生も変わつていただろうか？ 雄臣との関係も、もう少しマシだつたのかな）

そんなこと考えたところで時は戻らぬし、自分が取つた行動を無かつたことなど出来はしないのに。表面は笑顔を張り付けて貴子のお母さんと話はしていたが、心中では愚問を繰り返すばかりだつた。

今更だつたが、多恵子小母さんの時にひくに見舞いに行けなかつた償いを埋め合わせするよつて、そして一日も早く元気になつても

らうよつて、貴子が誘ってくれる時は何時でも一緒に病院に足を運んだ。

そして貴子のお姉様は、そんなお母さんが倒れた日を境に一代決心をした。

実は貴子のお姉様と貴子は半分しか血が繋がっていない。お姉様はお父さんの連れ子で、貴子のお母さんとは血が繋がっていないのだ。そんな複雑な事情もあって、一時お姉様は道を逸れてしまった。けれども貴子のお母さんは、お姉様がどんなにヤンチャをしても決して見離さなかつた。いくら暴れて相手にケガをさせようとも、何度も学校に呼ばれたり警察沙汰にならうとも、黙つて頭を下げお姉様に一言も愚痴や文句を言わなかつた。それどころか、身体が弱く不甲斐ない母親でごめんなさいと謝るだけだったそうだ。お姉様はその頃、思春期という難しいお年頃ということもあって、最初は義理の母親を無視していたが、次第に心の中で義理の母への反発と申し訳なさが葛藤し始めた。そんな複雑な心境がピークの時であった中学3年の時に、とうとう突き付けられたお母さんの危篤。たくさんの医療機材がお母さんの身体に付けられている姿を目の前にした時、最初に泣き叫んだのは貴子やお父さんではなく、厚子お姉様だつた。その瞬間からお姉様は生まれ変わり、涙と鼻水でキッチリ施していく化粧が落ちたグチャグチャな顔を天に向けて思いつきりガンを飛ば……いや、一つの願掛けをした。

『真つ当な道を歩むから、神様……どうか、どうか、この義母の命を救わんかい!』

あまりの迫力に神も怯んだのか、この願いは無事聞き届けられ、お母さんは命を取り留めた。

そういうわけでお姉様はスケバンの名を捨て、身なりはそのままだったが、中身は普通の女子中学生にからうじて戻り、勉学に打ち

込むようになつた。もともと根性は据わつてゐるし、努力家と言うか強運の持ち主と言つか……ともかく持ち前のカリスマ性と頑張りで、高校は無理と教師から太鼓判もなんのその、たつた半年で他の生徒が学んだ中学の勉強を制覇し、見事都内の高校に合格したのだ！県内の高校に進学しなかつたのは、お姉様の名前がその筋の人にとって知らない人がいない程有名だつたため、バレたらなにかとマズイだろということで東京にしたそうだ。

その高校も今年の三月に無事卒業し、短大の看護学科に合格したというのだから、人間先の事はわからないものである。本当は医学部に進みたかったらしいが、さすがにそれは無理だつたらしい。それでも御両親は大層大喜びしたそうだ。十分親孝行だと言われたお姉様は未来のナイチンゲールとなる為、現在看護婦への道を歩み中と言うわけである。私はその話を聞いて素直に感動してしまい、身体の弱いお母さんの為だらうと思うと涙が出てきてた。別に会つたこともなれば、五歳も年上な元スケバンなのに「良くやつた！更生してアンタえらいよー！」と上から目線で褒め称えてしまつた。もちろん心の中でだ。

実はそんなお姉様と生で会つたことがなかつた私。この突如舞い込んできた恐ろしい、いや、素晴らしい記念日に内心緊張しまくつていた。呑気に褒め称えている場合ではなかつ、荒井美千子よ。

「そ、そういうえば、お姉さんと会うの初めて。き、緊張しちゃう」「そ、そんなことないよ。すつごい気さくだから、気楽にしててよーお酒入るとちょっと手に負えないけどね」

「……手に負えない……」

「そ、なの、未成年のくせにお酒が好きでね。虎一イガ飲むのもきっと姉貴がキッカケだと思ひ。昔無理矢理飲ましていたからね」「……なるほど……」

ハハハと無邪気に笑う貴子の横で、私はモヒカン頭の元裏番とスパイナルパークのスケバンがコンビニの前でヤンキー座りをしながらビールを乾杯している姿を思い浮かべてしまい、さらに嫌な汗がジワリと吹き出すのを感じた。

「ハハ……お、お姉さん、お酒飲むなら何かオツマ!!も用意したほうがいいかな」

「いいよいよ、帰つてこないかもしれないし」

「そ、そうなの? (ちょっと)、安心だつたりして!」

「あ、でも、今日父さんいないから、もしかして仲間連れてくるかもしれない。けど無視していいから」

「……な、仲間ね…… (もしかして、ヤバかつたりして……)」

それよりも仲間などを引き連れてきたら、無視など言語道断、絶対全員にキッチリ挨拶しなければいけない気がする。それこそ後で「あんとき挨拶しなかったテメエに、しつかりわざわざ出向いて来てやつたぜ、感謝しな!!」などとお礼参りの挨拶を返されたのではたまつたものではない。

「オツマ!!より酒がないほうがマズイのよ、ウチの姉貴は。ないと機嫌が悪くなつて暴れるんだよね~」

「……あ、暴れるですか……」

「飲んでも暴れるし、手に負えなくて。だから仲間が来てくれた方が面倒にならずに済むの」

「……手に負えない……」

「ちょっと顔と身なりは怖い連中だけど中身は気さくだから、大丈夫心配しないで! それにバツチリ酒は常備しているし、万が一姉貴が暴れても、仲間が全部被害被つてくれるからさ」

「……ハハハ……」

「なんなら私達も少し飲んじゃう?」

「え……ええつ？！」

「フフ、冗談だつて！ あ～なんか楽しみ！ それにキャンプ以来じゃない？ こうして友達同士料理して泊るのつて！..」

「そ、そうだね。今年から部活の合宿も無くなっちゃつたし」

「合宿ね～懐かしい！ 今年から全面禁止になっちゃつたもんね。ちよつと残念だつたなあ」

「ウン、ホントだね」

そうなのだ。去年の夏、酔っ払いが中学校に乱入して来たせいで、今年から部活の合宿が中止になつてしまつた。あれからもう一年経つなんて、月日が過ぎるのは本当に速い。その間に私の周囲は目まぐるしく変わつた。それこそ去年の合宿の時は、隣の貴子とこうして並んで歩くことなんて想像もつかなかつた。だつて、彼女は原口グループの中心人物だつたのだから。その他にも色々な縁が増え、雄臣やらブキミちゃん、尾島^{サルヤロー}達……妖怪の顔が頭の中で浮かんでは消えていく。特に尾島。まったく運命とは皮肉なもので、田宮君に恋心を募らせていた去年はバスケ部と体育館使用時間が前後で重なることはほとんどなかつたくせに、田宮君への恋心を諦め、尾島がバスケ部を掛け持ちした途端、バスケ部と練習が重なることが多くなつたのだ。

8月15日のN女たち? (後書き)

文中に「看護婦」とあります、このお話を80年代後半の為、その時代に合わせた呼び名で書いてあります。現在は「看護師」です、ご了承くださいませ。三(一)三

8月15日のN女たち？（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

夏休み前までほとんど口をきかなかつた私と尾島は、ただのクランメートとして淡々と日々を過ごしていた。それが夏休みに入った途端、ブキミちゃんがいせいなのか、部活の練習で顔を合わせるたびに私に話しかけてくるようになったのだ。それもどうでもいい小言ばかりで、嫁を苛める姑ばかりのくだらない内容のオンパレード。ハツキリ言つて、ウザイし迷惑だつた。

『おい、ブルマに毛玉ついてんぞ、プラネタリウムのつもつか？ちゃんと星座になつてねえじゃねえか！』

『チユウさあ、すね毛くらい剃れよ！蝶子を見習え！男に負けてるなんてありえないだろ？！』

『オマエな、白いTシャツにピンクのフリルがついたブラジャーなんかしてくんnya、透けて見えるだろ？がつ！ほら、あれ、ベージュのスポーツタイプにしろ！…』

（オイ、一体オマエは何処を見ていやがるんだ、このエロ猿！）

毎回毎回顔を合わすたびにセクハラまがいな捨てゼリフを吐き、元裏番や雄臣に似てきてるぞとシックロミを入れたくなるような小言を言つ尾島。

（ここので断わつておぐが、私のすね毛はそんなにぼうぼうと生えてない訳ではない。そりゃちよつとは伸びていたかもしけないが、あくまで「ちよつと」である。決して蟻んじができるほど伸びている訳ではない！）

それを見たバレ一部の後輩達は、普段は私のことを先輩と思つてないようなナメタ態度を取るくせに、こんな時は近寄ってきて顔と運動神経だけはよろしい尾島に群がる始末。それも他の女バレの連中と女バスの皆さま方から睨まれているにも関わらず、だ。

『やだ～ 尾島先輩のエツチイ、スケベエ～』

そんな死語同然な黄色い声を出す女バレの後輩をからかってはキヤーキヤー言われている尾島。

猿の鼻の下が伸びに伸びまくっている姿は見ているだけで不愉快極まりないので、とつとと現場から撤収し完全無視を決めるというのが、ここ最近の私の行動だつた。大体いちいち相手にするのも疲れるし、何故か訳もなくイライライライライライラ！……いや、そんなことより、その姿をチイちゃんが後ろからジッと見てるもんだから、下手に誤解を招くようなこともできないからだ。

（チヨツカイ出すなら、チイちゃんや原口にでもやれよ！）

それこそ人のブラやブルマなどを観察する空しいことをしなくても、愛の告白をされちゃつたり、レモン味のファーストキッスや禁断の青い果実なムフフまでもれなくついてくることだらう。

しかも頭が痛いことはそれだけではなかつた。尾島の小言に続けとこつよつこ、あの小関明日香も一緒になつて、悪乗りをするのだ。

『ほんとだ～ブルマに毛玉が付いてるよ～私が取つてあげる～』

……と言つてブルマを引っ張つたり、

『//ちやんつすね毛伸ばしてるんだ？ 男らつし〜～！』

……と感心しながらジロジロ眺めまわしたり、しまじこま、

『相変わらずオッパイおつきいねえ！ 羨ましいぞお～エイツ！～』

などと言しながら一発でブラのホックを外したり……マジで笑え

ない。

しかも隙を狙つて「だ～れだ！」といいながら田ではなく背後から胸を掴んで揉むのだから勘弁してほしい。さらに触ったその手を「ミツちゃんのオッパイの感触」などと言いながら、尾島の頬や胸にこすりつけるのだ。それはまるで、小学生同士がやる実にくだらない「ヤベ、荒井美千子菌ついたまつた！」というような具合に。もちろん尾島が黙つてヤラレているわけはなく、顔を赤くしながら怒り出す始末。

『明日香あー テメエ、勝手に俺のボインツ……い、いや、そうじやなくつて……と、ともかく勝手に馴れ馴れしく触んじゃねえ！！』
『やつだあ、啓介つたら。ちよつと身体触つたくらいで怒んないでよ～』

『怒るわっ！ 大体、ちょっとじやネエじゃねえか？ ドサクサに紛れてガツチリ掴んで揉みやがつて！ 俺だつて揉んだことないつあ、いや、その、なんだ……と、とりあえず謝れ！…』

『なによ、そんなにガツチリ触つてないじやん。身体にちよつと触つたぐらいでいちいち田ぐじらたてないでよ、手で擦りつけたくらいで大袈裟あ。女じやあるまいし、自意識過剰おー！ でもお意外と柔らか～いんだねえ』

『や、柔らかいっ？！ そそそなに柔らかいのかつ？！…』

『やあねえ、そんなに興奮するところじやないでしょ。本当啓介のほつぺたつて本当に柔らかいねえ。え～い、つまんでのばしちゃえつー！』

『……は、ほへほほつへは……く（……あ、オレのほつぺた……ね）つて、イテエんだよつ、明日香あー。』

などといつクソ面白くない夫婦コントを披露し、その姿を見ながら女バレの皆さんとバスケ部の皆さんが笑つて一騒動になるのであつた。さらに最悪なことに、原口とチイちゃんはそれを見て複雑そ

うな顔をしているのだ。

(小リスよ、アンタ原口やチイちゃんと普段仲いいんだから、もうちょっと空氣読めよ！)

笑っている集団に背を向けながら心で突っ込みを入れるが、考えてみれば私が心配することではない。しかし、その原口の複雑な思ひが結局怒りとなつて私に返つてきたり、チイちゃんの心配を取り除くために私が余計な気を使わなければならぬ事を心配しなければいけない私は一体なんなのだろ？

(……結局私に被害が回つてくるんだよね)

想像するだけで落ち込んでしまうほど実に憐れで可哀想な自分の現状に、私は段々紫色になつていぐ夕焼け空を見上げて思わず大きな溜息を漏らした。

「ハア」

「ど、どうしたの、美千子？ 大きな溜息吐いちゃってさ」

「ううん、なんでもない……。生きるつて大変だなつと思つて」

「……は？」

「なんか『とかくこの世は儘ならぬ』という言葉が浮かんだの……」

「美千子……。そ、そうだ！ 今日の夜さ、ホットプレートがあるから思い切つて焼肉にでもしない？ 肉なら姉貴も大好きだしね！」

「……え？ 焼肉？」

貴子は落ち込んでいる私を元気づけるように一生懸命明るい声で言った。さらにお姉さんは大の肉好きだという情報を披露し、軽くキロ単位でいけるという物騒な……いや、豪快な言葉に上手いコメントが浮かばず「ワ、ワイルドなお人だね」というのが精一杯だった。会うのが益々不安になつてきたが、「焼肉」の言葉で元気になる私を人の事を言えた義理ではない。夕焼けに向かつて「今夜は焼肉！」と宣言し、長い影を作りながら私達はスーパーへ向かつたの

であつた。

8月15日のN女たち？（後書き）

尾島は相変わらずイタイ勘違いをしてるようです。とにかくスネ毛を処理するタイミングつていつだと思いますか？この長さならギリギリOK！などと思っていた、いや現在も思い続けている私は乙女失格でしょうか。

8月15日のN女たち～オマケ～（前書き）

この章は多分に過激な表現と未成年の飲酒を促す表現が出てきます。
PG12指定とさせていただきます。読む際にはお気をつけ下さい。

8月15日のN女たち～オマケ～

「の15日の夜、貴子の予想通りお姉様とその仲間達はアジトに帰還……いや、マンションに帰宅し、私は皆様との対面することになった。

台所のダイニングテーブルで貴子と二人、焼肉をつつきながら部活の事やコイバナに花を咲かせていると、開いたままのベランダに続く窓から微かに物騒な音が聞こえてきた。平和に暮らしている限り絶対ご縁のないあり得ない音は、確実にこちらに向かっているらしく、次第に大きくなっていく。

……ラリラ、パラリラ、パラリラ！

そんなベタな音が夜の住宅街に響き、音がピタリとやんだと思ったら急に轟く無数の爆音。マンションの八階であるにも関わらず、ここまで聞こえる排気ガスの音のすごさに無言のまま窓の方を見ていると、貴子はなんのためらいもなく席を立つてビールなどのお酒を用意し始めたのだ。

それから間もなく玄関の扉が勢いよく開かれ、とうとう篠谷厚子お姉様が若干酔っ払い気味の様子で登場した。それも、湘爆走族のような連中に身体を支えられ……いや、少々暴走チックな友人を脇に引き連れて。

『あ、いらっしゃい』

普通に笑顔で挨拶する中学一年生の貴子に、「ウイッス、今日もお世話になります！」と礼儀正しく頭を下げるどう頑張つても品行方正とは程遠い強面のオッサン顔で、頭が鬼ゾリ&パンチ&レ

インボーカラーの暴走族達。その驚きといつたらまるで「ひょうんベストテン」には、

『まさか本物の歌手は出ないだろ？』

……と思つていたのに、モノホンのC-Bが出てきてあらまびつくら仰天！ てな感じだ。そんな派手系部下達を顎で後方に下がらせ、千鳥足氣味で私の前に立ちはだかつたお姉様。

『アンタが噂の貴子の友達だね？ 貴子や妙子から話は聞いてるよ。見舞いにも来てくれたらしいじゃないか。オマケに寅之助アタイの手や尾島達が大変お世話になつてるようで……今後とも変わらぬお付き合いをどうか夜露死苦つ！』

『ハハハハイ！！』ここここここここここ、たたた貴子には大変おおおおおおお世話になつてますっ！』

どんな噂だろ？……などと思つたことはさておき。

私は精一杯の力を振り絞つて九十度の角度で頭を下げ、キッチリ挨拶をさせてもらつた。目の前の生お姉様は、少し目が据わつて胸倉を掴みそうな勢いだつたが、貴子と同じワンレンのサラサラロングヘアーデ、トレンドドラマの大御所である「W浅野」の片方と似た感じのお人であつた。漢字は違うが名前も同じだし、普通にしていたらしつとり美人……の筈なのに。なにか、こう、色々と残念だ。

『……ほう、地味なわりには、なかなかいいボインもつてんじゃねえか。なあ、オマエらつ！』

『『『ウイツス、揉んでみたいツス！』』』

『バカヤロウつ、中坊相手に犯罪だろ？がつ！ オマエらは適当にオツパイ饅頭でも食つとけつ！ ……すまねえなボイン、こいつら

には手を出させねえから安心しな。でもな？ ボインに田^たが行つちまつくらいは許してやつてくれよ？ なんせヤリたい盛りの「てい

いんえいじやあ」だからよ~。田の前にデカイボインがありや触りたいてのが男つつーもんよ』

『『『『ひどいや姐さん、そりやないッス！』』』』

『いいか、オマエら。残念だが世の中思い通りにいかねえってのが現実でよ、実際はそんなに甘かねえんだ。よつてオマエらはボインを眺めるだけで我慢だ。その我慢が明日への活力に繋がるつてもんよー』

『『『キツイや姐さん、拷問ツス！』』』』

『つーわけでボイン、これからもアタイの大変な妹と仲良くしてやつてくれ、な？ 困ったことがあつたらいつでも相談に来な。アタイに任せりや怖いもんなしさ、なあ、オマエらつ！』

『『『さすがは姐さん、最高ツス！』』』』

『フハハハ！ オマエら、本当にカワイイ奴らだなつ！ 貴子、酒だ、酒と肉だ！…』

「厚子^{あつこ}」

「厚子」というより、「アツコ」と呼んだ方がしつくりくるようなお姉様は、「アツコにまかせ！」というニユアンスの頼りがある大物ぶりを發揮し、すぐさま「者ども、やつちまいツAつ！」的な号令で大宴会を開始させた。

それからの私は、厚子お姉様と暴走族達に交じつてタンクトップを盛り上げている、そろそろEカップブラにしようかなとの胸の辺りをガン見されながら和氣あいあいと焼肉を食べるといつ、三回目の貞操の危機という名の拷問……もとい、貴重な体験をすることとなつた。気が付けば、肉を焼く＆お酒を奉仕するホステス係になつていた荒井美千子。しまいにはいくら食べても腹が満たされずに食っている猛獣系暴走族……じゃなく、育ち盛りのティーンエイジャーな派手系男子達に酒のツマミを追加するため、おかずを作つたり、おにぎりまで握つたのであつた。

この打撃的……間違えた、刺激的な大宴会は夜中まで続き、深夜になつて私と貴子が寝室に引つ込んだ後も終わらなかつた。次の日起きてみると、お姉様と仲間たちは居間で軒の大合唱しながら雑魚寝をしていたが、以外にも台所はすべてキレイに片づけられ、宴会の跡はキレイさっぱりなくなつていたのだ。「片づけてくれたお礼に」と貴子と一人で全員分の朝食を用意し、若干中一にして立派な飯炊き女……というか、厚子部屋のおかみさんと化した荒井美千子。朝食が全部そろう頃には、のそのそ起きてきた部下たちの姿にも目が慣れ、普通にご飯とみそ汁を出していた。人間というのは意外と環境に適応できる生き物らしく、それに驚いたのは何をかくそう私自身だった。

完全ダウンしていたお姉様の代わりに、熱い太陽が降り注ぐ昼間がまつたく似合わない部下たちを貴子と笑顔で送り出した後、私と貴子はお母さんのお見舞いへ行き、再びマンションへ帰つてきたら、復活した厚子お姉様が待ち構えていた。

『ボイン、ここに座れ！』

酔つた時とはまた違つた迫力を持つ素面のお姉様は、いきなり「いかにしてイイ女を作り上げるか」という講義をしだし、「これぞ『女の六道』（絶対地獄を見ない道、餓鬼呼ばわりされない道、畜生と地団駄を踏まない道、修羅場に勝つ道、人間女豹道、本命の天上天下唯我独尊になろう道）を懇々とレクチャーしていく。その授業内容は、

『男を撃ち落とす10の必勝法』

『これであなたも男に貢がせる女！』

『掴んだ男を離さない為に、男の育て（操り）方と寄りつく虫（女）

の駆除方法』

『正しい女豹のあり方／アバズレ女と色氣のある女の違い』

『必読！ 女豹と雌豹、小悪魔と困ったチャンはここが違う！！』

『実録シリーズ・これが女豹の実態だ！ ～狩るも狩られるもあなたの心意気次第～』

……などなど、後のハウツー本の先駆け的な、中学生には必要ないんじやないかなーというほどの濃い内容であった。講義の後は実践編として、男と一人つきりの場面や浮氣相手と鉢合わせした場面などを想定し、厚子お姉様推薦の豹柄の勝負服やビキニなどを着せられ、将来美容関係の仕事に就きたい貴子に顔をいじられ、本番ながら実習が行われた。どんな逆境にも負けない清く正しい女豹としての厳しい指導を受けた荒井美千子。ここだけの話だが、厚子お姉様直々に伝授してくれた「史上最强の女豹ポーズ」は、数年後見事に効果を發揮し、最終的にはサンタを完全に再起不能にさせるほど驚異的な威力を見せることになるのである。

女豹レッスン修了書として厚子推薦勝負服、またの名を要らなくなつた古着を授与され、笹谷姉妹に見送られた後の帰り道、また一步大人の階段を登つたこの24時間の出来事を不思議な感覚で思い返していた。

それは。

厚子お姉様は仲間想いの熱いハートの持ち主で、部下達はそんなお姉様を慕つていて絶対的な存在だということ。その部下達は貴子の言つとおり意外と気さくで、礼儀正しいシャイなお兄さん達だということ。昨夜はおかげを作つた私そのものが、夜のオカズにされそうな現場だつたということ。厚子お姉様や部下の皆様は私のことを結局最後まで「ボイン」呼ばわりしていたこと。そして、厚子お姉様は血が半分しか繋がらない貴子を随分と大事にしており、お互に信頼関係を築いている姉妹関係がちょっと羨ましかつたこと。

」の出来事は中学を卒業し何十年経つても強烈な夏の思い出として、私の心中に深く刻まれるのであった。

8月15日の乙女たち～オマケ～（後書き）

笹谷厚子、最強です。

C-C-B、懐かしいです！菩提樹も好きでした。当時友人が関口さんの脱退最後のライブ、確か読売ランド？に行つてその時の写真を見せてもらつた記憶があります。ちなみに仏教でいうところの六道は、「地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道」です。こんなん書いてたからパソコンがイカれるというバチがあたつたのかなあ、私。ホント笑えない。（-”-；）

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

「東先輩、焼きそばなんていかがですか？」

「雄兄さん、はい、ジュース。喉乾いたでしょ？！」

「東くーん、カキ氷冷たくて美味しいよー！ イチゴ味なんて、どう？」

「イチゴなんてそんな甘つたるいの、東君は好きじゃないわよ！ こいつのレモンのほうがさっぱりしてるわよね～？」

湿氣と煙と暑い空気が籠る野外に張られた来賓客用テントの中。
付き合いだけは無駄に長い幼馴染である雄臣の周囲には女が群がつていた。目の前の机の上にはズラリと食べ物が並べられ、よくみると夜店で売られているものは一通り揃つており、『J-T寧にスーパー・ボールや金魚まで置いてあつた。

「いやあ、困ったなあ。そんなにいつぺんに食べれないなあ」

雄臣は頭を搔きながら朗らかに笑つているが、目は笑っていない。その証拠に向かい座つていてる私に目線だけはこちらに向け、「黙つて見てないで助けるよ！」という救援信号を瞬きで送つている。が、私は敢えて気づかぬ振りをした。第一雄臣に群がつて火花を散らしている女性陣の中に堂々と介入する勇気もなければ、人の恋路を邪魔して馬に蹴られるのも嫌だからだ。しかも馬などという生易しい連中じやない。ベラ（ブキミちゃん）、リンダ（真美子）、ラフレシア＆アマゾネス（先輩たち）という厄介なメンバーなので、この場合とことん無視のほうがいいだろ？と目を逸らした。それに私は今それどころではないのだ。何故なら……。

「お嬢ちゃん、全然食べてないじゃないか！ ほら、遠慮せずどんどん

どん食べなさい。ピチピチの若いモンが遠慮なんかしちゃいかん！」「そりだぞ！……いやあ、かおりのお友達にこんな子がいたとはねえ。美千子ちゃん、その浴衣とつても色っぽいよ。今時の中学生活は発育がよくて大人っぽいからオジちゃん困っちゃうな

「いやいや、伏見先生、まったくそのとおりですな。私もあと二年若ければ、ハッスルしちやうところですよ」

「「「ワハハハ～！」」

そう、何故なら私は今、来賓客の席に座っていたＵＳＢ（ウザイ・セクハラ・バー・コード）に囲まれていたからである。決して後に普及する「補助記憶装置」の略などではない。大体こんなオヤジ連中、即効記憶から消去したいくらいだ。それこそＪＡＣ（ジジイ・あんまり・近づくな）であり、ＪＪＣは是非とも同じＪＡＣ繋がりな千葉真一様の素晴らしいケリで蹴散らしてほしい。しかし、現実は非情だ。私は両隣に座っているジジイな連中を無碍にはできるほど世渡り上手な大人ではなく、只の山野中学校2年1組普通女子だつたため、ここから撤収できず大人しく座っていた。こんな変態ジジイ共だが、平平凡凡の道を歩いていれば決して接点がない程ステイタスマンのお偉いさん方であつて、市会議員のブキミちゃんの祖父を筆頭に、なんとか委員や団体の会長の肩書を持っている人たちだつたりするのだ。

「ああああの、そそそそんなにお腹すいてませんので……」

両隣から迫りくるオヤジの攻撃をかわすだけで精一杯の私は、祭りのために夕飯を抜いてきた空きつ腹に入れつつ、無理して微笑みながら一生懸命抵抗した。よつて目の前で睨んでる雄臣を助けている場合ではない。逆にこっちが助けて欲しいくらいだ。

まったくこんなオヤジな連中を喜ばすために、暑い・面倒・動きにくいといふ浴衣などを着てきたわけではないのに、どうしてこ

うなつてしまふのだろう。雄臣の言葉にうかうか浮かれて着てきた罰が当たつたのだろうか。こんなことなら私も田の前で雄臣にベツタリぶら下りて、いる真美子のように浴衣を辞退すればよかつた。涼しい・手軽・動きやすいという文明開化の素晴らしいところ取りの洋服にすれば、少なくとも鼻緒の部分がすれている足の痛みは気にしなくてよい。数日前の自分の行動が悔やまる。

お盆明けに家族が奥多摩から帰つてくると、私は母に浴衣のことを尋ねてみた。そうすると母が昔着ていた大人向けの浴衣が一点だけあることが判明したのだ。一着しかない紺生地で団扇柄の風情ある浴衣。真美子と取り合ひしたら絶対負けるであろうと思つて、私は、いつものように身を引いて浴衣を真美子に譲るうとした時、逆に真美子から「お姉ちゃん、浴衣着ていきなよ」とアッサリと言われたのだ。

『え、ええ？　いいの？』

『いいよ、お姉ちゃん着ていけばいいじゃん。せっかく夏祭りだし。そういうえば去年、浴衣着なかつたでしょ？　だから今年は着ていきなよ！』

『あ、ありがとう！』

『いいのいいの。私、背が高くてスタイルいいからさ、多分この浴衣短いんじゃないかなあ。それにみんながみんな着ていく浴衣なんかより素敵なサマードレスの方がお祭りで目立つじゃ〜ん？　そんなお古よりオニユーノのを買つてもらう方が断然いいしい！　パパあ、白いコットンのドレスがほしいんだけど、買つてもいい？　あとサンダルもおー！』

やられたと思った時は既に遅く、私の目の前には風情……というより、急に古臭く見えた虫干ししてある浴衣と真美子が父にベッタリ甘えている憎い姿だけが目に残つたのであった。

それでも実際浴衣を着付けてもらい、髪の毛をアップして鏡の前に立つてみれば、意外と悪くなかった。なによりも浴衣の柄のせいか洋服より胸が目立たないような気がしたので、それでヨシとしたのだが……。

(結局ジジイ共を喜ばせただけじゃん！－！)

まつたぐ、前も横も自分勝手な妖怪ばかりで祭りどひるの騒ぎではない。まるで祭りに捧げる為の生贊になつた気分だ。実際この場の私と雄臣は生贊同然であるう。それこそ私以外は生贊を遠慮なく貪る連中ばかり。少し前迄にいた、まともな和子ちゃん達はもうすでにここにはいないのだから。

「……」

数十分前までは確かに一緒だった和子ちゃん達。

それこそブキミちゃんに発見され、このテントに引き込まれるまでは和氣あいあいとしながら朗らかな気分で祭りを楽しんでいた私達だったのに。残念ながら現在はそれぞれ散り散りバラバラの解散状態だった。

約束通りブキミちゃんの招待を受けた手前、挨拶して「ハイ、さようなら！」といふわけにはいかず、黙つてテントに滞在した私達だったが、まず貴子と口下部先輩がサッカー部の三年生達に連れて行かれた。その次にアラタが無理矢理同じ陸上部の子たちに連れ去られる。アラタはしきりに真美子の方を気にしながら不安そうに私を見たが、当の真美子は雄臣しか目に入つておらず、私は頭を横に振り、気にせずに行けと目くばせをした。アラタは名残惜しそうだったが、この際新しい世界に飛び込むのもありだと思う。アラタの手を引いたのは男子だったが女子も結構いて、恥ずかしそうに話しかけた子は意外と可愛かつた。

(むしろ田の前の鬼神・修羅より誠実でいい男だと思つ)

アラタは背が低くて運動はイマイチだけど、超がつくほど頭が高い。なんせK成中に受かつたくらいだ。当初は塾に通う予定だったが、結局あの箕輪が顧問の陸上部に入部し、怒鳴られながらも長距離走選手として部活をサボることなく黙々と走りこんでいた。その姿はこの年のボストンマラソンに優勝した瀬古選手のようだ。雄臣の話では、その真面目な人柄が受けているらしく、クラスでも部活でも上手くやつているとのことだ。

以上の三人が抜けると、今度はその抜けた穴を埋めるようにラフレシア＆アマゾネス（先輩たち）が乱入してきたのである。雄臣狙いの手強い女が四人になると、それまで雄臣をキラキラした眼で見上げて少ない会話を楽しんでいた和子ちゃんは、途端に意気消沈して黙ってしまった。いつもはリーダーシップをとるほどの積極性溢れる人柄は、さすがにバレー部部長がいる手前、同じ部活の後輩としては思う存分発揮できなかつたようだ。

そこを狙つたようにタイミング良く表れた、お呼びでないHSBのオヤジ三人衆。

和子ちゃんは激しく落ち込んでいた分、セクハラまがいの言葉と行為に怒りを倍増させた。宇井和子・乙女な十四歳且つ女子バレー部レギュラー控え選手で類まれな殺人スパイクを繰り出す彼女は、その力強い掌をボロい机に向かつて振り下ろし、灰皿や食べ物が乗つていた紙皿をひっくり返すという暴挙に出てしまつたのだ。「しまつた！」と思った時には雄臣を含む全員の驚いた視線が宇井和子に集中した後だつた。中でも一番びっくりしたのは当の本人だろう、その証拠に涙目で固まる始末。私はオヤジ共に怒り燃やし、それこそ「三匹が斬る！」ではなく「三匹を斬る！」の心境だつたが、相手は物騒な連中と繋がつてゐる伏見一族のドンが混じつてゐるのだ。ここはグッと堪え、

『や、やだあ！　ここ蚊が多いわあ。なんだか痒い』

……などとこつ苦しい言い訳しながら、何度もバンバンと机を思いつきり叩いてこの場を取り繕う荒井美千子。

『皆様が蚊に刺される前に、ミチコはもつと蚊取り線香を増やしちらいいと思うの。ね？　オ・ジ・サ・マ（ハート）』

……などと上目づかいで強請るようになってしまった荒井美千子。
先週レクチャー受けたばかりの厚子お姉様直伝、『男を撃ち落とす10の必勝法』に従つて人生初のお色気を發揮させ、隣で若干固まっていた加瀬さんに「すぐ撤収しろ！」と合図し見事脱出させたまでは良かつたが……。初級お色気攻撃、その名も『A・HAN（アハーン）』は即席だったにも関わらず、以外にもオヤジの心にクリティカルヒットしたのは誤算であつた。結局私一人にディさん共が集中し、この有様。たとえこの状況が自分で誇った種であつたとしても、納得いかない荒井美千子なのであつた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

「恋が斬る！」：1987年の10月に放送されていた時代劇ドラマのタイトルです。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

私は無性に悲しくなり、そつとため息を吐いて目の前の小さいボールに入っている金魚を眺めた。明るい灯りの下の金魚は、幻想的というよりも妙に物悲しさを誘った。私の暗い気持ちなど知りもせずに金魚は無邪気に泳ぎ続いている。これどうするんだろうと普通に疑問を抱き、ブキミちゃんに尋ねようと彼女の方へ顔を向ければ、不機嫌さを瞳に宿した鬼神・修羅と目が合つた。

(……だから私にジーしろといつんですか……)

思わずジロリと睨み返すと、雄臣は鋭い眼光を緩め、フツと口を綻ばせて笑つた。

机を挟んで熱っぽい瞬きだけで合図する男女二人。

恋人同士であればこれほど恋を盛り上げる口マンチックな仕草はない、この簡易性のボロい机の距離すら天の川のように遠く感じるだろう。しかし現実はそんな甘いものではない。お互い救援を訴えるモールス信号と化していた。

(おい、織姫。そんな酔っ払いジジイ共に愛想振り撒いてるんじやない。適当に誤魔化してこっちに来い！)

(……それはこっちのセリフです、彦星殿。第一どう見ても私のほうが危険極まりないでしょ。こういうときは男が女を助けるものよ(オマケに『男を撃ち落とす10の必勝法』掲載の初級お色気攻撃、その名も『U・FUN(ウフーン)』を使いやがつて……一体何処でその安全確実異性狩猟方を取得した？！)

(雄兄さんは知らないいいことです。それより『U・FUN(ウフーン)』ではありません。それは中級で、初級は『A・HAN(アハーン)』です)

(……上げ足を取る生意気な幼馴染には御仕置が必要だな。俺の御仕置きは厳しいぜ？ 泣く娘も喘ぐ、夜通しカーニバルだからな。

しかも俺の目の前で他の男にお色気攻撃を使った分も含め、三日三晩ノンストップの刑を追加してやる。今から楽しみだよ、俺好みの女豹に調教してやるから覚悟しておけー）

（普通にイヤですよ。しかも中学生の言葉とは思えません）
（いやあ、一度言つてみたかったんだよ。ミチも門外不出の女豹養成特殊訓練を受けたなら、ささやかな男のロマンぐらい察しろよな。それより、そんなＵＳＢ野郎は放つておけ。どうせ今日一夜限りの夢いご縁だ。問題はこっちの方だよ、なんせ中学卒業まで顔を合わせなきやならないんだからな）

（……うわあ、七夕ネタといい、ＵＳＢといい、女豹の件といい……。ねえ、私時々雄兄さん怖くなるの。これって考えすぎかしら？）
（そりやお互い様だる。この会話が成立している時点で俺もミチも人間という領域から逸してんのだよ。もしくは一コ一イップってとこか。愛が成せる偉大な力っていう可能性もあるな。どれでも好きなのを選べよ、ララア）

（誰がララアですか！）

（私のことはシャア・アズナブル大佐と呼んでほしい、ララア・スン少尉よ）

（……落ち着け、私。……私はマトモ、私は普通、私はただの地味な女子中学生！）

（ハイハイ、わかつたよ。ようはミチの心の中は駄々漏れつてことだよ。そんなことより目の前の問題から目を逸らしている暇があったら、さつさと助ける。このままじゃ５Ｐになっちゃう）

（そんなの知りません。自分で撒いた種でしょ。自分で刈り取つて下さい。それになんで私が雄兄さんの尻拭いをしなきゃならんのでしそう）

（呑気に尻拭つてる場合じゃないぞ。それにな、俺は愛想を振り撒いただけで、愛情は振り撒いていない。おかしいな、愛情はミチ限定だった筈なのになあ）

（そんな愛情は振り撒かなくて結構ですので、むしろこのジジイ共

を退場させてもらえませんか？）

（そつは言つてもなあ。大体それはミチが悪いだろ、そんな色っぽい浴衣姿で来るからジディ共が群がるんだぜ？）

（スミマセン、浴衣着てこいつて言つたの確かアナタでしたよね？）

（なーんだ、そういうことは会つた早々に言えよ、俺のために浴衣着てきたつてさあ。恥ずかしがり屋さんだな、ミチは。あのな、女は素直と愛嬌が大事なんだぞ？ スキルアップ作戦番外編だ。またひとつ成長したな）

（……どうしたらそんなアバンギャルドな思考になれるのか是非教えていただきたいでござりますわ、雄兄さん）

（褒めるなよ、照れるじゃないか）

（どんだけオメデタインですか）

（ま、俺は広いビジョンと自由なイメージネーションを持つている男だからな。心情としては今すぐにでもそのコツを手とり足とり腰取り教えてやりたいところだが、この状況ではかなり厳しい。人前でそんな破廉恥なマネもできないし、野外プレイも趣味じゃない。なんせ俺のイメージが崩れる）

（なんならそのビジョンとイメージネーションとやらで、この状況を崩してみてはいかがでしょうかっ！）

（……おいおい、今すぐ撤退したい気持ちはわかるが、慌てるんじゃない。ここには深呼吸して逸る心を落ち着かせるんだ。いいか、敵は一手に分かれているうえに、ものすごい速さで進行する凄腕の連中ばかりなんだぞ。興奮して自分を見失つていたら、冷静な判断を下すどころか相手のペースに飲み込まれてしまつじゃないか！ これは連中の動きを精細且つ迅速に分析しつつ、いかにして敵を欺きながら穩便に脱出する方法を捻出するのが先決だ。我々はなんとしても無傷で生還しなければならないのだよ、水島上等兵！）

（ええつ？！ なに、ここ、戦場だつたりするのつ？！ それより、少尉から上等兵に降格かよつ！）

(曇りなき眼で周囲を観察してみる。どう見てもここは立派な戦場だろ。水島……いや、美千子、一緒に日本へ帰る(つー))

(……私は豎琴など弾けませんよ。第一ここはビルマではなく、まぎれもなく日本です)

(あたりまえだろ。とりあえず今後の対策を綿密に練るので、今夜私のテントに来い。ついでと言つてはなんだが、身体の相性の方も綿密に練らうじゃないか。力を合わせて敵陣を突破する前に、上官と部下という名の垣根を取つ払つてみたくはないかね?)

(よくもまあ、そこまでこの状況をオチヨくる余裕がありますね)

(単なるジョークだよ。ちょっととは付き合えよな、ノリの悪い奴は社会に出たら苦労するぜ? ここは勉強だと思つて適当にかわすんだ。大体な、俺達はあと十年もたたないうちに社会の荒波に揉まるんだぞ。社会人になればこんなこと日常茶飯事なんだよ。残念だが人というのは人無しでは生きていけない生き物だからな。ほら金ハ先生も言つてるだろ? 「人間」っていうのは、人と人の間で生きているから「人間」っていうんじゃないかなってさ)

(どうしてこの状況から金ハネタになるのつ! 目の前の問題から目を逸らしてるのは、むしろ雄兄さんでしょ!)

(怒った顔もいいけどな、ミチ、女は顔……いや、笑顔だ。それにこのシチュエーション、遊び感覚で現実逃避でもしてなきゃやつてられねえだろ)

(……やっぱり遊んでたんですね)

(誤解するな。俺はミチに対しても本気だ、お前との関係を遊びと思つたことはない!)

(もういいです。伏見さんにトイレの場所でも聞いて、ここから脱出しようかな)

(おつと、冗談はこれぐらいにしてそろそろ本題に入るか。さて、我が軍が極秘ルートで入手した情報によると、もうすぐ敵の動きを完全に足止めする照明弾 花火 の前に、陽動作戦 余興 として大太鼓の演奏が真後ろの舞台で始まる予定だ。いいか、ここからが

最重要機密事項となる。貴様もそのおくれ毛が色っぽい頭に叩き込んでけ！）

（なんか不本意だけど、とりあえず、イエス、サー！）

（我が隊の後方から寄せ太鼓の音が轟いたら即出陣する。敵が太鼓の音に気をとられ、一瞬の隙ができたところを迷わず突け、一気に敵の包囲網を突破するのだ！ 名付けて『七人の侍』！ ……もとい、『七人から去りたい』 大作戦だ！ やれるな？）

（……わざわざ遠まわしに説明された気がしますが、了解であります！ それにしてもそんな大事な情報を掴んでるんなら最初に言ってくださいよ。雄兄さんは話がいちいち長い気がします、サー！）

（しつこく長引かせて相手を翻弄させるのが俺の十八番おはいでな。よからうづ、偉大なるこの任務を無事遂行できた暁には特別報酬として、俺の自慢の「とつておき」を体験させてやろづ）

（なんだか卑猥に聞こえるのは自分の氣のせいでしょうかっ！）

（ほお、さすがは私の部下だ。解読不可能と謳われた我が暗号メッセージを読み取るとは……。想像した以上にスキルアップ作戦の効果が順調に表れているようだな。上官且つ未来の夫としては非常に喜ばしい展開である。ミチ、俺のエスコートで大人の階段登りきる田もそう遠くはないぜ？）

（誰が未来の夫よ、何がエスコートよ！ そんな階段登るより、この怪談みたいな状況をなんとかするのが先決でしょう……サー！！）

（無論、その件に関して異論はない。さて、世紀のカウントダウン 太鼓のリハーサル が始まろうとしている。それでは諸君、作戦開始時刻まで各自持ち場にて待機せよ。脱出成功後のランデブーポイントは鳥居の下とする。最後に……なんとしても生き延びて祖国の土を踏めつ、貴様らに言えることは以上だ！ “Good lu ck to you all” 健闘を祈る！！）

（アイアイサー！）

人間離れした瞬きの動きで敬礼を交わす……いや、情報を交わす

男女二人。

雄臣がさりげなく大太鼓がある舞台裏に時折視線を投げつけているところを見ると、瞬きで交わした情報は嘘ではないらしい。「パチパチパチ」という瞬きだけで、よく全ての内容が把握できたなと自分自身に感動してしまった。それからの私は、オヤジ共の言葉に目もくれず、雄臣達が座っている後方の舞台で用意されている太鼓にのみ意識を集中させた。ギュッと机を握りしめ、煙草と増えた蚊取り線香でもうもう煙るテントから舞台を凝視し、脱出の瞬間を今か今かと待っていたのだった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

シャア・アズナブル大佐、ララア・スン少尉…言わず知れた、ファースト・ンダム参照。すみません、趣味に走ります。普通に好きなんです。

水島上等兵…「ビルマの豎琴」参照。懐かしいなあ。現在は「」存じの通り、ビルマではなくミャンマーです。

A・HAN（アハーン）	お色氣初級編
U・FUN（ウフーン）	お色氣中級編
I・YAN（イヤーン）	お色氣上級編
BA・KAN（バカーン）	お色氣特級編
…その他、多数あり。	

寄せ太鼓…攻め寄せる合図に打ち鳴らす太鼓。せめだいご。押し太鼓とも。

ほとんど二人の会話だけに終わってしまった。なんだか…本当にいろいろとすみません。この回だけ見た人はどういう話かわからないだろうな…。（・ーー）自分で書いていてなんですが、おかげで話が進みません。グスン。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

「ゴメン、荒井さん。もう少し待つて」

周囲の賑やかな声と激しくなってきた大太鼓の演奏のせいだろうか。わざわざ耳に寄せられた囁き声に緊張してしまった。私は慌てて声の主に頷くと、彼はいつも無表情なまま氷水に浸っていたラムネを私に手渡し、「飲めよ」とジェスチャーした。受け取ったラムネは冷たく、人ごみの中を縫うように小走りしてきた身体には気持ち良かつた。お金を渡そうとバックの中に手を入れ小銭を取り出して顔をあげた時には、彼はもう既に背を向けてダンボールの箱からぬるい缶ジュースやビールを氷水に浸しながらお客様に対応していた。私は小銭を握りしめ、後で渡そうと、ありがたくラムネのビンを傾け飲み始めた。冷たい飲み物がカラカラに乾いた喉を潤していく。

(あ～生き還つた……！)

豪快に飲んでいた途中でハツと我に返り、夜店が並ぶ明るく賑わっている通りに慌てて背を向けた。安全確保の為、丸椅子を片手で持ちながら客から見えない死角の位置まで静かに移動する。少しでも通り過ぎるお客様の目に自分の姿を映さぬよう縮こまり、うつむいたまま地面の砂利に目をやつた。視界の中に入るのは、団扇柄の紺の浴衣と脱いである赤い鼻緒の下駄と自分の素足。慣れない下駄を履いたせいで鼻緒が当たっていた部分が擦れて赤くなっていた。とくに親指と人差し指の間が痛い。一応絆創膏は貼つてあるが、汗ですぐ取れそうなのであまり意味がないかもしれない。それに片方の下駄の鼻緒も怪しい。足さばきが難しい和装で無理矢理走ったせいなのか、変なところに重心がかかつたせいなのか、新品なはずの下

駄の鼻緒が取れそうなのだ。せつかくいろいろな意味での戦場から脱出し、無事祖国の土を踏めそつ……いや、祭りと花火を楽しもうと思つたのに、これでは楽しむどころではないかも知れない。

(なんか、疲れちゃつた……やっぱ帰ろうかな)

私はラムネのビンを左右に軽く振つて、カラカラ鳴るビー玉の清々しい音を聞きながらため息を洩らした。

＊＊＊

数十分前、来賓用テントの中で雄臣とお互い目くばせした後、余興の太鼓が始まるのを今か今かと待ち構えていた私と雄臣。

戦の合図であるホラ貝、……いや、司会の人がいろいろとこの余興を説明し始めるが、意外にも隣のＵＳＢな人達はその司会者に集中し始めた。さすが来賓のお偉い様方。花火の余興として迎えた大太鼓の演奏者達であつたが、半分は来賓の方々に楽しんでもらおうと用意したイベントなのであらう。さすがにそれを無視して女子中学生を相手にするわけにはいかないらしい。そのあたりはさすがプロと云ふが、ＴＰＯをわきまえているというか、大人しく太鼓の余興の方に神経を傾かせていた。

『ラッキーー!』

……とは言わなかつたが、大太鼓の演奏が始まると、私は静かに隣のＵＳＢなお偉い様方に「ちょっと……友達が待つてますので」と表面は残念そうにしつつも一呵やかに挨拶をしてその場を後にした。

それでも、ゴッドファーザー・伏見は性懲りもなく、「お膝の上においで」……ではなく、いや、確實にそのような意味が含まれてい

たが、「友達も連れておいで」という言葉を残してやつとこさ解放してくれた。ネッヂヨリとした視線が胸のあたりに絡まつた気がするが、TPOをわきまえた大人の振る舞いをしたことに免じて、気がつかなかつたことにしてやろう。

それでもまだ油断はできなかつた。なんせ厄介なU.S.B連中を突破できたとしても、もつと複雑極まりない大御所が残つていたからだ。この場合、U.S.Bよりもこの味方の上官の方が相当に手強いし、始末が悪い。

背後をチラリとみれば、まだ雄臣は脱出できずに苦戦していた。情報を提供してくれた手前、救出に向かつてあげたいが、ここで戻れば全滅である。

『一人でも多く生き延びて祖国の土を踏んだ方がいいだろう。』

……などと勝手に判断した上官思いの私は、嬉々と、間違えた、泣く泣く背を向け、戦線から離脱した。「いやあ、本当に残念、無念だなあ！」とスキップをしながら。

これが幼稚園くらいのガキなら、「雄兄ちゃん、美千子トイレス怖いの。一緒についてきて」「などと甘えながら揃つて撤収も可能だが、今それをやつたらいろんな意味であらぬ誤解を生むお年頃である。ましてそのままトイレへ引き込まれたのでは元も子もない。よつて、ここはある意味一人でなんとかできる凄腕の上官の力を信じた方が無難である。それにあんな危険極まりない上官と一緒に行動をして自爆する気はサラサラないので、ランデブーポイントもしつかり無視するつもりでいた私は、のんびり祭りでも楽しみつつ和子ちゃんを捜そうかなと思っていたのだ。

(フフフ、あの強力な四人から脱出するのは至難の技。骨は拾つてあげるから心配しないで、雄臣！)

「バイビー」などと言う死語を吐きながら、ウインク片目に投げキッスで今生の別れの挨拶でもしてやるかと、余裕のヨツチャン気分で後ろを振り向いたとき、信じられない光景に目を剥いた。ムカつくことに、天はさらなる試練を荒井美千子に与えたいらしい。

なんと雄臣が席を立つており、こちらに向かつて強行突破をしそうな勢いだったのだ。

上官はギラついた目を私に向けていた。それはまるで、もう助からないなら私を含めたこの場にいる全員を道連れにしようと、無線でこの辺り爆撃して焼き払つてもらおう的な程、切羽詰まっている感じだ。

荒井美千子、何度も遭遇して「史上」なんて言葉が日常化している史上最悪のピンチ！

私はこの光景を見て見ぬふりをし、急いで戦場に背を向けて走り、人ごみ（ジャングル）に紛れ込んだ。浴衣姿が多いこの中に紛れば迷彩服代わりになつて探すのが困難になる！……と思つたまではよかつたのだが、慣れない下駄で走つている途中でコケてしまつたのだ。幸いだつたのは、膝をついた場所がまるで味方の救援部隊のごとく現れた、同じ軍隊飯を食つた同期生……ではなく、クラスの同級生である星野君がいたことだつた。

『……えつ？ モモつ……あ、荒井さん？ どうしたの？』

星野隊員は傷ついている隊員を解放する衛生班……もとい、ジュースを売つている夜店の売り子をしていた。目を見開き暫く固まつた後、酷く驚いた様子で何か叫びながら私の前にしゃがみこんできた。その様子は真剣そのもので、自分が本当に負傷兵になった気分だ。私はその星野君の大袈裟な態度に驚きつつも、自分が無事に脱出できた実感を味わいたくて、同じ祖国の匂いがする同期の頼もし

い腕に縋りつきたいところだつたが、こんな人ごみ溢れる店前でそんな恥ずかしい真似が出来る筈もない。代わりに相当焦つた顔で背後を気にしていたら、星野君は私の気持ちを察してくれたのか、私の足元を見た後「荒井さん、こっち」と夜店のジュース売り場の後方に避難させてくれた。

星野君は同じく売り場で売り子をしていたオジサンらしき人に声を掛けると、私は慌てて頭を下げた。そのオジサンは生真面目な顔で会釈を返してくれた。その固い様子から、もしかして迷惑だつたかな……と思っていたら、星野君はオジサンとの会話を終わらせ、丸椅子を持ってこちらに来てくれたのだ。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

『な、なんか、忙しい時に「めんね、星野君……』

『いいよ。けどどうした？ なんかあつたのか？』

『い、いえ、たいしたことじゃなくて……戦場から脱出したと思つたら、鬼神・修羅が追つてきたものだから……』

『えつ？！ センコーが露出したと思ったら、奇声を発しながら追つてきた？！ なんだよ、それっ？！』

『ヒヨエー！ ちちち違くてっ！ ……え、その……そ、そう…

貴子や和子ちゃん達と逸れちゃつて、アハハ』

『なんだ、ビックリした。深刻な顔で言つから、マジかと思つた』

『……ハハ……』

『貴子や宇井さん達ならさつき見かけた。多分花火がよく見えるスポットに移動したんじゃないかな？』

『そ、そつ。あ、和子ちゃんは……貴子と一緒にだつた？』

『いや、別。貴子はサッカー部の連中、ほら、日下部先輩達と一緒に宇井さんは奥住達と一緒に』

『奥住さん達と……つて、ええつ？ 加瀬さんと和子ちゃん一人きりじやなくてつ？！』

『ああ。路介や明日香達もいたから、なんかすごい大所帯だつた』

『…… ゲロゲロ』

『ゲロゲロ？』

『やややつ！ えと、その、ゾロ……そつー……ゾロゾロ歩いて行つたのかなあ～なんて！ アハハ～！…』

『ああ、大人數だったからな。そういうえば、なんで荒井さんだけ一人？』

『……え～その～話せば二話分に跨ると言つか、すこく長くなるといつか……。ブキ……いや、伏見さんと向こうのテントについて、色々とその……』

『ふうん』

私は言葉を濁しながら、和子ちゃんが奥住さんと合流する羽田になってしまった事実に、舌打ちしたい気持ちになった。

今回私たち仲の良い八人は、当初みんなで行くはずが、日下部先輩や雄臣、ブキミちゃんからの招待、それに真美子達が加わったせいで、グループが一手に別れてしまった。幸子女史とチイちゃんは同じくクラスのよしみか、部活の時に小関明日香から「お祭り一緒に行かない?」と思つてもみないな誘いを受けて尾島達と行動を共にすることになったのだ。チイちゃんは意外な展開に胸を弾ませ、顔を真っ赤にしながら「どうしよう緊張する」と身体を震わせていた。そのお誘いの場面を見ていた原口達は啞然としていたが、小笠に「じゃあ、女バスと女バレ仲良く行つてみよう!」と無垢な笑顔を向けられたので、何も言えないようだつた。その原口にトドメを刺そうと幸子女史と奥住さんは「よつしゃー、尾島とチイちゃんを一気にイイ雰囲気を持つていぐで!」と鼻息を荒くする始末。

『東先輩も捨て難いけど、望み薄だしね。それに伏見さんのところはちょっと……。それよりチイちゃん一人じゃ可哀そうだよー』
『そうそう! 原口達からチイちゃんを守らないとね! それにこっちのメンツのほうは断然面白そうだし? ヒヒヒー』

これは幸子女史と奥住さんの意見だった。この一人の言つ通り、尾島のいるところに必ず原口美恵&成田耀子の影ありだから、チイちゃん一人では絶対苦戦を強いられるだろう。でも幸子女史と奥住さんのバックアップがあればなんとかなるかもしれない。……かなり難しいとは思うが。

一方、これに賛同しなかつたのは私と貴子と和子ちゃんである。貴子は日下部先輩と約束していたし、和子ちゃんは雄臣と一緒に行

きたかつたし、私は……どちらも嫌だつたが、両天秤に掛けた結果、貴子と和子ちゃんについていくことにした。それに雄臣の前では大人しくなる和子ちゃんのバックアップをする人も必要だろうと思つたから。……そもそも、小リストのお誘いに私たち三人が入つていたか怪しいところだ。

光岡さんと加瀬さんの一人は迷つた結果、結局光岡さんは尾島達に、加瀬さんは和子ちゃん達についていくことになり、祭りで会いましょうということになつたのだ。

私は盛大なため息を呑みこみ、一難去つてまた一難という言葉を噛みしめつつ、なんで「口クでもないんジャー」の一人である星野君が一人ここでジュースを売つているのか疑問に思つた。

『え、えーと、そ、そういう星野君は、なんでここに? サル……ゴホン、尾島君達と一緒に行かないの?』

『俺は家の手伝い。俺んち酒屋だから、いつもして売り子をしてるわけ。あそこにいるの、俺の爺さんなんだ』

『え? -』

私はビックリして、お客さんにジュースやらビールを売つている男の人の後ろ姿を見た。さつき私に向かつて会釈してくれた人だ。色が黒くて適度に筋肉が付いているガツシリとした体格の……将来星野君はこんな感じになるのだろうかと思わせるような人だつた。確かに角刈りにしている髪の毛は白いものが混じつているが、私の想像するお爺さんやさつき迄一緒だつたＵＳＢの連中とはかけ離れており、見た目も若いし、てつきりお父さんかと思ったのだ。私は星野君のお爺さんらしき人の背中と星野君を思わず見比べてしまつた。

『え、お祖父さん……なの？なんかすごく若い……』

『……ああ、よく言われる。この神社来るとき、商店街らしきところ通つてきただろ？ 端に酒屋があつたの気付いた？』

『…………ん~そういうえば……あつたような気が……』

『そい、俺の家』

『そ、そなんだ……つて、星野君は仕事なんだよね。ごめん、迷惑駆けて本当にスママセン』

私は改めて頭を下げて謝った。本当ならばすぐここを出て星野君を巻き込まないようにするのが常識人としての行動だ。……が、今動けば、雄臣に発見される可能性が大だつた。上官を撒くにはここから動かずひとつそりと隠れていた方が無難だ。星野君に迷惑が掛かることを重々承知していたが、意を決してお願いをすることにした。

『あ、あの……迷惑ついでに申し訳ないけど、仕事の邪魔をしないよつこにするから、暫くここにいたせてもうひとつ、いい？ もう少ししたら適当に出てこくので……』

『それは構わないけど、大丈夫？ つーか下駄、ヤバくない？』

『え？』

『ほら、鼻緒が取れそうだ。それに足擦りむいてるだろ。ちょっとこのイスに座つてろ。俺もう少しで終わるから、宇井さん達のところに行くなら一緒に行こう』

『え、そんな、わわわ私なんかと、悪いからいこよつ、ブラブラしながら和子ちゃんを探すしつ』

『そんなこと気にしなくていい。俺もどうせ合流する予定だつたし。それに啓介達がいるところ、たぶん通常の花火スポットよりもちょっと上のほうだから、たぶん荒井さん見つけられないと思つ。それにそのゲタ、なんとかできるかもしねない』

『…………はあ…………』

(……いや、大変ありがたいんだけども……)

私は話が変な方向へ言つてしまつたことに不安を覚え、再び引き攀り笑いをした。星野君は「遠慮しなくていい」と私を気遣うように言つてはくれているが、私が心配していたのは、和子ちゃん達が尾島と合流しているという点だつた。原口美恵や成田耀子、それに小関明日香やチイちゃん達を侍らせ、ハーレムの頂点に立つている尾島ボスザルの姿なんぞ見たくもないし、あんな男を巡つて火花を散らしている中に行くのも遠慮したかつた。さつきまで十分戦火の渦中にいた荒井美千子。それが怪我が癒えた途端また戦場に送りだされるとは。いつそのこと、

「スマン、宇井！ 捜索しても発見できなかつたし、タイムオーバーで一時撤退を余儀なくされた……（「めんね、和子ちゃん！ 探しても見つからなかつたし、時間も遅かつたから帰つてきちゃつた」）」

……などと言つて祭り事態をバックれることも考えていたのだ。それなら危険な上官からも確実に避難できる。それに星野君と一人で行動するなんて、またあらぬ噂を立てられるんじやないだらうかとそつちの方がよっぽど心配だ。この場合、荒井美千子より、星野一幸の方がより打撃が大きいだろう。どうせ噂になるなら貴子とかチイちゃんみたいな可愛らしい子がベストだ。なんせ実家が酒屋の未来のプロ野球選手。ここには断然活舌が悪い私より、見目麗しいアナウンサーがお似合いだ。

星野君は私の不安もよそに、珍しく口の端を僅かに上げて椅子に座るよう促したのだった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

星野、積極的だぞ！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

月明かりが静かに振り注ぐ、何かが起こりそうな熱い夜。
一人の孤高なスナイパーが、確実に獲物を撃ち落とそうと狙いを定めていた。銃に装填されている弾は最後の一発、これを外せば後が無い。

男は片目を瞑り、全身を強張らせ、その額には僅かに汗の粒が浮き、ゆっくりと一筋流れる。ライフル銃を構えている男は青年と呼ばれる年にはまだ遠いが、銃を持つ腕には血管が浮いており、しっかりと筋肉もついていた。

「よく狙つんだぞ～」

スナイパーの気を裂こうとしているのか、オッサンが横から気の抜けた声を掛けた。しかし、男はオッサンに目もくれず意識を集中させる為に息を吸つて吐いて……クツと止めたその瞬間、運命の引き金を引いたつ！

パン！
ビシッ！
ドサツ！

銃弾が発射される音、弾がターゲットに命中する音、狙つた獲物が落ちた音が次々と賑やかな夜店に響き渡った。

「「よし……」「

歓喜の声がスナイパーである男と、物陰に隠れながら「たこ焼き」をパクついていた女から発せられた。この運命の瞬間を傍観していた周囲の人からもヤンヤと拍手が起ころ。

「ハイ、アタリ～。坊主なかなかやるね。ほい、ビーチサンダル。
……しつかしこんなのが欲しいなんて、最近の中学生は変わってる
なあ」

射的のオッサンが首を傾げながらブツブツと呴いていたが、スナイパーである男は戦利品のビーチサンダルを素直に受け取り、女に向かつて獲物を高々と上げた。女は素直に喜んでいる彼の笑顔に応えるのが照れ臭くて……ちょっと恥ずかしそうにはにかみながら、「たこ焼」を片手に合図を送った。

（ここまで説明が長く、しかもクドくなってしまったが、なんてことはない。女というのはもちろん物陰に隠れていた私こと荒井美千子であり、この息を飲む暗殺計画……いや、射的を終え、ガツツポーズをしながら口の端を上げクールな笑いを浮かべた男は星野君である。

（つづり、星野君ありがとう。これで安心して歩けるよ～）

私はいまだに「たこ焼き」を頬張りながらも、この痛い下駄から解放されると思うと涙が出てきた。決して熱い「たこ焼き」のせいではない。

先程星野君の仕事が終わり、「啓介達の所へ行く前にちょっと寄り道する、いいか?」と連れてこられた場所がこの射的場であった。（その前にお腹が激空きだったので、たこ焼き屋に寄つてもらつた）一体何をする気であろう頭を捻つていたら、いきなり射的をやり始めたのだ。まあ、場所が射的場なのだから当たり前と言えば当たり前だが。

『え？ 射的つて……星野君、何か欲しい物があるの？』
『見てくればわかる。まだ残つてて、ラッキーだつたな』

星野君はつぶらな瞳をキラーンと光らせ（※分）、お目当ての獲物を狙いだした。構えた銃口の先にはビーチサンダルがぶら下がつており、フックにぶら下がつている紙の部分を集中的に狙い始める星野君。私はそこでやつと、彼が射的場に来た目的がわかつたのだ。（「そのゲタ、なんとかできるかも」と言つていたのはこのことだつたのかあ！）

私は改めて感心してしまい、星野君の機転と頼もしい仕事っぷりに、今すぐ物陰から飛び出して抱きつきたい衝動に駆られた。もしここが人がごつた返す祭りじゃなく、しかも雄臣に追い回される身分でなければ、「ダーリン、ワンドホーっ！！」などと言ひながら「たこ焼き」を放り出し、首根っこにかじりついてホッペにチューのご褒美を差し上げていただろう。

もちろんそんな歐米的な御挨拶は想像だけで終わつた。

第一星野君が暑苦しいどころか超迷惑だらうし、一人とも控えめを美德とする立派なジャパニーズだからだ。オマケに「たこ焼き」を放り出すのが惜しいほど空腹状態であつた。

射的を終えた星野君は、敵大将の首を片手に一仕事を終えた武士の熱氣を漂わせながらこちらに向かつてきた。その姿は心なしか光を背負つて神々しい！ ……と言いたいところだが、実際は提灯の明りである。

「これ履けよ。こっちの方が下駄よりマシだと想ひ」

「あああありがとう！ 本当になんてお礼を言つたらいいのか……」

「別にいい。それよりビーチサンダル、残つてて良かつたな。さつき祭りの準備してゐる時、通りかかつたら珍しい景品ぶら下げているから覚えていたんだ」

「そ、そなんだ」

おそらくそれは作者の都合だろう、そんなことはさておき。

星野君はベリツと袋を破つてビーチサンダルを取り出し日の前に置いてくれた。祭りだからだろうか。そのビーチサンダルを置く姿も勇ましく見えた。まるで信長の草履を懐で温めておいた、尾島^{サル}…違つ！ 豊臣秀吉的な心使いを感じた。

（神様……なんだかビーサンがガラスの靴のような錯覚を覚えるのは私の気のせいでしょうか！）

勝手にシンデレラのような気持ちで一人ミュー・ジカルの如く盛り上がっていたら、星野君は意外とアッサリとした感じで「さ、啓介のところへ行くか」と「ミミをクシャクシャに丸め、素晴らしいコントロールで近くの屑籠へ投げ入れた。

「……」

星野君の言葉と一緒に動作で急に現実の世界に戻された荒井美千子。王子にガラスの靴を履かせてもらえるシンデレラの甘い感動の場面な筈が、「おーい、大丈夫か？ ダメだこいつ、完全に死んでれらー」並みのオヤジギヤグ状態になつたのを誰が責めることができよう。オマケに履いたビーサンが、浴衣に合つはずのないゴツイ男ものだったのも予想外であった。私は無言でそそくさと履けなくなつた下駄をビール袋に入れ、星野君と祭りの会場を後にした。

* * * * *

ドンドンドン、ピ　　……ッ……。

先程まで煩いほど耳に響いていた、祭りの大太鼓やお囃子の音が遠くなつていく。提灯の明りからも遠ざかり、周囲が暗くなつてきた。僅かな外灯らしい裸電球が一定の間隔で吊るされているが、心

もとない。

私は新しく履き替えたビーサンを踏みしめながら小高い山を登つていた。からうじて階段らしきものがあり人が通れるところらしいが、ほとんど獸道状態で時々草が足に纏わりついてくすぐつた。それでも下駄よりはマシだつた。なんせ同じ鼻緒の部分がタオル生地できているものなので柔らかくて幾分かマシだつたからだ。下駄でここを登つた浴衣姿のお嬢さん方はさぞや大変だつたろう。私は団扇片手に扇ぎながら和装のせいで慣れない足さばきをしていたら、前を歩いている星野君が後ろを振り向いた。

「大丈夫、荒井さん」

「……あ、うん。な、なんとか」

「浴衣じやこの道は辛いよな。後少しだから」

「そう……？」

後少しの言葉にホッと安堵の溜息を吐き、一步足を踏み出した。が、星野君との会話は少なく、ほとんど無言で黙々と道なき道を登つていた。別に沈黙が苦しいと言うわけではないが、さすがにダンマリも落ち着かない。ここは男性から話題を振つて欲しいところだが、相手はあの星野君。寡黙な修行僧のようなお方にそれを求めるのは酷かろうと、思い切つて私から声を掛けてみようと試みた。（そうだよね、キャンプの時は普通に話していたし、あの時の調子で行けば……）

「そ、そういうえば、夏休みどこか遊びに行つた？」

「……え？」

「ほ、ほら、田舎とかプールとか……何処かに出かけた？」

「いや、何処にも。店の手伝いと野球」

「……そ、なんだ。大変、だつたね……」

「ああ、そういうれば一回だけ啓介達とプールに行つたな」

「そ、そう！ 何処の？」

「山野公園の市営プール」

「…………」

「…………」

どつやら第一陣の攻撃は盛り上がりを見せせず、撤退を余儀なくされた。しかしこんな程度のダメージで引き下がつては、女豹特殊訓練を受けた荒井美千子様の名が泣く。というより、厚子お姉様に顔向けてきない。ここは「何処に遊びに行つたの？」のA作戦ではなく、「宿題終わつた？」のB作戦で攻めてみることにした。

「そ、そうだ！ 夏休みの宿題つてもう終わつた？」

「宿題？」

「わたし、感想文だけが残つちゃって。ほ、星野君は何読んだの？」

「いや、まだ決めてない」

「……。あ、わたしは芥川龍之介の『杜子春』にしようかと思つて……今読んでるんだけど……」

「そり」

「…………」

「…………」

言つまでもなく第一陣も突破口を掴めず、すゝむじ引き下がる荒井美千子。敵もなかなかやりよる、さすが「隊員一融通が利かない無口な朴念仁」と貴子が太鼓判押すだけのことはある。若葉マークどこのか「仮免中」の札をぶら下げているウブな女豹じや、食指が動かない……いや、ウンともスンとも言わない筈である。

(本当は野球の話題でも触れればいんだけど、全然わからないしなあ。つーか、今年の甲子園出場校すらわからなし……もう、いいか。無理に会話しても苦しいだけ、もうすぐ目的地に到着するだろ)

私は話題を提供する努力をやめて、団扇を扇いでこの山登りに専念することにした。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

数々の試練に美千子、あえなく撃沈の模様。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

（結構登つてゐるけど、一体どこまで登るんだろ？）

私は星野君の背中を見た後、太鼓の音が聞こえる下の方へ視線を移した。ほんやりと明かりが見える山野神社は、大野小学区にある「銀座通り」などという完全に名前負けしている小さい商店街を抜けたところにあつた。（ちなみにその商店街の中に星野君の実家・酒屋がある）その先を行くとさらに少し入り組んだ細い道に入り、道は緩やかな坂を上る様に続いている。道の終点には木々で覆われている山野神社の大きい赤い鳥居が構えていた。祭りの夜店は鳥居までの細い道と弊殿までの参道に並び、今私達が登つてるのは弊殿の裏のさらりと奥の小高い山の部分だった。この山の裏側が大野小の裏側に続いているらしい。

（……って、まだなのかなあ。さすがにキツイなあ）

やつぱり和子ちゃんのところではなくて貴子の方を探せば良かつた。いや、あのまま帰れば良かつたかなと溜息を吐いたところで、今度は星野君の方から話しかけてきた。

「……ごめん、荒井さん。俺と話しても面白くないだろ？」

「え、ええっ？！ そそそそんなことはつー……あつ、今の溜息はそういう意味じゃなくてですねー！」

「いいよ、無理しなくて」

「あああの、本当ですつて！ だだだ第一、私も似たようなモンで……つて、別に星野君が面白くないと言つわけじゃつー！」

「ハハ！ 別にそんな一生懸命弁解しなくとも。それより荒井さんは素で面白い。行動、天然入つてゐし。夏休み中、啓介や明日香と顔を合わせる度に荒井さんの様子聞いた。……ゴメン、普通に笑つてしまつた」

「は？」

「女バレーボールで結構バスケ部やサッカー部と顔を合わせるんだろう？
そんときの事、良く話すから。あの一人」

悪いけど貴方も十分天然入ってますよ！……的なプロ野球志望
星野君プレゼンツ、超剛速球並みの「ストレート」がズドオン！
と私の耳に入つた。お陰で今迄登つて来たこの小高い丘から危うく
滑り落ちるところだつたじやないか！

「……」

星野君が披露したとんでもない事実に、怒りのボルテージが徐々
に上昇し始めた。星繫がりで星飛馬並みの炎を瞳に宿すどころか、
このまま夜空に瞬く花火になりそうなほど炎がマックスまで燃え盛
つている荒井美千子。一体あの連中がどこままであることないこと…
いや、ないことないことを喋つてているのか隅々までチェックを入れ
たいところだが、その内容を星野君の口から披露されるのは拷問
プレイと言わずとして何と言つのか。私はそこまでMではない。
(……あ、あ、あの妖怪「ミーマムコンビ」め～！　どうぞして
くれようつーー)

ちなみにこの場合、「ミー」の方が尾島で、「ママ」のほうが小
関明日香だ。そんなことはさておき。

私は思わず団扇をギュッと握り、もう少しで一つに折ってしまう
ところだった。いや、団扇よりバットが折れるほど千本ノックを「
ミーマムコンビ」に打ち込みたい。もしくは厚子お姉様から頂いた、
USA星条旗柄のビキニとテンガロンハットを装着して「Yee
Haw！」と叫びながら暴れ馬に跨り、ロープでの一人をつない
で「市中引き回しの刑」を執行するべきだ。ここは将来の為にも、
荒井美千子自ら日米親善大使となるべく、このドリームダイナマイ
ト「ラボレーションをやつとくか！　と本気で思った。

「それに先週末連日で貴子の姉ちゃんが『まるやき』に来て、荒井さんのこと言つてたし」

「えつ？！」

「先週の土曜の夜、酔っ払つた厚子姉ちゃん達と会つたら？あれ、『まるやき』で飲んでたんだよ、俺達もいたんだ。その後厚子姉ちゃん達と楽しく焼肉パーティーしたんだつて？ 貴子と一人でホステスして……もてなしてくれたつて厚子姉ちゃんから聞いた時はビックリした。結構名の知れたヤバイ連中ばかりだから、みんな荒井さんが相当ビビったんじゃないかって笑つ……心配してた」

以外な方向から来た二投球目の「カーブ」な事実に、今度こそ足を踏み外し少し滑り落ちてしまった。

「……」

やつぱりヤバイ連中だったんだと、自分の目に狂いはなかつたと、私は正常だつたんだとといふことが判明した。だからといって、なんの特典にもなりやしない。しかも星野君は誤魔化していくが確かに聞こえた。ホステス扱いに、ビビつたことを笑われた、と。どうみてもそれがまつとうな人間の反応なのに。いや、あんな連中に常識を求める方が間違つていいのか。

それにもしても……あの『まるやき』に勢揃いした物騒な連中のメンツを想像しただけで鳥肌が立つてしまつた。真夏なのに。ここは是非ビートけし大先生に「こんなお好み焼き屋はイヤだ！」という形で『まるやき』を紹介してほしいくらいだ。こんな風に。

……や、というわけではじまりました、「振り向けば、君がいた。

「… 今日も張り切つて「美千子メモ」やつていきたいと思ひます！ 今日のテーマはずばりこれ！」

『こんなお好み焼き屋はイヤだ！』

さあ、さつそく行つてみましよう。まず初めはつ？！

『赤髪ピアスのヤンキー兄ちゃんが店員だ』

これは困りますね、人に威圧感を与えるだけではありますん、コイツ本当に好み焼き焼けるのか「ノヤロつて感じですね。最初は爽やかにキャベツ切つてるんですがね、そのうちメンチも切つちゃつてね、メンチだけでなく指も切つちゃつてね、お好み焼きを食べたら指が出てきちゃつた、あらビッククリ仰天！ なんてバカヤロ！ なんてね。ま、そんな危ないことあってはいけませんがね。さて次は、

『一股かけた金髪男がいる』

これはマズイですね、中学生の分際で一股かけちゃあいけません。こういうヤツは一度同じ皿にあつた方がね、世の為つてもんですよ！ 一股かけて余裕ぶつこいていたら逆に一股かけられちゃつてね、身も蓋もナイなんつつて！ バカヤロ！ なんてね。さ、次は、

『オカマが店長だ』

これはなんなんですかね。いや、オカマっていってもね？ 華奢でキレイ系ならいいんですよ？ でもね～こうガタイが大きいとねえ、逃げ出したくなるつてもんでしょう？あの身体で、「オカマ～ン～！」なんてね、誘われたらね、縮みあがっちゃいますよ。え

? ナーが縮むつて? そりゃナーに決まつて……バカヤロ!—!
さ、次行つてみましょ!、

『猿がいる』

「これも最悪ですね! 信じられません、大体猿つてお好み焼き食べるんですかね? え? 雑食? や、いつそのことバナナでも与えていればいいんじやないでしようかね? 「私、猿がいるだけにここを去る(サル)わ」なんてね! いますぐここを退散したいのはこいつですよ、コノヤロ! さて次は、

『厚子^{アシコ}が酔つ払つて暴れでいる』

これは笑えません! グテングテンに酔つてているアツ^口ほど恐ろしいものはありませんからね、おまけにね、妙に絡まれちゃつてねえ、そんなん手下や猿で勘弁してくれよつてな感じですね、それこそ手下に「アツ^口をおまかせ!」なんてね! バカヤロ! ……ハイ、さて次は、

『暴走族の集会所になつている』

これは怖いですね~、普通お好み焼き屋は集会場にはなりません、ハイ。なんの為に集まつてるんですかね、お好み焼き屋だけに「やきいれるぞ」「ノノヤロ」なんてね、全然笑えません。というわけでそれでは今週も張り切つて「振り向けば、君がいた。」行つてみましょう!—!

……という感じだ。いやいやいや、脳内コントをやつてしている場合じやないだろ、荒井美千子よ。

「大丈夫、荒井さん？！」

「……なななんだか急に眩暈が……」

私はクラクラする意識をなんとか持ちこたえた。この場合重要な点は足を滑らせたということではなく、私の行動が逐一尾島を取り巻く環境に筒抜けという点の方がより重要且つ問題であった。

（ももももしや、あの女豹訓練の件も既に筒抜けとか？　まさかあの時に結構ノリノリで撮影したビキニの女豹ポーズの写真まで出回ってるなんてことは……ややや、そんな！　まさか、ねえ？…）

一人虚しく空笑いをする荒井美千子。調子に乗つて被写体となつたことを後悔したが、既に過ぎ去つた帰らぬ日々よ。ここは「まさかあんな個人的な恥ずかしい写真、本人の許可なく人に見せるなんてしないよね」？　ていうか、たしかあの使い捨てカメラ、私がキツチリ回収した筈だし！……と自分に言い聞かせ、厚子お姉様の

人間性と道徳性を信じて全てを委ねることにした、その時。

「そう言えば、眩暈で思い出した。啓介が厚子姉ちゃんから何か見せられた時、鼻血吹いて眩暈起こして倒れてたな。あれ、一体なんだつたんだ？」

三投球目は、未回収の使い捨てカメラもしくはポラロイドがあつたという素晴らしい「オチ」を彷彿させる『フォーク』がズバーンと決ました。美千子は見逃し三振でアウト。あまりの悔しさにこつちが鼻血ブーもんだ、チキショー！

（尾島め……いつそのこと、そのまま出血多量で天に召されれば良かつたのにい！）

恥ずかしさで死ねると叫うのはこのことだろつ。それこそ恥ずかしさなど知らぬ童心にかえり、このまま神社の境内まで「ヒヤッホウ！」と叫びながら一気に滑り下りたかつたが、そういうわけにも

いかない。これからその尾島と顔を合わせなければならないと言つ
事実に顔から火が出そうなほど真っ赤になってしまった。

「……それにしても、荒井さん。今日店の前で会つた時は一瞬見間
違えた」

星野君は立ち止まり滑り落ちた私に手を差しのべながらポツリと
呟いた。自分の恥ずかしい事実で頭が一杯だった私は、急に腕を取
られたことに驚き、彼の熱い手の体温にドキッとした。薄暗くて表
情がわかりにくい彼の顔を恐る恐る見上げる。

「本当にビックリした」

「…………ななな何が…………？」

星野君の熱っぽい視線が私に降り注いだ。

「隊員一融通が利かない無口な朴念仁」というキャッチフレーズの
星野君とは思えぬ積極的な行動に、私は内心動搖しながら、「……
もしや……これは告白されちゃつたりするのでは?！」などと身構
えてしまった。何気に星野君のことまんざらでもないんじやん、私
？と逸る……というか早とちりする心にホクホク、いや、ドキド
キしながら。

(考えてみれば、星野君って優しいし、背も高いし、野球も上手で
運動神経もいいんだよね。なんせ真面目だから、浮気なんて問題外
だろうし。これは絶対お買い得だよねえ？ 良く見ればカッコイイ
とまではいかないけど、男らしい顔してるし。なんてつたつて、未
来のプロ野球選手だし！……今迄モテなかつたのが不思議だよな

あ)

この短い一瞬で呑気に星野君の分析と勝手に都合のよい夢を託していた私だが、何故星野君の名前が女の子同士の間で騒がれないのかは後々知ることになる。この年頃の女の子は田立つ男の子に夢中になつたり、あからさまにモテそうな男の子の名前を上げたりするもんだが、その実星野君みたいな男の子の方が地味にモテるし、本命度の確立が高いのである。それこそ後の同窓会などで「……実は私、あの時星野君が好きでさあ」「あ、私も～！」などというパターンが多かつたりするのだ。

「荒井さん、良く似てたから」

「……は？」

星野君の一言は、私の勝手でオメデタイ思考から現実に引き戻すほどの力を持つていた。彼の言葉に籠められた思いのようなものが、彼の瞳と私の腕を握っている手から溢れ出し、徐々に私の鼓動を速めていく。

「このいつのつて、『デジャブ』っていうんだろうな。三年前に戻つたみたいで」

「……さ、三年前……つて？」

「荒井さんてさ、もしかして『モモタ』って言つ人と……」

星野君がある名前を言つた途端、私は食い入るように田の前の彼を見つめてしまった。

逆に私を見下ろしている星野君の眼差しも何かを必死に訴えているような、一生懸命探し出すように真剣で。

『…………なんでその名前が君の口から出でてゐるの?』

頭では星野君に問いかけているのに。
実際は口は開きかけているだけで、言葉は喉もとで詰まり、音となつてこの世に吐き出されなかつた。

ザツザツ、ガサガサガサツ！

星野君が言おうとしている先の言葉を聞きたくない、この状況から逃げ出したいと動搖する私の心を見透かしたのか。
木々や雑草が揺れる音と足音が上から聞こえてきた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

とうとうやってしまった、「たけしメモ」。すみません、絶対何処がで出したかったんです。お付き合いくださいまして、ありがとうございました。（――）

そしてまさかの急展開……星野君の数々の意味深な言葉は？また足跡の正体は？！次回へ続く！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

「あれえ？ 一幸^{かずゆき}じゅん。こんなとこで何してんの」「「つーーー。」

私達は弾かれたように声の方へ顔を向けると、月明かりと一定の間隔でつるされている裸電球だけの薄暗い闇の中から、人が現れた。良く見ると私達とそう変わらない年頃の男の子が三人。

星野君はハツと我に返り、咄嗟に私の手をバツと離した。私も手を握られた姿を他人に見られたのが恥ずかしくて胸の前でギュッと両手を重ねると、星野君は私の前に出て庇うように楯になってくれた。ナイトのような星野君の行動に感動する反面、この男の子たちが来る直前までの出来事を思い、心の中がザワザワとして……嬉しい気持ちが半減し、落ち着かないような、複雑な気持ちになってしまった。

「あんだあ？ 星野のコレ（小指）かあ？」
「シニニアやつてるくせにカノジョ持ちかよ！ 三年や監督に知れた
らヤベヒンじやねーの？」

私達の一連の動作を誤解したのか、男の子達はニヤニヤしながら近づき、星野君の肩を小突きながら私たちの前に立ちはだかる。

「なになに？ 二人は何処までススんでらっしゃるの？」

「え、斯スムどころか、どうやら私の勘違いだつたようだ……などと心の中で反省し思いつきり落ち込んでいたら、彼らは下卑たイヤらしい表情を浮かべてゲラゲラと笑った。

(ちょっと……なんか嫌な雰囲気だな。この人たち、もしかしてヤバいんじゃないの？)

彼らがシニアと言つたところとは、この男の子達は星野君と同じシニアの仲間なのかもしれない。けれども山野中では見掛けない顔だった。こんなにガラが悪ければ嫌でも目立つだろうし、桂龍太郎とつるんでいる筈だ。けど彼の仲間にこんな連中はない。

マヌケにも今頃自分たちが置かれているこの状況が非常にマズイのではないかと悟り、心配になつてそつと斜め後ろから星野君の顔を覗き見れば、思った以上に険しかつた。どうやら予感が的中しそうなほど、背中越しにも彼が緊張しているのがわかる。星野君が断れないような難題でもふつ掛けられたら……と心に不安が過つたその瞬間、坊主の男子達の中から一人ズイツと前に出てきた。「え？」と思つた時には、にゅっと伸ばした手で私の腕を掴み、グイッと星野君の背後から引っ張り出された。

「いつ？」

「一幸、ちよつくりこの女貸せよ。後でけやんと返してやるからさあ」

私はゲームのソフトかつ！…………と叫び声をあげそうになるのをグッと押さえ、物騒な発言をした男子生徒を睨みあげたが、すぐその勢いは消え失せてしまった。

その男子は、星野君も含め全員坊主であるメンツの中で、唯一髪の毛が長くチリチリパームかかつており横にフワツと広がっていた。暗い中でも茶色く染められているのがわかる。整えられた薄い眉に、大きいネコ目で皿尻がキュッと上がつており、ヒヨ口つとした中背で、ロックバンドのボーカルのような出で立ち。一瞬見た感じはまるでこの年の秋にメジャー・デビューしたコーンのボーカルのようだ。

良く見ると優男風で軽い雰囲気を醸し出していたが、石原……じやなかつた、厚子軍団を見てその筋に免疫が付いていた私には、何故かヤバイ雰囲気をビシバシと感じた。オマケに星野君以外の野球坊主達は「ヤニヤ」と笑つたまま口を出そうとはしない。青春ど根性を突つ走る野球少年どころか、同じ中学生とは言い難い彼らの行動に、私はオロオロと星野君とチリチリ男の顔を交互に見た。星野君は相変わらず険しい顔つきのまま、滅多にお目に、というか、お聞きにかかる低いドスの効いた声でチリチリ男に言い放つた。

「……やめろ、丈一郎」

「あ、なに、その怖い顔！ マジで一幸のカノジョ？ そつなの？」

ボインちゃん

誰がボインじやい！ ……などと言える立場ではない。

チリチリの答えにいく間に、私はこの場を逃れられるなら「そうだ」と首を縦に振りたかつたが、そんな恥ずかしい嘘を言える筈もなく、弱弱しく項垂れるだけだつた。例えなにか言つても彼らを刺激する材料にしかならないだろう。こんな奴らと鉢合わせになるくらいだったら、雄臣のほうが数倍もマシだつたと早くも一人で脱出したことを後悔し始めた。

「ボインちゃん、俯いちゃつてどうしたの？ あれ、もしかして、二人はまだ熱い合体はしてないの？ 一部接触だけ？ まさか、この暗闇の中でこれから始めちゃう段階だつとかつ？！」

「おい、丈一郎！」

「そつかあ、これからだつたのかあ！ あーでもね？ ダメダメ！」

一幸はヤメテおいたほうがいいって！ こいつ頭が固いのなんのつて！ や、悔しいけど、アツチはデカいし、それこそガチガチにカタイかもしないよ？ でも性格はコイツのオヤジと違つてすつ

げえクソ真面目だから面白くねえんのよ！ それよりオイラとビツ
？ ボクちゃん最近日照り気味でや～こいつ潤いが必要だつたりする
ワケ！ こには一つオイラと一緒に花火でもじっくり鑑賞してさあ、
ついでにそのボインでオイラの相棒にドカンと恋の花火を派手に打
ち上げさせて欲しいワケよお！ オレの言ひ方と、おわかり？」

「……」

（……軽い、いくらなんでも軽すぎるのはどうだ？）

まるで全ての言動に羽が生えているかのようだ。それにどう見た
つて地味で鈍くさい女子にオアシスを求めるほど日照りが酷いとも
思えない。まるでルパ 三世のように女を口説くチリチリは性懲り
もなく私の肩に腕を回し、恐ろしくもチツスをする寸前まで顔を覗
きこんでいる。

夏なのにサムライボが立つた。

私の知っている口クでもない連中と同じ番りがブンブンするこの
男から逃れたくて、引き攣り笑いをしながら身体を捩じらせ、彼か
ら一定の距離を取るのが精一杯であった。しつこく近付いてくるチ
リチリの髪がくすぐつたい、というか、鬱陶しいこと極まりない。

「いい加減にしろ、丈一朗！ マジでやめとけ、啓介に見つかっただ
ら殺されるぞ！」

「はあっ？ あんで啓介のマヌケが出てくんのよつ？ ……つ
て、あらう。もしかしてボインちや～ん、地味な割には一幸の他に
啓介も相手しちゃつてんの！ マジ啓介もなあ～アイツ明日香だけ
じゃ物足りないのかよ！ まあ、明日香は貧乳だからなあ、気持ち
はわかるけどお。今も上で会つたばっかだからさあ、なんか相変わ
らず原口もベッタリだし？ それにちつせえ女も侍らせてたぜ？
いくらなんでも手え出しすぎだろつ、どんだけ飢えてんだ！ あ～
ダメダメ！ 啓介なんてやめとけ！ アイツは手を付けるだけ付け
てその気にさせた挙句、キツチリ回収しない鬼畜、鬼畜生だから！

女の敵のような男よ？ それにアツチも至つて極普通、並みサイズよ！ 松竹梅のど真ん中のタケ！ あ、背丈は相変わらず伸びねえけどな！ その点オイラはテクニックがあるし？ 中の上だし？ 女の子には優しいし？ それこそ気持ちは特上の上よ！」

マシンガンのように吐き出されたチリチリの言葉に星野君以外の野球坊主達は爆笑し始めた。

私は彼の言葉にビックリして、目を見開きポカンとバカみたいに口を開けて彼の顔を眺めてしまった。が、徐々にその言葉の意味が頭の中に浸透してくると脳味噌がグツグツと煮えたぎり、手にぶら下げていた下駄をグローブのようにはめ、そのオツムも髪の毛も言動も軽いチリチリのボディと顔にそれぞれ重い一発を叩きこみたい衝動に駆られた。

(ななななによ……あのマーマラソンビットそういう破廉恥な関係だつたの？！ いや、それよりなんで私があんな類人猿を相手にしねきやならないのよつ！)

顔を真っ赤にしながら心の中で思いつきり悪態ついた後、イライラの根源であるチリチリの手から逃れようと腕を振り払つたが、生意氣にもチリチリのわりには力が強くてビクともしない。

「やめる、その言い方！ 荒井さん、困つてるだろ！」

「へえ、このボインちゃんは『あらいさん』つてゆーんだ。どう？ カタ物の一幸や伸びない竹サイズの啓介より、オイラの方が絶対お得だつて！ ああ、オレ、『伴 丈一朗』つてゆーの。聞いたことない？ 結構この辺でも有名だから、山野中でも知れ渡つてると思つけどー」

私はその名前を聞いた時、自分の腕を掴んでいる人物を今世紀最大の珍動物を発見した時のような目で見てしまった……と思つ。

(ばばば、伴丈一朗?—)

何故ならこのチリチリの言うとおり、その名はこの辺りにある中學では知らぬほど有名な名前だったからである。もちろん有名と言えば、山野中の裏番である桂兄弟もそうだし、それこそ貴子のお姉様である笹谷厚子も然り。けれどもそれと同じくらい有名だったのが、この「伴丈一朗」という男であった。

この伴丈一朗、彼は山野中学校区の隣に位置する「河田中学校」に通つ中学一年生の男子である。

三度の飯より女好きで、女はとりあえずヤツとけ的なノリいらしく、河田中女生徒の半分は既に御手付き済みどころか、このスケコマシをめぐつて女同士が流血する事件が続出……などの噂が流れていた。

来るもの拒まず「ドントコイ!」の傍迷惑な伴丈一朗は、売られたケンカも色氣も大小構わず買い放題。逆にキレると男女見境なく半殺しという物騒な男として、当時河田中きつてのワルと有名だったのだ。そして、この番長ではなくバンジョウこと「伴丈一朗」と、裏番な「桂龍太郎」。この二人は同一年であるが故に好敵手として騒がれ、彼らは「山河の二狼」と呼ばれてこの付近の中学生に恐れられていたのである。ちなみに名前の由来は、二人とも名前の最後に「ろう」がつくからだそうだ。

もとよりこの河田中は物騒な連中が多く、学校のレベルも治安も低いと評判で、この付近に住む住民から敬遠されるほどの学区だつ

た。実は大野小へ通う学区の子はこの河田中と山野中の学区の境目に位置する子が多かつた。境目に住んでいる親御さんの強い希望で中学を選べるようになつた結果、子供を山野中に行かせる人が多いのだが……例外がいたらし。ちょうどこの伴丈一朗達のようだ。

「あ、その様子だと聞いたことある、みたいな？ ボクチャン的に是非いい噂だといいな。んじゃ、自己紹介はしなくてよろし？」
「そうそう、ボインちゃんのお名前は？ まさか、『アライボイン』じゃないよね？」

「ちちち違いますっ！」

「んじゃ、お名前何てえの？」

「え、なんなんでそんなこと……」

「……オイ。名前を聞かれたら、素直に答えるつて山野中では教えてねえのかよっ？！」

「ヒイツ！！ ……アライ、ミチコ……テス。ドウゾヨロシク

……

「よおしー なかなかイイ模範的な挨拶だぞ、『アライチチ君ー』

「『ミチコ』です！」

「ブツー！ いやあねえ奥さん、ジョークですって！ なんだ、地味な割には意外と面白いじゃーん？ ボインちゃん絶対処女でしょ？ いやあ、こうこうタイプ、オイラ初めてだなあ。よし！ いい機会だからこの夏派手に合体して、河田中と山野中の『友好の懸け橋』となろうぜ！」

(ババババカヤロウつーなにが『友好の懸け橋』よつ、それに結

局『ボイン』呼ばわりじゃん！)

それこそ「猛攻の押し出し」でそのニヤついている頬に紅葉マークができるほど力士並みのツッパリを決め、土俵（急斜面）から蹴り落としたかった。だてに厚子部屋の飯炊き女をやつたわけじゃな

い。チリチリ頭を掴んで投げ飛ばす勢いで「超絶お断わり!」の返事を入れようとしたその時、私の希望がそのまま、いや希望以上の出来事が実現した。

「……んのおおおつ、H口丈一朗お！　その手を離しやがれえつ！」

何処からか聞きなれたボス猿の雄たけびと共に、一陣の疾風が走り抜けた……ような気がした。

ザザザと勢いよく草を踏みしめる音がした後、「チエストオツ！」という気合の満ちた声が轟いたと思つたら、ドスッ！！……という派手な音が響いた。伴丈一朗は叫び声に振り向くと同時に前に吹つ飛び、その身体を咄嗟に星野君が支えたのだ。もちろん伴丈一朗に身体を掴まれていた私にもその余波が来てしまい、よろめいて草むらに倒れ込んでしまった。

「……ああ、ワリイ！　その、なんだ……大丈夫か？　チユウ」

シユタツと綺麗に着地したボス猿こと尾島啓介は、伴丈一朗の背中に派手な飛び蹴りが決まったことに睡然としている私に向かつて、全然悪いとも大丈夫とも思つてなそそつな気楽過ぎる声を掛けた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

とうとう出ました、「伴丈一朗」！今後ともよろしくお願ひします。

ロックバンド・ユニーーンのボーカル…菩提樹はすごいファンです！恐れ多くて名前は出せません、チキンなお許しください。そしてファンの方、大変申し訳ございません。これはあくまでも参考程度、完全なフィクションなので文中の人物と色々下品な言動は本人と全く関係ありません！ご了承くださいませ！ちなみにこの映像から「伴丈一朗」の雰囲気をいただきました。

http://www.youtube.com/watch?v=Cf2WRe-Ev8U&feature=channel_1-video-title

同じく実際に存在する「河田中」の関係者の方にもお詫び致します。文中の人物や団体・施設などの名称は全て架空のものです、実在のものとは一切関係ありません。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

伴丈一朗に迫られていた、というより、完全におちつくられていた時に飛び蹴りと言う形で乱入した尾島。
その煽りを食らつてか弱い乙女が草むらに倒れ込んだというのに、
あの男ときたらっ！

『……ああ、ワリイ！ その、なんだ……大丈夫か？ チュウ』

といつよつ、

『ワリイワリイ、遅れちまつた！ 田覚ましが鳴らなくてよお～』

……などと待ち合わせ場所に余裕で一時間遅刻してきたけど全然悪いと思つてないよこの男！ 的なノリの軽さで謝った。

それどころか、倒れた私に手を差し伸べて起こすことなんぞよりも、再びキツイ一発目をチリチリに浴びせたかつたらしい。着地した態勢からクルツと回つて回し蹴りでトドメを刺そうとした。残念ながらチリチリはすぐにしゃがみこんでそれを避け、しかもその奥にいた星野君も身体を逸らして顎スレスレのところで尾島の蹴りをかわして叩いた。^{はた}チリチリはその隙に体制を整え、立ちあがつた勢いで尾島のボディに一発叩き込もうとしたが、寸でのところで星野君に羽交い絞めにされ、拳は虚しく空を切つた。

ということで、現在ファイティングポーズを取りながら睨み合つ、尾島啓介と伴丈一朗。

殺氣がビリビリして、その迫力も半端じやない。一人はまるで縄張り争いをする二ホンザル（尾島）とオランウータン（チリチリ）

のボスのようだ。どうでもいいが、彼らの運動神経はどうなつてゐるのだらへ、中一のくせに未恐ろしいものを感じる。

「この緊迫した空氣を破つたのは、星野君から無理矢理身体を引き剥がしたチリチリの方だった。

「テメエ、よくも……背後から御挨拶とはやつてくれるじゃねえか。挨拶は正面からキッチリ礼儀正しくつてママから教わらなかつたのか？ ん？」

「ああ、ワリイワリイ。挨拶する前に蹴り心地が良さそうな背中が目に入ったもんだから、ついな？ 試しに飛び上がつたら、予想違わずキレーに決まつちまつてよ。すまねえなあ、足が長くて！ オレもほとほと困つてんだ」

「ハツハ！ ……マジもんで笑えるぜ。足の長さより、背丈の長さを心配した方がいいじゃねえの？」 尾島君

「相変わらず頭わりいな。背丈は長さじやなくて高さつていうんだぜ？ それに背丈の心配は残念ながら無用でよ。現在のオレは育ち盛りでな、ここんとこ順調に伸びてるんスよ。それより伴君の方がヤバインんじゃないんスか？ 小卒からあんまり変わつてねえようですが？」

「……そりやこいつのセリフだよ。そつちこそ相変わらず口だけは達者なところは小卒から変わつてないようだ？」

どうも同じ種族……いや、顔見知りらしいが親友とは言い難い言葉でお互い牽制し合ひ、『サル田・からうじてヒト科・どうしようもないエロ属』な一匹。ブラックスマイルを浮かべながら「隙あらばこの拳、迷わずお見舞いしてやるぜっ！」と身構えている。

それを黙つて見ていた星野君は、溜息を吐きながら睡然としてる私の方に近付いて声を掛けてくれた。

「大丈夫か？ 荒井さん」

「…………はあ」

(ア、そうだよ、普通はコレだよね？ 見よ猿共！ 女たらしこむ
より先に、この心遣いを学べ！ …… なんだけど)

心中では一匹にしつかり文句を言いいつつ、奥底ではさし伸ばされた星野君の手を見て騒動に巻き込まれる前の彼とのやりとりを思い出してしまい、その手を取るのを躊躇してしまった。決して類人猿が見てるからではない。「…………あ、大丈夫だから」と、星野君から目を逸らしつつ起き上がるひつとした途端、今度は猿一匹、お互睨み合つたまま揃つて勝手なことを言つだした。

「うおらあつ、一幸！ 今までチュウと何してやがつた？！ 店の手伝いとか言ってその実イチヤコラなんて聞いてねえぞつ！ チュウもなんでドテチンと一緒にじゃなく一幸とこんなところでモタモタしてんだつ！ いいからこいつちに來い！！」

「啓介チヤンよ、そりやチと違つな？ ボインちゃんは今さつきオイラと花火を見る予定にメデタク変更となりまして？ オマエみたいなガキの出る幕じやねえのよ？ 童貞ヤローは大人しくスツこんで、一人寂しく右手と仲良くイチヤコラでもしてな！」

「あんだとつ？！ オレがガキならテメエは赤ん坊じやねえか！ 帰つてママのオッパイでもしゃぶつてればいいんじやないでちゅかねえ！」

「…………コノヤロ……テメエだけはマジ勘弁ならねえ！ 昔からイケ好かなかつたんだよつ！ ボツ「ボコにして病院送りじや、『ワア！」

「上等じやねーの一 その腐つた髪の毛全部引つこ抜いて、ツルツルなテメエのオヤジとオソロにしてやるぜつ！ パゲになつたついでに仏門にでも入つて一から出直してこいやつ！…」

どんどんHスカレートしていく、ラスボス並の迫力ある戦い。

「アッハッハ、この二人とつても面白い、じゃなくて、怖い

」

……などと言いながらリングの外で菓子でも食つて呑気に観戦といきたいところだが、私も少し噛んでいるようなのでそつもいかないだろう。

ここは一つ「そんな……私の為に争っちゃイヤ！」と書いて滅多になれないヒロインになりきり、間に入つて止めた方がいいのだろう。それとも女豹特殊訓練のお色気攻撃を発動しながら、「フフフ……私の為に争うなんて、なんて可愛らしい坊や達なの！ 気が済むまでファイトするがいいわっ！」と自らレフリー役を買うのがいいのか。いや、ここはイチかバチか特級編の「B A - K A N（バカーン）」の上をいく特殊砲撃、「C D A S マグナム」を発砲し三人仲良くまとめて「友好の懸け橋」となるべきか。

私は牙を剥いている二匹の猿を黙つて見定めた。

脳内協議の結果、満場一致で全ての案件は却下となつた。むしろ「即効で駆け足」で逃げた方がよかんべ！

「ごめんね、大丈夫。ありがと」

私は星野君にそう言いながら自分の力で立ち上がり、とりあえず浴衣を整えた。ここは、その、アレだ。目の前の二匹には「勝手にするがよい」と通達し、星野君には正直に「疲れたから帰る」と頭を下げ、縄張り争いが激化している物騒な猿山からとつとと下山した方が無難だろう。

そんな私の雰囲気を察したのか、「星野君、本当に色々とありがとう。ゴメンね、やっぱり貴子を探すことにする」と言って神社の方へ戻り始めた途端、猿二匹はビックリした顔をして、オマケにビ

ツクリするほど俊敏で私の前に立ちふさがったのだ。

「あ、待って、ボインちゃん！ オイラもひよつてつるといひだつたから一緒に行こうぜ！」

「はあ？ 誰がテメエなんかと行くか！ オレがつ……いや、ドテチンがつ、ずっと待つてたんだぞ！ チュウはさつとと上に登りやがれ！」

「ちょ、ちょっと……！」

両腕を引っ張られる荒井美千子。猿だから加減ができるのだらうか？ 女性相手にしては力入れ過ぎじゃ、ボケえ！！

「ボインちゃん、悪い事は言わない。この啓介だけは絶対ヤめとけ、な？ 不幸になること間違いナシ！ ああ、そういう、一応忠告しどけど、一幸と龍太郎もオススメしないよ？ この三人には、小悪魔明日香がもれなくセットで付いてくるから。な？ 啓介チャン？」

「はあっ？！ なな何を言って……お、女をとつかえひつかえやツてる、オマエにだけは言われたかねえっ！」

「お～やだやだ。『ヤツテル』なんて女性の前で恥ずかし！ それに男の嫉妬はみつともないぞ、尾島君！ オイラは龍太郎みたいに一股もしなけりや、啓介のようにどうでもいい女にあちこち手を付けて本命には素つ氣ない鬼畜じやねえモンよ。その時の恋に一筋！！ ちゃんと決着を付けてから次へ行くからね？ ここは中身も外見も素晴らしいオイラに全てを委ねたまえ、ボインちゃん！」

「バカ言え、誰が鬼畜だ！ それにテメエの場合、中身も外見も素晴らしいじゃなくて、スケコマシだろーがつ」

「……あのさあ。大体啓介には上で待ってる女共がいるだろうよ？」

それこそ仲良く風呂まで入った明日香チャンや修旅の時に布団の中でイチャコラしてた原口も待ってるんじゃ～ん。そいつらで両手

が一杯で、ボインちゃんのオッパイまで手が回らないゴトショ？ ボ
インちゃん、今の聞いた？ この男はね、そつこいどうもな
いやツなんですよ？」

「ふふふふだけんなあつ、テメエ！ ものでもいい過去のことをベ
ラベラベラ喋りやがつてつ！」

チリチリと尾島の変に焦つている言葉に、私はゆつくつ一人の顔
を見比べてしまった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

段々エスカレートします。

「チヨット・ダケヨ・アンタモ・スキネ」……かつてドリフター
ズの加藤茶がやつたコントネタ。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。――――――――――――

君との距離は天の川よりも遠く？

（……あ、あれ？ な、なんか今、ものすごいことを……聞いたようだな？）

私はポケーっと尾島の顔を見たが、尾島は私の方は見ようともせず、慌ててソッポを向いた。その横顔はまるで悪いことをした時に見つかった子供のような、居心地の悪そうな、氣マズイ顔。

（……ちょっと、なんで目を逸らすのよ……それともつ？！ 風呂と布団でイチャコラは事実ってわけえ？！）

私は思つてもみない衝撃の事実により、まるで自分自身が活火山のような感覚に陥った。奥深い地底の底から徐々にマグマのような灼熱の溶岩が噴き出すのを感じ、それが足元から頭の先に向かって急激に登り詰めるのがわかつた。なぜこんなにも身体中が煮えくり返るのか理由はわからないしわかりたくないのだが……。（そう、そういうわけねつ！）

猿、いや、猿以下であるミジンコ並みの尾島に「フケツよ、フケツ！ アンタなんか最低っ！」と罵りながら胸ぐらを掴んで往復ビンタをお見舞いし、「やつぱり大砲じゃなく竹並みだつたのねっ！ この嘘つき！」的な下半身にケリを入れて、田ごろの恨みつらみを晴らしたいところだが、残念なことに今の私ではそれを執行する勇気もなければ、その権利もない。

しかし、睨むだけならプライスレス！ なんてつたつて「マクナルド」だってスマイル￥〇の時代！ ここはスマイルではなくミサイルを打ち込む勢いで、思う存分怨念の籠つた超スペシャルビームをお見舞いしてやつた。

「いいぞおボインちゃん、その調子！ それにホラ、尾島君も否定しないでしょ？ そういうことで啓介はその手を離せつてえの、シ

ツシツ！ ボインちゃんはオイラが責任もつてラブも相棒も注入しとくから心配すんな！」

「注入……つて、ババババカヤロウう！ つざけんなつ！ どうあ
れがつテメエの萎びたラブと相棒を注入させるかつ！ それはな、
このオレ様の役つ……あ、いや……やく、やく……そうだつ！『
焼くも返すもアナタ次第！』『まるやき』はそんなお客様を応援し
ます！』でお馴染みの『まるやき』オーナー・蝶子がテメエの顔を
久し振りに拝みたいつてよ！ 只今開店十周年記念の為、お好み焼
き全品半額キヤンペーン中だつ！ 今すぐ祝辞を述べに顔を出して
きやがれつ！」

「おいおい、オマエは『まるやき』の回しモンか？ それよりなん
でオイラがあんなオカマに会いに行つて祝辞を述べにやあならんの
よ！ オイラの専門は100%女子、おわかり？ おつ、そうだ！
ボインちゃん、せつかくだから一緒に寄つて行くか！ オーナー
は人間じゃないけど、ここは肝試しだと思つてさ、な？ なんてつ
たつて夏だしなつ！ 背筋も凍る店長を見て一先ず悲鳴を上げたら、
ちゃんとオイラにしがみつくんだぜ？ そんでさ、一人のホットな
愛で仲良くお好み焼きでも焼こうじやないの！ 『ほら、この鉄板
をごらん？ 燃えるように熱いだろ？ これがオイラの気持ちさ！』
『まあ、なんて熱いの……丈一朗様つたらステキ！』『おつと、あ
ぶねえ。オイラに近付いちやあ火傷をするぜ！』『いいの、チチコ
は丈一朗様の愛で焼かれたい！』『ハツハツハ、チチコも罪な女だ
な。仕方がない……ふつくらと焼けたお好み焼きのようなオマエの
ボインに俺の愛を刻んでやるつ……。覚悟しなつ、オイラの相棒が
火を吹くぜ！』『いやあああん、丈一朗さまつてば、すごおおい！』
……というわけで、残念ながらこの先はよい子も読んではる可能性が
高いから打ち止めだ。残りは各自で想像するよつに！ な？ ボイ
ンちゃん！』

「……」

(……「コイツ、本当に中学生なんだろうか……）

大体、な？と問われたところで何と答えればいいといつのだろ
う。いや、いつそのこと『まるやき』ではなく『まるいげ』にする
べく、私の愛で本当に「チリチリ」にしてやるべきなんじやないだ
らうか。それより『まるやき』は十周年らしい、一体ベティちゃん
は幾つなんだろう。いやいや、そんなことより『チチコ』って誰だ
よ……

「……コロス……よおおつし、決定だあつ！ テメエを生かしちゃ
絶対世の為になんねえからな！！」

「いやだなあ尾島君、野蛮な男は女子に嫌われるぜえ？ 大体さあ、
ボインちゃんは啓介のなんなのよお、カノジョなんですか？」

伴丈一朗が厭されたように吐きだした言葉に、私を含めこの場に
いた……というより、私と尾島はピキーんと固まつた。尾島は口元
をグッと詰まらせ、私は足元から咽喉まで吹き出したマグマが放射
能熱線炎となつて発射！ ……はされず、むしろ逆流したせいで動
悸が激しくなるのを感じた。

（え、え、そそそそんなカノジョなんて冗談じやない！！ だだだ
大体ね、コイツとは只のクラスメートというか？ それ以下でも以
上でもなくてつ？ 特に特別な関係ではないというかつ？！ ……
そもそも尾島はいつも私のことをからかつて遊んでるといつか……）

聞かれたわけではないのに、言い訳するよつに心の中で慌てて答
えてしまう荒井美千子。一方、尾島からは一切言葉は発せられず、
ムスッと不機嫌そうに黙つたままだ。この沈黙がなんとなく嫌で、
なんで黙つてるの、いつものように調子よく答えるなさいよと言葉で
はなくて田で訴えつつ、固唾をのんで尾島を見つめた。

いつものような調子でけなされるのだから、と思いながら。

いや、たぶんそうなるんだろ？とも思いながら。
けれども、私は心のどこかで、尾島がどんな答えを出すのかドキ
ドキしながら待ち構えていた。一体この動悸はなんなのだろ？

とうとう尾島は大きい溜息を吐き、外国人のように頭を振りながら大袈裟に肩を竦めた。

「ハアアアアアア？！な、なんのよつて、そんなこと、いちいち伴君に答えなきゃならんのですかね？その義務はあるんですかね？それよりそんな宇宙一くだらぬえこと、オマエに詮索される覚えはねえんだよっ！それともなにか？そんなにオレ達の関係を聞きたいのですか？そんなに知りたきや教えてやんよ、耳の穴かつぽじつて良く聞きやがれ！」

尾島は急に元気になり、おどけた調子で捲し立てた後、ニヤリとした表情でフンと鼻を鳴らした。

私の鼓動は破裂しそうな勢いで、余興の大太鼓のよつて、ドンドンと暴れていた。

「こ」の荒井美千子はな、オレの奴隸なのよ。おわかり？オレのお陰でクラスで息してられるのよ。だからオレに逆らうことはでき

ねえし？ オレの言いなり、絶対服従つて訳ナンですよ？ よつて
オメエとチコウは今後一切一生死ぬまで接点が無い訳ナンですわッ
！ 「こまで説明すればおわかりですかね、頭が弱い伴丈一朗君！」

尾島の早口で捲し立てた言葉は、私の心を貫いた。

いや、粉々に碎いた。

尾島は確かに言った。

宇宙一くだらないことで、絶対服従コイツの奴隸。
クラスで息していられるのは、尾島のおかげ。

「おい！ よせよ、啓介っ！」
「ブツ！ ハア？ なんだよそれえー？」

私は尾島を見続けることができず、顔を上げ続けることすら困難
で俯いてしまった。

せつかく抗議してくれた星野君の言葉でも立ち直ることができず、
深い傷を癒すこともなかつた。それどころか、その怒鳴り声すら虚
しく感じてしまつた。ましてや、伴丈一朗のわざとらしく田を丸く
した後の爆笑は、奈落の底に突き落とされたようで……耳触りと言
わずしてなんであらう。

(……何がそんなにおかしいの？)

徹底的にバカにされ、笑い者にされているというのに……何故私はその加害者達に大人しく両腕を掴まれてアホみたく黙っているのだろう。

言いたいことを言われ、ボケつと突つ立つたまま何も言い返せない自分が情けなかつた。いつも腹の中では「ちやこちや言うくせに、肝心な時に何も言えない自分に腹が立つた。心の底から呪いたくなつた。

「呑気に笑つてないでとつと帰りやがれっ。その笑いつつーか、存在すら目障りなんだよ！」

「アツハツハ！ クク……いやあ、別に尾島君が目障りでも一向に構わないですよ、オイラは。それよりもさあ、頭が弱いのはオマエの方でないの？ オイラはボインちゃんが啓介のカノジョかどうかって聞いたんですけど？ 別に一人の関係を丁寧に説明しろとは言つてないんですけど？ ま、そこまで言つならカノジョじゃねえんだろうなあ！ 大体カノジョだつたらさあ、こんな最低な扱い、ありえないし？ 余計な邪魔もの引き連れた拳句、他の女侍らせてハーレム状態にするわけねえもんな？ もしオイラが女でさあ、カレシにそんなことされたらマジ殺すね。迷わず股間蹴り上げるね。一生使い物にしてやらないぐらいいの素晴らしいケリをキレイに決めちやうねつ！」

「丈一朗もやめろ！ キリがネエだろ！」

「つるせえんだよつ、一幸は！ さつきから聞いてりやイチイチ口

挟みやがって……ほんとにオマエもさあ、もつとオヤジさんみたいに人生軽く、気楽に生きろよ？ そんなんじやお袋さんみたくいつかは派手に頭がスパークしちまうぜ？ あ～バカラしつ！ さ、ボインちゃん行こうぜ。女を奴隸なんて言つてる奴や呑気にその友達やつてる頭の固いヤツなんて無視無視！ おつとお、その前に一幸クンに一言アドバイス。この尾島君、カルシウム足りないんでないの？ 頭に血が昇つて怒りっぽくなつてるよーだから？ 明日香のところにでも連れて行つて、オチチあげるよう言つてやんなさいよ。ついでにさあ、二人とも貧乳明日香チヤンに一発抜いてもらつた方がエエんでな」

伴丈一朗の言葉は途切れた。

彼は最後まで言えなかつた。というより、言つことができなかつた。尾島啓介の右ストレートがもう顔面に入つたから。

遠いところで悲鳴が聞こえた。

それが自分の口から出た悲鳴だと認識したのは、写真の連写のように目の前の景色が、勝手に熱くなつて男達の顔がスローモーションのように変化した時。自分の身体が、傾いた時。

拳をまともに食らつた伴丈一朗は、その拍子に彼の手が私の腕から離れ、後ろに倒れた。

一方私は、尾島が殴つた拍子に私の腕を勢いよく引っ張り、急に離してくれたお陰で遠心力によつて階段の方に背中から放り出されたのだ。浴衣のせいで足は思うように動かず、一旦足をついた

が着き方が悪かつたのか、グキッと嫌な感触と痛みが体中に広がった。

支え損ねた身体は、まるで動けないオモチャのように落ちていった。

転げ落ちる身体と傷つけられた心、果たしてどちらが痛いのだろうかと頭の隅で考えながら。

ぼやける視界には、星野君らしき人が手を伸ばす姿。

伴丈一朗に向かって大声で叫びながら飛び掛かかった尾島が、星野君の叫び声でこっちを振り向いた姿。

そして。

木々の間から見えた、真っ暗な夜空に咲き誇る一発目の鮮やかな花火だった。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

文中に新燃岳の噴火で被害を被られた方々、またその関係者に不快な表現があつたことをお詫び申し上げます。m(ー) m

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。――――――――――

君との距離は天の川よりも遠く？

「……美千子、大丈夫？」

貴子が私の顔を下から覗きこんで、ギュッと手を握った。

溢れた涙を吸い過ぎて最早役目を果たしてないハンカチを膝の上に置き、浴衣の合わせの部分を整えながら黙つて頷いた。さつきまで泣いていた目を指で覆つ。貴子の顔を見た途端、中学生にもなつてワンワン泣いてしまった恥ずかしさで、彼女の顔をまともに見れない。髪がほつれている項に、日下部先輩の心配そうな視線が刺されるのがわかつた。それにせつかくの一人のデートを壊し、花火どころではなくしてしまったことも申し訳なくて、ただ頭垂れることしかできなかつた。「私に構わずお祭りを楽しんで」と送り出したいが、今はそんな気遣いも口も回らなかつた。身体も心も酷く疲れ、座ることしかできなかつた。いまだ濛々と煙っている来賓客用のメントの中で、静かに座つていることしか。

田線を合わせなくとも一人が酷く心配しているのが、何か言いたそうに、何が起きたのか知りたそうにしているのがわかつたのだが……。

今は。今だけは。
できればそつとしておいて欲しかつた。

申し訳ないが、貴子や日下部先輩に言いたくないし言えなかつた。
正直言える状態でもない。

「荒井さん、お待たせしてごめんなさいね？」

砂利を踏む音の後に、落ち着いた低いハスキーボイスが聞こえた。ドンドンと頭上で響く花火の音に負けないくらいの存在感を、ドッ

シコと響かせながら。

「……」

先刻から、神社の裏山での出来事が壊れたレコードのように頭の中でリピートしていた。頭がパニック状態で考えがまとまらないまま、私は泣きはらした顔をブキミちゃんに向けた。ブキミちゃんは私の泣き顔を眼鏡の奥からジッと見た後、ニヤリ……ではなくて、初めてじゃないのかというほど慈悲深い笑みで頷いた。

「……いいのよ。それより少しほは落ち着いたかしら？歩ける？」

「あ、あの……私っ！」

「何も言わなくていいの。荒井さんが気にすることではないのよ？あなたは被害者なんですもの。それよりも今は御自分の身体を心配したほうがよろしいのではなくて？足、痛いのでしょうか？お疲れの様子だけど、悪くならないうちに急いだほうがいいわ」

ブキミちゃんは私の背中にそっと手を添え、顔を覗き込みながら小さい子供を諭すように言い聞かせた後、私をゆっくり立ち上がらせた。

「……荒井さん、伏見の言つとおりだよ。足、結構腫れているし、もしヒビでも入つていたら大変だ。ここには伏見に甘えさせてもらつて、急いで彼女の病院へ行つたほうがいい。な？ 貴子」

「先輩……。そ、そうだよね。美千子、伏見さんと日下部先輩の言うとおりだと思う。……和子達には……言つておくから……」

日下部先輩は貴子の肩を抱きながらしっかりと頷き、貴子は最初語尾を震わせながら言つていたが、徐々に顔を苦しそうに歪め、浴衣をギュッと握った。

「……やつね。 笹谷わんこは是非、 荒井わんは怪我をしたので東先輩と帰るところ」とをお友達にお伝えしてもらつといわ。 でないと、 なにことないこと…… いえ、 歪んだ事實を伝えられてしまう可能性が大きいものね。『彼女』に」

ブキミちゃんの慈悲深い笑みは「最早用済み」と言わんばかりに消え去り、 いつも不気味なスマイルに変貌し意味深な言葉を残した。

「……え？ 『彼女』？ …… って何？ 一体誰よ？ あ、あのさ、伏見さん、ちょっと聞いてもいい？ 美千子に何があったの？ 一体何がどうなつてつ？！」

貴子はブキミちゃんの言葉にサツと顔を強張らせ青くした私を見逃さず、 眉根をキッと寄せてブキミちゃんに問いかけた。ブキミちゃんはいつもと変わらない澄ました表情でチラッと貴子を見た後、瞼を閉じた。

「……悪いけど、今は笹谷わんに説明している時間はありませんの。後田荒井さんから直接お聞きになるといいわ。もしくは、丘の上で呑氣に花火を觀賞している仲の良い幼馴染達に御尋ねになれば早いかもしけれませんわね。 もつとも、」

誰ひとつ本物の「とは言えない」でしょ、 、「言わない」でしょ、 うけど。

そういうながら眼鏡の奥にある閉じていた瞼をゆっくり開き、 瞳

をキラリと光らせて貴子を射抜いた。その確かに驚いたのか、貴子はハツと息を呑み、それから徐々に目を見開いていった。

「…………おさななじみ…………」

「お互い出来の悪い幼馴染を持つと、苦労しますわね。 笹谷さんの御心中、お察ししますわ」

不気味なハスキーボイスを吐き出す割りには鮮やかな赤い唇を持つブキミちゃん。 口角を上げてニヤつと笑い、目を細めた。

恐ろしくも貴子はそれだけですべてを察したようだ。「もう、そういうこと……」と唇を噛み締め、今度は彼女のほうが目をギラギラさせながら神社の裏に聳える小高い山を睨んだ。

(…………ちゅりゅりゅりゅつと、ブキミちゃん！)

『IJのことは他言無用』とあの場にいた全員に固く念を押した本人が、掌を返したように 笹谷さんには詳細を報告してヨシと言ったことに私は驚いて目を丸くした。

「…………ふふふ伏見さんつーあああのつー」

「あら、 笹谷さんだけならよろしうんじゃなくて？ 荒井さんだつて自分の心の内を理解してもらえる方が一人でもいた方がよろしいでしょ？ 笹谷さんは周囲に振り回されず、冷静且つ公平な判断ができる頭の良い方ですから。上手く荒井さんの心を汲み取ってくれる筈よ。 そうですわね？」 笹谷さん

私はブキミちゃんに本心を見透かされ、押し黙ってしまった。

本当なら……「ちょっと足を滑らしちゃって。でも大丈夫！」といつものように愛想笑いを披露し、何もなかつたこと主張して貴子を巻きこまないようにするのが本当だ。

けれども。

今私のには、そんな心遣いをする余裕もなければ、ブキミちゃんの言葉を否定することもできなかつた。この悲しいような虚しい気持ちを誰かに吐きだしてしまいたかつた。今夜一氣に降りかかるた、いや、中学入学当初から少しづつ心の奥底で蓄積され淀んだ泥のような感情を、きれいに洗い流してしまいたかつた。

ブキミちゃんの言うとおり、私は貴子に神社の裏山で起こつたことを話してしまうだらう。

いや、この様子だと貴子はもうある程度察しがついているのかもしない。裏山で花火を見ている連中を待ち伏せし、片つ端から血祭りに上るんぢやないかと冗談にならない不安が過つたが、傍に日下部先輩がいる限り、とりあえず祭りの間は大丈夫だらうと無理矢理自分を安心させることにした。それに今日のことは、一晩経つてお互い冷静になつたところで話すほうが無難だ。今話したら、私も再び泣き出すに違ひない。

ブキミちゃんは貴子の憤怒の形相に満足したのか、声にならない笑いを漏らしながら頷き、すぐにもとの生真面目な能面のような顔に戻つて私の腰に腕を回した。

「さあ、荒井さん。タクシーが来てるから行きましょう。出来のよい幼馴染おにいさんが首を長くしてお待ちかねよ」

ブキミちゃんはまるで既に貴子と日下部先輩など見えぬかのようになにだけ微笑み、私の腕を取つて歩き出そとしたその時。

スッと私の前に威圧感のある影が立ちふさがつた。

条件反射で身体が震えた。

顔を見ないよう俯いていいるといふのに、その瞳の中には目を合わせるだけで逆鱗に触れるような、彼の瞳の色と同じ灰にするほどの仄暗い青い炎が灯っているのが気配だけでわかつた。

「……遅いぞ、ミチ。待ちくたびれたから迎えに来たぜ」

「……」

有無を言わせぬ低い雄臣の声に私は益々項垂れ、妖怪人間ベムとベラに連行されながら人間界……いや、山野神社を後にした。

* * * * *

『丈一朗おおお、テメエ！』

伴丈一朗に一発叩きこんだ尾島啓介は完全に頭に血が上ったのか、私の腕を勢いよく引っ張った後そのまま放り出して、奇声を発しながら伴丈一朗に飛び掛かった。馬乗りになり、胸倉をつかんで一発目をもう片方の頬に決めたところで、星野君の叫び声がこの薄暗い急斜面に響き渡つた。

『危ない、荒井さんつ！』

私は小さい悲鳴と共にむなしく階段の下へ転げ落ちそうになると、彼らが揃いもそろつて驚愕した表情をしながらこちらを見たのが同時だった。

私は衝撃と痛みに備えるため条件反射で咄嗟に目を瞑つた。花火の残像が閉じた目に残っているのを感じながら、これから身に降りかかることをただ手をこまねいて待つことしかできなかつた。

(絶対痛い)

(浴衣完全に汚れる、洗濯できるよね?)

(まさか神社の弊殿まで転がるなんてことは……)

(こんなアホな姿を見られるなんて)

(神を怒らせた罰なのかな)

(打ち所が悪かったらどうしよう)

(完全に足捻った)

(こいつのこと、今まであったことのまま全部忘れてたら)

一瞬の間に様々なことが頭の中に過ぎり、それを人事のように考
えていた私を待っていたのは。

背中を打つ痛みでもなければ、階段を転げ落ちる衝撃でもなかっ
た。いや、衝撃はあつた。けれどもその前に階段の下の方から勢い
よく駆けてくる音と多数の叫び声が聞こえ、叫び声の中でもこれだ
けはしっかりと聞こえた。

『ミチツ一』

昔より少し低くなつたけど、聞きなれていた声色。私の名を呼ぶ
叫び声とともに背中にドンッという衝撃を感じ、一瞬ウツと息が詰
まつた。それでも階段を転げ落ちる気配はなく、自分の体は確かに
止まっていた。身体をしつかり抱き止められている感触がハツキリ
したときには、「助かった」という安堵と「もし転げ落ちていたら」
という恐怖が混ざり合い心臓の鼓動が最高潮、汗がどつと吹き出た。
恐る恐る瞼を開けたそこには。

私を見下ろす、すべてを灰にするような燃えたグレーの瞳。

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

『召し捕つたり！』

雄臣は声にこそ出さなかつたが、無表情のまま一人にしかわから
ない程度にそう唇を動かした。

私の瞳を通り越して脳みそまで射抜くグレーの威^{ボテ}庄的な瞳は、

「待たせてすまない、プリンセスよー。」

……といふ白馬に乗つた王子様といつより、

「身体を張つて助けたこの借りは、必ず同じ代價^{ボテ}で払つてもうおつ
か！」

……などと叫びながら搔つ攫つ、ガーゴイルに乗つたサタンその

ものだつた。

私の全身に震えが走つた。

雄臣はそんな私を無視して急に一ツコリと笑い、「間に合つてよ
かつた」と言いながら一息ついた。恐怖の為か突然の事故にか、い
まだ硬直状態にある私をゆっくり立たせた後、ポンポンと背中を叩
きながら「怪我はないか?」と聞いてきた。

私は何が何だか訳が分からぬまま、なんとか頷いたまでは良か
つたが……震えていた左足に重心を置いた瞬間、足首に鋭い痛みが
走り思わず顔を顰めてしまつた。

『？！…………どうした？ 痛いのか？』

『あ、あ、足が……』

『足？…………歩けそつか？』

『わ、わからない……』

雄臣はしゃがみこみ、私の左足首の様子を見たが、この暗い中では詳しい状態を見ることができず、小さく舌打ちしながら再び立ち上がった。

『チツ、仕方がないな……』

その言葉と共に私の視界はグリンという音がなるほど一転し、宙に浮いた。なんと、横抱き、いわゆる御姫様抱っこいつやつをされたからだ！

『× ÷ & % ¥ ƒ ……』

『しつかりつかまつてろ』

『ちよちよちよちよつとーー!』

『暴れるな。今落ちたら一人とも一緒にあの世行きだ。ま、それもオツだけどな。一人で仲良くお手手ついで三途の川でも渡ろうぜ。なんでもお花畠があるそудだからな。それにここは神社だし、きっと神様だって申し訳なく思つて天国にでも行かせてくれるだろ。まあ、俺としては違う意味でミチを天国へ連れて行つてやりたいが、さつきも言つた通り野外プレイは趣味じゃない。というわけでここからとつと退散して、続きは安西叔母さんの家に着いてからのお楽しみだ。なに、ちよつとの辛抱だよ。それぐらいは我慢できるよな?』

『なつなつ何が我慢よつ！ 冗談はやめてくださいつ！ !』

『それよりもミチ、もう少し瘦せる。いくら俺でもかなりキツイ。これからは胸だけを集中的に発育させるんだ』

『おおおおおしてつ、おろしてええーー!』

『……なんだよいきなり。我儘な女はいつか愛想尽かされるぞ。俺の綿密な指導の許で、スキルアップ作戦を一から鍛え直したほうが

いいんじゃないか?』

『おおおお願い、お願いつ……』

『……まったく、しょうがないなヤツだなあ。ま、今日のところはこれくらいで勘弁してやるか。どうやらふざけている場合じゃないみたいだしな。それに、殺氣が半端じやない坊やもいることだし?』

雄臣はわざとらしくため息を吐いた後大人しく私を下におろし、私の肩を抱きよせながらゆっくり上方へ挑戦的な視線を送った。その先には私たちの様子を固唾を飲みながら唖然と見守っていた同級生と河田中の連中がいた。品行方正の優等生である筈の雄臣オトコが、聞き違ひじやないかという過激な発言と大胆な行動をしているのを目の当たりにしたからなのか……しばらく白けたような、呆けた異様な雰囲気が薄暗い木々の間を漂つた。が、この沈黙を破つたのは星野君だった。心配そうな強張つた顔を私の方へ向けながら。

『……あ、あの、荒井さん、大丈夫……か?』

『ああ! もしかして君が星野君かい? 君のお祖父さんから話は聞いたよ。すまないねえ、ミチが迷惑掛けたうえに大変お世話になつたようで。今後このような面倒を掛けぬよう、俺からミチにお仕置き兼しつかりと言い聞かせておくから』

『お仕置きつて……。あ、いや、そんなことどうでも……。そういうなくて、足、もしかして怪我』

『ああ、ミチの怪我のことは君が心配してくれなくても大丈夫。俺が引き受けよう。それにこれは不慮の事故つてやつだ。大体ミチがハツキリした態度で君達のお誘いを断り、さつさと下まで降りて来ればこんな面倒なことにはならなかつたんだからな。自業自得つてやつだろ。むしろ君には頭を下げ礼を言わなくてはいけない。下駄だつたらそれこそ足首がイつていただろうからね。だから君は心置きなく御友人と一緒に花火でも鑑賞してくれないか』

『……』

星野君の言葉は雄臣の迫力ある棒読みのセリフに遮られた。星野君は眉根を寄せながら黙つて鬼神・修羅の仄暗い眼光を受け止め、何か言おうと逡巡していたようだが、結局何も言わず口を引き締めたままだった。雄臣の言葉にますます居た堪れなくなつた私は、自分が情けない上に星野君にまで迷惑をかけた事実に打ちひしがれ、目頭の辺りが熱くなるのを感じ頃垂れてしまつた。

『……おい、東つ！……先輩。いくらなんでもそりやねえんじゃねえのつ？ チュウは別に何もしてつ……！』

星野君の代わりに口を挟んだのは、尾島だつた。彼の怒りを含んだ声色と物騒な雰囲気が、伴丈一郎から雄臣へ移り、その姿に私の心臓がドキンと高鳴り反射的に顔を上げたが、彼の言葉も最後まで発せられずに途切れた。殴られていた伴丈一郎が正気に戻り、馬乗りになつてゐる尾島を殴り倒したからだ。

『お、尾島君！』

『啓介！ おい、丈一郎も、もつやめろ！…』

私と星野君が叫んでも、二人はゆつくり立ち上がり体制を整えながらお互ひ睨み合つたままで、怒りが静まることはなさそうだつた。

『啓介、テメヒ……ああつ、クソつ！ おかげで少しイッちまつたじやねえかつ！ ……つたくよお、オイラとしたことが……あ～あつ！ マジもう勘弁ならねな……ぜつてえええつ、ブツ殺す！…』

『……チツ……上等じや、かかつてこいやつ！ 今のオレはすげえ機嫌悪いからなつ！ 徹底的にやつてやんぜつ！…』

『いい加減にしろ、一人とも！…』

星野君の制止も聞かず、怒鳴る伴丈一朗と唾を吐きだしながら応戦する尾島。一人が掴みかかって殴り合いを始めそつになるのを止めたのは 。

ある女性の叫び声。

『ダメだよ、啓介！』

声は上から聞こえた。

その声で一人が怯んだ隙を狙つて、河田中の連中と星野君、上から叫けびながら駆け降りてきた小関明日香によつて一人は引き離され、寸でのところで事なきを得た。

尾島啓介の背中に抱きついているのは、陽気で呑気が売り物のいつもの子リストとは打つて変わり、全力で止めに入る真剣な小関明日香。

『こらあ、離せつ！ 明日香あ！』

『バカ！ 啓介、外で暴力沙汰はマズイつて！ やるなら蝶子の店の中だけだよつ、約束でしょつ？！』

『あらあらあら、尾島くーん、明日香ちゃんにかばわれちゃつてえ、うらやましいこいつてつ！ テメエがそんな腰ぬけだとはなあつ！』

『丈一朗もやめなよつ！ 大体なんでこんなことになつてるの？！ どうせいつものように馬鹿らしいことで喧嘩でもしたんじょ？ もう、一人とも小学校のときから全然成長してないじゃんつ！』
『つるせえつ！』

突如現れた小関明日香を、私は雄臣の影からただただ見守つていた。

彼らはなにやら言い合いを続けていたが、少し雰囲気が変わり殺気が薄れたことだけは私にもわかつた。話の内容はある言葉以外一切私の耳には入つてこなかつたが。

(……「馬鹿らしいこと」……か。そつか、尾島は小関明日香の言つことは聞くんだね……)

自分の考えたことが身体に染み込んだ途端、咽喉がギュッと縮み苦しくなつた。そして、自分の身体に風が通り抜けるような虚脱感に襲われた。

胸がザワザワするその光景は、まるで自分が最も見たくない映像のようだ……、何故私はこんな拷問にかけられているような気持ちにならなければならぬのだろうか。

ひどく気分が悪くなり、見続けることが苦痛だつたため雄臣の影に隠れた。もう帰ろうと雄臣の腕を引っ張り階段を降りようとした時。

スッと音も気配もなくいきなり私の隣に並んだ人影。

『……あらあら、小関明日香さん。「馬鹿らしいこと」とは聞き捨てなりませんわねえ。荒井さんに失礼ですわよ』

薄暗い木々の下に響く、不気味なハスキーボイス。

『それよりも……このよつな場所で花火を『鑑賞とは、皆様変わつた』趣味を持ち合わせておりますのねえ』

花火の光が周囲を照らし出す。そこには眼鏡をギラリと光らせ、うつすらと微笑を湛える「伏見かおり」がいた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

雄臣とブキミちゃんはストーカーだと判明した！
美千子の恐怖度が2、上がった！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

ブキミちゃんは夜空から降り注ぐ月光と花火の色とりどりの光を浴びながら、天使の輪が並みじやない黒髪をサラリと揺らして、ニヤリと笑った。

『あら、なんだか穏やかな雰囲気じゃありませんのね？ せっかくお爺様が日ごろお世話になつてている市民の為に、多大に寄付した打ち上げ花火ですのに。……花火そっちのけでこんなところで呑気に物騒なお戯れとは、これじゃお爺様が可哀そうですわ。ねえ、荒井さん？』

澄ました顔でものすごいことを言つてのけた、ブキミちゃん。私は俯いたまま彼女の言葉を黙つて聞くことしかできず、同意も否定もできなかつた。でもその彼女の凄味の利いたセリフを真つ向から噛みついたのは、意外なことに尾島啓介でなく、伴丈一朗だつた。

『「つるせえっ！ タつきからワケわかんねえ奴ばっかりしゃしゃり出てきやがつて……部外者はすつこんでろつ！ 大体先に足と手を出したのは啓介なんだよっ！ 僕はやられた分はキツチリ倍返しでお礼する主義でな。しかもすぐやらねえと気がすまねえ性質なんだよっ！」』

『おやめなさい、伴丈一朗。アナタの事情など、どうでもいいことよ。バカバカしい』

『あんだとつ？！…………フン、そつちこわそんな呑気なこと言つていいのかよ？ こんな暴力沙汰、バレたらヤバイのは山野中ではないですかねえ？ 啓介、これが明るみいでれば山野中のバスケ部とサッカー部、謹慎はおろか、試合や大会出場停止決定だろ。なんせ先に暴力を振るつたのはそつちだからな。オマケに承認が数

多くいるし？』『にも証拠があんだよつ。ええ？ ビリするよつ？』

伴丈一朗は殴られた自分の頬をさしながら急に勝ち誇つたように叫んだ。

彼の言葉はこの場にいる山野中の生徒達を硬直させるには十分だつた。尾島は拳を思いつきり握りしめたまま唇をかみしめ、星野君や小関明日香の顔は真っ青のまま固まつている。これ以上ないくらい張りつめた空気を一蹴したのは、花火のように鮮やかなブキミちゃんの高らかな笑い声だった。

『オホホホ！ あら、そのようなこと、大した問題ではありますわ。よく考えてみてもごらんなさい、貴方達河田中の方々が御心の内だけに留めていただければ済むだけのことです』

『はあつ？！ ……カオリイ……てめえつ！』

『あら、相変わらず怖い顔。それに頬が腫れたなんて、何を今更。そんなことケンカに明け暮れている伴丈一朗にとつては日常茶飯事で大した問題でもないでしょ。それこそ、尾島啓介共々そこら辺のノラ^{ネコ}女に噛みつかれると適当に言つておきなさい。お二人とも袖にした女性が多いのだから、誰も疑いやしませんわ。それよりももっと冷静におなりなさい。どうせアナタだつて眞実が明るみにでれば大変困るでしょう？』「山野中の尾島啓介ごとにヤラレました」『……なんて口が裂けても言えないのではなくて？ それとも？ 無敗の伴丈一朗には土がついたと自ら触れまわる、自虐的な御趣味をお持ちなのかしら？』

『カオリいいつ！』

『……呼び捨てはやめて、氣分悪いわ。『親しき仲にも礼儀あり』って言葉、貴方の貧弱なボキャーブラリーに加えて下さるとありがたいですわね。ああ、その前に『親しき』という言葉 자체、語弊があるわ。私としたことが、あなたとつぶくに縁を切つたのを忘れてま

したわ。……でも他人なら尚更礼儀は弁えるもの。ま、そんなこと今はどうでもいいでしょう。それよりもこの騒ぎ、ワタクシ大変困りますの。伏見家次期当主である伏見かおりの輝かし履歴に暴力沙汰を起こした中学を卒業したなんていう汚点を残したくないのよ。わかるでしょう?』

『テ、テ、テメエの事情なんか知るかつ! 勝手にほざいてろつ!』

『……そう。なら、仕方ありませんわね。納得していただけないならいつしましょう。今シニアで持ち上がっている問題が何か御存じ?』

『なんだあつ? ! いきなり……って……オイフ、まさかつ!』

『あら、御存じのようね。なら話は早いわ。あのシニアの練習場に新しい福祉施設を建設する予定があがつてます。これから日本は高齢化社会を進みますので、医療に携わる伏見としては今後に備えて万全な体制で臨みたいというのが本音でしてね。でもアナタも知ってる通り、お爺様は大の野球好きでして……野球を愛する少年と監督の為にあの広いグラウンドを残してやりたいと、良い設備を残してやりたいと苦しい選択を迫られ御心を痛めていますわ。あんなに広くて便利な場所にある球場、どこを探してもこの付近にはないでしょうねえ。しかも無償で! そして私は伏見本家の跡取り娘:……ここまで言えばおわかりですかね? 全ては私の心一つでどうにでもなりますのよ。よって今日起つた出来事はすべて儂い夢物語と思つていただければ幸いですわ。あなたも大事な家族の為にも、ね?』

『……ひ、このやうつうつ……!』

『まあ、わかつていただけて嬉しいわ! やはり持つべきものは幼馴染ですわね。それにしても残念だわ、小卒以来一年半ぶりにこうして会話ができたのに、直接口をきくのが今日で最後なんて!』

『……ツ!』

『さて、他の方も同様、このことは他言無用です。どこからか漏れただ時には……そうですねえ、残念ながらあまりよい結果にはならな

いでしようねえ。ま、別に私はそうなつても構わないですけども。ああ、ごめんなさい、荒井さんにとっては非情に納得できない結末でしようけど、ここには頭の悪い哀れ子羊たちに恩を売る……あら、違つたわ。彼らのあまりパツとしない将来を思つて、田を廻つてさしあげて、ね？ そういうわけでこの話はこれで終了よ。今すぐ解散して花火にでも集中してくれるとありがたいですわねっ！』

ブキミちゃんの鬼のように冷ややかな眼光と容赦ない低いハスキーボイスが小高い山に轟いた。

* * * * *

タクシーの中から流れる光、テールランプをぼんやり眺めていた。光が少しほやけて見える。おそらく瞳にうすらしょっぱい水の膜が張つているからだろう。足の痛みは動かさない限り体には響かなかつた。けれども少し違和感が残る。氷水でしつかり冷やしたし、湿布を貼つてガツチリ包帯で巻いているのでこれ以上は悪くならないだろうが……しばらく安静という医者からの通告を受けた。残りの夏休みはおろか、新学期が始まつても部活と体育は休みだろう、もしかしたら体育祭も見学かもしれない。

時間外にも関わらず伏見さんが顔を利かせてくれたおかげで、彼女の実家である伏見病院の先生に診ていただき、丁寧に手当された。診察料もレントゲンも大量の湿布薬も無料、おまけに大量の包帯付き。私は慌てて家族に電話して保険証とお金を持ってきもらおうとしたが、ブキミちゃんは一切受け入れなかつた。

『あ、あの、お金……！』

『いいのよ。たいした検査もしていないし、荒井さん一人から料金取つたところでうちの病院には微々たる収入だもの』
『……。で、でも、なんだか悪いし……』

『フフフ、別にかまわないわ。それにお爺様も是非にとのことだったので。それより、知り合いがおいたをしたばかりに荒井さんを巻き込んでしまって……私からもお詫びを申し上げます』

頭を下げたブキミちゃんに私は慌てて顔をあげてもうつた。こちらが頭をさげこそはすれ、してもらう義理などなかつたからだ。

『あああの、全然伏見さんのせいじゃないしつ！ それどころか、借りを作つ……いえ、逆にまた助けてもらつた感じ……みたいなつ』

『いえ。それでは私の気が收まりません。帰りのタクシーも用意させていただくわ』

『やややつ！ いいですつて！』

『遠慮なさらなくていいのよ。それでなくともお爺様のお気に入りと認定された方を「病院出たらハイさようなら」なんてできません。お礼というなら是非、お兄様と御一緒に我が伏見本宅へ遊びに……ね？ お爺様と一緒に首を長くして待っていますわ！』

『……』

『ああ！ それよりも私には大野小の恥さらしが大事な妹になる人に怪我をさせたのが口惜しくて……あまりにも情けなくて涙が出てきそうだわつ！ 荒井さん、大野小はあんなバカばっかりではないの！ その点を是非、待合室で待っているお兄様にアピールしてもらえることを心より願っています』

『……あ、ハイ……』

私は固く手を握られながら、ブキミちゃんの満面な笑顔をがっちり正面で受け止めた。この時点で雄臣にブキミちゃんの株上げ大作戦とお宅訪問が決定事項となつた。「結局それか……」とガックリ肩を落として病室を去る私に掛けたブキミちゃんの言葉は、ズシンと心に突き刺さるものだった。

『荒井さん』

『ハ、ハイイツー。』

『ひとつ忠告しておくれ』

『へ?』

『……お付き合をするお友達は選んだほうが身のためよ。あの連中に関わっていると傷つけられるどころか、そのうち身を滅ぼすこと間違いないわ。是非とも鎌谷さんのむつじ遠のくのが利口といつもの』

『……え? あ、あの……連中つて……。ば、伴丈一朗、とか……?』

『あの男などはもつてのほかですつ! 荒井さんもあんな男のひとはキッパリ忘れておしまいなセツー。』

『ヒイツー。』

『「ホン……荒井さん、世の中は広いのです。」この世の半分は男なのですつ! あんな連中じやなくとも素晴らしい人はたくさんいるのよ。』の伏見かおりが断言するわつ』

『あ、あの……伏見さん……こつもとキャラガ……』

『心配なさらなくとも、私は冷静です。これからも友人として、困つたことがあればいつでも相談に乗るわ。伏見一族、一丸となつて荒井美千子のバックアップに努めさせてもらいますからつ』

『……』

田の前で診察室の引き戸が徐々に閉まり、「気に入らない奴がいればすぐさま抹殺してやつてもよろしくつてよ」と微笑んでいるブキリちゃんの顔が、フローリングアットしてこぐのを黙つて見ていた。

君との距離は天の川よりも遠く？（後書き）

美千子は最強のスポンサーを得た！
美千子の運が5、下が……上がった！

君との距離は天の川よりも遠く？（前書き）

この章は多分に過激な発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

君との距離は天の川よりも遠く？

(……一体今日はなんていつ田だひ、色々あつたんだる……)

私は流れる景色から正面運転席のほうへ視線をずらし、ため息を吐いた。今までずっと黙っていた隣の雄臣がこくりとチラッと見て、私に寄り添うように間合いで詰めてきた。

「なんだミチ。足、まだ痛むのか？」

「（ち、近つー）……あ、いえ、ううう、違う……足はとつあえず大丈夫」

「まったく、ミチもあんまり心配掛けるなよな。捻挫程度で済んだからよかつたものの、骨が折れてたらどうするつもりだつたんだ？」「（ごめんなさい……。雄兄さんにも迷惑かけちゃって」「いいんだよ、そんなことは気にするんじゃない。それにしても親御さんこれ見たらビッククリするだ」

「え、そんなこと……ないよ。真美子なら、ともかく……」

「真美子？ なんでマミが出てくるんだ？」

「…………」

「……」

(真美子だったら、きっと心配するだろう。でも私はどうかな……)

そのセリフは頭の中を過つただけで、口から出ることはなかつた。今さらだが、雄臣に自分の醜い僻みを知られるのはかなり抵抗があつたから。

「何言つてんだ。マミもミチも関係ない。親は普通心配するもんだ

「ひ

「…………そう、だよね……」

私は低い声で呟いた。上手く誤魔化したつもりだが、なにか含みがあるように聞こえたかもしれない。これ以上突っ込まないでくれと無言を決め込む私に、雄臣はハツとため息をついて、ポンポンと私の頭を軽く叩いた。

「……あんまり僻むな。残念ながら親子でも相性つていうのはあるんだよ。大丈夫、ミチはよくやつてるさ、空回りだけどな。またとえ『子の心、親知らず』とも、俺は知ってる。心配するな。もう少し大人になれば自分の心に折り合いをつけられるようになるや。それでなくともミチはこの俺様と伏見の素の姿相手に堂々と渡り歩いているんだからな」

「……雄兄さん……。そういうえば、伏見さんから伝言です。イチ、大野小卒業ノ生徒ハ愚力者バカリデハ非ズ、クレグレモ貴公ノ御心ニ留メラレタシ。ニ、是非トモ伏見家本宅ヘ遊ビニ来ルコト切ニ願ウ、首ヲ長クシテ待ツ候」

「……ミチ。いくら云いづらい内容だからってな、不自然な箇条書きで物を言つんじやない。それにそれが慰めてやつてる未来の旦那に対して言うセリフか？ 妻自ら夫に向かつて他の女のところに通へなんてあまりにも酷い仕打ちだる。女豹認定剥奪されるぞ」

「誰が妻ですか。そんなツマンナイ冗談はやめてください」

「そのセリフ、熨斗だけでなくリボンも付けて返してやる」

「優しい雄兄さんならきっと行って貰えると信じています！」

「無視すんな。それには、非常に残念だがその日限定で東雄臣という男はこの世に存在しない。そういうわけだと夜露死苦」

「ちょ、ちょっと！ なにが『ヨロシク』ですか？ どうせなら

『ヨロコブ』勢いで行つてやつてくださいよ！」

「一応考えてやつたがな、1ミクロンも満たないうちに意識が真つ白になるほど全身全霊で身体が拒否つてな。一瞬『未知との遭遇』並みの体験をしたかと思ったぜ。チツ、どうせならミチの裸体と遭

遇したかつたなあ

「どんだけイヤなんですか！ それより雄兄さんは本当に中学生なんですか？ まさか……その未知との遭遇とやらで既に人間ではないんじゃつ？！」

「なんかムカつぐが、いい質問だぞ。よく言われるんだよ、俺は『神の落とし子』じゃないからな。だが万能な俺様でもできないことはあるじつこ。いやはや自分でもビックリだよ」

「……。（どちらかと云ふと神ではなく、『悪魔の申し子』でしょうが）」

「なかなか言ひじゃないか。地味な割にはそういう命知らすなどい、嫌いじゃないぜ」

「ヒヨー、バレとるがなつ！」

「ま、伏見とは適当に合わせておけ。本人も楽しんで……心配しているんだよ、ミチのこと」

「やつぱり楽しんでるんですね、伏見さんは」

「いちいち絡むなよ。それにどうやら俺は本命ではないじつこ」

「は？」

「気にするな、とりあえず伏見の件はこれで終了だ。ともかくな、ミチのオヤジさんに対するその気持ちというか、イライラやら焦燥感はわかるよ。俺も最近父さんとシックリこなくてな」

「え……ええつ？！ 東小父さんとつ？！ な、なんどつ？ ああんな素晴らしいお父さんのどこがつ？！」

「その言い草、俺の方に何か問題があるように聞こえるのは気のせいか？」

「…………いえ。トンデモアリマセン」

「あのな。才色兼備の俺だつて色々とあるんだよ。似ているが故に相手の気に入らない部分が余計に目につくんだ。そもそも似ている者同士が上手くいかず反発するのは自然の法則だろ、磁石がそのい例だな」

「似てる、ですか……」

「なにか不服か？」

「…………いえ。ソックリデゴザイマス」

「だから父さんの転勤は正直有難かったんだ。離れるにはちょうどいいタイミングだつたんだよ。もちろん、こっちに来たのはミチに償いをする為もあつたけどな。ほら、こうしてミチの生活を翻弄させ……ウオッホン。身体を抱擁することもできそうだし？」

「うおおおいつ！ 何気に漏れてるぞ、本心！ しかもビッチもイヤなんですけどっ！」

「冗談だよ。あのな、もう少し人生に余裕を持てよ？ おっと、また話が逸れたな。まあ、なんだ。オヤジさんのことは気にするなってことだよ。それにさ、なにか『理由^{わけ}』があるかもしないだろ？ ……子供の俺達にはわからない理由が。それこそ『親の心、子知らず』かも、な。そんなことよりミチは適当に立ち回つていればいい。それを考えたら今日のケガはちょうどよかつたんだ。俺の監督不行き届きで大事なミチをケガをさせた責任をとらせていただきますと、オヤジさんに堂々とミチを嫁にするぞ宣言をしておいつ。ミチ、そう遠くないうちに荒井を出て東美千子になりそりだぜ。それにな、親子の確執なんて離れてしまえば、意外と上手く冷静に対処できるもんだ」

「……」

いつものように横暴で勝手な言い草だつたが、慰められているんだなど感じることはできた。

どうやら今隣にいるのは鬼神・修羅ではなく、出会つたころの優しい雄臣らしい。そつと私の肩を抱き寄せ、子供をあやす様にポンポンと叩く手も、純粹に暖かかった。

まるで奇跡が起きたようだ。今この瞬間、雄臣はだんだん似てる多恵子小母さんの面影が完全に消え、健人小父さんと同じ優しさが溢れているのがわかつた。

怪我をさせられ、酷いことを言われ、疲れ切つて壊れたハートが

温泉につかっただよつに癒されていく。

今日は本当になんていう日だろう。

好きな人に階段から落とされ、滅多に優しさを挙めない人から慰めてくれるなんて。明日は雪が降るんじゃないだろうか。

あれ？

私、今……なんて？

「だから、アイツらだけはやめておくんだ」

雄臣の声が急に強張り肩を掴む力が籠ったことに我に返り、今考えていた疑問が消えてしまった。顔をあげると、すぐ目の前まで迫つているグレーの瞳と目が合つた。さっきまでの優しさは消え失せ、冷たい……というより真剣な眼差し。

「あのチリチリ頭は別にいいとして、俺としたことが……もう一人伏兵が潜んでいたとはな。思つてもみないダークホースに正直焦つたぜ。けどな、ミチ。冗談は抜きにして『アイツら』だけはダメだ。いいな？ これ以上関わるんじゃない。今なら大丈夫、まだ間に合

う。十分引き返せる。いいか、アイツらはショボい机どころか、天河の川よりもはるか遠い場所にいるんだ。一旦渡り始めたらたどり着くまでかなり遠い。いや、途中でのたれ死ぬか、たとえ辿り着いてもその頃には身も心もボロボロだ

雄臣の顔が強張っている。

そんなに怖い顔をするほど、一体何がダメなのだろう。何でボロボロになるのだろう。

なんで？ 何がダメなの？ なんで伏見さんと同じこといつの？

「……ミチも本当は気づいているんじゃないのか」

俺がダメだというその理由を。

私たちを乗せたタクシーは夜道を静かに走り抜け、大野小学区から山野小学区へさしかかった。

花火はすでに終わり、夜空には風が運んできた雨雲が徐々に迫っていた。

星も天の川も澄んだ夜空さえも……全て覆い隠すよつこ。

捻挫がもたらしたもの？

英語英文タイプ部の部室である、多田的教室といつ名の物置き兼空き教室の窓は全開だった。教室に入ってくる風が身体を撫でていくが、全然涼しくない。聞こえてくる運動部の掛け声に霸気が感じられないのは、すでに日が傾いている時間帯にもかかわらず、昼間の熱がグラウンドにこもっているせいであろう。

九月になつても相変わらず続く猛暑。連日夏休みと変わらない茹だるような暑さの中で授業を受けるのは辛いものがあった。それはお昼休みも、部活の時間である放課後も同じである。しかも左足に巻いている包帯が余計に暑さを増殖させているような気がする。

汗が首筋を垂れていった。

それはあくまでも暑さのせいであつて、この状況に緊張しているからではない。私は手元のハンカチで汗をぬぐいながら、何故この教室にいるのだろうと自分自身に問うた。通常ならこの時間はバレーボーイとして練習に勤しんでいる筈であった。それこそ外から聞こえる運動部の掛け声をこつして教室の中で聞いている立場ではない。

「……ところが、本口付で荒井美千子さんが我が『英語英文タイプ部』に入部することになりました。では荒井さん、一言お願いします」

ハスキーボイスであるブキミちゃんの紹介によつて読者の方々には疑問が解決しただらう。私も改めて自分の境遇を「ああ、そうだつた」と他人事のように受け取つた。

なんでこんなことになつたんだっけと思いつつ、でも決めたのは自分だよねと突つ込み、そもそもバレーの練習も足を怪我したせいでできないんだつたと自覚した後、ガタンと椅子を引いて左足に重心を掛けないよう立ち上がつた。

目の前に座つている生徒は、全員揃いもそろつてメガネをかけていた。さまざまな種類のメガネをキラリと光らせている眞面目な部員達の視線が私に集中する。これが結構迫力があるのだが……ここは引きつりスマイルを全面に押し出しつつ、二口やかに挨拶することに徹した。

「あ、荒井美千子と申します。」この度は部長でありクラスメートでもある伏見かおりさんと、担当顧問である梨本先生、及び東先輩の推薦をいただきまして、この一学期から『英語英文タイプ部』に入部することになりました。部活を掛け持ちという立場上、皆様にもご迷惑を掛けるかと存じますが、どうか卒業までよろしくお願ひします」

一通り挨拶を済ませ頭を下げる、疎らな拍手が返ってきた。それも仕方がなかろう。なんせ部員は私やブキミちゃんを含め、一年生は三人、一年生は一人の全部で五人しかいないからだ。夏休み前にはもっと部員の数が多かつたはずだが……例の幼馴染が引退した途端、この部活本来の姿に戻つたらしい。

「ありがとうございます、荒井さん。改めて『英語英文タイプ部』へようこそ! 皆様もご存じの通り、荒井さんは引退した東先輩のお知り合いとして、すでに英検3級をお持ちの人よ。皆様の英語向上意欲を刺激し、また高めて下さると私も期待をしています。新たな仲間を迎える、この部活動でお互い実りある時間を共有していけるように頑張りましょう!」

ブキミちゃんの淡々としつつもヤル気の満ち溢れた言葉と気合の入った不気味スマイルに、再び部員の拍手が返ってきた。私はいまだに引きつり笑いを顔に張り付けていたが、心中では盛大にため息を吐いた。

* * *

「本当に助かったわ、荒井さん。東先輩も引退してしまったでしょう? 幽霊部員は出てくるし、私を含め部員も覇気がなくなつてしまつて困つていたの。やはり英語は実践、会話がものをいいますものね? それにこうして英語に興味を持ち、しかも結果を残す部員がいるのといいのとでは、クラブ活動の気合も違つというものだわ」

私の歩調に合わせながら横で歩いているブキリちゃんは、相変わらずのハスキーボイスを人気の少ない廊下に響き渡らせていた。その声は水を得た魚のように自信に満ち溢れている。私は頭の片隅で、私一人入つたところでそんなに変るもんかいなという気持ちで「はあ」と生返事を返した。彼女のオーラに圧倒されつつも、そう言ってくれるのは純粋に有難いとも思った。褒められて嬉しくない人はいないだろ? しかし相手は一年の時に一緒に^{ツルちゃん}片岡君に引けを取らないくらい学年でも1、2を争う才女だ。例えそれが下心アリアリというのが見え見えでも。

「荒井さんの参加できる活動田^たが木曜日だけというのは非常に残念ですわ! 気が向きましたら、是非とも火曜も参加してください。タイプライターも使い放題ですので、今から慣れておいたほうがよろしいんじやなくて? それとも普段からワープロなどでローマ字入力に慣れているのかしら?」

「……え、え? ローマ字? ワープロ? な、なんで?」

「あら。だつてゆくゆくは海外に留学なるおつもりなんでしょう? 留学した先でのレポート等提出物は、ほとんどタイプで打つことになりますもの。直筆などありえませんわ。直筆など読みにくくと敬遠する教授もいらっしゃるそつよ」

「ええ？！そ、そうなのっ？……って、それより……な、なんで留学のこと……」

「オツホホホ……いやだわ、私ったら！ 安西小母さまに内緒にしておいてねと言わたことをうつかりしゃべつてしまつて！ でも、荒井さんの顔を見ればダダ漏れ……ツホン。荒井さんの英語に対するヤル気を見ればわかるわ」

「ヤル気……ですか……」

「なんでも小さい頃から英語に興味があありとか？ 東先輩のお父様の背中を追いかけて、将来は外資系のお仕事をご希望されるの？」

「……って、ななんでえつ？！」

「私も東先輩のお父様を写真で拝見しましたが、とっても素敵な方でしたわ！ 荒井さんの初恋って聞いた時には大いに頷いてしまいました。あんな素敵なお父様を見れば、他はカス同然というもの。もちろん東先輩を除いてですが。ああ、ワタクシ、荒井さんの初恋が実ることを切に願つているわ！」

「……実る……って、ななん何を言つてるんスか？！」

「あら？ だつて東先輩のお父様は、お母様がお亡くなりになつた後もいまだ独身なのでしょう？ 東先輩自らこうおつしゃつてましたわ、『父さんは一生結婚はしないんじゃないかな、母さん一筋だつたと思うしね。俺みたいな大きい息子もいることだし、なにかとんでもない間違いがあつたらマズイだろう？』まあ、そうやつてノコノ『東家に乗り込んでくる雌豚を切り裂くのもまた一興』……んつ、ううんつ！ オホホホ！ エーと、ともかく現在恋人の影はないとのことです。ならば荒井さんにも十分後釜……いえ、入り込む余地があるではありませんか！ 私達はあと2年も経てば16歳、法律的にも結婚できる年なのです。それこそ18歳にでもなれば20歳以上の年の差なんてそう大した問題ではありません。現に私のお爺様にも、30歳～40歳年下の愛人がごろごろおりますから。なんでも壮年の殿方は若い方がより好みらしいですわ、それも年を重ねるとその傾向が強いそうよ」

「さ、さいですか……」

「そうなれば……荒井さんは姉妹ではなくて、『本当の親子』になってしましますわねえ。この先のワタクシの未来、バラ色のような予感がするわっ！……フフフッ、オホホホ！…」

ブキミちゃんの高らかな笑いが廊下に響いた。

私は意外と好奇心旺盛だったのか、それとも単なる怖いモノ好きだったのか……雄臣とブキミちゃん、健人小父さんと私、仲良く手を取り合って微笑んでいる壮大な夢を試みた。四人が和氣あいあいとそれぞれの子供を抱えている的なショットを思い浮かべたところで、雄臣とは違う意味での未知との遭遇を体験するところであった。それこそ強烈な弾丸ショットを受け、体中がハチの巣のようになつた感覺に心臓が軽く悲鳴を上げそうになつた荒井美千子。慌てて壮大と言うより壮絶な夢から頭を振つて正気の世界に戻る。が、目の前に引かれた自分の人生のレールがバラ色ではなくバラバラに崩れ、電車わだしが脱線の被害にあう幻の残像が消えない。

(こ、こわっ！ いかんいかん、正気に戻れ、私！)

大体「東小父さんとムフフ！」なんてありえないし、そんな恐れ多いこと考えるだけで罰が当りそうだ。……というか、東小父さんの方から即「ごめんなさい」と断られるだろう。恐らく雄臣だってそんなこと許さないはず。それこそ恵子小母さんに化けて出てくるよう、悪魔に魂を売り渡すかもしれない。ていうか、すでに悪魔だつた。それより鬼神ではなく死神となつて、大鎌振りあげて自ら出動すること間違いないだろう。

ただでさえ東小父さんと恋人らしき人達の仲を邪魔してきた雄臣の姿が、鮮明且つリアルに思い浮かべられるのに……その修羅場の中を自ら好んで飛び込むバカが何処にいるというのだ。恐ろしや恐ろしや。

(東小父さんと二人きりで会つたその瞬間、確実に消されるね……つて、おいおい。何考えてるんだ私！ 自分を追い詰めてどうする

よつ？！）

私はブキミちゃん高笑いに對して弱弱しく「ハハハ」と笑いながら、見えない作者、いや、神様に向かつて「私の人生、搔き乱すな！」と苦情を申し立てた。去年の暮れから仏壇のお供え物やお線香、神棚の神や定期的な掃除を欠かしていないというのに……いよいよ墓参りでもして先祖の供養をしなければならないところまで切羽詰まってきたらしい。

（……でも、荒井家の方の墓参りには行きたくないなあ。近いけど、あそこでの親戚とは折り合いが悪いし……。母さんの方の「渡部」はどうだろ？……って言つてもずっと御無沙汰だし遠いし、一人じや無理だよね？ 第一、父さんがあんまりいい顔しないから行きにくいしな）

完全に対策の糸口が途切れた事実に、心中でハアと吐息をついた。ついでに荒井家の親戚の顔を筆頭に、「あんまりいい顔しない父さん」の顔も思い出してしまった。複雑そうな、不機嫌そうな、怒っているような……ともかく、感じのいい顔ではないことは確かだ。私が言つのもなんだけど、普段優しく顔が整っているだけにそのギャップは激しい。いつからそんな顔を見せるようになったのはわからないが、少なくとも小さい時は普通に可愛がられていた、と思う。私は俯いて怪我をして引きずっている左足をそつと見つめた。

捻挫がもたらしたもの？

あの祭りの日、雄臣と一緒にタクシーで家に帰ると、両親が玄関で私達の帰りを待っていた。どうやら雄臣とブキミちゃんが家に連絡を入れてくれたらしい。雄臣に抱えられるように帰宅した私を見ると、母は安堵の表情を浮かべた。一方父は、「オマエは一体何やってるんだ」という呆れた言葉と少し不機嫌な表情で出迎えた。頭の中で思い描いていた通りの父の態度に一瞬萎縮した後、すぐにモヤモヤした感情が湧きあがつたが……それはこの年頃の子供がいだく、親の言うことが鬱陶しいという感情だったのかもしれない。父に対し「好きでこいつたんじゃない」と抗議しようとした途端、雄臣は私の一步前に出て「いいから任せとけ」と田配せをした。

『俺がついていながら申し訳ありません』

少しムツとした私の代わりに雄臣は両親に頭を下げ、怪我の診断を簡単に説明してくれた。怪我をした理由は、「下駄で裏山を登った為、踏み外して足を捻った」ということになっていた。納得いかなかつたが、真実が洩れたらややこしいことになるかもしれないとい私は仕方なく黙認した。もどかしい自分の立場にイライラして無言を決め込む私に父は何も言わず、逆にしつかりとした態度の雄臣に向かつて笑みを浮かべてお礼を言った。

『すまないな、雄臣。娘が迷惑かけてしまって、助かったよ。それとそんなに気にしないでくれ、な?』

『……いえ、一緒にいると約束したのに、離れたてしまった俺の責

任です。ミチに何かありましたら、一生面倒見る覚悟です』

『いやいや、そんな大げさに考えなくても！ それに美千子に君はもつたといないよ。……でも、さすが雄臣だな。責任感強いところは

君の母さんにそつくりだ。その姿を彼女が生きているときに見れたのなきつと喜んだろうに……』

『……そんな。天国で見ている母さんに恥ずかしくない男になるよう、努力はしているつもりですが』

『そうか。そうだよな。大丈夫、雄臣はひやんとやつてているよ、健人と多恵子の自慢の息子だもんな』

私は雄臣と父の会話をまるで他人事のように聞いていた。いや、聞くようになっていた。

ただでさえ疲労困憊な状態なのに……こんな余裕のない時に多恵子小母さんのことや雄臣を褒め称える言葉を聞くのは正直キツかったのだ。しかし心の中である程度予想していたことだったので、さほどショックも受けずに済んだのが唯一の救いだろう。それとも、雄臣の滅多に見せないやさしさと私の心情を理解してくれたという事実に安心したせいなのだろうか。

『あなた……もうやるやる。美千子も疲れているだらうし。雄君、ここまでどうもありがとうございました。今から送つて行くわ』

母が間に入つてくれたおかげで、私は苦痛の時間から免れた。雄臣と父に部屋まで連れて行つてもらい、母が雄臣を車で送りに一人が部屋を出た後、部屋に残った父親は無言を通す私に、後日雄臣と伏見さんに重々お礼を言つたと云つて居間へ降りて行つてしまつた。

部屋を出ていく父の後ろ姿を見ながら、タクシーの中で雄臣が言った言葉が何度も自分で繰り返されていた。

時間が経てば本当に心の中で折り合いをつけられるようになるの
であろうか、と。

押しつぶされそうな虚しさを感じる」とはなくなるのだろうか、
と。

そして、

『大丈夫か、心配したんだぞ』

その一言だけでもいいから欲しいと思つ私は贅沢なんだろうか、
と。

* * *

「……さん、荒井さんつ？！」

すぐ傍で名前を呼ばれ身体を揺すられた私は、そこで初めて自分が廊下につつ立つたまま、左足を凝視していたことに気付いた。ハツと顔を上げれば、ブキミちゃんが心配そうな顔をして私の顔を覗いている。どうやら私の意識は何処かへ飛んでいたようだ。ここが学校の廊下で新学期が始まった数日後の放課後だということが、ブキミちゃんと田が合つた途端瞬時に頭の中に刷り込まれた。

「荒井さん、どうかしました？……もしかして、足、まだ痛むの
……？」

不気味なほど低いハスキーボイスに私は慌てて顔を振つて、「だ、大丈夫！　ちょっと、考えことを……あ、あんまり暑いから」そう言つて愛想笑いを浮かべた。前を見るといつの間にか廊下の突き当たりにある出口に差し掛かっていた。この出口は2年1組があるボックス舍に向かう渡り廊下に続いており、外から眩しい光が差しこん

でいる。

ブキリちゃんは私の顔をジッと見詰めた後、「やつ」と一言残して再び歩き始めた。私も彼女の後を追つようとしたが、すり歩き出すが、不規則な足音がやけに自分の耳に付いた。

「……足の具合、順調に回復して良かったですね。捻挫は特に安静に限るわ。保体の時間はもちろんですが、今月一杯はバレー部も見学なのでしょう?」

「あ……それなんだけど、実は私、バレー部のマネージャーをすることになつ」

「まあ! そりですの? ……フフフ、作戦成功……」

「え? 作戦?」

「いえ、なんでもないわ。単なる独り言です。荒井さん、マネージャーをやるのですか!」

「う、うん。ちょうど今してるので、この際いい機会だからどうつかつて顧問の加瀬先生から提案されて」

「ホホホ! それなら火曜も『英語英文タイプ部』に出て頂けるわね!」

「あ、あの、それは、まだひとつわからぬんだ。ほら、貴……
笛谷さんと交代でマネージャーやるんだけど、それがどの曜日になるか決まってなくて」

「は? 交代でマネージャー? あら、笛谷さんもマネージャーをやるのですか?」

「……笛谷さん、色々と事情があるみたいで、毎日部活に参加するのは、ちょっと……」

「……なるほど。そりでしたわね。笛谷さんのお母様、お身体の具合がよろこべないんですね」

「……」

ブキリちゃんの恐るじへ生真面目で落ち着いた声色に、私は無言

で渡り廊下から見えるグラウンドに視線を向け、バレー部のホールがある方角を田で追つた。

* * *

お祭りの翌日、部活が無い日曜日だったので和子ちゃん達は早速見舞いに来てくれた。夜に降った雨は上がり、湿氣と熱さでムンムンと熱い日だった。

『……どうしてこんなことになったの?』

和子ちゃんは私の姿を見ると酷く心配した様子で聞いてきたが、結局私は本当のことと言えなかつた。雄臣が両親に話した通り、

『星野君から和子ちゃん達が神社の裏山の頂上にいるらしいと聞いたらの下駄である神社の裏山を登つたら、鼻緒が切れた拍子に踏み外し、足を挫いた』

……といつこにしたのだ。実はこの時点で貴子にも本当のことは伝えておらず、結局真実を伝えたのは夏休みが明けてからだつた。別に貴子に言いたくなかった訳ではない。むしろ話を聞いてもらいたいくらいだつた。しかし一晩中眠らないで様々なことを考えた結果、じつは軽々しく話さないほうがいいんじゃないだろうかという結論に達した。なんせ内容が暴力沙汰だ。万が一どこからか漏れて、伴丈一朗が言つたように尾島の所属するバスケ部やサッカーチームが何らかの処分を受けたら、チイちゃんが悲しむしどうし、原口美恵や成田耀子にバレたら何されるかわかつたもんじゃない。それにブキミちゃんが言つていた。シニアのグラウンドの件をどうこうするという物騒なことを。もしそんなことになつたら、私一人ではとても責任を負いきれない。あんなに星野君が野球を頑張つて

いるのに（多分）、甲子園・プロ野球の夢を取り上げてしまつなどできなかつた（おそらく）。

無理矢理引き攣り笑いをしながらみんなに説明する私を見て、一人静かに佇み無理に聞いてこようとはしない貴子に、私は心の中で謝りつつ感謝した。おそらくブキイちゃんの言葉で大体の察しがついていたのだろう。

一方、和子ちゃんや幸子女史は、私の説明に眉根をよせ、なにか聞きだしたそうにしていた。

『…………ねえミツちゃん、本当になにもなかつたよね？…………ていうか、その足、尾島あのバカのせいで怪我したんじや、ないよね？』

『つー！…………え、え、え、なななんんで、おおお尾島つ？』

『…………いや、あのね？ 尾島あのサル、誰かと喧嘩したかもしれないんだよね。もちろんミツちゃんじゃないとは思うけど……もしかして、伴丈一郎つて奴と一戦交えたかも？』

『は、はあ？ ばばば、伴丈一郎？！』

『そうそう！ 実はあの河田中のワルが花火スポットにいてさあ！ ミチも聞いたことあるでしょ？ 伴丈一郎！ なんか髪の毛が茶色の変なチリチリでさあ、雰囲気がちょっとヤバイの。ちょうどミチが山を登つっている時だと思うんだよね、坊主一人従えていた伴丈一郎や尾島がああ、神社の方へ下りて行つたの。会わなかつた？』

『えええつ？！』

思いつきり狼狽える私に、和子ちゃんと幸子女史は「だつて……」と顔を見合し、浮かない顔をした。彼女達の後ろにいたチイちゃんは息を飲むように私を見ていた。さらに後ろにいた貴子は特に口を挟まなかつたが、伴丈一郎の名前が出た途端、横を向いて「チツ」と舌打ちをして親指を噛みながらブツブツなにか言つていた。その横顔は険しく物騒な悪態を吐いていたような気がしたが、私は見て見ぬふりをした。というより、焦つていてそれどころではなかつた。

『……あのさ。尾島が山を下りて私たちのところに戻ってきた時、すんごい形相だったんだよね。頬に殴られた跡というか、口元が赤かったの。何かあつたのかって諏訪や後藤君が聞いてもずっとダメリだしさ。そのうち「うるせえ！」ってすごい剣幕で怒鳴つてまた山を下りちゃうんだもん。一緒に来たあの星野君も怒った様子で何も言わないし、小関は慌てた様子でまた尾島を追いかけちゃうし、訳わかんないよ！ それに……花火スポットで伴丈一朗達と鉢合わせしちゃった時さあ、尾島、ちょっとヤバイ雰囲気だったんだよね？ イラつとしちゃってさ。ほら、あの伴丈一朗って、裏番と仲悪いつて噂でしょ？』

誰が聞いているといつわけではないのだが、真剣な顔で声を潜める幸子女史の話に、私は震えを抑える為ベッドの上でタオルケットをギュッと握った。

捻挫がもたらしたもの？

和子ちゃんや幸子女史の話によると、和子ちゃんと加瀬さんはVIP用テントから脱出した後、チイちゃん達を交えた尾島軍団と夜店で遭遇し、小関明日香に誘われて結局合流することになったそうだ。テントに残してきた私には悪いと思つたらしいが、後で迎えにこようと思つて尾島達の後にそのままついていくことになった。

大人数で神社の裏山を登り、例の花火スポットに着くとそこには……なにやら雰囲気が悪い先客がいた。伴丈一郎達である。噂だけでも実物を見たことない和子ちゃんやチイちゃん達が「誰だろ?」とお互い顔を見合わせていると、原口美恵や奥住さんが小声で「……伴丈一郎……」と呟いた。その途端大野小以外の生徒達に驚きという名の衝撃が走った。それも当然だろう。前にも話したように、伴丈一郎はこの辺りで大変有名な人物だったからだ。それがどうしたことか。小関明日香はそんなワルを目の前にも怯む様子を見せることなく、物騒な連中に気軽に声を掛けたらしい。

『あれえ？ 丈一郎じゃん！ こんなところで何やってんの？』

河田中のスケコマシこと伴丈一郎に堂々と近付いて下の名前で呼ぶ、小関明日香。

他の女子連中は「クンと息を飲み少し緊張した面持ちでそれを見守っていると、伴丈一郎は尾島率いる集団を一瞬目を細めて一瞥したが、すぐにへラへラした笑いを口元に浮かべた。

『……おやおや。山野中の小関明日香サンじゃあねえですか。なに？ みなさん団体で花火鑑賞なの？ 金魚のフンみたいにゾロゾロゾロゾロ……『苦労なことですなあ！』

『なーに言つてんだか。男三人で寂しく花火観賞だからつて僻まな

いでお

『バカ言え、んな訳ねえだろ。……ああ、なるほど！ 明日香チャンにはオイラ達がやつている』の神聖な儀式がなんだかわからんねえんですね？』

『あのね、わかるわけないでしょ！』

『あらま。しうがねえなあ、いいか、聞いて驚くなよ？ オイラ達はね、宇宙人とコンタクトをとるという偉大な事業をこの裏山から仕掛けたわけですよ！ 手始めにあの美しい月に住んでいるという、かぐや姫をやつつけようかとかと思いましてね？ こうして祈つてるわけナンですよ、ハイ』

『……アホらし。いつそのこと宇宙人に洗脳されて人生やり直せばあ』

『アツハツハ！ かぐや姫のように貢物をくれるオトコがいないからってオイラに当たるなよ。ま、宇宙人との交信はオメエをからかつた冗談だわな。仕方ねエ、どうしても知りたそだから教えてやるか！ 実をいうとオイラはね……この祭りで運命の女神と会えますようにって満天の星空に祈つていた訳よ！ なんでも女子学生のバイブルである「マイバースディ」という占い雑誌によれば？ オイラはこの夏に運命的な出会いがあるといつありがたい掲示が出てるらしいんだなあ。どつかで見なかつた？ オイラのボインな女神ちゃん！』

『アンタほんとムカつくよね。知るわけないでしょ、そんなこと…』

『あらら、冷たい。ま、明日香チャンだけは絶対ありえねえな。だつて……いやホント相変わらず悲しいくらい貧乳ですなあ……』

『だつ、誰が貧乳よつ！ 見たことないくせに失礼な奴ね！』

『……あのねえ。君だけには言われたくないのよね？ 失礼なのはお互い様でしょーが。オイラの神聖な願いと祈りを鼻で笑いやがつて、よくもまあそこまで言えたもんだ！ まったく……その貧乳、いい加減なんとかしたほうがいいんでないの？ 誰も揉む奴がいなけりや、是非幼馴染にでも身内にでも揉んでもらつて今から大きく

してもらいたいなさいよ！ な、啓介チャン！ ああ、けど揉んでもらつたからって大きくなるとは限らねえけどなつ！』

ギャッハツハツと笑う伴丈一朗に小関明日香は「うつせこのよ、髪形も頭もおかしな奴に言われたかないわ！」と怒鳴り返し、その身内である尾島に「ちょっと、なんとか言つてやつてよ！』と応援を頼んだ。しかし当の尾島や諏訪君、後藤君はムスッと黙つたまま「そんな奴バカほつとけ」とチリチリを無視してその場にしゃがみこんで持参した食べ物やジュースを飲みだしたのだ。伴丈一朗はクククと笑い、特に気を悪くする様子もなく……意外とあつせりとした様子で尾島に話し掛けた。

『よお、啓介！ 相変わらずいっぱい女連れてんなあ。両手に花で羨ましいこつて！ ここは是非、オイラの女神ちゃんになりそうな女子、一人わけてくんないかな～』

伴丈一朗はチイちゃん達や原口美恵、成田耀子のほうを見てニヤニヤ笑つた。一瞬女子の間に緊張が走り、チリチリから全員視線をそらすのを見て伴丈一朗は、「あんだよ、女子全員無視かよ。冷てえなあ～」と大袈裟なため息を吐いた。それを今まで黙つていた尾島は急にニヤリとした笑いを見せたらしい。フンッと鼻で嗤つて伴丈一郎を見上げた。

『クク、残念だつたなあ。大体女神なんてそんなもんいるわきやないだろ。宇宙人と交信してたほつがよつぽど手つ取り早いんじやねえのあ』

『……あらあ～夢がないのね、啓介チャンは。心優しく男を包み込むボインな女神を求めるのは男として当然じやないの！ この際百万歩譲つて君の取り巻きで我慢してやるか。山野中にはそういう慎ましやかなボインの女神はいないのかね？ どうなのよ、啓介チャ

ンよ?』

『……つるせえよ…… そんな女、山野中にいるわけねえだろーがつ
ー!』

ギロリと伴丈一朗を睨みあげ不機嫌極まりない声で言つた尾島の失礼なセリフは、女性陣の心に吹雪ブリザードを吹かせた。が、自らその女神だと伴丈一朗の前で立候補する勇氣もなかつたので、渋々押し黙まる。

『大体な、優しく男を包み込む慎ましやかなボインで心の中が駄々漏れの地味な女を、誰がテメエなんかに紹介するかつてんだよつ！ アイツはな、オレのつ！ ……あ、いや……オレ、オレ……おへ！ やつぱオレンジジュースは最高だよな……』

『……はあ？ 何言つてんの、啓介チャンは。もともと悪いとは思つてたけど、よけい頭おかしくなつたんでないの？ それにさあ、オイラそこまで言つてねえんだけど?』

『つうつうせつ！ そっちこそ、悪いのはその変な頭と顔だけにしろつづーの！ テメエはさつさと夜店にでも行つて女神でもメガネでもナンパしとけつ、メンドくせえつ！』

『……ほお。なぐんか引っかかるけど、ま、いつか！ ともかくどつかにそんな女いたらまわしてくれ、な？ それより龍太郎と貴子はどうしたよ？ 一幸もいねえじやん?』

伴丈一朗は尾島の睨みとふて腐れた態度を真正面から受け止めつつ含み笑いをしながら見下ろしたが、尾島はふいと視線を逸らし「知らね」と素っ気なく答えただけで、口を噤んだままだった。二人に漂う微妙な雰囲氣に、ハラハラしながら見守るその他大勢。

『そりや、残念。じゃあここから退散するかあ。……確かにここにはオイラの女神はいなさそうだし？ しょうがね、夜店で物色する

しかねえなつ！』

伴丈一朗は女子のみなさんを舐めるように見た後、そう捨て台詞を吐いてギャハハと笑った。その後クルリと尾島に背を向け、取り巻きの坊主頭を連れて山を下りていったのだった。

* * *

『……とこつわけなのよー』

いつのまにか私が寝そべってるベッドに座り込みながら、興奮した面持ちで詳細を話していた幸子女史。私は「そ、そudadったんだあー」と素知らぬ振りをして、さも大ニュースを聞いたかのように驚いた表情を作った。

『そうなのよ！ で、その後尾島がさ、なんかマズイだのヤバイだのブツブツいいながら暫く考え込んじゃってさ。そうかと思えば急に立ち上がり、大便行ってくるなんてデリカシーのない言葉吐きながら下りちゃってさー。そんで戻ってきたら口元が赤くなつていたわけ。だからてつきりあの伴丈一朗と一緒に着あつたのかと思ったのよね』

『……へ、へえー。ででもね？ いくらなんでも……ねえ？』
『そうだねえ。裏番じゃあるまいし、まさかねえ？ それじゃあどつかで転んだんかなあ。ぶつ、カツコわる！ あ、それよりもさ、あのチリチリ頭の伴丈一朗！ まったく失礼極まりないつたら……尾島もあの裏番のお兄さんも軽いし失礼な奴とは思っていたけどお、あそこまで酷いのは見たことないわ！ ……つて、なんかゴメン、チイちゃん……』

伴丈一朗氏の軽さを極めた数々の行動に怒れるあまり余計なこと

を色々口走った幸子女史は、慌ててチイちゃんに謝った。チイちゃんは「いいよいよ」と顔の前で手を振りながら可愛く否定していが、急に心配そうな顔をして私の方を見た。

『……じゃあ、ミツちゃんは尾島くん達とは会わなかつたんだね……？』

クリクリの可愛らしい瞳を潤ませながら念を押すチイちゃんに私は音と風がなるほど頷いた。真実を話し、こんな可愛い小動物を泣かすなど、いつたい誰ができるよ!』

『うひうひうひ！ 会わなかつた！ 全力で会つてません！ ……わわ私、登り始めたところで怪我したからつ？ ははは恥ずかしいんだけど、泣いちゃうくらいすごく痛くて、すすすすぐ引き返して雄兄さんと伏見さんと病院に行つたし？！ そ、そつ！ 伏見さんに聞けばわかるよつ！』

『……あ～伏見さんかあ。でも話すのは遠慮したいなあ。ねえ、チイちゃん？ そつかあ、そうだよねえ。いくらなんでもミチの足の怪我と尾島の口元の怪我、全然接点がなさそうだもんねえ？ 大体ミチと尾島が取つ組み合いの喧嘩なんてのもありえないしね。それにそんなところ東先輩がみたら絶対放つて置かないし？ ……でもビックリしたんだよ！ 花火が終わつて神社に降りたら、貴子がミチは病院に行つたなんていうんだもん。ま、伏見さんと一緒に病院はちょっと遠慮したいけど、東先輩に支えられて行つたのは羨ましいなあ！ ね？ 和子？』

急に話を振られた和子ちゃんは、私の怪我の過程云々よりも、自分がテントでしでかしたことと思い出したらしい。雄臣の目の前で殺人バイク並みの力量を披露してしまつたことに対しても激しく落ち込み始めた。慌てて慰める幸子女史。そのおかげで話は違う方向

へ行つたことに私は心の底からホッとして、話の間中疼いていた足の痛みも和らいだ気がした。

捻挫がもたらしたもの？

ブキミちゃんが私の腕をとつて段差のある部分の歩行を手伝ってくれた。

さつきまでボンヤリ眺めていたバー部のコートはプレハブの用具室で遮られ、自分たちの教室があるボロイ校舎が目の前に見えた。

「それにしてもマネージャーの件、ワタクシも岩瀬先生と同じ意見です。荒井さんにあつているような気がしますわ！ 荒井さんお優しいから、選手として闘争心剥き出しで試合に臨むつて感じじやないもの。これこそ怪我の功名といつもの」

「……そう、かな？」

「そうです！ やはり、顧問の梨本先生にお願いしてよかつたわ。荒井さんが英検三級を取つたと聞いた時からずっと我が『英語英文タイプ部』へ引きずり込もうと……勧誘しようと温めてまいりました。ワタクシと東先輩が何度も頭を下げて、梨本先生から岩瀬先生に裏から根回ししてもらひよう……頼んでもらひようお願いしていたのよ？ 荒井さんが部活を掛け持ちできるようマネージャーに指名しろ……いえ、掛け持ちできる許可もスムーズに下りましたし、よかったですわね。オホホホ！」

「……」

（なるほど、ね……そういうわけか）

夏休み明けの始業式の日、私がバー部顧問の岩瀬先生にいきなり呼び出されてマネージャーに抜擢された理由がわかつた。どうやら「足を怪我して暫く動けないから」だけではないらしい。それしてもよく梨本リボータ先生がそんな面倒なことを受けたなと思つてしまつた。まあ、妖怪人間たちから集中攻撃されればひとたまりもないだろうが。

(マネージャーか……)

私は引退した3年のマネージャーがやつていた仕事に思いを巡らせた。後輩に支持しながら部活の準備を整え、救急箱やテープelingの補充、顧問に練習メニューの確認、パートナーがないところの穴埋め……ようするに都合の良い雑用兼パシリだ。そういうばこうして考えてみると、三年の元マネージャーや一年の部長の原口が私をこき使つてやらせていたことと変わりないことが今更ながらに判明した。

「それにしても、 笹谷さんもマネージャーですか。 てっきりバレーボルのレギュラーになるかと思つてたわ

「うん。 そつなんだよね」

もちろん顧問を含め、私も部員もそう思つていたが、マネージャーを希望したのは貴子のほうだった。それは言わずと知れた家庭の事情の為である。お姉さんが勉学のために家を出でている今、平日は貴子とお父さんがお母さんのお世話をしていた。さすがにお父さんは仕事があるので、ほぼ貴子がその役割を担つてているといつても過言ではない。本当は部活を退部することも考えたらしいのだが、それを岩瀬が反対した。貴子はセッターとしての素質があり、退部させるのは惜しいほどの逸材だつたのだ。しかしその貴子は厳しい事情を抱えている身。貴子を手放したくない岩瀬は泣く泣く彼女の希望を受け入れ、マネージャーとして残すこととしたのだった。

『 笹谷、 部活をやめるは簡単だ。 だけどここまで來たんだ、 引退まで続けてみないか? 每日参加するのは難しいかもしれないから出来るときだけで構わない! マネージャーとしてでもいいから参加してくれ、 な? もちろん他にもマネージャーを考えてる奴がいるから、 気軽に構えてくれればいい。 それに部活に籍を置けば内申書の点数もいいだろ?』

そういう訳で貴子はバー部を退部することなく、在籍することになった。

一方岩瀬に呼び出された私は、熱心に貴子を留める情熱の半分以下の口調でマネージャーを宣告された。

『荒井怪我してるし、しばらく動けないだろ？　いい機会だから、笹谷と一緒にマネージャーをやってくれ。なに、今まで通りにやつてくれればいいから。それに、英語英文タイプ部からも勧誘受けてるそうだな。マネージャーならなんとか掛け持ちできるだろ？是非入部してこい！　それに聞いたぞ、東と梨本先生から。英検三級受かつたんだってな？　すごいじゃないか！　その能力、生かしてほうがお前のためだぞ？』

『は、はあ……』

なんだかこの時点で私の『英語英文タイプ部』への入部は既に決まっていたようだ。

どう見ても貴子の都合に合わせる形で、たまたま私が怪我をしていたからちょうどよくマネージャーにしちまおう、ラッキー！　…的な雰囲気が漂っていたが、黙つて引き受けた。もともとレギュラーでもなければ、背が高いせにバイクをプロックするのも怖いへタlena部員だったので、戦力にならないことも自覚していたからだ。それに、確かに前々から梨本に会うたび、そして特に怪我をしてからしつこく雄臣に、『英語英文タイプ部』に入部しようと迫っていたのだ。私はこのバー部顧問の一言で、『英語英文タイプ部』に入部することを決めた。

＊＊＊

「危ない、荒井！」

「荒井さん、前！」

男子の声とブキミちゃんの鋭い叫び声に思考がバチンと弾けて体が硬直した。その後、私の前を白黒のボールが横切った。ボールは学校の周囲を囲んでいる金網にガシャーンと派手な音を立ててぶつかり、その反動で私たちが歩いている渡り廊下のほうへ口々転がってくる。転がってきたのはサッカーボール。どうやら田の端に映っているのはサッカー部員らしく、狭い場所でバスの練習をしていたようだ。「あの男」が在籍しているサッカー部のほうへ顔を向けるのが怖かったが、確かに今日はバスケット部の赤黒ジャージを着ていたことを思い出した。直立不動のままギギギと音が鳴るようにボールが飛んできたほうに顔を向けると、私に向かって怒鳴ってきた男子であろう人物がこちらに走ってくるのが見える。

「荒井、大丈夫かつ？！」

走ってきたのは、三年が引退してサッカー部の新キャプテンになつた佐藤伸君だった。水も滴る……ではなく、汗をキラキラさせて相変わらず学年一モテ男の威力を發揮している。その姿に見惚れつつも体が固まつたまま動かない私に代わって、ブキミちゃんがサッカーボールを拾い、佐藤君に投げた。

「佐藤君、危ないですわ。荒井さん、足を怪我をして上手く動けないんですから、気を付けてもらわないと」

「すまねえ、ちょっと強く蹴りすぎちゃってさ！ 荒井、大丈夫だつたか？」

「…………ハイ」

「ごめんな？…………それよりさ、なんで一人してこんなところで……つて、あっ！ もしかして体育祭のサポート委員？！…………あれ？ 今日だつたけか？」

佐藤君は一瞬「ヤベ、オレ忘れてたか?!」といつよの顔をしながら慌てて聞いてきたが、ブキミちゃんは無表情のまま「今日じゃないですか」と言へ、「それは明日です」とも付け加えた。

「それよりも佐藤君、荒井さんは既にサポート委員ではありません足の怪我で辞退し、雌ブ……いえ、立候補した原口さんと交代したのを忘れたの? ね、荒井さん?」

「…………はあ」

不気味なほど低いハスキーボイスだったが、嬉しそうに弾んだ口調で説明するブキミちゃんの意見を肯定するよつこ、私は佐藤君に向かつて曖昧に笑つた。

「あ～そつだつたよな! ……すっかり忘れてた。そつか、そりだよ……原口と尾島だよなあ。……つーかせ、本当にあの一人で大丈夫かよ?」

心配そうに言ひ佐藤君にブキミちゃんは「知りませんわ、そんなこと」とたいして興味もなさそうに淡々と答えた。一人の様子を上の空で見ていた私は、ある名前が出たせいで頬が強張るのがわかつた。

捻挫がもたらしたもの？

「ゲツ、そんなこと言つなよ、伏見！……あ～やつはさあ、最初に決まつた通り、星野と荒井がよかつたんぢやないか？いや、原口と尾島が悪いつてわけぢやねえよ？でも相方が原口ぢや尾島の独壇場だろ？なんか滅茶苦茶になんねえかな。それにさあ……最近の尾島、こうピリピリしてゐつづーか、機嫌悪いつづーか、落ち着かないつてゆーか、ちよつと変なんだよ。サッカーの練習のときもそつだけ、バスケんときもすげえ殺氣立つてらしげ？尾島の立てた練習メニューで男バス全員へバツてゲロ吐きだつてよ。違う意味で部員潰しつづーか、アイツの体力いつといどくなつてゐんだろ？」

佐藤君は腕を組みながら頭の上にまでなマークを浮かべたが、ブキニちゃんは「それがどうした」と鼻で嗤つた。

「そんなことどいつもいい」とです、佐藤君。それに尾島君が変なのは昔からで、今に始まつたことではありません。いいぢやないの、仕事をえキッチリとやつてもらえば、それで結構なのでは？」

「けどさ、伏見。そやは言つてもよ」

ブキニちゃんの言葉に佐藤君は顔を曇らせ、私に向かって不安そうに田配せしたが、私は苦笑いを無理矢理張り付けることしかできなかつた。

「佐藤君もこの際彼らに押し付け……いえ、任せてみたらどうですか？通年の体育委員が後藤君と成田さんだから、彼らを焚き付けたら仲良く四人でうまくやつてくれるのではないか？私はそれでも一向に構いません。第一体育祭など興味ないですもの。それに

ワタクシ、生徒会の方の仕事が忙しくて、それどころではないの。

だから佐藤君、頼むわね？」

「おいおい、無責任なこと言うなよ。……まあ、確かに俺一人頑張つても、どうせ尾島の独壇場だらうけじや。……って、ところでサポート委員じゃなければ、荒井と伏見、こんなところで何してるわけ？」

佐藤君が田をパチクリしながら聞いてきた素朴な疑問に、私はなんて答えようか逡巡していたら、ブキミちゃんが「よくぞ聞いてくれました！」というよし顔を輝かせズブイと前に出てきた。

「あら、佐藤君、いい質問ね！ フフフ……荒井さんはね？ 今日付けで『英語英文タイプ部』に入部しましたの！ 今部員の初顔合わせと活動が終わって教室に戻るところでしたのよ？」

ブキミちゃんのさらば弾んだ声に、佐藤君は今度こそ「ええ？！」と驚いた。

「はあっ？ 荒井ってバレーボトやめて、『英語英文タイプ部』に入部したの？！ マジでっ？！」

佐藤君の信じられないというような口調に、私は慌てて「ちちち違う！ 違うって！」と訂正した。その後、簡単にマネージャーの件と『英語英文タイプ部』に入部した経緯を説明すると、佐藤君はへえとボールの上に足を乗せて転がしながらナルホドと頷いた。

「……そつかあ。荒井、女バレのマネージャーと掛け持ちでやるのかあ。『英語英文タイプ部』に入部するなんていうから、やっぱあの『東先輩』っていう人とデキてるのかと思ったぜ！」

「違いますっ！」

私とブキミちゃんは同時に否定したので、佐藤君は「な、なんだよ、仲良くハモッてんな~」と朗らかに笑った。

「まあ、そりやそうだよな。先輩が引退してから入部するんだから、そりやないか。それにしてもさ……オレからしたら考えられないぜ、授業以外で放課後も勉強するなんてよ。しかもオレ、英語まつたくダメだからさあ、ハツキリ言つて拷問だな」

「あら、そんなことありませんわよ？ 勉強も慣れですわ。この際いい機会だから、佐藤君も荒井さんのように掛け持ちでどうです？ いつでも入部歓迎よ」

ブキミちゃんの思つてもみない勧誘に、佐藤君は目を見開き首を振つて「うわ、冗談じゃねえよ！ そんなのぜつてえ無理！」と言ひながら後ずさりした。その焦つている姿がなんだかおかしくて、私は数日ぶりに引きついた愛想笑いではない笑い声をあげた。佐藤君はそんな私に顔を向け、自身も切れ長の目を細めて笑つた。

「……なんだ。荒井、元気じやん

「え？」

私は佐藤君の唐突な言葉に目が点になつた。意味が分からず佐藤君の顔をジッと見詰めれば、佐藤君は目元といつかこめかみを搔きながら、「あ、いや……ちょっと、な」と言葉を濁して私の顔から一旦視線を逸らし、困ったような照れたような何とも言えない微笑みを浮かべた。言おうか言つまいとソワソワした後にこちらを窺うようにそっと顔を向けた。

「いや、あのや……荒井、なんか最近フラフラしてねえか？ ちゃんと食つてる？ 一日中ボーッとしてること多いし、夏休み明けたら

らなんか瘦せてるつていうよりゲッソリして、ふわーっとしてたら正直びっくりしたんだよな。俺の勘違いかなと思ったけど、他の奴らも言つてたから、やっぱ氣のせいじゃないんだと思つてさ。それにその足、捻挫だつけ？ 大丈夫なのか？」

私は佐藤君の言葉に啞然としたまま彼を見つめていたが、捻挫した足のことを聞かれていると半テンポ遅れて理解した後、慌てて頷いた。

「そつか。でも、捻挫は油断せきつちり直しておいたほうがいいぜ？ 結構厄介なんだよ、寒くなるとシクシク痛むことがあるし。俺も昔やつたところ、今でも冬の時期になるとなんとなく痛くてさ。雪降つたりすると特にな」

「…………そう、なの？」

「そうそう甘く見ない方がいい……つて、ヤベ！ 吞気にしゃべつてる場合じゃなかつた！ ジャあオレ行くわ、氣を付けて帰れよー！」

佐藤くんは自分が長話をしていることに気付いたのか早口で捲立て、慌ててサッカーチーム員の方へ走つて行つてしまつた。

私はお礼も言えずに黙つたまま佐藤君の後ろ姿を見送つていると、隣のブキミちゃんが「…………ほんと、佐藤君つておやさしいですね」と呟いた。私は黙つて頷きながら、心の中に優しい爽やかな風のようなものが静かに吹き込まれるのを感じた。目の奥と頬が徐々に熱くなつていくのがわかる。

（佐藤君、心配してくれたんだ……）

思つてもみなかつた佐藤君の心遣いは、奥底で淀んでいる心と疼く左足の痛みを和らげた気がした。

「彼が女生徒に人氣があるのも頷けるわね。一年の時からクラス内でもすごかつたのよ？ 荒井さん、ご存じでした？」

ブキミちゃんは、私の火照つている顔を見てクスリと笑いながら意味深な目配せをした。私は小さい声で「小学校の時もすごい人気だつたよ……」と俯きながら彼女の言葉を肯定した。

「そうでしたか、小学生の時ですか。……それにしても、荒井さんが羨ましいわ。佐藤君みたいなまともな同級生と一緒に小学校時代を過ごすことができたなんて。例え成績があまりパツとしなくとも、あの素晴らしい性格ですべて許せますわね。むしろ完璧じゃないところが母性本能をくすぐるというところでしょう。……それに比べて、大野小出身の生徒は口クな人物がいなくて。本当、情けないつたら」

ブキミちゃんは低いハスキーボイスで吐き捨てるように言い、サッカー部の練習から目を逸らして歩き始めた。私は彼女の言葉に対して何も答えず、天使の輪が素晴らしいおかげで頭を眺めながら、彼女の後に続いた。

捻挫がもたらしたもの？

佐藤君の言うとおり、怪我をしてから残りの夏休みをベッドの上で過ごしていた私は、ボーッと流された日々を送っていた。暑さのせいで食欲が湧かないのか、はたまた他の理由があるからなのか。

何か食べなきゃと思うのに、食べ物が喉に通らないのだ。身体はフラフラするし、力も入らなくなってきたので、これはマズイと頭の中ではわかっているのだが……身体が言うことをきかなかつた。さすがに学校が始まると少し食欲も戻り、自然とお腹が空いてきたときは自分で笑つてしまつた。人間というのは何をせずとも息をしているだけで腹が減るらしい。当たり前のことだが、妙に実感してしまつた。おかげで佐藤君の指摘通りガクンと体重が落ちこんでしまい、喜んでいいのやら悪いのやら。

それに加えて、毎日雄臣がやつてくるのも気分が盛り下がる原因となつていた。

『俺がもう少し痩せると言つたからダイエットしてるのか？ 嬉しいけどな、無理はやめる。不健康なダイエットは身体によくないんだよ。それにバストが小さくなつたら元も子もないだろがつ！ オレはな、こう部分的に痩せるといつたんだ。たとえば腰！ たとえば背中！ たとえばーの腕！ ようするに胸と腿と尻はそのままキープしつつ、ボンッキュッボンッを田指すんだよ、わかつたな？ !』

『……（この人、完全に欲望丸出しだがや……）』

こんな調子で人の部屋に上り込んでは熱弁する雄臣。

しかも真美子が部活に行つているときに狙つて来るのだから、何か善からぬことを企んでいる確信犯としか思えない。唯一救いな

は、私の部屋にはクーラーがないので、部屋の窓やドアを全開にしなければ十秒も持たない密室完全不可といふことだつた。

『南向き部屋・日差し良好!』

……などといふ優良物件の見本のようなマイルーム万歳。
雄臣に対する気持ちが夏祭りを境に徐々変わってきたとしても、私の奥深い底の闇の部分を知つてゐるのは雄臣ただ一人だけでも、連日こんな調子で人の生活を搔き乱し、静かに過ごすはずの休みを潰されていたんでは、彼に抱いた感謝の気持ちも萎えるつてもんだ。おかげで元気が出るどころか、なけなしの気力と体力を削がれて上の空状態が新学期突入してからも続いてしまつた。

その結果、私の足の怪我といふか行動に不安……いや、心配した担任の青島先生チングタオが、始業式の翌日、私以外に学級委員や通年の体育委員を集めて「体育祭のサポート委員を他の奴に変更しようと思うが、どうだ?」と提案してきたのだ。

そりや当然だらうなと思つたが……想像以上にショックを受けている自分に驚いた。女バレのマネージャーの件もそんなに打撃を受けなかつたというのに。

青島先生からの提案に対し、学級委員のブキミちゃんがなにか言おうと口を開く前に成田耀子はすかさず手を挙げ、「先生! 私から提案があります!」と素早く先手を打つた。

『荒井さんの代わりは、立候補してくれた原口美恵さんにやつてもらうべきではないでしょうか? すでに時間も差し迫つてますし、これから選出するなんてクラスメートにとつても迷惑ですし、時間ももつたないです。やはりここは最初からヤル氣のある人にお願いした方がいいと思います。それに前もつて原口さんに確認とりま

したが、是非引き受けますとのことです！ ね、後藤君？』

成田耀子は同じ体育委員である後藤君に対し、顔を少し傾けてベストポジションをキープしつつ、満面な笑顔で意見を言った。その後ブキミちゃんの方に向かつて不敵な笑みを浮かべ、「文句があるなら受けて立つわよ、このオカツパメガネ！」などという強気なオーラを発した。

しかもその内容は、私が怪我したことで皆に多大な迷惑をかけ、まるで委員の仕事をヤル氣がないみたいな言われよう。この時ばかりはさすがの私も幽体離脱氣味の魂が戻り、イライラといふ名の人間らしい感情が湧いた。生まれたての小鹿のようにフランフランになりながらも、思いつきり成田耀子の頸に向かつてアッパー・カットを捻じ込みたい衝動に駆られたが、そんなことはできるはずもないで大人しく黙るしかなかつた。

(この怪我だつて、好きで捻挫したわけじゃないのに)

声を大にして言えないもどかしさ。しかもその原因である男は隣で明後日の方向を見ながら、生意氣にも不貞腐れている様子。私が不愉快な感情に悶々としている間に、成田耀子の意見を沈黙で受け止めたブキミちゃんは、怖いほど無表情な顔を彼女に向けた。何か言おうとしていた佐藤君を制止し、急に口元をニヤリと歪ませる。

『……そうですね。それでいいんじゃないですか？ 学級委員はサポート委員のそのまた補佐ですもの。体育委員の方々がそれできれば、私は別に構いませんし、お任せします』

『ええ？！ お、おいつ、伏見！』

『いいではないですか、佐藤君。……つて、あらり、いけない。当のサポート委員の方々を差し置いて勝手に進めてしまったわ。やはりここには先にサポート委員に意見を聞かないといけませんわよねえ？ 尾島君はどうですか？ この決定でよろしいのかしら？』

ブキミちゃんは最初に「アンタ達で適当にやつてくれちゃつていから」という二コアンスのセリフを棒読みで言つたが、佐藤君の意見を黙らせた後、さも今氣付いたかのようにわざと意味深な流し目でサポート委員の尾島に話を振つた。声が掛かるまで不機嫌さを隠さず黙り込んでいた尾島は、その時初めてゆつくりとブキミちゃんの方に顔を向けた。それはまるで……。そう、キャンプの時の再現。ズガーンなどという効果音付きの殺人光線と共に、一瞬机を蹴りあげるかごビビるほどの迫力。尾島の方を見ないよう前に前を向いて田の端で彼の行動を追つっていた私にも、その殺氣は気配でわかつた。

『……別に、好きにすればいいんじゃね？　誰でも同じっしょ？』

尾島の低い声が隣から聞こえてきた。

委員など誰でも同じというような、別に私じやなくともいいような言いぐせ。その尾島の吐き捨てる口調にやり場のない憤りを感じる……筈なのに。私はどこかおかしいのだろうか。心のどこかで、いつの間にこんなに低い声を出すようになったのだろうとバカなことを考えてしまつた。私が知つてゐる、声変わりしていない少し高い声じやないことに狼狽えてしまつた。それに、座つている座高もいつのまにか同じくらいで、隣に座つている男の存在が急に大きく感じられた。そんなこと悠長に考えている場合じゃないのに。怒りと焦燥と苛立ちと不安が絡み合ひ、今にも破裂しそうなほど波打つてゐる心臓。それも背中と手にじつとりと汗をかくほどに。

『……ですつて、成田さん。誰でも同じなら原口さんで構わないそうよ、良かつたわねえ。そういうわけで先生、このよつな意見が出ていますが、どうでしょつか？』

ブキミちゃんはこの場にいた全員に息を飲ませるほど目の尾島の眼

光を薄気味悪いスマイルで跳ね返し、その矛先を成田耀子とその様子を黙つてみていた担任に流した。どうやら尾島の意見も聞かず勝手に話を進めていたらしい成田耀子は、慌てた様子で「べ、別に私は……」と口ごもり、担任である青島先生は寄りかかっていた黒板から身体を起こした。

『よし、わかった。反対する者もいないから、それでこゝにすらか。荒井もいいよな?』

青島先生は頭を搔きながら「原口美恵をサポート委員決定する」の顔を言い渡したが、確認の意味なのか。最後の最後で私に話を振った。隣に座っている男を除いて全員の顔が私に集中する。私はこんなわかり切ったこと答えるのも億劫だつた。「どうぞご勝手に」と言つてさつさと教室を出ていったが、そういうわけにはいかない。

喜（成田耀子）怒（尾島啓介）哀（佐藤伸）樂（伏見かおり）、そしてどうでもいいような表情（後藤洋、青島先生）の顔をぐるりと見渡し、この居心地悪い場所から抜け出すよつて、口を開いた。

『……ハイ。申し訳あつません、みなさん、よろしくお願ひします』

私は静かな声で、けれどもハッキリと答えた。
静かに頭を下げながら、意識は怪我をした足首を含め左側に集中していた。

左隣の男が僅かに震え、ジャージのポケットに入れていた両方の拳をグツと握つたのがわかるほどに神経を張り付けていた。

ジャージの中に潜んでいる、見えない尾島のガツツポーズが憎らしかった。

新学期に入つてから、一言も口を利いてない尾島。

再び始まつた、尾島達と会話を交わすことがない日々。

周囲も私と尾島たちの間に微妙に漂う「余所余所しさ」という名の違和感を感じ取り、再び腫れ物に扱うように接するクラスメート。ようするに、一学期の状態に戻つてしまつたのだが……以前と違うのは、立場が逆転したように私のほうがあからさまに尾島達を視界に入れないので無視していた。

今ならまだ大丈夫、間に合ひ。

いつたい何が間に合ひというのか。

わかりそうでかわからぬ、この不可解な感情。けれど、雄臣の言葉を無視できずにいた。尾島の視線を感じるたびに、何度も話し掛けっこよつとする気配を感じるたびに、雄臣の言葉が私を追い立てた。

いつのまにか背中で尾島を拒否していた。

……なのに。

それなのに、私は 。

何故息を蠶めながらも全神経張りつめるよつて元にして尾島の気配を追つてしまつただろう。

無視しているのは自分なに、遠くに感じてしまつのか寂しいと思つてしまつただろう。

心のどこかで、いつもの調子で私に話しかけて欲しいこと願つてしまつただろう。

あの祭りの日からずつとずつと、私は心を持て余している。自分の気持ちが見えず、晴れそうで晴れない霧のような中を彷徨ついた。

山野中体育祭～準備はつらじよ・前編～

「荒井さん。これ、テープ剥がれちゃったんだけじゃ」

ガタガタと建付けの悪い教室の戸を悉々しそうに無理矢理開けた後、まっすぐに私の席まで来た女子が言つた言葉がこれだつた。私はビクッと身体を震わし、書いている学級日誌からそつと顔をあげると、教室に入ってきたクラスメートが見下ろしていた。ニヤニヤしながらテープが剥がれたと苦情を言つたのは、原口美恵の取り巻きの一人。よっぽど機嫌がいいのか、それとも相手が荒井美千子だからおちよくなつているのか。私の前に手に持つた学ランをにゅっと差し出し、剥がれた部分を力強く指した。

「ほり、じー！ なんでこんなに簡単に剥がれるわけえー？」
「……え？」

「練習中に剥がれたみたいよ。尾島、すい文句言つてた」

私はシャーペンを置いてそのテープが剥がれたといつとこりを見ようとしたら、バサッと乱暴に学ランを口誌の上に置かれた。

その学ランの背中の部分には「闘魂」と金色のテープが貼られている。その「闘魂」という文字のテープがところどころ剥がれているようなのだが、どうみても粘着力が弱くて剥がれたものではない。まるで爪を使って無理矢理剥がしたような……たぶん無理矢理剥がしたのだろう。

(ていうか、このクソ暑いのに剥がれるほど学ラン着て練習やるなよ。本番前の仕上げの時にだけ着ろ！)

まあ、そんなことはどうでもいい。問題は、なぜそんな苦情が私のところにやってきたかということだ。だってこの学ランにしっかりとテープを貼りつけたところを、私はこの目でしかと確認した。

貼つた本人が「やつた、できた！」と満面な笑みで宣言し、学ランをこれでもかというほど抱きしめていたのだから間違いない。その時に目の前にいる取り巻き其の一も見ていたはずだ。なんせ取り巻いている主^{あるじ}がやつたものなのだから。

ということは、答えは一つ。完全に嫌がらせである。

私はわからぬよう舌打ちしながら、どう見ても規格外である学ランを眺めた後、取り巻き其の一の顔を見た。地味な荒井美千子がジロッと見たからだろうか。思わず行動に彼女は一瞬「な、なによ」と少し動搖した。

「あ、あの……私、尾島……君の学ラン、担当してないといつか……（つーか、原口が私に触らせなかつたでしょ）」

「は？」

「」、「これ貼つたの、原口……さんだよね？ だつて、尾島君のでしょ？」（アナタも見てたでしょ）

「はあ？！…………じゃあ、何？！ 美恵が悪いってわけえ？…」

「…………あ、いや…………（どう見てもそうでしょ）」

「そういうことじやん！ あのさあ、そんなのどうでもいいから、さつさと直してよ！ 一組の応援団の準備担当、荒井さんでしょ？ 美恵がアンタの代わりにサポート委員やつてあげてるんだから、これぐらいしてもいいんじゃないの？ どうせ体育祭参加しないんだからさあ、暇でしょ！」

「……（口ノヤロ）」

フンと鼻息荒くしながら捲し立てる礼儀も慎みも知らない取り巻き其の一に対して、私は心の中で盛大なため息を吐いた。

随分と勝手な言いぐさである。目の前の女子は原口美恵がサポート委員を「やつてあげてる」とぬかしていたが、こちらから頼んだわけではなく、勝手に成田耀子と口裏合わせたのは原口だ。それに私は暇しているどころか、今は非常に忙しいのだ。なんせメデたく

一学期の席替えで隣の席になつた、同じ口直である佐藤君が応援合戦の練習で出払つてゐるため、学級日誌の彼の「メント欄」の部分に心を込めて代筆してゐるところだつた。それにブキミちゃんの補佐として、通年の体育委員並みにこき使われ……いや、動いている。そのうえ応援合戦に出る人たちの学ランの背中にテープを張つて装飾したり、軍旗などの準備を無理矢理押し付けられ、ほぼサポート委員の仕事を半分請け負つてゐる状態だ。どこをどうしたら暇などと言えるのだろう。

私は怒りを通り越し、諦めの極致になつてゐるのを押し隠くすようには息を飲んだ後、そつと声を掛けた。

「あの……」
「なによー」
「え、えーと、本当にいいのかな？ わ、私が尾島……君の学ラン直しても
「えつ？」

私は今後憂いの無いように、取り巻き其の一に念を押した。間違つても後から「尾島の学ランに勝手に触らないでよ！」と原口から苦情を言われたのではたまつたものではない。幸いにも教室の後方には、各クラスごとに用意する体育祭用の軍旗の作成ため、数人生徒が残つていた。作業をしながらも息を蠶めながらこちらの様子を伺つてゐるのがわかる。彼らは何もせず見て見ぬふりを決めることがわかつていたが、一応私が確認したという承認ぐらいにはなつてくれるだろう。

もう一度尾島の学ランをチラッと見た後、「どうすんの、ホントにいいんでしうね？ 後で文句言つんじゃねえぞ？」と念を押し視線を向けた。そうすると取り巻き其の一は焦つたのか、強気な態度を崩し慌てて、私には関係ないといつぱり明後日の方向を向いた。

「い、いいんじゃないの？！　だって尾島が荒井さんにやらせりつて……言つたから……。と、ともかく、私は持つてきただけだから！　早々に直して、尾島に……ダメ！　美恵に渡してよね！」

取り巻き其の一は言つべきことを言つたと思ったのか、クルツと踵を返して足早に教室を出て行つてしまつた。辺りにシーンとした氣まずい雰囲気だけを残して。

私はやつと喉元まで出かかつていたため息を吐き、日誌の上に乗つてゐる尾島の学ランを手に取つて剥がれていることを一応確認した。テープが貼つてある背中の部分を光にかざし皿を皿のようにして見ると、何度も爪で引っ搔いたのか、いくつもの筋ができるたし、妙にテカつている。

（やはり無理矢理剥がしたな……あの、類人猿め！）

思わずその学ランをビリビリに切り裂き焼却炉の中へ突つ込んで灰と煙にしたいところだが、そんなことは間違つてもうら若き乙女がやることではない。残りの学校生活を登校拒否で過ごすわけにもいかないし。

とりあえず目の前の日誌を完成させようと、邪魔だと言わんばかりに佐藤君の机の上に尾島の学ランを置かせてもらつた。キラッと光つたので何となく目を向けると、学ランの内側がベロッと剥き出しへなつており、『乙杯羅^{オッパイラブ}』の裏ボタンが無駄に存在を主張していた。どうやら無事返却された模様。ここは心を鬼にして生活指導の先生に再びこの裏ボタンを献上し、優等生としての株上げ大作戦の足しにしちまおつかと考えたところで人の気配を感じた。

「荒井……さん？」

弱弱しい声の方に顔を向けると、クラスでも物静かな鈴木さんと田中さんが不安そうな面持ちで立つていた。あんな苦情を堂々と言

われた私よりも、ダメージを受けたような顔をしている。2人の顔を見たら、文句に言わされたことに落ち込むという感情も麻痺してい る自分が悲しくなった。

「……あ、はい？」

「あの……軍旗の絵、完成したんだけど……。あとはマイケル君に『字』を入れてもらうだけで……」

「ほ、ほんと?！」

私がパツと明るい声を出すと、2人は安心したようにぎこちない笑みを浮かべて頷いた。作業していた教室の後方を見たら、残りの軍旗制作係の人たちも立ち上がり出来上がった軍旗を広げて見せてくれた。そこには赤い生地に翼を広げた目の鋭い鷹の絵が描かれていて、素人の私から見てもかなり良い出来栄えだ。私は原口の取り巻きに文句を言われた事など吹っ飛び、立ち上がりて「あ、ありがとう、助かりました！」と鈴木さんや田中さん、そして軍旗を持つているクラスメートに頭を下げた。本当は外国人のお偉いさんよろしく、「いや～助かつたよ！　お疲れお疲れ！」といいながら大袈裟な握手を交わしハグをするが、「Hey、ブラザー、その軍旗NO、出来栄えDOI-YO！　期限に間に合い、ご機嫌SAIKO！」などと韻ライムを効かせながら軽快な音楽に乗つて拳同士をガチンコしつつこの喜びを分かち合いたいかった。しかし、いつものように想像だけで終了。仕上がりを確認するために改めて軍旗を手に取つてみると、いやあ本当、中々の上物である。

「す、す”じ”よ！　これ、軍旗の部門で優勝するんじゃないかな？」

私が素直に絶賛すると、鈴木さんたちは照れたように笑い「そんなことないよ」と謙遜した。まるでスカジャパンの背中に刺繡してあ

るようなインパクトのあるこの鷹の絵に、大胆に書いた習字の字を書き込めば、本気で軍旗の部門での優勝も目じやない気がする。そこまで考えたところで、ふと肝心な……といつか、この教室にいるべき人がいないことに気付いた。

「……そ、そういうば、マイ、いえ、本間君は？ 確か掃除のときはいたよね？」

私がキヨロキヨロと教室を見渡しながら言つと、鈴木さんたちは顔を見合わせ「あ～マイケル君ね」と曖昧な笑いを浮かべた。

「さつきまでいたんだけど、最後の補修をしていたらいつの間にか居なくなっちゃって。でも、ほら。靴下とカバンはあるから、まだ帰つてないよ？ 尾島君に呼ばれたが、多分どつかで寝てるんじゃないかなあ」

「……」

こんな切羽詰つている肝心な時にいない本間君。相変わらず何考えているわからず、自由人で予想を裏切らない彼の行動に顔が歪んだ。まったくあんな男の言いなりになるなんて……最初の頃に欠伸で返した強者ぶりは何処へ行つたのだろう。本間君のくせに「BAD」どころか、最近ますます猿バブルスに押され氣味だ。似てるのはあのパーマがかかった髪の毛だけ、しかもかかり具合が若干弱めというなんとも締まらない始末。素晴らしい踊りと共に「BAD」を歌えなんて言わないから、せめてその半分だけでも頑張つて欲しい。

何はともあれ、軍旗を完全体にするには彼を奪還せねばならなかつた。仕事の終わつた鈴木さん達に残つてもらうのは悪いので先に帰つてもううよう促した後、鼻息荒くさつさと口説を終わらそうと机に向かおうしたら、有難いことに鈴木さんたちが「私達が探してくれよ」と嬉しい提案をしてくれた。

「ほ、ほんと？」

「うん、どうせ暇だし。それに……荒井さんやることあって、大変でしょ？」

鈴木さんたちは心配そうに、学ランと口誌が置いてある私の机の方に目配せした。

「文字の位置やアングルなどは私たちが直接本間君に伝えた方がいいし、最後の仕上げもみたいし、ね？ もしかしたらもうこっちに戻ってきてるかもしないし。……けどあの本間君が字が上手なんて、なんか意外だよね～」

私は鈴木さんたちと一緒に、「そうだよね」と苦笑いをした。

そう、意外や意外にも本間君は書道の段を持つている人で、その道のコンクールの入選常連客なのだ。あの眠気を漂わせた、くせ毛頭のヒヨロヒヨロ小僧にそんな力が隠されていたとは正直驚きだ。

『芸は身を助ける』という言葉を地で生きている男・本間巖太、見た目を見事裏切る14歳。どうせなら是非行動も裏切ってほしい。

寝ていいから、おとなしく教室にいてくれ。

本間君の件は鈴木さんのご厚意に甘えることにし、私はさつさと日誌を書きあげて青島先生に提出するため教室を出た。

山野中体育祭～準備はつらこよ・前編～（後書き）

マイケルのPVって、どれも名作ですよね！私は「スリラー」「Smooth Criminal」に次いでこの「BAD」が好きです。でも、とんねるずのノリさんがやった「BAD」のパロのほうが印象深いのは何故だろう……。

山野中体育祭——準備はつらいよ・後編

明後日に控えた山野中の体育祭に、学校中が浮足立っていた。

日誌を届け、その帰りに梨本先生リポーターと遭遇し、「お、ラッキー！

英英部の部室見ててくれるか？ ついでに閉めてくれ」と余計な仕事をプレゼントされた私は、バタバタ走るように歩く生徒たちと廊下ですれ違った。どうやら体育祭の準備をしているらしく「廊下を走ってはいけません」という教えをギリギリの線ですり抜けている感じだ。屋外からは様々な音楽が聞こえ、色別対抗応援合戦の練習が熱心に行われているようだ。渡り廊下から見えるグラウンドではリレーの練習をしている。

普通に歩けるようになった左足を見た。

足の怪我はほぼ完治し、生活するのに支障をきたさない程度に歩けるようになつたが、病院の先生からは決して無理しないようにとお達しがあったので、競技の参加は諦めた。もともと運動神経もいいほうではないので、むしろクラスのお荷物にならずに済むと安堵したのだが……その代わりに余計な雑用がまわってきたのは計算外だった。

その雑用とは、体育祭サポート委員がやるべきである諸々の面倒な仕事の類、各クラスで用意しなければいけない軍旗や応援合戦で使う小物の手配である。本来ならば、それらはサポート委員がクラスのみんなに仕事を配分するのだが、その肝心なサポート委員2人が面倒なことを私にすべて丸投げしたのだ。結局彼らがやつたのは、全員リレーの滑走順を決めたり、色別対抗リレーの出場選手と応援合戦のアイデアや人材の選出だけ。

委員を原口美恵と交代してから一週間も経たないうちにこの有様。相変わらず幽体離脱気味で、力が入らないボーッとしてたような私の心にも、さすがに「怒り」という名の泉が湧きだした。そのおかげでしつかりと魂が定着し、荒井美千子見事復活！ それにいつま

でも無視攻撃で逃げるわけにもいかないので、仁王立ちの一人毅然と立ち向かつた。

何故だろう。真正面から尾島と対峙した途端、心が高揚した。しかし原口と二人仲良くピッタリ並んでいる姿に気分が急転直下……無性に腹が立ち、代わりにイライラが急激増加！

『ちょっと！ 私、サポート委員外れたんですけど？ これはどういふこと？！』

……残念ながら、か弱い私にはこのよつた強気の意見は言えなかつた。恐る恐る「担当を外れた私がやつていいのか」という控えめな抗議と強気の（つもり）目線でサポート委員一人に対抗すれば、反撃は倍になつて返つってきた。

『ああ？！ 元々、チュウの仕事だらうがつ！ 他の連中は体育祭で活躍するのに、オマエは見学じやねえのよ… 体育祭は皆でやるもんなんだよ、それぐらい協力しろや…』

（誰のせいで見学になつたと思つてんのよつ！ この下半身竹並みの工口猿！！）

あの祭り以来、久しぶりに言葉を交わした尾島と私。

命令口調で「協力しろ」のセリフの時には、苛立ちも最高潮。まますます反撃の炎が力アツと身体に燃え上がつた。一本の導火線で結ばれた私と尾島の視線は、その役割を違はず瞬時に中央まで発火して爆発した。

吐き捨てるよつに言つた尾島のパワー・ハラスメントに対して、やつれてクマが酷い目でさらにギロリと強く睨むと、尾島は一瞬「ギクッ」と怯んでブイツと視線を逸らした。

『は、原口もチュウに仕事回せよつ！』

憎い捨て台詞を残したが、負け犬の「とくドカドカと不機嫌そうに去る尾島。

脳内で「勝つたあ！」と勝利の拳を突き上げた後、命令だけでもつたく役に立たないキンケシ並みの尾島に「筋肉バスター」をキメたところで、目を吊り上げている雌豚……いや、原口美恵が入れ替わりで忌々しそうに面倒事を追加した。

『『というわけで、荒井も協力してよね！ まず応援合戦だけど、我が一組に属する赤組は学ランでやることになったの。その学ランの背中の部分を装飾するから、「闘魂」という文字を金色のテープで貼ってくれる？ あ、そうそう、尾島の学ランは私がやるから！ そういうことで、他の人の分は荒井が学ランを回収してよ。ああ、あとクラス軍旗の件お願いね？ 赤組のシンボルは鷹よ。それをこの赤い生地に書いてほしいの。内容は……荒井に任せると。それじゃよろしく』』

尾島が命令したことをいいことに、得意げに言い放つ原口美恵とその隣で囁きしている成田耀子。当然3対1じや勝てる筈もなく、私は無言とこう形で引き受けざる負えなくなつた。

尾島たちが私に仕事を押し付けたと事後報告を受けた学級委員の佐藤君は、正義感丸出しで抗議の声を上げた。が、尾島にのらりくらりとかわされ、煙にまかれてしまう。ブキミちゃんは殺氣を伴いながら生徒会としての仕事をこなしており、それどころではない。仕方ないと想いながらも……正直本当に困つたことになつたなと頭を悩ませた。

しかし哀れな子羊を神は見捨てなかつた！ その様子を黙つてみていた鈴木さんと田中さんが、「私たち美術部だから」と軍旗に鷹の絵を描く仕事を自ら名乗り出てくれたのだ。そして、以外にもあ

の本間君^{マイケル}が書道の段持ちであることを佐藤君が教えてくれたので、学級委員の一人に付き添つてもらい、本間君の何も考えない性格に付け込むようにゴリ押しでお願いすることに成功した。残った学ランの件は、型の見本がすでに出来上がっていたし、学ランを回収して裏にテープを貼ればそれで済む。幸いにも奥住さんが応援合戦のメンバーに入っていたので、尾島を除く全員分の学ランを集めてくれた。ほぼ問題なく仕事が順調にいったので安心だったのだが……どうにも納得ができないというのが本音だ。大体サポート委員2人のあの態度、人に物事を頼む姿勢がなっちゃいない！

『「めんな、荒井。結局仕事やらせる羽目になつて』

すまなそうに頭を下げた、隣の席の佐藤君。

『そんなことありやせん、アーチー！』

……ではなく。いつも通りどもつた声だけど、尊敬＆真心をこめて「兄貴と崇める佐藤君の為ならば」と、誰かさんとは大違いの態度で協力する意を伝えた。学年一モテ男の佐藤君の頼みだ、ここで快く引き受けなければ女がすたるつてもんである。

私は足の心配もしてくれたお礼も含めて、こういう時こそ普段は邪魔なEカツプになりそうな谷間を寄せてチラリズム全開のサービスショット！……などの破廉恥な行為はしなかつたものの（そんな度胸もない）、中学生らしく恥じらいつつも厚子お姉様推奨である「下品に見えないお色気スマイル」をサービスした。

女豹特殊訓練の成果を何気にお披露目する荒井美千子。

しかし、残念なことに佐藤君には効かなかつた。お色気という名の見えない初々しいフルブルしたハートが、佐藤君の一点の曇りもない爽やかなビッグスマイルに弾かれてあらぬ方向へ飛んでいくのが見えた。しかもあらぬ方向に飛んだハートは、佐藤君の前

の席に座っている星野君にも思いつ切り弾かれていた。その証拠にチラリとも後ろを見ようとしない。

(……。あ、その……あれよね？ 同級生の男子にはまだ早かった、のよね？)

『……』はひとまず無理矢理自分を納得させた。だつてほら、まだ二回目だし。なんといつても女豹特殊訓練は奥が深い。いくら修行を重ねた熟練者でも道のりは険しく、男の数だけゴールがあると厚子お姉様は力説していた。それを考えれば初心者マーク付きの私のお色気などはホクロ毛以下かもしれない。どうやら今後の課題を練り直さなければいけないようだ。

ところがである。

佐藤君に投げつけたお色気のハートは違うところにも飛んで行ったようで、どうでもよい人物に、しかも間違った方向に効果が発揮されてしまった。

しつこくも再び後ろの席、というか、佐藤君の後ろの席に落ち着いた尾島に直撃し、有難くない化学反応を起こしたのだ。猿のいる後方八時の方角からたちまち漂い始める不穏な黒い空気。ヤツが着ているこれまた真っ黒なTシャツに派手に描かれた『KISS』のメンバーのような髑髏顔で、『KILL』の気配をこちらに送つていた。まあ、わざと尾島に見せつけるよつこ、お色気初級編の攻撃『A・HAN（アハーン）』を佐藤君に発動したのだが。

『テメヒ……オレの時とはえらい態度が違うじゃねえかっ、コノヤロー！』

『当たり前でしょ！ アンタと佐藤君どじゅ、月とスッポンなのよ、フンフン！』

『……』でも若干ニユーライフの素質を發揮する荒井美千子。「安全

「帶」という名とは無縁な、殺傷能力MAXである尾島の「熱視線」に、雄臣によつて鍛え上げられた鉄壁の防御で防ぐ私の背中。私と尾島の間にはベルリンの壁、もしくは朝鮮半島の38度線並みの国境が聳え立つてゐるのであつた。

(あの類人猿めつ!)

奴の目に余る行動がチラついてイライラする。

ブキミちゃんよろしく、ツカツカと廊下を歩きながら尾島を悪態ついても一向に怒りが納まらなかつた。

(何故あんな奴のために、貴重な放課後を使わなきやならんの? いつそのことあの学ラン、「鬪魂」の文字を全部剥がして「システム」と貼りかえてやるうかつ)

廊下の突き当たりにある英語英文タイプ部の戸を、閉まつたままなのかな確認もせずに怒りに任せて乱暴に開けようとすると、扉が開かないばかりか、その勢いで指先と爪を引っ掛けてしまつた。

「～～～つー！（つ、爪があー）」

泣きつ面に蜂よろしく、怒りと爪が剥がれそうな痛みをおさえようと暫くやり過ごしていたら、中から「キャツ」という小さな悲鳴と「ガタンー！」という音が聞こえた。

(えつ?)

目の前の扉に耳を澄ましたが、音はもう聞こえてこない。だからつて無視してそのまま帰るわけにはいかない。妙な音、しかも悲鳴らしきものがしたのにこのまま放つておくのが躊躇われた。

(……中に部員がいるのかな? でも今日は活動していない筈だし。それとも、気のせい? いやでも……)

確かに物音は聞こえた。もしかして誰かが部室に用があつてきたのかもしない。一応確かめておくかと持っていた鍵を穴に差し込んでそつとあけてみた。

カラカラカラと自分の教室とは違つてスムーズに扉を開けると、フワッとした風が漂つてきた。窓も開いているみたいだから閉めよう、中に入つて窓の方へ視線を投げれば……。

旗めいているカーテンの前で、不自然に立つ男女が一組。

『またオマエか！』

……などといつ田で一いちらを睨んだのは、金髪の強面顔。衣服が若干乱れている桂龍太郎は、大袈裟なため息を吐いた。

山野中体育祭～準備はつらこよ・後編～（後書き）

「キン肉マン」、「近所の子が我が家に集合し、テレビへ元気付けなつて見てました。素晴らしいアニメでした。菩提樹は密かに「プロツケン」「LOVE」です。

ちなみに「KISS」はベヴィーメタの有名なロックバンドの名前です。平成生まれの子は知ってるか不安……。

山野中体育祭——吐息を漏らす少女・前編

『競技プログラム 番、一年男子による「棒倒し」が始まります。皆様拍手でお迎えください!』

生徒によるきこちないアナウンスが競技場に流れた。

入場門から上半身裸の青い短パン姿に、チーム色の鉢巻を頭に巻いてある一年男子が入場してくる。生徒の待機所、特に各色の一年生のエリアにいる女子からの黄色い声援があがつた。トラックの周囲を張り巡らしているロープの前を陣取り、飛び越すほど勢いだ。私は少し離れたところでポツンと座り、血氣盛んな淑女の皆さんから視線を外して空を見上げた。そこには雲一つない真っ青な空が広がっていて、その空を彩るように頭上を交差し旗めいでいる万国旗。無意識に国旗と国名を照らし合わせる、荒井美千子。

(……あの赤地に星のマークって、どこだつたつけ? 中国は確かに星のマークが左端だった筈。じゃあ、ど真ん中にデカい星が一つあるコレはどこの中?)

そんな疑問が私の脳内を横切った。それが「ベトナム」の国旗と後になつてわかるのだが、たくさんある国旗の中でもひときわその星が頭の中に映し出される。そういうえば国旗に描かれているマークつて、星が入っているものが多いなと思ったところで、その星がつく男の子が頭の中に思い浮かんだ。

(新学期始まってから全然喋つてないんだよね……)

隣の席の佐藤君の前に座つている星野君。時々プリントを回すときや、佐藤君やその後ろの猿と話すときは後ろを向くけど、私の方は一切見ない。……私の方が避けていたというのもあるから、そのせいもあるのだけど。

『普通にしてる、わかつたな？！』

あの日の放課後、金髪強面は他人事のようになんて言つたが。

(……どう普通にしろつていうのよ。ひと月も無視しちゃつたあと
じゃ、どうにもならないじやん。祭りの時に迷惑掛けちゃつたお詫
びもなんとなく言いそびれちゃつたけど、今更だもんね。佐藤君に
続いて、こんな私に優しくしてくれる男子なんて貴重だから、本当
は仲良くしたいかなーなんて下心がないわけではないんだけど……。
でも、でも、彼が優しかったのは……)

そこまで考えて私は勢いよく首を振つた。

(やだ、私つたら何考えてるんだろ。最近ホント、なんかダメダメ
なんだよなあ。……それより、もう関わらないと決めたんだから、
このままそつとした方がお互いの為なんだよね。雄臣だつて、そう
言つてたし)

何かがこみ上げてくる気持ちを抑えるように、再び空を見上げた。
今度は星が入つてない旗を意識的に見ていれば……。

「ちょっと、ミツちゃん！ なんでボケッと空なんか見てるの？
前行つて応援しないの？」

「大丈夫、美千子？ ちゃんと朝食べてきたでしそうね？」

私の両隣にドスンと誰かが座つた。私は驚いて二人の顔を見ると、
そこには心配そうに見ている同じ赤の鉢巻をした和子ちゃんと貴子
がいた。

「つーーー！」

貴子の顔を見た途端、いきなり強面全開の「桂 龍太郎」の顔が
重なり、ブルルと身体が震えた。

「ああああれは偶然です！ 狹つたわけではありませんっ！」

「「はあっ？」」

「…………あ。いや、その……アハハハ！ あ、応援ねつ？ だだだ大丈夫！ 赤組優勝間違いなしつ！ おつとお、競技は三年男子だっけ？ ほら、貴子、チームは違うけど、日下部先輩応援するんだよね？」

私は慌てて誤魔化すように手をかざしながらトランクの方を眺めたが、青い短パンの集団が目に入つたとき、「あ、ヤベ、そういうば二年の競技だつた」と心の中で呟いた。

赤チームである「1・2・3組」と緑チームである「6・7・8組」が決戦が始まっていた。ちょうど緑が支えている棒の上の方に、赤の鉢巻をしている攻撃隊の男子生徒が飛びかかっているのが見える。その素早い猿のような動きをした赤組の切り込み隊長が、遠目でもわかつてしまふ私つていつたい……。よっぽどあの男が憎いのか。

「…………猿が木登り…………ややや！ ほ、ほら！ すごいよ、赤組！ もう緑組の棒倒れでいる！ こりゃ幸先いいねつ。アハツ、アハハハハ！」

再びごまかし笑いをする私に、両隣に座つた二人は「大丈夫か？」というような不安そうな顔から、棒倒しの競技の方向へ意識を向けた。そこでパンパンとスターダーピストルが競技終了の合図を響かせ、赤組勝利のアナウンスが流れると、勢いよく立つた和子ちゃんも前方にいる女子の皆様もワアッと歓声を上げた。

「やつたあ！ さつすが、猿！！ こついう時だけしか大活躍できないもんね、1組の類人猿は！」

和子ちゃんが大声で言つた後に「カカカ！」と笑うと、前方で黄色い声援を送っていた一部の女子がこちらを振り返り、ジロリと睨んだ。顔を合わせてヒソヒソと囁き合っている。どうやら和子ちゃんの言つた言葉がカンに触つたようだ。

私は睨んだ天敵二名とその仲間たちから目を逸らし、「マズイよ、和子ちゃん」と体操着の裾を引っ張ると、貴子も和子ちゃんと続くようにクスクス笑つた。

「ま、そうよねえ。これが体育祭じゃなくて模試のテストだつたら、間違いなく尾島^{マヌケ}は活躍できないわねえ。運動神経に全部栄養取られて、脳ミソまで回つてないみたいだし？」

「やつだあ、貴子つたら！ 当たつてるだけに否定できないのが残念だわ～」

「アハハハハ～」

「……」

澄み切つた青空に向かつて高らか、いや、朗らかな笑いをする友人たちに私は何も知らないふりを決めることにした。それでも周囲にいる赤組二年女子の皆様は、下を向きながら笑いを堪えている。やはりみんなも同じことを思つてているのか、それとも体育祭という行事に心が緩み解放されているのか。

そうこうしているうちに、「4・5組」の黄色組と「9・10組」の青組の対戦が始まった。攻撃隊は両組とも奇声を発しながら対戦相手の棒に突進し、「我こそが真っ先に飛びついたるで！」の勢いだ。そんな血気盛んな男子生徒たちの群れから離れたところに、青い孤高の狼がいた。よく見ると、黄色の頭に青い鉢巻をした大柄の強面男がヤンキー座りをしながら一人佇んでいる。手を叩いて、いかにもかつたるそうに応援する桂龍太郎。競技に参加するのが面倒だからつて自分だけ楽するなんて、なんて不良で図々しくて高飛車

で破廉恥でつ！……いや、そんなことはどうでもいい。元々あんな二股男にヤル気を求める方が間違っているのだ。

以外にもそんな桂龍太郎の応援が効いたのか、勝負の結果は青組の勝利。優勝決定戦は、赤の鷹と青い狼との一騎打ちとなつた。

山野中体育祭――吐息を漏らす少女・後編――

「わあ～どうち応援しようつ……赤組応援したいけど、青組は東先輩のチームだし。ね、貴子はどう応援する?―」

和子ちゃんは本気で悩んでいるようで、興奮した赤い顔で貴子の方へ振り返ると、ある一点を睨んでいた貴子は怒ったような顔から、急にへにやりと苦笑いした。

「あ～うん。迷うよね
「やつぱあ?!　あ～あ、私も青組がよかつたな。幸子とチイちゃんが羨ましい!」

和子ちゃんは青組の応援席である右側のずっと先を見ながらため息をついた。

奥住さんの裏情報によると、雄臣と口下部先輩がいる3年11組を含む青いオオカミ軍団は、応援合戦、競技共々なかなか逸材が揃つており、今年度体育祭の優勝候補ナンバーワンだった。私としてはどのチームが勝つても構わないのだが、せめて軍旗の部門だけは、我がクラスに勝利をもたらしてほしいと思つた。こうして他のクラスの軍旗を見てみると、我がクラスのように完成度が高いものは見当たらない。羨妬目かもしれないけど。

(だつて、鈴木さんと田中さん、それにあのマイケルが頑張ってくれたんだから!　これぐらいは私の仕事が報われてもいいよね?)

現在奥住さんの手で振られている2年1組の軍旗。

一昨日の放課後やつと完成し、昨日の朝のホームルームの時間に青島先生チントオから軍旗作成チームである鈴木さんたちやマイケルが前に呼ばれ、軍旗のお披露目公開となつた。思つた以上の出来具合で、クラス全員を唸らせるほどの作品に、私もクラスメートと同様賞賛

の拍手を送った。

『見てみい！　ワイらが作つた軍旗じやい、文句ある奴はかかる
こんかい！』

……と心中で天狗になる荒井美千子。私が仕上げたわけではなかつたけど、資料集めや作成過程には関わっていたので、自分のことのように誇らしかつた。

しかし、体育委員やサポート委員は鈴木さん達やマイケルだけにお礼を述べ、私は完全なる無視。ちょっと……いや、かなりムカついたうえに落ち込んだけど、あのメンバーなら仕方ないだろ。別に褒められるためにやつたわけではないし。そのかわり、学級委員とあの青島先生に「荒井、よく頑張つたな。ありがとうな」とお礼をもらつた時は嬉しくて、ちょっと涙ぐんでしまつた。どうやら神様は気紛れだけど存在するようだ。

「あ～っ、バカ！　氣を抜くな！　早く倒せ！」

和子ちゃんの罵声と大袈裟な身振り手振りで、軍旗から競技の棒倒しの方に意識が行つた。いつの間にか赤組と青組の勝負が始まつていたらしく、今にも赤組の棒は倒れそうだった。しかしその赤組の棒を守つていた一人の男子が飛び出す。全身に闘志に燃やしているその赤い鷹……いや、どちらかというと猿は防御隊から攻撃隊に勝手に移つたようだ。人数合わせの為に青組の棒に助つ人として参加している先生方、青組の生徒を思いつきり踏み台にして青組の棒に飛びかかり、上から踏みつけて倒してしまつた。その塊の横で、呑気に指をさしながら爆笑している桂龍太郎。

瞬く間に形勢が逆転し、あつけなく試合が終了した。競技終了の合図が鳴り、盛り上がる赤組の生徒たち。青組を応援していた筈なのに万歳三唱する和子ちゃんに、私と貴子は顔を見合わせて微笑み

合った。

『参加してくださった先生方、ありがとうございました！ これで一年男子の競技・棒倒しを終了します、一年男子退場します！ 次は三年女子の競技による四人五脚です。一年女子は入場門の方へ集合……』

アナウンスと共に音楽が流れ、一年男子はトラックを一周するために走り出した。ますます黄色い声を上げる一年女子の皆様。一年の赤組隊長的な尾島が赤組ホームの傍にくると、三年男子から身体や頭を叩かれたり、原口たち女子の手に「バチン！」とアイドルさながらタッチをしていた。

「……つたくわあ。あ～ゅ～」とするから、あの尾島は調子に乗るつていうんだよ！」

和子ちゃんの呆れながら言つたセリフに私も大賛成だった。女子と呑気にタッチングしている猿のテレッとした締まりのない顔が無性に腹立たしくて、尾島がこちら（かどうかわからないが）を見て「どうっ！」顔をしたときには、思わず「だ・か・らあつ？ フンフン」と勢いよく明後田の方を見てしまつた。大体アンタ一人の力じゃないし！ と心の中でブーブー悪態ついていると、隣の貴子が急にふつと顎を出した。

「ひょっとも、貴子、どうしたの～？ 急に笑い出しちゃつてわあ」

和子ちゃんがねえねえと貴子の身体を揺らしても、貴子は「なんでもない」を繰り返すだけで、顔をニヤけたままこちりに意味深な目配せをするだけ。私は貴子に自分の行動を見られたのが無性に恥ずかしくて、ソッポを向いたまま何となくソワソワすると、青

組の最後尾でダラダラ走りながらもこつちに顔を向けている金髪男と田があつた。

桂龍太郎（デルマン）が向けている田線は、完璧なまでに私をロックオンしており、今にも熱光線を発射するほど^{デビルチーム}の勢い。ていうか、出ている。どうやら私の行動と考えは、抜群な透視力によつて完全に箇抜けのようで、相当お怒りの御様子。

『……おらあ、ボイン！ なに思いつ切り無視してブーブー悪態ついたるんじやいつ？！ 普通にせいゆーとるのに、あんときの約束、よもや忘れたとは言わんじやろ？！』

『……』

（あばばばば……！）

あまりの迫力に私の脳内では工セ広島弁をかます、デルマン。心なしかオーケストラの前奏が素晴らしい「デルマン」のオープニングが迫るように聞こえてくる始末！ その緊張感はさながら「ジョーズ」並みだ。いますぐ速攻あの金髪男の名前も、一昨日あの部室であつた事も一切合財忘れてしまいたい衝動に駆られた。

「……ちょっと、貴子。猿の友人の桂龍太郎、こっち睨んでるよ？」

「なんか怖いんですけど」

「和子……あんな奴、怖くないわよ！ 負けずに私たちも倍にして睨み返すのよ！…」

「え～そりゃヤバイよ、貴子～」

「……」

私は異常に反応する貴子の胸中を思い、一昨日のことがバレたら殺されるなど、彼女の陰に隠れながらハアと吐息を漏らした。

山野中体育祭～吐息を漏らす少女・後編～（後書き）

山野中体育祭～悪魔が迫りて!!アドバイス・前編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m
そして、「山野中体育祭～吐息を漏らす少女・後編～」訂正箇所あります。詳しくは活動報告「訂正のお知らせ?」をご覧ください。
申し訳ありません。

山野中体育祭——悪魔が迫りてミチヒル・前編

「はあ～」

「ここは誰もいない一階のトイレの個室。やつと体育祭の熱気と桂龍太郎の視線から解放されて、ホッと息をついた。

二年女子による団体競技・「綱引き」参加のため、和子ちゃんや貴子は入場門のほうへ行ってしまった。男子が退場門のほうから応援席に帰つてくる前に、私も席を立つてフラフラと本部席のほうへ行くこととした。二年男子しかいない応援席に一人ポツンと座っているのはどうも落ち着かない。あの猿に何か言われるのも御免被りたいし。

なにか手伝う事がないかと生徒会の人たちに聞いてみたが、当のブキミちゃんは競技に参加のために不在、現会長の片岡君(シロカワ)や日下部先輩達に特に仕事はないよと言われたので（すでに私は生徒会の人たちにとって顔パスである）、自分の教室がある一番端の校舎のトイレに来てしまった。近くの校舎にすればよかつたのだが、生理だったでのロッカーに押し込んだナップキンを取りに行くためだ。それには一人になりたかった。誰もいない校舎は怖いし、いつも使う一階のトイレは古いのか調子が悪く「使用禁止」になっていたが、逆にここまできて用を足す人はいないし、落ち着くにはもつてこいだろう。

狭い個室の中でボケツと考えていた。「普通にしてろ」「つて一体どういう風にすればいいのだろう、と。そもそも私はこれが普通だと。そして、貴子は桂龍太郎の新しいカノジョの存在を知っているのだろうか、と。

そう。一昨日、あの日の放課後。

私は、とんでもなこと」ひたすらくわしてしまったのだ。

* * * * *

『……あ、私、先行くな？……またね、龍君』

女生徒の赤く濡れて光った唇から漏れた言葉が、妙に生々しかつた。

彼女の言葉に「おう」と気の抜けたように返しながら、セーラー服のスカーフを持ち主に渡した桂龍太郎。彼女はスカーフを受け取り、そそくさと直しながら足早に私の横を通り過ぎた。すれ違い様に香った彼女の制汗剤の香りと、タバコと男性用のコロンとが混じつたような匂いがやけに鼻についた。女生徒は私の方を見向きもせずに教室を去り、あつという間に見えなくなつた。

(え？　え？　え？)

疑問符を頭にたくさん浮かべた私は、彼女の後姿をボケーと見送りながら、いつたい何分固まっていたのだろうか。

いまだに入口のところで足に根が張つたように突つ立つてみると、桂龍太郎が少し伸びた金髪をくしゃりと掴んだ後、大きい溜息を吐いてこちらにズンズンと歩いてきた。その顔をはどうみても、

『大変長らくお待ちしておりました！　ネバーランドへようこそお！』

などと歓迎している永遠の少年・ペーーパンのような親しみとは程遠い。

それどころか「いますぐそのボインをピタパンのようにペシャン！」にしてやるぜっ、夜露死苦！』という感じだ。こつものよつ、元氣飛び出す

非常にマズイ展開である。大人の味も知り尽くし、もはや少年ではない桂龍太郎は、この神聖な「英語英文タイプ部」で破廉恥な大人の行為をしようとしていたところをバッヂリ見られた私に制裁を加えるため、今まさにこちらに向かつて進行中！

あわわわ……と混乱しているうちに、この不良なピー一パンはとうとう私の目の前に立ちふさがり、むんずと腕を掴んでグイッと教室の中に入れて、ピシャンと戸を閉め鍵をかけた。彼は無情にも、「え、ちょ、ちょつと……」という私を無視して、ネバーランドではなく教室の奥へどんどん引っ張っていく。

（ええつ？　なに？　なななんで教室の中に引っ張り込むの？
な、なんで鍵閉めるわけえつ？！　……ままままさかつ、私にあの女子の身代りをしろとかつ？！）

思いつ切りパニクつている私を無視して、桂龍太郎は手を乱暴に放してジロリとこちらを睨んだ。

『おいつ！』
『ヒヨエツ！』

『なあ〜んで、オマーはいつもいつも！』
『ごーじーごーじー、めんなさいつ！　で、でもつ、かかか勘弁してくださいつ！　わ、私には心に決めたサ……違う！　ききき金髪碧眼がいてつ！　……つて、あわわわつ、な、なにもアナタ様がイヤというわけではないですよ？　……ホントはイヤ……つてウソ、独り言ですつ！　あ、ほら、だだだ第一、私地味でドン臭いですしつ？　ききき今日は下着が、その、ガガガガツチリタイプのスポーツブラで、上下ともバラバラにしてつ！　『ごーじーごー』期待には添えないのではないかとおつ！　そつ、それにハジメテですので、面倒なこと極まりないですつ！　ハイ！　し、し、しかもつ、きょきょ今日は一日目でしてつ、そんな気分にはつ！』

『はあ？』

『いいいいいくらなんでも、酷過ぎますうつ！』

『おい、ちょっと待て』

『ぜぜぜ是非他の方をあたつて…………つて、あ、あれ？』

『何言つてんだ、ボインは』

『…………あ、あら？』

桂龍太郎は強面だが、訳が分からんというような複雑極まりない顔をしていた。

(……イヤ……もしかして、やつちまつた……？)

もしかしてどころではない。桂龍太郎の表情を見る限りでは、私は完全に誤解をしていたようだ。自らとんでもない大胆な発言を口走ったオバカな自分が、あまりにもイタイ……。全身が一気に赤くなつてくるのがわかつた。穴があつたら入りたいが、ここにあるのは机や椅子、タイプライターだけ。しかも、穴ではなくて「アナコンダ」「みたいな男しかいない。

(……ここは笑つて誤魔化すしかないだろ)

ハハハ」と乾いた笑いを漏らすと、桂龍太郎は大袈裟なため息を吐き、「なんか、激しく萎えちまた」と呟きながら天井を仰いだ。眉頭を抑えながらいかにも「ひと仕事してお疲れ！」というサラリーマンのように指で揉んでいる。いや、実際は一仕事し損ねたのだが。

この様子だと、どうやら私の貞操は死守できそうだった。非常に喜ばしいことではあるが……積み重ねてきた女豹としての実績を、真っ向から否定されたような気がするのは何故であろう。

(……安心なんだか、失礼なんだか)

暫く眉間の皺をほぐしていた桂龍太郎は、頭をガリガリ搔きながらジロリとこちらを見下ろした。うう、フツーに怖い……。

『あの方々……オマー、ここに何しに来たワケ？ まさか、いつも

のように邪魔しきんじやねーだるーなつ？！

『……………邪魔……………つて、とととんでもないつ！ 100%偶然
つ、S〇かもね！ ですつ！』

『……』

『つー！ （しまつたあ！ ドン引き？！）』

『……………あゝ大体なあ。学校中が体育祭の準備してるので、
狙つたかのようにこんなとこ来んじやねえよつ！ それにさあ、確
かボインはサポート委員つてやつだらーがつ？！』

『（スルーかよつ！）ええつ？！ な、なんで知つて……あ、いや、
そ、それは……あの、足の怪我で、原口……さんと交代しまして……』

……』

『ああ？！ 足の怪我で交代だあ？！』

『ヒイツ！ あ、あの、けけけ決して私のせいではありません！
担任からの提案でしてつ、ハイツ！』

『……………チツ、それも原因かよつ……………』

『え？』

桂龍太郎はチラツとこちらを一瞥した後、「……………つーかここまで
鈍いのつて、どーゆ」とぼやきながら乱暴に椅子を引っ張り、ダル
そうにドカリと座つた。椅子の背もたれに両腕を掛けその上に顔を
伏せている。強面の顔見えないことをいいことに、私はホツと息
をついてやつと冷静な気持ちが取り戻せた。シーンとした教室にカ
ーテンが大きくはためく音がした拍子に、こここの教室に来た本来の
目的を思い出した。その目的を果たすためには、桂龍太郎に出て行
つてもらわないといけない。私は動かない桂龍太郎に向かつて、努
めて冷静に且つ穩便に、しかも控えめにその旨をきりだした。

山野中体育祭～悪魔が迫りて!!アハハ～・前編～（後書き）

シブガキ隊の中で、誰のファンかという議論を友達としたことがあります。菩提樹はヤツくんファンでした。ちなみに「100%…そ
うかもね！」よりも「NOKKON^{ラブ}命」の歌に痺れる菩提樹です。

山野中体育祭～悪魔が迫つて!!アドレル・中編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。三（—）三

山野中体育祭～悪魔が迫りてミサユエ～・中編～

『あ、あの……ノックもせずに、戸を開けたのは……すみませんでした。決して邪魔するつもりはなくて……その、『』、ごめんなさい。こ、ここに来たのは、顧問にこの教室の戸締りを頼まれたからで……それで、悪いんですけど……』この教室を閉めたいのですが……あの、オヤ……いえ、桂君？』

彼は私の呼びかけに少し顔をあげた。再び睨まれるかと思い身構えたが、彼は意外にも苦笑というか、「オマエ、ホントにアホだな」的な残念顔をしていた。睨まれずに済んだとホッとした半分、その憐れんだ顔がなんだかカチンとくる。俗にいうカンに触るつてやつだ。じつちは低姿勢で謝つているところだ。

『な、なにか？』
『クク……別にい。……やっぱ「ハジメテで面倒極まりない」んじゃん。おかしいと思つたんだよな~ボインがあの東つて奴と? ハツ! ナイナイ! 大体色氣のイの字も出てねえもんよ! 完全にアイツの考えすぎだな』
『え?』

『ああわりい、じつちの話。ま、心配すんな。オレは丈一朗と違つてボインに手を出すほど飢えてねえから。つーより、わりいけどオマエは完全守備範囲外。だからボインが『』期待に添えない下着を身に着けよーが? 処女で面倒極まりないだろ? が? 生理一日目だろ? が、興味ねえのよ。まあ、自ら告白したその度胸に免じて、クク……』、今回は特別に聞かなかつたことにしてやんよ?』
『……』

完全に誤解していた私の言動を蒸し返され、さらば顔を赤くした

まま横一文字に口を閉じてしまった。思いつ切り忘れてくれていいのに、なんでこの破廉恥男はしつかり覚えているのだろう。数分前に戻れるなら、余計なことを捲し立てる自分に確實にドロツプキックを決めたいところだ。いや、その前に教室のドアを開けずそのままスルーしろと言つべきか。

桂龍太郎は完全に身体を起して「ギャッハッハ～！」とひとしきり爆笑した後、背もたれに片手で頬杖をつきながら、私を見上げた。男の顔からは既にスマイルという文字はきれいさっぱりなくなつており、いつもの強面顔だ。この男は365日年中無休で怖い顔だが、なぜか輪を掛けたように恐怖度が漲つていて。その三白眼から放たれるギラッとした視線が、いやに真剣みを帯びているからなのか。ギクリとしながらも、よくこの男とチススできた貴子や、それ以上のことをして晴美先輩、教室から走り去った女子に賞賛を送つた。どこをどうしたらこの男とそういう雰囲気になれるのだろう？一体この男は女子と一緒にいるときどんな言葉を吐くのだろうか？……などと不埒なことを考えてしまつた。

『……それよりさ。先月の祭りの時の尾島ケースケと丈一朗スケゴマジの喧嘩に、ボイントが関わってるんだって？』

桂龍太郎が眼光をさらに強めながら言つた言葉は、私の不埒な考えを綺麗に吹き飛ばした。

暫く一人とも固まつていたが、その緊張を切り裂くように、カーテンが私と彼の間を遮るように大きく揺れた。パタパタとはためくカーテンが鬱陶しいのか、桂龍太郎はチッと舌打ちしながら乱暴に振り払つた。私はその音で我に返り、彼から無理矢理視線を逸らして逃げるようになってしまったの窓を閉めに行つた。ドクドクと逸る心臓を片手で抑え、ゆっくりと窓を閉める。完全に閉まると急に教室の中はシーンとなつた。僅かに応援合戦の音楽が窓越しに聞こえて

きたが、窓が開いた時よりも妙にリアルだ。

何も言わないまま窓際に佇んでいる私に痺れを切らしたのか、桂龍太郎は再びため息をついて、「ま、んなこたあ、どうでもいいか」と呟いた。

『オマエ、そんときのこと誰にも言つてねえだらうな?』

『……』

彼の問いにはすぐ答えられなかつた。頭の中が真っ白になつてしまい、適切な言葉が思い浮かばなかつたから。しばらくカーテンを握りながら「なんて答えたらいいんだろう」と焦り、「もう貴子に話しちやつたよ」と桂龍太郎に言つたらどういう反応を示すかと震えていたら、ふと重要なことがポツと頭に浮かんだ。

そういえば どうして桂龍太郎は、尾島と伴丈一朗が喧嘩したことを見つているのだろうか。確かブキミちゃんがあの場にいた全員に口止めした筈なのに。

でも、出所はなんとなく予想がついた。おそらく尾島や小関明日香に違いない、桂龍太郎は彼らの尤も親しい幼馴染、だから気軽に話したのだろう。どこからか事実が漏れるかもしれないのに、そんな気軽に話して……と思ったが、それは私も人のこと言えた義理ではなかつた。実際に貴子に話してしまつたのだから。でも、例えブキミちゃんの許可が出たとはいえ、こんな大事なことを人に話してしまつた罪が多少なりとも軽減された気がした。

私が頭の中で思考を巡らせていたら、桂龍太郎は黙り込んでいる私に苛立つたのか、いきなり汚い上履きを履いた足で近くの机を乱暴に蹴り上げ、大声で怒鳴りつけてきた。

『おい、ボイン! 聞いてんのかよつー!』

『ヒイツ!』

『まさかつ、本当にペラペラと喋つてねえだらうなつー!』

『まままあかつ！ そ、そんなこと……言つて……ません……』

完全にビビッてはいたが、そこはきちんと否定しておいた。

（だつて、言えるわけないでしょ！ がつ！）

おそらく「イツらの悪口を堂々とペラペラ言えるチャレンジャーは、ブキミちゃんや伴丈一朗だけだろう。第一こんな不良がバックについている尾島達を敵に回して、何の得になるというのだ。それこそ百害あって一利なしだ。その証拠にケンカの件で尾島が学校に呼び出された気配はないし、ケンカの噂だつて立つてないではないか。シニアのグラウンドが移つたといつ話も聞いてない。大体貴子に話すのも時間が掛かつたというのに。』

私はそつとカーテンを離し、意を決して桂龍太郎の方を振り向いた。

『あ、あの……本当に言つてません。』『これからも、もちろん言いませんっ！ あ、あの祭りの日のことば、も、もう忘れたので……だから……』

あなた達もこれ以上私に聞わらないで欲しい、とまでは怖くて言えなかつた。でもそれっぽい真意は伝わつたと思つ。何様だ、とか言われそうだが。とりあえず、「このお話はどうかこれで終わりにしてくだけえ、ゲヘヘ」という手もみニコアンスの視線を送つて頭を下げれば、桂龍太郎はひどく真面目くさつた表情をしていた。いつもの強面ではなく、いや、もともと怖いのだが、呆れているわけでもなく、嘲笑しているでもなく……僅かだがきまり悪そうな顔だつた。

『……なら、別にいいんだけどよ。まあ、尾島（ケースケ）がキレたのがわりいんだし……けどな？ もし喧嘩の件がどこからか漏れて、その原因がボインだつたら、女でも容赦しねえ。だからさつきの言葉、絶対

守り通せ。いいな?』

最後にギラッと睨まれ、私は慌てて頷いた。桂龍太郎は確実に口止めをできることに安心したのか、軽く吐息をつくその仕草に思わずムツとしてしまった。

(……別にそこまで念を押さなくてもいいじゃない。私ってそんなに口軽く見えるわけ?)

しかも私は完全に巻き込まれた被害者だ。そこまで言われる筋合いはない、と思う。

非常に心外で、さつさとこの不機嫌極まりない状況から解放されたかった。話が終われば一人ともここにいる必要はない。逆にこの場面を誰かに見られ、再びあらぬ誤解を生まれたらたまたまではない。桂龍太郎にとつととこの教室から出て行つてもらいたくて、教室内の全部のカーテンをわざとらしく丁寧に閉めた。

山野中体育祭～悪魔が迫りて!!アドレバ・後編～（前書き）

この話は過激な表現と発言が出てきます。PG12指定とさせていただきます、ご了承くださいませ。m(—)m

山野中体育祭～悪魔が迫りてミサヒル・後編～

『あ〜、ボインさあ

『……なにか?』

(結構しつこいな……それにいい加減ボイン呼ばわりはやめて欲しいんですけど)

心の叫びは人それぞれ自由。聞こえないことをいいことに思いつ切り悪態ついた後、まだ話すのかとひそかに舌打ちをしながら、表面的には大人しく先を促した。しかし持っていた鍵をわざわざポケットから出して意図的に手の中でガチャリと鳴らし、「さつさと出ていけ」アピールだけは忘れない。桂龍太郎はそんなわたしの行動を知つてか知らずか、華麗に無視するようにボンヤリとした顔で教室の入り口の方に顔を向けていた。

『や、ケースケ尾島を無視すんのはわかんだけじゃ。……なんで星野まで無視する……つて、ま、こりやどうでもいいか。それより星野の噂カズ、誰から聞いたのか? 丈一朗の奴、ボインに何か言ったのか?』
『は?』

少しづつ眉根を寄せて声を低くする桂龍太郎に、私は今度こそ訳がわからないという顔をした。

(星野君を無視? 何だそれ?)

この男は一体何を言っているのだろう。何故ここで星野君の名前が出てくるのか。確かに尾島は意図的に無視していた。それは目の前の男も認めているし、当然……だと思つてる。だつて奴隸呼ばわりされた拳句、階段から突き落とされたのに、一言も謝りもしない奴にホイホイ愛想振り撒くバカがどこにいるというのだ。たとえ謝る隙を与えなかつたとはいえ、その気になればいくらでも出来る筈

だ。けど星野君は……無視されているのはどちらかといふと、私の方だった。星野君とは始業式始まつてから田も合わせてない。席が前になつてもだ。「あの祭りの時のこと」を不用意に口に出さないためか、雄臣の言葉に怒つたのか、どちらにしてもお互ひの為に良くなないと思つた結果の行動に違ひない。

(それに噂? 伴丈一朗が私に何か言ったのかつて、何を?)

何故この男に責められるような事を言われなければならぬのだろつ。それこそ「筋違い」じゃないだろつか。

『……べ、別に無視なんて、してませんけど……。それに、噂……つて?』

「こちらも恐る恐るだが負けずに眉根を寄せれば、桂龍太郎は私の顔をたつぶり時間を掛けて眺めた後、「聞いてなきや、いいんだ」と言いながらやつと立ち上がつてくれた。

星野君の噂つてなんだろうと氣になつたが、それよりもこれで教室を閉められるとホッとした私は、足で乱暴に椅子を戻そうとする彼に「あ、やります!」と積極的に雑用を引き受けた。そんな気を遣わなくていいから、早く出て行つて欲しい。できればこの日を境に、いや、未来永劫縁が切れても構いやしませんぜ、オヤビン!

『まあ、アイツあれでも反省してんだよ、結構応えてんだぜ? セめて普通の態度で接してやれや』

『え……?』

『機嫌悪くなるとホント手が付けられねえからなあ……普段調子イイ分、一回落ちると性質が悪いんだよ。クソつ! いいか? ともかくなんでもいいから普通にしてる、わかつたな?! そんで「まるやき」が平和を保てる……つてなんだよ、そりや? ポインのせいでウチが被害被るつてどうこういつた?! マジ面倒つたらありやしねえ』

『は、はあ……』

桂龍太郎は欠伸をした後、う〜んと伸びをして首をコキコキ鳴らし始めた。私は彼の言葉の意味がイマイチ掴めず、ここは適当にこまかそうと生返事をした。が、次の言葉を聞いたときには、思わずこの男を窓から突き落として、「火曜サスンス劇場」の犯人役を自ら体験するところだった。犯行現場が崖じゃないのが口惜しいわい！

『ほら、そのマズイ愛想笑いしろなんて贅沢言わねえから、せめて地味で鈍臭い態度で構わない……つてそりやいつもかつ！ ブハッ！ ククク……いやあ、ボイン、なんかヤベエんじやねえの？ この分だとオメー、一生処女だぜ？』

『……（アンタのような男を相手にするくらいなら、一生処女で構わんわっ！）』

『ヒヤハハハ！ あ〜悪いこたあ言わねえ。心に決めた金髪碧眼なんてあきらめる？ それこそ処女喪失より確立低いぜ？ ここは言い寄ってくれる男で手を打つとけ？ ま、そんな奇特な男、いるわけねえかっ！ ……って、ヤベ。いたよ、身近に。いや、でもまさかマジでこのボインと？ アイツとコイツが××（チヨメチヨメ）……ブハア！！ ヤベエ、超ウケるなつ！ ギヤツハッハ～！』

『……（くそあ〜絶対極上金髪碧眼と結婚して、「ジャストメリィド（新婚ホヤホヤ）」の缶カラつけたオープンカーでこの町を凱旋パレードしたるわいつ！ 腰抜かすんじやねーぞ！）』

『ああっ？ なんか言つたか？！』

『いえ！ なにも！ 今日もお勤め、『苦労さんですつ！』

『……』

桂龍太郎はフンと鼻で嗤つた後、呑気に口笛を吹きながら教室の扉までゆっくり歩いて行った。とりあえず、

(みでるよ……いずれ女豹の「ゴールド免許を見せびらかしながら、「ハイヒールでグリグリ&お舐めつ！」の刑にしてやる！ 首洗つて待つてろやつ！)

……と、デビ マン（の背中）に思う存分女豹としての宣戦布告も通達したので、一応気は済んだ。ふうやつとこれで教室を閉められるし。でもこの男と教室を出るタイミングを一緒にするなんて冗談じやないと、用もないのに机と椅子を整えたり、タイプライターを少し動かしたり、部活で使うラジカセを違う場所に移動したりとやり過ごす荒井美千子。そのうち派手に扉が閉まる音が聞こえ、今度こそこの教室には私一人きりになり、脱力したのだった。

* * * * *

（「このこと貴子が知つたら、怒るかな？ ……いや、悲しむよね…

…）

桂龍太郎と二人つきりになつたことを知つたら、前科があるだけに今度こそ絶交だらうか。いや、その前にもつと重要なことがある。（問題は、桂龍太郎と一緒にいた女生徒との関係のほうだよね……）

今のところ、あの女生徒と桂龍太郎との噂は立つていない。そんな大ニュース、奥住さんが見逃す筈ないからだ。一昨日、英英部の部室から走り去つた女生徒、彼女はおそらく三年生だ。一年生ならネームをつけている筈だし、二年生にあんな顔の人はいなかつた。よくよく考えれば、あの顔は何回か見たことに気付いた。小関明日香や彼女の先輩である、女バス部長の飯塚さんとよくいる人だ。女バスの三年だらう。どうやらデビ マンは年上がお好みらしい。……まったくもつてイヤラしいつ！

（いやいや、そんなことより……ともかく！ 私は何も見ていない。

そう、見ていない！　一昨日英英部には行かなかつた！）

無理矢理自分に暗示をかけ、ハハハと空笑いした。そうだ、何もかも忘れてしまえ！

（あら？　忘れるつて、何を？　…… そつそつ、荒井美千子、その調子だぞ！）

自分の中でしつかり解決させて安心した後、個室を出て手を洗っていると、誰もいないトイレに音楽と生徒のアナウンスがわずかに聞こえた。どうやら一年生女子の競技である綱引きが終了し、退場するようだ。次の競技である一年女子の大縄跳びと三年男子の入場門集合もアナウンスされている。

（そろそろ戻るか。三年男子の騎馬戦も見たいし。ていうか、雄臣絶対見てたかチェック入れてくるよね……）

ハンカチで手を拭いながらトイレから出て階段から降りようとすると、階下から走る音が聞こえ、ギクリと立ち止った。こんなところに何故生徒が？　……と恐る恐る顔を出して覗けば、赤いラインの体操着を着た生徒達がバタバタと昇降口に向かっていくところだった。

「なんか……上で音しなかつたか？」

「マジかよ？！」

「いいから！　集合かかつてるし、いくぞ！」

（……あれ？　あの人、達……ああ、一階のトイレに行つてたのかな？　でも使用禁止だし。あ、だからか）

おそらく使用禁止になつていたから慌てて他の校舎のトイレへ行つたのだろう。

私は何も疑いもせず、すぐにそのことを忘れた。再び貴子のこと

を思いながら、沈んだ気持ちで階段を降り始めたていた。

数時間後、私はこの校舎に来たことを後悔することになる。今見た光景のせいで、とんでもない事件に巻き込まれるなんて……どうすれば、この時の私に想像できただろう?..

山野中体育祭——狙われた学ラン——

「……ちょっと、ねえ？」

「どうなつてんの？」

「なんかマズインじやね？」

「チシタオ先生に言つた方が……」

ボロい校舎の中にある、1組の教室は騒然としていた。

午前中のプログラムがすべて終了し、生徒達はお昼を取るために各教室に戻った。競技の興奮を残しつつ和氣あいあいとお弁当を食べている筈が、現在この1組の生徒はお弁当をつまむどころか、和やかな雰囲気とは程遠い不穏な空気に包まれているのだ。

「その事実」が判明したのは、つい先ほどのことだ。

最初に気付いたのは、午後一で行われる応援合戦に参加する奥住さんで。同じクラスの男子から押借りした、学ランの背中に貼つてある「闘魂」という文字が剥がれてないか最終チェックを入れるため、全員分の学ランを一まとめにしてある段ボールをとろうとしたが、指定の場所にないことに気付いたところから始まった。朝、教室を出るまでは、確かに段ボールは教室の後ろにある茶色のボロいロッカーの上に無造作に置かれていた。しかし、奥住さんがロッカーの上を見たときには、埃以外なにもなかつた。不思議に思った奥住さんは、同じ応援合戦のメンバーであるもう一人の女子に段ボールのありかを聞いた。

『ねえ、学ランが入った段ボール見なかつた？』

『え？ 見てないよ？ ロッカーの上じやないの？』

その女子はロッカーの上を田配せしたが、あるはずのところにないで、驚いた声で「あれ？ 確かに朝までは……」と焦った様子で周囲を見渡した。教室内をぐるりと見回しても、それらしきものは見当たらない。奥住さん達は急いで呑気に弁当広げている尾島達男子のところへ確認しに行つた。もしかしたら、応援合戦に出る残りの男子三人、尾島、諭訪君、田富君が既に学ランを段ボールから出してしているかもしれないと思つたからだ。が、奥住さんが学ランの行方を聞くと、尾島は眉根を寄せた。何を言つてるんだ、と。

『…………え？ 尾島達が持つてるんじゃないの？ ジャあ、なんで……』

『…………』

『んなの、知るかよ！ 学ランはロッカーの上に置いてあるだ、ろ

…………』

尾島を囲んでいる男子と奥住さんはロッカーの方を見たが、当然そこには何もない。そこで初めて、非常事態だと氣付いた応援合戦のメンバーは青くなり、尾島は乱暴に席を立ち上がって「学ランを探せ！」と大声あげながら教室中を探し始めた。その様子に他の生徒達もお昼を中断し、何となく自分のカバンの中や机の中、ロッカーを見た。しかし、五人分の学ランを入れるスペースなどそうそうあるわけがない。一番怪しい掃除用具入れや教卓の下にもないとわかると、奥住さんが慌てて隣のクラスに出向いて、和子ちゃんに「1組の応援団用の学ランが紛れ込んでないか」と聞きに行つた。しかし、答えは「否」。いよいよ本格的に学ランがなくなつた……いや、盗まれたことがクラス中に浸透すると、生徒達に緊張が走り、冒頭に至るのである。

* * *

「へやつ……エリのビニツだよ、こんなふざけたことすんのはつ！」

尾島がたれ目と形のいい眉毛を吊り上げながら、教卓を思いつ切り蹴り上げる音が教室中に響いた。

その音と尾島の迫力に全員竦み上がり、息をする音さえも許されないような空気が張りつめた。私は教卓を中心に集まっているクラスメート達の後方から、この只ならぬ雰囲気を見守っていた。隣にいる光岡さんにそつと視線を送れば、「ヤバイよね……」という顔をしている。

そう、本当にヤバイ。

結局あれから学ランを探し回ったが、1組にも隣の2組にも、ボロ校舎のトイレや焼却炉まで確認したがどこにも見当たらなかつた。探している間にも時間はどんどん過ぎていき、昼休み残り十数分の時点で、「学ランが盗まれた」ということが1組の生徒達にとってほぼ決定事項となつていた。

だが、私を含め大半の生徒は、心のどこかでそんなバカなと思つていたと思う。このクラスから学ランを盗むなんて、ありえないことだからだ。だって、1組の応援団のメンバーの中に、学年、いや学校一厄介な「尾島」がいることを知らない生徒は、おそらくこの学校にはいないだろう。それに、こんな無謀なこととして見つかつたら、ただでは済まないこともわかつてゐる筈だ。

(それにしても犯人凄いな、よほど度胸があるんだなあ。でも……いくらなんでも、これは卑怯じやない？　しかも全員分の学ランを持つしていくことはないよね？)

悪いが既に私の中では、原因は「尾島」を狙つた犯行だろうと決めつけていた。こんなこと気まぐれでやる人はいないだろうから、犯人は相当恨みを抱えているに違ひない。でも尾島が憎いからってこれはいただけない。

私は苦労して「闘魂」の文字を貼つた努力が泡になつたことと、

尾島が受けた……いや、奥住さん達が受けた被害に対して怒りが湧いてきた。

(……いやいや、そんな場合じゃないよね？ この際学ランが見付からないことを前提に対策を考えたほうがよくなない？ 予備の学ラン……持っている人なんているわけないか……。あ！ もしかして、学校側にいくつかあるんじゃないの？ 没収した学ランとか……先生に事情を話して貸してもらえばいいじゃん！ やっぱ一昨日念のために「闘魂」のテープを余分に作っておいて良かったあ～グッジョブ、私！ 三つあるから今から残りの二つを直ぐに作成して手分けして貼れば！)

頭の中で思いついた名案を尾島に！ ……いや、非常に怖いのでやめておこう。こういう時こそ、学級委員に伝えようとブキミぢゃん！ ……は生徒会の人達とお昼していて不在なので、佐藤君に相談するかと近寄ろうとしたら、その行動を完全にフリーズさせる言葉が尾島の口から発せられた。

「おい……今日体育祭始まってから昼までに、この教室、いや、この校舎に来た奴いるか？！」

尾島はギラギラと光らせた目で教室の生徒をねめつけた。

彼の一言にクラスメートはお互い顔を見合せ、「え？ 来てないよね？」とか「いや、ここ応援席から遠いしょ……」と確認し合つた。いかにも「オレ、私は犯人じゃないよ」というニュアンスを含んでおり、犯人扱いされるなんて冗談じゃないというのが見え見えだつた。

尾島の言葉に固まつた私は、名案を進言する余裕も消え失せていた。それどころか、クラスメートや尾島の姿を見れなくて、黙つたまま俯いた。僅かに震えながら。

「やめろ、尾島！ 今は犯人捜しをしている場合じゃないだろ？」「ちげーよつ、カツコ！ そうじやねえよ！」

「カツコじゃない！ ……あ、いや、ともかく！！ もう時間がなから応援合戦に出る尾島達は先に食えよ？ 幸いにも赤組の応援合戦は最後だし、それまで多少時間があるだろ？ その間に他の連中は手分けして学ランを探すんだ。色別対抗リレーの選手以外はもう出番がないから、昼飯は交代で食べばいい。みんなそれでもいいよな？ それと、担任に報告……」

尾島の物騒な質問を遮ったのは佐藤君だった。彼の顔は強張っていたけども、学級委員らしく冷静な声でテキパキと生徒達に支持を出している。なんとなく話題が逸れたので私は少しホッとし、今度こそ思い浮かんだアイデアを言つてみようと佐藤君に近付こうとしたら、尾島の横にいたある女子と視線があつてしまつた。

(……え……な、なに？)

尾島の横には、そこが自分の指定場所かのように原口美恵がいた。

彼女は険しい顔で私を睨みながら、険を含んだ声で「ちょっと待つて、佐藤！」と遮つた。1組の生徒達は突然の制止に、彼女に括目する。なにか事件を解決する突破口や情報を掴んでいるのでは？ という期待を寄せる視線が原口美恵に集中した。

私は急激に自分の体が冷えていくのがわかつた。

第六感がエマージェンシーの警告音を頭の中でワンワン響かせる。しかし、どうすることもできず……私を凝視している原口美恵から目を逸らせず、小刻みに震え出す身体。

原口美恵の妙に通る声が、1組の教室に静かに響いた。

「……荒井。午前中さあ、この教室に戻ってきてたでしょ？ それってなんで？ その時には学ランが入った段ボール、ロッカーにあつた？」

予想を違えず、彼女の口から出た言葉は、事件を解決させる魔法の言葉ではなく、地獄に突き落とす呪いの言葉であった。

山野中体育祭～狙われた学ラン～

『……荒井。午前中さあ、この教室に戻ってきてたでしょ？ それってなんで？ その時には学ランが入った段ボール、ロッカーにあつたの？』

原口にそう言われた時、私は鈍器で頭を殴られたような衝撃を受け、目の前が真っ暗になった。全身を覆っていた震えは、機能がすべて麻痺したように止まり……まるで自分が銅像になつたかのようだ。

しかし、それは私だけではなく、クラス全員がそうだった。

私に集中する生徒たちの無数の目。『ご丁寧にも私は一番後ろにいたので、全員分の視線を受けている。しかも、その目はビデオ見ても親しみのこもつた目ではない。まるで犯人を見るような、疑いの目。ゆつくりと視線を彷徨わせ、最後に焦点を合わせた、そこには。

原口の隣にいる尾島と田が合つた。ヤツは私の顔を恐ろしいほど無表情な顔で見ていた。何を考えているのかまつたく読めない。が、少なくとも私のことを信じている顔には見えなかつた。

(うそ……お、尾島も私を疑うの？ 私が盗んだと思つてるの？ 私が氣に入らないから？ ムカつくから？ 無視してたから？)

私はこの降つて沸いた最悪の事態と尾島の顔に、次々と湧き上がる悲観的な……いや、積み重ねられた尾島と私の最悪な関係の事実に、どうじょうもないほど打ちのめされていた。

尾島に犯人と疑われた。

治まつた震えが堰を切つたように溢れ、全身へとなだれ込む。咽喉の奥に襲う、ギュウと捻じれるような痛み。ダメ、落ち着け、私は何もしていないと自分を励ましても、どんどん押し寄せる恐怖感と絶望感。そして、熱くなる田頭。

(……どうして？ なんで私がこんなこと言われないといけないの？ なんで尾島に疑われなきゃならないの？)

もう限界だつた。

自分の感情を抑えるのが精一杯で、顔面蒼白のまま俯くことしかできなかつた。

私の行動が余計に疑惑を深めたのか、徐々にざわめく生徒達。ヒソヒソ声の中には「え？ 犯人って荒井なの？」とこつ声まで出てくる始末だ。

(違う……私、そんなことしない！)

教室内の空氣に押しつぶされる前に、今すぐにでも逃げ出したかった。でも、足が鉛のように重たくて全然動いてくれない。

(なんだよ……もうやだ……なんでこんなことばっかり……)

『トイレに行つただけ』

たつたその一言が言えないなんて 。

(……言えば、わざわざこの校舎のトイレに来た理由を答えなきやならない……尾島の前で生理用のナップキンを取りに来たなんて！ そんなの言えないよ！…)

その時、心の中にせりやつとしたものを感じた。

(あ、あれ？……この校舎のト……イレ……？……え？)

ずつとずつと奥の方をチクリ刺す、違和感。

「……ちょっと、荒井！ それ本当なの？ 本当なら、なんでこの校舎に戻ってきたのよー。」

「アンタが犯人じゃないの」という原口美恵の失礼な意見に、今度は成田耀子が追い打ちを掛けるように責める口調で詰つた。既に犯人が私だというのが決定事項のような言い草。

「つ？！ ……え、あ……ち、ちがうつ……！ 私じゃつ」

成田耀子の言葉に弾かれたように頭を上げて、慌てて言い返した
……が。

(私じゃない！ でも……そんなことより、もっと大事な)

得体の知れない何かが心に引っ掛かっていた。まるでところどころ空いているパズルのピースがなかなか嵌らない感覚と同じ……。

(もう少しでわかりそuddtたのにー。)

咄嗟に言い返した自分の言葉のせいで、出掛けっていた答えが有耶

無耶になってしまった。「黙つて！」と文句言いたいところをグツと抑え、私は頭の中で午前中の自分の行動をもう一度プレイバックさせてみた。おかげで恐怖とか絶望とか涙どじりではなく、自分の記憶に集中したくて、目を瞑り両手を合わせるように鼻と口を覆う。

私の一連の動作に生徒がざわめき出したが、それには構つてられなかつた。

(……たぶん、私はとても重要なことを見落としている…)

「あ、荒井ちゃん！……ちょっとおっ、成田！　その言い方はいくらなんでも酷いんじゃないの？！　それに原口も原口だよ！　大体なんでアンタが、この校舎に荒井ちゃんが来たことを知つてるのはよ？！」

成田耀子の厳しい問い合わせの口調にカチンと来たのか、私の行動を見て泣いてるよつに見えたのか、奥住さんが慌てて助け船を出してくれた。なかなか的を得た切り返しに、私も思考にダイブしている頭の隅で唸り声をあげた。そう、何故私がこの校舎に來たことを原口が知つているのか、それも大いに疑問とするところだぞ！

原口は痛いところをつかれたのだろう。一瞬顔を強張らせたが、すぐに体制を整え、奥住さんに噛みついた。

「だ、だつて、2組の宇井と貴……笠谷に、このボロ校舎に行つてたみたいな内容、荒井が話してたの偶然聞いたんだもん！……それに、『トイレ』ならわざわざこんな端の校舎まで来ることないでしょ？　だつたらおかしいじゃん！」

「うう……ううなのだ。トイレならわざわざこんなところに来る方がおかしい。私はたまたま教室に取りにくるものがあつて……。

「で、でもさ！ それこそおかしくない？ 例え荒井ちゃんが本当にこのボロ校舎に来てたとしてもよ？ 假に本当に学ランを隠した犯人だとしても、わざわざこの校舎に来たことを宇井と釜谷に言うかな？ こういう時は、違う校舎に行ってたって言つんじゃない？」

自ら疑われるような言動、普通しないよね？」

「そうだよつ、光岡の言つとおり、おかしいじやん！ もし私が犯人だったら、そんなへマはしないわね！ それにさあ、そもそもあの学ランだけど。背中のテープを貼る作業、誰かさん達に押し付けられて苦労して貼つてたの、一体何処の誰よつ！ 荒井ちゃんなんだよ？ もし荒井ちゃんが応援団の学ランを隠す度胸があるなら、アンタ達に仕事を押し付けられた時点でキッパリ断つてるとおもうけどつ！ 大体私も応援合戦のメンバーになつてんのよ、荒井ちゃんが友達にそんなことする訳ないでしょ！」

パアアアアアツー！！

奥住さんの熱いセリフに（何か引っ掛かりがあるのはこの際置いといて）、二人の「マイフレンド・フォーエバー！」な友情に、荒井美千子はリオのカーニバル並みに激しくハイな状態になつた！

信じる者は救われる！

天網恢恢疎にして漏らさず！

神様、雷様、ありがとー！ 本当にありがとー！

ダチツて最高！ オマエらに死ぬまでキメるぜ、口モエスター（元気ですかー）ー！！

私は感激のあまり、「どんだけ荒井美千子がYOH達の友情に感動したか」というパツションを即興で意味不明なポエムにしてしまつた。このナマモノ的でホットなエモーションを、すぐにでも奥住さんと光岡さんに贈呈したいところだが、あいにく事態は深刻を極め、刻一刻を争う事態。この場で披露できないことが本当に残念でならない！

……まあ、奥住さんにしてみれば、「貴方に捧ぐ愛の詩！」なんかより、「あつと驚く噂ネタ」のほうがより彼女のパツションに響くだろうが。

「……だ、だけど……じゃ、なんで荒井はこの校舎に来たのよ？ だって、一階のトイレ「使用禁止」だし！ ていうか、私、なにも荒井が犯人つて言つてないじゃん！ ここに来たなら、なにか見なかつたのかなあ～と思つてわ……」

ナニカ見ナカツタノカナアト思ツテサ

そうなのだ。

なんで私はこの校舎來たのだろう？ 取りに来るものがあつたからだ。

一階のトイレは「使用禁止」だつたのに？ だから一階のトイレを使つたんじやん。

あの時、何か見なかつたのか？ なにか……私はあの時、何

を見た？

(……あの時、私が一階から……見たものは?)

「」の校舎のトイレではなく、違うところの校舎のトイレへ行った
め昇降口へ走り去る

その時、突然ガタンと建付けの悪い扉が乱暴に開いた。

全員扉を振り返ると、そこには殺気立つていてるブキミちゃんが仁
王立ちしていた。「面倒を持ち込みやがって、このアホどもがぁ！」
というように、メガネも歯列矯正の歯もオカツパ天使の輪もギラリ
と光らせながら。

その後ろには、今まで学ランを探し回っていたのだろう、息の荒
い星野君が立っていた。

「……ちょっと、皆さん、こんなところで何をやっているのですか
！ 今は犯人などどうでもいいでしょ！ そんなくだらないことし
たつて何も解決などしません！ 他の人はさつさとお脣を済ませな
さい！ 佐藤君はどこですか？！」

メガネをクイッと上げ、低いハスキーボイスでがなりたてながら
ズカズカと教卓に近付くブキミちゃん。その迫力と言つたら相当な
ものだったが、その足を止めたのは彼女よりも殺気立つていた男。
真っ赤な顔で「ドオン！」と黒板を思いつきり拳で叩いた尾島だつ
た。

「「うるせえ……うるせえよっ！ ぐだらねえことじゅねえんだよっ

！ れつきとした盜難だつてーの！ それに、オレはこの中に犯人がいるつてえ意味で言つたんじやねえつ！ 1組以外のヤツがこの教室に入るなんてありえねえ、ましてや、1、2組以外の連中がこの校舎にくることはまずねえんだよつ！だから他の連中がいるのを見かけた奴がいるかつて意味で聞いたんだよつ！ そいつらを締め上げりやあ、すぐにでもわかんだろーがあつ！！ 大体な、1組……つーより、このチユウが、なんことできるわけねえだろつ！

(…………え？)

尾島の叫び声に、私は反射的に顔を上げ目を見開いた。私は未だに顔に手を当てたまま啞然と尾島を見た。

(…………うそ……し、信じてくれた……？)

尾島はブキミちゃんに怒鳴った後、ギッともつすぐ私を見た。

(え？ えええつ？！)

ザワッと鼓動が跳ね上がつた。

尾島はその勢いのまま、クラスメートをかき分け勢いよくこっちに歩いてきた。その光景は、一昨日の桂龍太郎の放課後の一一件を思わせたが、不思議と怖いとは思つても、嫌だとは感じなかつた。私の目の前で止まり、その勢いのままガツと掴まれる私の肩。

「おい、チユウ！ 本当にこの校舎に来たのか？ なら、いつ来た？ そん時オマエ、何か見なかつたか？ 教室に段ボール、あつたのかよつ？！」

その顔はいつものように自信たっぷりではなく、怒りと不安と焦りと……瞳が僅かに揺れていた。私はその尾島の顔をただただ黙つて見ていると、ある顔が一瞬頭の中で通り過ぎた。そのぼんやりと浮かんだ顔は、夏前くらいから放課後の尾島の身近にいる顔。二階からそつと覗きこんだ時に見えた。

1、2組以外ノ連中ガコノ校舎ニ来ルコトハマズネンダヨシ

「やめろ、啓介！ そんなの後にしろ！ 応援団そろそろ集合だし、赤の団長、辺見さんだろ？ とりあえず行つて事情を話しどけ……」

ソロソロ集合ダシ

『なんか……上で音しなかつたか？』
『マジかよ？！』
『いいから！ 集合かかつてるし、いくぞ！』

(あ……)

私の中で、何かが弾けた。

まるで何十万ボルトの雷が身体にズガーン！ と打たれるような

衝撃が
。

「あ…………ああ～っ！～」

星野君が私と尾島の間に入り、私の肩から尾島の手を剥がすのと、私が滅多に出さない大声を上げたのが同時だった。

山野中体育祭～狙われた学ラン～（後書き）

なんか、もつと文章うまくなりたい。これを書いていて、ミステリーなどはダメだと悟った菩提樹です。……いや、どれもダメなんですね……あ、なんだか心に寒い風が……。

山野中体育祭～狙われた学ラン～

「三年の連中が……この校舎にいた？！」

並んで歩いている佐藤君の驚いた声に、私は小さく頷いた。

佐藤君の言葉に、前を歩いていた二人の男子生徒が振り返り、それを合図に四人の足が止まる。私以外の男子生徒三名は眉根を寄せながらお互いの顔を見合わせた。

ここにはガランとしたボロ校舎の廊下である。ほんの数分前までは何人かの生徒がいたが、現在この校舎には私を含めた四人の生徒以外誰もいない。

先生から急きよ借りた規格外の学ランに、文字のテープを貼る作業を手伝ってくれた星野君、学級委員の佐藤君、体育委員の後藤君だけだ。

「……マジかよ……この校舎に他の学年のヤツがいたのか」

腕組みをしながら低く唸つた佐藤君の声が、静かな廊下に響いた。

* * * * *

昼休み。残り時間があと僅かという時、心の奥底に引っ掛かっていた事実をやつと思い出した私は、滅多に出さない大声を教室に轟かせてしまった。

再び全員の視線を一身に浴びた、荒井美千子。

だがそんなことを気にしている場合ではない。やつとの思いで絞り出した記憶を、その勢いのまま驚愕した顔の尾島と星野君に速報！……しようとした。

が、尾島の顔を見た途端、この校舎から慌てて出ていった三年男子の顔と、お祭りでの出来事……尾島が突然キレて暴力沙汰を起したという立派な前科を思い出してしまい、慌てて口を噤んだ。

（危ない危ない……第一、あの三年生達が犯人とは限らないじゃない！）

しかも彼らが盗んだという証拠はない。あくまでも可能性の問題だ。先走って三年生を問い合わせ、もし違っていたら冗談じや済まされない。それに素直に犯行を認める可能性は低いし、逆に因縁をつぶられて本当に暴力沙汰になつたら……それこそ大事になつてしまふ。そんなのはお互いの為にならない。

（もし、今頭に血が昇っている尾島が、この校舎から出て行った三年生が誰だが知つたら、絶対マズイことになる……とりあえず、今はダメだ！）

『……おい、チュウ？　なんだよ……なんか、知つてんのか？　なんか見たのか？！』

『つ！』

私は尾島の声で現実に引き戻されるまで、頭の中で「どうすれば穩便に済ませられるか」という計算をものすごい勢いで弾き出していた。ともかく、この時点で学ランがすぐに見つかる確率はゼロだったんで、尾島が知りたいであろう真実をこの場で伝えることは控えたのだが……。

（神様！　どうか、どうかこの答えを「ご明算！」と言つてくれ！）
私は挫けそうになる心をなんとか落ち着かせ、清水の舞台から飛び降りるように、可能性の高い解決策を提案した。

『あああ、そそそりじゃなくて……そ、そー、い、急いで
2組と3組、いや、先生の所へ行つて、予備の学ランがあるか、き
きき聞きに行つた方がいい……と思うー』

『……は？　は……あああつ？！　何つてるんだあ、チュウ！』

『な、なんだ？　なんだよ、荒井、急に……』

尾島の迫りくる鬼のような形相と佐藤君の戸惑いの顔に、精一杯勇気を奮い立たせた。

『ヒツ！　や……あああの、だ、だから……い、今から学ラン見つけるのは難しいんじやないか……と思つて、じ、時間がないし……。もももちろん学ランも探すけど……そそそれより！　2組と3組に予備があるかどうかわからないけど、学校には没収された学ランやら、卒業した先輩方の学ランくらいあるんじやないかな？　そ、それ借りて、テープを貼つた方が速いんじやないかと……。よ、よ、予備のテープ、念の為に三つ作つてあるの！　い、今から残りを急いで作るから！　手分けして貼れば、なんとか間に合つから！　ね？！』

『ね……つて、オマエ……』

『あ……そつか！　なるほどな……確かにそつちの方が早いよな……わかつた！　おい、伏見！　俺、先生のところへ行つてくるから、ここを頼む！』

犯人のことに関して語つのかと思つていた尾島と佐藤君は、いきなりトンチンカンなことを言い始めた私に最初は戸惑つていたようだが、佐藤君の方は提案した意味がわかると「でかした！」という顔になり、急いで先生のところへ報告しに行つた。奥住さんや星野君も弾かれたように「2組と3組、他のクラスにも学ラン持つている人がいるか聞いてくる！」と聞きに行つてくれた。

『あ……お、おい！　……ちよつ……つと待てえ！　それよりも、チュウ！　オマエ、この教室に来たんだり？　そん時のことはつ？』

『！』

「私も手伝う！」と言つてくれた光岡さんと一緒に、急いでテープが入つてこるカバンのところへ行こうとした私を、尾島の手が引き留めた。

グイッと手首を掴まれた勢いで振り向けば、尾島はさらに眉間に皺を増やし、憤怒の形相を目の前まで近づけてきた。掴まれているのは手首だが、すぐにでもそれがボインに……いや、胸ぐらに移動しそうだ。

(ヒョウエツ……)

正直殺氣立つてゐる尾島はものすげく怖かった。掴まれている手首も、もの凄く痛い……。しかし、文句を言つている場合ではない。一刻一刻を争う非常事態なのだ。

『「うう」めんたい！……あ、いや、せつじやなくつて……あああの……確かに、私はこここの教室に来まし……た。けつ、けどっ！その時段ボールがあつたかどうかは……正直記憶があやふやでして……そ、その、覚えてないというか……』

とうとう私は、「この教室に来た」ことだけは正直に告げてしまつた。私の告白に再び教室内がどよめいたが、そんなことは気にしてられなかつた。本当に肝心なことはその後のことなのだが、それを言つるのは万策尽きてからだ。

(これでいいよね？ 大丈夫だよね？ お、お願ひ、尾島……今は大人しく引き下がつて！)

私は今まで尾島を無視していたことも忘れ、これ以上ないくらい熱意を込めて無言の訴えを試みた。

非常に恐ろしくもあり、恥ずかしくもあつたが……思い切つて尾

島の田をしつかりと見据えた。それこそ掴まれた尾島の手に逆に縋り付くくらいに。こんな時こそ「ニコ—イブ」の力を！女豹としての成果を！……おつと、これは関係なかつたが、以外にも必死の願いは神に聞き届けられたらしい。

尾島は徐々に目を見開いたまま私の手首を無意識にギュウッと力を込めたが、それ以上は何も言わず、黙つたままだつた。

『……そんなことは後です、尾島君！ 今は荒井さんのアイデアが優先事項よ！ さあ、皆さんは急いでお昼をとつてください！ 念の為、手の空いた方から学ランの捜索を手伝つてもらいます！ さあ、特に応援団の方、さつわとお昼をとつて……』

幸いなことに、ブキミちゃんのハスキーボイスが一人の緊迫した空気を破ってくれた。

ブキミちゃんはざわめくクラスメートを解散させ、有無を言わさないような的確な指示を出し、彼女自身も佐藤君の後を追いかけた。

『や、そつよ、尾島！ お昼食べて時間まで学ラン探そうよ、ね？』

原口美恵は猫なで声で尾島と私の間に割り込んで無理矢理手を引き剥がし、「荒井は早くテープやつちやつて！」と噛みつきながら、後藤君や諏訪君と共に尾島の背中を押した。こうして事態は意外な方向へ收まり解散となつた。

山野中体育祭～狙われた学ラン～

緊急事態にも関わらず、学ランは奇跡的に五着揃つた。

佐藤君とブキミちゃんから事情を聞いた先生は、事態が事態と知り、卒業した先輩方の学ランを三着貸してくれたのだ。残りの一着は、奥住さんと星野君が聞きに行つてくれた2、3組の生徒が学ランを持っていたので、お願いして借りることになった。五着が1組に集まると、学ランの搜索は一先ず打ち切りになり、ほとんどの生徒は胸にモヤモヤを残しながらも、ホッと胸をなで下ろして応援席に行つた。最終的に教室に残つたのは応援団員五名の他に、体育委員一人、サポート委員の原口、学級委員の佐藤君、製作するのを手伝ってくれた星野君や光岡さんだつた。

『さあ、急いでやるぞ！』

『ちよつと、まつたあ！』

一斉に取り掛かろうとした私たちを止めたのは、尾島。その尾島からは既に「学ランがない！」という焦燥感や苛立ち、険しさが抜けていた。間一髪のところで学ランが揃い、ピンチを潜り抜けたからだろう。それどころか世界を手中に収めた大魔王のような余裕とオーラが漲つていた。どうやら熱くなるのも速いが、冷めるのも速いらしい。

『どうしたんだよ、尾島』

佐藤君が時間がないんだよと少しイライラしながら聞くと、尾島はニヤリと例の悪魔のよつな黒笑^{アラシクスマイル}を湛え、ダンと拳で机をたたきながら力説しだした。

『いいか？俺が尊敬する「イノキ、ボンバイエ！」でお馴染みの猪木大先生には悪いが、「闘魂」の文字を今から貼り付けるなんて面倒だ。画数が多いからな！ それにこんな気持ちで「闘魂」に向かい合うなんて、猪木大先生に申し訳ねえ……そこでだ！ 学ランを盗んだ犯人にオレたちから熱い「ボンバイエ！」を送つてやろうぜ！ ああ、ここで解説しておくが、そもそも「ボンバイエ」とは、かつて猪木大先生と対戦した偉大なるモハメド・アリの』

『『『『『オイっ！』』』』

いらん解説をする尾島に、星野君以外の男子全員と奥住さんから綺麗なツツ「ミガビシツ」と入った。女性陣も朗らかに笑い、切羽詰つている割には穏やかな空気が流れたが……そんな余裕をブツこいでいる場合ではない。どうでもいいが、この時尾島のセリフにより二つのことが判明した。一つは、三年の先輩方を差し置いて、尾島コイツが面倒な「闘魂」含め、赤組の応援合戦の内容をほとんど決めたんだなということ。もう一つは、赤組の応援団長である男バス元部長・辺見さんは、尾島の先輩であるにも関わらず、後輩サルにボスの座を奪われたんだろうということだ。いや、喜んで臣下に下つたのか。

（どちらにしてもしつかりしろよ、辺見先輩！……いや、それより弁当食べるのも返上し、この短い時間で残りの闘魂の文字を途中まで作り上げた私の立場をどうしてくれるよ！ サクッと変更するな！！）

尾島はふざけているのか嫌がらせなのか、さらにニヤリとした顔で「猪木大先生」のうんちくをお披露目しようとしたが、偶然にも荒井美千子一人だけが引き攣り笑いではなくイラつと険しい顔で、金色のテープを鷲掴みにしている姿が目に入ったのだろう。慌てた様子でゴホンと咳払いした。

『あーその、なんだ。……ま、ぶっちゃけ、応援合戦で目立とうて訳よ！ まあ、任せとけ！』

尾島が提案した言葉に全員顔を見合させた。

『おい、チュウ！ ちょっとひち来て、オレの言つとおりテープを貼れやー。』

尾島の命令に、私はさうに口元をヒクつかせた。
呼びかけ

* * * * *

応援団のメンバーは学ランが仕上がる時、学ランが無くなつた時は打つて変わつたニヤけた顔で、弾丸のように飛び出して行つた。テープを貼る作業を手伝ってくれた人達、特に成田耀子と原口美恵も応援合戦を観戦するため足早に応戦席へ向かつた。私は「早く行こう！」と言つてくれた光岡さんに、片付けがあるからと先に行つてもらひ、最後に教室に出ようとした佐藤君達に声を掛けた。最初は例の目撃証言をブキミちゃんに言おうとしたが、どう見ても尾島と友好的じやないし、仕事で出払つていたのでどうひいても無理だつたから。

真剣な顔で「相談事が……」という私に佐藤君達もなにか勘付いたのだろう。応援席に戻りながら、私は佐藤君達に話を切り出したのだ。

「……おいおい、じゃあ、なにか？ 荒井はこの校舎に他の学年のヤツがいたのを知つていて黙つていたのかよつ？！」

「ツー！」

「おい、後藤！」
ロビ

沈黙を破つた後藤君の陰を含んだデカい声に、小さい悲鳴を上げて縮こまつた。星野君が鋭い声で制してくれたので、恐る恐る顔を

あげると田の前にいる後藤君はチッと舌打ちをし、「わ～つてるよつ！」と吐き捨てた。ただでさえ上背があるせいで威圧感が半端ないのに……さらに眉間に皺の寄せたまま一口りともしない顔に軽くビビる荒井美千子。やはり尾島や桂龍太郎の仲間だけのことはある。

背の高い男の人って、実は優しくて穏やかで無口な人が多いんだよー

的な展開がお約束であるはずなのに、なぜかそんな少女マンガな設定からは程遠い後藤君。前々から感づいてはいたが、どうも彼の私に対する態度が、尾島や小関明日香に対する態度と少々……いや、だいぶ違う事実に、シヨンと気分が落ちてしまった。別に優しくしろとまでは言わないから、敵意というか、「オメエのすべてが氣に入らねえ」丸出しの態度はなんとかならないのだろうか。

(そんなに団体デカいくせに、こんなか弱い乙女に大声を上げるなんて……しかも中一にもなつてこの態度は、いささか大人げないんじゃないの？ 大体アンタは体育委員なんだから、さつさと仕事行けよ！)

私が心中でブツブツと文句を呟つていると、佐藤君は組んでいた腕を解きながら私の顔を見た。

「……荒井は本当に三年生がこの校舎にいたのを見たんだな？ 見間違ひじゃ、ねえよな？」

佐藤君の念を押した質問に、私は再び小さく頷いた。

「つか、荒井さあ。見たんなら見たって、昼休み尾島が教室で聞いたときにそう言えばいいだろ？！ どうして黙つてたんだよつ！」

！」

「後藤！^{ヒロ} そんな言い方したら、荒井さん何も言えないだろー……『じめん、荒井さん。その時の』ともっと詳しく話してくれるか？」

星野君が後藤君の怒鳴り声に再び喝を入れた。淡々としながらも優しい口調で先を促してくれたので、ようやく安心した気持ちで口を開いた。

「あ、あの……一年女子の綱引きが始まる少し前に……この校舎の一階のトイレに……来て……その……ほ、ほら、一階のトイレ、使用禁止でしょ？ で、でね？ トトト、トイレから出て階段を下りよつとしたら、走る音が聞こえて……」

「「「走る音？」」「」

「そ、そう！ 」「この廊下を走る音。ビ、ビックリして、恐る恐る下を覗いたら、その……赤いラインの体操着来た男子三人が、昇降口に向かって走つていいくのが見えて……」

「「「……」「」」

「は、初めは、その先輩たち、この校舎のトイレに来たけど、使用禁止だから急いで違う校舎に行つたのかなあ……って思つて。でも……考えてみれば、三年生がわざわざこの校舎のトイレに来るなんて、お、おかしいよね……？」

「「「……」「」」

「そ、それに、その先輩方、すごい慌ててたみたいで……『一階で音がしなかつたか』とか『集合かかっているし、いくぞ』って言いながら……多分……。あ、でも、その時三年男子の騎馬戦の集合かかっていたから、急いで走つていたのかと思つて、特に気にもせずにいたんだけど……。」

「「「……」「」」

「で、でも、みみみ見ただけで、その人たちが犯人つて……確証は

……その、ないから……下手なことも言えなくて……」

恐る恐る告白する私の声が廊下に響いた。話し終ると二人とも黙り込んでしまい、廊下は再び静寂に包まれるが……。

「でもさあ。それっておかしくね?」

後藤君が私をジロリと見下ろしながらボソッと漏らした。

「大体さあ、さつき原口や成田も言つたように、そもそも荒井はなんでこの校舎のトイレなんかに来たんだよ? トイレならここにまで来ることねえだろ? それは荒井自身もさつき言つたよな? それからしてワケわかんねえんだけど?」

思いつ切り怪しんでいる後藤君の口調に、私はウッと言葉を詰まらせ俯いてしまった。この校舎に来た理由を言えないでモジモジしていると、後藤君は大袈裟なため息をついた。

「なんだよ、答えられねえのかよ。……じゃあさあ、三年を見掛けたって言つなら、そいつが誰だか言つてみろよ。ちゃんと見たんだら、当然言えるよな?」

(ちよ、ちよっと……)

後藤君が私に対して親しみを抱いていないことはわかつていたが、ここまで疑われるなんて正直ショックだつた。

(なんでここまで疑うの? 私の言つことが信じられないってわけ? ……なによ、そんなにこの校舎に来たことを知りたけりや、言つてやる! つじやないの! ……つて、それができれば苦労はないんだよね。大体男子の前で生理用のナップキンを取りに来たなんて言えるわけないでしょ! 百歩譲つて後藤君に知られても大したことないけど、星野君や佐藤君に聞かれるなんて絶対イヤだし……どう

しょう……。それに、三年生たちが誰だか知つたら、アンタ絶対腰抜かすよ？バスケ部内で問題起こしたらどうすんの？新部長の田富君にいきなり問題を抱えさせる氣？それにせつかく尾島の為を思つて黙つてたのに…………って、あ、あれ？）

そこで私の思考はハタツと止まつた。

おかしい。そもそもなんであんな奴隸呼ばわりする奴の為に、私がこんなに悩まなければならないのか。喧嘩しようが問題を起こそうが私には関係ないではないか。それに今回は祭りの時と違つて、シニアのグラウンドがどうこうなどという物騒な問題は絡んでいない。

（な、なによ……クラスのみんなに疑われ、後藤君や悪女達に責められた私は、言われ損じゃないのよ！）

自分でも訳が分からず、イライラと恨みつらみが右肩上がりで上昇中！……の頭を捻つていると、昇降口から足音もなく人影が近づいてきた。

「後藤君」

不気味な低いハスキーボイスが廊下に響き、その声でこの場にいた四人は数センチ飛び上がつた。

「女性に向かつてその質問は失礼といつものですよ。これだからリカシーのない男性は……本当最低ですわねえ」「

後藤君が吐いたよりも大袈裟なため息がブキミちゃんの口から漏れた。

開いた昇降口の方から大太鼓の音と生徒が張り上げる応援の叫び声が僅かに聞こえてくる。午後一のプログラムである応援合戦は、佳境に入っていた。

山野中体育祭～狙われた学ラン～（後書き）

ちなみに「ボンバイエ！」とは「やつちまえ！」という意味らしいです。マイ・ダーリングが昔、「ボンバイエ」の意味を知り合いに聞いたところ、携帯メール制限文字いっぱいになつてボンバイエの解説が返ってきたとか。何気にウザッ！と思つた私も、ちゃつかり猪木大先生のファンです！余談ですが、昔通つていたジムで、猪木大先生のテーマ・「燃える闘魂」の曲を掛けながらスタジオプログラムをやつっていたインストラクターがいたなあ。（実話）

山野中体育祭～狙われた学ラン～

「それよりも、みなさん、早く応援席に戻つたらいかがですか？
赤組の応援合戦、始まつてしましますわよ」

声の主はサラサラな髪の毛を耳にかけ、歯列矯正をしている歯を見せながらニヤリと笑いかけた。

「　　「　　」

神出鬼没のベラ……いや、ブキミちゃんの登場で、私たち四人はゴクリと喉を鳴らしその場に固まつていたが、逸早く我に返つたのは後藤君だつた。ブキミちゃんがススッと傍まで近付いてくる的同时に彼はゆっくりと腕を組み、「ハツ」と鼻で嗤いながら顔をブキミちゃんから逸らした。

「……おいおい、いきなりなんだよ。失禮で最低なのは人のことを『デリカシーのない男性』呼ばわりするそっちだろーが。それにさあ、俺は別に失礼な質問なんて一個もしてないぜ？　この校舎に来た理由だとか、三年の顔を見たんなら誰だつたとか……こんなの大した質問でもねえだろ？　つたく、訳わかんねえ！」

ブキミちゃんは後藤君の吐き捨てたセリフにピクッと口元を引き攣らせ、彼の嘲笑つている横顔を無表情のまま凝視した。一人の間に漂う友好的ではない空氣に、どうしていいかわからずオロオロとする私。とりあえずこの場を取り繕う為、走り去つた三年について答えた方がいいだろうと後藤君の方を見た。彼が信じるかどうかは別として、少なくとも私よりは走り去つた三年をよく知っている筈だし、きっと尾島を宥めつつ穩便に事を運んでくれるだらうと思いつ

ながら、一人の間に割つて入ろうとしたその時。

突然ブキミちゃんが口元に手の甲を当てて、高笑いを響かせた。

「オホホホホ！ 何を言つかと思えば……フフフ。アラアラいけない、大変失礼致しました。急に笑い声を上げて申し訳ありません。あまりにもお鈍いので、この伏見かおり、思わず不意を突かれてしましましたわ！」

「はあっ？！」

「後藤君が訳わからなくとも、ワタクシはいつこうに構いません。大体アナタに女生徒の心の機微まで理解しろという方が無理な話ですものね。まあ、あの尾島君の御友人ですから？ 仕方ないと言えば仕方がないというところかしら。『類は友を呼ぶ』という言葉をご存じ？ ホント、昔の人は上手いことを言いますわよねえ」

「オイ！ 伏見、そりゃどうこいつ意味だよ！」

ブキミちゃんの血の気が引くような逆襲に、後藤君が一步前に出て低い唸り声をあげた。私よりも背の低いブキミちゃんに食つて掛かるうとする大柄な後藤君は、血の気を引くどころか相当頭に血が上っているようで、どうやらいつも尾島を宥めすかすほどの器量と余裕がないようだ。星野君は後藤君を止め、佐藤君も「おい、伏見……」とブキミちゃんを咎めたが、二人の表情はなんとも微妙だ。私も正直なところ、どういう顔をしていいかわからなかつた。なんせ星野君も佐藤君も「あの尾島」の御友人だ、下手なリアクションはご法度である。

一方堂々たる意見をビシツと決めたブキミちゃんは、佐藤君たちの微妙な表情や後藤君の怒りもなんのその、「唾を飛ばさずに、冷静にお話ができないものかしら」と顔を顰めて体操着を掃つっていた。その行動に後藤君はカツと顔を赤らめ、「な、なんだとつ！」と怒鳴り返したが、ブキミちゃんは怯むどころか感じのよろしくない微笑みを口元に湛えている。マフィアのドンのような態度でドンと

構えている余裕なブキミちゃんに圧倒され全員口を噤んでしまうと、彼女はメガネをクイッと上げてさらに色濃い不敵な笑みを浮かべた。

「Jの際ハツキリと申し上げておきますが。後藤君にしても原口さんにとっても、この校舎に来たくらいで荒井さんを責めるのは、いさか性急すぎるのではないか？ ワタクシに言わせれば、大事な学ランをロッカーの上などに無造作に置いたままにしておいた応援団員の不始末が原因だと思いますけど？」それこそ各自でしっかり学ランを管理していれば、このようなことにはならなかつたのでは？ そもそも何故1組の学ランだけが狙われたのですか？ 標的にされるほどの原因が応援団員の誰かにあつたのではないですか？ ……荒井さんを責める前に、そちらのじ心配をされたほうがよろしいんじゃなくて？」

ブキミちゃんのハスキーでリスキーナ正論すぎる意見に、さすがの後藤君もグッと言葉を詰まらせた。

「それに……この校舎に来たのは荒井さんだけではないかもしれません。ある事情を抱えた1、2組の女生徒なら何人か来ている可能性がありますね」

「――ある事情？」

ブキミちゃんの至極真面目な意見を、男性陣は揃って復唱した。ブキミちゃんの自信に溢れた数々の言葉に、最初は「その通り！」と心中でウンウンと頷いていた私だが、次第に話が怪しい方向に逸れていきそうになるのを察知すると、心臓の鼓動が早くなりだした。

(……まままさか、生理のことを暴露する気じゃないでしちゃうね？！)

私はこれ以上の説明無用です！ 光線をブキミちゃんに放つたが、

いつものように弾かれ自分に返ってきた。どうやら彼女は私の意図を酌む気はないらしい。

「やつです。女性ならばやむ負えぬ事情です。荒井さんはそのやむ負えぬ事情で、『あるもの』を取りにこの校舎に来たのです。ここまで言えば、保健体育の授業を受けたアナタ達ならお分かりになるでしょう？ そうですね？ 荒井さん

「……」

私は顔を真っ赤にしながら俯くと、ブキミちゃんは「やはりそうでしたか」と納得したように頷いた。が、鈍い後藤君は納得できなかつたらしい。ナゾナゾのような、『乙女のヒ・メ・ゴ・ト』的なわかりにくい暗号会話にイラついたのか、星野君の腕を振り払つて更に前へ出てきた。

「おじつ… 結局適当に誤魔化してるだけじゃねえか！ そんなんで納得できるわけねえだろ！」

「……普段授業を適当に誤魔化している割には意外としつこいですね。粘着質で女性の気持ちを酌むことができない鈍い男性は、いざという時意中の女性に嫌われてしましますわよ？ ……わかりました、いいでしょう。そんなに知りたいのであれば、親しくしていなる女生徒、ああ、10組の小関明日香さんでしたか。彼女にお尋ねになつてみたらいかがです？』28日周期、もしくは一ヶ月前後の周期で出血する女性特有の生理現象とは何か』と。まあ、質問した時点で変態扱いされるでしょうが。無論ワタクシはそうなつた方が愉快……ゴホン、そうなつても構いませんことよ？ でも悪いことはいいません、おやめになることをお勧めしますわ……つて、あら。私つたら……オホホホホ～ッ！ ついウツカリと答えを漏らしてしまいましたわっ！」

ブキミちゃんは荒井美千子の気持ちを酌まなかつた自分の行動は棚に上げ、後藤君を堂々と「しつこくて空氣の読めない『ブチン男』呼ばわりした後、『ご丁寧にも正解をポロッと漏らしたうえに、高笑いでまるつと誤魔化し……いや、納めた。

「それよりも荒井さん、三年の男子生徒を見たといつのは本当ですか？ もしそうなら、彼らは学ランを持つていましたか？」

瞳をキラリと光らせながら何事もなかつたかのように私に話を振つたが、こつちは恥ずかしくてそれどころではなかつた。ますます茹でダムのように真つ赤になり、口をきつく閉じるだけだ。どうやら男性陣もブキミちゃんの言葉の意味がわかつたらしい。三人とも「あ……」と小さい声を漏らした後、徐々に頬を染めたり気まずい顔をしながら、落ち着かない様子で視線を彷徨わせた。その様子に益々縮こまる荒井美千子。一体この羞恥プレイはなんなのだろう。軽く拷問だぞ、ゴラア。

「……あらあら。やつと後藤君たちにも理解していただけたようですね！」これで荒井さんが昼休みに、クラスメートの前でこの校舎に来た理由を話せなかつた訳も、ワタクシが『デリカシーのない男』と言つた訳もおわかりいただけたかしら？ 荒井さん、誤解が解けたようですわよ？ 良かつたですわねえ！ さて、そんなことより、荒井さん。先ほどの質問に答えていただけますか？ 三年の男子生徒は何人居ました？ お顔はわかりますか？ 学ランを手にしていましたか？」

「……」

ニヤリと不気味スマイルで笑いかけるブキミちゃんの口を塞ぎ、ここから一人揃つて撤収を試みたかったが、仮にも誤解を解いてくれた恩人である。しかし私は声を大にして言いたい。超有難迷惑だ

と。とりあえず」の場にいる全員を「生理」などといつ話題から速攻離脱させる為、私は気まずい雰囲気を打破するよつて、急に空元気な声でブキニちゃんの質問に答えてみた。

「そそそそよね！ か、隠された学ランを見付けなければ解決にはならないですわよねっ！ え、えっとお、先程報告した通り、ワ、ワタクシは一階のトイレで…… ッホン！！ いえ、一階にいたときですね？ だ、誰もいない筈なのに、下の廊下を走る音が聞こえて、に、一階からから覗いて見たときは、さ、三人の男子生徒が昇降口に走つていいくところでしたわっ！ 顔は…… 一応見たことがあるけど、名前までは…… 「メンナサイ。あ、でも、所属していた部活は、わ、わかる…… というか…… 。あ、それに、学ランだけど…… ももも持つてなかつたと思ひますっ」

私は相当焦つていたのか、ブキニちゃんの口調が移つてしまい、変な言葉使いになつてしまつたが…… 仕方なからう。それよりも男性陣の空気がサッと変わつたのは有難かつた。これでやつと確信に迫れるつてもんだ。長かつたぞ、オイ。

「…… そうですか。持つてませんでしたか…… 」

ブキニちゃんは「ロダンの考える人」のように真剣な表情で一点を見詰め暫く熟考モードに入つていたが、急に顔をあげて私たちをグルリと見回した。

「確信はありませんが、荒井さんの話から推測すれば…… 学ランはこの校舎にあるか、校舎の周辺にある可能性が高いです」

「ええっ？」

名探偵・ブキニちゃんの推理に、四人の驚愕した顔が集中した。

山野中体育祭～幸福の赤いハチマキ～

『応援合戦に参加した皆様、お疲れ様でした。どのチームも迫力のある熱い応援合戦でしたね。先生方や来賓の方々による応援合戦の審査結果は閉会式に発表され、各チームの得点に加算されます。この後は三年生による全員リレーです。最終種目である色別対抗リレーに出る選手は入場門の方へ……』

私はグラウンドに響くアナウンスを聞きながら、生徒会の人達が待機しているブースを出て来賓席のテントへ向かつた。生徒会のブキミちゃんに頼まれて、PTAの役員の人達や校長先生にお出ししていた湯呑を回収するためだ。

本部席があるテントの周辺を先生方や生徒会役員、体育委員が忙しく動いていたので、私は彼らの邪魔にならぬようそつと来賓席へ近づいた。頭を下げながらお茶を回収し、お盆を持ったまま何となくグラウンドに目を向けると、トラックを囲むように座っていた生徒達の興奮冷めやらぬ姿が目に入った。どこもかしこも赤組の応援合戦の話題でざわついている。それもそうだろう。赤組の応援合戦……いや、2年1組の応援合戦代表である生徒五人は、観客席に余計な謎と熱気を残したのだから。この後に続く三年の全員リレーと、色別対抗リレーというフィナーレを締める花形競技と相まって、盛り上がりも最高潮になっているみたいだ。

「……」

ぽんやりと応援団の人達が去つた退場門の方へ視線を向けたら、学ランを着た赤組の応援団がその場で制服を脱いでいた。気温は低いが日差しが強いので、動いて熱くなつたのだろう。中でも、我がクラスの応援団員は同じ赤組の応援団はもちろんこと、他のチーム

の応援団、おまけに数名の先生からも囲まれていた。そして、尾島の友人達が駆け寄るのが遠目でもわかつた。

(あへあ、やっぱり。でも……大丈夫だよね、後は彼らに任せなければ。ていうか、もう私関係ないし、これ以上巻き込まれたくないし。とりあえず無事応援合戦が終わって良かった)

一先ず嵐は去ったかなと退場門から目を放し、事務のオバチャンのところへ回収した湯呑を運ぶために職員室のある校舎に向かおうとしたら、なんと至近距離にブキミちゃんが立っていた。喧噪のなかでもよく響く低いハスキーボイスで私の名前を呼びながら。

「荒井さん
「ヒイツ！」

あまりにも近かつたので、私はびっくりして仰け反り、もう少しで回収した湯呑を来賓席に座っているお偉いさんの頭へ投げ返すところだった。それにしても……気配を殺して近付いてくるブキミちゃんのこの癖、なんとかならないのだろうか。これだけ近かつたら普通気付く筈なのに、一体どうなつているのだらう。軽く人間の能力を超えている。

「湯呑、ありがとうございます。助かりますわ。忙しいから猫の手も借りたいくらいでして、オホホ」

「……あ、い、いえ。ひ、暇なので……。これ片づけに行きマス」

「まあ、悪いですわねえ！ ついでに今度は役員の方に麦茶を出するので、給湯室からグラスを」

「……了解シマシタ」

「本当に申し訳ありませんねえ。荒井さんがいつもいつも積極的に手伝ってくれるから、ワタクシもついつい甘えてしまって……オホホホホ！」

「……ハハ、積極的……」

「学ランの件も、荒井さんの一計で危機を乗り越えることができましたし、さすが素晴らしい東先輩の幼馴染ですわね！ 同じクラスメートとして、部活の仲間として、そしてなによりも未来の妹として、ワタクシも誇りに思っていますわ！」

「……イモウト……」

「ホホツ！ ああ、盗まれた学ランは、探せばいざれ見つかるでしょう。後はあの者たちで勝手に……いえ、任せておけばよろしいですわ。荒井さんは後藤君や原口さん達の失礼な態度など、キレイスッパリ忘れてくださいまし！」

「…………え？ 「ええっ？！ い、いざれって……や、れっき伏見さん、校舎に学ランがあるって……」

ブキミちゃんの「もう学ランのことなど、どうでもいいわい」的な言葉に、思わず上ずつた声を上げてしまった。あのボロ校舎の廊下で、後藤君たちと対決……いえ、話していたブキミちゃんは、

『いいですか、皆さん。もし学ランを盗んだのが荒井さんが見たと云う三年生達ならば、走り去った彼らの手に学ランがあつたはずです。この校舎から持ち出した後に再び犯行現場に戻るなんて、そんなバカなリスクをする必要がありませんからね。ならば答えは一つ、この校舎にまだある可能性が高いです。あるいは窓から投げ捨てたか……。あ、そうそう。この廊下を走っていたということは、学ランはこの一階ですね。一階なら、トイレに行っていた荒井さんと鉢合わせしてしまいますもの』

……と言っていたのに。それを聞いてすぐ男性陣は廊下の窓やら教室の窓から外を覗いたが、学ランらしきものはなかつた。とりあえず私と星野君以外は仕事があつたので、犯人のことを少し話しをした後、学ランの捜索は閉会式が終わつてからと解散になつたのだが……。

「あらあら、いやですわ～荒井さん。あの意見はあくまでも推測であり、荒井さんの証言に由つてワタクシが導き出した仮説に過ぎません。ま、ほぼ100%正解でしうけども。大体荒井さんが見たという犯人は、男子バスケ部の三年で尾島君や田宮君の先輩なのでしょう？ 田宮君は関係ないとして、あの尾島君に対して恨みを持った挙句の犯行ならば……つて、おそらく100%そうでしょうが。ともかく、そんな相手ならば頭脳もそう大したことはありません。それこそ『類は友を呼ぶ』、もしくは『五十歩百歩』というやつでしょう。解決できぬほどの複雑なところに隠したり、もうすでに学ランはない……などの大事になるなんてことはまずありえませんわ。大体そこまで巧妙に考えて犯行を実行する人物ならば、学ランを盗むなんて雑で幼稚なことはしません。もつと上手く、綿密に計画を立てます。ワタクシならば誰かの弱みを握り、その者にすべてを委ね、自分の手を汚すようなことはしませんわ。いえ、それ以前に尾島君を相手にするなど時間の無駄というもの。そんな暇があつたら、ドウジヨウ掬いをやつていたほうがよっぽどマシですわ」

「……」

ブキミちゃんの相変わらず切れ味鋭すぎる意見と大胆な犯行計画に荒井美千子、口を挟むどころか一言も発することができない。どうやら、ブキミちゃんにとって尾島は人間どころか猿以下らしい。下手したら地球上の生物として認識していないのかもしれません。……つていくらなんでもこれは失礼か。それにしても。

(前々から不思議に思つてたんだけど……いくら尾島が嫌いだからつて、ここまで口けにするなんていいくらなんでも、ねえ？ 何か訳でもあるのかなあ？ いつでもどこにいても神出鬼没で尾島から助けてくれるけど、ここまでくるとなんだか……雄臣から私のことを頼まれているから？ いや、でも……)

尾島や彼を取り巻く人達を徹底して「虫けら」扱いをするブキミちゃんの行動に疑問を感じていると、彼女はクイツと眼鏡を上げながら顔を近付けてきた。その距離、僅か数センチである。……近いよつ！

「荒井さん、余計な詮索は無用です。間違つても親友のアナタに多大な恩を売つて東先輩の懐に入ろうなんて狡い手、ワタクシは断じて使いません！ 単にワタクシが太陽より熱くて海より深い大きな愛を持ち合わせているだけですわッ！」

「……（結局雄臣絡みか……）」

「よつするにアナタを悪の餌食から救いたいだけなのです！ 以前にも忠告した通り、あの連中には関わらない方が身の為ですよ。荒井さんはそれを黙つて受け入れてくれれば…………っ！！ チツ、余計なヤツが…………ったく！」

「は？」『チツ』……つて、ふ、伏見さん？」

ブキミちゃんは人の気持ちを読んだ挙句、知らぬ間に親友になつた彼女から要らぬ親切を押し付けられ、「幻聴か？！」と疑うほど話の途中で口調が変わつたことに驚いた私を、くるりと方向転換させて無理矢理校舎の方へ押した。

「あらいやだわ、荒井さん！ 長々と話してしまいました！ さあさあ、こんなところで世間話などしている場合ではありません。私は忙しいのです！ 麦茶が入つてゐるウォータージャグはここにありますのでグラスを取つてきてください、速攻で頼みますわ！！」「や、あの、ちょっと……」

忙しいと言つ割には私をそのまま校舎まつまで押したブキミちゃん。まるでこの場から追い出すよつこ、忙しいテントの周辺を後ろした。

山野中体育祭——幸福の赤いハチマキ——

「グラスはそこ」の茶箪笥にあるわ、適当に持つて行つてね～

事務のオバチャンに笑顔で言われたので、私も笑顔を浮かべながらお礼を言つてお盆にグラスを乗せた。茶箪笥の扉を閉めて給湯室から出ようとするとき、オバチャンは「あら！」という言葉を私の背中にかけた。

「あらいやだ、あなた2年1組なのね！ もしかして例の赤組応援団員と同じクラスの子？」

私は振り返り、なんで私のクラスがわかつたのかと驚いた表情をしていると、「だって、背中にゼッケン貼つてあるし」と口に手を当てて目じりを下げながら教えてくれた。

「オバチャンも応援合戦見てたのよ～。毎年応援合戦と男子の競技だけは見ちゃうわねえ。目の保養つてやつかしら？ なんか若いつていいわよねえ、青春つて感じで！ オバチャンもあの頃に戻れるもんなら、戻りたいわあ～」

「は、はあ……」

「そうそう、赤組の応援合戦！ ありや一体なんなかしらね？」

五人だけ背中の文字が違うんだもの～。『犯人 イマ スグ デテコイ』なんて、なんだか穏やかじゃないわねえ。……ああ そうそう、1組の担任の青島先生と学年主任の先生がなんか学ランがどうとかつて騒いでたけど、それと関係あるの？」

「……ど、どうなんスかねえ……」

穏やかじゃないなんて言つわりには、目元を好奇心で一杯にした

顔を近付ける事務のオバチャン。私は尾島の提案により、急ぎよ変更した学ランの背中の文字のことを思つて顔を歪めた。

ヤツがテープを持つている私に支持したのは、「闘魂」という文字ではなく、「犯人 イマ スグ デテ コイ」などという、犯人や先生の怒りを煽る言葉。赤組の応援団がグラウンドへ入場し、三年、二年、一年の順に横一列に並び、観客席や来賓席に背中の文字を見せると、観戦していた生徒や先生たちは「何事か」とざわめき立つた。だつて、赤組応援団全員が「闘魂」の文字なのに、二年一組のところだけ違う文字で物騒な文章になっていたのだから。

私はハハハと空笑いし、「一体なんのことやらアッシにはサッパリですわ、ヘエー。それより仕事がありやすので、これにてドロンいたしやす、ゲヘヘ」と適当に誤魔化しながら給湯室を出た。

「使ったグラスは洗つて片づけといでねえ！」

背中に追加の仕事を受けながら 。

* * *

(……はあ、疲れたな……ていうか、疲れることがばかりだ)
給湯室を出た途端、大きいため息を吐いてしまった。

なんだか競技に参加している生徒よりも、疲労が酷いような気がする。今まで緊張していたからなのか、知らず知らずのうちに全身に力が入ついたらしく、節々が酷く凝つていた。おまけに気が緩んだ途端、急に空腹感が襲ってきた。そういえば……例の学ランのせいでお昼を食べ損ねたのを思い出した。

(あ～あ、学ランのせいでこんな日に……とんだ災難だなあ)

グルグル鳴り出した胃のあたりを摩りながら、渡り廊下に続いて

いるドアを開けようとお盆を片手と胸の下で支えた直後、勢いよく
ドアが開いた。

ガンッ！！

「ゴオアツ！」

「あ、ワリイ」

本当の災難は意外なところからやつてくる！……じゃなく。

急に開いたドアは持っていたお盆に派手に当り、その勢いのまま
お盆」と私の鳩尾に決まつた。思わず震えたまま前屈みになつてしまい……相当痛くてどうしようかと思つたが、お盆を持つているの
でどうにもならない。私の胃の付近は空腹を忘れるほど見事なダメージを受けたが、お盆もグラスも無事だつたのは不幸中の幸だつた。
頭の隅でホッと息をつき、「誰だ、勢いよく扉を開けたのは？！」
と半泣きのままコラリと頭を上げた。大体「あ、ワリイ」で済む痛さではないわつ！

「あ！ テメエ、こんなところにいやがつたのか！ 応援席にいるか
と思ったのに、ブキミなんかと一緒にいやがつて……探したんだぞ
！」

「ゲッ！！……あ、いや、おおお尾島？！……君」

ドアを開けた人物が全てにおいて我が不幸の元凶だつたものだから、素つ頓狂な声をあげてしまった。しかも謝つた相手が私だと分かつた途端態度が激変するとはなにごとか！……と怒ろうとしたが、目の前に立っていた尾島は私が彼の名前を呼び捨てにした時点でジロリと睨んできたので、反射的に文句は引っ込み、口調を改め

てしまつた。

尾島はキヨロキヨロと周囲を見渡した後、「ちよつと来い！」と私の腕を引っ張つた。

「え？　え？　あ、ああの、私、仕事が！」

「んなの、どうでもいいだろ！　オレだつて時間ねえんだよ……こつちだ！」

尾島は階段の下の狭いスペースへ無理矢理私を押し込んだ後、逃げ道をふさぐように目の前に立ちはだかり、私の顔を見下ろし……いや、この日本語は間違つていて。だって見下ろすほど背は高くなっただけ同じと言つていい。かろうじてちびつと目線が上なだけだ。（い、一体何なのよ？　こんな人気のないところに……って、え？）

誰もいらない狭い場所で一人きり。

本日一度田のじ対面、しかも至近距離に立つてはいるではないか。周りに誰もいないせいか、いやな緊張が全身を覆つてきた。かろうじてお盆が盾になつていて、こんなお盆やグラスではござといふとき大した防御力にはならない。一体何のためにこんなところに……と無駄に不安を大きくしていると、尾島は黙つたまま私の顔からフイツと視線を逸らした。

（え？　え？　なに？　なんの……つて、ハツ！　やつぱ学ランの件？　上級生見たのに黙つてたことを怒つてるの？　や、だつて、あれは……。あつ！　それとも学ランを探しておけつてか？　どうせまた暇だろとか因縁をつけて……）

心の中であれこれ考えながら何を言われるのかと身構えていると、尾島は顔を逸らしたまま「クリ」と喉を動かし、すぐに「ハツ」と息を吐いた。

「……チユウ」

「ななな何んでしょお、ひつ？」

緊張のあまり声が裏返った自分が情けない。でも条件反射でそうなってしまうのだ……トホホ。

「佐藤や後藤から学ランの件、聞いた。オマエ、あの校舎で三年を見たんだってな」

「つ！……あ、いや、その……」

「しかもその三年、バスケ部つていうじやねえかよ……クソ！」

「……」

尾島の最後の言葉はとても悔しそうで、相当怒りがたまっていたのか、階段で斜めになっている壁を拳で「ドン！」と叩いて俯いた。どうやら尾島は、あの校舎に三年生がいたといふことも、その三年生が自分の先輩だったといふことも聞いてしまったようだ。見えない尾島の顔はきっと傷ついてるに違いないと思うとズキッと心に痛みが走り、見掛けた三年生がバスケ部の人達だったと話したことを後悔し始めた。

* * *

ブキミちゃんがボロ校舎の廊下で素晴らしい推理を披露した時、彼女の嫌味にドン引きしていた男性陣も「なるほど！」と感心し、一斉に教室や廊下の窓を目指し外を確認しだした。しかし既にご承知の通り、学ランらしきものは見当たらず、落ちている気配もなかつたのだ。後藤君は再びブツブツ言いだしたのだが、

『……わかりました。こじまできたらハッキリさせたほうがよろしく』

いですわね。先生に頼んで、念のため鍵が閉まつてゐる一階の教室を全て開けてもらいましょう。鍵が盗まれた、という可能性も無きにしもあらずですか』

……といつブキニちやんの言葉でやつと納得したようだつた。一先ず搜索は一旦打ち切りとなり、各自の持ち場へ戻ることになった。私や星野君は係がないのでここで話し込んでいても構はないが、あと三人は体育祭運営委員に関わつてゐるのでまだ仕事があるので、

(シメシメ……みんな仕事だから、私が見た三年生の件は星野君にそつと伝えればいいか！ 星野君ならバスケ部じゃないし、客観的且つ冷静に尾島へ伝えられるよね)

胸を撫で下ろしながら、他の三人と別れたら速攻星野君に伝えようと決めた途端、横槍を入れたのはまたしても後藤君で もう仕事を行つて欲しいのに、しつこくも訪ねてきたのだ。

『そりいえば、荒井が見た三年つて、何処のどいつなんだよ？ それ、まだ聞いてないし。確か名前わかんないけど、部活はわかるつて言ったよな？』

私に対する疑惑は収まつたみたいだが、声は堅かつた。まあ、それはどうでもよい。こつちも後藤君が苦手……というか、親しくなれそうもない種類の人物であるように、彼にとつても荒井美千子はあまり近寄りたくない存在なのだろう。苦手な人というのは、男であつても女であつてもあまり関係ない。ダメなものはダメなのだ。

私は彼の問いに一瞬どうしようかと迷つたが、正直に答えてしまおうと思つた。ここで黙つていたら、また怪しまれるし。でも正直盛大なため息ものだつた。折角穩便に済ませられそうだつたのに……私は仕方なく口を開いた。

『バスケ部……』

『え？』

『だ、だから！ バ、バスケ部なんだけど……』

『……は……あああっ？！ なんじゃそりゃっ？！ 荒井……デタラメじやねえだらうなあ？！』

まさかバスケ部の名前が出るとは思わなかつたのだらう。後藤君はブキミちゃんに浴びせた怒鳴り声よりも遙かに大きい声を上げた。あまりの迫力に完全硬直してしまつたが、事実なので前言撤回することはせず、彼がさらに文句を言つ前に全部言つてしまおうと、早口で捲し立てた。

『やつ、あの、だ、だから、ももも元部長の辺見先輩という人といつも一緒にいる人！ え、えーと、ほら、髪の毛が茶色で、こっちの頬に黒子があつて、ちょっと猫背で、いつもズボンのポケットに、こう手を入れて歩いているというか……。ほほほら！ だいぶ前になるけど、キャンプの前の夜、図書館に隣接してある公園のバスクケットコートで会つた時のこと覚えてる？ たたた確かにその時にも、その人いたから。お、覚えてて！ そ、その……』
『…………マジかよ…………』

身振り手振りで説明する私に後藤君は吊り上げた目をぐにやりと下げる、怒鳴り声どころか、その声は手の平を返したようにトーンダウンし始めた。むしろこつちがびっくりするほど急に勢いがなくなり……すっかり苦い表情のまま黙り込んでしまつたのだ。しかも後藤君を諫めようとした星野君の顔が、後藤君とは逆に険しさが浮かび始めたのも穏やかじやなつた。見る間に様子が変わつた一人を佐藤君が心配そうに声を掛けても、答えるどころか黙り込んだままだつた。それはまるで、犯人に心当たりがあるような。

『フッ……フフ、オホホホホッ！ あらあらあら、そうですか……
バスケ部の先輩！ 万が一にもその方々が犯人ならば、誰を狙つた
犯行かは一目瞭然というところかしら？ ……それにしても、良か
つたですわねえ、そのバスケ部の三年生を見かけたのが荒井さんで
！ 他の方がそれを見ていたら、今頃とっくに尾島君に伝わって、
暴力沙汰などというややこしい事態になつていて可能性が高かつた
のでは？ どうやら彼は頭に血が昇りやすい性格のうえに前科があ
るようですし？ ですわよね、星野君、後藤君？ ……荒井さんの
冷静なご判断に感謝しなくてはねえ、ホホホホホ～！』

『…………』

笑い声は上げているが目は笑っていないブキミちゃんにロックオ
ンされた後藤君と星野君は、益々口元をギュッと結ぶだけで何も言
わなかつた。

山野中体育祭——幸福の赤いハチマキ——

（……やつぱり三年生を見掛けたなんて、体育祭が終わってから言えぱよかつた。いや、男バスの先輩だつて正直に言わないで、適当に誤魔化していれば……）

今頃になつてバカ正直に話してしまつたことを悔やみ、気が付けば私の口は勝手に開いていた。

「……あ、あの……が、学ランならすぐ見つかるよ……。だだだだつて学校以外に持ち出されたなんてまずあり得ないし。なんか、あの校舎内にあるつてブ……いえ、伏見さんも言つてたし！ 念の為先生に言つて一階の教室を開けてもらひつて……ね？ 音楽室と科室の鍵、持ち出されたかもしれないし……。私が見た先輩達もまたまあの校舎にいただけかも知れないし、もしかして見間違いつてことも……」

私の言葉はすっかり慰めモードになつていた。奴隸呼ばわりしたヤツを励ますなんて、どうやら空腹のせいで頭が混乱状態になつていらうしい。尾島はゆっくりと顔をあげた後、フンと鼻を鳴らし口の端をぐいっと上げた。

「……つたぐ、チュウに氣を使われるなんてよ。マジ笑えねえな」「え？」

「学ランのことば、もつびーでもいいや。なんとなく、原因はわかつてゐしょ。んなことより、問題はそこじゃねえんだよな」「……え？ え？ そこじゃないって……」

「そうだ。オレ様が言いたいのは、なんんでチュウはそんな大事なことを真つ先にオレに、言わねーのよ」「つー！ あ、いや、そ、それは……」

尾島は親指で私と自身のことを順番に指しながら言った。しかも声色がどんどん下がっていくにつれて、私の体温と安全度も徐々に下がっていく。まさか「ヤダア決まってるジャーン、絶対暴力沙汰になると思ったからあ、ウフ」などと正面切って言えるわけがない。

「ほこの、バカヤローがつ

眉間に皺を寄せ、吐き捨てた低い唸り声に、私は完全に固まってしまった。お盆分の距離に立つ男は腕を組み、トントンと足を鳴らしながらイライラした様子を隠さない。言い訳はおろか、謝ることさえ怖くて震えながら俯く」としかできなかつた。

「つたくよう！ いいか？ そういう重要なことは、まずオレ様に言つんだよ！ なんでオレじゃなくて、後藤や佐藤に言つんだあつ？！ オメエはな、オレ様のオンナツ！ ……あ、いや、オン、オン……あつ！ おおお温水な！ そつだよつ！ こうこうアチイ時こそ、温水だなつ！ 体操着に汗染みて気持ワリイから、温水でも浴びてサッパリしてえといろだぜ！ なつ？！」

「…………は？」

お盆にまで震えが伝わり、グラスがカチカチ鳴っていたのに、音が完全にピタリと止まつた。

絶対怒鳴られると思つたのに 最後のセリフは一体なんなのだろつ。今まで説教モードだった尾島が急に焦つたように話を全然違う方向に変えたので、私は顔をあげて僅かに眉根を寄せながら彼を見た。ついでに汗が思いつきり染みていると宣言した体操着を着ている尾島から控えめに一步下がつた。が、またもや睨まれたので、渋々半歩だけ戻つておいた。

「まあ、なんだ。しょうがねえ、今回だけは見逃してやる！ なんせオレ様は猪木大先生に次ぐ熱い闘魂の持ち主だからな！ だけどな？ 次からは真っ先にオレ様だけに報告しろつ、いいな？！」

「……」

別にアンタの許しなどなくともよいよとツッコミを入れそうになつたが、ギリで寸止めに見事成功。しかも許すのに猪木並みの闘魂が必要なのだろうか。それよりこんな事件が頻繁に起こつてはたまつたものではない。是非次がないことを願いたい。

「つ、ついでに言つとくけどな……今後一切、オレ様以外のヤローに気軽に話しかけるんじやねえつ！ まずはオレを通してからにしろ！ ましてや、女豹特殊訓練の成果をお披露目するなんてもつてのほかだ！ わかつたなつ？！ や、どうしてもつていうなら？し、仕方がねえから、オレだけには特別に許可してやるつづーか、むしろ特級編までみつちり付き合つてやってもいいつづーか……」「は？」

「ババババカヤロウツ！ 『は？』じゃねえ！ と、ともかくつ、オレ様の言つたことを忘れるんじやねえぞ！」

「……ハア」

尾島は何を興奮しているのか、どもつた拳句、パッと横を向いた顔は真つ赤だつた。気のせいいか女豹がどうのこうの「ゴチャゴチャ言つていたみたいだが……後半は聞き取りにくかつたなどと進言すればまた文句を言われるに違いないと思い、ここはスルーしておいた。要は尾島にとって、学ランが盜難にあつたことは既にどうでもいいことになつており、自分が常に一番先に情報を掴んでないと気が済まないということだけはわかつた。

とりあえず学ランの件は落ち着き、説教が済んだようなので、適

当に頷いてこの場から退散することにした。それより早くグラスを持つていかねば、ブキミちゃんの機嫌を損ねてしまう。そんなことになつたら田の前の尾島より厄介だ。尾島だってこんなところでのんびり油を売つてゐる場合ではないだろう。最後のフィナーレを飾る、色別対抗リレーに参加することになつていたはずだから。

「……あ

「あんだよ！」

「ヒツ！ いや、その、あの、も、もつそろそろ、色別対抗リレーが始まるんじゃないでしょうか……私もグラスを持って行かないと

……

そもそも行かないとお互にマズイことになりやすぜ、ダンナ！

……などといふ気持ちを込めながら尾島の顔を見れば、「わーってるよ」と不貞腐れた態度で口を尖らせた。けれども一向に動く気配はない。

(こりや、ダメだ。先行くか)

「あの……他に用事がなければ、私はお先に失礼して

「待てよ、チュウ」

尾島は横を通り過ぎようとした私を、不貞腐れたままの態度で呼び止めた。本当に唇を尖らせ、前を向いたまま腕を組んでいる。

「……い、一回しかいわねえからなつ。よく聞いとけつーのー！」

ヒツと息を吸つて吐き出された言葉は。

祭りんときは、悪かつた。

階段下の狭い空間に響く、尾島の低い声。

(……え？ 「祭りんときは、悪かつた」 ……って……え？)

彼の妙に通る声は、私の動きを完全に止めてしまった。
いや、彼の声が思った以上に低い云々のせいじゃない。その言葉
の内容のせいだ。

(「いま、尾島なんて言った？ 確か……悪かつたって ）

「あ、あんときは？ 頭に血が昇つてたつづーか……。わ、わざと
やつたわけじやねえけど、怪我させたのはかわりねえからよつ！
さすがに無視したままつづーのも？ その、目覚めが悪いつづーか、
なんつーか……ていうか！ ……左足、もう平氣……なのかなよ……」

尾島の声が段々小さくなるにつれて、彼の顔は真横に立っている
私とは真逆の方向へ逸らされた。私が何も答えず啞然としたまま彼
の真つ赤になつている耳と形のいい後頭部を凝視していると、尾島
は急にグリンと勢いよくひきしらを振り返った。

(え？！)

その顔はどうみても真つ赤なお猿さんで 。

これが丸坊主だったら茹でダコといつところだが、もちろんそん
なことは言えない。しかも向けられた顔は言葉の内容からかけ離れ
ていて、たれ目も吊り目になるという異常現象が起きている険しい

顔だった。

(な、何か……嘘……)

私の中で得体のしれない何かがこみ上げてきた。

信じられないことに、あのクラスのボス猿が、人のことを奴隸呼ばわりしていた男が、顔を真っ赤にして謝罪をしたうえに、人の怪我の具合を心配しているらしいのだ。羞恥の為か目も若干潤んでいる尾島の顔をアホみたいにボケーと眺めていると、徐々に口元が緩んできた。私が変に何かを我慢している顔が尾島には気に入らなかつたのだろう。さらに眉間に皺を寄せた。

「ああああんだよ！　人が謝つてるのに、何にも言わずボケツと見てんじやねえよ！」

尾島は一生懸命悪態ついていたが、なぜか怖いとは感じなかつた。なんと言つていいのか　　それは悪いことをしたのはわかっているけど、謝るタイミングを逃した酷く意地つ張りの小さな男の子のようだ。いつも余裕綽綽で人のことをからかつたり、バカにしたりするいつもの態度からは考えられないくらい好感が持てるものだつた。
(やだ……ちょっと、なんだろこれ……)

私はここで笑つたらマズイと思い、一旦お盆に視線を落として息を吐き、堪えていた笑いや唇がにゅっと横に広がりそうな妙な力を逃がした。普通の顔をするのがこんなにも難しいなんて。でも決して悪い気分ではなかつた。それどころか次第に鼓動が早くなる。

尾島が心配してくれたことが素直につれしいと思つた。

不思議なことに佐藤君のときはくらべものにならないくらい温かい、いや、むしろ熱すぎるほどの感情が体中を巡っている。気が付けば尾島の赤い顔が私にも伝染していた。

「……あ、うん、ごめん、ね？」ああ足は、だ、大丈夫。もう平氣で、今日の体育祭は念の為に、その、参加しなかつただけだから」

するつと素直な言葉が出た。

引きつり笑いなんかではなく、自然に笑っている自分がいた。

尾島も「そそそ、「かよ……」と言ひたきり口を閉じてしまふ。何て言つていいかわからず妙な沈黙が流れたが、決して嫌な気分ではなかつた。どちらかというと、ずっとこのままでいたいような、もつと話をしたいような、でも逃げ出したいような、酷くもどかしくて言葉にするものも難しい。

何か話したいのに話題が出てこなくて俯いたままモジモジしていると、横にいる尾島が動く気配を感じた。

「あはあ……あれ……！」

掠れた尾島の呼び声に弾かれて顔を上げた私は、これ以上ないほどもつた声で返事を返してしまった。

「おまえが尾島の切羽詰つたもん、真剣な顔か
並みの至近距離まで迫っていた。

(...הוּא הַמְלָאֵךְ וְהַמְלָאֵךְ הוּא...)

あり得ない距離にドキドキも最高潮になっていた。お互 探るよ
うに視線を絡み合わせ、まるで何かが起つそうな。

ガチャ……バタン!!

「…?」

近寄つたまま動かない私たちの間に漂う、言葉に表せない空気を
バサーンと一刀両断し現実に引き戻したのは、渡り廊下へ続く校舎
の扉が開き、閉まる音だった。

山野中体育祭～幸福の赤いハチマキ～（後書き）

きたーーっ！…………でもやっぱり邪魔が入る二人。

山野中体育祭～幸福の赤いハチマキ～（前書き）

読者様によつては少し氣味の悪い表現が出てきます、虫関係がダメな方、申し訳ありません。m(—)m

山野中体育祭～幸福の赤いハチマキ～

階段下の狭いスペースで、お互ひの顔を近くまで寄せていた私と尾島。

一瞬時間が止まったかのようにピタリと固まっていたが、校舎の扉が派手に閉まつた音で弾かれたように絡み合つた視線をパッと逸らした。

(ななな何やつてんの、私は！)

何もやましいことはしていないのに、変に言い訳したいような、逃げ出したいような気分……。

(オバカ！ 今はそんな事考えている場合じゃないでしょ？！)

そうだ。うかうかしている時間はない。こんな狭い場所で一人つきりでいるのを誰かに見られたら、それが原口だつたら……大変マズイことになる。私は尾島に「リレーに行つた方がいい、先にここから出て」と言おうとしたら、それより早く校舎に入つてきたらしき人物の声が聞こえた。

「おい、ケイスケ尾島、いるのか？！」

どうやら声の主は星野君のようだった。

彼がこっちの方へ歩いてくる気配を感じると、私だけではなく尾島も息を飲んだ。どうしようと尾島の方に視線を向けると、尾島は何を思ったのか、シーツと人差し指を口に当てた。「こつから出るな」と小声で囁き、廊下側から見えないように私の身体を階段で斜めになつている壁に押し付けた。「いいな？」と念を押す尾島に私が何度も頷いた後、彼はサツと身を翻して廊下に出た。

(……って、あれ？ なんで隠れなきやいけないの？)

星野君なら普通に出ていけばいいのに、と思つた。だって、彼な

ら変にからかつたり、冷やかしたりはしない筈だから。それに尾島の友達だし。

そんなことを考えていると、一人の話し声が聞こえてきた。

『尾島！ そんなところでなにしてんだ、リレーの集合場所に行けよ！』

『あんたよ、星野^{カズ}かよ。いや～応援合戦で声張り上げたら喉がカラツカラでさ！ 事務のオバチャンにいつものように麦茶を拝借して戻ろうとしたならな？ いや、そこで足がメチャ長くてデカイ例の黒い蜘蛛を見かけてよ～！ ほら、この間授業中に出ただろ？ 青島^{チン}先生^{タオ}が捕獲し損ねたあの氣味悪いヌシだよ！ 相変わらず逃げ足が速いのなんのって、そっちの階段の下の非常口の方へ「シャカシャカ」ってさあ～思わず追いかけちまつた』

『……なにやつてんだよ……。そんなの追いかけるなよ、気持ちワリイな』

(* \$ # & % @ # ? !)

尾島は適当に誤魔化すために言つたのだろうが、私は青島先生の歴史の授業中に出没し、大騒ぎになつたあり得ない大きさの生物を思い出し、危うくここから飛び出すところだった。まさか本当にいないでしうね？！ ……と周囲を見渡してしまつた荒井美千子。できればそんな話題出して欲しくなかつたが、以外にも星野君には効いたようだ。尾島が不自然な場所から出てきたことに深く突つ込もうとはせず、嫌そうに窘めた声が聞えた。

『それよりこれ、尾島^{ケイスケ}のハチマキだろ。応援合戦の後、学ラン脱いだついでに取つたのか？ 後藤^{ヒロ}は仕事があるから、一応頼まれて預かつたんだけど』

『おっ、サンキュー！ ……つて、なんでこんなにハチマキ汚ねえんだ？！』

『落ちてたみたいだぞ。派手に踏まれてたらしい。……で、荒井さんは?』

『いつ?』

（えつ?）

前言撤回。

（なんか速攻バレとるがな!）

いきなり確信をついた星野君。彼の淡々とした問いに対し、尾島は返事を詰まらせた。

『……は……あ? ! なななんで、チユウ? !』

『だつて、そのドアのところに尾島と荒井さんの靴ケイスケがあるし。荒井さんグラスを取りに行つたみたいで、戻つてこないと伏見が怒つてた。麦茶飲んだなら、会つただろ?』

『ゲツ!』

（ゲツ!）

いろんな意味でゲロゲロ! ……的な私は、息をひそめて事の成り行きを見守るしかなかつた。今更「ジヤーン!」なんて効果音＆ポーズ付でここから出るわけにもいかないし。それより私がここにいるのが既にバレバレなら、隠れている意味がないうえに、それこそ「アヤシイことをしてました、エヘ」と自らバラしていることにならないだろうか。いやいや、そんなことよりブキミちゃんが怒つている方が問題だ。ゲロゲロなどと思つている場合ではない。私は、狙いを定め、蟠局を巻きながら舌をチロチロしている大蛇なブキミちゃんの幻が目の前にチラついている。

（なんか私、非常にヤバいのでは……）

最近蛇関係の人物（デビ マンとベラ）と縁がありすぎだらうと思っていた時、尾島のわざとらしい笑い声が聞こえた。

『ア、ハハハ！　あ、チュウね？！　チュウなら、さささつき偶然バツタリあつたかな！　え、えーと……そう！　学ランの犯人をあのチュウが見たつて後藤達が言つたから？　仕方なく一応確認をとつていたんだよな！　や、誤解すんなよ？　オレだつて好きこのんでこんなところにチュウと一人つきりでいたんじやねえぞつ？！　だだから、別になんもやましいことなんてなんもしてねえから！　ちなみにチュウはショーンベン行つたぜ？　ハハハハハ！』

尾島が慌てて捲し立てた言い訳と引き攣り笑いを、星野君は「A h , s o (あっ、そう)」といかにも信じてない的な相槌でスルーした。最初は尾島の言葉を肯定するよう頷いてはいた私だが、徐々に心の中に砂塵が吹き荒れ、星野君がスルーした時には、砂嵐が巻き起こり先が見えない憤りと不愉快さで一杯だつた。

(ほう、そうですか……。すみませんねえ、好きでもない私と二人つきりなつてしまつて！ な、なによつ、大体こんなところに連れてきたのはアンタじやないのさつ！ それにそこまで二人でいたことを否定しなくてもいいじやないのよつ！ 大体どうして誤解されちゃマズイのよ？！ しかもションベンつて失礼な！)

「偶然こんな事態になりました！ 不可抗力であります！」な態度に、今度は恐怖ではなく怒りでお盆の上のグラスをカタカタ鳴らしてしまいそうな荒井美千子。今すぐにでも尾島にこのグラスとお盆を派手に投げつけたい。おかげで足の怪我のことを謝られたことや、僅かに淡いピンク色の雰囲気になつた二人の時間などは跡形もなく吹っ飛んでしまった。

(バカヤロ！) もう絶対、絶対、一度とあの猿と一人きりになるも

んか！……嬉しかったのに、せつかく素直に好きだなって思ったのに！…………つて、や、やだ！何考えてんの、私！）

何故「」で「好き」なんて言葉が出てくるのか。

（ち、違つよ！「好き」とかじゃなくつて……そつ！「好感が持てる」の間違いじやん…）

カーッと身体中が熱くなつた。ずっと心の奥底で発火し熱を含んだ煙がモクモクと立ち上つたせいなのか。この苦しくむせるような感覚は、今にもわかりそうな答えが見えないからなのか。それとも、見えそうになるのを恐れているからなのか。

とりあえず頭の中で煙を一生懸命払つていると、急に雰囲気がガラッと変わつた星野君と尾島の低い声が聞えてきた。

『……それより、ちょうどよかつた。他の連中がいないうちに言つとく。尾島^{ケイスケ}、学ランの件、もうこれ以上騒ぎを大きくするな』
『ああっ？ なんだよ急に……それに騒ぎを大きくするなつて、どうじつこつた』

『間違つても制裁なんて考へるなつてことだ。そんなことすれば要らぬところに火の粉が降りかかる』

『あんだよ、星野^{カズヨキ}……じゃあなにかつ？ このオレに、あの「クソ野郎」から売られた喧嘩を黙つて見過ごせつてゆーのかよつ？！』

『そつじやない！…………けど、あんな幼稚なイタズラなんかほつとけ。さつきの応援合戦で充分だろ。それに、せつかくの荒井さんの好意が無駄になる』

『はああっ？ なんでここにチュウが出てくんだよつ！』

『荒井さん、きつとこうなことがわかつてて、昼休みの時わざと尾島^{ケイスケ}に言わなかつたんだ。あの時、あの校舎に三年がいたつて正直に言つていれば、みんなから疑われずに済んだのに』

『オレは疑つてねえ！』

『わかつてる！……それより騒ぎが大きくなれば、余計な事態を招く。もしあの連中が、自分たちを見た人物が荒井さんだと知つたら、荒井さん、トバツチリ受けないか？昔、俺らが受けたような嫌がらせ、されないか？』

『ああつ？！』

『あの連中がやらないって保障、あるのか？』

『バカ言え！だからその前にキッチリと落とし前を付けさせるんだろーがつ！ 第一チュウに手を出してみろ……今度こそ、ボツコボコにすんぐらい締め上げるつてんだよつ！』

『尾島！』

『つるせえつ！ オレに命令すんじゃねえつ！』

『そうじやない！……けど万が一喧嘩になつて、それが明るみになつたらどうする？ せつかくバスケをヤル気になつたのに、バスケ部はおろか、サッカー部まで巻き込んだらどうする？ それこそあの連中の思つぽだろ。それに……荒井さんはそんなことをして欲しくないから、尾島に黙つてたんじやないのか？あの時原口や成田達に疑われても、尾島やクラスの連中の前じやなくて、わざわざ佐藤や後藤にこつそりと教えたんじやないのか？』

『……わかつてるよ……んなこと、星野に言われる前からわかつてるんだよつ！ けどなあ……クソおつ！…』

昼休みの時、尾島が黒板を叩いた時のような激しい音が聞こえてきた。でもそれ以降は、一人の会話は私の耳にまったく入つてこなかつた。

再び身体が震え出しそうになるのを一生懸命堪えるのに、精一杯だったから。

その震えは 恐怖でも怒りでもなく、信じられないことに、感

動によるものだつた。

一人の会話の内容は物騒であり、怒りを剥き出しにした発言は鋭いナイフのようで……正直ものすごい怖かつた。

でも。

感情の赴くまま、なんのためらいもなく突っ走ることができる尾島。思つた通り冷静に対処してくれた星野君の落ち着きのある態度。例え言い合いになつても、二人の間に、いや彼らの周囲に存在する確かなる絆。

見たことのない、男の子の世界。

苦手で、意地張つて見ようとしなかつた、尾島を囮む世界。

そしてなによりも……ギュウッと心が捻じれるほど切なかつたのは、私の気持ちを酌んでくれた星野君の数々の言葉と、まるで私になにかあつたら守ってくれるような尾島のセリフ。

(嬉しい)

さつままで感じていた煙のようなもどかしい気持ちは、吹つ飛んでしまつた。

代わりに湧き出でくる愛おしさのような温かい気持ちは、紛れもなく確かなものだつた。思い過ごしでも勘違いでもなかつた。しっかりと全身全霊で感じていた。

私は認めざる負えなかつた、

彼らの魅力を。彼らの周りに人が集まる理由を。

怖くて、鋭くて、凶暴で、苦くて、でも暖かくて……そんな彼らの世界を覗いてみたい気持ちを、放つて置けないと思つてしまふ気持ちを。

私はいつの間にか座り込んでしまい、歪んで見えるタイルの床をジッと見つめていた。

山野中体育祭～幸福の赤いハチマキ～（後書き）

蜘蛛の件は実体験です。授業中に出没し、生徒も先生も震撼させた
ありえない大きさ。虫嫌いの私としては、衝撃的な映像でした。ス
トーブの排煙溝らしきところに逃げたのですが、それ以来行方知れ
ず……卒業まで一度と会つことはありませんでした。

山野中体育祭——幸福の赤いハチマキ——

『それでは第2位のチームを発表に移りたいと思います！ 1位と2位のチームはかなりの接戦でした。両チームとも追いつけ追い越せの勢いで、首位争いを展開した結果……第2位は総合得点330点で、赤組チームです！ そして優勝は、350点で青組です！ おめでとうございます！』

アナウンスを担当していた生徒は、終盤に差し掛かりだいぶ小慣れしてきたのか、タップリ間を開けてから結果を発表した。

2位の順位が確定された時点で赤組の生徒たちは落胆の悲鳴を上げ、離れたところにいる青組の生徒たちは、大歓声を上げた。それに追い打ちをかけるように発表された青組の優勝。

『第2位の赤組応援団長、表彰台の方へお願ひします！』

私の周りからワツと歓声が上がった。

優勝は逃したが、2位という結果に満足したようにたくさんの拍手と口笛が、表彰台に上る赤組応援団長の辺見先輩に送られた。辺見先輩は周囲に乗せられたように、壇上へ上がった途端ガツツボーッズを決めて生徒たちにアピールしている。それを見ながら、「このドスケベ！！」などと訳の分からぬヤジを送っているのは、少し斜め前に立っている男。ヤツの前に立つ諷訪君と一緒にふざけた声援を送る男。

熱い 。

動いてもないのに、拍手をしているだけなのに、その男の声を聞くだけで頬が熱くなつた。

『それでは最後に優勝した青組の応援団長、表彰台の方へお願ひします！』

生徒のアナウンスの後に聞こえた、「貴子！」と叫ぶ和子ちゃんの声で熱が僅かに散つた。

隣の2組の男子の列を隔てて立つている和子ちゃんの方を向けば、満面の笑顔だつた。和子ちゃんの前にいる貴子の顔を見れば俯いて苦笑いをしており、和子ちゃんから「顔を上げる」と急かされる。私も壇上のマイクの方へ視線を移すと、賞状を授与するときの定番の音楽が流れ、壇上に上がつている校長先生が生徒会の人から優勝旗を渡されているのが見えた。すぐに青組応援団長の日下部先輩も壇上に上がり、校長先生から優勝旗とトロフィーが手渡されると一斉に強くなる拍手。私もクラスの最後尾でその様子をボンヤリと見ながら拍手を送つていた。

まだ、熱い。

異常に身体が火照つていた。

この熱さは、体育祭のクライマックスを飾る色別対抗リレーの前から、湯呑を給湯室に置きに行つた後で「あの男」と話をしてから酷くなつた。そして、閉会式をしている今も尚燃り続けていた。全身を駆け巡るこの熱は、どうやらを「あの男」を見る度に、そして、私の首に掛けてある汚いハチマキを意識するたびに濃度が増すのだ。

尾島の汗が染みて、踏まれた汚いハチマキを首筋に意識する度に。

* * * * *

尾島と星野君が話しているのを息を顰めながら聞いていた私は、頬に流れた温い涙を指で拭つた。

尾島が壁を蹴つた後も二人は少し言い合いになつていていたみたいだが、大きい怒鳴り声をあげることはなく、そのうち星野君の「先に戻つて。早く入場門へ行け」の言葉を最後に声が聞えなくなつた。つづき尾島も一緒に行くと思つてたのに……確實にこちらに近付いてくる足音に現実に引き戻された。どうしようとも意味もなく焦る心。それは、一人の会話を盗み聞きしたからなのか。まだ尾島は怒つているかもと恐れているからなのか。それとも……。

『チュウ』

さつきまで怒鳴つていた声とは打つて変わり、静かな声だつた。名前を呼ばれると、私はビクッと震えてさらに顔を俯かせてしまつた。目に溜まつていた涙はもう拭つてしまつたが、まだ涙目になつてゐるだろうと思うと恥ずかしくて、顔をあげて尾島を見ることができなかつた。上から聞こえてきた溜息にさらに縮こまつていると、空気が動くのが分かつた。目の端には尾島の足しか見えなかつたのに、しゃがみ込んだのか、膝に腕をかけているのが見える。ヤンキー座りをしている尾島の手には赤いハチマキ。星野君が言つたように、派手に踏まれた汚いハチマキ。顔を見れずにハチマキばかり見ていると、下からヌツと顔をのぞかれた。

『おい。チュウのくせにシカトしてんじゃねえよ！』
『つ？！ ち、ちがうつ！ シカト……なんて、してな……い』

尾島の口調がいつもの調子に戻つていたので少しずつ顔を上げると、そこにはやつぱりいつもの生意気そうな顔。人を小バカにした

ような、いたずら小僧のような、ろくでもないことを考へてゐるような、ニヤリと口の端を上げてゐる顔。普段は憎たらしいその顔と声に、なぜだらり、ホッと安心してしまつた。

『つたくよお。なーに泣いてんですか！ チュウが学ラン取られたわけじやあるめえし。あ～もう星野^{カズヨキ}は行つたから、チュウも行け？ ……おつと、その前にここで話したこと、内緒な？ ついでに、オマエが校舎で見た三年のことは忘れる。誰かにしつこく聞かれても無視だ。いいな？』

私は慌てて頷いた。

『よし。あと知つてるのは、後藤^{ヒロ}と佐藤^{カツコ}と星野^{カズヨキ}と……伏見^{フキミ}か。ヤローはいいとして……ツチ、また厄介なのに首突つ込まれたぜ。あの女、神出鬼没でホントうぜえな。妖怪かよつ！』
『……』

「アンタがそれを言つつか」とは言えず、とりあえず無言で通していくと、尾島は真面目くさつた顔で私の顔をジッと見た。と思つたら、突然にゅっと伸びてきた尾島の手。ギョッとして身体を仰け反らせると、その手は私の頭を優しく撫でた……と思つたら、そのまま押すようにグイッとハチマキを掴んで後ろにずらした。おかげで頭ごと首を後ろに引っ張られ、気が付いた時にはハチマキを取られていた。

『ちよつ、な、なに？！』

『いちいちうるせえなあ、チュウは。ハチマキ取つただけだろうが！ え？ なになに？ 是非このハチマキと汚い尾島様のハチマキを交換したいって？ 仕方ねえな、そこまで言つなら交換してやるか！』

『え…………ええつ？！』

『しょうがねえ。オレ様はチュウので我慢してやつかな～』

『はあつ？！』

『…………あのな。競技にも出ず、ただボケッとつけられているだけで全然活躍の場がないこのチュウのハチマキを、少しでも昇華してやろうつていうこのオレ様の親切心がわからんかね？ 相変わらず鈍臭いね、君は！ こり、もつと上手く空気を読め？』

『…………（そういうアンタは空気を読むどころか、読み間違えてるだろーが！）』

『なんか言つたか？！』

『…………いえ。た、ただその汚い自分のハチマキをするのが嫌なだけなんじやないかと……』

『バカヤロ！ そこは読まなくていいんだよ！ いいか、良く聞け？ このオレ様のハチマキにはな、汗と汗と汗がっ！ ……ああ、鼻水もついてたっけか？ ともかく！ 3倍濃縮の汗と将来有望であるオレ様の青春の欠片が詰まつた貴重なハチマキなんだよ。心して受け取れや！』

『汚なつ！ ……あ、いや、その……や、そそそんな困るつて！』
『バカ、ここは遠慮するところぢやねえんだよ！ ま、オマエの哀れなハチマキをして、トップを走つてやりますから？ 有難く思えつてことだ！ つーわけで、リレー絶対見逃すんじやねえぞ？ ジや、オレは行く』

急にすくつと立ち上がった尾島。彼の手にある私のハチマキを慌てて摑もつとしたが、ドジヨウのようにスルツと逃げられた。汚い自分のハチマキを私の頭の上に残して。

『クク、美千子じゃなくてニーブ子だな』

『つ？！』

急に下の名前を呼ばれたので、ドキーッと心臓が跳ね、バカみたいに睡然としたまま尾島を見上げてしまった。その隙に笑いながら階段下から飛び出して走り出した尾島。私が後を追つて慌てて廊下に出たときは、既に扉の所で靴を履いていた。

『お、尾島！ ちょっと、待って！』

『オレ様の活躍見て腰抜かすなよ、チュウ！』

尾島は片目を瞑りながら舌を思いつきりグイッと出し、両手でサムアップをビシッとキメた後、扉に向こうに消えた。

* * *

それから私は、異常に早くなる鼓動を持て余しながら、グラスを急いで本部席の方へ持つて行った。

ブキミちゃんに怒られると覚悟していたが、幸いなことに生徒会の人達はそれどころではなく、閉会式に向けての準備でんやわんやだつた為、私のことはすっかり忘れられていたみたいだ。とりあえず持ってきたグラスに麦茶を淹れて、役員席に運んだ。配り終わると同時に、体育祭のメインイベント、色別対抗リレーが始まる。

音楽に合わせ入場門から出てくるリレーの選手たち。

各クラスから男女一名ずつ選ばれた先鋭部隊が所定の位置に待機した。

私は来賓席の横からじっとトランクを窺っていた。

用事が終わったので応援席に戻つても良かったのだが、なぜか戻

る気にはなれなかつた。

だつて、私の居た場所は、来賓席の前にあるトラックを挟んで
ちょうど選手が待機する場所が見えたから。誰にも邪魔されずにそ
つと一人で、選手達を見れたから。

選手の中に混じつている貴子と田があつた。一ちらに気が付いたの
が、一生懸命手を振つてゐる。私もそつと手を振りかえすと、貴子
の仕草で気が付いたのか、私のハチマキをしている男もこちらを見
た。

(尾島……)

また心臓が跳ねたのはどうしてだらう。なぜ鼓動が早くなり、指
先が震えてしまうのだろう。

恥ずかしくて、不自然に目線を逸らしてしまつた。
私を見てたんぢやないよねと思い、後ろや周囲をキョロキョロみ
たが、誰もいなかつた。
(き、氣のせいだよね……) そうだよ、自意識過剰なんだよ、私つた
ら!—)

ハハッと笑い、もうこいつを見てないだらうと、もう一度そつと
尾島の方を見れば……。

(……ど、どうして……)

「Jの喧嘩の中、真つ直ぐにつながつた一つの線。

尾島はやつぱり私の方を見ていた。

今度は逸らさなかつた。逸らせなかつた。

この時の私は、貴子でもなく、青組のアンカーの櫻^{たすき}をして何か言いたそうにして眉根を寄せている雄臣でもなく、尾島だけを見ていた。

各色の一年生がスタートラインに立ち、ピストルの合図で一斉にスタートをしても、一瞬氣を取られただけで、また田で尾島を追つてしまつた。

仲間を応援する尾島から、時々私の方を見る尾島から田を離せなかつたから。

熱いグラウンドを次々と滑走する選手たち。

赤と青が接戦だつたのに、途中で赤組の選手がバトンを落とすと、歓声と悲鳴が沸き起つた。

最下位に順位が下がつた赤組は、2年2組の代表である笹谷貴子にバトンが回ると、彼女がぐんぐんと追い上げ、3位を走つていた緑組の女子を抜かす一步手前まで近付いた。そして、貴子から一年の最後の滑走者である男子にバトンが渡る。

『貴子、急げ！！』

そう叫んだ尾島。バトンを貴子から受け取つた瞬間、バトンゾーンから電光石火の如く飛び出した。

私の目は、初めてトラックを走る選手に向けられた。コースにそつて疾走する、尾島の背中に釘付けだつた。

活躍の場がなかつた私のハチマキを靡かせがら、あつという間に3位の縁を抜かし、コーナーに差し掛かる尾島。赤組の応援席の近くまで走つて来た時には、2位の黄色の選手と並んでいた。

ここからでも原口美恵が前を陣取つて一生懸命応援しているのが見えた。

今なら彼女の気持ちがわかる。わかりすぎむべらー、わかる。

とうとう最後のコーナーに来た尾島は、前を走つている青組の選手の背後に近付いていた。どんどん距離が縮まる赤と青。トップを走る青組の選手は、確か陸上部。学年で一番の俊足の持ち主。それにも引けを取らぬ尾島の足。

『ま、オマエの哀れなハチマキをして、トップを走つてやりますか』

『…ひー』

(……本当に?)

いつもの調子いい冗談だと思っていたのに。

いつのまにか 私のためであつて欲しいと祈つてゐる自分がいた。

気が付けば、私は首に掛けている尾島の汚いハチマキに触っていた。なんとなく恥ずかしくて頭にはつけられなかつたハチマキ。心中で、あと少し、あと少しご支援しながら、そのハチマキを握つ

ていた。握りしめたところからジワジワと熱くなつた。

(頑張れ……頑張れ、尾島!)

祈るように両手で鉢巻を強く握りしめた刹那、赤と青が並んだ。その光景は私にはスローモーションのようで、時間が止まつたかのように見えた。何も音が聞えなかつた。

そして、とうとうバトンゾーンの手前で赤が青を追い抜かし、尾島がトップに躍り出た瞬間。

『赤組が青組を抜かしました!!』

実況中継のアナウンスと今田一番の生徒達の歓声が私の中に飛び込んできた。

尾島はそのままバトンを三年に引き継ぐと、バトンゾーンから流れるようにコースを逸れて失速し、フラフラになりながらその場に座り込んだ。

尾島に群がる滑走済みの赤組の選手たち。ますます赤と青はデッドヒートを繰り返し、佳境に入る色別対抗リレー。

でも、私の視線は。トラックを走っている選手ではなく、相変わらず仲間から激励を受けて叩かれている尾島に注がれていた。

青組のアンカーである雄臣が赤組を抜かして劇的にテープを切つても、私には尾島の姿しか目に入らなかつた。

山野中体育祭～～オマケの学ラン盗難解決編～

「……で無くなつた学ランの行方が気になる読者様の為に、事件の顛末を述べたいと思つ。

結果から報告させてもらえば、学ランは体育祭終了後その日のうちに見つかった。しかも一階の「ある部屋」で発見されたのだ。

体育祭が終わり、佐藤君がボロ校舎の一階の教室を開けてもらおうと担任の青島先生にお願いしたが、先生方は片づけ等で手一杯だつたため、先生が来る前に再度一階の搜索を試みた尾島達。

今度は隣の一組の人達にもお願いして教室をよく調べてもらい、さらに鍵が閉まっていた一階奥の「生徒会室」も徹底的に調べることになった。生徒会室を調べると聞いたブキミちゃんは眉を顰めたが、彼女自身「一階を調べましょ」と言つた手前、この部屋を探索しない訳にはいかなかつた。そして、「……で意外な事実が発覚する。

現会長の片岡君（シルちゃん）が生徒会室の鍵を開けたのだが、扉が開かなかつたのだ。

ボロい校舎なので、建付けが悪くて扉を開けるのにちょっとしたコツがいるらしいのだが、どんなに頑張つても開かなかつた。感触から言つてどうやら扉に何かが引っ掛かっているとのこと。開けるには扉」と取り外さないとダメということが判明し、どうしようかと顔を見合わせていると……傍にいたブキミちゃんは怪しい宗教団体の祝詞のように低いハスキーボイスを轟かせた。

『……なるほどね。そうですか。どうやら窓を調べた方がよさそうね』

眼鏡と歯列矯正の歯をギリコと光らせたブキミちゃん。どうやら

彼女は、自分の聖域^{セントリー}が事件によって荒らされたかもしないことに、いたく立腹のようだつた。

足音を立てずにものすごい速度で闊歩するというスゴ技を披露し、校舎の外に出て裏手に回つたブキミちゃん。

弾かれたように彼女の後に続く尾島達。

生徒会室の窓の下にある花壇に入り込もうとしたブキミちゃんは、ここでも名探偵ぶりを發揮し、ある重要な手掛けかりを発見する。普段誰も来るはずのない花壇の土に足跡を発見したのだ。さらに閉まつている篠の窓に手を掛ければ、その窓はカラカラといとも簡単に開いた。

『フツ…… フフフ、そういうことですか……』

後ろで黙つて固唾をのんで眉根を寄せていた尾島達は、ブキミちゃんがおもむろに振り返り、般若……いや、花のよつな笑顔で「入れ」と顎で合図すると、花壇の足跡を消さないようブキミちゃんの注意を守りながら、一斉に窓に手をかけて一気に攻め込んだ。ガサ入れ開始から数秒も経たないうちに

『……あつた、あつたぞ！…』

まるでお宝を発見した海賊のじとく、狭い生徒会室には歓喜の雄叫びが響いた。

そう、学ランは生徒会室の奥の方に段ボール^{ドア}と無造作に転がっていたのである。急いで中身を確認すれば、学ランは無事だつた。しかし、犯人は用意周到にも学ランの背中の「鬪魂」の文字を所々剥がし、生徒会室の入口は引き戸^{ドア}のところに机を置いて開かないよう細工してあつたのだ。

意図的で悪質な犯行に、一組の生徒、特に応援団員や体育委員は怒りを露わにしたが……被害者の中心人物である尾島が扉を塞いで

いた机を蹴飛ばすと、その場にいた全員が黙ってしまう。そんな重い空気を破つたのは、冷静沈着な手強いスゴ腕名探偵・伏見かおり。

『どうやらこの校舎に侵入したのは、少なくとも三人以上だつたようですね。彼らは生徒会室の鍵を開けて中に学ランを隠し、三人は生徒会室の入口から出て鍵を掛け、残りの生徒は中から扉を机で塞いだ後、窓から出たというところかしら。花壇に足跡も残つてしますし、まず間違いないでしょう。足跡のサイズからいくと、どうやら男性のようですね。26センチはありましたから。さて、尾島君。アナタとしては自ら制裁を加えたいところですが、残念ながら生徒会室の鍵を勝手に持ち出されたという由々しき事態が起つた以上、生徒だけで解決するには、いさか手に余る事件だとワタクシは考えます。ここは“あの時のように”勝手な判断で動くのではなく、先生方に詳しい事情を説明して支持を仰ぎ、大人しく処遇を待つというのが正しい判断だと思いますが、いかがです？既に赤組の応援合戦で、事件は半分以上露見したも同然ですし。先生方もさすがに黙つてはいらないでしょうから』

ブキミちゃんは色々意味深な言葉を残しながらチラリと尾島に視線を流すと、尾島は何も言わず槍の先のような鋭い視線でブキミちゃんを一睨みしただけで、思いつ切り音を立てながら生徒会室の扉を開けて出て行ってしまった。

* * *

ブキミちゃんと佐藤君は尾島達に宣言した通り、事の顛末を先生方に報告した。

この時応援団の人達もその場にいたのだが……報告を受けた青島タオ先生は、そんなに騒ぐほど重要な事件と思っていなかつたらしい。これがごく普通の生徒だったら「山野中でイジメ発覚か？！」と深

刻な事態になるところだが、狙われたのが学年一のお騒がせ男だったからなのか、

『まあ、見つかって良かつたな！ それにしても、手の込んだことやるなあ。悪戯にしちゃ、ちとやりすぎだぞ？ 犯人はよっぽど暇だつたんだな。ハハハハハ』

……などと笑い飛ばしていたそうだ。さすがに尾島がいる手前、「そうですよね、酷いですよねえ。ハハハハハ」と朗らかに返す人はいない、全員黙つたままだつたということだ。

事件は一応解決したが、生徒会室の鍵を勝手に持ち出されたのは事実なので、先生達は一応犯人と思われる人物と目撃した私を呼び出した。それを聞いた尾島は、「体育祭も終わつたし、学ランも見つかつたからもういいだろ？！」と消極的な意見を言い周囲を驚かせたが、事が事なので結局彼の意見は却下された。

呼び出された犯人達は事件の関与を否定した。

私が先生に話した目撃証言にも、「勘違いだ、証拠があるのか」で一蹴されてしまった。逆に「生徒会室にあつたのなら生徒会の連中がやつたのでは？」ととぼける始末。しかし生徒会の人達は全員グラウンドで仕事していたというアリバイがあつたため、その意見は聞き入れてもらえたかったみたいだ。すると今度は、「目撃したヤツが怪しいんじゃないか」など言いだしたのだ。思いもよらぬ反撃に動搖しまくりの荒井美千子、いつものようにピンチ！……が、神はここでも哀れな子羊を見捨てなかつた！ 私以外にも彼らがボロ校舎から出ていくところを目撃した人が何人かいたのだ。しかもその時間帯に彼らが応援席に座つていない事実も発覚。更に花壇の足跡と、生徒会役員である一年男子が、犯人の友人と思われる人物に生徒会室の鍵を渡したことが決め手となつた。

その一年生は、片岡君^{（ツルちゃん）}の命令で生徒会室の鍵を職員室に戻そうと

校舎に向かつたところ、体育委員らしき三年の先輩から、「用具倉庫の鍵を返しに行くから、ついでに返しておく」と声を掛けられたそうだ。一年生は自分が後輩だし、先輩の分も返しに行くと言つたが、「一年男子、集合かかっているぞ」と言われ、先輩の行為に甘えてお願ひすることにした。忙しさの中ですっかりそのことを忘れていたが、生徒会役員が疑われ、ブキミちゃんからひとりひとり尋問を受けたときにそのことを思い出したのだった。

こうして全て証拠がそろうと、とうとう犯人たちは観念し、犯行を認めた。

その後犯人たちとは、先生方の形だけの説教を聞くだけで、特に重い処分を受けることはなかつた。反省文と学校の周囲に落ちているゴミを拾うという奉仕活動を言い渡されただけだ。それでも一応、先生達は学ランを隠すほど悩める事情を抱える犯人達からひとりひとり犯行動機を聞いた。事件に関与していた人物は全部で五名いたのだが、そのうち生徒会室の鍵を一年の役員から受け取り犯人に渡した人物は、「友達に頼まれたから」だそうで、まさかこんな事件になつているとは露知らず、非常に慌てたらしい。残りの四名、私が目撃した三名と窓から脱出した人は頑なに口を閉ざし、結局最後まで何も言わなかつた。その四名は全員バスケ部だったので、先生方も部活の先輩後輩同士でなにがあつたのだろうと、後は部活の顧問も交えて彼らで解決することとなつたのだが、先生方は犯人よりも被害にあつた尾島やその友人である桂龍太郎の行動を警戒していた。「犯人と揉めるんじゃないか」と。しかしそれは杞憂に終わつたようだ。

その後尾島と犯人達の間には特に何もなかつた。……あくまでも「表面上」のはなし、ではあるが。

この先述べることは噂であつて、本人達全員から直接聞いたわけではないのでこつそりと皆様にお伝えしたい。

私が校舎で見かけた犯人達、中でも辺見先輩の友人で唯一顔を覚えていたバスケ部の先輩は、小学校時代に尾島とバスケのポジション争いをしていましたという過去があつたようだ。二人はそのころから何かと衝突することがあり、その宥め役が辺見先輩と後藤君だった。たまに小関明日香が宥めに入ると余計に険悪になり、その先輩が大野小を卒業するまで連日一触即発の状態が続いたという。どうもその犯人は小関明日香のことが気になる存在だったようで……彼女が尾島に味方し、いつも傍にいるのも気に入らない原因の一つだったらしく、廊下で星野君が言つてたように、尾島の友人たちに嫌がらせをしていたみたいだ。

中学に入り、尾島がサッカー部に入ったおかげで一年の最初の頃は特に何もなかつたのだが、文化祭あたりから再び雲行きが怪しくなる。文化祭のリハーサル時に尾島のバスケのプレーを見てお熱を上げ、のちにバレンタインのチョコを渡した当時二年バスケ部女子が、またもやその犯人の気になる女の子だつたのだ。好きになつた子を一度も尾島に奪われ（？）、急にバスケ部に復帰した尾島に大きな顔をされ、友人の辺見先輩は尾島を可愛がるとくれば、犯人が尾島を恨んで学ランを隠すのも無理はないかも知れない。私に罪を着せようとしたその根性は気に食わないが、同情には値する。それでも尾島にしてみればいい迷惑だろうが。

彼らがその後どう折り合いをつけたのかは知らない。この時点で犯人たちは既に部活を引退しており、尾島と接触する機会も無くなつていたので、特に部活内で揉めるなどということもなかつた。ただ 辺見先輩とその犯人は疎遠になつたらしいが。

そのうち学ランの事件を話す人はいなくなり、秋の気配が濃くなり寒さが感じられる頃には、生徒達からすっかり忘れ去られてしま

うのであった。

ダイヤモンドの野獣たち？

「ありがとう美千子ちゃん！」こんなおいしそうな差し入れをしてくれて、いつもいつも悪いわねえ」

「い、いえ！ 喜んでくれて光榮です」

持つてきたケーキの白い箱を開け、皿尻をくしゃりとさせて笑った安西先生に、私はとんでもないと手を思いつきり振った。相変わらず東小父さんに似ている極上スマイルに顔が緩む荒井美千子。安西先生はそんな私の締まりのない顔から部屋にある壁時計に視線を移した。時間を確認すると嬉しそうに振り返る。

「よければ美千子ちゃんも一緒ににお茶していかない？ ちょうど私たちもそろそろ休憩にしようかと言つてたところなのよ。ねえ、みなさーん！ 教え子がお菓子をもつててくれたのよお。一段落していたら、食べましょうよ！」

安西先生は区民センターの一室であるこの多目的室にいる人達に声を掛けると、作業をしていた人達は「まあ！」と顔を綻ばした。次々と手を止めてこちらにやつてきたのは、先生や自分の母親ぐらいの年齢の女性ばかりだった。この部屋に入った時から感じていた化粧品独特のいい香りが、彼女たちが近付くと更に強くなつた。

「IJのお菓子、見て見て！」

彼女たちに声を掛ける今日の安西先生はいつも以上に美しい。普段はナチュナルメイクだが、今はバツチリ化粧を施しキッチリと仕事をしているワーキングウーマンだ。英語の先生とは少し違う雰囲気……そう、デパートの化粧品売り場の売り子さんのような華やか

さを身に纏っている。新色の化粧品を紹介し、メイクをお披露目する販売員の顔だった。

安西先生に「お茶を入れる準備をするわ」と声を掛けた人もやらキレイな人だつた。綺麗に化粧を施しているところをみると、その人も販売員さんなのだろう。一人以外の人達はお客様や誘われたお友達のようで、先生を含め全部で7名ほどいた。

（聞いていた人数より少ないな……）

箱に入っているお菓子の数はちょうど十二個。全部で十名ほどお客様さんが来ると黙つてたのに……でも足りないよりマシかと思つていたら、安西先生は改めて私のことをみんなに紹介してくれた。妙齢の女性たちの前で頭を下げつつ、「み、皆様でどうぞ」とお菓子の入った箱に手を添えると、女性陣の皆様は大きめの白い箱に規則正しく鎮座している「ショーア・ラ・クレーム・シーニュ」を覗きこんで感嘆の声を上げた。白鳥の形をしたショークリームはどうやら好評らしい。

「これ、もしかしてあなたの手作り?！」

安西先生よりも年配だと思われる、首にケープを巻き、完全に化粧を落としたすっぴん顔の女性に問われると、私はギョッとながらもぎこちなく頷き、「ハイ。あ、でも、母にも手伝つてもらいました」と答えた。

私の言葉に目を丸くした中年の女性はホオとため息をついた。

「……やっぱり女の子はいいわねえ。うちなんて男三人だから、こうこうお菓子なんて普段まつたく縁がないもの！ 例え作つても、きっと無言ね、無言。むしろ感想聞いたらろくなこと返つてこなさそうだわ」

「それわかるわ～！ 挙句の果ては『これだけ？』なんて言つのよ

ね～

「そりゃー、腹一杯になんないとか言い出すしねえ。カツプめんとか勝手に出していくし。オマケに身体大きいし、部屋汚いし、服脱ぎっぱなしだし、平氣でオナラするし、すね毛濃いし、朝全然起きないし。まつたくどりして男の子つてああのかしら？」

「ホントよね～……」

どうやらここにいる女性の大半はこの家庭に男の子がいるらしい。眉毛がないメイク途中やすっピン丸出しのまま「カカカカ」と豪快に笑っていた。

「……」

「メントなんぞ百年早い若輩者の私としては、無言のまま引きつり笑いをするしかなかつた。そのまま静かにしていると、安西先生もフフッと笑みを零しながら「ホント、そうよねえ」といいながらウンウン頷いて同意していた。

「あら、でも安西さんのところの息子チャンは、全然違うでしょ？」

「そうよー、それにほら、あの素敵なお嬢さん！　あ～んな息子がいたら、オチオチこんなすっピンで家の中もうつつけないんじゃない？」

この年頃のオバチャンがよくやる招き猫のように手を動かす仕草に、なぜか確固たる年季をひしひしと感じる荒井美千子。安西先生も見た目は若々しく美しいのに、やはり子供をもつ主婦だからか。同じような仕草で返してもなぜか違和感を感じられなかつた。さすがなんだかんだで24時間休む暇もないスーパー主婦達。恐るべし、ザ・オカン。

「そりゃ雄ちゃんに対してはねえ。さすが甥っ子でも、やつぱり気を使うわ。でも、アラタの方はね、そうでもないのよ？ 最近なんて何考えているかさっぱりわからなくて、困りモノなのよね。中学生になつてから全然話し相手になつてくれないし。何か聞いても、『ああ』とか『うん』とか『そう』とかしか言わないのよ？ そのうち『ウザい』とか言われるんじゃないか心配で～」「そうそう！ わたしも『ババア』って言われた時は、さすがにビビったわ！」

「それを考えると、やっぱり女の子は最低でも一人は欲しいわよねえ」

安西先生が頬に手を当てながらフウッとため息をついているのを見て、「そうなのかな」とアラタの顔を浮かべた。

(……アラタ、ねえ。別に普通だと思つけど。……あ、でも、やっぱりちょっと話す機会はなくなつたかなあ。なんか、真美子ともあんまり喋つていらないみたいだし。いいのかなあ、この今まで。だけど……当の真美子があれじやあねえ)

相変わらず雄臣命の真美子^{（リンダ）}。でも構つてもられないせいか、最近拗ね氣味だ。その愚痴をアラタにぶちまけたいようだが、当のアラタは忙しくて相手にしてもられないようで、益々機嫌が悪かつた。考えてみれば、私も一学期までは英語のレッスンの度にアラタと少し話をしていたが、二学期になつてからは話すどころか顔を合わせることがなくなつてしまつた。先生の話によれば、部活でクタクタになつて帰つてくると、すぐタご飯とお風呂、あとは部屋に戻つて少し勉強をして速攻寝てしまうのだそうだ。それでも相変わらず成績は一人だけ群を抜いて学年トップ。一体いつ勉強してるのだ？！ と驚いて安西先生に聞いてみれば、返ってきた答えは早朝勉＆週末勉。ようするに週末と朝早く起きて時間を作り勉強をしている

らしい。確かにそんなストイックな生活をしていれば、幼馴染と話す時間すら惜しいだろう。これが好きな相手で、しかも相手も自分に好意を持ってくれると確信できれば態度が違うだろうが、残念ながら真美子はアラタに恋の矢印を向けていない。

（考えてみればアラタも年頃の男の子なんだよね。そろそろ都合よく相手をしてられないか。女子と気軽に話すなんて恥ずかしいっていうのもあるだろうし）

どうもアラタは私にとって小さいころの姿のまま成長しておらず、デキの良い可愛い弟という感覚から抜け出せない。しかし彼だってもつ中学生。これからぐんぐん頭角を現し、凄い男になるやもしれぬ。いや、確実になるだろう。私が知りえる男性の中では一番の有望株には間違いないまい。人柄も将来性も、だ。それこそ従兄妹の雄臣にも引けをとらないのではないだろうか。

（雄臣かあ……）

私は思わず泣き顔をしてしまった。

ダイヤモンドの野獣たち？

相変わらず外面完璧の品行方正な優等生で、学校のアイドルと化している雄臣。

だが、私と二人きりの時は毎度おなじみの鬼神修羅を発揮しているのも相変わらずだった。今でも英語のレッスンで顔を合わせればすぐに本性がするむけ。先日だつて。

『おい、ちゃんと英語やつてるか？ 今のうちに中学必須単語＆熟語をすべて叩き込んでおけ。日本人がいくら英語を勉強しても身につかない訳がわかるか、圧倒的に単語数が足りないんだよ。あと場数だな。ま、これは仕方がないことだが』

『や、やつてます！』

『フン。英検三級取つたくらいでいい気になるなよ。英英部にはちゃんと行つてるんだろうな？』

『い、行つてます！』

『よし。ならバレー部なんてさつさとやめちまえ。大体マネージャーなんてパシリじゃねーか。それより一緒に勉強でもやろ？』 そつちもア・テストが控えるだろ？ 手伝つてやるから、俺の受験勉強も手伝え。なーに、ミチにとつても来年の受験対策になるし、一石二鳥だろ。ついでに俺と一緒に社会勉強も始めてみるか！ 名付けて、「大人の社会科見学を体験しよう！」 女体の神秘・あれこれ～」だ。若干保体よりもが、気にするな。まったく……こんなナイスアイデアが浮かぶ自分が怖いぜ。これぞまさしく天才だな！』

『ねえ。雄兄さんは品行方正の優等生の筈ですよね？ 受験生ですよね？ そんなことしてる暇なぞありませんよね？』

『照れるなよ。ちょっとした息抜きだからさ。ほら、小出し小出しにしないと……色々と溜まるだろう？』

『溜まるねえ…………って、ななななに言つてんスか？！』

『バカ、ストレスのことだよ。まあ、その想像はあながち間違つちやいない。地味で鈍臭いわりには、なかなかの耳年増だな……スキルアップの補修でも受けたのか？』

『そんな眉根を寄せた本氣顔で聞かないでくださいよ。第一そんな補修、一体何処でやつてるんスか』

『いいぞミチ、その調子でいけ！ ん～そうか。ミチにはまだまだ禁断の果実は早いかと思っていたが……そこは慣れだな、慣れ。心配するな、次第に良くなる』

『才願イダカラ人ノ話ヲ聞イテクダサイ』

『ミチ、これも夜の為、人の為だ。慈善事業だよ。ほら、テレビでも言つてるじゃないか！ 「一日一発！」 つてさ』

『そりや、「一日一善」でしょ「つがつ」。しかも「夜の為」の「よ」の漢字が違うよ…』

日本 舶振興会も真っ青な言葉を吐く雄臣、日本政治界のドン・
 笹 良一もビックリである。

これでは「戸締り用心、火の用心」じゃなく、「とにかく用心、素の雄臣！」だ。いつそのこと高見山に代わって荒井美千子自ら派手に大太鼓を叩き、街中を練り歩いてやるうか。
(つたく……油断も隙もありやしない…)

しかし、しかしである。

一人きりの時はこんな感じだが、不思議なことに学校では以前のようにしつこく私を追い回して脅す……いや、搔き乱すことは少なくなってきた、と思う。あくまでも「思う」程度だが。体育祭以来不用意に学校で声を掛けたり、人の教室にまで来るなんてことはなくなつた。それも当然だろう、なんてつたつて彼は受験生。本腰で受験勉強をしなければならない立場である。それに、こここのところ

週末は予備校と頻繁に東小父さんと住んでいたマンションがある地元の東京〇区に帰っているみたいだった。ライクなカノジョと逢瀬でもしてゐるのだろう。私のことで時間をとられている場合ではない。（ヨシヨシ、いい傾向だぞ！ 大体私だつて雄臣に構つてる場合じゃないし。もつもソラア・テストの対策を本格的にお願いしなきや）

先日から先生に言おうと思つていたお願^いいじを思い出し、一言声かけてから今田は帰りつと先生の方へ向けば、主婦の皆様はまだ井戸端会議に花を咲かせていた。

「やつだあ、安西さんならまだま^{イケ}るつて！ 私の知り合いなんか、45歳で出産したんだからあ！ 今からでも遅くはないんじやない？ もう一人がんばりなさいよお。上の子とだいぶ離れるから、息子ちゃんも面倒見てくれるんじゃないの？」

「う～ん、でもこればかりはねえ」

「やつよねえ。フフフ、やだあ、一人じゃ無理だものねえ？ 今日さつそく、田那さんに頑張つてもらつたら？」

「あらら、なんか羨ましいわ～」

「ホホホホホホ～！...」

安西先生を含めたオバサマ方の意味深な笑い声が区民センターの一室に響き渡つた。

「.....」

まだまだ女豹の若葉マークをつけている私には到底ハードルの高い話である。今は女豹よりも勉強だなと思ひ荒井美千子なのであった。

「そ、それでは先生、失礼します……」

部屋の入口のところに頭を下げる。「『うちそう様』」「次、楽しみにしてるからね」と声を掛けられた。新作メイクをバッヂにお顔に乗せて戦闘準備をしている女性の皆様に笑みを送つて出て行こうとしたら、安西先生が手を拭きながら残つたシュークリームが入つてゐる箱を持つて見送りに来てくれた。

「今日はこれ、どうもありがとう!」「めんね、無理矢理お茶に誘つた挙句、顔をイジっちゃつてえ。えーと、これから今日来るはずだつたお友達のところへ行くのよね?」

「あ、ハイ。今日は来れませんでしたが、今度お願ひしますって言つてました。ひ、暇だしそんなに遠くないので、この新作の試供品をさつそく持つていこうかと……きっと喜ぶと思うから」

「あらやだ、こっちこそいい宣伝になるから、ありがたいわ!でもホント残念だったわねえ。また冬にも『化粧品のメイクアップ講習会』やるから、その時は是非来てねと伝えてくれる? そうそう、雄ちゃんから聞いたわよ? 雄ちゃんのお友達のカノジョらしいじゃないの~しかもキレイだつて! なんだか会うのが楽しみだわ、ウフフ!」

「……ハハ。つ、伝えておきます。ではこれで……あつ、先生。すみませんが、母の化粧品の件、お願ひします」

「わかつたわ、いづみちゃんには注文が届いたら電話するから! ん~それにしても……やっぱり若いっていいわねえ。化粧しなくても、眉と目をイジつただけでしつかりと映えるものよ! 美千子ちゃん、目がパツチリ一重で大きいから、十分だわあ。ああでも、唇はその透明に近いリップ程度で留めておいてね? 口紅ベッタリとか頬紅ザックリとか睫毛バツサリとかダメよ? 『おかちめんこ』になつて、とつてもマズイことになるから!」

「……」

(先生……その美しい顔で『おかちめん!』といつ言葉はちょっと
……)

一步間違えれば卑猥になりかねない言葉を口にした先生に、荒井
美千子、軽くショックだ。が、そこはいつもの気遣いナンバーワン
の精神で愛想笑いに徹した。尊敬する先生の手前、中学生なので普
段は化粧しないなんてハッキリ言えないし。とりあえず、やりすぎ
ると私の顔は『おかちめん!』になつてとつてもマズイことになる
らしい。ここには今後の為に貴重なアドバイスとして素直に受け止め
ることにする。

「そうそうー もしよければこのショーケース、そのお友達に持
つて行つてあげたら? セツカく美千子ちゃんが作つたんだから喜
ぶと思つわよ?」

「え? で、でも……」

「いいわよ! ……つて、あ、『めんなさいね? 折角持つてき
てくれたのに、私つたら失礼よね』」

「いえ! そそそんな!」

「そう?」

「……(何気に切り替え早いな)」

「余つた数が中途半端だから、もう一個つて言つても全員分行き渡
らないし。どうかなつて思つてえ」

「……い、いいんですか?」

「いいわよ、遠慮しないで? お友達にも是非この力作、見せて
あげなさいな! しかしホントいづみちゃん……やだわ、すぐ名前
が出ちゃう! ふふ! 母さんに似て、お料理上手になつてきた
わねえ」

感慨深い溜息をついた先生に、私は「いえそんな……」と頬を染

めて俯いた。安西先生のような人に差し入れを喜ばれたうえに、褒められるなんて。こちらこそ恐縮ものだ。

お言葉に甘えてシュークリームの入った箱を受け取り、今度こそ安西先生に頭を下げる部屋を後にする、先生は「アビィエントオ（またね）！」と女優のように優雅に手を振つて仕事に戻つていった。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

「一日一善」のCM、覚えている人いますか。内容は今の時代にこそ必要な言葉ばかりかも。……最近の若い子は知らないだろうな。CMはYouTubeで見れます。

http://www.youtube.com/watch?v=LpxGmpI_3cc

ダイヤモンドの野獣たち？

区民センターの薄暗い建物から出ると、緩い日差しが眩しくて僅かに目を細めた。空を見上げれば晴れているが雲が多く、すっかり秋の色が濃くなっている。公共施設の独特のにおいから解放されてスッと息を吸うと、新鮮な空気が肺で一杯になつた。季節は11月。空気は少し冷たかったが、特に寒いと身体を縮めるほどではなかつた。ハアッと息を吐くと、私の息のせいではないのに、カサカサと落ち葉が風に煽られ、転がるように移動する。

「……さて、貴子のところへ行こうかな」

もうつたばかりの化粧品の試供品と余ったケーキの入った箱を持ち直して、区民センターの入口の前にある扇状に広がつた緩やかな階段を登つた。階段を登りきるとちょっととした広場が見え、子供たちが遊具で遊んだり、ボール遊びをしていた。ふと顔を横に向けると、広場の端にあるバスケットコートが目に入る。

懐かしい場面が頭を過つた。

遠足のキャンプ前に雄臣と歩いているところを見られ、散々嫌味を言われた不愉快な思い出。今はそのコートに山野中の生徒はいない。かわりに小学生らしき子供たちがゴールめがけてお遊びでシュー一トしていた。

「……」

ボールがゴールの籠に入り喜んでいる子供たちを見ながら、今日部活が終わつて用具を片付けていたときのことを思いだした。用具倉庫の傍にある、体育館から出てきたメンツと鉢合わせした時のこと。

訳もなく顔が熱くなるのを振り払つよつて、パツと視線を逸らして後ろを振り返つて目線を上げると、多目的室の窓がいくつか見えた。左端の一室が私が先程までいた部屋。今でもオバサマ方が歓談をしながら、安西先生から一生懸命マイクアッププレッスンを受けている。

（貴子、せつかく楽しみにしていたのに……）

貴子の残念そうな顔を思いだして、ふうと息を吐いた。

実は母と一緒に来る筈だった、安西先生が販売員をやつしている化粧品メーカーの商品お試しのイベント。しかし、母はどうしても外せない町内役員の用事が入つてしまい、私だけが行つても仕方がないで、マイクに興味がある貴子を誘つてみた。案の定一つ返事でOKをもらつたのだが……これまた貴子も用事の入つたお父さんの代わりに病院に行くことになつてしまつたのだ。

中学生一人で化粧品のイベントに行つても仕方がないので、断るつもりだつたのに。いつの間にか私が急遽忙しい母に代わつて差し入れのお菓子作りも代打することになつたのだ。それがなければ、今頃私は。

（差し入れに行かなきや、試合見たのに……。けど、無理して試合見てたら、折角早起きして作ったシュークリームが無駄になつちやつたものね）

今頃「練習試合」を見て一生懸命応援しているであろう友人たちを思い、一人苦笑した。

無理矢理頭から「練習試合」のことを追い出し、バスケのコートを見ないように広場の端にそつて歩いた。区民センターの入口に向かうと、入り口を挟んで広場の反対側に見えるのは、金網で周囲が囲われている広いグラウンド。どうやら草野球をやつているらしく、野太い掛け声が聞える。

（もうそろそろ、貴子も病院から帰つてきてるじろだよね。部活の帰りにそのまま行くつて言つてたし）

私は午前中の部活の練習中に貴子と話した内容を思い出し、ぽんやり化粧品の試供品が入っている袋を眺めた。

最近貴子の元気がない。本人は明るく振る舞つているのだろうが、傍から見たら空元気なのがバレバレだった。

お母さんの容体が夏からずっと芳しくないのだ。

部活に参加する日も日に日に減り、今は週に一回程度。今日みたいな日曜の午前中だけで、平日はほとんど顔を出してない。今日も部活が終わったらすぐに帰つて行つた。久しぶりに一人きりで話した貴子によると、家を出ているお姉さんが近々帰つてくるかもしれないとのこと。せっかく入つた学校をどうするかで家族と揉めているそうだ。休学にするか、それとも学校が遠いので退学し、比較的近い医師会の準看護婦の学校に入つて一から始めるか……。どちらにしても、本人達にとつて辛い選択には変わりない。

貴子の力になつてあげたかった。けれど、私には何もしてあげることができない。時々お見舞いに行つて、こうして差し入れしたり、話を聞くことしかできないのだ。

彼女の心を芯から支えてあげられる人が傍にいればいいのに、と思つ。もちろん私はそのつもりだつたけど、こういう時つてそのまま性じやなくて、違う意味でホッとできるような優しい男の人がいいんじゃないだろうかつて思うのだ。苦にならず甘えられて、温かく包んでくれる人なら尚いい。できれば、それが日下部先輩であつて欲しいのに。

(なんか、遠慮してるんだよね……貴子)

一回だけ貴子のお母さんの病室で顔を合わせた日下部先輩。

貴子の話によれば、先輩は結構頻繁にお見舞いに来てくれるのだそうだ。申し訳ないからいいと言つても、「そんなこと気にするな」と爽やかに返す日下部先輩。中学三年生なのに、なんてデキた人なのだろう。でも貴子はなんだか辛そうだった。本人も気にしないでと言うのだから甘えればいいのにと思うが、貴子としてはそうもい

かないのだろう。確かに実際貴子の立場になつたらそう思うかもしれない。なんだか申し訳なくて。だって、彼は受験生なのだ。

(……それなのに。あの幼馴染の連中や原口美恵ときたら……昔のよしみで一回くらいは見舞いに来てもいいんじゃないのうか)
かつては仲良くしていたはずなのに。

特に原口美恵と小関明日香、そして最近女バスの三年と付き合った金髪強面男。一人の姿をぼんやりと遠くから見ていた貴子の傷ついた横顔が頭から離れない。なんだか無償に頭にくる。もどかしさにイライラしたところで、フツと自嘲した。

(何言つてんだが……私だつて人のこと言えないじゃん)

ちょうど二年前、私だつて同じことをしていた。幼馴染のお母さんが入院していたのに、口クに見舞いも行かなかつた。それどころか、雄臣のお母さんが母を詰るのを見て、「一度と行くもんか」と思つていたのだ。もう先は長くないことを知つていたのに。

雄臣は私が貴子のお母さんのお見舞いに行つてることをどう思つているだらうか。多恵子小母さんの時は全然来なかつたくせにと、今更偽善者面かよと鼻で嗤つているだらうか。

(私がやつてることつて、自己満足つてやつなんだろうな)

今の自分と、三年前の自分の取つた行動を比べると苦笑しか出でこなかつた。もちろんあの頃の不安定さは、すべて自分のせいとは思つていない。そこまでお人好しでも自虐的でもない。あの当時の父と母が、ギスギスピリピリしていて家族全体が今にも切れそうなもろい吊り橋の上を渡つているような感覚だつたせいもある。しかし。

(……つて、やめよ。そんなこと考へたところで、時間が戻るわけじゃないし)

この際偽善者でも何でもいいじゃないか、と思つた。それで貴子の気が少しでも晴れて元気になれば結果オーライだ。ようするに、誰かの支えになればそれでよい。そのためのシュークリームと試供品に視線を落とし、無理矢理口元に笑みを浮かべた。気合を入れる

よつて背筋をしゃんと伸ばして歩く。負の感情を弾き飛ばすよつて。

その時 カツカツカツとコンクリートの上をバイクで走る音が聞こえた。その音に被せるよつて……。

「Hey! そこのカノジョ…」

突然聞えてきたのは、私を纏っていた真面目な雰囲気を無理矢理剥ぐような力強い掛け声。

(……はつ? !)

私は頭に疑問符を浮かべながら、一応周囲を確認するよつて見回した。もし呼びかけたのが私じゃないのに振り返つたら、非常に恥ずかしいし。

「やつだな~ユ~だよ、Y~O~U~! 両手に荷物抱えた、そこのEカツツボインのカ・ノ・ジヨ~! よければオレツチの熱いタマで愛のキヤツチボールしながら親睦を深めな~い? !」

いきなりズッコケそうになつた。バナナも石もないのに。

普段でも滅多にお目にかかるないナンパのひな型のような口説き文句。所々声の主の人間性が色濃く出ている内容がこれまで残念極まりない。大体ここは如何わしそうな親睦を深めるより、まず「お茶しない?」が基本だろ。いやいや、そんなことより。

(どうあが、ボインじゃつ！…)

私はカツと目を見開き、ガバッと後ろを振り向いた。そこには、爽やかに手を挙げながらこちらに向かって走ってきてくる、野球のユニフォームを着た背の高い男。ユニフォームには「大野ゴールデンカップス」などと「これまた微妙なチームのネーミングが堂々」と男の胸を飾っている。残念ながら野球帽を目深に被っているので、顔が見えない。しかし、帽子からはみ出している髪の毛が……。

(…………赤い髪…………)

激しく嫌な予感がした。

アホな口説き文句で声を掛けてきた野球青年は帽子をおもむろに取つた後、その手を振りながら強面の顔を満面な笑顔にして近寄つてくる。青年の赤い髪と耳にある派手な金銀のピアスは秋の色づいた木々に溶け込み、哀愁を感じさせるどころか奇襲を試みるためにわざと迷彩化にしたとしか思えない。

(あわわわ……ななんなんあのオトコがここにいつ？！)

大概厄介ごとというのは、しまつた！と思つた時点で既に遅い。もう一度と会わないと思っていたのに。どうしてくれよう。このままあの男を無視していくにはバツチリ目が合いすぎてしまつたではないか。「アバヨ！」などと言つて走つて逃げるには、私の足では遅すぎる。しかし相手の青年はこちらに近付くにつれ、何故だか

勢いとオーラが段々と下降気味になつた。私の目の前まで来たときには、何かが違う、納得しかねるという険しい顔。

「……オイ、どうこいつった？ 思つたよりも地味じやねーか！！」

私の頬が思いつ切り引きつった。

しかもこの男は、私のことを思いつきり忘れているようだ。

ダイヤモンドの野獣たち? (後書き)

赤髪ピアス、再び参上!

ダイヤモンドの野獣たち？

『……オイ、どうこいついた？ 思つたよりも地味じゃねーか？！』

ほぼ一年ぶりに会う赤髪ピアスこと桂寅之助先輩は、思いつ切り失礼な言葉を幼気いたいけな中学一年生の女子に投げつけた。

いや、自分が地味なのは重々承知しているつもりだ。しかしこうも正面から突きつけられれば、いくら控えめな私でも傷つくつてもんである。私はムスッと黙っていると、赤髪ピアスは「おや？」というように目を細めた。脱いだキャップで首のあたりを軽く叩きながら私の姿をジロジロと眺めるうちに、その顔が段々と険しくなっていく。なんとなくヤバイ雰囲気に慌てて愛想笑いを浮かべると、赤髪ピアスは私の引き攣つたイタイ満面な笑顔を無視し、もう一步間合いを詰め顔を近づけた。

「なんか……オマエ、どうかでオレと会つたこと

「いえ！ 初めてです！ 初対面です！ まったくもつて会つたことがないであります！」

私は赤髪ピアスが言い終わる前に敬礼する勢いで一気に否定の顔を宣言し、うる覚えの記憶を呼び起し始めた。すかわざ封印をせもらつた。ていうか一生忘れとけ。

「どうだっけか？ なんか引っ掛かんな……」

田の前の赤髪ピアスはもう一度首を傾げながら思いつ切り眉根を寄せたが、ここは相変わらず厄介な弟と同じ強面の桂兄に向つてヘラツと引き攣つた笑いで誤魔化した。一人の間に微妙な空気が流れ

たが、赤髪ピアスは単細胞だったのか意外にあつさりと「ま、いつか！」と思考を放棄し、ガシリと私の肩を掴んだ。

「仕方ねえ、この際地味なのはその豊満なボインに免じて大目に見てやるか！」

「ええっ！ ななんなんでそうなるの？？」

「ははあ～なるほどなるほど、わかつたぞ！ もしかしなくてもチミ、オレっちのファンだな？ 追っかけだな？！ もう、水くせえなあ～。氣を引くためにこんな遠巻きから見てたり、恥ずかしいからって声掛けてもわざと無視したり、やることがいちいち回りぐどいつつーの！ そんな照れなくてオレの雄姿を応援させてやらから！ おお？！ もしやその手に持つてるのはオレの為の差し入れですか？！ 地味な割には意外とやること王道だな、オイ！」

「ヒョウニー！ 思いつきりズレとるがな！」

赤髪ピアスはぽろっと出た私の言葉をろくに聞かず、般若の笑いでドーンと私の背中に紅葉マークを施した。どうしたらここまで勘違い……いや、プラス思考ができるのか。地味地味と連発された怒りより、そのオメデタイご機嫌な脳みそをこさえている赤髪ピアスがちょっと心配になつた。

「さ、こつち、こつち！ どうせだから特等席で見学させてやるつて！ 大丈夫大丈夫、ボールが当たらぬようにオレがガツチリ全身全靈でその貴重なボインを守つてやるからー。でも万が一の場合の時は勘弁な？ 残念ながら部外者だから保険はおりねえけど、その気になれば相手からチョチヨイと賠償金を巻き上げるぐらいの物騒な連中がチームに揃つてゐるから安心したまえ！ あ、それとも？ いつそのまま一人つきりで愛の逃避行がいいとかつ？ 地味なくせに言うこと大胆だな、オイ！ や、困ったなあ～今オレっち、カメラマン且つ助つ人で草野球のバイト中なんだよね？ あと少し

でこんなショボいゲーム終わらせるから？ ガツツリとバイト代せしめたら、ほら、そこ近くの『ホテル・ダブルスラッシュ！』でダブルと言わず夜通しで熱いスプラッシュ！ ちなみに、ほぼ鏡張りの『魅惑のミラーでムラムラーム』がオレっちのオスメ！ 是非この素敵空間で二人の未来を語り明かしたいところだがよ？ 燃えすぎちゃって語り明かす暇がないのがこの部屋の難点なんだよな。まったく、罪だよな、鏡つて！

罪なのはアンタの頭だよ。

……とは言わず、かるうじて耐えた自分、スゴすぎる。しかし心中で自画自賛している場合ではない。その間にも性懲りもなく私の肩を掴みながらズルズルと引きずる赤髪ピアス。その姿はさながら、『いいから、いいから！ ちょっとだけ、な？ 何にもしないから、入るだけ！ ためしに、入口から出口へ通り抜けるだけ！』『ええ～！ で、でも……やつぱりい～』

……などと付き合つたばかりのカノジョをなんとか宥めしかしながら強引にラブホの入口に連れ込むお調子者のカレシの図、そのものだ。

私が口を挟む隙を『えぬままフェンスにあるグラウンドの出入り口のところまで無理矢理引っ張られると、さすがの私も本気で慌てた。

「い、いや！ そそそうじゃなくてっ！ 私用事がありまして……ちょ、ちょっと本当に困ります！」

「今更カマトトぶんなよ、にあわねえぞ！ ……って、あれ？ やっぱ、おかしいぞ……このどもり具合、どうかで聞いたことが」

キラーンと目を光らせながら赤髪ピアスがこちらを見下ろすと、

ガシャンと金網を掴む音が真横から聞こえた。私と桂寅之助先輩が音の方向へ顔を向けると、そこには。

「寅二ーイ、何やつてんだよ？！ チュンジだから卑くグワウンダコつ……て、あ、あれ……？ なつ、なんでつ？！」

金網越しに強い口調で赤髪ピアスに言つたのは、同じ「大野ゴールデンカップス」のユニフォームなどを着ている、色黒坊主でつぶらな瞳の。

「ほほほ星野君？！」

「荒井さん？！ ……つて、じつして！」？！ や、だつて、

今日、バスケ部の『練習試合』見てんぢや……」

毎度おなじみのじもつた私の驚いた声に、星野君はそのつぶらな瞳を大きくしながら驚愕の表情を浮かべると。

「あつ…………！ 思い出したぞ……テメエはあんときの犯罪まがいのボイン……！」

赤髪ピアスは足軽の封印をつとも簡単に吹き飛ばしてしまった。

* * *

「しまつていじゅせー

「つおおおおーー」

ダイヤモンドの軸になる捕手がおもむろに立ち上がり、マスクを

取りながら野太い声を掛けると、グラウンドに散っている「野球少年」……じゃなかつた。「野球中年」の皆様は手を振りながら声を返した。回も終盤に差し掛かっているので、若干気力が足りないのは気のせいではない。

現在試合は六回の裏。一塁側ベンチである「大野ゴールデンカッブス」の攻撃。バッターボックスに入るのは。

「寅之助！ ホームランじゃ、ホームラン！」

「一発叩き込んで、トドメをさしてまええつ！」

「ほうや！ 愛しのミサコちゃんに下半身のバッドを叩き込む前にここにいらで一発いいとこ見せろや！」

聞き捨てならない声援が一塁側に座っているプレイヤーズベンチから放たれた瞬間、私は遠慮がちに飲んでいたスポーツ飲料を豪快に噴出していた。少し鼻にも逆流したとようで一人激しく咽いでいると、私の隣に座つてスコアをつけていた星野君がビックリしながら「大丈夫か？ 荒井さん！」と慌てて背中を摩つた。しかし反対に並んで座つていた巨体の男は「きたねつ！」と仰け反る。

「……」

悪いのは自分が、さすがに「汚い」とハッキリと言われムツとしてしまって、思わず隣の巨漢を睨んでしまった。しかし相手は中学生のくせに団体がデカイうえに短めのモヒカン＆眉毛なしでヒゲあり。「あんだあ？！」というような顔で睨んできたので、瞬時に私のファイティングスピリットは消失し、自動的に愛想笑いが顔にセツトされた。大体こんな悪役商会みたいな男に勝てるわけがないだろ、空氣読め私。

それよりも口から噴出した污水が、膝の上に置いてある預かつたカメラにかかるといか慌てて確かめた。とりあえず目だつた飛沫

はかかつてなかつたのでホッとし、一応ササッとふき取つた。危ない、危ない……この少し古くて高そうなカメラを水浸しにしたら、バッター ボックスにいる赤髪ピアスからバッドを投げつけられるだろつ。

「バカヤロッ！！ 誰が『愛しのミチコちゃん』だつ！ そのボイ
ンはな、オレの女スケでもなんでもないつ」

ズバーン！

「ストライク！」

桂寅之助先輩はベンチの野次に怒鳴り返したようだが、途中で途切れた。言い返している間に相手チームの投球がキャッチャーミットど真ん中に決まつたからだ。余計なシャウトをしたせいで、審判の間の抜けた「ワンストライク」の声がグラウンドに響く。

バッドを構えた赤髪ピアス男は一瞬啞然としたが、すぐにキャップから覗く目を光らせながらギロリと一塁側のベンチを睨んだ。なんでも現在は「山野中の鬼夜叉」から「美園の赤鬼」という通り名を賜つてゐるらしい。どちらにしても物騒な話である。

「オイ、『ゴラアツ！！ テメエらが変なこと言つから貴重な一球を見逃しちまつたじゃねえか！ 一幸カズ、相撲力士、その口クでもねえジジイ共を黙らせろやつ」

桂寅之助先輩は外野の先のフェンスではなく、味方のベンチに向つてビシッとバットを翳した。赤鬼の顔から察するに、スタンドではなく、この屋根がかろうじてついているショボいベンチにボールを叩き込みたいようだ。しかしどんちに座つてゐる野球中年は赤鬼の苦情をギャハハハ～という大爆笑で軽くあしらつた。

ダイヤモンドの野獣たち？

(……困ったな。厄介な奴らに捕まっちゃたかも)

私は桂寅之助先輩から目を逸らし、ハアと溜息を吐いてしまった。さつきまでは人のことを一生懸命口説き落としてたくせに、星野君の呼びかけですっかり一年前の記憶を呼び起したらしく、私に対する態度が180度変わってしまったのだ。

『……やつぱりどこかで見たと思ったたら！ そうだよ、その鈍くさくて地味な雰囲気……去年の暮のキャベツもまともに切れない犯罪まがいのボインじゃねえかっ！ やいやいボイン！ テメエよくも素敵なおれ様の顔をすっかり忘れ、初対面なんて抜かしやがったな？ おうおう、おれ様を忘れた落とし前、キッチリつけてもらおうじやねえのよっ。とりえずこの差し入れらしきケーキの箱は没収しどぐーついでにおれ様の助手と肩もみでもやってもらおうかっ！』
『ええ？！ そそそそんなつ！ そ、そりゃお互い様といつもんじや……』

『ダメダメ！ 言つとくけど、この桂寅之助様が本気で怒ればこの程度じゃ済まねえぜ……なんならおれ様のストーカ、今すぐこの場で味あわせてやつてもいいんだぜ！…』

『ヒイツ！ まままさかつ、公衆の面前で健全な小説には載せられないアンナことや、コンナことを……』

『そ、そ、そ、そ、アダルティな読者様のハートをがっちり掴むアンナことや、コンナことをだな……って、オイッ！ ヤれるわけねえだろ、こんな感じで！ 思わず想像してウットリ夢見ちまつたじやねえかー！』

『……あのお、それは私のせいになるのでしょうか……』

『当たり前だ！ ともかく！ そのEカップに成長したボインに免

じて、この程度ですべて帳消しにしてやるうつてんだ。オレ様の慈悲深い心に感謝するんだな！ それともなにか？ そのボインを思う存分堪能させてくれるとでも言うのかよ？』

『助手と肩もみ、喜んでやらせていただきます！』

ものの数分で決着がつき、ていうか、星野君が慌てて中に入つてくれたので大事にならなかつたのだが……荒井美千子はすっかり赤髪ピアスのジャーマネという名のパシリと化していた。

が、待ち受けっていた試練はこれだけではなかつた。

赤髪ピアスと星野君（言つておくが、星野君は桂先輩に命令されて渋々）に連行されてベンチに入つてみれば、さらなる厳しい試練・その一がお出迎え。その人物が……

「ひでえよ、寅之助さん！ オレは『相撲力士』じゃねえ、『相模力』……」

……そう叫んだ隣の男である。

生意氣にも赤髪ピアスに物申すほど勇敢でモヒカンの巨漢な彼は……つておいおい、なんだか韻ライムを効かせたラップにでもできそうだぞ。やらないうけど。そのかわり、

『ああ、一字多いけど、一瞬見たら漢字似てるよね！ しかもそのモヒカン、マゲのつもりですか？！ ヒヤハハハハ！』

……と心中で爆笑するぐらいは許してもらいたい。ともかく、そんな彼は髭が生えているクセに私と同じ中学二年生だった。

「へそお～俺は力士じゅうねつづーのー！」

いつまでも根に持つしつこいタイプの相撲力士こと「本名・相模力」は、桂寅之助先輩の言葉に相当贋を曲げているようだ。いつの間にか人が丹精込めて作つたシュークリームを勝手に取り出し、遠慮なく頬張りながら悪態ついていた。（もう赤髪ピアスに捕まつた時点でシュークリームは諦めた）

「うう言つちやなんだが、手にしている白鳥がヒヨコに見え、口の端から白鳥の首がひょっこりはみ出でているその姿は残酷な光景以外何物でもない。しかも文句を言いながら口から放たれているシュークリームの残骸。丹精込めて菓子を作つた私の努力が、こんな仕打ちで一瞬に消えたこの事態を哀れと言わずしてなんと「ううのだろう。「きたねっ！」などと私を罵倒できる立場ではなかろうよ、相撲力士よ。

私の背中を摩つていた隣の星野君はため息を吐いた後、相撲力士と煩くヤジつてゐるオヤジに声を掛けた。

「力、^{つとむ}食いながらしゃべるな。それに玄さん達、声掛けたら寅二イ打てない」

星野君は苦い顔だが落ち着いた声で私の隣の力士と野球中年たちを諫めると、ヤジの中心人物らしきオッサンである「玄さん」と呼ばれた人は、耳に掛けていた煙草をつまんで口に咥えながらニヤつと笑つた。唇の間から覗かせている、ギラツと光る金歯とヤーのついた黄色い歯が、色黒パンチパームのお顔に華を添えている。一見殺伐とした光景だが、あまりにも絶妙な具合でマッチングしすぎて、いつそ清潔さを感じさせるほどだ。

「……」

確實に只者ではない、試練・その一であるこの「玄さん」という人は、本名「鬼頭玄造」^{きとうげんぞう}と言い、大野商店街振興会長且つ「大野ゴ

「ルデンカップス」の監督であった。

どうからどう見ても名前の雰囲気を裏切らず、

『むしろ「セトリ」というより「おにがしら」だろー。』

……などとツッコミを入れたいほど、あこぎな商売をしてそうなヤクザ風を醸し出している玄さんは、これでも商店街の中にある「鬼頭不動産」の社長である。

そんな存在自体が神がかり的な「玄さん」とこと鬼頭社長は、日曜という書き入れ時にも関わらず、試合以外の休日は煙草のかわりに赤ペンを耳にさして競馬場をうろついているんだそうだ。「大野ゴールデンカップス」という名前も、「一年の計は元旦でなく金杯にあり!」という競馬ファンのゆるぎない情熱から命名したと自慢していた。そんなどうでもいい情報を頭の中で流していくと、玄さんは球場内のベンチなのに堂々と口と鼻から煙を吐き出し、ケツと鼻で嗤つた。

「バカ言え、そう簡単に寅之助に打たせてたまるかつてんだ! こつちはな、金が掛かつてんだよ! つたく……ヒットの数だけバイト代弾むなんて言わなきや良かつたぜ。大体な、こんな声援ぐらいで動搖するたあ、自称百戦錬磨の寅之助もまだまだ修行が足りねえだろうよ? ! それよりな、酒屋のボン(星野君のことだ)。優男も結構だけどな? ボケーとしてると隣のミチコちゃん、本当に寅之助にヤラれちまつぞつ! ややや、モテモテだねえ~ミチコちゃん!』

「……」

玄さんの言葉にベンチの選手は爆笑つたが、私は鼻のところをハンカチで抑えながら「ハハハ」と引き攣り笑いをするしかなかつた。本当は、

『オラア！ 誰が好き好んでアタイがあんな赤鬼にやられなきゃならんのよつ？！ むしろここは鬼退治やひー！ 桃太郎自ら、再起不能になるまで殺つてやるわい！』

……と言いたいが、言えない。

なんせこのベンチに座っている「大野ゴールデンカップス」のメンバーが、玄さんだけでなく、これまた見ただけでドン引きするような雰囲気の持ち主ばかりだからだ。

どう見てもカタギとは程遠い、オールバックだの、金髪の長髪だの、眉毛なしのスキンヘッドだの、金色のアクセサリージャラジャラだの、歯が欠けているだの（決して入れ歯や差し歯の注文待ちとかではない）……如何にも、

『若い頃、絶対色々ヤラかしましたよね？』

……というタイプのオジサマたちばかりだった。

ともかくそんな連中相手では、中学生の女豹初心者が太刀打ちできるわけがない。

隣の星野君は苦い顔をしながら小さい声で「ごめんな、荒井さん」と謝った。別に星野君が悪いわけではないので愛想笑いで誤魔化していると、再び聞こえてきた「ツーストライク！」という審判の声。バッター・ボックスの桂寅之助は見事なほどの空振りをしており、チキショー！ とホームベースに向つてバットを振り下ろしていた。その姿は金棒を振り回し暴れまわる赤鬼そのもの。全然笑えない。

「オラオラ、寅之助、真面目にやれえ！ ここで墨出ねえとバイト代ピンハネすんぞつ」「「そうじや、そうじやー、ピンハネじやーーー」

ヤ二男・玄さんが追い打ちを掛け、他のプレイヤーがさらに煽つた。「じゃかあしいつ！！」とバッターが怒鳴り返した次の瞬間、三投球目が放たれる。

力キーン！

そこそこ速い（らしい）相手の投球をバッドに当てた赤鬼は一塁に向つて走つた。球は意外に伸び、ボールはセンター・オーバー。赤鬼は一塁ベースから一塁へ。その間、センターは慌ててボールを拾いセカンドへ送球されるとワンテンポ遅れのようにスライディングで滑り込む赤鬼。判定は？

「セーフ！」

「やつた！」

星野君は純粋な野球少年らしく素直に片手でガッツポーズをとつた。メンバーも「ヒヤヒヤさせやがつて！」と文句を言いつつもやんやんやの拍手を送つている。しかし……星野君がセンター・オーバーの二ベースと啖きながらスコアブックに書き込むと、すかさず横からおさんかく口を出した。

「ボン」

「はい？」

「『センター・オーバー』じゃない。ありや相手の『エラー』だ。スコア、書き直せ」

「ええつ？！でも、あれはどう見てもヒットじゃ」

「ボン！」

「…………了解」

星野君は再びため息を吐きながら消しゴムをかけると、反対側に

座っている相撲力士は遠慮なく爆笑した。ヒットが相手のエラーに変わったことも知らない桂寅之助先輩は、呑気に？サインをベンチにアピールしている。おそらくバイト代のピンハネが免れたと思っているのであろう。事実を知つたらどうなるのか。その先是あまり想像したくない。

「さ、大野ゴールデンカップス、本日のクリーンナップ登場だ！
惚れるなよ、ミチコちゃん！ ワンアウト一墨か……総一朗、絶対
打てよ！ セコイ小細工せずに思いつ切りかっ飛ばせや！ おら、
一幸も力も準備しろ」

玄さんがこっちを向いて声を掛けると、星野君は頷きながら立ち上がり、スコアブックを玄さんに渡した。隣の力つとむと呼ばれた相撲力士も急いで最後のシュークリームを頬張る。私は隣の圧迫感から解放され、ホッと息をつきながら改めてグラウンドに目をやつた。

視線の先には、次打者が待機するサークルからバッター・ボックスに入る三番打者の男の子。試練・その三である、総一朗と呼ばれた男。

私はその男から視線を外し、俯いてひざ元の桂寅之助所有のカメラをジッと見た。バッター・ボックスの男とは似ても似つかない、しかし人を「チチコ」呼ばわりするところはソックリな総一朗の兄を苦々しく思い出しながら。

ダイヤモンドの野獣たち？（前書き）

お待たせしました申し訳ありません。そしてお知らせです。
「ダイヤモンドの野獣たち？」の「現在試合は四回の裏。」の部分
を「現在試合は六回の裏。」に訂正させてもらいました。「了承く
ださいませ。」――――――――――――――――――――――――――――

ダイヤモンドの野獣たち？

「ありがとうございました！」

グラウンドに爽やか……ではない中年の濁声がこだました。二チームの選手たちは帽子を取り、頭を下げて握手をした後解散。それぞのベンチの方へ戻ると、相手チームへエールを送るために円陣を組み、小気味よい大声を張り上げた。

試合結果は6対2で大野ゴールデンカップスの勝利だった。

……というより、勝つても不思議じやないと思う。だって、こっちはナインの中に、元気ハツラツなティーンエイジャーが四人もいて、しかも全員野球経験者なのだから。

そう 意外なことに、本日カメラマン兼助っ人として参戦した桂寅之助先輩は、リトルリーグ経験者だった。相撲力士こと相模力は、星野君や諏訪君と同じリトルリーグのチームを経た後、河田中の野球部へ入部（姿からしてたぶん現在は退部と思われる）。星野君は言わざと知れたシニアの職人スラッガー。そして最後の四人目、またの名を三番目の試練である総一朗と呼ばれた男は、同じくリトルを経た後、中学一年生のくせして現在シニアの控え投手。（……オイオイ、こりゃどう見ても反則だろ）

いくら人数が足りなかつたとはい、オヤジ中心の草野球に若いバリバリの現役選手を投入するとは……さすが鬼頭組長、いや、鬼頭社長監督。見た目通りやること結構えげつない。

それでも、私がくる直前までは同点だつたというのだから、今回の相手は強かつたのだろう。それがあの桂寅之助先輩がセンターオーバーを放つた後から試合の流れは変わつた。次の三番打者である総一朗はフォアボールで一塁へ、本命四番打者の星野君は内野安打。あつという間に一死満塁。トドメは見た目をまったく裏切らない、「ドカベン」ならぬドデカイ相撲力士が放つた特大ホームランで

気に4点追加。その後は抑えられてしまつたが、次の7回表の相手の攻撃が無得点の時点で、ゲームセットというわけである。

(やつと終わつたよ！ 今のうちじかへに紛れて退散しとか。
貴子の家に行くの遅くなつちやつしね)

グラウンドを見れば、勝者の大野ゴールデンカップスがトンボがけをしていた。やつているのは、もちろん若者オンリー。ドン引き物騒中年連中は悠然とベンチに戻ってきた途端、「終わつた終つた」と殴り込みが終わつたヤクザのように一仕事終えた満足顔でグラウンドを去つていく。

(シメシメ、ナイスタイミング！ アイツらが仕事をしていのうち
に、玄さんに急いでいるので帰りますって言えば万事OKだよね？
星野君に挨拶したいところだけど、どうでもいいオマケが三人も
いるからな……。そうだ！ 玄さんに伝言を頼めばいいか！ もし
こっちに気付いたら頭を下げればいいもんね。それに星野君は明日
学校で一言謝れば　)

ウンウンと一人納得し、自分の分のトンボがけを押し付ける赤鬼と相撲力士の小競り合いを横目で見ながら、ベンチに戻ってきた玄さんにいそいそと近付き声を掛けた。

「あ、あの……お疲れ様デシタ。し、試合も終わりましたし、用事
があるので、これで失礼を……」

「おう、嬢ちゃん、ありがとな！ いや～愛ある熱烈な声援ぶりに
オイちゃん思わず下半身まで痺れちゃつたぜ！」

「……い、いや、愛……が込められていたかどうかは……イ
マイチ自信がありませんが……」

「わけえのに謙遜するなつて！ それよりこれから『まるやき』で

打ち上げだから、嬢ちゃんも来い！ やっぱ酒の席には華がねえとよ～

「……（わたしや、コンパニオンかい！）」

「あ、心配すんな？ いくらなんでも中学生には手を出さねえよ、犯罪になっちゃうもんな！ 残念ながら女は『もどき』の蝶子しかいねえが……つて、や、蝶子も心根は意外と悪くねえんだよ？ けど見た目がバケモノじゃなあ～」

「……（人のこと言えないのでは……）」

「な～に、蝶子と酒屋のボンもいるから、寅之助もそうそう嬢ちゃんに手え出せねえだろ。だから安心しなつ。ハツハツハ～！」

「……それはそれは心強い……（わけ、あるかつ！…）」

大変なことになった。

本当に今更だが、どうして私の周りには人の話を聞かない＆勘違
い連中が集まつてくるのか。この玄さんを始め、赤鬼にブキミちゃん、それに雄臣。何か悪い靈にでも取り憑かれているとしか思
えない。ここは墓参りより、思い切つて除霊を頼んだ方がいいのか
もしれない。

そんなことを考えているうちに、私の言葉を思いつきりスルーし
た玄さんは、「これ持つてくれや」とスコアブックを私に押し付け
て、グラウンドの出入り口があるフェンスへ向かつて歩き出してしまつた。迫力に負けて思わず「ウイッス！」と素直に受け取つてしまつたところで、ハツと我に返る荒井美千子。

「ヒヨコつ！ ちがつ！ わわわ私、これから大事な用事がありま
してですねつ！」

慌てて玄さんの後を新入りの舎弟のように付いていくと、それを
引き留めるよつこ、若がしらである赤鬼に後ろから大声で怒鳴られ
た。

「」おーひー、ボイン！ オマエはまだゲームセシトじやねえ、こいつに戻つてこい！」

「ヒツ……」

赤鬼の咆哮に条件反射で振り返ると、怖いお顔で睨みながらこっちにここと手招きしていた。どうやら赤鬼は最後の最後まで私を口を使つらし。

（気付かぬふりしてそのままさんについて退場すれば良かつたのに……振り向いた私のバカ！）

そうは思つても後悔先に立たず、だ。まあ、この時点で赤鬼の言葉を無視してバイナラできるようであれば、はじめからグラウンドに引っ張り込まれてはいない。

これ以上怒鳴られるのも嫌なので急いでベンチに戻ると、いきなり赤鬼のデカいスポーツバッグと古い一眼レフカメラを肩と首から提げさせられた。

「ションベン行つてくるから、オレの荷物頼んだぜ」

「……なんとなくそんな予感はしてました」

「おお？！ ボインのくせに先を読むとは、オマエも意外と隅には置けないな、オイ！」

「……お褒めに預かり光榮デス」

「よしつ。とりあえず駐車場まで運べ。いいか、このカメラはオレにとつて命と言つてもいい代物だ。特に慎重に扱えよ。それこそ女の身体を撫でるようソフでナイーブなタッチを心掛ける。間違つてもいきなり乱暴に鷙掴みしたり、理性を欠いた野獸のようにハアハアと涎なんか垂らすんじゃねえぞ！」

「……コレ、单なるカメラですよね？」

「バカモン！ なうにが单なるカメラ、だ！ まさか……使い古しのくたびれた女、いや、カメラだからって、軽々しく取り扱つてい

いなんて思つてたんじゃねえだらうなつ？ だとしたら、ドエらい
ミステイクだぞ、ボイン。ピツチピチの真つ 新な女子大生を味わう
のもいいけどな？ だからといってお互さがいイトコロをすべてを知
りつくしている、大技小技が巧みな古女房をないがしろにする奴は
男とは言えねえ。新旧両方平等に愛でてこそ、真の男つづーもんよ
！」

7

……それで、俗にいう「股つていうやつ」ぢやないか

「バ、バカヤロ！ 勘違いするなよ？ あくまでもカメラの話だよ、
カメラの！ ともかく、このカメラはオレの分身だと思って大事に
しろ。なんせこのカメラにはな……隣のテニスコートでプレイして
いるお姉さま方のパンチラ・サービスショットが納められているん
だからな！」

「……それって、俗にいう盗撮つていうやつじや

どうやら相当尿意を我慢してたらしく、まるつと誤魔化すように超ダッシュで行ってしまう赤鬼。あまりの早業に大荷物を下げるが

『……このこと、お姉さま達からパンチ並みのサービスショットを、急所ギリギリの際どい角度に思いつきり打ち込まれればいいのに』

……などと心の中でツッコミを入れつつボケーと突つ立ている私を、さらに追い打ちを掛ける男がズンズンと近寄ってきた。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

相変わらず話的には進展せずに「めんなさい……なんだか赤鬼と足軽の章みたくなってきた。（^_^;）

ダイヤモンドの野獣たち？

「これも持てよ」

不躾に声を掛けられた方に顔を向ければ、至近距離に田尻がキュッと上がっている険しい顔の男がいた。

「……え？」

「え？ ジャねえよ、チチ！」片手が空いてるからまだ持てるだろ」「

髪型は彼の兄に全然似ていない。髪はわずかに茶色だが、チリチリどころか野球少年らしく短くスッキリとして坊主に近い。しかし田元はスケコマシな兄にそっくりだった。よく見ればつつすうと鼻にちりばめられているそばかす。

一コリともしない伴総一朗は、感じのよろしくないセリフと共にグイッと救急箱を私に押し付けた。思つた以上に強く押し当てられた場所が痛い。

あまりの態度の悪さに何も言えず啞然としていると、何も反応しない私にイライラしたのか、無言で救急箱をドンとベンチの上に乱暴に置いた。

「ほんじゃ、よろしく」

フンという捨て台詞と共にスタスターと歩いていく伴総一朗。

そしてそれを黙つて見送ることしかできない私。

(ちょ、ちょつと……なんなの？！ もうちょつと言こよつがある
でしようが！ 私よりも年下のくせに、生意気な！)

カツと怒りが沸き起こり、とても田上の人にものを頼む態度ではない彼の背中に、思わずその救急箱を投げつけるところだった。ど

うやら」の「大野「ホールデンカップス」のメンバーは、星野君を覗いて全員、地味で鈍臭い女性を思いやる気はないようだ。

その一連の様子を見ていた星野君は、さすがに頭に来たのだろう。いつも以上に目を吊り上げながら、「おい、総一朗が持てよ！ 力も手伝え！」と怒鳴つた。それでも総一朗は、シニアの先輩である星野君の言葉も完全に無視。相撲力士などは、

「そんな重いもんじゃねえだろ。むしろチチコのそのデカいチチより軽いんじゃねえの～？ 今更救急箱一つ増えたからつて大したことねえって。いけるいける！」

……と軽く言い放ち、ガハハと笑いながら人の横を通り過ぎていく。そんな二人の言動に、星野君は普段からは考えられないような舌打ちをしながら「アイツらつ！」と悪態つき、盛大なため息を吐いた後、私の方を見て頭を下げた。

「荒井さん、ごめん。本当に」

「え、あ、い、いいよ！ ほ、星野君のせいじゃないし……」

「いや、荒井さんを巻き込んだ俺にも責任ある。そのせいでのアイツら、特に総一朗のせいで嫌な思いさせた。普段はここまでひどくないんだけど、ちょっと、とつつきにくいやツでわ……つて、これ、全然言い訳にならないな」

「……そ、そんな、ハハハ」

愛想笑いで誤魔化したが、心中ではとつつきにくいどころか、とつつかまえてとつちめてやりたい衝動に駆られた荒井美千子。しかし相手はこれまた厄介なチリチリこと「伴丈一朗」の弟。代打として兄が仕返しに来ても困るので、生意気な態度は私の寛大な心で不問にいたすことになった。

例え、いけ好かない態度で乱暴に救急箱を押し付けられただけでなく、初めて伴総一朗に会つた瞬間、「だれ、この女」というセリフと共に睨まれたり、「荒井美千子です」と名乗つたら名乗つたで、初対面の上級生を「チチコ」呼ばわりしたうえに、「部外者は立ち入り禁止だぜ」と顎で追い払は仕草をされたとしても、だ。

考えるだけでグツグツと煮えたぎつた怒りが沸き起つるが、培つてきた我慢というスキルでなんとか沈めた。それに、こんな忌々しい出来事はさつさと記憶の底へ葬り去るのに限る。もう金輪際このグラウンドに近づかないと決めたし、一生会つともないだろ。いや、ないようにする。

それより、普段からあんな生意気な態度で学生生活大丈夫なのか？……と余計なことを考えてしまつた。が、すぐそんな気遣いも無駄だと悟る。同じ河田中であるスケコマシな兄と、彼の隣で歩いている相撲力士がバックに付いていれば、支障などあるはずがない。まったく……山野中の狼も問題だらけだが、河田中の狼兄弟もろくなもんじゃない。兄が「チリチリ」なら、弟は「チクチク」といつたところか。

一人でプンスカ怒つていると、星野君が一番大きいプラスチックボックスの上をトントンと叩いた。

「荒井さん、その救急箱俺持つから。このボックスの上に乗つけて」「え？ え、でも……」

(……確かにその箱には、キャッチャーマスクやプロテクターのほかにも結構道具が入つていたんじや)

とてもじゃないが、そんなことができなかつた。それでなくても重そうなのに……さらに荷物を押し付けたら、完全に嫌な女になつてしまつ。前を歩いている一人がそう言つたら、遠慮なく投げつけるように渡すけど。

「だだだ大丈夫！ た、確かにそんなに重くないし。駐車場までなら」

「……そうか。なら、お願ひしてもいいか？ ホントわりい。正直助かる」

さすがに星野君もそのまま私の好意を受け取った。お互^{ひが}い顔を合わせると、どちらからともなく苦笑いを浮かべた。だって、私たちの顔には、「あの連中に何言つても無駄だ」と悟っているのがありますと浮かんでいたから。

私は片方に化粧品が入っている紙袋とスコアを持つと、もう一方で救急箱を持ち、荷物を持った星野君と歩き始めた。

「そういうえば、なんで荒井さんはここに？」
「え？」

急に問い合わせられた星野君の声に、早く荷物を届けてさつさとオサラバと逸る心が少し緩んだ。

「寅二^{いっじ}のせいとはい、結局グラウンドに連れ込んだ俺が言うのもナンだけど。荒井さん、区民センターに用事があつたんだろう？ 今更だけど無理矢理引っ張り込んで大丈夫だったか？」

「あ、ああ……それはですね……」

私も今更だったが、今日この区民センターに来たワケを簡潔に説明した。母の知り合いが化粧品のイベントをやるので、母の代わりに差し入れに来たこと。本当は貴子も一緒に来るはずだったのだが、都合が悪くなり一人で來たこと。桂寅之助に拉致られ……いや、声を掛けられた時は既に用事が終わり、帰るところだったこと。これから化粧品の試供品を貴子の家に届けること。一通り説明すると、

星野君は「へえ、そうだったのか」といながら抱えている箱を持ち直した。

「化粧品のイベント、か。……そう言われてみれば荒井さん、その手に持つてる袋」

「ええっ、ややややっぱ、わかる?! い、一応派手にならない程度には抑えてもらつたんだけど……つて、ベベ別に今日は学校じゃないから化粧は校則違反じゃないよね?」

化粧などと似合わないことをやつた恥ずかしさで、星野君が言い終わる前に慌てて言い訳をすると、星野君は「え?」と眉根を寄せた。

「化粧? 荒井さん、化粧してるのか?」

「え」

「そりゃ、今は中学生でも化粧するのか。初めて聞いた。てっきり大人の女人の人というか、オバサンだけかと思った」

「……オ、オバサン……ね……」

星野君は私の超勘違いと言ひ名のヘナチョコ投球をいとも簡単に捉えると、鋭いスウイングで容赦なく打ち返した。おかげで女豹熟練度が大幅ダウンの荒井美千子。

いや、この場合落ち込む方が間違つてゐる。だって、星野君のような朴念仁度が……違う、男氣のレベルが高い人に、「いつもと違う自分に気付いてもらいたいわ」なんて方が図々しいのだ。
(や、そうよ。こんな軽い化粧程度じや普通気付かないわよねえ?)
一瞬でも、

『せつかく軽く化粧をしてもらつたのに、男性陣誰一人突つ込んでくれないなんてどういうこと?』

……などと思つた自分がおこがましい。

そんなことより、またしても重要なことが一つ判明した。私の顔はやりすぎても「おかちめんこ」になるが、化粧の度合いが軽くても代わり映えしないという事実が。自分の顔をどうすればマシになるか……などという新たな深刻な問題に直面していたら、再び「それよりも、荒井さん」と声掛けられた。

「ハ、ハイ？」

「今日部活だったんだろ？ バスケ部の『練習試合』どうだつた？」

「え？」

チラシとこちらを見ながら言つた星野君の言葉に、深刻な問題などはすぐに吹き飛び、かわりに心臓がドキッと跳ねた。しかし『練習試合』といふ単語に過剰反応したのは一瞬で、すぐにモヤモヤとしたスッキリしない、どちらかといふと嫌な気分になつた。

ダイヤモンドの野獣たち？

「……『練習試合』……ね」

自分でもあまり感じのよろしくない声を出しているのがわかつた。おそれく顔も引き攣つていて、複雑に歪んでいる顔の筋肉を、どうにかして治めようとしているから、逆におかしな顔になつてゐるに違いない。

(できればその話題、出して欲しくなかつたな)

そつは思つても、星野君は「あの男」の友達だから、今日の『練習試合』のことを話題の一つとして出すのは自然だし、仕方がないことなのかも知れない。

けれども、一方では受け入れ難く、重い鉛を飲み込んだような感覚だつた。

それとも、これ以上口を開くのが億劫と言つた方が正しいのか。

「尾島^{ケイズケ}、今日の練習試合のこと、ついでに聞いてたまう？」

「……はあ。そ、そんなこともありました、ネ……」

「え？ あれ？ もしかして……荒井さん、応援行かなかつたのか？」

「あ……うん。だつて、えーと、ほ、ほら。わわわ私、用事があつて……区民センターに来たし、それに……」

そこまで言つたところで、慌てて口を噤んだ。

(やだ……そんな、言えるわけないじゃん。「私は声掛けられてない」なんて。そんなの単なる僻みだし)

もう少しで余計なことを言つたところだった口をキョックと結びながら自嘲していると、星野君は「ククリと息を飲みと「まさか」と呟いた。

「バスケ部の試合、全然見なかつた、とか？」

「……うん」

「やつ、でもつ、バスケ部の連中には会つただろ？ なんか言われただろ？！」

「……後輩と部活の片づけをした時に、体育館前でバスケ部は見掛けた、かな。でも何も……あつ、そういうえば、その時女バレの後輩にはなんか言つてた。……ほら、いつもの感じで勧誘してたよ、尾島君。ハハハ」

「後輩……」

「うん。わ、私はミーティングの後、そのまま貴子と帰つてしまつたから？ だ、だからその後輩が見に行つたかどうかはわからないけど」

「……」

「で、でも、他のみんなはたぶん残つて応援しているよ？ 奥住さんや幸子さんに……それにチイ、いや、茅野さんとか。も、もちろん原口……。さん達も。ほら、尾島君、昼休みに奥住さんたちにしつこく、いや、熱心に誘つてたでしょ？ だ、だから彼女たちも一生懸命応援するつて言つてたし。きっと盛り上がつてるんじゃないかなっ！ ハハハハハ」

私はマンガのように頭を搔きながら……つて、生憎頭を搔くことは両手が塞がつていてから無理だったので、そのかわり朗らかな笑い声を上げた。

いや、上げたはずだ。そうに決まっている。

心の中に渦巻いていた、「私は誘われなかつた」などといつちんケな僻みは、とっくに遠い地平線の彼方まで流した筈だから。

星野君は私の顔をジッと見た後、「ん~」と唸つた。「え？ なに？」と聞いた私に、彼は無言のまま片方の口元だけグイッと上げ、困つたような何かを含んだ苦い顔で笑つた。

「盛り上がる……か」

「ギヤ、ギヤラリーが本当に多かつたから、士気が上がつてきつと勝つたんじやないかな。……どっちにしろ試合に来た相手のチーム、気の毒かも」

「そりや、どうかな」

「え？」

「マズイな」

「な、なにが？」

「でも自業自得か」

そう言つた後、星野君はますます歪んだ笑いをしただけで、何も答えずただ黙々と歩くだけだった。

* * *

日曜日の今日、山野中体育館は朝から賑わっていた。

男バス女バスとも合同練習試合として、他校から2校も来ていた
せいで。

この時代は日曜・祝日しか休日がなかつたというのに、貴重な休日である体育館の周囲には、多数のギヤラリーがわんさか。その中には我が女バレも含まれていた。たかが練習試合なのに何故か。もちろん、それには理由がある。

『11月 日の日曜日、我が山野中バスケ部の練習試合だ！ 張り切つて応援するよ』

星野君の言う通り、2年1組のボス猿こと尾島は、ホームルームの前や休み時間、昼休みに放課後と教室内でつるさくへ宣伝しまくっていた。

いや、別に宣伝するのは構わない。それがたとえ、ウザいを通り越して迷惑の領域になつていても、だ。

大体尾島はイベントごとがある度にそんな感じだった。一年の時はもちろんのこと、一年遠足の時も「女子棟に忍び込む」と宣言していたし、体育祭の時はサポート委員のくせに、自ら応援合戦やリレーの代表に割り込んでいた。

つい先日終わった文化祭の準備も、中心になつて偉そうにクラスのみんなに支持を出していた。文化祭最終日の後夜祭もどきなどには、生意気にもステージの上で、辺見先輩率いる三年のバックバンドをこさえたボーカル。さまざま曲をお披露目したミニコンサート、しかもこれが結構うまいもんだから、憎たらしげたらありやしない。

しかし、問題はそこではない。

では何が不服なのかと問われれば、私はこう答える。

最近、尾島の様子がまたおかしいからだ、と。それも「私限定」で。

体育祭前まではお互い気まずかつた。

一時はこのまま口きかないまま卒業していくかなと思つていたほどだ。

それが体育祭の時に起きた思いがけない事件のおかげで、尾島と正面から話す機会が持てた。それどころか、彼はぶっきらぼうながらもちゃんと謝つてくれたのだ。

あの体育祭の日に一人きりで話したあの時間は、私たちの間にある壁を少し崩した、と思う。少なくとも私はそう感じた。

だから私は、体育祭の翌日から尾島に対して頑なな態度を改め、普通にするよう心掛けた。

それはデビ マンから「普通にしてろ」と脅され……いや、アドバイスされたせいもあるが、リレーで披露した尾島の俊足に素直に

感動したせいもある。

周りの女子と同じように、さすがの私もあの時の高揚感は中々冷めず、おかげで警戒心は緩みっぱなしだった。そりや、からかわれたり、無視されたことは忘れていたけれども、お互いギスギスした気持ちのまま無視し合つよりは数段の進歩かなと思ったから。

それに、個性^{アカ}が非常に強い2年1組で無事学生生活をやっていくには、悔しいけどどうしても尾島の存在を無視できなことを、嫌と言つぽど思い知らされたから。

仲良じよじとまではいかないけれど、去年のような関係つまり小競り合いは多いけれど、普通のクラスメートとしてやつていけるんだけど、このまま無事に一年を過ごせるんだとホッと胸を撫で下ろした。

尾島にチヨツカイ田畠が始まつても、原口美恵と成田耀子がいい顔をしないとわかつていたけれど、心のどこかで「それでよいのか」と思つていた。

思つていたのに。

体育祭が終ると、尾島の人気はつなぎ登りだつた。文化祭が終わることには、その人気は不動のものになつた。

その勢いは、学年一のモテ男・佐藤君をしのぐほどだ。

学校一モテる雄臣や田下部先輩がいる3年1-1組の教室の前には、意味もなく人が通り過ぎたり、他のクラスからの訪問率が多かつたが、この離れ小島のボロ校舎にある2年1組にも同じ現象が起こり始める始末。

尾島はこの事態にだらしなく鼻を伸ばすかと思ひきや、意外と普通で以前と変わらぬ態度だつた。ていうか、以前から鼻の下など伸び放しだから、変わらぬ態度かどうかは甚だ疑問だ。元々お調子

者と言うか騒がしかつたので、今更だし。

ただ、女子に呼び出される回数と男子から激励のチョップという洗礼が増えただけ。

それ以外はいつもと変わらぬ風景だった。

いつものように原口や成田耀子のグループに取り囲まれ、後藤君^{マイケル}や諷訪君らの悪友とバカ話しながら笑いあい、退屈しおぎに本間君をからかって、小関明日香にやり込められては不貞腐れ、桂龍太郎と一緒にいれば遠巻きに眺められ、奥住さんや幸子女史にチヨツカイかけては追いかけられると、それを見た和子ちゃんと貴子は厭きれでため息を漏らし、授業中騒ぎ立てては先生の取り締まりゾーンの中心となり、相変わらず五教科の成績は芳しくなく下の下。これが私の知りえる尾島を取り巻く世界すべてだった。

多少周囲は賑やかになつたけれども、いつもと同じ光景の筈だつた。

筈だつたのに 。

認めたくないけど、決定的に違う部分があつたのだ。

ダイヤモンドの野獣たち？

尾島の態度がおかしいのに気付いたのは、いつだろ？
チユウと呼ばれるどひとか、私が声を掛けられないことに気が付いたのは。

無理矢理面倒事を押し付けたり、後ろの席から小耳のような小言を言つたり、ちぎつた消しゴムを投げたり、宿題見せると強引にノートをむしりとつたり、掃除のときにわざと人の前でゴミを捨てたりしなくなつたのは。

私一人の時、尾島は絶対に近付かなくなつた。
誰かが一緒に時だけ、話し掛けてくる。朗らかにしゃべっているように見えるが、その実私と尾島の間に直接的な会話はない。
たまに田が合えば、尾島は慌てて顔を逸らした。怒つたように顔を赤くしながら。

バスケの練習試合の宣伝の時もそう。

原口や成田耀子を始め、ブキミちゃんを除いたクラスの女子ひとりひとりに宣伝していたのに。もちろんお昼をしに来た幸子女史やチイちゃん、それこそ犬猿の仲の和子ちゃんや貴子にまで声を掛けていたのに。

話の流れで私の番になると、急に田を泳がせる尾島。タイミングよく用事を思い出し、慌てて去る尾島。

だから。

なぜかシクシクと痛む心を少しでも和らげるため、先手を打つて尾島を視界に入れないとようしたり、入らないようにするの自然で

はないだろうか。

いくら「練習試合」の観戦を尾島に直接勧誘されなかつたからとはいえ、見学するのは自由なのだから、勧誘関係なく少しでも観戦すればいいのに、意地を張つて差し入れの予定なんか入れたり、しかも「貴子を元気づけるため」なんてとつてつけた理由を自分に言い聞かせるのは、仕方がないことではないだろうか。

尾島からは以前のような嫌がらせはない。男子と話せば相変わらず鬼の形相で睨まれるが、それ以外は冷たい視線もない。

その代り、いい意味でも悪い意味でもターゲットにされるることは無くなつた。いや、むしろ避けられていると思つのは、私の勘違いだらうか。

おかげで原口や成田耀子のあからさまな陰口もない。

至つて平和な日々。これこそ私が望んでいた中学生活。

けれども

元のような関係でいいと、むしろ戻れることに少し安心した私の思ひは、いつたい何処にいけばいいのだらう。

* * *

「 いさん。荒井さんつ！」

「え？ あ、は、はいいつ？」

星野君の呼びかけ声で我に返つた。

どうやら思考のダイブをしていたらしい。辺りを見回せば、2年1組の教室でもなければ、体育館でもない。区民センターの駐車場だつた。星野君の方見れば、両手に抱えていた荷物をその場にどさ

りと降ろしている。

星野君はあれ以来すっかり黙り込んでしまい、二人とも無言のままここまで来た。おかげで嫌なことを思い出してしまったけど、話すのも億劫だったのでかえって良かつたかもしない。

「ごめん、荒井さん。本当に助かった」

「ハア……あ、い、いえ。お役に立てて光榮デス」

「それ、預かるよ」

星野君が手を差出したので、持っていたスコアブックや救急箱を手渡した。そのおかげで片手が空き、肩にかけていた桂寅之助の超重いバッグを降ろすことができた。

ゆっくり歩いていた星野君と私以外の選手は、とっくに駐車場で寛いでおり、車の前で一服していたり、その場で着替えをしている人もいた。

私を怒鳴りつけ、荷物を押し付けた赤鬼なんぞは、どうみても正規の造形から逸脱している、改造しまくりの戦車みたいなバイクの前で、ヤンキー座りをしたまま堂々と煙草を燻らせている。

「……」

しかもぐるりと駐車場を見渡さなくとも、すぐに田に付すべりい近くにある公衆トイレ。

（なによ……トイレ、駐車場から超近いじゃん！　荷物を持ったまま行けばよかつたんじゃないの？）

さつきからイライラと嫌な気分が続いているせいなのか、見るもの聞くもの全てが気に食わない。

脳内でお宝ショットが詰まつたこの高そうなカメラを地面に叩きつけ、密かに乱暴に降ろした赤鬼のスポーツバッグを、サンドバッグの代わりにして一人ムエタイをすることで鬱憤を晴らしていると、

玄さんが「大野ゴールデンカップス」のメンバーに徵収をかけた。

「『めん、荒井さん。ちょっと行つてくる。悪いけど、もつ少し待つてくれるか?』

星野君の念を押すような声を聞いた途端、ハツと脳内ムエタイから、本来既に完了している筈の自分の用事を思い出した。

(ヤダ……こんなところで想像力膨らませて、油を売つてる場合じゃない! 『のチャンスを逃せば後はないぜ、荒井美千子!』)

少なくともこの瞬間を逃せば、野獣共から脱出するのが難しくなるのは確かだ。それこそ車などに乗せられたら(まるで誘拐)、そのまま『まるやき』に連行されてしまう(もはや拉致)。

私はブルッと身体を震わせ、ブンブンと頭を振りながらジリジリと星野君から離れた。

「イヤイヤイヤイヤ! ほ、ほら! 私、貴子の家に行かな」とつ ! み、皆さんはこの後『まるやき』に行くんでしょ? なら、これにてサヨナラといふことで! 皆さんには星野君から一言伝えてもらえればいいから、ね!」

私は「お邪魔虫はこの辺で速攻退散しやすぜ、アーチー!」といふように、歪んだ変顔スマイルで両手を振つて後ずさりをしつつ、「どうか達者で暮らしてくだせえ、ゲヘヘ」と敬礼しながら爽やかに退場しようとすると、星野君の大きな手がガシリと両肩に乗つた。

ヒイツ! ヒビツクリして、大胆にも両肩に乗つている星野君の手を見た後顔を上げれば、滅多に見れない相当焦つた彼の顔がそこにある。

シチューホーションが違えば、今の星野君の顔はなんとかチップスに持ち込むうと意気込んでいる、切羽詰つた青春真っ盛りの中二男子

そのもの（思いつ切り失礼）。だが、実際は違つだらう（当たり前だ）。

どちらかといふと、ヘナチヨ「見習い魔導士（荒井美千子）と、そんな弟子を連れた偉大なる魔導士の師匠（星野一幸）。一人は魔獣退治に魔窟へ向かつたはいいが、魔獣を目の前にして屁つ放り腰の弟子がいきなりトンズラしようとしたので、無理矢理連れ戻す師匠と言つたところか。

「ダメだ、荒井さん！」

「かかか勘弁してくださーい！ わ、私の未熟な力では、あの猛獸らに効くかどうか？」

「え？ たわわの魅力なカラダでは、愛のモーション破が効くかどうか？ 荒井さん、大丈夫か！」

「ワアアオッ！ やややつ、色々と違いますよつて！ あ……その、こちらの妄想として」

「『ジラの暴走？』

「……ハハ。モウイイデス」

「なんか良くなきゃないけど、それより荒井さん。このまま帰るのは非常にマズい。荒井さんが草野球の試合に来たことはすぐバレる。寅二^{つむぎ}も玄さんも力もいるから、絶対荒井さんの話題出でてくると思う。だからせめて『まるやき』に顔を出して、直接会つて事情を説明した方が後々憂いがない。『あっちの試合』を見ないで『こっちの試合』を見たなんて知つたら、もうこの際嘘でもいいから、『試合見た』と一言言つてもらえば…」

「嘘？ でででも、草野球の試合なら本当に見たから、嘘じゃないんじや」

「草野球……や、そつちの試合じゃなくつて… いいから、とりあえず待つてて、な？」

「ええっ？ ちよちよちよつとー あの、あのですねー…」

私の必死の叫び声も虚しく、星野君は無口じろりか、いつもより多すぎる訳が分からん台詞を早口で捲し立てた。あつちこつちそつちつてどっちよ！と聞こ詰める前に、非常に慌てた様子でそそくさと走つて行つてしまつ星野君。

(そ、そんな～！)

手を伸ばしたまま固まつた後にがっくりと脱力すると、急に疲れがドツと襲つてきて、その場にしゃがみ込んでしまつた。

(朝から部活だつたしな。それに見知らぬ人に多く会つたせいかもしない。オマケに先程から、扱き使われつ放しだし)

片手にぶら下げる化粧品の袋が妙に重たかつた。本当は軽い筈なのに、今日は貴子に届けることができないかもしれないという現実が重たくさせているのか。

暫くそのままだつたが、しゃがみこんでいるのも疲れたので、一先ず赤鬼のサンド……いや、スポーツバックを戦車みたいなバイクの傍に置いて、どこかに座るつとカバンを持ち上げると、あちこちの方向からあらゐる名前を呼ばれた。

(えつ？！)

そつ。言葉通り、あらゐる方向から、違つ名前を呼ばれたのだ。

「おーい、ボイン！ 荷物持つてこ……つて、ああ？」

「待たせてごめん、荒井さん！……つて、ゲつ！」

「あれ？ 美千子ちゃん、なにしてるの？」

「あつ、寅二イこと星野だあ！ あれえ？ ミツチャヤンまでいるう

！」

でも次の言葉にはぶつたまげた。

「チュウ……テメエ！ なんでこんなにひにいやがるんだあつ」

田が点になってしまった、荒井美千子。

いつの間にか「大野ゴールデンカップス」のミーティングは終わっていたようだ。だから、桂寅之助先輩と星野君に声を掛けられたのはわかつた。

しかし、他の掛け声は？

いくつかのありえない掛け声にゅっくり振り向けば、お馴染みすぎる、しかしこの場にいるはずのない見知った顔達がそこにあつた。私を呼んだ人たちは、私の名前を呼んだはいいが、それぞれ思い思いの顔を浮かべている。

それは驚愕だったり、笑顔だったり、不思議顔だったり、怒りだつたり。

だから、赤鬼のカバンを肩から滑り落としてしまったのは仕方がないことだと思う。

ましてや、「ボイン、てめえ！」と赤鬼に怒鳴られても、謝るだとか、急いで拾い上げる余裕などありはしない。

振り向いたそこには、赤鬼に引けを取らぬ憤怒の形相の尾島を中心とする、バスケ部の「カミーハンビ」がいた。

「やつだあ、美千子ちゃん！ テートだつたら、そういうえば良かつ

たのにい！ もう、水臭いんだからあ
「

どう見ても思いつ切り勘違いをしている、どうもセリキュートな
スマイルと共にワインクを投げた安西先生も。

ダイヤモンドの野獣たち？

あらゆる方向から名前を呼ばれた私は、慌てて赤鬼の荷物を拾い上げ、どうしようとオロオロ辺りを見回した。

呼ばれた私も相当困惑顔だつたと思うが、私を呼んだ安西先生以外の人たちはもつと不可解な顔をしながら、面識がない安西先生に注目していた。当の先生は自分が注目されていることなど知らずに、大荷物を抱えながら女優のようないい笑顔でこちらに近付いてくる。（な、なんで安西先生が駐車場に？……って、車で来たからだよ（ね）

ぐるりと駐車場を見渡せば案の定、マリ先生の愛車である真っ赤なジープの四駆が置いてあつた。

とりあえず最年長の先生を優先するべきだと思い、なによりも「アートなどという勘違いを訂正するため、星野君や桂先輩たちに『失礼します』と言つ意味合いを込めて少し頭を下げた後、安西先生の方へ走り寄つた。先生のいる方には尾島たちがいるが、特に何もアクションは起こさなかつた。私が呼ばれていることはわかっているだろうし、なにより無視し続けたのは尾島あつちなのだから構わないではないか。

「せ、先生！　お仕事は終わつたんですか？」

「ええ、今さつき終わつてね？　これから帰るとこなんだけど……つて、美千子ちゃん……それ、どうしたのつ？」

安西先生は目を見開くと、非常に驚いた顔で私の顔とぶら下げる荷物を何度も見比べた。

「え？　あ、いや、これは……」

確かに先生が目を丸くするのも無理はない。だつて、ともじやないが“デート”にしてはあるまじき姿だったから。肩にはスポーツバッグを下げ、首からはカメラ、両手には自分のカバンと化粧品が入った紙袋を持つた私は、まるでじやんけんに負けた小学生が友達の分のランドセルを次の電柱まで持たされるの図、そのものだ。

「え～これはその、知り合いの荷物を預かってまして　」

私は持ち主である赤鬼の方をチラリと見ながらしどりもどりに答えると、先生は微妙に険しい顔を安堵に変え、ホッと胸を撫で下ろしたようだつた。

「……そりやねえ。だつて、美千子ちゃん、そんな荷物今日持つてなかつたものね？　そう、お知り合いの荷物なの……そりよ、私つたら！　だつてこれ、まさか美千子ちゃんがこんな持つてるはずないわよねえ！　やだわ、私つたら、考え過ぎー！」

先生は自分に言い聞かせるように何度も頷いていたが、視線は私の胸元に釘付けだつた。先生の視線を追つて胸元の古い一眼レフカメラをジッと見下ろせば、先生は急に私の肩を掴み、「それよりも美千子ちゃん！」と少し焦つたような声で話しかけてきた。

「そんなことより美千子ちゃんつたら、水臭いんだからー。お友達のところへ行くなんて言つちゃつて、『デートならそう言つてくれればもつと本格的にメイクしたのに』。で？　どの子が美千子ちゃんの“boyfriend”なの？」

「@&\$　×#　＊つー」

先生は周囲にいる男子をキヨロキヨロ眺めながら、素晴らしい発音で“boyfriend”などといつこいつ恥ずかしい単語を口に

した。その様子はまるで先生自身もティーントイジャーのよつで、親友同士が気になる男子を告白し合つ時のよつなウキウキ顔。今にも荒井美千子と手を合わせてキヤーキヤー言い合うほどの生き生き振りだが、あいにくそんな单語に値する男は何処にもいない。

近くにいるぶすくれている男があらためて目の端に映つた突端、何故か色々な意味で居たたまれなくなつた。訳もなく野球少年の中に“boy friend”がいるなどと尾島に誤解されたくないだとか、

『荒井美千子にカレシい？ ケツ、そんなことあるわけねえだろ！』

などとバカにされたくないと思つてしまつたので、急いで否定の旨を強く告げた。

「ちちち違いますって！ 誤解です、誤解なんです！ たまたま偶然につ！」

「あら？ ちがうの？ ……ああ、そういうことね！ まだ“ju st friend”なんでしょう？ もしやこれから進展 キヤ

アツ、どうしよう、先生まだ心の準備ができてないわ！」

「……いや、先生……なんか、それはもっと違うといつか……わ、私は強引に引っ張り込まれただけでして」

「キヤー！ いきなり引っ張り込まれて強引につ？！ 最近のジュニアハイの子たちは随分積極的なのね！」

「ヒュー！ 解釈が激しく明後日の方向につ！」

急にギラギラとした視線が全身に突き刺さつた。発信源を追わなくともそこにボス猿がいることはなんとなくわかる。例え姿が見えなくても、軽く青筋を立たせている尾島の幻が見える自分が恐ろしい。一方、目の前の安西先生は目をキラキラとさせていたが、何か思うところがあつたのか、すぐにキリリと顔を引き締めなおした。

「でもね、美千子ちゃん。中学生でそういうお付き合いはあまり感心しないわ。せめて中学卒業するまで待たなきやダメ、ね？ せめて“kiss”くらいに止めておかないと。ほら、イマイチ日本の教育はティーンエイジャーに対して、正しい性の知識を説明することを避けている節があるでしょ？ だから先生があらためて言つておくわ！ そりや先生もね？ 若い頃は色々とあつたし、マムとダッドがうるさくて反抗したこともあるから強くは言えないけれど……でも親になつた今、その気持ちがとても良くわかるの。これが息子ならどうでもいいからって感じだけど、女の子となるとリスクも高いし……やだ、今更だけど本気で心配になつてきたわ！ ビリしそう、美千子ちゃん！ 先生どうしたらいいの？！」

「ヒヤーッ！ 一段と話が大袈裟につ！ そそそそうじやなくつて、単なる草野球の観戦でし！ 引つ張り込まれたのはグラウンドで、あの、その、クラスメートが試合をやつていたのですから！」
「私にとつても美千子ちゃんは娘同然だしつつて、え？ クラスマート？ 野球観戦？ あら、強引について……カレシにじやないの？」

頭から「絶対恋バナ」と決めつけていた先生に、全然違つと首をぶんぶん振つて否定した。先生はあれだけ性教育云々を懇々と諭したのに、何故かあからさまに残念そうな顔でショボくれる。

「やだ、私つたら……強引に引っ張り込まれたなんていうからつ生きり勘違いしちゃつて。もう、そういうことは早く行つてくれないとお」

「…………ハハ、言おうと思つたんですが

全然聞いてくれないと弱弱しく抗議しようとすると、後ろから背中をバシンと叩かれた。しかもナンパされた時に叩かれた同じ

場所と数ミリ違わない位置。

(い、痛いよつ！)

あまりの激痛に涙目で見上げれば、泣く娘も黙る殺人（赤）鬼スマイルがズームアップされていた。今まで事の成り行きを黙つて見ていたのに、急に行動を開始したのは、「性の知識」と言ひ言葉に惹かれたからなのか、それとも安西先生の美貌に惹かれたからなのか。凶器そのものの顔を無理矢理愛想良く笑いながら肩を組んでくるもんだから、「ギャアッ！」と腰を抜かしそうになつた。

「いや～非常に気が利く我が後輩よ、荷物ありがとうありがとう。この際ボクの大事な荷物を落としたことはキレイサッパリ記憶から抹消してやろう。それよりもこちらのキレイな方はどなたなのかな？ん？ああ！いきなりスミマセン。ボク、このボインさんのマブダチであり、先輩後輩などというきわめて健全なお付き合いをさせていただいております、桂寅之助と申します。オイ、一点の曇りもないほど真っ新な清い関係の後輩よ。ここは日頃の感謝をこめて、チミの面倒をみている恩人であり師匠であるボクを、ぜひともこの美しいご婦人に紹介してはくれまいか。素晴らしいところがありすぎて何処から説明したらいいか非常に迷つかもしれんが、そこはチミのセンスと心意気に任せたいと思う。しかし、その前に一言言つておこう。いいか、人間というのは見た目だけでは判断できねえほど奥が深い生きモノだ。これがどういう意味か、わかるな？

そこそこ踏まえてどうか夜露死苦つ…」「

(おいおい……日頃どころか、会うの今日で二回目だろ！)

「師匠」というより「支障」そのものな赤鬼は、原口美恵に負けないぐらいいの猫なで声を出した。が、どう聞いても猫じゃなく、その名の通り虎。良くて化け猫のような迫力で脅迫している先輩の人となりをどう上手く誤魔化しながら……もとい、美化しながら穩便に言い包めばいいというのか。しかも目の前の安西先生は、「これか

ら何が出てくるんだろ?」といつ珍動物を見るような興味深い目で見ており、赤鬼は期待を込めた目で待ち構えている。

超難問を突きつけられている、超難関なシチュエーションに挟まれた荒井美千子は

「…………ど、同級生のお兄さんです」

超ナンセンスなアドリブで簡潔にまとめてみれば、桂寅之助先輩はスケベ丸出しの緩い笑顔のまま、目にもとまらぬ早業で私の脇腹に鋭い鉄拳をキメた。

ダイヤモンドの野獣たち？

「いやあ～それにしてもこんな素敵な女性が、このセンスのかけら
もないボインさんの……おつと、ヤベホ。あれ？ 名前ボインだっ
け？ え？ アライミチコ？ サンキュー、星野！ そうそう、ア
マイチチコさんね！ いやいやいや、チチコさんのお知り合いだと
は！ いやはや、この桂寅之助、実に運命を感じますっ」

そう言って鼻息荒く安西先生の白魚のようなほつそりとした両手
をガシリと握りしめるのは、星野君に人の名前を堂々と確認しただ
けでなく、途中全然違う名前に変換された挙句結局チチコ呼ばわり
したよこの赤鬼！ ……」と桂寅之助。しかも慌てて星野君が訂正
したにもかかわらず、このデリカシーの無い赤鬼は全く聞いておら
ん。

（な・に・がつ、『チチコさん』だ！）

たとえ無駄に「さん」付されたとはいえ、「チチコ」につけるん
じやありがたみは半減、恨みつらみは倍増である。

しかし 冴えないアドリブで赤鬼の期待を大きく裏切った私は、
先生から見えないきわどい角度に鋭い鉄拳でどつかれたという過去
があるため、思わず首を締め上げそうになる衝動をなんとか堪えた。
……ほら、怖いし痛いのヤダし。

「いやいやホント！ オレも運命感じちゃうッス！」

物騒な敵ハイエナは獲物に狙いを定めた瞬間、次から次へと仲間を呼び寄せ集団で狩りを行うのがお約束というもの。

赤鬼の手の上にリアルグローブのような手を重ねたのは、まだ義務教育中の幕下なくせに生意気な相撲力士こと相模力さがみつとも。
(つぶれるから、先生の手がつぶれるから… 今すぐどこでくれつ)

だがラッキーなことに、被害を被つてるのは先生の手をかばつている赤鬼の手。痛みを我慢して顔を歪めている赤鬼を眺めながら、なかなかジェントルマンじゃないかと感心してしまったが、よくよく考えてみればアレだ。単に先生を独り占めしたいがために他ならない。

「バケエロウ！　てめえらみたいなガキ共が馴れ馴れしく触るんじやねえ！　散れ散れ！　え、ゴホン。申し遅れました。ワタクシ『大野ゴーレーデンカツップス』の監督兼大野商店街でおなじみの、『鬼頭不動産』社長・鬼頭玄造でござります。こんな鼻ついたれのガキ共など相手にしなくて結構ですよ？　あなたののような素敵な女性は、ワタクシのようにナイスなミドルが相応しいというもの。美しいアナタの下僕、鬼頭、鬼頭玄造をどうかヨロシク！」

赤鬼たちの小競り合いにズカズカと割り込んできた、色黒パンチなハイエナのボスこと玄さん。ナイスなミドルと言うより『なすびが躍る』などといつありえない珍事件のようなお顔で、赤鬼と相撲力士の手を安西先生から無理矢理剥がしながら自己紹介をお披露目した。色黒パンチから放たれる野獣のオーラで部下を牽制しつつ、安西先生には胡散臭い笑みを向けている。白い歯ならぬ金歯をキラリと光らせながら。

「ずりいよ、横暴だぜ、玄さん！」

「力士のいう通りだ。下僕どころか唐変木のしみつたれたクソジジイのくせによお、ケツ！」

「じゃかあしこ！　ガキはクソして寝る時間だつ、けえれけれえれ！」

我こそが「安西マリ」の隣に立つ男！……と言わんばかりに、このこのこのとお互い取つ組み合いでポジション争いをしながら、

俺が俺が俺がと醜い争いを繰り広げる三人。星野君の「恥ずかしいからやめてくれ」という常識人の制止も虚しく、当の安西先生はほんのりバラ色に染めている頬を両手で覆い、永遠の乙女なポーズをとつた。

「やん、恥ずかしいわあ。なんか照れちゃう」

（先生、照れてる場合じゃないのでは……）

なんせ女王のエスコート役を争っている人物は、赤鬼と巨漢モヒカンと色黒パンチ。どうみても街角に貼られている「この顔見たら、110番！」のような怪しい三人相手に恥らうなんて、やっぱり先生のツボはいまいち理解不能だ。

（けど、ここはなんとしても私が女王を守り通さねばっ）

とりあえずこの目の前の野獣共を蹴散らすため、ヘナチョコ魔導士から女王の傍に控える王族専属の近衛騎士となつて、猛獸共の鼻先に鋭い剣先を突きつけっ！…………ることはできないので、鉄槌を受けていまだに痛い脇腹を摩りながら、先生の横から思いつ切り殺傷力MAXな熱視線で3バカトリオを懲らしめた。が、そんな荒井美千子の胸中も知らない先生の朗らかなまんざらでもない笑顔を見た途端、何故かやるせない溜息が漏れてしまったのだつた。

* * *

赤鬼から鉄槌を受けた私は、改めて言葉を選び直しながら桂先輩を先生に紹介し直した。先生はその派手な容姿の面々に恐れを抱くことなく、素直に「こちらこそよろしく」と朗らかに頭を下げた。その様子を見て氣をよくしたのだろう。今度は相撲力士が巨体のくせに、ホイホイとゴキブリ並みの速さで寄ってきたのだ。
しかも目を剥くほど強烈な衣装に着替えて。

『そんな服、一体何処の洋品店（死語）で売ってるんスか？！』

…… というような、ダボつとした派手な紫色の上下。しかもこの涼しい季節に可哀そつなほど汗だくな力士には少々キツイ、水分吸わなそうなテカつていいサテン生地。ちなみに幼稚園のお遊戯会的な生地でできているこの衣装の見せ所は、これまた園児には全く無縁である背中に描かれた刺青のような和柄の龍である。

なんとも体质に合っていない奇抜なファッショントヨイスし、どうやらシコを踏む前に軽く道を踏み外しちゃったのね不良の相撲力士は、それこそ正真正銘の「張り手」を派手にキメながら赤鬼の横から割り込んできた。色々と予想外の出来事をとともに食らった赤鬼と私は、視覚をやられるという精神的苦痛を受けただけでなく、土俵の外に突き飛ばされる肉体的ダメージを受ける始末。

つか、力士と呼ばれるからには、ヤンキー服着る前にまわしこそで勝負してみるやつ！……などと脳内でツツコんどく荒井美千子。

『…………いつてえ…………って、あああんつ？！　あんでもボインまで倒れるのよつ！　てか、預けたカメラがつ！』

遠慮なく人の上に乗つて覆いかぶさつてた赤鬼は、ガバリと起き上がり大声を上げた。傍から見たらまるで押し倒されているように見える破廉恥な体勢で下敷きになつた荒井美千子のことより、私の首から下げていたカメラの安否を先に確認をする桂寅之助。「大事なお宝ショットがつ！」などと悲鳴を上げながら舐めるようにカメラを見回し、傷がついてないことにホッと安堵すると、急にギラリと皿を光らせながら被害の元凶である力士を睨んだ。

『ボイン……このケースにカメラを入れとけ！　オラアアアアつ相撲力士つ！　てめえ～いますぐ土下座こいて、キッチリ詫びを入れろ

やあつ！』

『不可抗力ツス。それより自分は「相模力」ツス！おい、チチ

口。寅之助さんだけじゃなく、オレも紹介しろ？』

『やめろよ、力！大丈夫か、荒井さん！』

私を踏み台にして起き上がった赤鬼は、白星をキメた力士とタイマンを張りはじめた。

一方争いの発端となつた先生は、急いで止めに入つた唯一まともな星野君と同じタイミングで、「美千子ちゃん、大丈夫？！」と駆け寄つてくれたのだが……。カメラのケースを投げつけられてボー然とした私を起そうとした星野君を見て、急に目をランランと輝かせながら奇声を発した。しかも私の腕を掴もうとした星野君の両手を大胆にとつて握手を交わし、そのままグルグル回転する勢い。おかげで私は地面に転がつたままつかり忘れ去られた。

(……まあ、赤鬼の（サンド）バッグがクッショーンになつたからいいんですけどね……)

『キヤア、どうしよう！ 美千子ちゃん、わかつたわ！ この人でしょ？！ 初めまして、うちの美千子が大変お世話になつてます。これからも末永くどうぞよろしくねつ』

『はあ……あ、いや、それより荒井さんが』

『やだ～優しい上に男らしいじゃないの！ 美千子ちゃん、やるう！ で、二人はいつからお付き合いを？』

『は？ 頭突き合い？』

『え あらあらもひー。』

先生の上を行く超勘違いをした困つた顔の星野君と、「好青年の上にユーモアも持ち合せてるなんてなかなかポイント高いぜこの男子！」とさらに喜んでいる先生の暴走を止めるため、JUJUは自力で起き上がり早めに紹介を強制終了しちまおうとしたら

いきなりガシッと腕を掴まれ、ぐいんと引っ張りあげられた。

急に片方の腕に力が入ったものだからビックリして腕を掴んでいる主を見れば、笑顔だけど目は笑っていない不機嫌さMAXの尾島が聳え立っていた。

背後でマムコンビの傍らである小悪魔小関明日香、「テカいくせに腰あそちやく」のような後藤君を引きつれて。

ダイヤモンドの野獣たち？

『ドウモコンニチハ アライミチコサン。コンナ ニチヨウビノコ
ウガタニ グウゼンデスネ。ハハハノハ』

尾島は冥府からわざわざ下界へ狩りにやつてきたような死神顔を、ズズイと近付けた。

体育祭以降滅多に会うことのなかつたその瞳には地獄の業火が燃え盛り、骨まで残らぬ的な怨念が籠つてゐる。私の腕を抱え込むよう絡む尾島の腕の感触と怖いお顔に心臓がバクバク、「もうイヤーン」というより、「もうアカン……」と悲鳴を上げていた。

思いつ切り怯える私を見かねたのか、それとも面白がっているのか。小悪魔スマイルの小関明日香は尾島が掴んでいる反対側の私の腕を掴んで立たせてくれた後、私を間に挟んで横からフォローと言う名のチャチャを入れた。

『やだあ、啓介ケイスケつたら怖ーい！ びさくさに紛れてミツチャんのロカッブボインに腕くつつけてヤラシー！』

『アホッ！ ヤラシイじゃなくて柔らかいっカヤロウッ！ オ、オレ様は親切心で助けてやつただけで、決してちょっとでも感触を味わいたいなんて下心はねえっ！ それにDじやなくってEつ！ ……あ……イー、イー……あーイー天氣だな、今日はつ。ハハハノハッ』

『え～ヘンだなあ？ どうみても曇りなんですけどお？』

『うるせっ！ ととともかく、星野カズや寅ニイに先越されて羨ましいからオレもなどという、やましい気持ちなんて一切ねえからなつ！』

『……ふうん。あつそ』

『……わ、わかりやいいんだよ……』

『それより啓介さあ～前から聞いたかったんだけど』

『ああ？』

『体育祭終わった頃からあ、「テキるハンターはこれを読め！」
スゴすきちやつて「メンナサイ 女豹を落とすトドメの100選」
とかあ、「奇跡と呼ばれたハンター達」騙して落として身ぐるみ
剥がしてバキュンと一発ヤつちゃえよ』とかあ、「月刊ザ・ハン
ターニーブチン女豹大特集！ ワタシ達、こんな仕打ちに弱いん
デス♪」もあつたかな？ これ全部寅二イのところから勝手に持ち
出してたでしょ。何で？』

『ホアアアアつ？！ なななつ、なんで明日香がそんなこと知つて
んだよおおつ』

『だつて、啓介^{ケイスケ}つてエツチ本とかその手の大事なものを隠すところ、
いつつも同じなんだもん』

『うわあああつ、今すぐだまれえつ！ いつそ消えちまええつ！
つてか、勝手に人の部屋を漁んなあつ！』

『あの本、一体何のために使つてたの？ ねえねえ、教えなさいよ
お～』

『 & % @ \$ # つつー!』

人の横で無邪気に問う小悪魔小関明日香は、宇宙語を叫びながら
相當に焦る尾島を荒井美千子^{ココサ}と揺すつたのだった。

* * *

「ほう～なるほどね。チュウが通つてる英語塾の先生ね。ふ～ん、
あつそう。それでこの区民センターに？ お使いできたというわけ
ですか。そんでもつて？ ついでに野球の試合観戦などを？ それ
はそれは～日曜なのにご苦労さまですなあつ～」

「……」

3バカトリオの小競り合いを苦々しく眺めていた私の前に割り込んできたのは、久しぶりに「チコウ」呼ばわりをしたうえに、嫌味な言葉をオンパレードする尾島だった。

口角をグイッとあげて笑つて、見えてるが、その笑顔の奥は言わずと知れたご機嫌斜めの魔王が鎮座している。玉座の上で堂々と不貞腐れながら、「ケツ！」と鼻毛を抜いている幻が見えるのはなぜであろう。

（人のことを散々無視してくれたうえに、試合観戦にも誘ってくれなかつた私に対する言葉がコレですか）

今まで無視していたあの態度は一体何処へ行つたのか。安西先生に紹介するまで小関明日香の言葉に相当パニクつた後、真つ赤な顔でダンマリングのまま固まつていたくせに。

『フーン、あつそ。いかがわしい本の隠し場所がわかるほど小関明日香は尾島アンタの部屋に入り浸つてるんですか。そんなに仲がいいんですか、へ～！』

……という荒井美千子の超軽蔑な眼差しを見て我に返つたのか。「一体部屋でナニしてんでしょうアンタら。超不潔金輪際近寄るなこのエロエロ星人どもめ！」的な私の視線を吹き飛ばすように、「もうヤメだ、ヤメ！」と急に怒鳴り散らした尾島。私は一切悪くないのに逆ギレもいいとこだ。

「ホントだよねえ。だから尾島ケースケがあんだけ宣伝してた練習試合にみんな来てたのにい、ミッちやんだけギャラリーの中で見かけなかつたんだあ。ほーんと、あんな綺麗な人の頼みじや断れないよなあ。ね、後藤？」

「んなの知るかよ。一人くらい観客がいねえからつて大したことねーだろ？ 第一試合に勝てばどーでもいいし」

尾島の言葉にも厭きたが、小関明日香のセリフにはもつと開いた口が塞がらなかつた。

だつて彼女は、尾島が私にだけ勧誘をしなかつた現場にいたし、しかも「ミツちゃんには声掛けないの〜？」と嫌がる尾島の後を追いかけていた張本人なのだ。なのに今更この台詞。後藤君の場合はもやは問題外で、解説もフォローもする気になれない。むしろここまでくると軽く殺意を覚えるどころか、感心のあまり文句も失せるというものだ。怒りを乗り越え、まるで無の極地に達しそうな己の心。いつそ悟りでも開いて、教祖にでもなつたほうがいいんじやないだろうか。

(試合を見に来ない奴はすべて力入同然な扱いなんて、アンタらどんどんだけエラいのよ。グラウンドから追い出そうとした伴総一朗の方がまだ筋が通つてゐるわい。全然可愛げないけど)

「……」

その辛辣な言葉を吐いた伴総一朗はもうこの駐車場にはいない。つい先ほど帰つたばかりだ。

全然可愛げのない伴総一朗は赤鬼や相撲力士とは違い、安西先生を囲む私達を睨むように遠巻きに眺めるだけで近寄つてこなかつた。かと思えば、いきなり自分の荷物を担ぎ、私たちの横を通り過ぎながらさつさと駐車場の出入口の方へ歩き出してしまつ伴総一朗。しかも赤鬼や力士、シニアの先輩である星野君に挨拶もせずに。

『おい、総一朗！ 何処に行くんだよ、打ち上げ来ないのか？』

結局『デカミニコンビ』も安西先生に渋々紹介していると、星野君はもうシカトな総一朗に声を掛けた。しかし総一朗は声を掛けられても完全無視。もう一度声を掛けたらやつとダルそうに振り向いた。

『……もうさつき解散になつたでしょ？ これでオシマイですよね？ それに「まるやき」は遠慮しちりますよ。関係のない部外者が沢山来そだし？ だからお先に失礼します。セ・ン・パ・イ』

みんなが注目しているにも関わらず、堂々と慇懃無礼な態度で挨拶をした伴総一朗は、「フン」と鼻で嗤つた後、すぐに険しい顔で睨むように後藤君と小関明日香、尾島と星野君、最後に荒井美千子に目線のピントを合わせたらすぐ背を向けて歩いて行つてしまつたのだ。

(ちょ、ちょっと、なんで私を睨むのよ！ 私は関係ないでしきうがつ)

ズカズカ歩いて去る超失礼なチクチクの背中に文句を言つていると、後藤君が「なんだよ、ありや？！」とデカい声を張り上げた。後藤君は睨まれただけだけど、態度が気に入らなかつたのだろう。

「星野^{カズ}、先輩としてガツンとシめた方がいいぜ？」と再びデカい声で星野君に訴え、同じく小関明日香も「なにあれ。総一朗、感じワル～」と口を尖らせた。が、一番文句言いそうな尾島は「ほっとけ、あんなガキ」と吐き捨て、星野君は険しい顔で黙つたままだつた。当然伴総一朗のおかげで辺りには氣まずい雰囲気が漂つたが、すぐに消えた。一旦休戦をしていた赤鬼と力士がハモリながら、「あんな失礼な奴はほつといでいいですよ」と安西先生にフォローをしてくれたからだ。

しかし、二人はお互いハモつたのが気に食わなかつたのか。再び試合開始の「ゴング」を鳴らし始めたので、伴総一朗の存在はすぐに忘れ去られたのだった。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

文中にあるハウツー本の書籍は実在しません。あくまでもフイクションです、ご了承ください。m(—)mそれよりハウツー本つてなんかおもしろいですよね。ちなみに菩提樹のオススメは扶桑社から出ている「大人養成講座」です。かつて新人OL時代、先輩からこれ読んで大人になれと渡されました。読了後、一步大人へと近づいた思い出は人生の大切な宝物です。

ダイヤモンドの野獣たち？

「お、お手数掛けまして本当にすみません……」

車の助手席に座った私は、あらためて左側で運転している安西先生に頭を下げる。先生は「あらいいのよ」と言つてウフフと笑つた。

「今日中にお友達に渡した方が絶対喜ぶわよ。それに、アレを学校には持つていいことはできないでしょ？」

ハンドルを握りながら未だにクスクス笑つている先生に向つて、「スミマセン……」ともう一度謝りながら座席の足元にあるアレを見た。そこには缶ビールやつまみが入っているスーパーのビニール袋が置いてある。

（……確かに。化粧品もおそらく校則違反だらうナビ、お酒は確實にアウトだ）

前を走る車のテールランプに田線を戻しそつとため息を吐いた。

結局私は「まるやき」には寄らず、星野君や尾島達と別れて先生と一緒に帰ることになった。

先生の争奪戦と尾島の説教が渦巻くあの戦線からどうやって離脱しようかと悶々としていたところ、タイミングよく先生が声を掛けてくれたおかげだ。

やつとテーートでないことを理解してくれた先生は、私が貴子の家に行く予定だったことを思い出し、「もう行ったの？」と聞いてくれたのが幸いした。少し暗くなりかけていたけど、そんなに遠くないのに今から行きますと赤鬼たちに聞こえるように宣言すれば、先生は車を出すと言つてくれたのだ。申し訳ないので一人で行くと辞

退すれば、「差し入れのお礼よお」と先生も引かない。まるでランチが終わつたオバチャン主婦達がお会計するときのリアクションのようだし、「いいから、いいから」「いーえ、わるいわ」の勢いで押し問答していたら、赤鬼が何やら私の前に差し出した。

『おら、ボイ……いや、澄み切つた青空のように爽やかな関係である後輩のデカイチチコよ。これを持つていけ。貴子んとこなら菓子よりこつちだる』

色々な形容詞を申し訳ない程度に付けたつてやっぱり名前は間違たままどころかもはや原型をどどめちゃいないよこの赤鬼オトコ！……が押し付けたのは、クーラーボックスの中に入つていたと思われる缶ビールと乾きもののツマミの詰め合わせが入つた袋だった。確かにシュークリームよりお酒の方が喜ばれるだろう。なんせ酒豪が二人もいるし（厚子お姉さまと貴子のお父さん）、物騒な手下（湘南走族）が集合するのだから。しかしこれがキッカケで、さすがに重いからといつことで結局車で送つてもううことになつてしまつたのだ。

こつして馬車ではなく真っ赤なジープに颯爽と乗つた女王（とヘタレ近衛騎士）は、別れが名残惜しいハイエナ達と一部まだ不貞腐れでいるデカミニコンビに「チャオ！」とウインク付きの挨拶をして悩殺させている隙に、無事野獸の巣窟から脱出することに成功したのであった。

「それにしても意外だわあ。美千子ちゃんつて結構ユニークなお友達が多いのね？」

先生は小関明日香では到底足元にも及ばない、これぞ本家大元の小悪魔というような笑顔でこちらをチラリと見た。

「ハア……と、友達と言つより、どちらかといつと単なる知り合い
といつか……」

「えーと、ほら! 桂君だけ? 隨分と親しい感じじゃない
?」

「ヒイツ! やややつ! ああああのは單なる友達の知り合いで
してつ、むしろ他人に近いといつかつ」

「え? そうなの?」

「そうですつ!」

「……そつか。でもそれ聞いて先生少し安心しちゃつたな
「え……え?」

先生の方を見れば、眉尻を下げた困った顔で微笑んでおり、素敵
な小悪魔はなりを潜めていた。

「あ、別に深い意味はないのよ? ほら、あのシャイな美千子ちゃ
んがアラタや雄臣以外の男の子と仲いい姿なんて初めて見たから、
なんだか驚いちゃつて。それに美千子ちゃんと桂君隨分自然な感じ
で仲良かつたし、彼の大事なカメラ……じゃなくつて! 荷物!
ほら、荷物預かつてたでしょ? だから親しいのかなつて。それに
ビールもくれたじやない?」

「ヒユーッ! やややややつ、かかか桂先輩は全然親しくありません
んつ! 縁は思いつ切り薄いデス、ハイつ。会うの今日で2回めで
すしつ!」

先生の性質の悪い勘違いを正すため、私は思いつ切り頭から否定
した。

「ほんとうに?」

「本当ですつ!」

大体人をナンパしきながらパシリへと一転させるといつ、まるで「しりとり」のような扱いをした挙句、

『今日の報酬だ、心して受け取れ。ちなみに「愛のアマゾン入らにやソソソソ 奥まで探究ジヤングルルーム」もオススメだ。……つたく、オレっちにここまで気を使わすなんてよ。オマエもなかなか憎いね、コンチクショニー』

……などとウインクをよこしながら人の腕が折れるほど拳でガチンコし、コツソリと手にいかがわしい紙切れ（ホテル・ダブルスプラスシューの平日割引チケット）を握らす男など、仲良くなつた覚えもなければ親しい間柄になつた覚えもない。

第一思わず受け取つてしまつたこのチケットの期限は今月一杯である。どう考へても今月中に使うの無理じゃん！ と思つたところで我に返つた。

（なななんんで使うこと前提なの！ バカバカ、荒井美千子のバカ！）

おバカな想像ついでに浮かんできた、スケベ顔のハンター（桂寅之助）と尻尾をピシッピシッと鞭のようにしならせ妖艶に微笑む女豹（荒井美千子）が、ジャングルルームで睨みあいながらジリジリと間合いを詰めるという恐ろしい脳内光景をバズーカで吹き飛ばし、「やっぱりお好み焼き屋の給料泥棒店員と紹介しとくんだった」と激しく後悔し始めた私に、先生はふーっと安堵の溜息をついた。

「そ、そり……そうよね！ フフツ、やだ私つたら……うん、そうよー、美千子ちゃんと桂君じや、どうみても合わないわよねー。やっぱり美千子ちゃんには星野君みたいな人がいいと思うわ。なんてつたつてやさしそうだし。ここは断然カメラマンよりプロ野球選手よー、そのほうが悟ちゃんもいづみちゃんも絶対安心するし。そうしなさいな、ね？」

「……あ、いや、別にあの人たちはまだ学生」「

「やあねえ、たとえばの話よお」

「……あ、ですよね……ハハ」

何故か一生懸命星野君を推す先生に、私は引き攣つた笑いしかできなかつた。

おそらく先生は身内のような目で私を見ているから、健全な付き合いができるような男子を勧めただけだろ。深い意味はないとかつてはいるが、正直リアクションに困つてしまつた。大体お付き合いで云々は私にとつて早すぎるし、ハードルが高すぎる。それにむこうにだつて選ぶ権利はあるだろ。なによりあそこにいたメンバーは誰一人として私を選ばないに違ひない。

(星野君、か。やっぱ、尾島……じゃなんだな。仲良くはなかつたけど結構しゃべつてたのに……)

先生の目から見ても、不貞腐れている魔王な尾島より、魔導士な星野君の方が私に似合つていると言わたることにチクンと胸が痛んだ。

(……つて、なんで胸が痛いのよ。かえつて喜ばしいことじやないの？ なにより星野君に失礼だし！ 大体説教のくだいオトコ尾島なんて、こつちからお断りでしょ)

頭を巡るのは最後の最後までうるさかつた尾島の小声。「まるやき」に寄らず私が帰ると言えば、

『はあ？ なんですと？ これから「まるやき」でオレ様の武勇伝がお披露目されるんだぜ？ 自分の用事を優先してバスケの練習試合をシカトこいたチユウはそれを聞かず帰るとおっしゃるんですか？ ……クソ……せつかくアツアツなお好み焼きをフーフーのアソンですべてチャラにしようと思つたのに……そうだよ、そんなオレ様の寛大な処置を踏みにじつて帰るとはアンタ何様ですかね？！』

……などと途中私的なつぶやきを交えながらくじく文句を言ひ出す始末。

(何様もオレ様でもなく大きなお世話様だ、コノヤロー)

しかし 尾島がいつもの態度に戻ったことにホツとしている自分がいた。理由は多分、あまりにも色々ありすぎて相当疲労が溜まつていたからに違いない。なにしろ尾島の私的なつぶやきが聞こえた途端、明後日の方は向いているが若干機嫌がよくなつて鼻の下が伸びた魔王に、アツアツのお好み焼きをフーフーと冷ましてあげるだけではなく、嬉しうれしくかしそうに「ハイ、アーン」などと食べさせてあげる、ふりふりエプロンのワイルドな荒井美千子が脳裏に浮かんだのだから。

(オイオイせつきからぢつしたよ……相當重症だろ、私！　いや、それもこれもあの物騒な連中のせいだ。あの連中と一緒にいればストレスは溜まつても、解消されることはずありえないからね。……やだなあ、ストレスって結構怖いんだな)

「あっ！　でも美千子ちゃん、アラタや雄臣もいること忘れないでね？　先生としては、美千子ちゃんにはどちらかの嫁に来てほしいわあ。雄ちゃんもそりゃ素敵だけど……うちのアラタ、どう？　この際年下でもいいじゃないの、成人したら歳の差なんて関係ないし！　母親が言うのもナンだけどかなり有望株よ？　そのうちノーベル賞なんか取っちゃつたりしてつ。そしたらスウェーデンよ、スウェーデン！　どうしよう、授賞式の時何着て行こうかしらあ～」

ストレスの恐ろしさを身をもつて噛みしめていると、そんなことも知らない運転席の安西先生はルンルンと鼻歌を歌いながら、子を持つ親ならば誰でも一度は経験する親バカぶりを發揮した。

雄臣はともかく、アラタは確かに色々な意味でお買い得だろう。しかし当のアラタは地味で鈍くさい幼馴染のことなど伴侶の対象ど

ころか、出来の悪い姉ぐらにしか思っていないに違いない。が、自分で言つのも虚しかつたので、この場では敢えてスルーで通すことにした荒井美千子なのであつた。

ダイヤモンドの野獣たち？（後書き）

ホテル・ダブルスプラッシュュではお客様の一ースに合わせて、様々なコンセプトに基づいたお部屋を「用意しております。（総支配人・菩提樹）

登場人物へ中学2年編 ネタバレありです（前書き）

！－注意－！

「ダイヤモンドの野獣たち」まで読んで無い方は、ネタバレ全開です。

登場人物『中学2年編』 ネタバレあります

主な登場人物・山野中

荒井美千子（チュウ、ボイン、チチコ、ミツちゃん）
あらいみちあ

本編の主人公。山野小出身・バレー部所属。1組。

豊満なバスト（とうとうEカップに発達）の持ち主で、山あり谷ありだらけの鈍臭い地味女子。映画好きで金髪碧眼に弱い面食い。

「どういうわけか、苦手なタイプなほどの意味でも悪い意味でもターゲットにされやすいタイプ。人を良く見て石橋を叩き過ぎるくらい慎重だが、結局ドツボにハマる事が多い」

尾島啓介（チビ猿、野生猿、類人猿、悪魔）
おじまけいすけ

美千子のクラスメート。大野小出身・サッカー部兼バスケ部所属。1組。

黙つていれば色白の可愛らしい男の子だが、その実は悪魔。ややたれ目のハツキリ二重に右目尻に黒子があり。甘いもの好き。ハンターハンターマニアを真剣に熟読中。しかし本嫌いのうえに途中エッチコラムに目が移る為、肝心などころを読み落としている模様。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』の赤担当・通称オジマヌケ。

「態度は横柄でも中身は超純情でお子様。とにかく自分が一番じゃないと気が済まないタイプ。興味のある事や人にはいろんな意味でとここん尽くすが、やりすぎちゃって失敗したり、嫌われて逃げられたりするのがたまにキズ」

笹谷貴子
ささやたかこ

美千子の友達。大野小出身・バレー部所属。2組。

髪の毛と目が茶色い、落ち着いた大人っぽい女生徒。美千子の親友で、将来はスタイリストかメイクアップアーティストが夢のオシャレ番長。姉はK県でも知れ渡るほど有名なスケバン・笹谷厚子。母親が病氣で入院中。日下部先輩とのお付き合いに戸惑いを感じているようで……。

「さりげなく陰で支えることができる良妻賢母のような女子だが、怒らすともつとも怖く厄介なタイプ。自分のことになると周囲に気を使つてしまい途端に自信がなくなるという一面も」

宇井和子（和子ちゃん、ドテチン）

美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。2組。

部活では殺人スパイクを繰り出す現エースアタッカー。相変わらず少年隊のヒガシの大ファンで、東雄臣にホの字。

「見た目も性格も大柄で友情に厚いガツツな姉御肌だが、中身は超乙女で身なりにかなり気を使う纖細なタイプ。女をバカにするガサツで口ひるさい男には異常なほど手厳しい」

中山幸子（幸子女史、ヒラメ）

美千子の友達。下山野小出身・バレー部所属。10組。

痩せてスラッと背の高い女の子。女史と言われる通り成績はいい。宇井和子とは御近所さんで、小さい頃からの幼馴染。チイちゃんの恋の応援団長。その関係で小関明日香とも最近親しい関係に。

「頭がいい割にはそれを鼻に掛けず、遊びも勉強も両方楽しめる人。時々キツイ意見がポロッと口に出してしまうところも。ともかく人の恋路や恋バナが気になり、友達の恋愛事情を把握したいタイプ。隠すのは友情じゃないと思っている節も」

茅野陽菜美（チイちゃん）
ちのひなみ

美千子の友達。山野小出身・バレー部所属。10組。

お菓子作りが得意のおとなしい女生徒。身長150センチに成長。

少年隊大好き。

只今尾島啓介に片思い中。最近同じクラスの幸子女史、小関明日香と行動を共にすることが多い。

「やさしく思いやりがあり、人のいいところを見抜きそれを素直に認められる人。なので嫌われることはないし、周囲が放つておかないタイプ。本人は頑張っているつもりでも周りをヤキモキさせ、知らぬうちに手を貸してもらうことが多い。悪いと思いつつ流され依存してしまうことも」

星野一幸（つぶらくん）
ほじのかずゆき

大野小出身・外部でシニアリーグに所属。1組。

必要以外しゃべらず、無口の野球バカ。何故か「空耳 ワー」的な聞き間違いが多い。実家が酒屋で、なにやら家庭環境が複雑な様子。桃田との関係はいかに。

『大野小隊・ロクでもないんジャー』の青担当・通称アホシノ

「何を考えているがわからないが、周囲を冷静に見極め公平に物事を考えられる能力が高く、不言実行を地で行くタイプ。その反面納得したものしか受け入れられないという頑固な一面も。女心に関しては鋭いやら鈍いやら。時々周囲がビックリする程行動が大胆で未

知数」

後藤洋
じとうよう

大野小出身・バスケ部所属。1組。

声も身体（180センチ）もデカイ尾島の悪友。元大野小バスケ部。尾島は無一と親友と思っている。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の桃担当・通称「ゴトング」。

「明るくワイワイと楽しむ空気が好きな人。友情に厚く細かいことは気にしないおおらかなタイプだが、それは明るく気心知れている人限定。消極的で暗い奴は基本努力が足りないと思つてるので、途端に見る目が厳しくなる」

諏訪
英行

大野小出身・野球部所属。1組。

尾島の悪友、もちろんアホ。星野、伴兄弟、相模とはリトルリーグで一緒だった。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の黄担当・通称オタンコナスワ。

「周囲にいる優良人材を嗅ぎ分け、その恩恵を上手く利用できる人。或る意味この中では一番中学生らしい男子。一見薄情で調子のいい男だが何故かカノジョがいて仲も良好。意外なことに五人の内で最初にちゃんとしたカノジョができたのも付き合いが長いのもこの人」

桂
龍太郎（デビルマン）

大野小出身・一応柔道部所属だが幽霊部員。10組。

山野中の「伝説の裏番」と恐れられた『山野中の鬼夜叉』こと桂寅之助の弟。現在は兄の後を継いで「裏番」を襲名中。こちちは違う意味で学校一の問題児。

『大野小隊・口クでもないんジャー』の黒担当・通称バカツラ。

「口出しされるのが嫌いで人と群れない典型的な一匹狼タイプ。見たまんま硬派で怖いが、自分の強さを知つてるのでやたら滅多に弱い者には手は出さない。女に関しては意外と好みがつるさく、高級志向」

小関明日香（小リス）
「せきあすか

大野小出身・バスケ部所属 10組。

明るくてポッテリとした唇の小さくてリスみたいな可愛らしいショートカットの女の子。元大野小バスケ部。尾島、桂、星野、笹谷貴子、伴兄弟とは下の名で呼び合つ古い仲もある。尾島とは従姉弟同士で家も隣同士。

問題発言は天然なのか、計算なのか。

「いつも明るく元気ハツラツだが、時々漏らす一言がキツイ。良くも悪くも周囲を引っ搔き回すタイプで通り過ぎた後の残骸がいろんな意味で酷い。滅多に自分の心の内を見せない人」

伏見 かおり（ベラ）
ふじみ

美千子のクラスメート。大野小出身・英語英文タイプ部部長。1組。おかげばメガネで歯列矯正をしている女生徒。通称「ブキミちゃん」学級委員且つ生徒会副会長で、頭は超つくほどいいが変り者。クラスで浮いている。只今雄臣にターゲットロックオン。

地元で権力の幅を利かせている伏見一族本家の一人娘。伴丈一朗との関係はいかに。

「人の心を読む術に長け、流されずに現実をしっかりと見据えることができる冷静沈着なタイプ。用意周到なうえに堅実に物事を対処し完璧主義。それ故自分が素晴らしいと思うことは大いに認められるが、納得できないものは全てカス同然という手厳しい面も」

佐藤 伸（カツコ）
さとう しん

美千子や成田耀子の元クラスメート。山野小出身・サッカー部所属で新部長。1組

「顔良し・性格良し・スポーツ良し」と3拍子揃つた、元山野小サ

ツカ一郎所属で学年一のモテ男だった、中学でも記録更新中だが、尾島に抜かれそうな予感。切れ長の目のキリッとした精悍な顔立ちで、いわゆるお醤油顔。

「基本好き嫌いの無い人で天然のタラシ。みんなと仲良く楽しく平和にがモットーだが、不用意に足並みを乱す奴や、人としてそれつてどーなの? という人には声を荒げることも。しかし根っからイイ人なうえに引きずらないタイプなので、争い」とになることは滅多にない」

田宮俊平（王子）

美千子の思い人。下山野出身・バスケ部所属で新部長。1組。程よく日に焼けて、目尻に皺を寄せて笑う様が爽やかな男の子。元下山野小バスケ部。学年でもモテ男に入る部類。尾島たちと仲が良い。

「ボーッとして天然のように見えるが、その実周囲に気を配り、人より抜きん出ぬよう気を使って2、3番手に徹するタイプ。周囲と調和を大事にし、いい意味でも悪い意味でも目立つのを良しとしないシャイな人。女子とは基本共通の話題がある特定の人以外は苦手で逃げ腰」

成田耀子

美千子の天敵。山野小出身・バスケ部所属。1組。

モテ男には敏感で、自分を良く見せる才能はピカ一。しかし嫌いな奴には容赦なくプレッシャーを掛ける女の子。元山野小バスケ部。小学校の時は「佐藤伸」命だったが、今は「田宮俊平」に乗り換えたか。

「イケてる男性はとことん持ち上げ、自分を魅力的に見せる努力を

絶対怠らない立派な精神の持ち主。それ故イケてない男と嫌いな女にはかなり手厳しいタイプ。あらゆる場面においてメリットがあるかないかで付き合いが変わる人」

原口美恵
はらぐちみえ

美千子の天敵其の2。大野小出身・バレー部所属で新部長。1組。尾島大好き女の子。尾島と美千子の間を疑い、なにかと牽制を掛けているようだが、その牽制先が増えた模様。尾島の態度にイライラハラハラ増量中

元大野小バスケ部。

「普段は責任感のある明るい女子だが、男が絡んだ途端周りが見えなくなるタイプ。好きな男一筋で絶対ブレないが、いいように扱われているとわかつっていてもそのまま流されてしまうダメな部分も」

奥住さん
おくすみ

大野小出身・バレー部所属の副部長。1組。

奥住トリオのリーダー。ベリーショートの噂好きな女生徒。東先輩と美千子の間を「怪しい」と睨んでる。「原口美恵」とは肌が合わず、思いつきりチイちゃんの恋の応援副団長。

「活発で物事ハッキリしているが、好き嫌いが激しく時々暴走気味。その反面良いもは良い、悪いものは悪いときちんと言える人」

光岡さん
みつおか

大野小出身・バレー部所属。1組。

奥住トリオの一員。

占いが大好き、愛読書は「My Birthday」。

「基本大人しく、どつちつかずな人。苦手感のある人でもそれなり

に付き合つていける世渡り上手なタイプ

加瀬さん

大野小出身・バレー部所属。2組。
奥住トリオの一員。

「つるさい男子が苦手で少し神経質な女子だが、だからといって騒がしい雰囲気は嫌いというわけではない。なんとなく嬉しさを素直に表現できない天邪鬼タイプ」

本間巖太（マイケル）

中学に上がる時、群馬県富岡市から引っ越してきた。1組。

万年寝太郎のヘコキムシで、面倒事があると学校を休む癖あり。尾島からの度が過ぎるアプローチに少々困惑気味。

辺見先輩

大野小出身・バスケ部所属、現在3年男バス部長。
尾島や後藤が所属していた大野小バスケ部の先輩。尾島を熱心にバスケ部へ勧誘していた。女バスの部長、飯塚と付き合っている様子。

飯塚先輩

大野小出身・バスケ部所属、現在3年女バス部長。

小関明日香や原口美恵が所属していた大野小バスケ部の先輩。

錦戸先輩（ラフレシア）

女子バスケ部3年、雄臣に木の字。

平畠先輩（アマゾネス）

ひらばたせんぱい

女子バレー部3年部長、雄臣にホの字。

青島先生（チンタオ）

2年1組の担任。

のんびりおつとりの社会科担当中年教師。

梨本先生（リポーター）

2年担当英語教師、英語英文タイプ部顧問。

箕輪先生

2年10組の担任

2年担当体育教師、陸上部顧問。

一之瀬先生

2年担当英語教師、バトミントン部顧問。

岩瀬先生

3年担当数学教師、バレー部顧問。

荒井真美子（リンダ）

山野中新1年生・体操部所属。美千子の妹。

姉とは違い、胸以外はスタイル抜群で可愛らしいがメチャ気が強い。

山野小のバスケ部員だったが成田耀子とは気が合わない。

ただ今東雄臣を狙い撃ち中。

「世界は私の為に回っているという典型的な女王様。好かれるのと嫌われるのが極端にハッキリしているタイプ。しかし本人は自分大好きのため、他人の目はまったく気にしていないし、自分の良さを

理解できない奴はどうでもいいと思つてゐる人」

あんざい あらた
安西 新

山野中新1年生、陸上部所属。クオーター。
美千子が通つてゐる英語塾の先生の息子。雄臣とは従兄妹同士。
大人しい少年で、真美子が好きらしい。引っ越しを機に受かつた私
立を蹴つて山野中に進学した。

「こ」の小説の中で唯一まともな男その1。元々実力はある上に、コ
ツコツと積み上げていくことを絶対忘れない努力の人。礼儀正し
く気遣いもできるが、一回決めたり、臍を曲げたりしたらテコでも
動かない頑固なタイプ」

くさかべ こうじ
日下部 孝司

山野小出身・サッカー部所属、現副部長。
生徒会役員OBの優秀な3年生。雄臣と仲が良い。 笹谷貴子の彼氏。

「こ」の小説の中でもまともな男その2。雰囲気が良くて典型的なイイ
人。頭も運動もいい上に容姿も悪くなく、女性を思いやる心を持ち
合わせている完璧な男だが、なぜか思い人とはイイ人止まりで順調
にいかないタイプ」

あすま ゆうじん
東 雄臣（ベム）

山野中に転校してきた、3年生。見目麗しいクオーター。

美千子が通つてゐる英語塾の先生のここに居候することになつた先
生の甥っ子。母親は数年前に死去、父は海外出張中。あんざいあらた 安西新とは従
兄妹同士。美千子との関係は一時期険悪だったが、現在は小競り合
いする仲にまで回復。

「容姿端麗・成績優秀・運動神経抜群と隙の無い完璧な『神』のよ

うなお人。その実裏の顔は『鬼神・修羅』といつ一重人格。いい意味でも悪い意味でも認めた人にしか本当の顔を見せない。嫌いなヤツには徹底的に追い込むが、大事なものや守るべきものは全力を尽くす。たとえ残酷なやり方だとしても」

その他の登場人物

笹谷厚子（アツコ）

笹谷貴子の5歳年上の姉。

かつては山野中のスケバンとして名を馳せ、マシンを転がせば右に出るものはいないほどのドライビングテクニックを持つツワモノ。

現在は看護短大で看護婦となるべく勉学中の為、家を出ている。女豹教祖と言つても過言ではない。

「飲んでも素面でも周囲を巻き込む厄介なタイプ。礼儀知らずで義理人情をないがしろにするやつにはほぼ半殺しだが、慕つてくるものにはとてもなく情が厚い人」「

桂寅之助（赤鬼、赤髪ピアス）

大野小出身。

桂龍太郎の三つ年上の兄。

口が悪く、どうしようもないエロだが、かつては『山野中の鬼夜叉』『伝説の裏番』など様々な肩書を持ち、先生と生徒達を震撼させた不良。現在は「美園工業高校」へ通学中、通称『美園の赤鬼』。お好み焼き屋「まるやき」でバイトしている。

ホテル・ダブルスプラッシュの常連客。

「酒とケンカにや滅法強いが、ガキ以外の女には滅法弱いダメ男。

空気を読まないようでいてちゃんと心得ている大人な部分も。勉強以外は努力せずともオールマイティーにこなしてしまった器用なタイプ。社会適応能力が高め「

伴 丈一郎（スケコマシ、チリチリ）

河田中の2年生で問題児。大野小出身。
髪は茶色のチリチリパーマ。尾島達と同小だが、旧友というより、ライバル。桂龍太郎と共に『山河の二狼』と呼ばれる。
只今ケンカも恋も無敗記録更新中。ブキニアちゃんやシニアとはなにやら関係あり。

「超女好きで誰にでも気軽な一面はあるが、心が伴っているかは怪しい。言動も考え方も態度も軽く甘いようでいて……」

伴 総二朗（チクチク）

河田中の1年生で丈一郎の弟。大野小出身。
容姿は兄に似ているが、こちらは野球少年らしく髪は短い。ソバ力スあり。

現在剛速球を投げるシニアの控え投手。

「誰であろうと怯まず剥き出しの牙を隠さない、ある意味自分のスタンスを絶対崩さない人。当然周囲は傷つくが……」

相模 力（相撲力士）

河田中の2年生でやつぱり問題児。河田小出身。
巨漢のモヒカンでヒゲあり。リトルリーグ所属後河田中の野球部所属だったが、現在は野球をやっていない模様。
相撲だの力士などと呼ばれると怒りだし、いちいち訂正を入れる。

「見た目はアレだが想像できないほどフットワークは軽く、細かい

作業は意外と得意。キレるとしつこく粘着質なタイプ

蝶子さん（ベティちゃん）

桂兄弟の伯母であり（？）、10周年を迎えたお好み焼き屋「まるやき」の女性オーナー（？）

「全てにおいて謎」

鬼頭玄造

鬼頭不動産社長。大野商店街（別名銀座通り）の振興会長で大野ゴールデンカップスの監督。

色黒パンチで不埒なナイスミドル。

「存在そのものが謎」

桃田ももた

尾島や原口の元クラスメートで、1年しか大野小いなかつた、浪花の転校生。

尾島の初恋の相手で、苦い失恋を味あわせる。なにやら星野ともなにかあつたらしい。

「あらゆる面での小説のキーマン」

東家両親
荒井家両親
安西家両親

* * * * *

今後の出演予定人物

渡 部 伴 横 溝
わたべ ばん よこみぞ
遥 子 礼 忍
はるか いこ れい 忍 しのぶ

一月は氷解♪ Mr・ゴッドの進路・前編

「……え、え」と、だからこの「to」は前置詞の役割ではなく、この名詞にかかる「to」不定詞といつやつで、いわゆる形容詞的要素を含んでいるから……」

要らない藁半紙の裏に書いた英語のセンテンスの内容を説明すると、目の前でウンウン唸っていた和子ちゃんは、眉根を寄せた険しい顔を急に半べそ寸前の幼稚園児のように変化させた。その情けない表情はまるでつい先日迎えたばかりのお正月の福笑いのようで、思いつ切り失敗したお多福になりそうな勢いだ。

「……どうしよう、ミツちゃん

「え？」

「全然言つてる意味がわかんない。ていうか、もはや何処がわからないのかがわからぬようつ！」

そう叫んだ和子ちゃんは、ガバリと英語の問題集に顔を突っ伏して「あ～ん、どうしよう」とぐぐもつた声を上げた。運動全般は得意だけど国語以外の勉強全般は苦手という和子ちゃんは、特に英語と相性が悪かった。私に言わせれば同じ語学だし、あの活用がちんぶんかんぶんな古文の文法より英語の方が断然楽なのにと思うのだが。本人いわく「古文漢文はロマンがあるけど、英語は実用って感じでツマンナイ！」なのだそうだ。ひそかにロマンス小説が好きな和子ちゃんらしい。

向かい合つて座っている私はそつとため息を吐きながら少し休憩しようかと尋ねると、和子ちゃんは未だ顔を伏せたまま大人しく頷いた。……既にその休憩は3回目なんだけど。

「ちょっと、和子。せつかくこの教室まで来たの」さつきから休憩
ばつかじやないの」

「だつてえー、ここに来ればちょっとでもあやかれるかと思つたん
だもん……」

「気持ちはわかるけど、さつきから全然進んでないじゃない。もう
英語は一旦置いといたら? それより気分転換を兼ねてさ、暗記す
れば確実に点数を取れそうな実技科目を今のうちにガツチリ抑えて
みるのは? 音楽とか保育とか。それこそほら、得意な国語を完璧
に仕上げるとか」

和子ちゃんの隣でペンをクルクル回しながらアドバイスしたのは、
「ア・テスト」対策の参考書に赤ペンを引いていた貴子だった。久
しぶりに放課後まで残つていられるのは、貴子のお父さんが珍しく
まともつた休みを取つてくれたからと教えてくれた。彼女のお父さ
んは長距離トラックのドライバーさんなので、家を空けるのも長い
が一つの仕事が終われば休みの融通が効くらしい。

「ん……そなんだけど。ちょっとでも英語は良くしとかないと…
…一学期のテストも散々だつたし。三学期の成績は、ほら……内申
書に響くじやない? それに英語が良くできれば も、もしかし
てよ? 東先輩と仲良くなれるキッカケがテキるかもしれないとい
うか……」

「……」

そつと顔を上げた和子ちゃんは上田づかいの涙目で、じどりもど
ろ弱弱しく呟いた。

(やつぱり、そこか……)

なんとなく気付いてはいたが、改めて理由を聞けば女性として共
感できる反面、「あの鬼神・修羅にそこまでしなくていいよ」と諭
したい衝動に駆られてしまう。

「ん~。……でもア・テストまで一ヶ月切ったから、そろそろ追い込み掛けないと」

貴子が綺麗な眉をハの字のように下げるとい、和子ちゃんも同じよう困ったチャンの悲しい顔つきになつた。

「ア・テストまで一か月……といふことは卒業まで一か月……といふことは先輩と会えるのもあと一か月……あ~ん、どうしよう!」
「…………」「…………」

再び半べそを搔きながら机に突っ伏した和子ちゃんを見た私と貴子は、お互い顔を見合わせながらなんとも言えない苦い顔をした後、再び深い溜息を吐いた。

(卒業……か)

和子ちゃんの気持ちがうつったのか、目の前に広げてある「ア・テスト」の問題集を目で追つても全然頭に入らなかつた。気分転換をするために席を立つて窓から空を見上げた。しかしこつも見上げる空となんとなく雰囲気が違く見えるのは、ここが自分の教室である2年1組ではなく、英英部の部室だからだろ。今朝方から鉛のような色をした雲から小雨が降つていたが、空から白いものがふわりと落ちてくるのが見えた。天気予報通り、雪に変わつたようだ。

「あ、やつぱり降つてきたね、雪」

いつの間にか貴子が横に立つて窓の外を見ていた。

結局夏から切らなかつた貴子の長い髪は既に胸の下あたりまで伸びており、毛先までキレイな栗色だ。今日は雨の為部活が中止なので、長い髪を括らずそのままである。引退してもうるさい二年に見つかれば一言注意されそつだが、当人たちは来月から始まる自分た

ちの高校受験のことで頭が一杯の為、一年生は徐々に服装や行動が最上級生のような自由さが滲み出ていた。

「……どうで寒い筈だなあ」

そつと呟いた貴子の横顔は、今一人の眼下に広がっている雪がはらはらと舞い落ちる誰もいない校庭のように寂しそうだった。みんなでワイワイ楽しくおしゃべりするときも力なく微笑むだけ。日下部先輩といふ時でさえも。

一学期に入つてからほぼ毎日一緒に下校していた貴子と日下部先輩の姿は未だ健在だ。何度かその姿を見掛けるけれども、何故だろう。とても楽しい会話が弾んでいるとは言えないような雰囲気が漂っていた。もうすぐ日下部先輩が卒業してしまい、離れ離れになることが貴子の表情を暗くしているのだろうか。それとも？

(……いや。先輩と会う時間は少なくなるし、お母さんも病気のこともあるから不安なんだ。日下部先輩、私立の男子校にサッカー推薦つているから、貴子が卒業しても一緒に学校というのは無理だし)

つい先日幼馴染が教えてくれた日下部先輩情報を思い返していると、その情報源である雄臣の姿が嫌でも頭に浮かんだ。

受験が迫つているからか。連日猛勉強の為に神経が研ぎ澄まされ、相変わらずのイイ男っぷりに益々凄味が増している雄臣。

カノジョがいるとわかっているにも関わらず、彼のファンである女子達は三月の卒業に向けてなんとか彼の心を射止めようと躍起になっていた。特に雄臣の進学先については年が明けるまでベールに包まれ、あの手この手で情報を掴もうという必死振り。のらりくらりとかわす本人から情報を得られないでの、将を射落とせないなら馬を責めることにしたらしい。その結果、馬の中でも力強い若さが溢れる牡馬の「アラタナヒカリ（安西新）」と、ヨレヨレ負け越し

牝馬の「アライマイチクイーン（荒井美千子）」にオッズ言ひ合のターゲットが集中した。ちなみに暴れ馬「マリマッシュチャウ（荒井真美子）」は、どうにも止まらないほど機嫌がアンダーな為に欠場を余儀なくされた。ところより、いつ後ろ足で蹴り飛ばされるか恐ろしくて近寄れないと言つたほうが正しい。

そういうわけで去年の1~2月などは、我が一組のモテ男である尾島と佐藤君の一人を差し置いて、圏外からトップテン入りするほど女子の呼び出し攻撃を受けた荒井美千子。宝塚も真っ青な人気ぶりだが、残念なことに彼女たちの期待に応えられるような走り……いや、情報を入手していなかつたので、すぐランク外に転落した。

実際当の雄臣は年が明けるまで荒井姉妹やアラタに進学先を黙っていた。あまりにも雄臣ファンがしつこいので、身の安全確保の為に雄臣のことを安西先生に尋ねても、

『「じめんねえ、雄ちゃん」口止められて詳しいことを教えてあげることはできないの。でも……雄ちゃんも色々考えているみたいよ？ なんだか自分でいろんなことを調べているみたいなのよねえ。ほひ、兄さんのマンションに帰ることが多いじゃない？』

……と困った顔で僅かなヒントを残すだけ。唯一教えてくれたのは、今後の進路や生活方針の最終確認をする為、雄臣は年末年始に東小父さんがいるニューヨークへわざわざ出向くことだけだった。

「月は氷解」Mr.ハッピーの進路・中編～（前書き）

タイトルが変更になりました。申し訳ございません。――――――

一月は氷解♪ Mr・ゴッドの進路・中編

新年が明けてとうとう雄臣が帰国する予定日の二日前。穏やかで平和な年末年始を満喫している我が家に、朝から無言電話という嵐が襲ってきた。

『正月早々なんて不吉なー!』

取る度に無言電話だった怒り浸透の父と福袋でG E Tした洋服のファッショニショナーに余念がない真美子に代わって、父のお客が来るために超忙しくおもてなしの準備を手伝っていた私が電話口に出れば、いつかを彷彿させるような応答が受話器越しに滑りこむ。

『俺だ』

『…………だからこのクソ忙しいときにはじめらの俺様でしょっ…………』
『出るのが遅いぞ。それに言葉使いがなしちゃいないな。…………まあいい、手短に要件を語り。明日帰還するから明後日の午後安西家まで來い。なおこの電話は間違い電話であって、決して東雄臣からではない。そういうことで絶対他言無用だ。以上』

ブツツ！…………ツーツーツー…………。

『…………』

平和な時間は終了した。

新年の挨拶もろくにしない鬼神・修羅的な上官から徵収命令を受けた水島上等兵…………ではなく、呼び出しを受けたペーぺー新米女豹の荒井美千子は、手強い女豹達（例えば真美子、^{リンク}例えば伏見さん、^{ペラ}例えば先輩たち）に気付かれずに來いと言う、年明け初っ端から高

等すぎるミニショトンを課せられた。

なんとか真美子に悟られずに安西先生の家にお邪魔すれば、そこにはニコニコークの香りをブンブンさせながらソファーにふんぞり返っている雄臣がいた。コーヒーを飲みながら堂々と足を組み、優雅に写真を眺めているその姿を見ただけで、自分もマンハッタンが一望できるペントハウスにいるような感覚に陥るから不思議だ。

『よう、ミチ。A Happy New Year! 僕からの愛の籠つたクリスマス・カードは届いたかい?』

『……ハハハ』

引き攣り笑いをしつつ、「わざわざニコークから送っていた
だき恩悦至極に存じます」と懲懲無礼に返せば、雄臣はニヤリと笑
いながら「未来のワイフには当然だろ」とけしゃあしゃあとた
まい、手にしていた写真をテーブルの上にスライドさせた。

(……つたく。なうにが「愛の籠つた」、だ…)

安西先生経由で受け取ったクリスマスカードはポップアップ形式
のカードだった。

……ただし、カードを開いた途端にミニスカサンタの衣装が肌蹴た
片乳^{かたチチ}ポロリの巨乳女が、ベッドで寝ていてる男を襲つてているシーンが
飛び出でくるという衝撃的なものだが。

内容に問題アリとか、そんな破廉恥な代物をどの面下げて入手し
たのかとか、問い合わせたいことは色々あるが 中でも尤も重要な
問題は、寝込みを襲つてている片乳ポロリのグラマーサンタと襲われ
ている男の顔が、女豹顔の荒井美千子とまんざらでもない顔をして
いる東雄臣の写真（それもつい最近のもの）にすり替わっていたと
いう、憎い小細工が施されていた点にある。

(大体私の女豹スマイル、一体いつどこで激写されたのよつ？！)

『すまない。それは秘密事項だ』

『ワーオッ！ 新年早々思考が簡抜けつー！』

『今年のクリスマスにはあの恰好で来てくれ。ついでにガーテーベルトと網タイツも忘れるなよ。 しまつた！ 肝心な煙突がないな……仕方がない、マンションの玄関からで構わないから』

『なななにが「構わないから」ですかっ！ ていうか中学生の分際で肌蹴たサンタの衣装じや飽き足らず、片乳ポロリの破廉恥な格好でマンションまで来いおっしゃるんですかっ？！ 公然わいせつ罪で捕まるわつ！』

『な～に、そこは「おいはざ」にでもあつたと言えばいいじゃないか。相変わらずオバカさんだな、ミチは』

『その言葉、そつくりそのまま星もつけて返してやるわ！ ……つて、あ、あれ？』

とんでもないことを堂々とほざいた雄臣に、ビシッと指をさしながら少々論点がズれている怒りを燃やした荒井美千子。が、ある重大な言葉が織り込まれていてことに気付き、怒りの熱はすぐに沈下した。

『あ、あの……マンションって、雄兄さん……もしかして ……！』

自分の頭に思い浮かんだ考えに驚きを隠せず、危険は承知だったが徐々に口が緩むのも抑えられない。

(ついに……ついにこの時が来たぜっ、ヒヤッホー！)

脳内でリン・ゴーンと祝福の鐘が鳴り響くのを止められない荒井美千子 なんせ雄臣が卒業するだけでバンザイものなのに、安西先生宅という私のテリトリーからいなくなると、たった今本人自ら宣言したのだから！

勝利の笑顔を我慢するような私の変顔に雄臣は大袈裟なため息をついた。持っていたマグカップを静かにテーブルに置き、おもむろに前屈みの体制をしながら、腿で腕を支えて指を組んだ。こちらを

睨むように見上げている雄臣の目には挑戦的な光が宿っている。

『……相変わらず心がダダモレでわかり易いヤツだな。まあ、いい。そんな変顔で笑つていられるのも今のうちだ。こっちは色々と奥の手を準備してるからな。開けてビックリ玉手箱つてやつだ』

『え？ 玉手箱？ …… ってなんですか？』

『いや、パンドーラの箱というべきか』

謎の言葉を漏らす雄臣に首を傾げたが、当の本人はもうその話題は終わりと言つよつに「以前住んでいたマンションに戻ることになつた」と話題を元に戻した。

『本当に？ 本当に戻るんですよね？』

『念を押すな。とりあえず卒業までマツ叔叔さんのお世話をになって、卒業したら〇〇のマンションに戻る』

『……つていづことは、健人小父さんが一コ一コ一コから帰つてくれるんですね？！』

私の嬉々とした叫び声に雄臣は頭を横に振り、そうじやないと言いながら頭の後ろで腕を組んで再びソファに凭れた。

『父さんはまだ帰れそうもないよ。あと一年は無理だつてさ。仕事が長引くようなら、俺もアメリカに行くかもしね』

『アアアアアメリカあつ？！』

『クク…… そんなハートが豆鉄砲くらつたような顔をするなよ。あくまでも「かもしれない」の話だよ』

『かも、しれない？』

『そう。父さんの出張が長くなるような、そういう可能性もありつてなだけ。でも暫くはマンションで一人暮らしをしながら高校へ通うことになった』

『……一人暮らし……』

『ああ。そもそも父さんのアメリカ出張の話が出たとき、俺はそのつもりだったんだ。マリ叔母さんの家に来る気はなかつたんだよ。ある程度のことは一人できたから問題なかつたし、それこそ父さんは仕事三昧で家のことなんて俺にまかせっきりだつたからな。ほどんど一人暮らしをしていたようなもんだ。こつちに来たのは、たまたまいろいろな事情が偶然に重なつただけだよ』

『じ、事情？』

『そうだ。俺がまだ義務教育の身だつたり、叔母さん達がタイミングよく家を買ってそこに空き部屋があつたり……その他色々と、な』

『そう、だつたんですか……』

リビングの大きな窓から外を眺める雄臣を見ながら、あらためて彼の言葉を噛みしめると、パンパンに膨らんだ風船が勢いよく空気が抜けていくよつこ、心が急激に萎んでいくを感じた。

(本当に帰っちゃうのか……)

聞いた瞬間はとてつもなく嬉しかった。
嬉しい筈だつた。

なのに 心には複雑な感情が渦巻き、焦燥感が募る。

それは決して雄臣がいなくなつて悲しいだとか、彼に対する愛情などから湧き上がる感情ではない。正直学校という空間を無事平和に過ごしていくには、彼がいない方が大変都合が良かつたからだ。

(……なら、この身体にぽつかりと穴が空いたような、落ち着かな
いような気持ちは?)

それは多分　お互いを認め合つた好敵手^{ライバル}に先を越されて置いて行かれるような、大袈裟に言えば兄弟、いや双子の片割れと離れるような感覚に似ているのだ。

雄臣は生活を引っ搔き回す厄介な鬼神・修羅である反面、良くも悪くも「荒井美千子」という人物を認め、真正面から向き合つてくれる唯一の人物であることは、鈍い私でも心のどこかでちゃんと理解していた。一度は最悪な形で絶交になつた一人だけ、幸か不幸か再び会う機会に恵まれてみれば、時間が経つた分それは意外な方向へと動きだし、新たな関係　お互い本当の顔を、心の奥底にある感情を見せられる相手　が築けたのも確かだつた。

それに雄臣は一般的に接すれば非常に頼りがいのある優れた人物であつた。勉強面しかり、対人面しかり、生活面しかり。一緒にいればその完璧な人となりに感化され、自然と礼儀正しい言葉と態度を学ぶだけでなく、まるで自分もそのような人物になつたような気に入せられるから不思議だ。おかげで最初はなんとなく恰好だけ入つていく人も、最終的にはそんな自分が恥ずかしくなり自然と勉強に力が入つてしまつ。実際勉強面に関してかなり助けてもらつたのは事実で、英検3級に合格したのも彼による力が大きかつたのだから。

そして　、

『マンションで一人暮らしをしながら高校へ通うことになった』

おそらくコレが最大の理由だろう。

雄臣の一人暮らし宣言は、私の中で燻つてゐる「ある願望」を刺激するのだ。

この街を出て新天地へ向かいたいという、私の強い願望を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0310j/>

振り向けば、君がいた。

2011年11月17日20時46分発行